眠狂四郎虚無日誌

柴田錬三郎

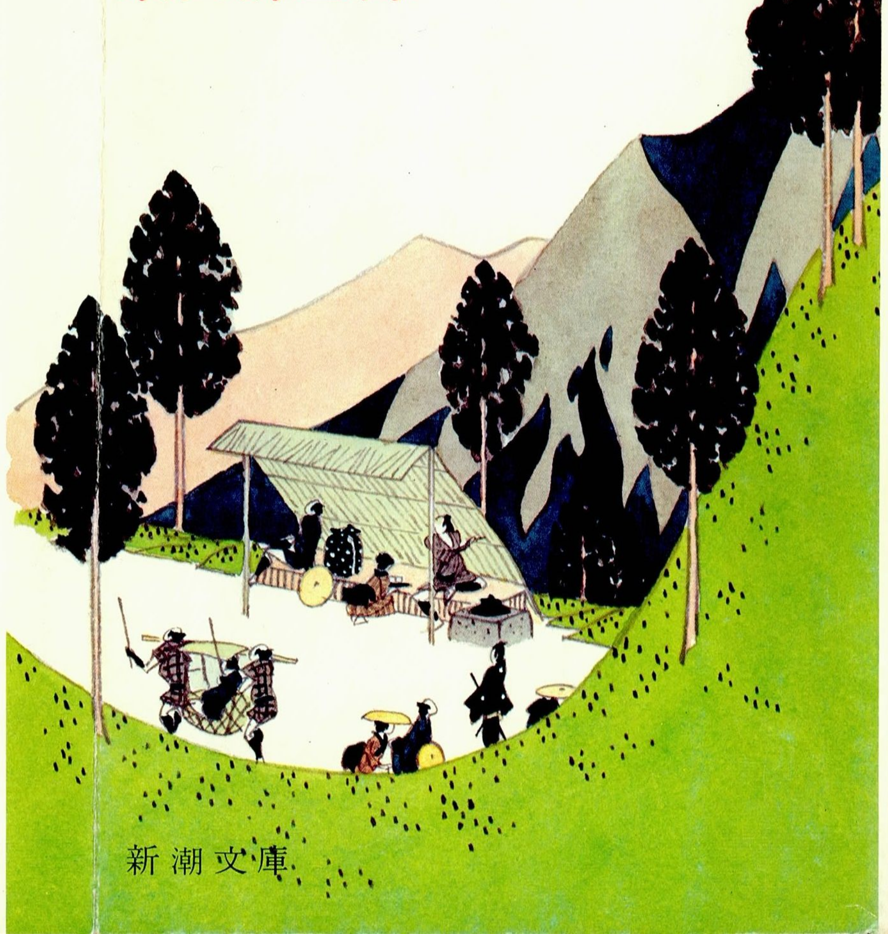


新潮文庫

カバー　東　啓三郎

眠狂四郎虚無日誌

柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎虚無日誌

柴田錬三郎

新潮文庫
〔草〕
一五〇
=22=
V
560

江戸城大奥に将軍家世継・徳川家慶の贋者が出現し、乱行を重ねていた。武部仙十郎の密命を受けて贋家慶の正体を探る眠狂四郎は、目付・佐野勘十郎の差し向ける刺客と剣を交じえつつ、江戸から中仙道を抜け京に向う——。近藤重蔵の蝦夷地探検に端を発した、奇怪な世継すり替えの陰謀をめぐって、円月殺法が冴える。意表をつく展開とエロティシズムに満ちた〝狂四郎シリーズ〟第五作。

ISBN4-10-115022-2　C0193　¥560E　定価560円

〰〰新潮文庫〰〰
柴田錬三郎の作品

剣は知っていた(上)
〃　(下)
江戸群盗伝
続江戸群盗伝
美男城
眠狂四郎無頼控(一)
〜
〃　(六)
眠狂四郎独歩行(上)
〃　(下)
眠狂四郎殺法帖(上)
〃　(下)
孤剣は折れず
赤い影法師
運命峠(前)
〃　(後)
剣鬼
眠狂四郎孤剣五十三次
眠狂四郎虚無日誌
眠狂四郎無情控
眠狂四郎異端状

カバー印刷　錦明印刷

新潮文庫

眠狂四郎虚無日誌

柴田錬三郎著

新潮社

新潮文庫

眠狂四郎虚無日誌

柴田錬三郎著

新潮社版

2555

眠狂四郎虚無日誌

少年必死

一

空いちめんを厚く掩（おお）うた雲の上に、遠雷があった。この雲は、もう二日間も江戸の空を動かず、時折り、思い出したように、雨をおとしているのであった。

蒸した湿気が肌にまとわりつく、いやな宵であった。

家路をいそぐあわただしい人影の中を、ゆっくりとした足どりで、駒形（こまがた）堂の前を過ぎた黒の着流し姿が、諏訪（すわ）町の角の蕎麦（そば）屋の前に来た。

「二八蕎麦」の行燈（あんどん）に灯（ひ）が入って居り、そのあかりの中に入った顔は、相変らず、冷たく暗いものだった。

土竈（どがま）の前にしゃがんでいたあるじの松次郎が、紺暖簾（こんのれん）をはねて、入って来たその姿をみとめて、

「旦那！」

と、顔面を、ほころばせた。

「きっと、寄って頂けるものと思って居りましたが、……ちょうど、二年お待ちしました」

松次郎というこの男は、以前は旅の薬売りであった。その頃、当所（あてど）なく道をひろう眠狂四郎に、自分から願って連れになり、狂四郎に襲いかかる敵に、まきぞえをくって、あやうく斬られそうになったことも、一度や二度ではなかった。

薬売りをきりあげて、ここに蕎麦屋をひらいたのが二年前で、毎日、狂四郎の現われるのを待っていた、といっても誇張ではなかった。松次郎は、虚無の翳の深い、この異相の持主に、惚れていたのである。

胸をはずませて、なつかしさを示す松次郎に対して、狂四郎は、無表情のまま、なにも応えず、床几に腰を下ろした。その冷たい態度が、松次郎には、また、なつかしいものであった。

鯛のあらいに山葵を利かして、摘みを二品ばかり添えて、はこんで来た松次郎は、

「てまえの手打ちが、お気に召しますかどうか――」

と、云った。

狂四郎は、ようやく、口をひらいた。

「外処者が、江戸のまん中で、蕎麦屋をひらけば、いろいろケチをつけられるであろう」

「それアもう、江戸趣味というのは、面倒なものでございますね。鰻屋の古漬、寿司屋の番茶、蕎麦屋のしたじ、ぐらいは存じて居りましたが、いざ店をひらいてみますと、粋な江戸っ子衆の口は、まことにうるさいものでございます。……一本つけてくれ、といわれて、燗をしようといたしますと、べらぼうめ、蕎麦屋で、一本つけろ、というのは、まず、もりすすってからだ、と呶鳴られました。その一本が空になった頃を見はからって、天ぷらを出すというしきたりも、こちらは一向に存じませんでした。……利休頭巾をかぶった御仁などが、おいでになると、どんなことを云われるか、ひやひやしなければなりませぬ。こういう御仁は、ちゃんと割箸をご持参で、拝見いたしますと、ご自分の紋所がうってある凝り様でございます」

狂四郎は、薄ら笑って、

「江戸っ子の通など、あてにはならぬ、通ぶった奴は、ざるしか食わぬが、汁の出し加減が大切

なら、まことの味は、かけにあろう。どうでもよいことに、目の色を変えるのが、どうやら、通という奴らしい」

その時——。

いままで、降り惜しんで、ためていたらしい黒雲が、一挙に凄まじい勢いで、落して来た。

稲妻が走り、雷が頭上でとどろいた。

松次郎は、行燈の灯が風で吹き消されたので、店さきへ出て来て、そこに立った小さな人影をみとめた。

前髪立ちの、熨斗目に袴をつけた、一瞥にして、旗本も大身の子弟と知れる少年であった。

驟雨の中を奔って来て、ずぶ濡れて雨やどりしたのであった。

「これアひどい。なかへお入りなさいまし。まだしばらくは、止みますまいから、そのあいだ、竈の前で、かわかしてお行きなさいまし」

松次郎にすすめられて、少年は、ちょっとためらっていたが、店へ入って来た。

まだ十歳あまりの、眉目の明瞭な、いかにも氏素姓の正しげな容子であった。

狂四郎をみとめると、作法を心得た一揖をしてから、土竈の前へ、寄った。

松次郎が、手拭いで拭いてやろうとすると、少年は、かぶりを振って、

「かもうてくれなくてもよい」

と、ことわった。

その顔には、少年のものとは思われぬ暗い表情があったので、態度を一層大人びたものにみせていた。

「熱い麦湯でもさしあげましょうかな」

松次郎が、云うと、少年は、これも、きっぱりとことわってから、
「これから麻布（あざぶ）の本村町へ参りたい。方角を教えてもらいたい」
と、云った。

二

松次郎は、けげんな面持になって、少年を見なおした。
旗本大身の、まだ元服前の子弟が、たった一人で、夜道を遠くまで歩くには、よくよくの事情がある、と解釈してよいことだった。
「ここから、麻布まで、お一人でお行きなさる、と申されますので――？」
「どう参ればよい？」
「ご無理でございますよ」
「方角を教えてもらえば、行く」
「駕籠（かご）をやとってさしあげましょう」
「金を持たぬ。歩いて行く」
「いえ、おたてかえいたしましょう」
「町人に、金をたてかえてもろうては、恥になる」
「貴方（あなた）様が、元服なされてから、お支払い下さればよろしゅうございます。雨やどりなされたのも、なにかのご縁でございますよ。……夜道をお歩きなされて、もし万一、途中で、難儀な目にお遭いなされると、ご両親様に嘆きをおかけなさいます」
「………」

少年は、唇を嚙みしめて、俯向いた。

狂四郎は、少年の小さな心にはあまりに重い苦しみに堪えているらしい様子を、眺め乍ら、不幸で孤独であったおのれの少年時代を、思い出していた。

「お屋敷が麻布にございますので――?」

松次郎の問いに、少年は、俯向いたまま、かぶりを振り、

「祖父の隠居所が、ある」

と、こたえた。

「ご両親様は、貴方様が、そちらへ行こうとなされているのを、ご存じではないのでございましょう?」

「…………」

「お屋敷は、どちらでございます?」

「本所北割下水」

「どうでございましょうな。今宵のところは、いったん、お家へおもどりなされては……。てまえが、お送り申し上げましょう」

少年は、必死に怺えていたが、ついに、泪を頰につたわせた。

「お祖父様に、おたのみしなければならぬのじゃ。……家を滅ぼしとうは、ない!」

思わず、口から出た自分の悲痛な言葉に、少年は、はっと、われにかえって、狼狽の色を示した。

松次郎は、きかぬふりをして、小止みになった雨の中へ、駕籠をさがしに、出て行った。

あとには、沈黙が来た。

少年は、狂四郎の横顔へ、視線をあてて、しばらく、ためらっていたが、

「ご浪人――」

と、呼びかけた。

「……………」

狂四郎が、視かえすと、少年は、頭を下げ、

「いまのわたくしの言葉を、きかなかったことにして下され」

「……………」

「おねがい申す」

「物事をたのむなら、姓名を名のるのが、礼儀だろう」

狂四郎は、冷やかに、云った。

「は、はい――」

少年は、小さな肩を、喘がせた。

「名のれ！」

狂四郎は、鋭く、促した。

「旗本大番組頭……長岡采女正重武――一子、守一……と申す」

狂四郎は、少年に名のらせておいて、視線をおもてへ向けた。

「雨があがったな」

少年は、必死に、狂四郎を瞶めている。

狂四郎が、視線を少年にもどして、何か云おうとしかけた時、職人ていの男たちが三人ばかり、がやがやしゃべりたて乍ら、どやどやと入って来たので、口をつぐむことになった。

程なく、松次郎が、駕籠を連れて、もどって来た。
「さ——、お乗りなさいまし」
松次郎にすすめられると、少年は、
「ご厚意のほど、忘れ申さぬ」
と、礼をのべ、狂四郎にも鄭重に頭を下げておいて、店を出て行った。
見送った職人たちは、
「えれえものだのう。おめえの餓鬼とは、臍の穴まで出来がちがってらあ。ご厚意のほど、忘れ申さぬ、か。おめえの餓鬼と来たら、饅頭やろう、とさし出したら、黙って、ひったくりやがる」
「てめえが、おれから一両借りて、三年越し返さねえのを伜は知っていて、利息のつもりで、取っているんだ」
「へっ、置きやがれ。あの一両は、おめえが、伊勢屋の嬶と——あわわのわ、の口止め料に、むりやり押しつけて来やがった金だぞ」
「しっ！　しっ！」
「しっしっ、しったか見たかで、うろたえて、頭かくして尻かくさずだあ。あの時、てめえは、大層きたねえふんどしをしていやがったのう」
「へへ、そねめそねめ。知れてみたさ、隠してみたさ、忍んだ当座の心もち、って——こんな気分を、一度知らせてやりてえや」
狂四郎が、すっと腰を上げた。とたんに、職人たちは、怯えたように、口をつぐんだ。
松次郎が、あわてて、

「もう、お行きなさいますので——？」

なごり惜しそうに、見やった。

「たのまれもせぬのに、行先がひとつできた」

「へえ——？」

「旗本が一軒、どういう滅びかたをするか、それを見とどけて来る」

三

五千石以上——と、驟雨とともに千切れた雲のあいだから照らす月光で、その屋敷の構えを、狂四郎は、看(み)てとった。

長屋門が、はるか彼方(かなた)までつづいて居り、張り出したいくつもの窓には、いずれも灯があった。

——格式通りに家来の頭数をそろえているところをみると、知行所に豊かな産物があるということだろう。

あの少年が、これほどの大身の子息であったとは、思わなかったことである。

尤(もっと)も、これほどの大身だから、かえって、少年は、こっそり、屋敷から抜け出すことができた、とも考えられる。数千石ともなれば、表と奥は厳然と区別され、主人が出る玄関と、夫人や子供の出る玄関が別になっているし、表の家来たちには、奥のことは一切判らぬくらしぶりなのであった。

いくばくかの後、狂四郎は、邸内の深い木立の中に立っていた。

彼方にくろぐろと浮きあがった建物は、大名屋敷のそれに準じているため、どれが表で、どこから奥になるか、狂四郎の目には、はっきりしていた。

木立の中から、歩み出ようとして、ふっと、ひとつの予感が起った。

あの建物の中へ踏み込むと、なにか、ひどく重い荷を背負わされることになる。そんな不吉な予感であった。

この男の感覚は、未来に待つ不幸な事柄に対しては、きわめて正確な働きをするようにつくられていた。これまで、それは、はずれたことがなかった。

にも拘らず、予感が起った時、一度も踵をまわしたことがないのも、この男らしい生きかたなのであった。

奥の建物の廊下の闇の中に立った狂四郎は、はたして、おのれの予感たがわず、屋内になにかがあるのを、感じた。

無人の家のごとく、森としずまりかえっているのであった。まだ、物音の絶える時刻ではなかった。むしろ、あちらこちらに、灯があって、人声や物音がひびいているべき時刻であった。

この静寂は、異常であった。片はずしの女中たちは、多勢いるのだ、それが、息をひそめているのだ。

跫音を消して、歩き乍ら、狂四郎は、各部屋で、息をひそめている気配を察知した。

突然――。

静寂を破る悲鳴が、ずっと奥から、つらぬいて来た。

しかし、どの部屋からも、女中が廊下へとび出しては来なかった。

――奥の部屋で、何事が起っているか、女中たちは、先刻承知ということだな。つまり、毎晩それは、起っている。

この屋敷のあるじの部屋で、くりひろげられている光景は、流石の狂四郎が、いまだ曾て接したことのない、意外な、陰惨きわまるものであった。
部屋いっぱいに、剝ぎとられた女の衣裳、帯、下着が散乱していた。
はだかにされているのが、奥方であることは、髪かたちで明白であった。
剝ぎとっている人物は、その面貌を、あの少年にそのまま生写させていた。
狂暴な発作を起している狂人ではないか、と疑われる振舞いであった。
裸にひき剝かれ乍ら、すこしも抵抗しようとせぬおのが妻から、みじんの容赦もなく、腰に巻いた二布も、ひきむしった旗本は、床の間に飾ってある甲冑を、音たてて、摑みとると、
「さあ、志津！　着けい！　長岡家の始祖釆女正重正様が、幾多の戦場を駆せ巡って、おのが血汐と敵の血汐で染められた家宝だぞ。六千石をものされた鎧と冑だぞ。……どれほど重いか、着けろ！」
と、喚きたてた。
「お、おゆるしを――」
一糸まとわぬ素裸の奥方は、畳へひれ伏した。
「許さぬ！」
旗本は、その頭髪をひっ摑むと、「立てい！」と、ひきずりあげておいて、まず、萌葱威の鎧の中へ、白いふくよかな胸を押し込んでおいて、青の鍬形を双手摑みにして、その頭へたたきつけるように、かぶせた。
「ははは……、どうだ！　重いか！　重かろう。……長岡家十三代の重みだぞ。ははは――ずしりとこたえるこの重みが、長岡家の武門の誉れを示して居るのだ。充分に、あじわえ！　この重

みゆえに、わしは、おのれの妻を犯されても、じっとあまんじなければならぬのだ。……志津！　わかったか！　どれほど、重いか、わかったか！」

怒号しざま、旗本は、萌葱威を蹴った。

奥方は、悲鳴をあげて、のけぞった。

旗本は、倒れた妻に、のしかかるようにして、双の股を摑んで、ひき裂くように、下肢を一杯に、押しひろげさせた。

草摺の蔭に、あらわになった恥部を、かっと睨みつけた旗本は、

「ここか！　ここが、上様の寵を蒙ったか！……さあ、申せ！　上様は、どのようにして、ここを、愛撫されたぞ？　指を使われたか？　それとも、口でか？……申せ！　申さぬか！」

叫びざま、顔を押しつけて、むさぼりついた。

四

奥方は、もはや、悲鳴も呻きもたてなかった。

むさぼられるままに、死んだように微動もしなかったが、やがて、良人が股間から顔を擡げた時、かぼそい声音で、

「ご成敗を――」

と、云った。

「殺してくれ、と申すのか！　よ、よし！」

旗本は、よろめき立つと、長押の槍を摑みとった。

奥方は、兜をはずして、起き上ると、良人を仰いだ。その双眸には、微かではあるが、良人

——というよりも、男そのものに対するさげすみの色が湛えられていた。

旗本は、そのさげすみの色をみとめた。もし、妻の顔に、悲運にあまんじた哀しい表情だけがあったならば、穂先を擬しただけで、実際に突きはしなかったに相違ない。

そのさげすみの色が、旗本を、逆上させた。

殺すことは許されぬ妻であった。もし殺せば、おのれは切腹し、長岡家は改易になることは、明白であった。

しかし、もはや、この生地獄の苦悩には、旗本は、堪えられなかった。

長岡釆女正重武は、殺意を総身にみなぎりわたらせると、槍をひとしごきした。

「よいか、志津！」

「…………」

覚悟をさだめた奥方は、眉宇も動かさなかった。萌葱威をはめられた胸をまっすぐに立てて、待った。

「えいっ！」

穂先を突き出すのと、狂四郎がとび込みざま、その柄を中ばから両断するのが、同時であった。

狂四郎自身、予想もせぬことが、次の瞬間に起った。

はねとんだ穂先の方が、弧を描いたとみるや、釆女正の咽喉めがけて、生きもののように翔けて、ぐさと突き刺さったのである。

——しまった！

狂四郎は、仰のけに倒れた釆女正が、一瞬裡に、双眼をひき剝いたなり、事切れたのを、みとめた。

――やむを得ぬ。

狂四郎は、足もとに拡がっている衣裳をひろって、奥方へ投げてやっておいて、

「差し出がましいことをした。ゆるされい」

詫(わ)びておいて、廊下へ出ようとした。

とたん――。

狂四郎自身、ぎょっとなった。

そこに、少年が、立っていたのである。

目も唇も凍(い)てついたようにこわばらせて、眸子(ひとみ)のみを異様に光らせ乍ら、少年は、狂四郎を、睨みつけていた。

祖父の家へ行かずに、ひきかえして来たに相違ない。

狂四郎は、口にすべき言葉を、知らなかった。

この男の胸が、はじめて、名状しがたい負い目で疼(うず)いたのである。

重苦しい沈黙が、しばし、そこを占めた。

さきに、口をひらいたのは、少年の方であった。

「姓名を――」

「眠狂四郎、とおぼえておかれい。……父上の仇(あだ)を討ちたければ、どれほどの助太刀をたのまれてもよい」

云いおいて、歩き出そうとすると、少年が、

「待たれい！」

と、とどめた。

振りかえった狂四郎は、少年の眸子から放たれるかわいた光を、まぶしいものに受けとめた。
「母上を、つれて行って下され」
少年は、云った。
「………」
「母上が、ここに残されれば、死なねばなりませぬ。母上を、死なせとうはない。つれて行って下され」

襲撃

一

「さっても、時はいつなんめり、天延四年春なかば、渡辺綱（わたなべのつな）は上意にて、さしかかったる一条堀川戻橋――」
立川談亭は、高座で、張り扇で読み台を叩いておいて、夏羽織を脱ぎすて、
「月もおぼろの七つ刻（どき）、アレ鐘が鳴る、犬が啼（な）く、いま鳴る鐘は、初夜の鐘――。渡辺綱は、足停めて、小手をかざして、はてこは如何（いか）に、そこにたたずむ女人の影は、人目を忍ぶ紅梅打着（うちぎ）、伴もつれずに、しょんぼりと、待っていたかと、手と手をからめ――アレ主（ぬし）さま、雨が、と見交わす顔を蛇目（じゃのめ）にかくし、濡れぬようにと濡れに行く。いい風情（ふぜい）だねえ。左褄（ひだりつま）を、こう、取って、明石（あかし）からほのぼのと透く緋縮緬（ひぢりめん）――湯もじの蔭から白い脛（はぎ）が、ちらりとのぞいてのう」
「師匠、思い出させやがるねえ。三年前に、あの娘（こ）と首尾した大川端――」

客の一人が、舌なめずりすると、隣りの客が、

「こいつ、よだればかりか、洟水まで、たらしやがって――きたねえや」

「昨日から風邪で、鬼の霍乱だあ」

「鬼か。ちげえねえ。おめえら夫婦を、世間で何と云っているか、知っているか。鬼千振に醜女に辛子。ついでに、おれの借金をまけたら、鬼の目に泪だぜ」

「えっへん、おっほん――渡辺綱におかせられましては、女人の身にて、夜道を一人ひろうのは、さてこそ、宇治橋に棲む鬼女ならめ、おのれ憎っくき奴、ひっ捕えて、鬼が焼きになしくれんと、件の女房をかき抱き、都大路をまっしぐら――」

談亭は、ピシリピシリと読み台を叩いて、

「……はやさしかかる五条坂、とたんに、美女は夜叉となり、にょっきり生やした角二本。襟くび摑んで、ぐいと引きや、烏帽子の紐と女房のふんどし、ぐいぐい、ぐいと食い込むばかり――」

「うめえぞ。しかし、師匠、どうして女子ばかりが、化けやがるんだい?」

「それ、依って来る所以のものは、嫉妬であるな。嫉妬の烈しいことを、妬悍と申し、妬悍の女房を、臙脂虎という。紅をつけた虎という意味じゃ。本邦では、蛇となり鬼となる。これが女子の特権でな、焼餅とかき餅は焼くがよい、こっちは浮気で出来心、もてるが道理、金があって色男――これを鬼に金棒と申してな。綱は強者、宙吊りなんぞ河童の屁、源頼光拝領の鬚切丸の宝剣をば、電光石火、燕返しの手練の迅業、目にも止らず一閃すれば、見事に斬った鬼女の腕――」

この折、楽屋口から、談亭に、合図があった。

「……斬り取ったる鬼の腕をば、持ちかえって、焼いて食ったか、糠に漬けたか――そのくだりは、また明晩のお愉しみ――」

談亭は、きりあげて、楽屋へ降りて来た。

客は、眠狂四郎であった。

「今朝、茶柱が立ったので、たぶん今日あたりは、と――」

談亭が笑い乍ら、さし向って坐ると、狂四郎は、

「たのみがある」

「待ってました。千里の馬、伯楽を待つこと久し。なんでげす？」

「女を一人、預かってもらいたい」

「女？　さては、眠狂四郎、またぞろ市に禍を買い、美女をひろうて大弱り――というところですかね」

「そんなところだ」

「合点承知！　美人と骨董は、いったん預かったからにゃ、金輪際、返さねえのが、立川談亭の建て前でござる」

談亭は、しかし、裏口から出てみて、そこに佇むお高祖頭巾の女を一瞥するや、

「おっ！　こりゃ――芸妓でもないのに、婁をとるとは、はて面妖な……先生、これは、旗本の奥方じゃありませんか？」

と、ささやいた。

「六千石布衣の妻女だ。亭主は、おれが、昨夜、殺した」

談亭は、首をすくめた。

「天の将(まさ)に之(これ)を与えんとするや、必ずまず之を苦しむ――美保代様の時がそうだったが、こんども、どうやら拙の観るところ、ただではすみそうもありませんぜ」

狂四郎は、女に寄ると、

「この講釈師が、そなたを預かってくれる」

と、告げた。

旗本大番組頭長岡釆女正重武の妻志津は、黙って、ふかぶかと、談亭に、頭を下げた。

「たのむ」

狂四郎は、はなれて行こうとした。

「先生――、冗談じゃありませんよ。ご自身で、おつれになって下さらなくちゃ――」

談亭が、あわてて、たのんだ。

「情婦(いろ)にしたわけではない」

返辞は、にべもないものだった。

その後姿を見送る志津の眸子には、冷たくかわいた光があった。

二

半刻(はんとき)(一時間)後――。

狂四郎は、内桜田の老中・水野越前守忠邦邸表長屋の側用人(そばようにん)宅の書院で、腕を組んでいた。

この書院に、こちらが進んで訪れて、坐ったことは、殆どなかった。常に、武部老人から、呼ばれて、やって来ていた。そして、その依頼は、例外なく、この眠狂四郎を、死地におもむかせる仕事であった。

とうてい生きて還れぬ、と思われる仕事を、小猫か何かを殺して来てもらいたい、といったぬけぬけした口調で、老人はたのむのであった。

老人はすでに古稀を越えているので、娑婆をふさいでいる歳月も、さほど長くはないと思われる。しかし、もし老人が逝ったならば、こちらの寂寥感は、名状しがたいものがあろう。

遠くから、咳の音がひびいて来た。

入って来た武部仙十郎は、

「珍しいの」

と、云った。呼びもせぬのに、やって来たことを云ったのである。

「西の丸殿は、今年何歳になられたか、うかがいたい」

「本年四十歳になられるが……」

武部仙十郎は、唐突な狂四郎の質問に怪訝の面持でこたえた。

十一代将軍家斉は、六十歳を越え乍らも、なお、西の丸に住む世子家慶に、征夷大将軍の職を、ゆずろうとせずにいるのであった。

「もうそろそろ、内大臣（家慶）に、公方の座をゆずらねばならぬの」

家斉が、そう口にしてから、すでに数年経っていた。

晩年を迎えるにつれて、その驕奢ぶりが、惰性になっていたので、家斉は、家慶に本丸を明け渡すことに、ひそかなおそれをおぼえていたのである。

すでに、その驕奢ぶりは、庶民の間の取沙汰になっていた。たとえば、江戸城内の賄をみても、雉子橋門内の御搗家という御用屋敷では、菓子を製るために、一日に白砂糖千斤も使っていた。御膳番に新任した旗本が、これを知って、あきれはて、「砂糖を一日千斤費やせば、一年に積

って三十数万斤に相成り、あまりに、これは仰山にすぎる。いったい、どうして、千斤も費やさねばならぬのか？」と、御膳所の役人たちに、立合せて、見分することにした。

立合ってみると――。

半切桶（はんぎりおけ）に、砂糖三百斤を入れると、水をたくさんそそいで、白木の棒で、かきまわし、

「砂がまじりすぎる」

と云って、ひっくりかえし、さらに新しい三百斤を入れて、かきまわすというありさまであった。これでは、千斤が二千斤あっても、足りない道理であった。

御膳番は、あいた口がふさがらなかった、という。

こうした驕奢に馴れてしまった身が、一朝一夕に、質素倹約ができるものではなく、家斉は、世子に、その職をゆずるのを、一日のばしにしていたのである。

「西の丸様のおん齢を、きいて、どうだと申すのかな？」

老人は、じっと、狂四郎を見まもった。

狂四郎は、薄ら笑って、

「四十くらがり、四十腕――不惑を迎えて、その行状が突如として狂ったものになるとは、どういうことか、ご老人には、お判りか？」

「…………」

老人は、黙って、痛風の膝（ひざ）を、さすった。

「西の丸殿が、大番組頭長岡釆女正の妻女を犯した、という事実を、ご老人は、ご存じか？　いや、知らぬととぼけるのは、もうおそい」

「…………」

老人は、むすっと、口をつぐんだまま、狂四郎を、見かえしている。

「長岡釆女正は、どうやら小心者とみえて、そのために日夜懊悩して、犯された妻を、責めさいなんだ果てに、素裸にひき剝いて、家重代の大鎧をつけさせ、槍で突き殺そうとした……」

「お主が、その場に、入った、というのかの？」

「わたしが、槍を両断すると、穂先があやまって、釆女正の咽喉を刺した」

「ほう！」

老人は、眉宇をひそめた。

「他人のことに、かかずらうことのきらいなお主が、どうして、また――？」

「父母の陰惨な状態を救おうとして、祖父の隠居所へ、一人で趨ろうとした釆女正の息子に、行き会うたと思われい。まだ元服前の少年の必死な振舞いが、つい、この足を、長岡家へはこばせた」

「で――釆女正が、相果ててから、お主、どうしたな？」

「その妻女をつれて、屋敷を出た」

「なに?!」

「少年が、戻って来て、父の斃れるさまを目撃して、けなげにも、母の生命を救うほぞをかためて、わたしに、その身柄を預けたのだ」

「ふむ！」

老人は、膝を撫でていた双の掌を、皺の深い頬へあてて、視線を畳に落した。この狡智な側用人が、困惑のていを、狂四郎に示したのは、はじめてのことだった。

「わたしは、西の丸殿は、親爺殿とちがって、その人となりは信頼の置ける御仁だ、と思ってい

たが……」
「うむ、たしかにのう――」
家慶が、父の驕奢放縦のくらしを、心よからず思っていることは、水野忠邦が西の丸老中であった頃から、はっきりと口にしているのを、武部仙十郎も主人からきかされていた。
「不惑を迎えて、逆に、血迷ったとは、どういうことか、ご老人に判断して頂こう」
「判らぬの、わしにも――」
老人は、こたえた。とぼけているのではなく、たしかに判断に苦しんでいることを、その態度にかくしていなかった。
「判らぬでは、すまされぬことだ」
「左様、判らぬでは、すまされぬ」
「親爺殿が、いつまで経っても、本丸をあけ渡してくれぬので、不服と焦躁が昂じて、狂躁を生んだか――」
「まさか、の。……しかし、人が変られたことは、みとめる。今年春、京へ上られた。上様が左大臣に、ご自身が内大臣になられたお礼の参内が、のびのびになって居って、やっと今年に入って、上洛されたのじゃが――、その時をさかいにして、人がお変りなされた」
「…………」
「この半年のあいだに、とうてい考えられぬこと、信じ難いことが、その行状に現われて居る」
「どのようなことが――？」
「わしの口からは、申せぬの」
「理由がなくして、血迷う筈はないと思うが……」

「その理由が――さて、さっぱり、判らぬのじゃな」

老人は、嘆息した。

三

沈黙が、あってから、老人は、再び口をひらくと、

「長岡采女正の変死は、世間には、知れまい。伜（せがれ）が、無事に、遺督を継ぐであろう」

と、云った。

「あの少年が、すでにお目見（めみえ）を済ませているからであろうか？」

「近頃は、元服前に、お目見はせぬならいになって居る」

嗣子たるものは、将軍家に拝謁して、奉公認知をしてもらっていないと、父が急死した場合、家は改易の憂目に遭うのであった。

元和（げんな）の頃――。

肥前大村の領主大村純頼（すみより）が、二十八歳で逝去（せいきょ）した際、その子松千代は、わずか二歳であった。もとより、お目見は済んではいなかった。当然、改易処分をまぬがれぬ。

家臣一同は、協議の末、江戸へおもむいて、幕閣の要職にある人々に、嘆願することにし、家老大村彦右衛門と富永四郎左衛門が、かわるがわる、松千代を背負うて、江戸へ出た。

両名は、老中邸を巡って、嘆願したが、先例がないという理由で、拒否された。幾度足をはこんでも無駄であった。

そこで、ついに、大村彦右衛門は、切腹を覚悟して、酒井雅楽頭（うたのかみ）忠世邸を訪れ、文字通り必死の哀訴をして、断わられるや、かたわらの柱に凭（よ）りかかって、

「お取りありあげまするまでは、ここを動きませぬ」
と、坐り込みの非常手段に訴えた。
坐り込み数日に及んで、酒井忠世も、ついにその誠意に動かされ、前に立って、
「たとえ主家がほろんでも、その方の忠誠のほどは、上様のお耳に入れて、直参にとりたてて頂くよう、とり計らうゆえ、納得いたせ」
と、なだめた。
彦右衛門は、両手をつかえると、
「それがし一身の安泰を考えて、かような嘆願をいたして居るのではありませぬ。鎌倉以来、累世相伝えて、名家と称われて参りましたる主家を、存続させたいためのお願いをつかまつるのでございます。もし、領地没収されますれば、家臣はもとより、百姓まで、去就を共にいたす覚悟でありますれば、何卒相続の儀おとりなしの程を――」
と泪と倶に、訴えた。
雅楽頭も、その誠忠ぶりに感動して、阿部備中守正次と計って、松千代をお目見させ、所領を安堵させた。
時代が下るにつれて、万般の規矩が整然たるものになればなるほど、例外は認められなくなっていた。
父が変死し、子は稚くてまだお目見が済んでいないというのに、どうして改易をまぬがれることができるものであろう。考えられぬことだった。
しかし、武部仙十郎は、こともなげに、存続可能を口にしたのである。
老人は、狂四郎の不審の眼眸に応えて、

「お目付に、佐野勘十郎という人物が居る。この半年の間に、同役七人を蹴落した利け者で、上司たる若年寄も、この人物には一目置いて居る。……この佐野勘十郎が、西の丸様のご失態を、万事巧みに、隠蔽糊塗(いんぺいこと)して、世間に知れぬようにはからって居る」

そう告げておいて、手をたたいた。

女中が顔をのぞけると、老人は、筆と紙を命じた。

老人が、紙に記したのは、八人の旗本の名前であった。

「これは――？」

狂四郎が訊(たず)ねると、老人は憮然(ぶぜん)として、

「この半年間の被害者だ。いずれも、被害を蒙って以来、門を閉じて居る。家の中を、のぞいて来てもらおうかの」

と、たのんだ。

そのくせ、老人は、この八人の旗本がどのような被害を蒙ったか、打明けてみせようとはしなかった。

四

あたりが昏(く)れなずんだ時刻、大名小路を出て、道三橋を渡りかかった時、狂四郎は、背後に尾行者があることに、気がついた。

――ただの尾行者ではないようだ。

殺意を持って、すこしずつ距離を縮めて来ている、と直感した。べつに、その殺気を感じた次第ではなかった。これは、無数の敵を持ったこの男の、自身でも説明しようのない、霊気のよう

なものであった。

狂四郎は、そのまま歩いて、常盤橋御門を出た。

佐久間町河岸にさしかかった時、尾行者は三人になっていた。そして、その距離も、三間余に縮められていた。

不意に――。

狂四郎は、踵をまわした。

まだふところ手のままで、

「お主ら、襲って来るにしては、尾けて来かたが、長すぎるが、どういうのだ？　こちらが気づくのを待っているような、長い尾行が解せぬ」

と、あびせた。

それに対する応えは、無言裡の抜刀であった。

切先をそろえて、じりじりと詰めて来た。

いずれも、尋常でない腕前を備えていることが、月明りにも、はっきりとみとめられた。

狂四郎が両手をふところから抜き出した時、距離は数歩に迫っていた。

無想正宗の柄へ、右手をかけた――その刹那。

銃声が、後方で轟然と噴いた。

岸の方へ、よろっとよろめいて、片膝を折った狂四郎めがけて、三人の刺客が、宙を截って殺到した。

白刃の唸りと、肉と骨を断つ音が、連続した。

三人の刺客が、地に伏してから、狂四郎は、やおら、身を起した。

左肩に、烈しい疼(うず)きがあった。
敵がたの作戦は、巧妙であったとみとめるべきであった。
こちらが、どのあたりの地点で、踵をまわすか——それまで、計算していたのである。
——刺客を稼業(かぎょう)にしている手輩、というよりは、おれを討つ命令を受けて、これだけの作戦を樹(た)てた面々、となると、どうやら、えりぬきの公儀隠密と考えられる。
待っていれば、敵の方から正体をあらわして来ることは、これまでの経験が教えてくれる。
狂四郎は、一町ばかり歩いて、辻(つじ)に出ると、自身番屋に入り、
「すまぬが、河岸道に、死体が三つばかり横たわって居る。そのひとつを、かついで来てもらえぬか」
と、たのんだ。
公儀隠密かどうか、灯の中でたしかめるつもりであった。
番人が若い店番二人をつれて、走って行ったあと、狂四郎は、自身で左肩の傷の手当をした。
弾丸(たま)は、さいわい貫通していた。
やがて、駈(は)せ戻って来た番人が、
「旦那、死体なんぞ、どこにも見当りませんが……」
と、云った。
「そうか。それなら、仲間が、かつぎ去ったのであろう」
「どうなすったので——？」
「銃声を、きかなかったか？」
「へえ……？」

「府内に住む者が、銃声などきいたことがないのは、あたりまえであったな」
府内十里四方、発砲厳禁の掟(おきて)であった。
にも拘らず、敵は、それを冒したのである。
それができるのは、公儀隠密以外はないのであった。死体を調べるまでもなかった。
「旦那、そのお怪我は、鉄砲で撃たれたと仰言(おっしゃ)るんで……？」
「うむ」
「それじゃ、すぐ、大番屋へ報(しら)せなくっちゃ、いけません」
「その必要はない。駕籠を呼んでくれ」
「だって、旦那――、すてておいちゃア……」
「今夜のことは、終ったのだ。当人が申すのだから、まちがいなかろう。明日のことは、明朝からはじまる」

母恋い

一

当時――。
江戸の路上は、物売りの声が、季節を示す風物のひとつになっていた。
荷(にな)い箱を格子にして涼しさを示すところてん屋につづいて、暑気を洗うように、のんびりと語尾を長びかせる金魚売り。

荷箱に糸立筵の日除けの屋根をつくり、箱のまわりにさまざまの風鈴をつるして、ゆっくりと歩み乍ら、風をさそって涼味の音色をつくる風鈴売りは、夕立のあとなどは、いかにも情緒がゆたかである。

夕餉どきになると、豆腐売り、納豆売り、そして一荷百文の水売りが、その呼び声を、宵の薄闇にないまぜて、横丁新道を、いろどる。

時刻はずれに、売れのこりの品をかついで、思い出したように、声をあげて行くわびしげな姿も、これに加えなければなるまい。

神田川沿いの左衛門河岸を、青竹の物干竿を四五本かついで行く男も、その一人であった。

売れのわるさに肩も足も重いのか、あとからゆっくりと来た駕籠にも、追い越された。

と、みせたのは、実は、こんたんがあってのことだった。

駕籠が、追い越して、四五歩さきに出た——瞬間、左肩に置いた竹竿の一本を、右手に掴んで、大きく宙に弧を描いたとみるや、長槍の構えをとった。

他の竹竿が、地べたにころがった時には、すでに、男は、猛然と奔って、駕籠のたれを、貫いていた。ひとしごきの刹那、先端をとばして、穂先を出していたのである。

しかし——。

次の瞬間、竹竿売り男の口からほとばしったのは、

「しまった！」

その一言であった。

狙った者が乗っているとばかり思っていた駕籠の中は、空だったのである。

仕込み槍を、駕籠から抜き取った男は、背後の気配に、ぱっと身をひるがえして、

「おおっ！」

と、呻きを発した。

狙った者は、いつの間にか、駕籠を抜け出して、うしろを歩いて来ていたのである。

黒の着流しのふところ手姿は、刺客に、皮肉をあびせる前に、駕籠舁(か)きたちへ、声をかけた。

「兄哥(あにい)たち、御苦労だった。それだけの芝居気があれば、明日からでも、中村座の花道を踏むことができよう」

空駕籠を、客を乗せているとみせかけたことを、ほめたのである。

刺客は、屈辱と憤怒を、総身にみなぎらせて、じりじりと、肉薄した。

眠狂四郎は、冷たい眼眸(まなざし)を、その身構えに当てて、

「先程、短銃で、おれを撃ったのも、お主か。……どうやら、公儀隠密衆の中でも、もっぱら、卑劣な攻撃方にまわされている、損な役割の御仁らしいな、お主は――」

と、云った。

からかえるような、なまやさしい敵ではないと知っての上で、あびせかける揶揄(やゆ)であった。こちらは、手負うているのであり、その疼痛(とうつう)は、歩行さえを苦しいものにしているのであった。

刺客の五体が、すこしずつ、沈むのを見まもり乍ら、狂四郎は、なお、両手を懐中に置いたままであった。

……無言裡に。

目にもとまらぬ突きが、襲って来た。

同時に、無想正宗が、抜きつけの一閃を、腰から送り出した。

生捉(いけど)ろうとして、峰をかえした抜きつけの業(わざ)には、手負いの身としては、無理があった。

立っていた地点を、換えたばかりであった。

やむなく、狂四郎は、こちらがその正体を看破していることを告げて、余裕を失わしめることにした。

わざと、白刃をダラリと下げると、

「戻って、お目付佐野勘十郎殿に報告するがよい。小細工を弄（ろう）した攻撃では、眠狂四郎は討ちとれません、と――」

と、云った。

佐野勘十郎の名を、口にしてみたのは、当推量（あてずっぽう）のカンであった。

刺客の様子に、反応があった。

――そうか、やっぱり！

「それとも、今宵のうちに、討ちとることができなければ、死ね、と命じられているのか」

その言葉に対して、敵は、槍に第二撃を生ませた。

もはや、峰搏（みねう）ちの必要はなかった。

眠狂四郎は、魔の迅（はや）さで襲って来た穂先をひっぱずしざま、存分に胴を薙（な）いだ。

神田川へ落ちる水音をきき乍ら、狂四郎は、左肩の傷の痛みに、歯を食いしばった。

二

待っていてくれた駕籠に乗って、浅草鳥越明神裏の、立川談亭の家に着いた時、狂四郎は、かなりの熱が出ているのをおぼえていた。

格子戸を開けて、一歩入ったとたん――。

二階で争う叫びと物音が、降って来た。

はっとなったが、その叫び声が、談亭のものであるのをきいて、

――そうか。

と、合点した。

そういうことも起るかも知れぬ、と予想はしていたのである。

「……止すんだ、と云ったら、止めて頂きましょう。……ええい、ききわけのない！　死に急ぎと果物の取り急ぎはしないものと……盂蘭盆だって、ちゃんと、水瓜も桃も茄子も、榧の実も熟してから――、柿だけはまだ青いが、その代り罰があたって、熟れたって、渋があって――そんなことは、ともかく、死に急ぎだけは――」

喋りたてている談亭の声をきき乍ら、階段をのぼって行った狂四郎は、蚊帳の中でもみ争う影をみとめたが、黙って、出窓の方へまわって、そこへ腰を下ろした。

「おっ！　先生、いいところへ――」

談亭は、ようやくのことで、旗本六千石・大番組頭長岡釆女正の妻の手から、懐剣をうばい取って、蚊帳から匍い出して来た。

手の甲で、額の汗をぬぐいつつ、

「水に投身するのを、魚腹に葬られる、山野に斃死するのを、鴉の腹を肥やす、それから、棺桶の中に入れられるのを、木に就く、といいましたね。こいつで、のどをぶっつりやるのを、なんと云いますかねえ」

「あとは野となれ山となれ、か」

「それだ……いやはや、美人と骨董は、預かるものじゃありませんや。夜もおちおちねむれぬこ

とに相成ったり」

「…………」

「どうしますかねえ。奥方は、思いつめておいでですぜ。どうも、死ぬときめた一念は、しまつが悪い。……命あっての物種、畠あっての芋種なんだが——、なにしろ、一念というやつは、三千の法界を具えている、というくらいのものですからね、講釈師なんぞの手におえるものじゃありませんや」

「階下に降りてくれてよい」

狂四郎は、云った。

「大丈夫ですかね？」

「もう、お主に、迷惑はかけぬ」

「へえ、それじゃ——？」

談亭は、不安をのこして、降りて行った。

狂四郎は、蚊帳の中に入った。

片隅に、端座して、うなだれている志津へ一瞥をくれておいて、狂四郎は、牀の上へ仰臥した。

「そなたが自害する前に、こちらから、ひとつ、たのみがある」

狂四郎は、目蓋を閉じて、云った。

「……………？」

志津は、顔を擡げて、狂四郎の寐顔を、視た。その眸子は、依然として、かわいていた。哭くことを忘れた女のようであった。

「死にたくないと思っている男が、こうして、身を横たえている。武家の女房なら、弾丸傷の手

当ぐらいは知って居ろう。ついでに、額でも、ひやしてもらおうか」
そう云われて、志津は、はっと、その寐顔を見なおした。
「どこに、お怪我を――？」
狂四郎は、左肩を示した。
自身番屋で、臨時の手当をしただけであり、傷をしばった手拭いは、しぼれるほど血汐に濡れていた。
「ただいま、すぐに！」
志津は、急に別人のようになって、階段を降りて行った。
茶の間で、おちつかずにいた談亭は、姿をみせた志津から、
「眠殿は、手負うておもどりなされて居ります。傷薬と、焼酎（しょうちゅう）と、真新しい晒（さらし）をおねがい申します」
と、云われて、面くらった。
「そいつは、大変だ。すぐ、医者を――」
「いいえ、手当は、わたくしがいたします。眠殿は、わたくしにして欲しい、と申されましたゆえ――」
「成程！」
談亭は、大きく頷（うなず）いた。
いっそ、いそいそとした態度で、二階へあがって行く志津を、見送って、談亭は、首を振った。
――自分の傷を手当させて、女に死ぬ気を忘れさせるとは、成程、女心を知らなけりゃ、できねえ芸当だ。おそれ入りやした。

柏手でも打ちたい気持であった。

三

志津は、手当を終え、額に濡れた手拭いをあてておいて、枕元に、坐ったものの、不安が起って、

「医師に診て頂いた方が、よろしいかと存じますが……」

と、独語するように、云った。

「死にたくはないが、生きたくて生きている男ではない、と思って頂こう」

狂四郎は、こたえた。

志津は、息をのんで、その彫のふかい、暗い翳の濃い面貌を、瞶めた。

それなり、狂四郎は、口をつぐんだ。熱も高くなっていたのである。

志津は、額の濡れ手拭いを、とりかえるのにいそがしかった。

談亭が、新しい冷水を、桶にはこんで来て、そおっと、首をのばして、蚊帳の中を覗いた。

志津は、こちらの視線にも気づかぬていで、狂四郎の寝顔を、瞶めつづけている。

談亭は、跫音をしのばせて、茶の間に降りて来ると、長火鉢の猫板を、煙管の雁首でたたきながら、小声で、

夕立ちに、すっくり濡れた薄羽織

かけて乾させる衣紋竹、想いの丈は長くとも

アレ、着やしゃんせ、この浴衣

女房きどりであるわいな

と、うたった。

その夜は、談亭も、蚊遣火の中で、うたた寐をして、すごした。

目が覚めてみると、朝陽がさしそめていて、塀の外を、手習いに行く子供たちの話し声がきこえていた。

寐起きはわるい方であったが、今朝だけは、談亭の脳裡は、たちまちにして冴えた。

「はて、と――、さて、と――」

天井を仰いで、

「月はかすみと寐たという、かすみは月と寐ぬという」

と、呟いた。

じっとしていられなくなって、談亭は、立ち上って、もみ手をした。

「はてが、さてとなり、さてが、はてとなり……どうやら人目をつつむ袖、晴れて添うたら世間の人に、なんとひとことわびずまい、ということに、なりはせぬかと他人の疝気、と来た」

わざと、跫音たてて、階段をのぼって行った談亭は、

「はい、お早うござりたてまつる」

おどけ乍ら、障子を開けた。

蚊帳は、とりはらわれ、狂四郎の枕元には、志津が依然としてかわらぬ姿を、端座させていた。

「これア、おどろきましたな。昨夜は、おやすみになりませんでしたので――？」

談亭が、眉宇をひそめて、訊ねると、志津は、すこしもやつれをみせぬ顔を向けて、

「熱が、ずっと、ひきませぬゆえ――」

と、こたえた。

そう云われて、談亭は、狂四郎の寐顔へ視線を移してみた。

高熱に冒された狂四郎を視たのは、談亭も、はじめてであった。この孤独な、虚無の男が、隠して他人にみせなかった人間の弱さが、佗しい色になって、閉じた目蓋や口もとに刷かれているようであった。

「この御仁のことを、うかがわせて下さいましょうか？」

「それはまア、てまえの存じて居りますことなら、お教えいたしますが……」

「昨夜からこうして看護いたし乍ら、どのような素姓の御仁であろうか、ずっと、考えて居りました」

「くわしいことは、御当人も口になさいませぬし、てまえもうかがったことはありませんが、不幸な星の下にお生れになったことは、まちがいございません。……物心ついた時から、たった一人の友達もなく――母上と二人きりで、どこかの寺院の離れで、淋しくおくらしなすった由でございます。いつか、こういうことを、申されて居りましたが……、十五歳の時、母上がお亡くなりになると、母上のご先祖が豪族として栄華を誇って居られた丘の上に、たったお一人で遺骸をはこばれ、穴を掘って、葬られたそうでございます。……自分で、一人で生きて行こうと決意して、為した最初の行為が、それであった、と申されて居りましたな」

「…………」

志津は、息をのんで、じっと、談亭の言葉に耳を傾けている。

「これまで、かぞえきれぬほどの人命を、あの世へ送られましたし、薄倖な女人に対して、ずいぶん無情な仕打ちもなさいました。こちらが、親しくなって、狎れようとすると、急に、冷たく

厳しく、心をぴしゃりと閉じておしまいになります。……哀楽、時を失えば、殃咎必ず至る、という言葉が、左伝にございますが、まるで、それを、地で振舞っているようにみせかけているところがございますな。……しかし、心の奥底では、人を愛するということを、人一倍知っておいでてでございますよ。愛してその悪を知り、憎みてその善を知る——そういう御仁でございますて」

志津は、その寐顔へ、眸子をもどすと、飛んで来た蠅を、団扇で追って、しずかに、風を送った。

談亭が、降りて行くのも気づかぬように、志津は、寐顔へ当てた眸子を、まばたきもさせなかったが、やがて、はじめて、かわいた光が潤み、しずかに、泪がその頬をつたった。

良人の横死に遭うても泣かなかったこの女性が、はじめて、泣く機会を得たようであった。

四

その人物は、鼻下と頤を、無精とみえるむさくるしい髭で掩うているほかは、別にどこといって特長のない、中肉中背の中年男であった。

長岡釆女正重武の屋敷に入って、書院に坐ると、

「暑いのう、冷たい麦湯をもらおうか」

と、注文したし、女中が、それをささげて入って来ると、生れはどこか、ときき、

「ほう、知行所の百姓の娘か。肌がいいのう。抱き心地がよさそうだ。どうじゃ、わしの屋敷に来ぬか。もっと肌をみがいてやるぞ」

と、云って、高笑いしてみせた。

やがて、釆女正の遺児守一が、亡父の伯父である交代寄合の田淵左近にともなわれて、挨拶にあらわれると、

「ふむふむ――、チト小柄じゃが、公年は通るであろう。父釆女正重武は、突然の乱心で急死。それから、重武の妻――つまり、お主の母も、急死。よいな。そういうことに相成った。わかったな」

「お言葉をかえしますが、出奔つかまつりました母の儀は、詮議無用にして下さいましょうか？」

守一は、必死の面持で、訊ねた。

「詮議無用にはならぬのう。お主の母は、急死いたしたのじゃ。生きて居られては、困る。死んでもらわねばならん。気の毒だが、やむを得ん」

お目付佐野勘十郎は、こともなげな口調で云ってのけた。

「お看過し頂けませぬか？」

「子として、母をたすけたいとねがうのは、当然であろうな。わかるわかる。しかし、そうは参らぬのが、御奉公のつらさでな。我慢せい。……お主の母は、急死したのじゃ。生きている亡霊は、早々に消えてもらわねばならぬ。長岡家存続のためにはのう。官尊き者は憂い深く、禄多き者は責大なりじゃ」

「………」

守一は、俯向いた。

「さ、これで済んだ。長岡家安泰、目出度い。そうではないかな、田淵殿？」

「ご高配のほど、おん礼の申し上げようもござらぬ」

田淵左近は、頭を下げた。
「祝うて、一献汲みたいところだが、あいにく下戸でな」
佐野勘十郎は、立ち上った。
そこへ、いそいで、用人が、三方へ、金をのせて、入って来た。
勘十郎は、三百両はあるその山を眺めて、
「礼か。無理したのう。せっかくだから、すこしもらって行こう」
切餅（二十五両包み）を二つ、無造作に袂に入れると、さっさと、書院を出た。
歩き出し乍ら、左近を振りかえって、
「貴公に後見をつとめてもらえるとは、安心じゃな。口はかたい御仁であることは、存じて居る」
と、云った。
「お誓い申す」
左近は、緊張した面持で、語気に力をこめた。
「ははは……、万事、わが身安堵、事なかれで生きるに限る。泰平の御時世は、見ざる聞かざる言わざる――庚申猿になるに限る」
お目付佐野勘十郎は、その言葉をのこして、去った。
左近が、玄関へ見送って、書院へひきかえしてみると、守一ただ一人、じっと俯向いていた。
その膝に、泪がしたたり落ちているのを見てとった左近は、
「守一、お目付の申された通り、我慢だぞ。なにごとも、長岡家を保つためには、当主たるお前が、我慢せねばならぬのだぞ。……わかったな？　よいな？」

と、云いきかせた。
「…………」
守一は、歯を食いしばって、こたえなかった。
「守一！　返辞をせぬか？」
「…………」
「守一！　母のことは、忘れるのじゃ！」
「…………」
「守一！」
左近が、小さな肩をつかむや、守一は、ぱっとその手をふりはらって、縁側を横切るや、庭へとび出した。
左近の目からとどかぬ遠くへ、奔った守一は、泪に濡れた顔を仰向けて、空に向って、絶叫した。
「母上っ！　つかまらないで下され！　生きて下されっ！」

黄昏決闘

一

炎暑の午さがり——江戸の街衢も、急に、ひっそりと、物音の絶えるひとときであった。
灼りつける陽ざしの眩しい往還から、人影は絶えるし、職人たちは肱枕をし、商家では、老番

頭は硯函へ肱をつき、手代は算盤にもたれ、小僧は舟を漕いでいる。奥では内儀さんが子供を寐かしつけ乍ら、うとうとしているし、勝手では、下婢たちも忍び睡りしている。
こうした時刻に、炎天をおそれずに、呼び声をあげて往くのは、定斎屋のほかにはいない。
薬箱を天秤にかついで、カチカチカタカタと音たて乍ら、時おり、ものうげに、
「ええ……定斎やで、ござい」
と、呼び声をあげるのも、江戸の夏景色のひとつであった。
定斎屋は、日本橋新右衛門町と馬喰町とに一軒ずつあるだけであったが、どんな炎天でも、笠をかぶらず、日蔭を歩かぬのが薬の効験を示すことだというので、売り歩く歩合取りは、しだいに減っていた。
立川談亭の住む浅草鳥越明神界隈は、早朝から夜更けまで、さわがしいのであったが、午さがりになると、他の地域と申し合せでもしたように、ひっそりと、近隣から物音を絶やした。
定斎屋の薬箱を鳴らす音が、この横丁にも入って来て、高くひびくのも、この時刻ならではのことだった。
談亭の家の二階では、今日もなお、眠狂四郎は、痩身を、牀に横たえていた。
蚊が多いので、一日中蚊帳が吊ってあり、出窓に下げた風鈴の鳴るたびに、蚊帳もそよいでいた。
志津は、枕辺で、狂四郎の顔へ、団扇を動かしていたが、定斎屋の音をきくと、そっと、蚊帳の外へ出て、階段を降りた。
格子を細目に開けて、定斎屋が近づくのを待ち、声をかけて、
「湿布をひと包み下され」

と、云った。

「へい」

定斎屋は、三尺ばかりの竪長(たてなが)の薬箱を、地べたへおろしておいて、それを持って、格子戸へ近づいて来た。

手渡すとみせた——次の一瞬、定斎屋の猿臂(えんぴ)は、非常な素早さで延びるや、志津の利腕(ききうで)を摑(つか)んでいた。

志津は、あっとなって、ふりほどこうとしたが、定斎屋の手には、鍛えられた力がこもっていた。

「長岡釆女正殿の奥方ですな！　ご同道を、ねがう！」

志津は、無言で、必死に、抵抗をこころみようとしたが、徒労だった。

ずるずると、表へひき出された。

「騒がれるな！　騒ぐと、この場で、討ち果さねば相成らぬ。そうなれば、せっかく存続ときまった長岡家は、改易になりますぞ！……ご子息のことを、考えられい！」

鋭くきめつけられて、志津は、全身から力が抜けた。

贋(にせ)定斎屋が、そこへ薬箱を置きすてて、志津をともなって、足早に立去ろうとした——その時。

「おい！」

頭上から、声が降って来た。

はっ、とふり仰いだ定斎屋は、二階の出窓から投じられた小柄(こづか)を、躱(かわ)すいとまもなく、咽喉(のど)へ受けて、のけぞった。

狂四郎が次に為したのは、志津に早く家に入るように促しておいて、向いの長屋の一軒めがけ

て、小判を一枚、投じることであった。
小判は、ぼろ簾(すだれ)の破れ目から、家の中へとび込んだ。
破れ畳の上には、あぶれた渡り奉公の中間(ちゅうげん)が、いぎたない恰好でうたた寐をしていた。小判は、その顔へ当った。
「おっ！　な、なんでえ！」
はね起きた中間は、畳に落ちた小判をひろいあげて、きょとんとなった。
「まっ昼間から、びっくらさせやがるねえ。い、いってえ、どうしたってんだ？」
顔を擡(あ)げた中間の視線が、向いの二階の出窓に立つ狂四郎の冷たい眼眸(まなざし)と、合った。
「旦那ですかい、こいつを投げたのは？」
「昨夜は、どこかの旗本屋敷の渡り部屋で、無一文になったとみえる」
旗本屋敷の渡り部屋で、毎夜のごとく賭場(とば)がひらかれているのは、当時の常識であった。
「図星でさ。きれいさっぱりオケラになりやしてね、ふて寐をしているところへ、こんなものが降って来ちゃ、気が狂いまさあ。べつに、旦那から、おめぐみを蒙(こうむ)る理由がねえが……？」
「たのみがある」
「へえ――？」
「おもてに、定斎屋が、死んで居る」
「え？」
「早桶(はやおけ)へ納(い)れて、回向院(えこういん)へはこんで、葬ってくれぬか」
「そんなことは、造作はありやせんが……」
中間は、褌(ふんどし)のままで、表へ出て来て、死骸へ寄ると、顔をしかめて、

「これア――旦那が、お殺んなすったので？」
「大番屋に届ける必要はない。無縁仏になるのを覚悟で、定斎屋に化けた男だ」
「化けた？……するてえと、こいつは――」
「はやく、家へかつぎ込め。……一両の日当は、わるくない筈だ」
「有難え。薬箱も頂戴できるんですね。へへへ、明日から、商売がえだあ」
中間は、まわりに見つからないように、大いそぎで、死骸を家の中へ、かつぎ込んだ。

二

談亭は、上野の講釈場の昼席へ行って、留守であった。
狂四郎は、蚊帳の中へ戻ると、仰臥した。
ひそやかな跫音が、階段をのぼって来て、気配は、蚊帳の外でうずくまったが、狂四郎は、目蓋を閉じたままであった。
「かるはずみな振舞いをいたし、申しわけありませぬ」
志津は、詫びた。
「定斎屋に化けて、そなたをおびき出したとは、考えたものだ。この家をかぎつけたところをみると、探索の網を江戸市中へ張ったと考えられる。敵は、わたしが傷ついたことを知って居る。……この上は、手に手を把って、駆落ちとしゃれなければならぬかも知れぬ」
志津は、蚊帳の中へ入って来た。
「縁もゆかりもない貴方様に、ご迷惑をおかけしとうはございませぬ。わたくし一人が、この身をすてればよいことでございます」

「そなたを、死なせてはならぬ理由が、できた」

「……？」

「そなたの息子が、母の生きていてくれることを、のぞんでいるからだ」

「いえ、わたくしはもう、長岡家とは……」

云いかけた志津は、不意に、膝に置いた手を、狂四郎に、握られた。

引かれるままに、狂四郎の脇に崩れた志津は、そのまま、目蓋を閉じた。

「無頼の徒が、そなたを生きさせるには、一手しかない、と思うがよい」

抱き込んで、仰臥させると、狂四郎は、しばらく、そのまま、動かずにいた。

良人ならぬ者に、一度犯されている身が、再び、さらに別の男に犯されることに堪えようとして、一瞬、こわばらせた四肢を、はたして、自らのぞんでゆだねるために、やわらげるか否か――それを、待ったのである。

狂四郎の眼眸は、冷たかった。

と――。

志津は、顔を狂四郎の胸に、うずめて来た。

狂四郎は、片手を、胸もとからさし入れようとして、止めた。

少年守一の面影が、泛んだからである。あの少年が、この胸の隆起をまさぐり、吸ったのだ。

狂四郎の片手は、胴をすべって、下へのびた。

志津は、この家に来てから、談亭の提供で、白縮緬の湯具の上に透綾縮をまとい、黒繻子の帯、水髪に京打簪をさした町姿になって居り、狂四郎の片手のうごめくままに、まとうたものを、肌からすべらせて、あらわな姿態になった。

夜の薄あかりの中の営みしか知らぬ肢体は、白昼の光にあてられて、おそれと羞恥に顫えつつ、求められるがままに、ひらいてゆく。
口外すべからざる生贄にされ、良人を喪い、家を捨てた女の、これは、浮世に対する必死の反抗かも知れなかった。
狂四郎は、女の肌が燃えて来るのを感じた。
——燃えるがいい！
燃えることによって、生きの生命のよろこびを知るならば、それは、燠火のごとく、この後、心の底にたくわえて、おのれを生きつづけさせる力になろう。
狂四郎は、志津に、女のよろこびを知らせるために、衰え弱った痩軀に、鞭を打った。
……営みは、終った。
長い沈黙ののち、
「……わたくし、知りました」
微かなささやきが、志津の口から、もらされた。
狂四郎は、しずかに起き上ると、枕辺に置かれた黒羽二重へ、手をのばした。
志津は、はっとなって、はね起き、
「ど、どちらへ、おいでなさいます？」
と、眼眸をすがりつかせた。
「そなたを、かくさねばならぬ」
「わたくしのことなど……」
「たったいま、女として、知った、と申したではないか」

「…………」
「こちらは、生きることを知った、ときいた」
「は、はい」
狂四郎は、かるい眩暈が、波状で襲うて来るのに堪え乍ら、着物をつけおわると、
「落人の道行は、こうした契りのあとで為されるものか」
と、自嘲の呟きをもらしていた。

三

陽ざしが、斜めになって、物影を長く延ばした頃あい、二梃の駕籠が、本所横川に架った本法寺橋を渡り、出村町に添って右へ曲った。
——尾けられているかも知れぬ。
その予感が、うしろの駕籠の中の者の脳裡に、絶えず、つきまとうていた。
行先は、押上村の古刹竜勝寺であった。
幾年か前、眠狂四郎は、そこの庫裡を隠れ住いにして、二年ばかりすごしていた。
住職の空然は、狂四郎が心をゆるす数寡い知己の一人であり、狂四郎という業念深い男のために、生命の危機に襲われることを一向にいとわぬのである。
さしあたって、志津を預けるところは、竜勝寺よりほかはなかった。
尾行者がいるとすれば、このあたりで、食いとめなければならぬ。狂四郎は、たいていれをはねあげて、その気配を、さとろうとした。
衰弱し、疲労している五体に、ふれて来る気配はなかった。

尾行者がいないのではなく、こちらの神経が鈍磨しているように思われた。
狂四郎は、森と田畠のひろがる郊外の広さに、急に視点がぼやけるのをおぼえて、目蓋を閉じた。
駕籠は、小梅村にさしかかっていた。
突然、狂四郎の心身が、緊きしまったのは、うしろから跫音が近づいたからであった。
しかし、追いついて来た者は、この残照の中の暑気をなんの苦にもせぬ足早さで、さっさと、駕籠を追い越して行った。
深編笠をかぶった武士であった。浪人者であることは、その袴が、つぎをあててあり、色褪せているのであきらかであった。六尺ゆたかの長身であったが、痩せこけているので、飄々としていた。
狂四郎は、再び目蓋を閉じた。
駕籠が、地面におろされるまでの、ほんのしばしのあいだ、仮眠に陥ちていたようであった。
狂四郎は、なつかしい顔が、境内にあるのを見出した。
駕籠を出ると、住職空然は、ゆっくりと近づいて来て、眉宇をひそめ、
「患われているのかな？」
と、訊ねた。
「いや、べつに――」
狂四郎は、かぶりを振ってから、
「女人を一人、預かって頂きたい」
「それは、造作もないが……」

空然は、頭を下げる志津に、会釈をかえしておいて、
「眠さん、預かるのを邪魔する御仁が、一足さきに、ここに来て居る」
と、告げた。
「……？」
「むかし親しかった友人が、ここで無縁仏になっている、と云って、墓の裏地へ行って居るが……、どうなさるかな？」
「それは、編笠をかぶった、背の高い、浪人ていの男ではありませんか？」
「左様――、ちょっと風変りな御仁と見受けた」
「やむを得まい」
狂四郎は、きっぱりと云った。
「墓地に、むかしの友人とならんで、無縁仏になってもらうことになる」
「眠さん、あんたは、どう見ても、平常のからだではない。……無理ではないかな、刀を抜くのは――？」
空然は、不安な面持であった。
「わたしが、こうした場合、どのような行動をえらぶか、空然殿はご存じのはずだ。この女人を、庫裡にご案内頂こう」
狂四郎は、志津の必死な視線を感じ乍ら、わざと、彼女を視ようとしなかった。
空然は、うなずいて、志津を促すと、歩き出した。
志津は、二三歩従ってから、堪えきれずに、振りかえると、
「わたくしが、あきらめますれば、それで、よいのでございます」

と、云った。

狂四郎は、顔をそむけたなりで、

「おれに惚（ほ）れたのなら、死ぬのは、おれが死んだあとにしてもらおう」

冷やかなその言葉を、投げかえした。

四

空然と志津の姿が、庫裡に消えるのを、待っていたように、本堂わきから、編笠をかぶった長身の姿が、現われた。

小梅村の往還で、さっさと追い越して、先まわりして、この男が、ここで待っていたのは、それを指令したお目付佐野勘十郎がなみなみならぬ実行力の持主であることを意味している。この眠狂四郎が、江戸で身を隠す場所が、幾箇処（かしょ）あるか、洩れなく調べあげているのだ。

それにしても、この執拗（しつよう）さは、異常にすぎる。佐野勘十郎が、そういう変質者であろう、とかんたんに片づけられぬ、なにか、かくされたものが、佐野勘十郎の後側にあるに相違ない。

武部老人は、そのことにうすうす気がついているのではないのか。気づいてい乍ら、口外できぬのではないのか。

——この男、どうやら、隠密とはちがう。

狂四郎は、近づいて来る対手（あいて）を、そう看てとった。隠密というものは、なんの特徴も持たぬ、きわめて見かけは凡庸な人間がえらばれるのであった。薬売りにでも、呉服屋の手代にでも、大工とか植木屋とか職人にも、すぐに化けられる人間でなければならないからである。

いま眼前に来た男は、この風体以外は考えられぬようであった。

七八歩の距離を置いて、立ち停った対手は、編笠をはずした。

おどろくほど鼻梁の発達した、ひろい額に叡知のたくわえを感じさせる相貌であった。双眸は澄んでいたし、口もとには優しさがあった。

ただの刺客ではなかった。

狂四郎は、こういう男を刺客に使うことのできる佐野勘十郎に、微かなおそれをおぼえた。

男は、そう云った。

「明日心剣と申す。心はこころ。もとより、貴公と同様、偽名でござる」

「途中で襲わず、ここに先まわりしたのは、お主の考えでしたことか？」

「友人の墓詣りをしてやりたかったのでござるよ。……左様、もう十四年前になりますかな。身共とその友人は、ここからすこしはなれた森の中で、果し合いをいたして、勝った身共が遺骸をはこんで、ここの墓地へ葬ってやったのでござる。いい奴でござったな。爾後、あれほどの奴には、出会い申さぬ」

「…………」

「ところで、貴公が保護されて居る長岡釆女正の妻女を、当方へお渡し下さることは、出来申さぬか？」

「おことわりする」

「一応、おうかがいいたしたまででござる。もとより、お渡し下さるものとは、思っては居り申さなんだ。……そこで、この場にて、決闘することに相成るが、身共は、どうも、気が進まぬのでござるよ」

「…………」

「貴公は、手負うて居られる。たぶん、勝利は、身共のものでござるな」
「いささか、うぬぼれが過ぎるように思われるが――」
「うぬぼれではござらんな。それが証拠に、身共は、貴公を一瞥した刹那、おのが生涯で出会う唯一の強敵である、と直感して、総身の血汐が、さわぎたてるのをおぼえ申した。このような替えがたい強敵とは、心身とも充実した状態の時に、雌雄を決したいものでござるよ。……いかがなものでござろうか。十日間、お待ち申そうか」
「今日だけがあって、明日はない男と思って頂こう」
「左様か。ざんねんだ。このような強敵と、むざむざ、勝つときまって居る果し合いをするとは――」
明日心剣と仮名を名乗る男は、いかにも、心から惜しげに、かぶりを振った。
狂四郎は、昏れる前の束の間の明るさの中で、宛然死相でも呈しているように顔色を蒼ざめさせて、凝然と立っている。
「では――」
明日心剣は、ゆっくりとした動作で、腰から大刀を、鞘ごと抜いた。
その構えは、狂四郎がはじめて接する奇妙なものであった。
胸の高さに、左手で鞘の栗形の下を逆握りにして、右腕をやや彎曲させて、柄を摑み、右半身にとったのである。
その構えを視て、狂四郎は、
――そうか！
と、合点した。

その鞘は、ただの鞘ではなく、鋼鉄造りだったのである。鞘もまた武器になると考えて、その業を工夫したのである。

抜かずに、構えをとったのは、居合の修業から出発して、独特の抜きつけを放つ会得をしたものに相違ない。

心剣が、この果し合いは、おのれが必ず勝つ、と高言したのは、この意外の業前を備えていたからなのだ。

狂四郎は、しかし、眉宇も動かさず、無想正宗を抜く前に、ひとつ質問を投げた。

「お主は、佐野勘十郎の部下か、それとも、ただのやとわれか？」

「お目付には、恩を売られて居り申す。貴公を討ちとることをたのまれて、ことわれぬ義理があるゆえ、出向き申したが……いまは、それを理由とはいたさぬ。もし、貴公に負けても、いささかの悔いもない」

その言葉をきいて、狂四郎は、やおら、無想正宗を鞘走らせた。

円月殺法を生む地摺り下段をとらず、八相の構えをえらんだ。

「うむ！」

心剣は、狂四郎の構えを視て、ひくく、しぼるように、唸った。

いくばくかの固着の対峙ののちに、じりじりと間隔をせばめはじめたのは、心剣の方であった。

双方が間合を見切った瞬間、汐合がきわまった。

同時に動き――昏れなずむ古刹の境内に、刃金が悲鳴をほとばしらせる異常な響きがあった。

その直後、徐々に、前へ身をのめらせたのは、狂四郎の方であった。

切腹

一

この決闘の目撃者は、一人いた。
鐘楼の蔭に佇立していた住職空然であった。
空然は、狂四郎が徐々に前へのめるのをみとめて、あっとなった。
はじめて、狂四郎が敗れるのを、視たのである。
左様――目撃者の目には、まぎれもなく、狂四郎が敗れた、と映った。
対手の明日心剣は、大きく右足を踏み出し、抜きつけを放つ前の構えに、もどったまま、そこに、立ちつくしている。
鞘ごと抜いた大刀を、胸前に、水平に横たえたまま、微動もせぬ。
空然の目撃する地点からは、心剣はちょうど背中をみせて居り、狂四郎との一瞬一閃裡の闘いでは、どう抜きつけたか、みとめられなかった。
空然には、心剣が文字通り目にもとまらぬ迅さで狂四郎を斬り、斬った刹那にその白刃を鞘に納めたのだ、と思われた。
空然は、いそいで、その場へ、近づいた。
その時――。
地に俯伏した狂四郎を、見下ろす心剣の口から、意外な一言がもらされるのを、空然は、耳に

した。
「……ま、負けた！　こ、このわしが――」
空然は、狂四郎の傍へ寄って、視線を心剣に向けた。
心剣は、柄を摑んだ右手を、ゆっくりと動かして、だらりと下げた。
柄だけが、右手にあった。白刃は、鍔さき二寸あまりのところから、両断されていたのである。
すなわち。
心剣が、抜きつけの一撃を放とうとした刹那――その白刃を、鞘から三寸も抜かぬうちに、狂四郎は、無想正宗で、それを両断したのであった。
両断するとともに、狂四郎自身、精根尽き、意識を喪って、倒れたのである。
心剣の方は、あまりの凄まじい狂四郎の迅業に、茫然自失していたのである。
空然が、錯覚したのも無理のない決闘であった。
「なんという強さか！」
心剣は、正直に、その感動を口にした。
「拙僧にとっては、回向せねばならぬ墓が、増えずにすみ、有難う存ずる」
空然は、そう云い乍ら、狂四郎をかかえ起した。
「後日、あらためて、果し合いを所望いたすと、おつたえ下され」
心剣は、そう云いのこすと、深編笠をひろいあげて、山門へ向って、遠ざかって行った。
「眠さん……眠さん――」
空然にゆさぶられて、狂四郎は、意識をよみがえらせると、薄暮の境内へ、視線をまわした。
「敵は、引きあげましたぞ」

狂四郎は、空然に云われて、大きく吐息した。

「あの男は、わたしが倒れた時、脇差で斬れたはずだ。どうして、斬らなんだのか？」

「あんたの迅業に、舌を巻いて、うつけになったと思われる」

「御住持、わたしは、また生きることになったらしいな」

「生きてもらおうではないか、眠さん。雲はれてむなしき空にすみながら、うき世のなかをめぐる月影。……仮の浮世に仮の旅――どうせ、往き着くところは同じだから、べつに急ぐ必要もないわさ。庫裡で、女人が待ってござる」

空然は、本堂の方へ、去った。

狂四郎は、踏んで行く大地が、いつ崩れるかわからぬようなおぼつかなさをおぼえた。陽のあるうちから空に在った月が、光を増し、それに濡れた瘦身を冷たく感じていた。

庫裡の戸口に、人影があった。志津であった。

狂四郎は、その影へ、視線をあてて、近づいた。

狂四郎がその前に立つと同時に、志津は、その胸へ身を投げかけると、嗚咽しはじめた。

狂四郎には、女をささえてやる力は失われていた。

よろめいて、柱に凭りかかると、そのまま、ぐったりとなった。女の嗚咽は、遠いものになり、この虚無の男を感動させることはできないようであった。

二

同じ日、江戸城内に、ひとつの椿事が起った。

それは、本丸老中水野越前守忠邦の下城の時に起った。

老中の下城は、八つ（午後二時）というのが、それまでの定例になっていた。正四つ（午前十時）に登城して、八つに退出するこの老中の定例は、各藩の城代はじめ、下は寺小屋の子供にまで及んで、当時のならわしになっていた。武家でも町家でも、人を訪問するのは、その時刻内がよいとされていたのである。四つ以前の朝のうちとか、午後おそくの訪問は、失礼とされて、よほどのことがないと、しなかった。

しかし――。

水野忠邦が、本丸老中となってから、この定例はしばしば、破られた。

幕政改革に、異常な熱意を燃やす忠邦は、むしろ進んで慣習を破り、また、政務はきわめて繁多でもあったのである。

この日、忠邦が、本丸玄関を出たのは、七つ（午後四時）過ぎであった。

忠邦は、御書院御門、中之御門、三の御門を、足早に通り抜けた。

元来、歩くことの早い人物であったが、老中になってから一層早くなっていた。忠邦は、大名旗本が、ゆっくりと歩くことをきらっていた。徒歩（かち）にしても、駕籠にしても、上に立つ者は常に早くあるべきである、という考えを持っていた。

なにか異変が起った時のみ、歩行また駕籠を早くすれば、すぐさま、一般の人々に、何かが起ったな、と感づかれる。異変というものは、世間の取沙汰になることを、ふせがなければならぬ場合が多いのである。したがって、日常、絶えず忙しげに通るならわしをつけておく必要がある。これが心得というものである。

忠邦は、自らそれを実行していた。

忠邦が、駕籠の待つ下乗橋の門ぎわまで来た時であった。

突然、

「ご老中！」

高くそう呼びかけて、門蔭から、すべるように、砂利道のまん中へ出て来た者があった。

忠邦は、その場へ土下座したのが、白髪の老人であるのをみとめて、眉宇をひそめた。旗本もかなりの大身であることは、その衣服であきらかであった。

供連はすべて、下乗門の外で待ち、門を入れぬ規則になって居り、忠邦のうしろには、三人ばかりの供しか従いていなかった。

その三人が、忠邦の前へ出ようとするのを、

「待て」

と抑えた忠邦は、対手の出様を、じっと見まもった。

老いた旗本は、両手をつかえ、

「旗本大番頭・西条主水正外記と申しまする。武士道の吟味に叶うべく、この場にて、切腹つかまつることをお許し下さいまするよう、願い上げ奉る。仔細は、これに――」

と、懐中にさしていた封書を、前に置いた。

そして、裃をはずし、紋服を肩から脱ぎ落した。

下には、白衣を左前にまとうていた。

その態度は、いかにもおちつきはらったものであった。

忠邦は、一瞬、迷った。忠邦には、その封書の内容が、判ったからである。

西条主水正外記という名も、すでに、忠邦の脳裡にあった。

――死なせてやろうか。

忠邦は、自分に問うた。
いかなる理由があるにせよ、江戸城内で切腹することは、謀叛心あったものとみなされる。許されざる振舞いである。その家族も死罪をまぬがれぬ。
しかし、忠邦の看るかぎり、この老いた旗本に残されているのは、切腹以外にはないようであった。覚悟をさだめた者のしずけさが、その態度にはある。
忠邦は、しかし、この老いた旗本に同情して、死なせてやるのが慈悲と考えた次第ではなかった。
西条外記が、城内で、しかも、老中の面前で、切腹しようと覚悟をさだめたのは、私怨ではない筈であった。その効果を、忠邦もまた、考えたのである。
——死なせてやろう。
忠邦は、自分に呟くや、歩み寄って、その封書を把りあげた。
いま、この不幸な、忠誠心にこりかたまった老人の最期に対して、せめてはなむけをおくってやれるとすれば、渠がしたためた必死の訴えを読んでやることであった。
忠邦は、封書を披いた。
西条外記の双眼には、泪が滲んだ。
額を砂利にすりつけて、忠邦が読みおわってから、かけてくれる言葉を待つ外記の白髪も、肩も、手も顫えていた。
「相判った」
忠邦は、みじかく、それだけ云った。
「忝のう存じ奉る！」

外記は、姿勢を正すと、用意して来た白鞘の短刀を抜き、左手を脇腹に当てた。

介錯人は、いないのである。

外記は、確実に、生命をすてる切腹をしなければならなかった。

切腹の正しい作法は——。

刀をまず、左の脇腹に突き刺し、右へぎりぎりとひきまわす。但し、あまりに深くかき斬ると、腸が出る。これは無念腹といい、心得ある武士は戒めとする。一文字に斬って、ひき抜いた刀を、取りなおして、刃を下に向けて、胸の下鳩尾（心臓の場所）へ突き刺し、柄を逆手に持って、渾身の力をこめて、下へ押し下げ、胸から臍まで、ま二つに断つ。

咽喉笛を突くのは、婦女子の自害であり、武士は、これを取らぬのである。

しかし、時代は下って、このような、介錯人なしの切腹をした武士は、例がなくなっている。

体力の衰えた老人に、はたして、作法通りの切腹が為せるものかどうか。忠邦は、それを心配してやった。

「ごめん！」

外記は、短刀を脇腹へ、突き立てようとした。

刹那——。

「うっ！」

外記は、呻いて、短刀を握った右手を膝へ落した。

一個の石が、忠邦の後方から、飛来して、手くびに当ったのである。

「その切腹、相成らぬ！」

大喝する者を、忠邦は、振りかえった。

お目付佐野勘十郎が、そこに出現していた。

忠邦が、何か云おうとするより早く、佐野勘十郎は、馳せ寄りざま、外記の右手から短刀を奪い、

「謀叛人、神妙にせい！」

と、きめつけ、忠邦に向っては、

「ご老中のおん身、何事もなくて、重畳至極に存じます。あとのしまつは、それがしにおまかせあって、ご帰邸の程を——」

と、云った。

たしかに、これは謀叛心ある振舞い、と咎めることのできる罪であった。

事実は、そうでないことは、明白なのである。死なせてやるべきであったのだ。たとえお目付であっても、見て見ぬふりをすることはできた筈である。

とはいえ、佐野勘十郎の冷酷な処置を、忠邦は、武士のなさけを知らぬもの、と叱咤する立場にはいなかった。いや、佐野勘十郎は、それを承知しているからこそ、このような態度に出たのである。

いわば、これは、一介のお目付が、御三家にも頭を下げさせ諸大名を呼びすてる権威を持った老中に対する挑戦とも、受けとれる。

三

忠邦が、屋敷へもどって、平服に着かえて座に就いた時、武部仙十郎が入って来た。

「妙なことが起りました由——」

そう云って、仙十郎は、あるじの顔色を視た。

忠邦は、不快を抑えきれぬ眼眸（まなざし）を宙に置いて、しばらく無言でいた。

仙十郎は、待った。

忠邦は、ようやく、口をひらいた。

「お目付の佐野勘十郎は、よほど、西城府（家慶（いえよし））の信頼を得ているとみえる」

そう云った。

三年前、忠邦は、西の丸老中から、本丸老中に転じた。以来、西の丸のことには、殆ど目を向ける余裕がなかった。

そのあいだに、西の丸の状勢は、忠邦の知らぬうちに、大きな変化があったようである。

「爺さん――」

忠邦は、三四年前から、仙十郎を、そう呼ぶようになっていた。

「西条外記の伜（せがれ）は、たしか、変死いたしたのであったな？」

「二月に相成りまするか。馬責めに出て、神奈川の崖（がけ）から、墜落して相果てて居りまするな」

「うむ。伜に、子はなかったか？」

「なかったとき き及びます」

「では、屋敷には、いま、伜の嫁が、ただ一人で、留守をして居ることだな」

「御意――」

「西条の屋敷へ、足労してもらおうか。念のためだ」

忠邦は、命じた。

仙十郎は、主人が何を考えているか、すぐに、さとった。

「殿――。もはや、間に合わぬかも知れませぬ」

「であろうが、すてておくわけにも参るまい」

「では――」

仙十郎が、腰を上げかけると、忠邦は、ふと、思い出したように、

「爺さん、こういう場合、眠狂四郎という男の使いかたがあろう」

と、云った。

仙十郎は、にやりとして、

「すでに、狂四郎めは、西城府様より被害を蒙った家と、かかわりを持ち……首を突っ込んで居りまするな。手前の許に、この疑惑を持ち込みましたゆえ、他に被害を蒙った旗本八軒を、教えておきました」

「手まわしがよいな。すると、狂四郎は、もう西条の屋敷ものぞいて居るかも知れぬの」

「それが……、狂四郎め、不覚をとって、手負うて臥牀している由、立川談亭と申す講釈師より報せて参って居りますれば……」

「あの男が、手負うたか」

「佐野勘十郎の使うているのは、なかなかの手練者ぞろいと存じまする。……では、ちょっと、西条家を、のぞいて参ることに――」

仙十郎は、出て行った。

一人になると、忠邦は、急に、眉間に縦皺を寄せ、暗い色を口辺に刷いた。

――どうして、西の丸が、突如として、人格が一変されたのか？

忠邦にとって、この半年間の家慶の行状は、全く不可解であった。狂気沙汰――そう云っても

よかった。旗本の妻を犯すという乱行が、つづいているのであった。諫めた近習を、三人も、手討にしている。
この狂気沙汰で、最も当惑しているのは、この越前守忠邦といってもよかった。
忠邦は、次代を継ぐ家慶が、後楯になってくれる、という安心感があればこそ、史上にも残るほどの幕政改革をやってのけよう、とほぞをかためているのであった。
その家慶が、乱心して、人望を失ったとしたら、どうなるか？
改革はおろか、忠邦自身の身もあぶなくなることは、目に見えて居る。
——いったい、なにが原因なのか？　ひそんでいた悪い性情が、おもてへ出たというのか？
忠邦は、嘆息した。

四

武部仙十郎は、西条外記邸の玄関に立って、案内を乞い、あらわれた用人の顔を一瞥して、
——手おくれであったな。
と、合点した。
用人の顔は、蒼ざめ、眼球が血走っていたのである。
「修理殿のご妻女は、もはや、ご自害なされたかな？」
修理というのは、馬責めに出て、神奈川の崖から墜落死した外記の嫡男であった。
「は、はい」
用人は、両手をつかえて、平伏した。
「では、弔問ということにいたして……、上らせて頂く」

仙十郎は、草履を脱いだ。
修理の妻の遺骸は、仏間に安置されてあった。
咽喉を突いて果てたとみえて、頸に巻いた晒に、血汐が滲んでいた。
――舅と時刻を合わせて、覚悟の自害をしたものであろう。
仙十郎は、念のために、用人に、その時刻を訊ねた。
「七つをすこし過ぎた頃あいでございました」
外記が、下乗門前で、忠邦の前に土下座した時刻である。
仙十郎は、枕辺で、合掌してから、白布をあげてみた。
死顔は、美しかった。
美貌をうたわれた女性に相違ない。
「花を吹き、柳を劈く、か」
仙十郎が、呟いた時、人の気配が、うしろに近づいた。
「ご老中の側用人殿が、はやばやと弔問か」
そういう人物を仰いで、
――これが、佐野勘十郎か。
と、仙十郎は、直感した。
「花の散るのを止めようとして参って、弔問になったのを、愁嘆しているところでござる」
仙十郎は、こたえた。
「まことに、気の毒――」
佐野勘十郎は、心のこもらぬ一言を口にして、頤の無精髭を、撫でた。

「本丸老中の側用人として、おうかがいつかまつる。……この家の当主の方の致し様は、なんとされますかな？」
仙十郎は、訊ねた。
「西条家は、三河譜代の名門。謀叛人として、処罰するのは、あまりに気の毒ゆえ、愧死してもらうことに相成る」
「愧死？」
「左様――」
勘十郎は、冷然とうなずいた。
――愧死だと！　なんということを！
仙十郎は、肚の底からの憤怒をおぼえた。
下乗門で、切腹すれば、表沙汰になるので、捕えて、何処かにとじこめておいて、毒殺し、これを病死として片づける、というのである。
処置としては、いかにも、当然のように思われる。
実際は、そうではないのだ。すでに、その嫡男は死に、嫡男に子供はいないのである。西条家は、外記が切腹しようが病死しようが、改易絶滅することは、きまっているのである。とすれば、外記に、せめて死花を咲かせてやるべきであったのだ。
しかし、もはや、云って詮方ないことであった。
仙十郎は、新仏に一礼すると、
「御主人が蓮の台の半座をあけて、待たれているほどに、お往きなされ。おそらく、御主人は、故意に、神奈川の断崖から突き落されたのであろうゆえ、その無念さが、そもじが生贄となった

あわれを許すことに相成ろう。……南無阿弥陀仏――」
そう云いのこして、やおら立ち上った。
その独語は、佐野勘十郎に対して、はっきりと、敵にまわったことを示す宣言であった。

日本橋焼き

一

江戸の夏の賑いは、午後に睡って、夕食後、行水の汗を流してから、はじまるのであった。往還には、子供たちが群れて、じゃん拳、いも虫ころころ、蓮華の花が開いた、子捕ろ、などの遊びに夢中になっている。

大人たちは、板戸をおろした店の前に打水して、涼台をならべ、あるじ、女房、使傭人がそれぞれの腰掛け場所をきめて、団扇をつかい乍ら、とりとめない四方山話に耽っている。

按摩の笛の音は、此処彼処に、絶え間はないし、物売りの声も、切れ目がなかった。枝豆、白玉、すいとん、カリン糖など。

髪結床や麦湯店の前の涼台は、八さん熊さんがへぼ将棋に余念がない。

「へへ、どうだ、この角めの鼻っさきへ、香車だ」

「やりくり算段、火の車、角なり果つるも身の因果――とは、どっこい、ここに、桂馬が七三に構えてら。そっちは、頓馬」

「と思うのが、桂馬のまの字の、ぬけたところよ。ちゃあんと、ここに、飛車がひかえてら。こ

れを高飛車（たかとびしゃ）——といってな、桂馬を頂戴（ちょうだい）して、はい・じゃんぷ、というんだ。えげれす語だぞ、学があらア、学が——」

「こん畜生、押しまくって来やアがる」

「あたりめえよ、こっちは、鮨屋（すしや）だ。押すのは商売だ。押しがつよいと云われるとても、主（ぬし）と添うなら一夜（ひとよ）鮨、と来た」

そこへ——。

黒の着流しの浪人姿が、音もなくすっと、寄ったので、鮨屋の職人は、ぎょっとなって、ふり仰いだ。

「ああ、びっくりした。おどかさねえでおくんなさいよ、旦那——」

たしかに、むぎゆ、と仮名書きした横行燈（あんどん）のあかりを背に受けたその姿は、幽鬼にも似た凄味（すごみ）をおびていた。

「金八が、どこにいるか、知らぬか？」

眠狂四郎は、金八が、近頃は、この麦湯店でとぐろを巻いている、ときいていたのである。

「金八って、これの——」

鮨屋の職人は、将棋の対手（あいて）に、人差指を曲げてみせた。

「ああ——」

対手は、うなずき、

「昨日までは、毎晩ここで、通りがかりの女子をからかって居りやしたが……、おい、だれか、金八の居どころを、知らねえか？」

と、店内へ声をかけた。

すると、紅染の襷をかけた小女をからかい乍らくず湯をすすっていた客が、

「金八なら、聖天横丁の植政の家にいらア。昨夜、日本橋の橋桁から、首を縊ろうとした植政の伜を、たすけた、と云って、つれ戻って来たところが、どうしても三途の川を渡るって、肯かねえものだから、金八は、まだ、植政んところで、睨めっくらしている筈だ」

と、告げた。

鮨屋の職人が、

「どうして、植政の伜は、首を縊ろうとしたんだ？」

と、訊ねた。

「親爺ゆずりのいい腕を持っていやがるし、床下には、二十両も小判を容れた瓶を埋めている、というもっぱらの噂だし……、てめえの生命を縮める理由はねえやな」

「先月、植政が、どこへ行っちまったか、行方知れずになってから、伜の野郎、しょんぼりしていやがった。七光りが消えたんで、途方にくれたんだろう。無理もねえやな、まだ十七だア」

「十七の時は、おれは、女郎買いをしていたぞ。雷親爺め、がみがみうるせえから、早くくたばりやがれ、と八幡様に願かけしたくれえだ。植政の伜は、よほど、腰抜け野郎だのう」

「人のことなんざ、どうでもいいやな。もう一番、来い」

「よおし、負けたら、おれの嬶を一晩、貸してやらあ」

「てめえの女房は、女郎上りだからのう。誰に抱かりょと笑うてみせる、そこが勤めの廓の花、と来らあ。気安く貸せらあ。しかし、てめえ、この前も、そう云やがって、待ち呆けをくわせやがったぞ。おや、浪人者は、どうしたい？」

「行っちまったあ。墓場から匍い出して来たような、うす気味わるい浪人者だったのう。盆が近

づくと、迎え火も待たねえで、怪しげなのが、うろつかあ」

二

狂四郎は、今戸橋を渡って、右へ折れ、山谷堀沿いに、ゆっくり歩いて行った。

俗に「砂利」と称ばれる、江戸で最下等の賤民が住んでいる山川町にさしかかった時であった。

広い空地で、多勢の孩子たちが、蝟集して、がやがやとさわぎたてていたが、突然、その闇がはじけて、無数の鼠花火が、噴いた。

わあっ、とはやしたてる喚声の中で、鼠花火は、八方へ数間も、飛び散った。つづいて、いたるところで、三剣尺が、水車のごとく、目まぐるしく、美しく、廻りはじめた。

鼠花火も三剣尺も、貧窮の裏店で、買ってやれる煙火ではなかった。

孩子たちに、それを贈った奇特者が、そこにいたのである。

「ははは……、今夜は、これでおしまいだぞ」

大声で云って、空地から出て来ようとする者へ、狂四郎は、目をとめた。

見おぼえのある男――というよりも、いずれは出会って、雌雄を決しなければならぬ強敵であった。

明日心剣という仮名を使う、一度眺めたら忘れられぬ面貌が、花火のあかりに、その高い鼻梁を、浮きあげたのである。

「小父ちゃん、明日も、花火を持って来てくれるかい？」

「たのまあ、小父ちゃん」

「げんまんしてくれえ」

口々に叫びたてる洟ったれ餓鬼にとりまかれて、歩き出し乍ら、
「この江戸には、貧しい子供が多すぎる。ひとまわりしたら、夏はおわりになるでのう」
明日心剣は、云った。
――やはり、只者ではなかったな。
狂四郎は、その場に足を止めて、心剣が、道へ出て来るのを待った。
心剣の方は、なにげなく視線を、こちらに向けて、佇立するのが誰人か、みとめたが、べつにおどろかず、知己でも待たせていたように、すたすたと近づいて来ると、
「やあ――」
と、隔意のない声を、送って来た。
「お主は、子供好きか？」
「女色は無縁、酒は一滴もたしなまず、鳥を啼かせたり盆栽をいじる趣味もない。となると、金の使途に苦しむ次第でござる」
「お目付佐野勘十郎が、お主に呉れる手当は、すくなない、ということになるのか」
「ははは……、まさに、その通りでござる。ところで、貴公は、もう出歩いてもさしつかえのないまでに、恢復されて居られるのか？」
「この場で、お主に討手になられても、べつに、避けはせぬ」
「童心を愉しませたあとで、白刃を抜く気にはなれぬとお思い下され。それに、貴公の迅業に対する工夫も、まだ、成っては居り申さぬ」
その言葉をきくと、狂四郎は、一揖して歩き出そうとした。
「あいや――ちょっと」

心剣は、呼びとめた。
「眠殿は、佐野勘十郎という人物を、ご存じでござろうか」
「まだ、会ったこともない」
「左様か。ご存じないがゆえに、平気で楯突かれるのだな。……あのお目付を、敵にまわすのは、どう考えても、貴公の損でござる」
「佐野勘十郎が、どういう人物か、ほぼ想像はつけている。げんに、お主のような一風変った剣客を、やとうことができる器量は、相当のものだ、と思える。……しかし、行きがかりに、敵にまわったからには、あとへは引かぬつもりだ」
「義をみてせざれば、という次第でござるか？」
「義？……ただ、なんとなく乗りかかった舟に、乗ってみるだけのこと、という以外の気持はない」
「ふむ！……惜しい！」
心剣は、影になって遠ざかる狂四郎を見送って、心からそう思う声音を、もらした。
狂四郎が、やがて、尋ね当てたその家は、妾宅かと見まがうほど、黒板塀に、見越しの松を添えたしゃれたたたずまいであった。
狂四郎は、わざと、玄関の格子へ手をかけず、小さな庭へ、足を踏み込ませた。
——涼台の男たちが云っていたように、かなり裕福と思われる。行方知れずになった親爺というのは、植木屋としては、江戸で指折りの、名人と称せられた職人であろう。
そう思いつつ、杉松の青葉をふすべている縁側へ、近づいた。
「どうした、金八？」

狂四郎は、蚊遣(かやり)の煙越しに、声をかけた。

寐そべっていた巾着切(きんちゃくきり)は、はじかれたように、はね起きた。

「冗談じゃねえ！　たまげさせねえでおくんなさい。……なんでまた、どうして、ここへ――？」

「お前にたのまれてもらいたい仕事があって、さがして来たのだが……」

狂四郎は、縁側へ上って、金八のむこうに、膝をそろえている若者へ、眼眸(まなざし)を当てた。

十七歳といっていたが、見たところ、まだ十五ぐらいの少年のようであった。

思いつめた気色を、金八に救われた時から、ずっと持ちつづけている様子を示していた。

「この若者が、日本橋から、吊り下ろうとした、ときいたが……」

「吊り下っていやがったのは、こいつじゃなくて、藁(わら)人形だったんでさ」

「藁人形？」

「そうなんでさ。この野郎、細い鎖で、藁人形の頸をくくって、橋桁へ通して、舟の上から、ひっぱって、宙吊りにしてやがったんでさ」

「そういう舟遊びもあるのか」

「どっこい、遊びなんてえのんきな振舞いじゃありませんや。……この野郎、むかしの振袖火事みてえに、江戸中を焼きはらっちまおうと、大それたことを企てていたんでさ。気ちげえの火遊びなら、まだ、許せやすがね、こいつ、根っから正気で、やっつけようとしやがったんだから、しまつがわるいんでさ」

三

昨夜、更けてから吹きまくった風は、夜あかし屋台もひっくりかえしそうな烈しさであった。

金八が、十軒店の問屋場の賭場で、無一文になって、出て来たのは、もう子刻（午前零時）を過ぎた頃合であった。

人影の絶えた日本橋を渡りかかって、ふと、焦臭いのに気がついた。

どうも、橋の下らしいので、欄干からのり出してみると、ぼうっと火の色が闇に滲み、水面にうつってせわしくゆれていた。

そこは、巾着切の身軽さで、欄干をのり越えてみると――。

なんとも奇妙な光景が、そこにあった。

一人の男が、小舟の上から、人形らしいものを燃やし乍ら、細鎖をひっぱって、橋桁へ吊りあげていたのである。

烈風を利用して、あろうことか、日本橋を焼こうとしている模様であった。

「野郎っ！　何をしやがる！」

金八は、夢中で、小舟へ跳び降りた。

とりおさえてみれば、まだ十五六にしか見えぬ――この植木屋政兵衛の伜政吉だったのである。

「その人形ってえのをいまごらんに入れやす」

金八は、次の間から、携げて来た。

「これなんでさ」

三尺あまりの、なかば焼けた藁人形であったが、松脂を塗りつけ、油もしみ込ませてあった。

それよりも、狂四郎の眉宇をひそめさせたのは、人形の胸には、五寸釘が打ち込んであったことである。

「呪(のろ)い人形か。これで、日本橋を焼いて、江戸中を火の海にしようとした、というわけか」
「大番屋へ突き出して、拷問をかけさせりゃ、泥を吐くんでしょうがね、なにしろ、あっしゃ、岡っ引と股引(ももひき)は、性に合わねえんで、こうして、こいつの家へつれもどって、誰をうらんで、日本橋を焼こうとしやがったんだか、白状させようと、昨夜から、こうして、ねばっている次第なんで――」
金八が、いまいましげに告げるのをきき乍ら、狂四郎は、藁人形の首を、すっと、ひき抜いた。
首には胴を刺す棒がつけられていた。
その棒に、下手な筆蹟(ひっせき)で、次のように記されているのを、狂四郎は、読んだ。
西の丸大などん
西の丸大納言、すなわち、将軍家世子家慶のことである。
この若い植木職は、次代の将軍家に呪いをかけたのである。
「お前は、公方(くぼう)の世嗣(よつ)ぎに、なんの怨みがあるのだ？」
狂四郎は、政吉を見据えて、問うた。
金八が、びっくりして、
「な、なんですって？ こいつが、公方様のお世嗣ぎをうらんで、火つけをしようとしやがったって?!」
「そういうことだな」
「あきれけえった大たわけだあ、こん畜生っ！」
金八は、とびかかって、政吉の胸ぐらをつかんだ。
「やいっ！ 人間、血迷いかたもいろいろあるが、てめえのような、破れかぶれの傘っ骨野郎は、

神武天皇以来、見たことも聞いたこともねえぞ。富士山を蟻がせせ突くようなまねをしやがって、いってえ、どういう料簡だ！　ぬかせっ！」

腹立ちまぎれに、頬桁へ一発くらわせた金八は、ふうっと溜息ついて、

「まったく、あきれけえった唐変木だ」

と、呟いた。

すると、狂四郎が、薄ら笑い乍ら、

「もしかすると、唐変木ではないかも知れぬぞ。お前が止めていなければ、いま頃は、あの烈風では、江戸の半ばが焼野原となり、もとより、江戸城本丸、西の丸も、烏有に帰して、この若者の恨みは、はらされていたかも知れぬ」

と、云った。

四

すると――。

いままで、うなだれていた政吉が、屹と、首を擡げて、

「左様でございます。この御仁が、よけいな邪魔立てをなされなければ、わ、わたしは、親爺の仇が討てたんだ！」

と、口走った。

「親爺の仇討だと？」

金八が、再び、胸ぐらをとった。

「てめえ、親爺の敵が、公方様のお世嗣ぎだ、とほざくのか？」

「西の丸の、御苑は、わたしの親爺が、二十年もかかって、お、おつくりしたのです」
「それが、どうした？」
「そ、それだのに、……西の丸様は――」
云いかけて、政吉は、双眼から、どっと泪をあふらせた。
声がつまり、烈しく、喘いだ。
狂四郎が、政吉の云おうとすることを、代って、口にしてやった。
「それほど、半生をついやしてご奉公した父親を、西の丸大納言が、手討ちにした、というのか？」
「そ、そうでございます！　その通りでございます！　わたしの親爺は、仏のような善い人間でございました。お手討ちになるような、わるいことなど、できる人間ではございませなんだ」
政吉は、哭きむせびつつ、血をしぼるように、云った。
「西の丸大納言に、お手討ちになった、と誰が報せてくれた？」
「親爺が親しくしていたお添番が、報せて下さいました」
添番というのは、江戸城大奥警備の小吏であり、禁苑づくりの植木職とは、当然長いあいだのつきあいとなっている。
「その添番は、どのような落度で、お前の父親がお手討ちになったか、教えてくれたか？」
「い、いいえ……。お城内のことは一切、口外できぬ誓紙をさし出している身であるゆえ……、ただ、気の毒であった、と申すよりほかはない、と――それだけで、親爺が、どんな罪を犯したか、どのようなところで、お手討ちになったのか……何も、教えて頂けなかったのでございます」
「もとより、死骸も還らなかったのだな？」

「はい」
狂四郎は、政吉が頷くのを見のこして、立ち上った。
「金八、参ろう」
「だって……、こいつは、まだ、火つけの覚悟を、すてちゃいませんぜ」
「政吉、そうか？」
「…………」
政吉は、狂四郎を仰いだ。その双眸は、一途に思いつめて、青い焔を燃やしていた。
狂四郎は、冷たく瞶めかえして、
「仇討は、この眠狂四郎にまかせてもらおう」
と、云った。
眠狂四郎という異名は、この若い植木職も知っていた。
「日本全土をさがしても、いざとなった時、将軍家を平然と斬れるのは、わたしのほかには居らぬ。……まかせるがよい」
「は、はい」
政吉は、両手を畳についた。
外へ出て、十歩ばかり歩いたところへ、金八が、あわてて追いかけて来た。
「いってえ、どういうんですかねえ、あれア――？」
「度胸は買える。そうではないか」
「そ、そりゃ、まアそうですが……、日本橋を焼いて、江戸中を火の海にしてやろうなんて、どうも、なんとも、空恐ろしい一念をこめやがったものじゃありませんか」

「一介の植木職人が、将軍家の世子に復讐するために、思いついた企てとしては、まず、あっぱれ、と云えよう」

「先生！　政吉の味方になったような口ぶりですぜ」

「そうかも知れぬ」

「冗談じゃありませんぜ。植政がお手討ちになったのは、なにか、とんでもねえへまをやらかしたに相違ねえんだ」

「そうでなく、理由もなく、斬られていたら、どうする？」

「どうするって、西の丸様ともあろうお方が、わけもなく、しがねえ植木屋を、ばっさり殺る道理がねえじゃありませんか」

「乱心していたとしたらどうする？」

「乱心？　へえ、そんな噂があるんですかい」

「噂にならぬように、せっせと、火をもみ消している人間がいるのだ。……西の丸が、乱心したかどうか、それを突きとめるために、おれが動く。その手下として、お前が要るのだ」

きっぱりと云う狂四郎の横顔を、街灯の仄あかりの中に、ちらと見やった金八は、

——こんな烈しい気色を、つくりなすったのに、久しぶりにお目にかかったぜ。

と、からだがぞくぞくっとなった。

悪女代金

一

巾着切の金八が、眠狂四郎の命令を受けて、まず手はじめに忍び込んだのは、お先手鉄砲組頭・大久保兵庫の邸宅であった。

大久保兵庫は、伊豆の宇佐美村、上総の人見村、上野の宮内村・六千石村、下野の新田女塚村・篠塚村——合わせて六箇村・二千六百七石の知行を取る大身であった。

屋敷は、芝露月町にあり、邸内に、地方役所を置いていた。

こうした旗本大身のくらしぶりのあらましを述べておけば——。

家老あるいは側用人が、財政をつかさどり、渠ら自身がその年の田畑の様子を巡視に出向き、村々のもめごともまた、当地で裁いた。年貢は、正月十五日に、名主たちが、年頭の挨拶に出府して来た時に、現金で納めた。

いわば、邸内に地方役所を置いていることは、現代の中小企業に似ていた。

しかし、文政あらたまって天保に入ったこの時代では、三千石以内の旗本の窮迫は、見るも惨めなものになっていた。

金八が、忍び込んで、母屋の天井裏を、身を移して行き、やがて、とある部屋を覗きおろした時、恰度、当主大久保兵庫を上座に据えて、家老、用人、用人並の重立った面々が、鳩首して、窮状対策をねっている最中であった。

金八は、耳をすまして、ぬすみ聴いているうちに、

——へえ、あきれた。旗本が貧乏だってえことは、かねて、耳にしていたが、こんなにひでえものだとは知らなかったぜ。煤掃きや何のひとつも棄てられず、ってえやつだ。

と、闇の中で首を振った。

どうやら、大久保家では、愈々首がまわらなくなって、知行地六箇村に、賄金をせがんで、ことわられた模様であった。

どうせ、これまで、たびたび、年貢の先納金やら用金を、村々にせがんでいたに相違ない。仏の顔も三度で、六箇所の名主が連名で、このたびの無心を拒絶したばかりか、家計をたてなおして欲しいという具体案をつけて来たのである。

兵庫の前に、ひろげられている訴状が、それであった。

殿様御衣服料金二十両のところを十五両に
奥方様御衣服料金十五両のところを十両に
姫様御衣服料金七両のところを五両に

次いで、殿様お小遣二両を五分に、雑費一両を二分二朱に

などと箇条書きに、大幅な出費削減を求めていた。

「藪蛇であったのう、惣兵衛」

兵庫は、いささか中風の気らしく、多少もつれる声音で、家老に、云った。

「まことに——」

あまり有能でなさそうな家老は、嘆息するよりほかに、すべはなさそうであった。

「年間総出費を、二百両以内に抑えて欲しい、などとは、名主どもも、主家をなめすぎる」

用人が腹立たしげに、呟いた。といって、この用人も、一向に対策など、脳裡にうかんで来そうもない様子であった。
主人も家来も、馬痩せて毛長く、人貧にして智短し、といったていであった。
見下ろしている金八の方が、いらいらして来た。
――貧すりゃ鈍する、って、ざまアねえな。
「もう一度、無尽をいたしましては――？」
末座の用人並が、おそるおそる云った。
「その手には、もう百姓どもは乗って参らぬ。郷人足も出さぬほど、村々は結束して、反抗いたして居る」
家老が、投げ出すようにこたえた。
重苦しい沈黙が、来た。
「やむを得ぬ」
兵庫が、沈黙を破ると、
「奥に、もう一度、たのむことに、いたそう」
と、云った。
家老も用人も、はっとなって、主人の苦渋の表情を見まもった。
兵庫は、家臣たちの視線を、わずらわしげに、ふりはらうように、首を振ると、脇息に両手をついて、よろよろと立ち上った。足がかなり不自由のようであった。
「殿！　し、しかし、それは、あまりに、奥方様にとって、苛酷な致されかたでありますれば……」

「惣兵衛、奥にそれをたのむわしの方が、奥よりも、もっと惨めなのだぞ」

兵庫は、吐きすてた。

二

兵庫は、片足をひきずり乍ら、奥へ入ると、境に出迎えた女中の肩をかりて、

「奥の居間へ参る」

と、告げた。

その部屋の前に来ると、兵庫の鼻孔に、えもいわれぬ香が匂うて来た。

兵庫は、障子を開けると、

「麝香ではないか」

その贅沢を咎めるとがった声音をあげた。

眩しいばかり美しい女性が、そこに坐っていた。

須賀というその妻は、兵庫とは三十も年齢がちがっていた。もとより後妻であった。伊豆の宇佐美村の郷士の娘で、家老が巡視の際、見かけて、その父親に談判して、江戸へつれて来て、鰥ぐらしの主人にあてがったのである。

須賀は、屋敷へ容れられた時十八歳であったが、日一日とみがきがかかり、二十五歳の今日、旗本の妻では随一の美しさ、という評判をとっていた。

良人の兵庫が、三年前、倒れて、右半身にしびれがかかったのは、皮肉といえた。

須賀は、麝香を焚いているのを咎められると、冷やかな笑みを、切長の双眸へうかべた。

「これは、西の丸様より下賜された品でございます」

それをきくと、兵庫の口辺が、歪んだ。
須賀は、いっそ、小気味よさそうに、そのみにくい表情を、見まもっている。
いつの間にか、その部屋の天井裏に移っていた金八は、
——おかんばせも、ずば抜けていやがるが、根性もしたたかな悪らしいぜ。
と、胸の裡で、呟いた。
兵庫が、座に就いてから、容易に口をきこうとしないのを、須賀は、苛立たしげに、
「なんぞ、ご用でございますか？」
と、促した。
「こ、これじゃ」
兵庫は、六箇村名主連名の、経費節約の訴状を、須賀の膝の前に、投げた。
把りあげて、一読した須賀は、自分の衣服料が三分の二に削られているのを知って、
「たった十両で……、ほほほほ——いったい、どんな身なりで、来年をすごせというのであろう」
と、さもおかしげに笑い声をたてた。
次の瞬間、須賀は、眦をつりあげて、老いた良人を、睨んだ。
「わたくしは、存じて居りますよ。あのことのあと、お目付より、金子百両が、とどいたことを——」
「う、うむ」
兵庫の面上に、狼狽の色が滲んだ。
「あの百両は、どうなされましたぞ？」

「あ、あれは……、あちらこちらの借財の利払いにあてて、もはや、一文も、残っては居らぬ」
「わたくしが頂いた金子を、利払いにあてるなど——。わたくしが黙っているのをよいことにして、勝手なまねをなさいます」
さげすみをこめた、なんとも冷たい言葉が、天井裏の金八の耳にまで、我慢ならないものにひびいた。
しかし、兵庫は、その言葉に対して、
「す、すまぬ」
と、詫びた。
——やれやれ。
金八は、うんざりした。
「それで……、わたくしに、なんのご相談でございます？　用向きがなければ、ここへは、おみえにはならぬ筈——」
「う、うむ」
兵庫は、ためらっていたが、ついに、思いきって、
「たのむ、も、もう一度、西の丸に……」
「貴方様は！」
須賀は、一瞬、唖然となって、まじまじと、良人のみにくく歪んだ顔を眺めたが、不意に、はじけたような高い笑い声を、ほとばしらせた。
しかし、兵庫の方は、その笑い声にかえって、ほっとした様子で、
「たのむ！　こ、この急場をしのぐためには、どうしても、百両の調達を、せねばならぬ」

と、云った。

須賀の表情は、再び冷たいものに一変した。

「なんという見下げはてた御仁なのか！　いかに自身が、男としての役に立たぬ身になっているとはいえ、妻のからだを、売って、家計をおぎなおうとするとは――」

「す、すまぬ」

「詫びてすむことと、すまぬことがございましょう。貴方様は、この若い美しい妻が、他人の男の腕に――たとえ、それが、次代の天下人であるにもせよ――抱かれるのが、口惜しゅうはありませぬのか？……いえ、胸の奥底では、嫉妬の炎が、狂わんばかりに、燃えていなさるのじゃ。そうでありましょう？……え、このからだが、西の丸様に……、さんざ、なぶられることを、想像なさるがよい」

須賀は、双手をうしろに突くと、片膝を立てて、放俗な姿態をつくった。

兵庫は、呻いた。

須賀は、わざと、腰をひと捻りして、立膝から、衣裳をすべり落した。旗本の妻にあるまじく、下肢にまといつけていたのは、緋縮緬の二布であった。

「申しましょうか。西の丸様は、まずはじめに、わたくしの足もとに、蹲って、この足の指が美しい、いい、とお口の中に入れて、痴愚のように、ひとしきり、おしゃぶり遊ばしました。そうして、くるぶしから脛へ、脛から内腿へと、だんだんに、この二布を捲りあげつつ、嘗めまわされて――」

「止せっ！　止さぬかっ！」

兵庫が、絶叫した。

須賀は、冷然として、語気鋭く、
「口惜しゅうございましょう。良人じゃもの、口惜しくなければ、嘘じゃや。……口惜しければ、売る前に、ご自分で、そうなされては、如何でありましょう」
「………」
兵庫は、無言で、喘いだ。
「さ、おやりなされ。遠慮は要りませぬ。おのれの妻のからだではありませぬか」
促しつつ、須賀は、徐々に、下肢をひらいてみせた。二布がすべり落ちた。隠微な黒い翳が、奥を包んでいた。
――やるか？　やられねえか？
天井裏から、固唾をのんで凝視する金八は、遽かに、心臓が早鳴って来た。

三

眠狂四郎は、柳橋の船宿のひとつ「ふくべや」の二階で、床縁を枕にして、仰臥していた。
陽が落ちてからかなり過ぎて居り、座敷は、宵闇になじんでいた。
出窓から入る川風が、涼船を出す河岸の騒がしい音を、はこんで来ていた。江戸っ子の短気を誇りにする船頭たちの声が、いちだんと高い。
せわしげに、使傭人たちに指図しておいて、とんとんと階段をのぼって来るおかみの跫音をきき乍ら、狂四郎は、
――いま頃、金八は、大久保兵庫邸の天井裏で、なにを目撃しているのか？
と、考えていた。

「あら——灯も入れていないで、あのおかめ、どこであぶらを売っているんだろう。……旦那、おっぽらかして、ごめんなさい」

おかみは、いそいで、行燈（あんどん）のそばに寄って、燧石（ひうちいし）をきろうとした。

「灯はまだ、点（つ）けずともよい」

狂四郎は、云った。

「どうしてです？」

「おれの刀に、螢（ほたる）がとまっている」

「え？」

おかみは、視線を床の間へ向けてみて、そこにたてかけた無想正宗の鍔（つば）で、青い光を明滅させているのをみとめて、

「あら、ほんに——きれい！」

「おれの刀をおそれぬやつだ。しばらく、光らせておこう」

おかみは、そばへ来て、団扇（うちわ）を把ると、狂四郎へ風を送り乍ら、

「にくいねえ。お前様というおひとは、つめたいのだか、あたたかいのだか、とらまえようがありやしない」

三年前まで左褄（ひだりづま）をとっていたこのおかみと、狂四郎は、たった一度だけ、牀（とこ）をひとつにしたことがある。

「そっちの螢には、情けをかけても、ここにもう一人いる螢の方は、忘れているんですか。こっちの方も、もう一度——昼は世間をはばかる螢、夜半の逢瀬（おうせ）をたのしみに、と待っているんですよ」

いきなり、掩いかぶさって来た。

狂四郎は、女が口を吸うままにまかせて、動かなかった。

そこへ――。

「旦那は、ここかい、二階かい」

金八が、声とともに、階段を駆けあがって来た。

おかみは、すばやく、はなれて、

「金八、しずかに！」

と、叱った。

「おや、まっくら、くらの暗闇で――へへ、もとの闇路に心はもどる首尾は短き川びらき、と来たか」

「ちがうんだ。螢がとんで来て、そのおそろしい血刀をきよめているのさ」

「おっ、なあるほど――こいつは、しゃれてらア」

狂四郎は、おかみが階下へ去るのを待って、起き上った。

「どうした？」

「どうしたも、こうしたも、びっくり――じゃねえ、ひっくり、でさ。あとへ、けえる、がついて、げろが出るような屋敷ですぜ、あの大久保兵庫てえ旗本は――」

金八は、目撃して来た一部始終を、告げた。

相槌も打たずに、黙ってききとった狂四郎は、無想正宗の鍔から飛び立って、ふわふわと出窓から出て行く螢を見送った。

「で、いよいよ、先生の出番てえことになりやすが……、どう料理なさるんで？」

「どうするかな」
狂四郎の視線は、なお、出窓の外へ送られていた。

四

「相変らず、蒸すのう」
お目付佐野勘十郎は、明日心剣が待つ書院へ入って来るなり、そう云い、座に就くと、すぐに、
「眠狂四郎を討ち損じたらしいの」
と、じろりと心剣を見据えた。
「身共が、見事に敗れました」
「敗れたと申すが、ピンピンいたして居るではないか」
「斬られたのは、身共の差料でございました」
「それで――？」
「あの男の迅業に対しては、工夫を必要といたします。その工夫に、しばらくの日数を頂戴いたしとう存じます」
「こちらは、急いで居る」
「お急ぎならば、他の御仁を討手にさし向けられますよう――」
「お主が斬れぬものを、どうして、他の連中が斬れるか。まアよい。待とう。但し、条件つきだ。長岡釆女正の妻を、片づけてもらおう。これは、今明日うちにも、やってもらおう」
「眠狂四郎を討ち果した上で、妻女を拉致して参る、というお約束でありました」
「討ち果せなんだではないか」

「工夫の上、討ち果します」
「待って居れぬ」
「身共は、眠狂四郎に対し、決闘して勝った場合、妻女を申し受ける、と告げて居ります。これを違約するわけには参りませぬ」
「わしとの約束を破っても、狂四郎との約束は守る、と申すのか」
勘十郎の顔は、しかし、すこしも慍ってはいなかった。肚裡の感情は、一切おもてにあらわさぬ人物であった。
「眠狂四郎を討ち果すまでは、妻女を拉致する儀も、お待ち頂かねばなりませぬ」
「筋を通している、というわけかの。わしに、一歩ゆずらせるのは、お主だけだ。やむを得まい。では、一歩ゆずったところで、あらためて条件をつけるぞ」
「おうかがいつかまつる」
「いかなる事態にいたっても、眠狂四郎側に寝返る、ということはせぬ、と誓ってもらおう」
勘十郎は、この言葉を口にする時、はじめて威儀を示した。
「お誓い申し上げます」
心剣は、こたえた。
「もし、裏切った場合は——念のために、申しておく——お主の伜の一命は、喪われる」
そう云われて、心剣の顔面に、烈しい動揺の色が刷かれた。
自分に息子があることを、このお目付は、知っていたのだ。ひたかくしにしていた秘密であった。この事実を知っているのは、この世に、ほんの数人だけであった。そして、その人々は、かたく口をとざして、他人に語っていない筈であった。

――どうして、このお目付が、知ったのか？

心剣は、肚の底まで蒼ざめた。

勘十郎は、その様子を眺めて、薄ら笑った。

「わしは、敵にまわった者に対しては、みじんの容赦もせぬ人間だ。……これだけは、おぼえておくがよい」

云いのこして、さっさと立ち上った。

大久保兵庫邸から、網代駕籠が、到着して、式台へ据えられたのは、それから半刻ばかり後であった。

勘十郎は、用人から、それを取次がれると、

「大久保家は、三河譜代だが、やむを得ぬの、当代で消え去ることになる」

と、云った。

「と仰せられますと？」

用人は、怪訝な面持で、冷酷な主人を見やった。

「いかに台所が火の車だからと申して、百両欲しさに、女房を売るしまつでは、もはや旗本の体面は保てぬ。……さて、これから、女衒の真似をいたさねばならぬ。尤も、西城府様は、大久保の女房なら、大よろこびで、お買い上げになられよう。……登城の支度――」

やがて、佐野勘十郎は、裃姿になって、玄関へ現われた。

そこへ据えられた網代駕籠に、

「家の窮状を救うために、わが身を生贄にするとは、当代の節婦と申せる」

と、中へ云いかけた。

すると、これに応えるように、洩れ出たのは、異様な呻き声であった。

「……？」

勘十郎は、眉宇をひそめた。

大久保家から、この駕籠をはこんで来た家来たちは、一人のこらず、ひきあげてしまっていた。

ここからは、お目付の配下たちが、江戸城西の丸へ、はこんでゆくことになっていた。

勘十郎は、駕籠の戸を、ひきあけた。

「これは！」

勘十郎のこめかみに、青い筋が浮いた。

どこで、どう捕えられて、そうされたのか――大久保兵庫の妻須賀は、一糸まとわぬ素裸にひき剝かれて、猿ぐつわをかまされ、高手小手に縛りあげられていたのである。

勘十郎の視線をあびて、須賀は、はずかしさとくやしさで、裸身をねじった。

すると、その背中には、次の文句が、墨くろぐろと記されていた。

『この悪女の代金、せいぜい一両が相場に御座候　眠狂四郎』

魂棚

一

江戸に、盂蘭盆が来ていた。

盂蘭盆は、正月とともに、当時の人々が最も心をつくす行事であった。

武家屋敷から九尺二間の裏店まで、魂棚をつくって、先祖累代の精霊をはじめ、有縁の霊はなおさら、無縁の族にいたるまで、それに迎えて、供養をいとなんだ。

盂蘭盆が近づくと、市中には、魂棚の材料である間瀬垣（杉の青葉を竹に編みつけて垣のようにしたもの）や、菰や、篠竹を売りあるく呼び声が、江戸の風物になった。

辻々には、魂祭のための市が立ち、燈籠、盆提灯、線香、土器、苧殻、粟穂、赤茄子、白茄子、紅の花、榧の実、青柿、青栗、萩、蓮の葉、蓮花、鶏頭、瓢箪などが、とぶように売れた。

また、数珠造りの仏師、仏壇の漆器類をあきなう店は、この数日が、かき入れの大繁昌であった。

幕府譜代の老中・若年寄はじめ諸侯は、盂蘭盆の前日には、奉書張りの見事な切子燈籠を、上野東叡山と芝増上寺の両廟へ献じ、また他の大名や旗本は、おのおのの菩提所へ、盆提灯を奉ずるのをしきたりとした。美しい切子燈籠や提灯を、中間に持たせて奉納に行く麻裃の武士の往来も、また、江戸の風物のひとつであった。

川の畔には、大きな構えの魂棚が設けられて、有縁無縁の位牌をならべ、水瓜や桃など水菓子の、精進の供饌がされて、僧侶が木魚を搏ちつつ勤める誦経の声が、川面を流れたし、寺院では、山門前に、おそろしく高い丸太を立てて、頂上へ杉の青葉を束ねて、旗をたらし、燈籠をつりあげた。

盆中、この燈籠に、毎夜、灯がともされたが、いかにも、精霊が、墓地から出て来るのを迎えるにふさわしい陰気な眺めであった。

十三日の日暮になると、大名旗本大身をのぞくすべての家で、門口で、霊魂を迎える火を焚いた。

武家では、門をひらき、主人はじめ家臣らが麻裃で、玄関に粛然と列座したし、町家でも、番頭手代小僧にいたるまで、のこらず店に居並んで、あたかも、生きた人の来訪を待つように、振舞った。

苧殻を積んだのへ、火が移されるや、鉦を打ちならし、称名をとなえ……江戸は、ひととき、煙火と合唱の世界になった。

往還は、鉦とか木魚を鳴らして念仏を唱える布施僧や、施物を貰いに現われた乞食たちで、賑わった。

こうした行事で、江戸は、季節を区切ったのである。

押上村の古刹竜勝寺は、檀家もない貧乏寺であったが、それでも、奇特な村人たちが、山門前には、高燈籠をかかげてくれたし、無縁仏のならんだ墓地も、きれいに掃ききよめてくれた。

それというのも、住職空然は、盆が近づくと、提灯問屋から鬚須提灯を運ばせて、これに美しい花鳥風月を描く余技をふるったり、鈴虫とか轡虫とかこおろぎとか、虫を捕えて、虫売りに売って、若干の金子を得ると、これで、村の子供たちに、菓子や花火をくばってやるならわしを、ここ数年つづけていたからである。

陽が落ちて、ほどなく――。

庫裡に身を寄せている長岡釆女正の妻志津は、本堂からひびいて来る空然の誦経の声を、遠いものにきいているうちに、

――そうだ。良人の霊を、供養して頂こう。

と、思いついた。

本堂に、そっとあがってみると、百基以上の位牌をならべた須弥壇に向って、空然は、朗々と

誦経をつづけていた。
　これらの位牌は、いずれも、供養してくれる肉親縁者を持たぬ精霊たちであった。
　志津は、空然の背後に坐って、誦経が一段落するまで、待った。
　と――。
　志津は、恰度(ちょうど)正面まん中に据えられた真新しい白木の位牌に、目をとめた。
　まばたく蠟燭(ろうそく)のあかりの中に、
「依眠狂四郎被斬殺諸精霊位」
　そう読めた。
　空然が、念仏を唱えおわって、頭をまわした時、志津は、われを忘れたような空疎な表情で、その位牌を、じっと瞶(みつ)めていた。
　空然の視線を受けて、はっと自分をとりもどした志津は、
「そのお位牌は、眠様のご依頼によって、おつくりなさいましたので？」
と、訊(たず)ねた。
「いや、拙僧が、勝手につくりましたのじゃ。厄介なことに、毎年、新しいのを、つくらねばなりませんな」
「……？」
「あの御仁は、毎年、新仏をつくりなさるので、去年の位牌では間に合わぬのです。……今年のこの位牌には、貴女の御主人の霊も加えられています」
　志津は、黙って俯向(うつむ)いた。
「さて、拙僧は、これから、江戸の市中へ、布施もらいに参ります。なにしろ、今宵(こよい)は、坊主と

乞食のかき入れでしてな。托鉢雲水としては、自分の寺の無縁仏ばかりを供養していては、大損をする」

笑って、空然は、立ち上ると、

「盂蘭盆などという行事は、生きている人間たちがやがて自分に吹いて来る無常の風をおそれて、やっていることで、実は、精霊たちは、つらい娑婆より気晴らしの浄土で、のんびり寝そべってござるのかも知れませんわい」

と、云いのこした。

二

志津は、空然が出て行っても、なおしばらく、そこに坐っていた。

須弥壇にならんだ百基あまりの位牌は、ことごとく、不幸な最期を遂げた人たちに相違なかった。

そうした無縁仏たちの前に坐っていることに、志津は、なんとはない、やすらぎに似た気分をおぼえて、動けなかったのである。

突然――。

かたっ、と音がした。

はっと顔を擡げた志津は、愕然と息をのんだ。

正面の真新しい白木の位牌が、壇から落ちていた。

にわかに風が吹きつけて来たわけでもなく、鼠が走った気配もなかった。にも拘らず、眠狂四郎に殺された諸精霊の位牌だけが、不意に、畳の上へ、落ちたのである。他の位牌は、整然と並

んで、何事もない。

志津は、一瞬、身も心も、こわばらせた。

ようやく、膝で進んで、わななく手で、その位牌を把りあげると、そっともとの場所へ置いたが、胸の動悸は容易に、おさまりそうもなかった。

志津は、この奇怪な出来事に、不吉な不安をおぼえていた。

——あのおかたの身に、なにか、おそろしいことが起らねばよいが……。

非業の死を遂げた良人の魂が、中有に迷うているのをいたむことよりも、このからだを犯した男の身を気づかっている自分は、すでに、眠狂四郎を深く愛していることを、志津自身、まだ、意識してはいなかった。

同じ時刻——。

眠狂四郎は、昏れなずむ渋谷の丘陵上に、佇立していた。

巨大な櫨の根かたに、自然石の墓碑が、三基並んでいた。

生みの母と、狂四郎を愛したためにその若い生命を落した二人——美保代と静香と、不幸な三人の女性たちが、ここにねむっていた。

眠狂四郎は、世間の慣習には背を向けて生きている男であった。どんな行事が、催されようと、それとは無縁の位置におのれを置いていることが、いっそ、この男の心意気といえた。

ただひとつ、この男が、浮世の風俗に従っている例外は、迎え火の焚かれるこの宵、一人で、この丘陵へのぼって来ることであった。もとより、家を持たぬこの男が、精霊を迎えに来たわけでもなかったし、閼伽や花や線香を携えて来て、念仏を唱える次第でもなかった。

ひととき、そこに黙然と影になって佇立していてから、しずかに立去るだけであった。

ところで――。

何者がそうしてくれたのか、三基の墓の前には、紅の花と鶏頭と樒が花立にさしてあり、ひろげた菰むしろの上に桃や白茄子や素麵などが供えられ、線香も細い煙をたちのぼらせていたのである。

狂四郎の脳裡には、詣でてくれる人が思い泛ばなかった。

この丘陵から程遠からぬ宮益町の雑木林の中に隠棲していた祖父の松平主水正が、生きていた頃は、その命日には、詣でてくれていた模様であるが、祖父は三年前に逝っていた。

見知らぬ他人が、ここに無縁仏がねむると知って、してくれたことであろうか。

しだいに、夕闇に包まれて、おもてに刻んだ「霊」という文字も判じがたくなった墓を、じっと見まもり乍ら、

――見知らぬ他人の好意とすれば、これは、素直に感謝していいことだが……。

と、なかばいぶからずにはいられなかった。

狂四郎としては、何者かが勝手に、墓前を飾ってくれたことで、気持をみだされたのが、あまり愉快ではなかった。

不幸な女性たちの墓は、たとえ盂蘭盆が来ても、そのまま、侘しいたたずまいを保っている方が、こちらの胸の疼きを呼ぶことになって、こっそり詣でる意義がある、といえた。

この日の魂迎えでは、身柄のある武家、筋目正しい町家など、おのが家の氏素姓を誇りにする家では、わざわざ、菩提寺におもむいて、墓前に燈火をささげ、祈禱をこめて、墓の中から精霊を呼び出し、さながら生きた人間をみちびくように、定紋のついた弓張提灯で路上を照らし乍ら、

わが家まで迎え入れるならわしであった。

いかにも、そらぞらしい、ばかげた行為に、狂四郎は思っていたことである。

それだけに、狂四郎は、自分が知らぬうちに、母、美保代、静香の墓前が、さもその魂を呼び出すように飾られたことに、抵抗をおぼえた。

しかし、これが見知らぬ他人の好意とすれば、素直に感謝すべきであろう。

三

狂四郎が、立去るべく、踵（きびす）をまわした折、ゆるやかな斜面の小径（こみち）を、のぼって来る人影が、みとめられた。

提灯を携えていて、そのあかりで、年配の婦人と見わけられた。

小径は、この頂上に至るためのものであり、これは、魂迎えにやって来たと受けとれる。

不審のままに、狂四郎は、待った。

近づくにつれて、その提灯に浮いた定紋が、はっきりした。祖父松平主水正の家紋であった。

初老の品のいい顔だちの婦人は、狂四郎がそこに佇立しているのをみとめて、はっとなったように、足を止めた。

「貴方様は……？」

提灯をかかげると、じっとすかし視てから、

「おお、やはり！」

と、感動の声をあげた。

婦人が、口にしたのは、狂四郎の幼名であった。

狂四郎は、見かえして、問うた。

「そなたは、何人であろうか？」

「はい。申し上げても、ご存じではございませぬ。……貴方様のお母様附きの小間使いをいたして居りました者でございます。お母様が、麻布のお屋敷をお出になるまで、おつかえして居りました。……いえ、広尾町の祥雲寺山内の離れにお移りあそばしてからも、もう一度、おつかい下さるように、幾度もおねがいに上ったのでございますが、お母様は、一人でくらしたいからと申されまして、おゆるしがなかったのでございます」

「母が、わたしを産んでからも、訪れたことがあるのか？」

「はい。ただ一度だけ、おうかがいして、貴方様を抱かせて頂きました」

「…………」

「お母様が、二度とは参らぬように、と申されましたので、ご遠慮申し上げたのでございます。ほどなく、わたくしも、この渋谷在の郷士の家に嫁ぎまして、それなりに、おうかがいする折もなく、うち過ぎてしまいました」

「この墓が、母のものだ、とどうして知った？」

「はい。貴方様のお祖父様に、偶然に、この丘の麓で、お目にかかったのでございます。……大目付であられた頃のお殿様は、それはもう、お顔を仰ぐこともできないほど、威厳に満ちたお方でございましたが、ご隠居なさいまして、すっかりお優しいお年寄りにおなりあそばしていて、わたくしがあの頃のお嬢様附きの小間使いであったと申し上げますと、千津は、この丘の上でねむっている、詣でてくれれば悦ぶであろう、とお教え下さったのでございます」

「…………」

「ご隠居様がお亡くなりあそばしてからは、まことに差出がましいと存じましたが、お盆には、おもどりになるお屋敷をお持ちにならぬお母様を、わたくしが、家へお迎えしているのでございます。……それにしても、御魂（みたま）をお迎えに参って、貴方様にお目にかかることができましたのは、これも、お母様のおひきあわせと存じます」

「…………」

「貴方様のお顔に、お母様の面ざしが、のこって居りまする。……おなつかしくて、もう、この胸が――」

女は、袖で、目がしらをおさえた。

ほどなく――。

女は、母の魂を案内して、提灯で小径を照らし、狂四郎がそのあとにしたがって、黙々として、丘を降りた。

女が、狂四郎をともなったのは、麓からさほど遠くない、堀川沿いの道をすこし歩いたところに、かなりの構えをみせた郷士の家であった。

門も玄関も、そして屋内も、由緒あるものに眺められるたたずまいであった。

女は、主人は七年ばかり前に亡くなって、自身が家を守っていることを、丘を降りる途中で告げていた。

裕福らしく、門前で苧殻を焚いて、出迎えた使傭人は五人もいたし、玄関には女中二人が、式台に手をつかえていた。

間瀬垣をめぐらした魂棚の前へ、狂四郎をみちびいた女は、待っていた僧侶がはじめた誦経に、自分も唱和した。

狂四郎は、腕を組んで、黙然と、魂棚にならんだ位牌へ、眼眸を据えていた。
位牌のひとつが、母のものであろうが、狂四郎は、祖父主水正がつけたであろう戒名など、知るべくもなかった。
回向がおわり、僧侶が去ると、美しく装うた娘が、精進料理の膳部を、狂四郎の前に、はこんで来た。
女は、姪であると告げて、酒をすすめた。
狂四郎は、盃を把って、娘に酌をさせたが、口には、はこばず、何を考えたか、やおら立つと、魂棚に近づいた。
その盃を、供えるのか、と見ていると、狂四郎は、いきなり、母のものとおぼしき位牌へ、酒をそそぎかけた。
「それは、なんのお振舞いでございます？」
女が、眉宇をひそめて、咎めた。
狂四郎は、薄ら笑いをうかべて、女を見据えた。
「酒には、どうやら、毒がまぜてあるらしい。とすれば、この眠狂四郎をおびき寄せるためにつくった位牌は、毒酒できよめられるのが、ふさわしかろう」
「…………」
女の面相が、一変した。
狂四郎は、薄ら笑いを消すと、遽かに、鋭い眼光になった。
「おれを罠にかける策としては、決してまずいものではなかった。今宵、もしかすれば、おれが、母の墓へ詣でるかも知れぬ、と推測したお目付佐野勘十郎は、流石は頭脳がきれる。……あいに

くだったのは、この眠狂四郎にも、江戸に在るかぎりは、盂蘭盆の今宵は、あの丘にのぼる唯一の慣習があったことだ。昨年も、のぼった。一昨年も、のぼった。ところが、昨年も一昨年も、墓の前には、花も桃も線香も供えられてはいなかった。今年だけ、いかにも心をこめたとみせかけた供え物があった。……そなたは、松平主水正が逝った三年前から、魂迎えをしている、と云った。罠づくりは巧妙であったが、そなたのあの一言が、せっかくの策を水の泡にした。ざんねんであったというよりほかはない」

女は、狂四郎があばく間に、立って、じりじりと、縁側の方へ、後退していた。

狂四郎は、べつに迫ろうともせずに、つづけた。

「精霊たちが、せっかく饗応されれに、墓の中から出て来る宵だ。このまま、ひきあげたいところだが、許せぬのは、おれの母の墓と霊魂を、けがしてくれたことだ。そちらにとっては、巧妙の策であったかも知れぬが、こちらにとっては、許しがたい不快きわまる陋劣な計であった。……魂迎えなどという行事は、誰が考え出したか知らぬが、いかにもそらぞらしい、ばかげた俗習だが、これも、くらしのいろどりになるのなら、べつに反対する理由もない。しかし、おのれの母親の墓に、この俗習を仕掛けられては、許すことはできぬ。気の毒だが、おれが殺される代りに、お前さんに新仏になってもらって、その魂棚に坐ってもらうことになる」

瞬間――女は、身をひるがえして、庭へ奔ろうとした。

狂四郎は、魂棚の毒酒に濡れた位牌を摑むや、投げつけた。

位牌は、女の頸根に当って、その骨を砕いた。

絶鳴が、空に消えた時、狂四郎の左右から、この家の使傭人に化けた隠密たちが、白刃を抜きつれて、肉薄して来た。

狂四郎は、べつに、無想正宗を抜き合せようとせず、ゆっくりと、歩き出し乍ら、
「お主ら、日をあらためて、出なおしては、どうなのだ。お主らにも、家に迎える精霊はなくはなかろう。自分が、そっち側へ鞍がえするには、今宵は、あまりに、抹香臭すぎる、と思わぬか」
と、云ってから、
「おれが、そう云った、とお目付に、つたえれば、どうやら話の判る人物らしいゆえ、笑って、頷くのではないのか」
と、添えた。
この言葉が、隠密たちの闘志を殺いだ。
狂四郎は、ふところ手で、門を出ることができた。
五六歩往ったところで、物蔭から、一人、短剣を突きかけて来た者があった。
毒酒を酌した娘であった。
狂四郎は、その短剣を搏ち落すと、
「あの女は、姪と云っていたが、実の娘であろう。……お前が、いま、わたしに斬られると、来年、母親の霊魂を、誰が迎えるのだ？」
と、云った。
娘は、その場へ、崩れ落ちると、慟哭した。
どこかで、念仏に節づけして合唱する声と鉦の音が、ひびいて来た。佃島からやって来た佃踊りの老爺老婆の一団が、功徳の施物もらいに、招きに応じて、門口で踊っているのであったろう。

不義成敗

一

束の間の眩しい残照が、道幅いっぱいに満ちた横山町の老舗通りを、立川談亭は、扇を使い乍ら、せかせかと歩いていた。

あたりにはきこえぬように、口の内では、しきりに、諸葛孔明の「出師の表」に節をつけて、呟いていた。

久松町の講釈場で、今年の正月元旦から読みはじめた「三国志」がいよいよ、大詰に来たのである。

「……臣はもと布衣、躬ら南陽に耕し、いやしくも生命を乱世に全うし、聞達を諸侯に求めず、先帝、臣の卑猥なるを以てせず、自ら枉屈し、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に問うに当世の事を以てしたまえり。これにより感激し、ついに先帝に許すに駆馳を以てせり。のち傾覆に値い、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉じてより爾来十有一年――」

「師匠、暑いねえ」

背後から、声がかかったので、談亭は、諳誦を中止して、ふりかえった。

顔見知りの四十年配の大工が、仕事帰りらしく、道具函を肩にしていた。

「夏は暑うて、冬は寒く、犬が西向きゃ尾は東。相場はきまって居るわさ。とはいうものの、こう暑くちゃ、講釈場も閑古鳥が啼いてのう――夏やせと答えてあとは涙かな」

「そういやア、万事高直で、こちとらたたきは、だんだん顋が乾あがって来るぜ。酒が一升九十文だなんて、べらぼうすぎらあ。……大きな声じゃ云えねえが、どうも、ご政道が狂っているんじゃねえか、と思うんだが、師匠は、どう思いなさるね？」
「竹に雀なら伊達侯だが、葵にはさしずめ水鶏——と来りゃ、食いっぱぐれのねえようして下さるのがご政道だが、世の中しだいにおかしくなって、桃に鶯がとまったりして、こりゃ、木がちがった」
「あっしゃ、師匠、なにも酒の値があがったのに腹を立てているんじゃねえんだぜ。あっしの親方の頭梁が、お城の西の丸に、とんでもねえものを建てろ、と仰せつけられて、往生しているのをきいたから……」
「なにを建てろとな？」
「芝居小屋よ」
「ふうん——」
談亭は、眉宇をひそめた。
「大奥のお女中衆が、宿下りで芝居見物するのさえ、内緒ごとだろう。……それを、こともあろうに、次の公方様におなりなさるお方が、お城のどまん中に、芝居小屋をおっ建てて、中村座、市村座、守田座の役者を一人のこらずつれて来て、顔見世狂言をやらかそうというんだから、あきれけえった話じゃねえか。狂っているとしか、思えねえやな。そうじゃねえか、師匠？」
「それが、まことならば、市川十八番——暫、しばあらくう！」
「冗談事じゃねえんだぜ、師匠」
「いや、全くもって、冗談事ではないのう。西の丸様が狂っていることが、匹夫の輩にまで批判

されるようになると、これは、まさに、天下の一大事だわい」
「もとは、女の臀部のことかい？」
「匹夫とは、あっしのことを申したな。転じて、その臀部を可愛がる助平男の意味に相成ったて」
談亭は、大工と広小路でわかれると、柳橋へ抜けて、船宿「ふくべや」に入った。
「はい、ごめんよ、こんちは、今晩は――」
結界の中のおかみと顔を合わせると、ぬっと親指を突き出してみせた。
「なにさ、それ？」
おかみが、にらんだ。
「これ、すなわち、焼け木杙」
談亭は、このおかみと眠狂四郎が、以前一度、他人でなくなったことがあるのを知っていた。
おかみは、つんとして、
「火はつかないよ」
「主は水性、わたしは木性、一夜みずでもきがすまぬ、か。二階に流連させて、こっちを燃やしてくれるまで待っているなんざ、乙な風情だアな。左褄をとっていた頃より、ずんと仇っぽくなって――女は、男に惚れると、どうして、こう、あられもなく、色香をふりまくのかのう」
「うるさい、駄講！　さっさと、二階へお上り――」
「抱こうと云われて、やれうれしやと、のぼる階段上の空、足の軽さよ身の軽さ――はい、ごめん」

二

眠狂四郎は、相変らず、なんの愉しさもおぼえぬような無表情で、床縁を枕にして寝そべっていた。

談亭は、坐ると、いきなり、

「今年から、十一月朔日の中・市・守の三座の顔見世が、なくなったら、江戸の婦女子の中で、すくなくとも、五十人は首を縊る者が出ると、拙講愚考つかまつるが、もって如何となす？」

と、云った。

「なんのことだ？」

「江戸城西の丸の庭に、芝居小屋が建てられて、団十郎、梅幸、菊之丞ら総役者が、そっちへ、ひっぱって行かれてしまうことに相成り申すのでな」

談亭は、さきほど大工からきかされた話をつたえた。

狂四郎は、黙然として、なんともこたえなかった。

「いったい、これアどういうことなんですかねえ。旗本の奥方を、片っぱしから犯すわ、二十年かかってお庭をつくった植木屋を手討ちにするわ、芝居小屋をつくろうとするわ――正気の沙汰じゃありませんぜ」

狂四郎は、やおら起き上って、手を叩き、顔をのぞけた小女に、酒を命じた。

銚子を一本空けてから、狂四郎は、はじめて、口をひらいた。

「同じ人間が、別人になった、ということだ」

「たしかに、そうでござんしょうとも。てまえがうかがっているお人柄は――天資英邁、いたく

奢侈を悪みたまい、衣服飲食の美を好みたまわず、黒木綿のおん衣服、桟留のおん袴、一汁一菜の粗食、絶えて菓子などに手を出したまわず、まして女色などはもってのほか——。かねてより、おん父君が五十五人もお子を儲けた膃肭臍ぶりを、にがにがしくおぼし召され、余はなろうことなら、睾丸を抜きたい、と申されたとか申されなんだとか——。そういうお方が、どういうきっかけで、狂っちまったんだか……」

「今年の春、父親が左大臣に、自身が内大臣になった礼に、京へ上った——その上洛を境にして、別人になったらしい」

「へえ？　京で、なにか、驚天動地の異変でも起って、性根がひっくりかえっちまったのでしょうかね」

「判らぬ。京都所司代の頸でも締めあげれば、別人になった理由を吐くかも知れぬが……」

「先生、これア、ご自分にも火の粉が降りかかって来ていることですぜ。こうしているあいだにも、おもてには、お手前様の生命を狙う手練者が、目を光らせているのかも知れないんだから……、ここは一番」

「談亭、わたしに、江戸から逃げ出せ、と忠告に来たのか？」

「つまるところは、まアそういうことで——。ねえ、逃げて下さるわけには参りませんかねえ。これまでの敵とちがって、こんどの敵は、次代の将軍家を後楯にしたお目付なんですぜ。対手がわるいや、対手が——」

談亭は、盃を把って、ぐっと空けると、

「丈夫涙なきに非ず、そそがず別離の間、船宿に寄って燗酒に対す、遊子の面を為すを恥ず——という場面に、ここをして下さるわけには参りませんかねえ」

「参らんな」
狂四郎は、にべもなくこたえた。
「やれやれ、鉄砲傷がやっと癒えたばかりだ、というのに――」
「戌刻（午後八時）になったら、お前さんを案内するところがある」
狂四郎は、云った。
「どこへ――？」
「御小姓番岩城峰之助の屋敷だ。薩摩の島津の姻戚にあたる名家だ」
「薩摩汁でもご馳走して下さるのですかい？」
「思わぬ趣向がある――ような気がする」
「どういうんです、それ、それア？」
「岩城家には、後家がいる。当主の亡兄の妻女だ。これが、抜群の美人らしい」
「判った！　この後家殿も、西の丸様のお手がついた――」
「そうだ。一昨夜、金八を忍び込ませて、眺めさせたが、星眸秋波を動かすらしい。のみならず、どうやら、孤閨を守ることのできぬからだの持主でもある模様だ」
「成程、それで、義弟と出来ていたところを、西の丸様のお手がついて、義弟が嫉妬で荒れ狂い、屋敷内は、てんやのわんやと相成った次第でげすな」
「そうではないようだ。金八の報せでは、後家は、外から、男を呼び込んでいるらしい」
「借問す、眠狂四郎に他人の房事を覗く下種の趣味ありとは？」
「講釈師にも、ないとは云わせぬ」
「へへ、それはもう人一倍――ぶるぶるっ、女郎花咲く野はいとえ草枕。……で、覗いて、どう

しなさるんです？」

「まだ、きめては居らぬ。この半年間に、西の丸の被害を蒙った家が、旗本だけで八軒ある。その家の中をのぞくことを、武部老人にたのまれた。火の粉をはらうには、真因をつきとめる必要があろう」

「西の丸様のお側に、とんでもないごますりがいて、旗本の奥方やら後家のうち、これはと思う別品を、そっと耳うちして、召し出した、というわけですかねえ」

「いや、この弥生に、上野山内で、輪王寺宮の主催で、花見の宴が開かれた。その際、西の丸が、お忍びで出かけて、招き寄せた旗本の家内の中から、えらび出したということだ」

「大根と女房は盗まれるほどいい、というが、盗まれる亭主の方としては、やりきれたものじゃありませんね。まして、対手が、天下人と来ちゃ、他人の食い寄り、親の泣き寄りで、額をつき合せてみたところで、埒があくものじゃなし——上、身を修む能わず、士、主を信ず能わずんば、何を以て民を治めんや、喝！」

狂四郎は、立ち上った。

「出かけようか」

「待って下さいよ、てまえは、先生に逃げることを、すすめに……」

「談亭、頭上に火の粉が降りかかった時、わたしが、一度でも逃げたことがあるか？」

「そ、それア……、そう仰言られれば——」

談亭は、しぶしぶ、狂四郎のあとにしたがった。

三

江戸川に沿うた左右一帯は、船河原橋から石切橋まで、すべて直参の屋敷であった。

御小姓番・三千八百石・岩城峰之助邸は、恰度その中央に位置する中ノ橋を北に渡ったところにあった。

戌刻――。

眠狂四郎は、談亭をつれて、屋敷の裏手へまわった。

狂四郎たちは、東からやって来たが、立慶橋を過ぎるあたりから、頭巾で顔を包んだ一人の武士が、前を歩くのに、なんとなく、ついて行くかたちになった。

中ノ橋の袂で右へ折れるのを見てとって、狂四郎は、わざと、五六歩おくれた。

「やはり、そうか」

岩城邸の海鼠塀に沿うて、裏手へまわり、塀が直角に折れる地点で、そっと覗いた狂四郎は、その武士が、裏門の前に立ちどまるのをみとめて、頷いた。

「あれが、間夫で――？」

談亭も覗いてみて、直感を働かせた。

「そうだ。今宵戌刻に呼び込むことを、金八が、かぎつけて来た」

「あの間夫、どうも、育ち不足の前髪衆みたいな気がしますぜ」

「まだ十四、五の児小姓に相違あるまい」

「恐れ入りました。間夫は児小姓で、情婦は――上布は薩摩、と来た」

裏門の潜り戸は、内側から開かれ、忍んで来た者は、すっと消えた。

「こっちは、塀を越えることになるな」

狂四郎が、高い海鼠壁を仰いだ。

「先生、てまえは、金八とちがって、こういう芸当の修得はございませんよ」
「わたしの仲間なら、習っておいてもらおう」
「いやはや、春秋高く塀高く。へっぴり腰を如何せん」
年配の女中にみちびかれて、仄暗い一室に通された武士は、そのまま、頭巾もとらずに、端座して、動かなかった。
衣ずれの音が、廊下にひびいたが、顔を擡げようともしなかった。
背後から、そっと、白い手で頭巾がぬがされると、前髪立ちの、まだ少年そのままのふっくらと下ぶくれた面貌があらわれた。
頭巾をぬがしたのは、眦がややつりあがった険を除けば、一点の非もさがし出せぬ、群を抜いた美貌の持主であった。
しかし、もう年齢は、三十に近い大年増で、児小姓の肩を抱いた手が、それをかくせずに、筋張っていた。
「会いたかった！」
女は、いきなり、児小姓の唇を求めた。
双腕の上から抱き締められて、唇を奪われた児小姓は、はじめは、遠慮ぎみに、その手を女の胴のあたりを匍わせていたが、やがて、そろそろと、ひとねじりにくねらせた腰から、膝へとすべらせて、膝の割れ目から、股奥をまさぐりはじめた。
女は、その感触に、強い反応を示して、唇を合わせつつ、微かに呻いたが、自ら背を反らして、畳へ倒れた。

それから、唇をはなして、さもいとおしげに、

「おいたをなさる」

と、云って、みだらな笑い声をたてた。

仰臥の膝から、下裳までがすべり落ちて、下肢は、太腿まであらわになっていた。児小姓の指は、その奥で、うごめきつづける。

女は、そのまま、もてあそばせておいて、

「そなたは、わたくしが、上様のお褥に入った時、どこに、いましたぞ？」

と、訊ねた。

「御広敷の……御杉戸ぎわに、じっと坐って……」

「おお、おお、いたわしいこと。許して下され。……けれど、わたくしが、西の丸様に身をまかせたのは、ひとえに、そなたの出世をねがってのことでありました。……そなたは、前髪を落したら、すぐ、御番入りをなさる。御書院番がよかろうか、それとも、大御番か——。大御番の方がよいであろ。大坂定番におなりなさるがよい。その時は、わたくしも、大坂へ参りましょうぞ。……大坂から戻られたら、次第に出世の道を辿って……、そう、やがて、勘定奉行か、寺社奉行にまで、のぼられるのじゃ。きっと、きっと、そこまで出世なさる。……でも、そなたが、お奉行になられた時は、わたくしはもう、皺だらけの、みにくい婆になりはてて——おお、想うだけで、身ぶるいがする。……でも、そうなったら、わたくしは、そなたの出世のさまたげはしませぬぞえ。そなたを、出世の門口に立たせてあげる。それだけが、わたくしのつとめなのです。そのために、西の丸様にも、すすんで身をまかせました。……これでよい。こうして、そなたに抱かれている時だけが、そなたは、わたくしのもの——、明日のことは、考えませせぬ。……あ、あ

あ——うれしい！……いまだけ、たった、いまだけで……、わたくしは、もう……」

女は、かきくどきつつ、烈しく身もだえすると、再び、児小姓の唇をむさぼった。

四

「姉上っ！」

廊下から、鋭い呼び声が起って、美しい寡婦と児小姓は、とびはなれた。

「姉上！　入りますぞ！」

「ま、待って——」

女は、せわしく身づくろいした。

杉戸をひき開けたのは、まだ二十歳を越えたばかりの、いかにも若々しい旗本であった。

威嚇のためか、差料をひっさげていて、ぴたりと正座しても、なお、鞘から手をはなさず、

「姉上、この不義の儀、宥されませぬぞ！」

と、きめつけた。

「この数馬は、わが兄の長子です。不義とは、なにごと！　誤解をすてられるがよい」

「兄の長子と申されるが、養子ゆえ、血はつながって居らぬ、それをよいことにして、姉上は、まだ前髪立ちの少年を、狂わせたのだ。女は冶、容にして淫、とは姉上のことを申すのだ。……この場にて、心を改めると、お誓いなされい」

すると、女は、不意に、狂おしげな高い声をたてた。

「なにを笑われる！」

若い旗本は、凄まじい形相になった。

「ほほほ……、これが、笑わずに居られようか」

女は、笑いをおさめると、急に、冷やかな態度にかえり、

「峰之助殿、嫉妬であろう」

「……む！」

「わたくしが、この数馬を可愛がっているのを、貴方は、嫉妬しているのじゃ。わかって居りますぞ。……貴方は、わたくしに、恋されて居る。それを、わたくしが、気づかぬと思ってか。ちゃんと、気づいて居りました」

「姉上っ！」

「貴方は、わたくしが、この家に嫁いで参った時から、恋されていた。……兄上が逝(ゆ)かれた時、貴方は、家を継ぐことのできるよろこびよりも、もしかすれば、このわたくしが手に入るのではないか、という期待で、胸をはずませた。そうであろう、峰之助殿？」

「そ、そうだ！　その通りだ！」

若い旗本は、絶叫した。

「身共は、姉上を、想うて居り申す。だから……西の丸に召された時は、気も狂わんばかり嫉妬した。しかし、これは、お召しゆえ、身共も我慢することができ申した。……ところが、あろうことか、姉上は、身共の心を知り乍ら、平気で、この甥御(おいご)を、ひき入れて、不義を働き、身共を逆上させて居るのだ。……許せぬ！　断じて、許せぬ！　身共は、貴女ら二人を、成敗する決意で、入って来たのだ！」

「まことと、成敗なさるか？」

嫂(あによめ)は、平然として、義弟の燃えたぎった眼光を受けとめた。

「き、斬る！」

「ほほほ……、斬る、と申されるより、なぜ、抱いてやる、と申されぬ！」

「な、なに?!」

女は、児小姓をかえり見て、立去るように促した。

児小姓が、全身をわななかせ乍ら、追われるように、遁れ出て行ったあとで、女は、すっと、立ち上った。

「参りましょうぞ。貴方の寝室へ――」

「…………」

「なにをためらって居られる。貴方が欲しいと申されるゆえ、さしあげるのじゃ。遠慮には及びませぬ。好きなように、もてあそばれるがよい」

女は、さっさと、さきに立って、廊下を歩き出した。

ものの十歩も進んだであろうか。

突如として、女は、悲鳴をほとばしらせて、その場に棒立ちになった。

倒れはしなかった。

立ったままで、がっくりと、首を垂れた。

義弟が、うしろから、かかえた時、すでに事切れていた。

女は、床下から、廊下板を貫いて、突きあげられた手槍で、陰部から胸部まで、刺し通されたために、倒れなかったのである。

槍は、この屋敷のなげしにかけられていたものであったが、いつの間にか、柄を短く切られていた。

下手人は、ついに、何者とも判明しなかった。

近藤重蔵

一

眠狂四郎が、老中水野忠邦邸の長屋に、ふらりと現われて、武部仙十郎宅の書院に坐ったのは、五節句の最終にあたる重陽（ちょうよう）の祝日——九月九日の宵であった。

老人は、下城して来たばかりの紋服姿で入って来ると、

「参賀のお供が、しだいに、億劫（おっくう）になって参った。憎まれ爺の娑婆ふさぎも、あと二三年であろうかの。裃（かみしも）が重うてならぬ」

と、云った。

この日から、綿入れ小袖に移るのが、当時のならわしで、このひどい猫背の老人にとって、裃が重いのは、実感であったろう。

老人は、疲労をかくさずに、身を二つに折って、

「お目付佐野勘十郎に、狙われているらしいの。これまでの強敵と比べてどうじゃな？」

と、訊ねた。

「こちらに運があるかないか、というだけの話で、敵の強弱は、さして気にはならぬが……、先般、挙げてもらった西城府から被害を蒙（こうむ）った旗本を、幾軒かのぞいてみて、不快の念が重なって参った。……どうも、これには、謎（なぞ）があるようだ」

「うむ——」
「ご老人、貴方は、もう、この謎を解いて居られるのではないのか？」
狂四郎は、冷たく冴えた眼眸を、仙十郎に当てた。
老人は、畳の一点へ落した視線を擡げようとはせずに、
「解いては居らぬ」
と、こたえた。
慍ったような声音であった。
「およその推測ぐらいは、立って居るものと思うが……」
狂四郎は、食い下った。
老人は、それにこたえる代りに、唐突に、
「近藤重蔵という人物の名を、耳にしたことがあるかの？」
と、訊ねた。
「寛政の頃、蝦夷を巡察して、えとろふ島かどこかに、露人が建てた十字架をひき抜いて、日本国領有の標柱を建てた、という知識しか持って居らぬが……」
「左様、その通り——、胆、智ともに桁はずれの傑物でな、文字通り不羈奔放を以って六十年の生涯を送り、四年前、江州の謫居で、逝った——ことになって居る」
「その近藤重蔵が、どうした、と云われる？」
「半刻も経てば、ここに、現われるの」
「幽霊を招いた、と云われるのか？」
「左様、幽霊をな。不羈奔放に生きた人物の面目は、おのが没年を、自分で勝手に決めてしまっ

たことじゃな。江州大溝には、藩主分部若狭守の菩提寺瑞雪院の墓地に、自休院俊峰なんとか定門、と謚された墓石も建って居るし、この江戸にも、駒込の西善寺に、知友門弟が謀った墓標が、ちゃんとある」

「……………？」

「ところが、当人は、二本の脚で、江州から、すたすた歩いて、江戸へ還って来て、のうのうと、くらして居る」

ここで、はじめて、仙十郎は、顔を擡げて、狂四郎を視た。

「この近藤重蔵が、三十余年前、蝦夷を巡察した際、その配下の一人に、小普請組の小身者の次男がいた。その名を、佐野勘十郎と申したな」

「……………」

「どうじゃな、わしが、幽霊を呼んだわけが、わかったであろう」

「成程――」

狂四郎は、微笑して、頷いた。

「では、近藤重蔵が、現われるまでのあいだに、渠の略歴を、教えておこうかの」

二

近藤重蔵。

明和八年、江戸駒込鶏声ヶ窪で、幕府与力近藤右膳の次男として生れた。父右膳は、文武両道に通じ、また砲術に造詣が深かった。母は、福山藩主の侍医の女であった。

重蔵の兄藤次は、生来蒲柳であったため、母方の叔父福間陽蔵に養われて、医師となった。

家を嗣いだ重蔵は、物心ついた頃から、その慧敏ぶりを発揮し、六歳頃にはすでに、孝経を諳んじて居り、父親がこころみに、親しい人を招いて、その席上で講義させたところ、一字一句のあやまりもなかった。爾来、鶏声ヶ窪の神童の名は、年毎に高まった。

元服した時には、すでに、五尺六寸もあり、膂力も秀れ、剣術の目録を得ていた。しかし、すでに、驕傲のおもむきを示して居り、蔭の声は、非難が多かった。

十八歳で与力見習いとして出仕するや、重蔵は、同志を語らって、白山義学という一塾をひらき、自身塾頭となって、文武の師をつとめた。その翌年、重蔵は、役柄に似ず温厚な気象の父に迫って、隠居させ、その職を襲いで与力となり、放火盗賊改め方になった。

その年、老中松平定信の奨励によって、湯島聖堂で、大名旗本の子弟たちに対して、学術試験が行われた。重蔵は、これを受けて、経義、歴史、策問、文章すべての部門にわたって、抜群の成績をとった。

重蔵の前途は、洋々としてひらけているかに思われた。

たしかに――。

二十五歳で、長崎奉行出役、次いで支配勘定方、転じて関東郡代附出役となり、そして、蝦夷地経略の建白書をさし出したのをみとめられて、二度にわたる蝦夷巡察を為した頃までは、近藤重蔵の胆智は、老中松平伊豆守信明までが、大いにみとめたところであった。

重蔵が、えとろふ島の尖端藻寄湾に臨むカムイワツカオイ山の頂に建てられた十字架を、抜きすてて、自ら筆を執って、

「天長地久大日本国」

と大書した標柱を建てたのは、二度目の巡察の時であった。

えとろふの開島までが、重蔵の順風に帆を揚げた出世一路の人生であった。

重蔵は、二度にわたる蝦夷巡察に依って、「辺要分界図」をつくり、老中戸田采女正の面前で、蝦夷地処分法を論じた。その席上、居並んだ若年寄、諸奉行の愚問を、声をたてて、嘲笑したのが、忌諱に触れて、ほどなく、職を免じられて、小普請入りを命じられた。

もし、魯西亜の使節が、長崎に出現しなければ、重蔵の後半生は、小普請組の無為な歳月で終ったかも知れなかった。

文化元年九月、魯西亜使節レサノットが、寛政五年の約定によって、長崎港に入って来たことは、幕府を狼狽させた。

寛政五年の約定というのは――。

魯西亜の商船が一艘、根室に入って来て、通商をもとめた時、松平定信は、一時のがれの口実で、

「外交のことは、長崎に於て、商議する」

と返辞して、『魯西亜船一艘長崎に至る為の印の事』と記した一葉の信用状を与えたのであった。

魯西亜商船は、爾来十年、一艘も、日本には現われなかったのである。

信用状を与えた松平定信は、すでに老中職をしりぞいていた。

突如として、信用状を持参して、その使節レサノットが、長崎に現われるや、幕閣要路は、その処置に困惑した。

評定の挙句、一片の信用状によって、百余年来の鎖国の祖法を破ることはできぬ、と決議された。

数箇月にわたる交渉の挙句、レサノットは、悲憤の声をのこして、長崎を去ったが、日本国の不信をうらんだ渠は、帰国の途中、シベリアで、自殺を遂げた。

レサノットを乗せて長崎に来た使節船の船長フォストーフは、レサノットの自殺に遭うや、憤激を抑えきれず、報復の手段として、二年後、樺太番所を襲って、思うさまに放火掠奪をやった。

翌年春には、えとろふ島に乱入し、番所をはじめ神社寺院を焼きはらい、守備の士卒を斬り、さらに、宗谷海峡を越えて、利尻島を襲い、船を奪った上、函館奉行所に宛てて、

「通商を拒否するに於ては、大挙して蝦夷に攻め入って、これを占拠するであろう」

と、脅迫状を送りつけたのであった。

幕府では、やむなく、若年寄堀田摂津守正敦を総帥として、蝦夷地を守備することになった。

小普請入りをしていた近藤重蔵は、おかげで、再び用いられて、摂津守の輔佐役として、蝦夷に入った。

間宮林蔵が、韃靼海峡を究めて、樺太が一島であることを証明する前年のことであった。

重蔵は、樺太の奥地まで踏み込んで、調査したのち、蝦夷にひきあげ、石狩平野に数十日の露宿を重ね、江戸には半年後に帰って来た。

その功によって、書物奉行に任じて、江戸城吹上の紅葉山文庫をあずかった。

重蔵という人物にとって、古書の整理と著述は、性分に合わぬことであったが、それでも、その間に、「右文故事」七巻を著わした。また、文庫に蔵められた古典、朝鮮本をはじめさまざまの諸本を、部類を分けて諸目をかかげ、その内容の解説をした書をつくり、世の蔵書家を悦ばせた。

重蔵が、その職に在ったのは十年間であったが、やがて、本丸老中水野出羽守忠成の面前で、

口にすべからざる言葉を、吐いて、再び、忌諱に触れた。

「紅葉山文庫に蔵された書物は、すべて、徳川家に不利なるものは除かれて居ります。これでは、正しく、歴史を後世にのこすことはできませぬ。たとえ、徳川家にとって非なる史実も、文庫に納められてこそ、政道の理非曲直を明らかにするための参考となるかと存じます」

こう述べてから、一月も経たぬうちに、重蔵は、大坂弓奉行に貶せられた。

その名目は、秘府の蔵書をほしいままに写して世に洩らした、という罪であった。

大坂へ落ちた近藤重蔵の行状は、目に見えて、公儀に対する反抗を示すものであった。

弓奉行は、わずか八十石に過ぎなかったが、重蔵は、千石取りの構えの屋敷を新築し、しかも、庭には、巨きな望楼を建てた。

重蔵は、すでに五十歳に達してい乍ら、三人の子をなした妻を離別して、千種大納言の娘を納れて後妻にし、さらに、近畿一円を旅行して、行くさきざきで、美しい娘をあさった。

誹謗の声が、彼処此処であがったが、重蔵は、平然たるものであった。

天満与力大塩平八郎が、一日、その屋敷を訪れて、世評を告げて、忠告した。

すると、重蔵は、声をたてて笑った。

「身共は、十八歳で与力見習いとして出仕して以来、この大坂弓奉行に貶せられるまでの三十余年間、幕臣として許される限りの自由な行為をつかまつった。しかし、大坂に参ってみて、ただひとつ、やりのこしたことがあるのに、気づき申した。すなわち、好色であること――これでござったな。世間では、定命に達し乍ら、なんたる不行跡、とそしり申すが、身共に云わせれば、定命なればこそ、若い美しい女子を抱く回数を、大急ぎで、重ねねばならぬのでござる。おわかりであろうか」

もとより、その不行跡が、看過される筈もなかった。

三年後、重蔵は、勤め方不相応の廉をもって、役儀取上げの上、ふたたび小普請入りとなった。

三

近藤家の江戸の屋敷は、大坂町にあったが、重蔵は、江戸へ還って来ると、その屋敷をたたみ、滝野川に、ごく質素な家をもとめて、閑居した。

重蔵の好色は、それを機会に、ぴたりと熄んだ。

その代り、別の行状が、世間の目をひいた。

まず、重蔵は、谷文晁に乞うて、甲冑をつけたおのが肖像を描いてもらった。これは、意味があった。重蔵は、三度にわたる蝦夷巡察の間、常に、六尺の巨軀に、甲冑をつけていたのである。

重蔵は、この肖像画をもとにして、九尺もの石像を刻むと、川にのぞんだとある洞窟の中に安置した。

「これによって、身共が死に絶えた後も、蝦夷に名を馳せたわが姿は、永遠に残るであろう」

重蔵は、安置の日、滝野川の住民たちを集めて、眺めさせ乍ら、うそぶいたという。

甲冑をつけ、鹿の角の前立物に、采配を携えた巨大な石像は、評判を呼び、無知な百姓たちは、その前に、供物をするようになった。

寺社奉行松平伯耆守としては、このことを耳にして、すててはおけぬ、と考えて、ひそかに、忠告の使者を遣わした。

これに対して、重蔵は、伯耆守宛に、左のような陳情書を送った。

犬馬の労は、鷹隼とたがい、天命不遇とは申しながら、私儀、こらえ情薄き性質に候や、年

来に不相応、老折に及び、辺島の霜雪に気血枯れ候や、白髪蹉跎に罷り成り、聖時の御時節、功官に之ある間じく候得共、辺功も水の泡に相成り、その上また、さる巳年四月、勤め方不相応につき、小普請入り仰せつけられ候、さり乍ら、老いては弥々壮ならんと心がけ候得共、天命何ほどに之ある可く候や、しかれば子孫へ武功の形見残し、いよいよ忠勤の志を起させ候端にも相成る可くやと、建て置き候石像も、これまた不相応など申すことに候わば、右石像は筏にのせ、東海に浮ばせ候ても苦しからず候

寺社奉行も、この陳情書を読んで、苦笑して、石像処分については、沙汰やみとした。

「近藤重蔵が、狂気したらしい」

そういう噂が、江戸城内にもきこえて来たのは、その頃からであった。

近藤家の屋敷内には、滝野川文庫というのが設けられて、夥しい珍書異籍が収められてあり、誰にでも自由に閲覧することを許していた。

旗本の子弟たちは、よく出かけて行ったが、その時、狂気としか受けとれぬ主人の姿を見かけたのである。

寒中、褌もはずした素裸で、庭へ出て、長槍をしごいて、樹木を突きまくったり、あるいは、武蔵野を吟嘯し乍ら、蛇をとらえて来て、その首をねじ切って、したたる血汐を口に受けて飲んだり、さらにまた、永年中風で病臥していた百姓が、その女房と息子に、毒殺されたらしい、と風評が立つと、その女房と息子を捕えて来て、一糸まとわぬ裸にひき剝き、抱き合せて、荒縄でひっくくり、座敷にころがして、眺めるなど——。

とうてい正気の沙汰とは受けとれぬ行状を、閲覧者たちに、目撃させたのである。

近藤重蔵の破局は、きわめて愚かなことが、原因であった。

重蔵には、三子があったが、その長男富蔵は、父に似て自恣放縦の気象であった。元服前から、遊蕩の味をおぼえ、父親の叱咤も馬耳東風であった。

ある時、富蔵は、父が蝦夷巡察の功によって将軍家から拝領した紋服をぬすみ出して、それを質に入れて、遊興費をつくり、深川の岡場所に流連した。

これを知った重蔵は、富蔵を、木太刀で気絶するまで打ち据えてから、一室にとじこめ、半年間読書をつづけるように厳命した。寒中で、布子一枚着せられただけで、火鉢のない部屋で、机に向わせられた富蔵は、しかし、屈せず、夜になると裸になって庭へ出て、井戸端で水垢離をとる逆作用の暖をとって、読書をつづけた挙句、ついに、肺炎をおこして、倒れた。

重蔵は、富蔵が、癒えると、目黒にある別荘へ移した。別荘といっても、名ばかりの、土地の百姓半之助という男から、数畝の土地を借りて、将来そこで、米麦、野菜をつくるつもりであった。重蔵は、とりあえず、富蔵に、晴耕雨読をさせることにしたのである。

その目黒の借地の地つづきに、富士山に似た丘があった。やはり、半之助の持地であった。

富蔵が、父に、そのかたちのよさを告げると、重蔵は、即座に、

「浅間神社を勧請すれば、賽銭が集まるかも知れぬ」

と、云った。

富蔵は、すぐさま、それを実行して、六月朔日に、山開きの富士祭を催した。すると、重蔵の予言通り、近郷近在から、夥しい参詣者が集まって来た。

これを眺めた半之助は、浅間神社の差配を自分にまかせて欲しい、と富蔵にたのんだ。賽銭を山分けにした上、運上もさし出すという条件であった。富蔵は、これを承知した。

半之助は、神社の麓に、蕎麦屋もひらき、これも繁昌した。

しかし、半之助は、欲を出して、富蔵に一文の分け前も寄越さなかった。
富蔵は、憤って、父に相談した。
重蔵は、目黒におもむいて、半之助に会うと、
「十分以上の者でなければ、屋敷内に、いかなる祠もつくってはならぬ、と公儀掟があることを知らぬわけではあるまい。浅間神社は、近藤家のものだぞ」
と、きめつけた。
しかし、半之助は、せせら笑って、納得しようとはしなかった。
重蔵は、門弟たちを動員して、その富士山はもとより蕎麦屋のある地所まで、竹垣をめぐらして、外から入れぬようにした。
半之助が、血相変えて、談判に来たが、重蔵は、笑って、
「奉行所へ、訴え出るがよかろう」
と、はねつけた。
奉行所へ訴え出れば、半之助の方がかえって罪を問われることは、明白であった。
じだんだ踏んだ半之助は、破落戸をかりあつめて、一夜、竹垣をぶちこわした。
重蔵は、それを待っていたように、たった一日で、元通りに、竹垣をめぐらしてしまった。
逆上した半之助は、破落戸をひきつれて、夜明けに、近藤家へ乱入して来た。
重蔵・富蔵父子は、すでに予期していて、差料を抜きはなって、猛然と迎撃した。
頭数の多寡は、問題ではなかった。
十人近い破落戸は、忽ち、重傷薄傷を受けて、遁げ散ってしまった。
一人、狂乱した半之助だけが、庭さきに仁王立って、罵り喚いた。

重蔵は、しばらく、半之助に、口ぎたなく喚かせておいて、ゆっくりと、縁側に出た。
逃げ出そうとする半之助は、脳天から、ま二つに斬り下げられて、血汐を撒(ま)いた。
富蔵の方は、半之助の家へ踏み込んで、半之助の女房、倅(せがれ)二人を、斬りすてた。
この殺傷事件が、重蔵のいのち取りとなった。
重蔵は、改易の上、江州大溝藩主分部若狭守の屋敷へお預けとなって、やがて、江州へ押送された。長男富蔵は、八丈島へ流された。
重蔵は、若狭守のはからいで、罪人としての扱いは受けず、藩の子弟たちに、経史の講義をした。
その起居のさまは、きわめて謹厳であった。
そして、文政十二年六月十六日、五十九歳で、謫居で長逝(ちょうせい)した――ということになっているのであった。

執念手

一

武部仙十郎が、近藤重蔵の略歴を語りおわった時、その当人が、この書院に姿を現わした。
剃髪(ていはつ)して、広袖の十徳に軽衫(カルサン)をはき、無腰であるのは、いかにも、世をすてた隠士のつもりであろうが、六尺ゆたかの長身と、異常な色の黒さが、かえって、そのいでたちを目立つものにしていた。

仙十郎は、眠狂四郎を、ひきあわせた。しかし、重蔵は、すでにその名をきき及んでいたにも拘らず、べつだん、この男に対して興味も示さなかった。

「ご子息には、その後、赦免の沙汰がござったかな？」

仙十郎は、八丈島に流された富蔵のことを、訊ねた。

「先月、手紙を寄越し申して、島の漁師の娘を娶って、子供ももうけた由、赦免の沙汰があっても、再び江戸には還る意志がない旨、明言いたしました。それも、よかろう、と存じて居り申す。……親爺の方は、江戸恋しさに、おのれで定命をきめて、仏になって、舞い戻ってみたものの、もはや幕の降りたおのれの生涯に、多少の余生をぬすんでみても、無駄と知り申したわ。名と処があってこそ、至言は言を去り——無言もねうちがあり、至為は為す無しで、なにもせずにいても、おのずから存在がみとめられると申すもの。生きている亡霊では、全く、なんの意味もござらぬ」

「ところが、生きて居られるおかげで、こちらにとっては、大層重大な存在とみとめて、こうして、来駕を乞い申した」

仙十郎は、笑い乍ら、云った。

「なんのご用向きでござろうかな？」

「むかし語りをして頂きたく存ずる」

「むかし語りを——？」

「三十余年前、お手前は、蝦夷地を巡察された。その時、お手前が見聞されたうちで、なにか、驚愕された事柄はなかったか。たとえば、幕臣として、口外すべからざる秘密の事柄を、蝦夷地のどこかで、知られたことはなかったか……？」

「………」

「身共が、紅葉山文庫で、当時の書類に目を通したところ、寛政十年に、はじめて、お手前が、蝦夷地巡察の一行に加わった時は、無役でござった。別に、目付渡辺久蔵、使番大河内善兵衛、勘定吟味役三橋なにがしの三人が、その任にあたり、目付石川左近将監が、江戸に在って、これを統轄した、と記録にのこって居り申す。……その最初の巡察に於ける功によって、お手前は、勘定吟味役に栄転され、蝦夷地取締り御用を命じられた。そうして、再び、北海へ渡航された。その際、お手前は、小普請組の中から、百二十石佐野重左衛門の次男勘十郎ほか、いずれも部屋住み三名をえらんで、連れて行かれた。お手前は、えとろふ島まで渡って、大日本国の標柱を建てて、江戸へ帰られた。その時、四名の供のうち、生き残って無事に、お手前とともに帰って参ったのは、佐野勘十郎ただ一人でござった。……お手前は、それから、ほどなく、職を免じられて、小普請入りを命じられた」

「………」

「お手前が、供のうち三名を喪って、佐野勘十郎のみをともなって、江戸へ帰られたに就いて、身共は、その記録に、いささか不審をおぼえ申した。……お手前は、最初の巡察、また二度目の巡察にも、まことに、人跡未踏の奥地に分け入った苦心を、ことこまかく、述べられて居る。どのようにして、山嶽の嶮岨を越え、荒れ狂う潮を渉り、不毛の原野を横切ったか。そうして、行くさきざきで出会うた土人、けもの、魚鳥類も、あまさずに紹介されて居る。さらにまた、お手前は、異常な執念とも思われるまでに、判官義経の遺跡を、石狩川をさかのぼり、志古津の奥まででわけ入って、弔われて居る。

沙流の上流波伊平というところには、義経が、ハイという魚の嘴を屋根の上に立てて、砦を構

て居る。

えたとか、あるいはまた、鵡川の上流キロイにも、義経が現われて、魚を釣り、幣を立てた古跡が残って居り、その酋長は、義経からもらったという古い甲冑を所蔵している、とか。人跡絶えた山川を、幾日も跋渉して、義経に関する事蹟を調査されたのは、なみなみの努力ではなかったであろう、と察しられる。お手前は、その苦心の調査のほどを、ことごとく記録されて居る。

しかるに、お手前は、四人の供のうち、三人までも、蝦夷の奥地に斃れた悲惨事に関しては、ほんの数行で、かんたんに片づけられて居る。そのことに、身共は、不審をおぼえ申したのじゃな。……これには、なにか、かくさねばならぬ深い仔細があったのではなかろうか。……お手前が、あれだけの功を樹てられ乍ら、立身する代りに、お咎め小普請入りされたのも、そこらあたりに、原因があったのではなかろうか、とな」

仙十郎は、いかにもききとりにくい、ぼそぼそとした例の口調で述べ乍ら、対座する者の耳には、一語もききのがさせはしなかった。

二

仙十郎が口をつぐんでからも、なおしばらく、近藤重蔵は、重い沈黙を守った。

仙十郎は、重蔵が、口をひらくのを、待った。

ひとつ――深い吐息を、重蔵は、もらした。

それから、

「忘れた――ことにして頂きたい」

と、云った。

「是非に——とお願い申しても、無駄かな」
「三十余年間、口をつぐんで参った事柄でござる。なろうことなら、このまま、あの世まで、この秘密は持参つかまつりたい」
その時、はじめて、狂四郎が、口をひらいた。
「失礼乍ら、その十徳の裾に、針が——」
指さした。
重蔵は、十徳の裾をつまみあげてみた。
一本の針が、刺さっていた。それを、抜きとった重蔵は、怪訝(けげん)な面持になった。
縫い針ではなかった。その倍に近い長さの、孔のない針であった。
「それは、吹き針です」
狂四郎は、教えた。
「吹き針？」
「お手前様が、尾行を受けた、ということです」
「と申すと？」
「尾行者の一人が、お手前様の十徳に、吹き針を吹き刺しておいた。そうしておけば、かなり距離を置いても、また、尾行者が代っても、陽光に針が光るので、尾行は容易であった、ということです。……お手前様は、武芸の達人であり、また、このような状態にお在りになるからには、尾(つ)けて来る者があれば、すぐに察知されるに相違ない。そうと知って、吹き針を使って、対手(あいて)がたは、尾けたのです。……お手前様は、尾けられていることに気づかずに、ここへ参られた」
「ふむ！」

重蔵は、ひく呻いた。

「お手前様に尾行者を命じた者が、お目付佐野勘十郎であるとすれば、これは、どうなりますか？」

狂四郎は、薄ら笑いを、口もとに刷いて、冷たく云った。

「ふむ！」

重蔵は、もう一度、呻いた。

「近藤殿——」

仙十郎が、膝に両肱を置いて、上目使いに、仰ぎ乍ら、云った。

「佐野勘十郎と申す人物、つい三年前までは、京都所司代屋敷の与力でござった。それが、どういう風の吹きまわしか、今春、江戸へ戻ると、お目付に出世して、西の丸様のふところ刀といった座に居坐ったのでござるわい。この出世、なんとも、不審に堪え申さぬ。……曾ての、三十余年前の部下が、斯様な奇怪な出世をして、その地位の力を使って、お手前が生存していることまでも調べあげて、尾行者をつけるとは、さて、どういうことでござろうかな？」

重蔵の太い眉が、微かに痙攣した。

しかし、なお、重蔵の口は、かたくむすばれたままであった。

仙十郎が、つづけた。

「いや、もしかすれば、佐野勘十郎は、お手前が、生きて居られることを、疑っている段階でござろうやも知れ申さぬな。そうでなければ、亡霊となって江戸へ帰られたお手前を、今日まで生かしておく筈は、ござるまい。もしかすれば、あれは、近藤重蔵ではあるまいか、と疑惑を抱いて、配下に、さぐらせているのでござろう。……ところが、本日、お手前が、この水野越前守邸

へ、旧知の武部仙十郎を訪問されたことは、自身が近藤重蔵であることを明らかにされたことだ。そうとさとった佐野勘十郎が、お手前を、一刻も早く、あの世へ送り込もう、と考えるのは、当然でござろうな」

そう云われて、近藤重蔵は、この人物らしい豪快な笑い声をたてた。

「江州とこの江戸の二箇所に、墓も建って居り、三年忌の法要もすませてもらって居る身ゆえ、いつ、殺されても、一向にさしつかえはござらぬ。……左様、佐野勘十郎の屋敷へ、これから、乗り込んで、彼奴を斬って、死花咲かせるのも、面白い！」

「せっかく、甦えられたおん身じゃ。大切にされるがよい。いや、ありようは、このふるい知己のために、役立って頂きたいとお願いしているのでござるわい」

「武部殿――」

重蔵は、老人らしからぬ、昂然たる胸の張りかたをして、

「身共の口を割らせるのは、おあきらめ頂きたい。生涯、絶対に、口外せぬと誓ったことでござる。ただの誓いではござらぬ。誓わざるを得ぬ事情がござった」

「……………」

「おいとまつかまつる」

「いま、出て行かれたならば、生命があぶないことは、申し上げるまでもないが……」

「いや、佐野勘十郎は、身共が、あの事柄に関する限り、口外せぬことを、知って居り申す。ご懸念無用にされたい」

「はたして、そうでござろうかな」

「武部殿――」

重蔵は、仙十郎を見下ろすと、
「もし万一、身共が、こんどこそ、本当の死人になり申したら……、その時は、ご遠慮なく、駒込西善寺にある、知友と門弟らが建ててくれた墓を、あばいて下さってよろしい。……但し、こう申し上げたからといって、身共が生きている間に、墓をあばいて下さっては、甚だ迷惑。これは、くれぐれも、念を押しておきますぞ」
そう云いのこした。

三

同じ日――。
佐野勘十郎は、西の丸から下城して来たが、この人物としては滅多にない不機嫌な様子で、
「しまつにおえぬ、しまつに――」
と吐き出しつつ、裃（かみしも）をはずして、畳にたたきつけた。
城中では、五節句の最終にあたる重陽の祝賀の儀式が、挙行された。その儀式のさなか、家慶が、内大臣にあるまじき振舞いに及んだに相違ない。
蔭（かげ）の守護役として、勘十郎は、困惑し、腹を立て乍ら、なんとか、その場をおさめて、下城して来たものと思われる。
用人や女中は、勘十郎が、時折り、家慶のことを、さげすんだ口のききかたをしているのを、知っているので、その不機嫌の理由を察することができた。
平服にきかえて、最近京都からつれて来た美しい妾（めかけ）に抹茶（まっちゃ）をたてさせてから、ようやく、勘十郎は、いつもの態度にもどった。

「日毎に美しゅうなるの。やはり、加茂川の水でみがいた肌は、ちがうの。隅田川の水でみがいた肌など、比べもならぬ。……西城府様に見せたら、一大事じゃわい。噂にならぬように、一歩も屋敷から出すことは罷りならぬ。江戸見物は、当分禁じるぞ。ははは……」

猿臂をのばして、その白い頰を、かるくたたいておいて、

「お、忘れて居ったぞ、書院に、客が待っていた」

と、立ち上った。

玄関に入った時、取次ぎの者から、西の丸の御広敷用人が来訪して、折入ってお願いの筋がある、とねがうので、書院に通してある、と告げられていたのである。

勘十郎は、謡曲・夜討曾我を、ひくくうなり乍ら、廊下を歩いて、書院に入った。

御広敷用人志守某は、血の気が失せるほどの緊張を保ち乍ら、坐りつづけていたが、勘十郎が入って来ると、両手をつかえた。

御広敷の役人は、身分はひくい。奥勤めに対して、御広敷勤めといい、いわば、民家にすれば出入口、もしくは取付の座敷にあたる御広敷の役人は、御側近いあたりをはばかって、御広敷勤めと卑下している。しかし、実際には、御広敷番は、かなり頭が高かった。

御広敷番ならではの不文律の特権があり、それが、しばしば、高い身分の士にも、頭を下げさせたからである。

目付に対して平伏するなどということは、よほど、この用人が卑屈な男か、さもなければ、腹に一物を蔵している証拠であった。

勘十郎は、この男に就いての予備知識はなかった。おのれのつとめ以外のことには、一切目を向けたことのない、いっそ愚鈍といってもいい、最も目立たぬ存在であった。もし病気で出仕し

なくなったとしても、三日で忘れられるような影のうすい人間は、どんな世界にもいるものであった。

「用向きは、何かな?」

勘十郎は、平伏したまま微動もせぬ志守某に、促した。

「お、お買い上げいただきたき品を、持参つかまつりました」

志守は、勘十郎を見ようともせず、どもり気味の口調で、云った。

「どんな品かな?」

「手前自身、したためました密書でござる」

「密書?」

「貴方様に、ご披見ねがわしゅう存じ……、三日間徹宵つかまつり、したためあげました密書にて——」

志守は、はじめて、顔を擡(あ)げた。

勘十郎は、その表情が、意外にもふてぶてしく、胆を据えたものであるのをみとめた。

——こやつ、案外の小悪党か!

勘十郎は、内心はっとなった。

「拝見しよう」

「ご披見ねがう前に、価額の儀を何卒(なにとぞ)——」

「ほう……、見せもせずに、値段をきめておきたいと云われるのか。これは、大層きつい相談だ。いくらかな?」

「さ、三百両にて——」

流石に、その金額を口にする瞬間、志守は、顔面を痙攣させた。
勘十郎は、べつにおどろきの気色もみせなかった。
「三百両のねらちのある密書か。早く拝見いたしたいものである」
そう云って、ひょいと、左手をさし出した。
志守は、小ずるく、
「三百両にて、お買い上げの儀、屹度ご承知頂きたく存じます」
「相わかった」
勘十郎は、部厚い封書を受けとった。
志守は、読んでゆく勘十郎を、まばたきもせず瞶め乍ら、口腔内のかわきに堪えかねるように、いくどとなく、突き出たのど仏を上下させた。
読み了えても、勘十郎の表情は、変らなかった。
「失礼だが、わしは、お手前を、毒にも薬にもならぬ、無能無才の用人と存じて居った。とんでもない見あやまりであった。端倪すべからざる明察の士が、御広敷に在ろうとは、いや、目付としてまことに不明であった。お詫びいたす」
「恐れ入ります」
「胸襟をひらくべき強力な味方を一人、得たと申せるな」
そう云って、勘十郎は、笑ってみせた。
「いえ、それがしは、べつにお味方に加えて頂きたく存じて、斯様な密書をしたためたのではありませぬ。ただ、永年の貧乏ぐらしに、ほとほといや気がさし、もはや五十路の坂にさしかかりましたゆえ、いささか、余生を、のんびりとすごしたく存じ……、それで――」

「相わかった、相わかった。まことに、尤もの気持でござるよ。御家内は、やはり内職をされて居られるか？」

「菊作りをつかまつり、大奥へお納めして、糊口の足しにいたして居る次第にて……」

「成程成程——。三百両あれば、左様さな、まず、御家内を楽にすることがおできだな」

勘十郎は、脇息下の銀の鈴を、鳴らし、用人が顔をのぞけると、三百両を持参するように命じた。

志守は、勘十郎があまりにあっさり承諾したので、かえって、不安をおぼえたか、

「お目付におことわり申し上げますが、それがしは、決して、その……、お目付に脅迫がましく、密書を持参つかまつりましたわけではありませぬので——、つまり、これは、あまりにも、かずかずの疑念が、重なり……、あるいは、もしや、と……」

「わかって居り申すよ。口には、されるな。……味方が一人、増えた、と思うまでのことでござる。明日からは、いままで通り、ご奉公専一にされい。……あ、そうだ、ちょっと、ひとつだけ、うかがっておこうかな。貴殿のほかに、このような密書をしたためて、この目付に、買わせようと思案している御仁は、まだほかに、御広敷に居られるかな？」

いかにも、なにげない口調で、訊ねた。

「いえ、それがしが、見渡したところ、他には誰も居りませぬ。それがし一人が、ひそかに、この儀、疑念を湧かせて……」

「ふむふむ、結構結構——」

勘十郎は、用人が、持って来た三百両を、無造作に、志守に押しやった。

「さ——受けとられい」

「忝なく……頂戴つかまつります」
志守は、風呂敷をとり出すと、六箇の切餅を、わななく手で、包んだ。
「味方になってもろうたお近づきに、一献さし上げようと存ずるが、いかがかな」
「い、いえ、それには、及びませぬ。一向に不調法でございますので――」
酒に毒でも入れられている、という懸念もある、という態度を露骨にみせて、志守は、そわそわと腰を上げた。おそらく、今宵うちに、江戸から逃散する肚づもりに相違ない。その手は、ぬかりなく、打ってあると思われた。
「では、これにて――」
志守は、挨拶もそこそこに、廊下へ出た。
あとから出た勘十郎が、
「御家内には、いままでの苦労をねぎらって、ひとつ、長唄か常磐津でも習わせられては、いかがかな」
と、すすめた。
「はい。左様つかまつるでござる」
志守は、追われるように、急ぎ足になった。
廊下が、鉤手になっていて、志守が、そこを曲ろうとした刹那――。
踏んだ廊下板が、はずれ、志守の五体は、その斜面をすべった。
あっ、と悲鳴とともに、三百両包みをつかんだ右手を、振りあげた。
背後に立っていた勘十郎は、充分の余裕を持って、脇差を抜きつけに、放った。
志守は、右手を、そこにのこして、廊下の下に設けられた深い穴底へ、落下して行った。

両断された右手は、宛然志守の執念を示すごとく、しっかと、金包みを摑みしめて、はなさずにいた。

抜刀秘法

一

江戸の蕎麦屋は、日暮れにたて込む。
仕事をすませた職人たちが、まっすぐに家路をいそぐのを、野暮に思われるのをきらって、ちょっと立寄って、一杯ひっかけてゆくならわしがあった。むしろ、独身者の方が、さっさと長屋へ戻って、着換えると、うなぎ屋あたりで精をつけて、廓や岡場所へくり込むのであった。
駒形堂をむこうに眺める諏訪町の角の「二八蕎麦」も、行燈に灯を入れたこの時刻、満員になって、あるじの松次郎は、いそがしい思いをしていた。
職人たちは、さわがしく喋りたてている。
「……だからよう、おめえが、昨夜、吉原から、附馬をつれてけえって来たから、ひと騒動起ったわけなんだろう?」
「ちがうんだ。馬だって、いろいろあらあ。おれが、乗ったのは、附馬じゃねえや、嬶だ」
「おめえの嬶は、馬かえ。伊豆の下田じゃ、淫売のことを、牛というがのう、自分の嬶を、馬と呼ぶのは、はじめてきいたぜ」
「だから、てめえのような四十にもなって、女房ももらわずに、へんずりかいてやがる唐変木と

は、一緒に飲みたくねえやな。……いいか、馬は馬でも、おんまだあ」
「按摩(あんま)なら知っているが……」
「うるせえ、黙ってきけ。おんまてえのはな、月に四五日、女がかい込むふんどしのこった」
「ふうん」
「雪隠(せっちん)へ女房お馬(んま)でかけつける、と狂句にもあらあ」
「どんなものだえ？」
「半紙をたてに八つにたたんで、その上へ、また二三枚巻きつけ、観世縒(かんぜより)で、両方の隅をむすんでおいて、紐(ひも)を通したしろものよ」
「へえ、乙なものだね」
「なにが、乙だ。おれは、昨夜、酔っぱらって戻って、嬶がおんまになってやがるのを知らねえから、乗っかかったのよ」
「馬なら、乗りかかりたくならあ」
「まぜっかえすな。そうしたら、嬶め、いま富士山は夕焼けだから、白雪の時にとかしてくれ、ってぬかしやがって――」
「山の神だけあって、しゃれたことを云うのう。それで、おめえ、かみさんの上から、おりたのか？」
「おりるもんけえ」
「そいつは、騒動にならあ」
「なんでえ？」
「月水のことを、おりものというじゃねえか」

くだらない会話を、きき乍ら、一人、黙然として、盃を口にはこんでいる客が、片隅にいた。
明日心剣であった。
この男は、十四年前、自ら禁酒を誓って、それを守って来ていた。その誓いを、この日、破ったのである。
にぎやかな雰囲気の中の孤独が、この男の面貌に、不用意に、心中の憂悶を滲ませているようであった。
――おれに息子がいたことを、お目付は、いつの間にか、しらべあげていた。
この衝撃は、そのまま、心剣の胸中に、重い澱になってよどんだのである。
いかなることがあっても、他人に知られてはならぬ秘密であった。
その息子は、今年十四歳になる。しかし、すでに、十万石の大名であった。
その稚い大名が、浮浪の兵法者の実子であることを知っているのは、国許に在る城代と常につき添っている御側役と、そして一人の老女のみであった。母親は、数年前に逝っていた。他にまだ三人ばかり、事実を知っている者がいたが、これは、心剣が斬っている。
城代と御側役と老女が、この秘密について、死んでも口を割る筈はないのだ。
にも拘らず、佐野勘十郎は、ちゃんと知っていたのである。どうして知ったのか、見当さえもつかぬことであった。
佐野勘十郎は、おどしたのである。
眠狂四郎側に寝返った場合は、お主の伜の一命を奪う、と。
そして、勘十郎は、「わしは、敵にまわった者に対しては、みじんの容赦もせぬ人間だ」と、云い添えたものであった。

たしかに、その通りの人物であることは、明日心剣も、やとわれてから一年あまりの間に、しばしば背すじの寒くなる思いをさせられている。

もとより、目下の心剣は、佐野勘十郎を裏切って、眠狂四郎の方に加担する存念は、毛頭ない。

ただ、おのれの秘密を、知られたことが堪えがたいのであった。秘密を守るためには、佐野勘十郎を斬ることも、衝動として、心剣の裡に、湧き起っている。

その意味では、佐野勘十郎は、口にすべからざることを、心剣に、きかせてしまったといえる。

二

「どうなされたな?」

不意に声がかかって、心剣は、われにかえった。

坊主あたまの、真黒な顔が、にこにこしていた。

広袖の十徳に、軽衫をはいた六尺ゆたかな老人で、心剣とは、同じ裏店の隣り同士であった。

広見堂と名のって、時折り気まぐれに、白頭巾でおもてを包んで、筮竹と天眼鏡を持参で、辻に店を張ることがあった。売卜をなりわいとしていない裕福なふところ具合が、その前身をにおわせていた。

あたまをまるめていたが、江州なまりのある二十歳ばかりの若い女と一緒にくらしていて、夜半に声をあげさせる生臭さを、心剣は、壁ごしに、知らされていた。

「大層滅入った様子をされて居る」

広見堂は、向いに腰を下ろして、にこにこし乍ら、心剣を見まもった。

「ひとつ、広見堂殿に、易をお願いいたそうか」

心剣が、笑いかえすと、広見堂は、手を振った。
「わしの易占は、でたらめもきわまるものでござってな。はははは……、うらなわれる方こそいい面(つら)の皮と申すもの」
「しかし、ご老人にみてもらった者から、きいたところでは、大層な蘊蓄(うんちく)の由――」
「なに……、ただ、むかし、書物を読みちらす職務に就いて居ったことがあるので、多少易占の方もかじってみたまでで、かじってみればおわかりだが、易占ぐらい、ばかげたものはござらぬ。……げんに、おのれ自身の明日など、どう筮竹をひねくってみたところで、見当もつくものではない。夜が明けてみたら、この首が落ちていた、というほどの大事ですら、さっぱり予測でき申さんな」
広見堂は、はこばれて来たもりを、老人らしからぬ気ぜわしさで、すすってから、
「ただ、亀の甲より年の功で、なにか悩みごとがおありなら、ご相談にあずかれば、なにか考えてさし上げられると存ずるが……」
と、誠意のある面持で、心剣の返辞を待った。
心剣は、
「ご好意忝ない。いずれ、そのうち、お力をおかりすることになるかも知れ申さぬ。その節は――」
と、頭を下げた。
「左様か。それでは、お先に」
広見堂は、出て行った。
入れちがいに、商家の番頭ていの男が、入って来たが、まっすぐに、心剣の前に来た。

心剣は、その男の顔を見知っていた。佐野勘十郎手飼いの隠密であった。
「明日さん――、おことわりしておく」
隠密は、あたりをはばかる小声で云った。
「なんのことか？」
「貴方も、あの年寄りが、近藤重蔵ではあるまいかと疑惑を抱いて、わざと近づいて居られたのであろうが、たしかに、まちがいなく本人と判定いたした」
「…………？」
「あの年寄りは、本日、ご老中水野越州邸へおもむき、側用人武部仙十郎宅に入って、一刻ばかりすごし申した。武部仙十郎は、旧知の間柄――。これで、本人にまちがいないものと断定いたすことができた。……近藤重蔵とは、近藤重蔵にまちがいなければ、即刻、討ちはたすようにとの厳命ゆえ、この任務はそれがしにはたさせて頂きたく、お願い申す。せっかく、貴方が、獲物にされようとした対手ですが、あしからず――」
それだけ云い置いて、隠密は、出て行った。
――あの老人が、近藤重蔵だったのか！
心剣は、大きなおどろきを、胸に抑えて、盃を口にはこんだ。
もう一人、隠密の話をぬすみぎいて、胸をさわがせた者がいた。
広見堂の喰べた蕎麦の道具を、下げに来たこの店のあるじの松次郎であった。
もとより、隠密は、あたりをはばかって話したので、松次郎はその内容をききとることはできなかったが、武部仙十郎、という名を耳にして、はっとなり、双方の鋭い表情から、容易ならざる事柄に相違ない、と察したのであった。

隠密が出て行くと、ほどなく、明日心剣も腰を上げていた。
——どうしよう？
松次郎は、あわてた。
店は、なお、七八人の客で、にぎわっていた。
奥に下働きの老婢が一人いるだけで、これに店をまかせることはできなかった。
——すてはおけねえ！
松次郎は、自分で自分の顔色が変っていることが、わかった。
坊主あたまの老人も、浪人者も、ちょいちょい、この店にやって来るので、近所に住んでいることは、あきらかであった。
せめて、そのすまいを、松次郎は、つきとめておきたかった。
——ままよ、客はおっぽり出しだ！
松次郎は、老婢に留守を命ずるために、急いで、台所へ入った。
あっ、となったことだった。
「旦那！」
台所の上り框に、眠狂四郎が、腰を下ろしていたのである。
「ど、どうなすったので？」
「どうもせぬ。さっきから、ここに、邪魔をしていた。お前こそ、なにをあわてて居る？」
口辺に冷たい薄ら笑いを刷いている狂四郎を眺めて、松次郎は、首を振った。
「旦那は、やっぱり、てまえの惚れている御仁でございます。肝心の時には、てまえがお報せしなくても、ちゃんと、その場所にいなさる」

「わたしは、あの坊主あたまの老人のあとを、押しかけ護衛役で、尾けて来た。もう一人、老人のあとを尾けている奴がいた。……老人は、この店に入って、あの浪人者に会った。偶然のことに、浪人者とも、わたしは顔見知りであった。……老人が出て行ったあとで、老人の尾行者が、入って来て、浪人者となにか、話した。お前は、その話を、ぬすみぎいたのではなかったか？」

「その通りでございますよ」

三

尾行者の口から、武部仙十郎の名と、

「この任務はそれがしにはたさせて頂きたく、云々」という言葉が吐かれたのを、松次郎が、ききとった旨を、つたえると、狂四郎は、やおら、腰を上げた。

「お前と顔を合わせていると、旅の思い出がよみがえって来る」

「はい」

「今宵も、旅の道連れのつもりで、わたしと一緒に来る気にならぬか？」

「お供をいたします」

往還へ出ると、松次郎は、

「旦那は、あの年寄りの住居を、ご存じなので――？」

と、訊ねた。

「知って居る。あの浪人者も、たぶん、同じ長屋であろう」

――ずいぶん、おちついていなさるが、手おくれになりはせぬのかな？

松次郎は、不安をおぼえた。

狂四郎の方は、明日心剣のことを、考えていた。

――明日心剣が、どう出るかだ？　隣人となった近藤重蔵を、仲間の刺客が襲うのを、ただ、黙って傍観するとは、思えぬ。

そういう男ではない、と狂四郎は、看て取っていた。非情な暗殺者には、不向きな兵法者なのだ。

おそらく、佐野勘十郎に、何かの恩を売られて、やむなく、暗殺者の立場に置かれているが、おのれ自身の心をいつわることはできぬ性格であろうし、まず、剣を抜く時は、兵法者としての面目を考えるに相違ないのだ。

「旦那――」

松次郎が、心配げに、狂四郎に声をかけた。

「おちついておいでございますが、大丈夫なので――？」

「たぶん、あの浪人者が、われわれを見物人の側にまわらせてくれる、と思う」

狂四郎は、こたえた。

広見堂――近藤重蔵は、江州から連れて来たさきという女の給仕で、夕餉(ゆうげ)に時間をかけて、秋の宵をすごしていた。

「さき、そろそろ、大溝(おおみぞ)が恋しゅうなったのではないか？」

「いいえ――。江戸の方が、愉しゅうございます」

「それならよいが……、この爺さんと一緒に、あたら若い身空を、裏店ぐらしをするのは、いや気がさすこともあろうと、気の毒に思って居る」

「旦那様！」

さきは、きつい語気になって、

「わたくしは、幸せでございます。生れてはじめて、こんな幸せなくらしがあることを、旦那様が教えて下さいました」

と、云った。

物心ついた頃から、継母の虐待に堪えぬいて来た女であった。

「そうか、それなら、よいのだ。……ははは、わしも、気が弱くなったものだ。……このわしが、女子の顔色をうかがうようになったとは――」

重蔵が、感慨を吐息にした時であった。

突如、ひくいが異様な音が、壁で起った。

「あっ！」

さきが、小さな悲鳴をあげた。

壁を、白刃がつらぬいて、切先が光ったのである。

白刃は、すぐに抜きとられた。そして、その孔から、細くたたんだ紙片が、するすると押し出されて、畳に落ちた。

重蔵は、さきに、それをひろわせて、ひらいてみた。

『おん身に、危険が迫り居り候。即刻、お立退きの程、おすすめ申し候』

そう記してあった。

「……？」

重蔵は、どうして隣家の浪人者が、こちらが生命を狙われていることを知っているのか、不審

をおぼえた。
蕎麦屋で、なにか、煩悶に陥ちている様子を示していた姿を思い泛(うか)べ乍ら、
——何故であろう？
重蔵は、じっと、文面を眺めた。

四

それから四半刻が過ぎた頃、隣家で寝そべっていた明日心剣は、
——どうやら、立退いてくれたらしい。
と、一人微笑をもらしていた。
次の瞬間——。
心剣は、一廻転して、立った。
立った時には、すでに、その差料を左手にしていた。
踏み込んで来た気配はなかったが、その時、おもて側からの障子が開かれたし、つづいて、台所から、人影が動いた。
おもて側から入って来たのは、蕎麦屋で、近藤重蔵の討手たることを宣言した隠密であった。
「明日さん、まさかと思っていたが、隣りを空屋にさせたのは、貴方のしわざだったな」
隠密は、鋭く睨(にら)みつけて、云った。
心剣は、
「わしは、知らぬ」
と、かぶりを振った。

「しらをきっても、証拠がのこって居る。……壁に、孔をあけて居るではないか」
「以前から、あいていたのであろう」
「ふふ……」
隠密は、せせら嗤った。
「畳に、壁土がこぼれ落ちていたぞ。……われわれは、貴方を、信用してはいなかった。お目付にも、かねがね、そう申し上げていた。いかに、剣が強くても、味方になれる人間ではない、と——。やはり、その通りであった。お目付に、この旨を報告する前に、われわれは、貴方を成敗する」
心剣は、それに言葉で応ずる代りに、構えを示した。
鋼鉄造りの鞘を、栗形の下で、逆握りにして、胸前で、水平に横たえた。
隠密二人は、左右から、じりじりと、肉薄した。
もとより、渠らは、心剣が鞘もまた武器にして、二刀流を使うことを、充分心得た上で、討とうと迫っていた。
心剣の業に対する防禦と攻撃の工夫が成っていると思われた。
心剣の方は、動かずに、待ったばかりである。
隠密たちは、裏切り者を刃圏内に容れた刹那、同時に、左右から、斬りつけた。
これに対して、心剣の身の動きは、むしろにぶいものだった。
宛然、その場に、斬り伏せられるがごとく、身を沈めた。
しかし——。
それは、心剣が、咄嗟にえらんだ自身でも思いがけぬ業であった。

心剣は、抜かずに、逆握りの鞘を、おのが頭の上へ置いた。

それへ、左右から、二本の白刃が、落ちた――瞬間、心剣は、目にもとまらぬ居合抜きの白刃とともに、おのが軀幹を、おそるべき迅さで、旋回させた。

閃きまわる白刃の円の中に、隠密たちの空けた胴があった。

ふたつの胴は、存分に、薙ぎ斬られた。

家鳴りを起して、敵たちが仆れるのに、目もくれず、心剣は、ゆっくりと立ち上った。

その双眸には、異常な光があった。

「出来たぞ！……よし！　眠狂四郎を討てるぞ！　勝てる！」

その独語を、ほとばしらせた。

明日心剣は、この時、兵法者以外の何者でもなかった。

味方を斬ったために、佐野勘十郎が、どのような激怒を爆発させるか、そしてまた、わが子がどのような危険にさらされるか――そのことを、全く忘れていた。

たったいま成った秘奥の業によって、眠狂四郎という強敵に、絶対に勝つことができる、という歓喜が、全身に満ちたのである。

狂気じみたその意識を、現実にひきもどしたのは、

「ごめん下さいまし」

その声であった。

心剣が、頭をまわすと、戸口に立っているのは、蕎麦屋のあるじであった。

この修羅場に、すこしもおそれる気色もなく、

「失礼でございますが、その仏お二人を、てまえに、葬らせて頂きます」

「なに？……なんのことだ、それは？」

「眠狂四郎の旦那が、お討ちになったことに、させて頂きとう存じます」

「なんだと？」

「その方が、都合がいい、とご当人が、仰言っているのでございます。……貴方様は、てまえの店で、まだ、飲みつづけておいでだった——そのあいだの出来事、ということにして頂きます」

死体消失

一

——やっぱり、薬湯くせえな。

巾着切の金八は、天井裏の暗闇の中で、くん、と鼻翼をうごかした。

巣鴨御駕籠町の御広敷添番組屋敷の一軒で、五間ばかりの小さな家であった。

どの部屋かで、薬湯を煎じていれば、天井裏までにおって来るのは、あたりまえだが、金八が胸の裡で呟いたのは、長患いの病人がいる、という意味であった。

稼業柄、目も鼻も耳も、人一倍利く。

夕刻、下見に、組屋敷の狭い道に入って来て、この家の前に立った時、金八は、なんとなく、陰気な印象を受けたのである。

組屋敷の一軒であるから、向いも左右も、隣家の構えは、全く同じである。にも拘らず、この家だけが、陰気であった。

忍び込んでみると、やはり薬湯のにおいがしたのである。
――どうせ、覗き視するなら、大名とか、旗本でも、千石以上の屋敷の方が、景気がいいや。
金八は、そろそろと移動を開始し乍ら、かぶりを振った。
その時、玄関に、人の訪れる音が、ひびいた。
やがて、廊下に跫音が近づき、この陰気なしめった空気を吹きはらうような高い笑い声をあげて、
「湯治だよ、湯治――。このやまいは、気分が肝心だよ、佐喜さん。一に看病、二に薬、というが、あんたも、この三年よく看病したが、やはり、当人が気分をかえなけりゃ、治癒はおぼつかん。湯治で、気分をかえるのだな」
その性格をむき出したような訪客の言葉に、病室にみちびく妻女の方の返辞は、なかった。
天井裏の金八は、訪客とともに、移動した。
病室は、添番屋敷独特の長六畳（畳が六枚つながった奇妙な部屋）があてられていた。
病臥しているこの家の主人松尾又七郎は、まだ二十六歳の若さであったが、その胸部疾患はおそらく十代からのものとおぼしい、およそ無気力な、蒼い面相をしていた。
掛具の上に置いた両手は、女のように細く白かった。
訪客の方は、これと対蹠的に、逞しい骨格と顋の張り出した浅黒い相貌の持主であった。
同じこの組屋敷に住む添番頭の黒辺三郎次という同年配の男であった。
「又七郎、なんだな、用向きとは？」
黒辺三郎次は、座に就くと、訊ねた。
長六畳なので、枕の上から、又七郎の顔を覗き込むあんばいになった。

「お主に、ききたいことがある」
又七郎は、天井を仰ぎ乍ら、かすれた細い声音で、云った。
「なんだな？」
「高麗人参（こうらいにんじん）は、よほど高価な品ではないのか？」
「うむ。高いのう。われわれ添番風情（ふぜい）の俸禄（ほうろく）では、手が出ぬ」
「その高麗人参を、わしは、この春から、毎日、煎じて、飲んで居るのだ」
「ほう、それは、結構な話だ」
「結構ではない。わが家に、そんな高価な品を買える金はない。にも拘らず、佐喜は、わしに、毎日、飲ませて居るのだ」
「ふむ。……薬湯が高麗人参であることを、どうしてお主知った？」
「先日、水戸から伯父が、見舞いに来てくれて、佐喜が煎じているところを、見たのだ。……伯父は、いくばくかの見舞金を用意して参ったのだが、高麗人参を買うほど余裕があると知って、安堵（あんど）したらしい。……わしの気づかなかったことだ」
「ふむ」
「佐喜が、どうして、どこから、そんな金子を、調達できたのか、わからぬ。……お主に、きけば、知っていると思うて――」
「佐喜さんに、きけばいいではないか？」
「きけぬ」
「なぜだ？」
「いままで、わしに、かくしていたのは、佐喜が、わしに打明けられぬ理由があったからに相違

ない。……わしは、きくのが、怕いのだ」

そう云って、又七郎は、目蓋を閉じた。

その寐顔を見まもる客の表情が、友人らしからぬ冷酷なものであるのを、天井裏から、金八は、看てとって、おや、と思った。

——この野郎、もしかすると、食わせ者じゃねえのかな。

直感が、働いた。

二

御広敷添番という役は、江戸城大奥に就いた公儀役人であった。御広敷用人、御用達、番の頭、そして、その次が添番で、扶持米百俵取り。大奥へ出入りする人々を取締る、現代でいえば、皇宮警察の警部といったところであった。

あまりの微禄ゆえに、大奥へ出入りの御用達商人たちの賄賂をあてにして、辛うじて、暮し向きをたてていた。

たとえば——。

本丸御殿の建築面積は、表向、中奥あわせて四千六百八十八坪、大奥六千三百十八坪、その他あわせて総計一万一千三百七十三坪の宏大さであった。

大奥の畳を替えるのだけでも、大仕事であった。この畳替えには、老中も足をふみ入れぬ大奥へ、畳屋が入ったが、その監視を、添番が為した。

畳屋からのつけとどけがあったのは、当然である。

あるいは、また、ごくみみっちい賄賂の例としては——。

大奥には、常に数人の女按摩が、詰めていたが、いずれも小ずるい欲深な者ぞろいで、長局の各部屋をまわって、按摩の術よりも、べんちゃらが巧みで、せっせと貰い物を、ため込んでいた。彼女たちの一番怕いのは、御広敷添番で、もし睨まれると、お払い箱になるおそれがあったので、その貰い物の中から、添番衆に、さし出すならわしであった。

女按摩からもピンはねをする、という屈辱にも堪えなければ、添番は、暮してはいかれなかったのである。

松尾又七郎は、五年余も病臥して居り、そのわずかな賄賂さえも得られぬ身であった。百俵の扶持米だけで、一年をすごさなければならなかったのである。貧窮ぶりは、人にも語れぬほどの惨めなものだった。

どうして、妻の佐喜が、高価な高麗人参を買うことができたのか――又七郎にとっては、奇蹟でも起ったのではないかぎり、その金子の入手に就いて、見当もつかなかったのである。

「たのむ。佐喜に、それとなく、きいてみてくれぬか」

又七郎は、二十年来の親友である黒辺三郎次に、たのんだ。

「よかろう。ひき受けた」

三郎次は、承知した。

それから、小半刻、三郎次は、江戸城内で起った出来事を、面白おかしく、病臥の友人に、語ってきかせておいて、さりげなく、腰を上げた。

三郎次は、病室を出ると、わざとらしく、大声で、近頃の流行唄をうたい乍ら、玄関へ出たが、すぐ踵をまわすと、跫音を消して、そうっと、病室の前を通り過ぎて、茶の間に、忍び入った。

茶の間には、佐喜という又七郎の妻が、ひっそりと坐って、俯向いていた。

さほどの美人というのではないが、肌が透けるように白く、嫩(やわら)かな魅力は、比類がないといえた。

古(いにしえ)から、嫋々(なよなよ)とした細腰が、美人の一要件とされているが、元来はあまり魅力のないものである。

細腰の女が、男をひきつけるのは、清楚(せいそ)な雪膚(ゆきはだ)の気品があるからであり、そういった女は、滅多にいるものではなかった。

佐喜は、繊弱な痩型(やせがた)であり乍ら、その雪膚によって、ふしぎな色香をたたえていた。

三郎次は、佐喜の前に、しゃがみ込むと、

「佐喜さん、あんたの亭主は、病人でいるだけあって、カンが鋭くなって居る。……あんたのからだから、別の男のにおいをかいだ」

と、云った。

佐喜は、はっと、顔を擡(あ)げて、恐怖の眼眸(まなざし)で、三郎次の冷やかな視線を、受けとめた。

三郎次は、にやりとすると、

「おれは、西の丸の添番だ。知っているよ。……知っていて、今日まで、知らぬふりをしていたのさ。知っているどころか、あんたが、上様のお褥(しとね)に入った時、莨(たばこ)道具をはこんだお犬（下級女中）から、あんたが乱れるのを目撃した、ときいているんだ。無理もねえ。あんたは、すくなくとも、この五年、又七郎に抱かれていねえのだからな――」

「う、うそです！　乱れた、なんて、そんな……」

佐喜は、必死になって、否定した。

「ははは……、ひっかかったな。実は、おれは、知らなかったんだ。近頃、上様のお振舞いが変

ってしまって、大名や旗本の奥方を所望なさる、という噂があったが、まさか、添番の女房まで、所望なさるとは、思っていなかったさ。……ただ、この四月に、大奥から、この家に、迎えの駕籠が来たことがあるそうな。まさか、と思っていたが、やっぱり、あんたも、上様のおなさけを蒙った一人か。……成程、これで、謎は、解けたぜ。……佐喜さん、お褥代として、いくら、頂いたかね？」

「………………」

佐喜は、恐怖と困惑で、唇をわななかせるばかりであった。

「百両——いや、そんなケチな金じゃねえだろうな。三百両！　そこいらだ、と見当がつくぜ。三百両なら、毎日、良人に、高麗人参を煎じて、のませることはできる」

「………………」

「佐喜さん。おれは、又七郎から、あんたがどうして高麗人参を手に入れたか、きいてくれとたのまれた。……どんな口実をもうけるつもりだったかね？」

「わたくしは……」

佐喜は、肩で喘いだ。こたえる言葉がないようであった。

「どうやら、その口実は、おれが、つくってあげることになるらしいな」

「黒辺様！」

三郎次は、にやにやし乍ら、いきなり猿臂をのばして、佐喜の手をにぎった。

三

「な、なにをなされます！」

佐喜は、あっとなって、身を引こうとした。

「佐喜さん、しかたがなかろう。あきらめることだな。一度、つまずくと、つまずきぐせがつく。……あんたは、貞女だ。ただ、対手がわるかった。否と拒める対手じゃなかった。しかし、そのつぐないとして、高麗人参を手に入れて、良人に、のませることができた。……正直なところ、又七郎は、もうあまり、長くは生きられまい。あんたが、だまし通して、あの世へ、又七郎を感謝させ乍ら、見送ってやるのが、貞女のつとめと申すものだ。……ここに、おれという悪党が、現われたが、口を封じておくのは、あんたとしては、貞女として、為さねばならん辛い振舞いだが、やむを得んのではないかな」

――畜生！　勝手なことを、ほざきやがる！

金八は、天井裏で、義俠心に燃えたが、眠狂四郎から、どんな出来事を見せつけられても、黙って、ひきあげて来い、と命じられているので、動かずにいるよりほかはなかった。

三郎次は、佐喜を、抱き寄せた。

佐喜は、いったんは、烈しく抵抗を示したものの、

「おのが妻が、西の丸様に犯されたと知ったら、又七郎は、衝撃で、寿命を縮めるぞ！」

と、ひくく鋭く、きめつけられると、四肢の力を抜いた。

三郎次は、久しく狙っていた獲物をようやく仕止めた猟師が、その毛皮を剝ぎとるように、佐喜の裳裾を摑んで、するすると、ひき捲った。

水色の湯文字の下にかくされていた下肢が、ほっそりとした滑らかな、白い葱のような美しい線をあらわにされるさまは、覗き見る金八の目には、いっそ、いたいたしいものに、映った。

三郎次は、佐喜の唇を、口でふさぐと、容赦なく、片手を、捲りあげた衣の下へ、もぐらせて、

い、ひしと合わせた腿と腿の奥を、さぐりはじめた。

金八の総身が、かあっと熱くなった。

——我慢ならねえ！

女が、悩殺型の豊艶な肉づきの肢体の持主であったならば、これほどのあわれをおぼえはしなかったろう。

いかにも犯されることが、いたいたしい清楚な細腰雪膚が、金八を、正義漢として、奮然とさせた。

金八は、ふところから、匕首を、ひき抜いた。

天井板をひっぺがしざま、匕首を、手裏剣にして、この小悪党へ、投げつけてやろう、とほぞをかためたのである。

しかし——。

金八が、天井板をひっぺがすよりも、一瞬はやく、障子が、ひき開けられた。

佐喜から、ぱっととびはなれた三郎次は、そこに、幽鬼のように立つ又七郎の姿を、見出した。

「貴、貴様っ！」

又七郎が、憎悪をこめて、呻きつつ、そろりと一歩入って来るや、三郎次は、無我夢中で、とびかかった。

渾身の力をこめて、又七郎の頸を締めつける三郎次を、どうして、天井裏から、とび降りて、匕首で突き刺してやらなかったか、と後のちまで、金八は、悔んだことである。

四

松尾又七郎の葬儀は、あいだに一日置いて、二日後にいとなまれることになった。友引だったからである。

妻の佐喜は、その友引の日一日、玄関わきの長四畳に臥して、姿を見せなかった。看病疲れが一時にどっと出た、という理由に、人々は、納得した。

親戚は、水戸にあるだけであったので、通夜をとりしきったのは親友の黒辺三郎次であった。

三郎次は、不謹慎なくらい絶えず大声で笑いたて乍ら、葬儀の用意を、てきぱきとやってのけた。

葬儀前夜は、しきたりによって、組屋敷から、籤を引いて、七八人の妻女が集まって、精進料理をつくり、通夜の客に振舞った。

佐喜も、その席には姿を現わして、客たちをもてなしたが、血の気を失った蠟色の顔と、いまにも失神して倒れそうな挙措を眺めて、人々は、ふかく同情した。

通夜の客たちが、ひきあげたのは、二更（午後十時）を過ぎてからであった。台所を片づけていた添番の妻女たちも、それからほどなく、去った。

あとには、佐喜と三郎次が、のこされた。

急に、屋内がひっそりとしたが、三郎次は、一向に態度もかえず、

「酔ったな。……ひさしぶりで、思うさまに、飲んだ」

と、げっぷを吐いてみせた。

佐喜は、消え入りたげに、薄い肩をおとして、俯向いていたが、

「……おそろしゅうございます」

と、呟いた。

その時であった。
「三郎次！」
どこからともなく、陰にこもった声が、ひびいて来た。
「な、なにっ?!」
三郎次は、鎌首をあげて、きょろきょろと、見まわした。
「な、なんだ？」
「三郎次！　このうらみを、いま、はらしてくれる」
「くそっ！」
三郎次は、突っ立った。
とたんに、方形の坐棺が、がたがたとゆれた。
佐喜が、悲鳴をあげて、遁(のが)れようとしたが、腰が抜けて、起てなかった。
「お、おのれっ！」
三郎次は、なげしの槍をひっ摑むや、棺を、ぶすりと貫いた。
奇怪なことは、続出した。槍は、棺に突き刺さったまま、三郎次が、いかに力をふりしぼって、ひき抜こうとしても、びくともしなかった。
「く、くそっ！」
三郎次は、槍の柄をはなすや、脇差を抜きはなった。
「三郎次！　幽霊を斬ることはできぬぞ！」
姿のない声が、あざけった。
三郎次は、狂い立って、棺を突きとばした。

棺は、大きくひとゆれしたが、倒れなかった。
「おのれがっ！」
三郎次は、脇差を逆手に摑むや、棺へのしかかって、蓋へ突き立てようとした。
その刹那――、
棺の中から、白刃が閃き出て、三郎次の咽喉を刺し貫いた。
その光景を見てから、佐喜は、意識を喪った。

佐喜が、蘇生した時、座敷は何事もなかったように、ひっそりとしていた。
三郎次の死骸は、そこにはなかった。
起き上った佐喜は、悪夢でもみていたように、しばらく、茫然と自失していた。
廊下に跫音がして、佐喜は、われにかえった。
見知らぬ異相の浪人者が、入って来たのに、佐喜は、怯えた。
眠狂四郎は、佐喜の前に坐ると、
「狂言は、そなたが、意識を喪っているあいだに、幕が降りた」
と、云った。
「く、黒辺様は、ど、どこに――？」
「その棺の中に、いる」
「え？」
「そなたの良人のなきがらは、すでに、昨日のうちに、棺からとり出して、当家の菩提寺の墓地に、葬ってある」

「…………」

佐喜は、何者とも知れぬこの浪人者を、啞然として、見まもった。

「わたしは、必ずしもそなたの味方になるとは限らぬ男だ。しかし、決して、敵にはならぬ、と約束できる」

「…………」

「ひとつだけ、ききたいことがある。かくさずに、こたえてもらいたい。そなたに代って、良人の仇を討ったのは、ひとつだけ質問したいためであった」

「…………」

「この春、そなたが、西の丸大奥で、寝所に入れられた夜のことだ。……そなたは、西の丸殿に、抱かれた時、どのような愛撫を受けたか、だ」

「…………」

「はずかしかろうが、かくさずに、教えてもらいたい。これは、重大なことなのだ。そなたの言葉によって、あるいは……」

そこまで云いかけて、狂四郎は、口をつぐむと、佐喜の返辞を、待った。

朝の鳥追い

一

四半刻が、過ぎた。

良人ならぬ、良人を殺した敵の屍骸を納めた棺を前にして、御広敷添番松尾又七郎の妻佐喜は、うなだれたまま、沈黙をまもって、微動もせせぬ。

対座した眠狂四郎の忍耐はつづく。

口外し難いことを云わせようとするのであった。こうした場合、おどして告白させることの徒労を、狂四郎は、知っていた。

女がすすんで口をひらくのを、待つよりほかにすべはなかった。

狂四郎は、腕を組んで、佐喜を見まもって、待っている。

ようやく――。

佐喜は、顔を擡げた。その眼眸は、心を決めた者の、おちついた色を示していた。

「西の丸様は、けだものでございました」

佐喜は、はっきりと、云った。

「愛撫ではなく、さいなんだ、というのか？」

「はい」

「どのようなさいなみかたをされたか、云って頂こう」

「…………」

「そなたが正直に打ちあけてくれることによって、この後、そなたのような生贄を出さぬことができるかも知れぬ」

佐喜は、そう云う狂四郎を、はじめて見かえした。

「西の丸様は、わたくしを素裸になさると、熊の皮の上に……」

「熊の皮？」

「はい。……熊の皮の上で、まるで、わたくしを、犬か猫のように——」

そこまで云って、佐喜は、俯向いた。

狂四郎は、その頬を泪がつたうのを眺めて、これ以上訊ねることの残酷をおぼえたが、この機会をのがすわけにはいかなかった。

「異様の振舞いとしては、そのほかには——？」

冷たく問うた。

「血汐のような赤い液を、わたくしのからだにお塗りになり……、なにやら、意味のわからぬ、呪文のような言葉を、お口になさり乍ら、……犬のように匍わせたわたくしの——」

瞬間。

狂四郎は、背後の障子をつらぬいて、飛んで来た矢を、払うといとまもなく、ぱっと、身を伏せた。

矢は、狂四郎の頭上を越えて、佐喜の胸に、突き立った。

畳を一廻転して、狂四郎は、壁ぎわへ、立った。

矢は、つづけて数本、障子をつらぬいて来た。

それを待って、障子を蹴倒した狂四郎は、縁側を跳んで、庭へ躍り出ざま、数人の侵入者の一人を、無言の抜刀裡に、斬り伏せた。

敵がたに、第二矢をつがえるいとまを与えぬ猛然たる反撃であった。

十坪にも足らぬ庭の狭さも、かえって、狂四郎にとって、有利であった。

晩秋の冴えた月光を撥ねつつ、無想正宗が迅業から迅業へと閃くたびに、肉が截られ骨の断たれる音がひびいた。

敵を一人残すと、狂四郎は、動きを停めた。
「戻ってかしらに報告してもらおう。そちらが、どのように躍起になって防ごうとも、こちらの攻めはしだいに早くなって来た、と眠狂四郎が申した、と」

二

その挑戦の言葉は、半刻後には、佐野勘十郎の耳に入れられた。
京都からつれて来た美しい妾（めかけ）に、からだをもませていた勘十郎は、庭さきにうずくまった隠密から、伝えられると、いきなり、頤をのせていた枕を摑んで、抛（ほう）りつけた。
「それを、三方（さんぼう）代りに、臀敷（しりし）きにせい」
珍しく、激しい憤りをみせておいて、立ち上った。
「出掛けるぞ。仕度せい」
勘十郎は、駕籠ではなく、馬をえらんだ。
もうそろそろ、東の空が、しらむ時刻であった。
疾駆して行く往還の、左右の武家屋敷の塀（へい）の白さが、次第に浮きあがって来ていた。
勘十郎が行き着いたのは、平川町から麴町（こうじまち）三丁目へ抜ける通りに面した屋敷のひとつであった。
去年から、大奥医師となった渋江養庵（ようあん）という蘭学者（らんがくしゃ）の屋敷であった。
蘭学の大奥医師としては、すでに、桂川家があったが、なぜか、渋江養庵という無名の蘭学者が、去年からとりたてられて、将軍家斉（いえなり）の脈をとりはじめていたのである。二百石高、御番料百石というのが、大奥医師の扶持（ふち）であったが、その屋敷の構えは、三千石の旗本のそれに匹敵していた。

「御匙」と称ばれる将軍家付きの医師は、もともと、大層な収入であった。盆暮には、千両ずつの薬礼が、大奥から、あったのである。扶持などは、ものの数ではなかった。

御典医には、法印、法眼、法橋という位の順列があり、これまでの慣例として、ひと跳びに、法印、法眼になれるものではなかった。

御目見医師（見習）から、表医師になり、御広敷見廻りとなって、大奥女中の診療に当っているうちに、その腕を知られて、若君あるいは姫君付となって、ようやく御番料を頂戴し、幾年かの経験を積んだ挙句、えらばれて、「御匙」になれるのであった。

ところが、渋江養庵は、去年長崎から出府して来て、いきなり、「御匙」に召出されたのであった。

佐野勘十郎は、宿直の見習いに、

「通るぞ。起せ」

と云っておいて、さっさと、書院に入った。

勘十郎は、養庵が起きて来るあいだ、じっとして待ってはいなかった。

床の間のとなりの違い棚に、ずらりとならんでいる機械に近づいた。

それらは、いずれも、異国製の顕微鏡であった。

木製のもあり、真鍮製のもあった。鏡筒に皮革を巻いたのや、唐草の鏤金を施したのや、洋文字を浮彫にしたのや、それぞれ趣向がこらしてあった。

勘十郎は、しかし、これらが、なんの機械か、判らなかった。

片隅に、天明の頃に著わされた森島中良の「紅毛雑話」がのせてあり、その第三巻の巻末の頁がひらかれてあるのを、勘十郎は、手に把ってみた。

顕微鏡のこと

近頃舶来「ミコラスコーピュム」というむしめがねあり。形図の如し。種々のものをうつし見るに、その微細なる事、凡慮の外なり。塩は、粒々みな六角なり。蕎麦粉は、いかほど細き粉にても三角なり。燈心は、糸瓜の如し。黴は、菌の形なり。水は、麻の葉の如き紋あり。氷に縦横の紋をなすは是なり。酒は、百沸湯の如くうごくなり。是を飲めば、運行の血液を鼓動する故、胸踊り、面に血色を発するも宜なり。予、伯氏（桂川国瑞）と倶に、見たる中に、虱の古くなりたるが、脇腹破れて、鰯の骨の如き肋骨あらわれ、くされ爛れたる腸に、茶たて虫の如き蛆たかりたり。目鏡をはずして見れば、いささか色のかわりたるように見ゆれども。肋骨も見えず蛆も見えず……。

「お待たせいたしました」

養庵が、入って来た時、勘十郎は、顕微鏡を、行燈のわきにとりおろして、おのが頭髪を一本、ひき抜いて、のぞいていた。

「これは、面白いものだの」

勘十郎は、顕微鏡から、目をはなすと、笑い乍ら、云った。

「左様――」

まだ四十年配の、役者のように面高で、馬面の養庵も、笑い乍ら、

「それで、つぶさに眺めますと、肉眼ではとうてい見わけられぬものが、判明いたしますな。たとえば、貴方様の髪毛と、てまえの髪毛は、全く同じようでいて、その顕微鏡にかけてみれば、顔がちがっているように、ちがって居りまするな」

「ふむ」

勘十郎は、頷いて、

「どうやら、腐った食物を、これで観察すると、必ず目に見えぬ蛆がわいて居る、とみとめられることだな」

「まずは、まちがいなく――」

「とすれば、その蛆だけを採って、食わせれば、その者は、患って、斃れる」

「そういうことに相成ります」

「これまでは、殺すには、毒薬をくらわせたゆえ、それとすぐ、相判った。……蛆をくらわせて、患わせれば、殺したとは、判らぬことに相成る」

「…………」

養庵は、勘十郎の冷酷な言葉に、眉宇をひそめた。

勘十郎は、こともなげな口調で、

「お主に、ひとつ、それをやってもらおうか」

と、云った。

「誰を、亡き者に――？」

「御匙ならば、対手はきまって居る」

「えっ？」

「ははは……、うろたえるな。こういう事態にたちいたることもあろうか、と思って、お主を、御匙に推挙しておいたのだ。……お上の在職は、ちと長すぎたのう。征夷大将軍になられたのは、こうっと……天明六年、いや、七年であったかな。……いずれにしても、五十年に垂んとする。

長すぎるではないか。そうは思わぬか、お主？」

「まことに、そう申されれば……」

「在職五十年――お上は、いったい、なにをされたかな。五十余人の子女を、もうけられた。まことに、冠絶した精力ぶりではあった。それだけであった、と申しては、酷になろう。閣老に、政道をまかせた、ということも功になるかも知れぬな。定信、信明の両松平、本多忠籌（ただかず）ら、人材が出て、守って、失わぬように努めた。おかげで、天下は泰平であった。それだからと申して、太政大臣までのぼりつめる資格があるとは申せぬ。坐して、もろうた太政大臣だ。……始祖（家康）をみるがいい。二代に職を譲って、ようやく死神を迎えてから、太政大臣になられて居る。三代（家光）は左大臣、五代（綱吉）は右大臣、八代（吉宗）ですら、右大臣に、とどまられた。しかるに、当代は、在職中に、太政大臣を兼ねた。源氏足利以来、はじめての珍事だ。これを、天下泰平のしるしとするか。ばかげて居る。……非常の巧ありてこそ、非常の福を受く、と申すもの。先祖に討死させて高枕、などとは虫がよすぎる」

勘十郎は、容赦なく、今日の天下人を罵倒（ばとう）して、

「というわけで、せめて、その最期ぐらいは、少々の罰があたっても、やむを得ぬではないか」

と、云いはなった。

養庵は、勘十郎に見込まれた男だけあって、一癖ある曲者（くせもの）とみえて、一瞬の驚愕をしずめると、おちついた気色を示し、

「お目付には、西城府様を、一日もはやく、御本丸にお入れしよう、とお考えでありますか？」

「いそぐのう。猶予して居れぬ」

勘十郎は、立ち上ると、

「たのむ」
と、云い置いた。

三

「墓をあばくか」
不意に、眠狂四郎が、そう独語したのは、諏訪町角の「二八蕎麦」で、冷酒をひと息にあおってからであった。
朝もまだ早く、客といえば、ほかに一人、まだ若い鳥追いが、笠と三味線をわきに置いて、つつましく、ざるを喰べているばかりであった。
土竈の前にいたあるじの松次郎が、ふりかえった。
「なにか、仰言いましたか？」
「墓をあばくか、と云った」
狂四郎は、こたえた。
「墓を?!」
「うむ」
「どなたの墓を――？」
「先日の広見堂という易者の墓だ」
「どういうのでございます？」
生きている人間に墓がある、ということが、松次郎には、解せなかった。
「あの老人から、自分が死んだならば、墓をあばいてくれてもよい、と云われたが、どうやら、

死ぬのを待ってはいられなくなったようだ」
「……？」
「尤も、広見堂に一応、ことわる必要はある」
「しかし、行方知れずでございますよ」
「人間という奴は、妙な生きもので、惚れ合った仲の対手でも、いったん別れると、忘れてしまうが、一度気に入った食物は、決して忘れぬ。そこが、危険な場所とわかっていても、喰べたさの一念で、足をはこぶ。……お前の手打ちを、広見堂は、気に入っていた筈だ。三日明けずに、かよって来ていたのではなかったか？」
「そうでございましたが……」
「近いうちに、屹度現われるだろう。現われたら、わたしが、あの世行きまで待って居れぬので、墓をあばかせて頂く、と云っていたとつたえてくれ」
近藤重蔵は、四年前に逝ったことになっている。
その墓は、二個所にある。江州大溝の藩主分部若狭守の菩提寺瑞雪院と、この江戸の駒込の西善寺と。
後者の方は、知友門弟が謀って建てた。
重蔵は、武部仙十郎に、もし自分が死んだならば、駒込西善寺にある墓の方をあばいてもらってよい、と云いのこしたのである。生涯口外せぬと誓った秘密が、その墓の中にある、という意味であった。
「では、たのむ」
狂四郎は、蕎麦は摂らずに、腰を上げた。

狂四郎が、出て行くと、もう一人の客の鳥追いも、そそくさと、代金を置いて、笠と三味線をかかえて、紺暖簾をくぐり出た。
店にいた時のつつましげな様子とは、一変した鋭い身ごなしになっていた。
すばやく、左右へ、往還を視やったが、狂四郎の姿が消えているのに、舌打ちした。
鳥追いは、狂四郎が、すぐの横丁へ曲ったとさとって、いそぎ足に、追った。
とたん――。
ぎょっとなって、立ちすくんだ。
その横丁に、黒の着流しのふところ手姿が、うっそりと立って、待ち受けていたのである。
「なにを、いそいでいる？」
狂四郎の口もとには、薄ら笑いが刷かれていた。
鳥追いは、とっさに、くるっと踵をまわした。
「尾けようとしたくせに、なぜ、逃げる？」
あびせられて、鳥追いは、頭をまわした――刹那。
狂四郎は、ぱっと顔をそむけた。
女の口から、光るものが噴いて出て、こちらの双眼を狙って、飛んだのである。
一本だけではなかった。
狂四郎は、こめかみと耳朶に、痛みをおぼえた。
「どうする？　その口の中には、もう針は含んで居らぬのか？」
狂四郎は、冷やかに、訊ねた。
女は、こたえず、肩で吐息した。おそらく、狙って、仕損じたのは、はじめてであったろう。

その屈辱で、全身の血汐がにえたぎった、と見てとれた。

「まだ、一二本、含んでいるとみえる。しかし、吹けば、斬られる、と判って居るようだ。こちらの腕を、お前は、充分承知しているらしい。……歩くのだな、おれの前を——」

狂四郎は、命じた。

女は、意外に、素直にその命令に従った。

歩き出してから、路面へ、口の中の残りの吹き針二本を、吐きすてた。

見かけたところでは、ただのおとなしい門付(かどづけ)にすぎない女の後姿を、見まもり乍ら、歩き出した狂四郎は、ひとつの疑惑を、湧かせていた。

近藤重蔵の十徳の裾に、吹き針を刺したのは、この女と断定して、まちがいはなかった。

しかし——。

狂四郎が、調べた限りでは、お目付佐野勘十郎は、絶対に、婦女子を、手下に使わなかった。

一時弄(もてあそ)ぶ妾を持つが、正妻というものを持たぬことでもあきらかなように、佐野勘十郎は、女性(にょしょう)というものを信じない男に相違なかった。

例外として、この女を、手下に使っている、ということは、まず、考えられなかった。

——とすると？

佐野勘十郎以外に、近藤重蔵の身辺をさぐっている者が、ほかにいる、ということになる。

この女は、その者に命じられて、近藤重蔵を尾け、この眠狂四郎を尾けまわしていた。そう考えた方がよさそうである。

「旦那——」

女が、歩き乍ら、前を向いたまま、呼んだ。

「どこへ連れて行くのですか?」
「連れて行くのは、お前の方だ」
「なんですって?」
「お前が、おれを、連れて行くのだ」
「虜にされた者が、自分を捕まえた御仁を、自分の好きな場所へ、お連れするんですか?」
「そういうことだ」
「こんな話、きいたことがありませんねえ」
「連れて行く先を、考えるがいい。味方のいる場所であっても、一向にかまわぬ」
「旦那は、いままでも、そうやって、敵に勝って来なすったのですか?」
「まだ生きているところをみると、おのが流儀が、さしてまちがっていなかったことになる」
女は、立ちどまって、狂四郎を、振りかえると、朝陽のまぶしさに、眸子をほそめて、じっと、贉めた。
再び歩き出した時、女は、ひくく、
「女に惚れさせる男に、はじめて会ったねえ」
と、呟いた。
しかし、女は、この場は、なんとかして、遁れなければならなかった。
女は、すでに、その逃路を思案していた。
竹町の渡しの方から、一艘の舟が、下って来ていた。岸からは、二間ばかりはなれていた。
女は、その距離をはかり乍ら、狂四郎に疑われないように、すこしずつ、岸縁の方へ寄って行った。

一瞬――。

女は、石垣の角を蹴ると、宙に身を躍らせた。

水色の湯文字を、明るい陽ざしに撒(ま)いて、白い二本の下肢を、惜しみなく、さらしつつ、女は、見事に、舳先(へさき)に跳び移った。

「おっ！　なにを、しやがるんでえ！」

むこう鉢巻の船頭が、大ゆれをくらって、あやうく、水中へはねとばされそうになるのを、辛うじて踏みとどまって、女を睨みつけた。

「金は、はずむよ。あの浪人から、あたしは、遁(に)げたいのさ。おねがい！」

そう云われた船頭は、岸に立つ狂四郎をみとめると、

「眠の旦那、どうしやしょう、このあま――？」

と、大声をあげた。

女は、あっとなった。

狂四郎の方は、女が舟へ跳ぶかも知れぬ、とちゃんと予測していたに相違ない。船頭が顔馴染(なじみ)の男なので、平然として、女の跳ぶにまかせたのだ。

狂四郎は、微笑し乍ら、こたえた。

「岸へ着ければ、女は、上って来るだろう」

女は、それをきくと、ひとつ吐息した。

「負けた！……親方、着けとくれ。あたしは、実は、眠狂四郎に惚れたのさ」

松前藩邸

一

せき——と名のる鳥追い姿の女が、眠狂四郎を案内したのは、芝増上寺裏手にならぶ末寺に隣接した小大名の屋敷のひとつであった。

大名屋敷——まさしく、その構えは、一万石の格式であったが、あきれるほどの荒廃を、修築もせずに放置したまま、示しているたたずまいであった。

正門の屋根は、瓦が半数も毀れたままになって居り、柱も扉もおそらく二百年以上も風雨にさらされた蒼然たる古色もさること乍ら、いつの頃かその内外が凄惨な修羅場になったとおぼしい、刀槍の痕をとどめていた。

長い築地は、いたるところ崩れて、人も犬猫も自由に出入できる。

空屋敷でないことは、菖蒲革の袴をつけた門番が二人、そこに立っているので、明らかであった。

藩の窮状を、いかに、公儀に訴えても、一向に援助してもらえぬので、ふてくされて、わざと、甚だしい荒廃ぶりをさらしてみせている、とも受けとれた。

「旦那——」

せきは、微笑し乍ら、

「ここでございますのさ」

と、指さした。

「何様のすまいぞ？」

「蝦夷の松前様の――」

せきは、こたえた。

――成程、それなら、この荒廃ぶりも、頷ける。

日本北辺の零細藩である松前藩は、十四代松前章広になってから、寛政年間、東蝦夷の知行地の大半を、幕府に返上して、武蔵久良岐とか、陸奥梁川などの痩地を与えられて、ほそぼそとしのぎ、文政のはじめに、ようやく旧領に復帰した不運な藩であった。

幕府が、松前家より蝦夷地をとりあげて、直轄にしたのは、対露国防の武力を増強する、という名目であった。

事実は、漁場を独占し、交易を壟断し、アイヌたちから搾取している商人（場所請負人）たちの儲けを、看過することができず、これを廃して、木材、鯡などの魚類、昆布その他の運上金を、直接手に入れるためであった。

しかし、場所請負人という制度の廃止は、失敗であった。

蝦夷地に於ける漁業の取りさばき、アイヌの撫育は、この地に精通している商人たちでなければ、能く為せるものではなかった。

十四代松前章広は、幕府の失敗をみて、この秋とばかり、時の老中水野出羽守忠成に、賄賂をつかって、ついに、旧領復帰に成功したのであった。

しかし、武蔵久良岐、陸奥梁川に移封の間につもった借財は、短期間ではとうてい、返済することは不可能であった。

まさしく――。

松前家が、その藩邸を、荒廃したままに、白日にさらしているのは、公儀に対する一種の反抗であった。

――そうか。佐野勘十郎以外に、生きている亡霊の近藤重蔵を狙っている者がいて、それが、この松前藩なら、話はわかる。

狂四郎は、合点した。

近藤重蔵は、曾て、場所請負人高田屋嘉兵衛に協力させ、エトロフ航路をひらき、エトロフ島に漁場十七箇所を設けている。

蝦夷地と近藤重蔵は、きりはなせない関係にあったのである。

「お前を雇っている人物に、会おう」

狂四郎は、せきに云った。

「旦那――」

せきは、不安な眼眸をかえして、

「旦那は、底なしの泥沼へ足を踏み込もうとしておいでじゃないんですか？」

「踏み込んでみなければ、底なしかどうか、判らぬ。案外、膝までの浅い沼かも知れぬ」

狂四郎が、通されたのは、書院であった。その書院も、他の大名屋敷とちがい、床の間には、掛物ひとつなかった。

当主松前章広が、陸奥梁川に在封中は、夏期一着、冬期一着の木綿で十年間を通し、文字通り一汁一菜を守って来た、という噂は、この素浪人の耳にまで、とどいていた。

――何者が現われるか？

狂四郎は、腕を組んで、待った。

二

廊下を近づいて来る跫音（あしおと）が、きこえた。

――ひどい跛（びっこ）らしい。

狂四郎は、その跫音で、判断した。

「ごめん――」

障子を開けて、入って来たのは、四十前後の人物であった。

その面貌を一瞥（べつ）した瞬間、狂四郎の胸中に、ひそかな衝撃があった。

眉目（びもく）も、頭髪も、あきらかに異邦のものであった。殊に、その瞳（ひとみ）は、碧（あお）かった。

「当藩家老・菅谷十郎左衛門」

座に就くと、その人物は、名のった。

「眠狂四郎と申す」

狂四郎が、挨拶すると、菅谷十郎左衛門は、

「ここへ参られた存念をうかがおう」

と、もとめた。

「存念?……お目付佐野勘十郎のほかに、それがしに、尾行者をつける人物がいたことに興味を持ったまでのこと、と受けとって頂いてよい」

「すなわち、貴殿は、ここを敵中と知っていて、罷（まか）り越された。不敵な度胸と申せる」

「敵かどうか、それは、これから、お手前と談合の上で、きまると存ずるが――」

その言葉をきくと、菅谷十郎左衛門は、薄ら笑った。
「近藤重蔵が、いまだ生存していると知って、これを、捕えて虜囚にしようとしている当方と、味方になれる道理がない」
「虜囚にしなければならぬ理由が、おありか？」
「敵側に居る貴殿に、その理由を打明けるわけが居ろうか」
「談合如何によっては、この素浪人を、味方にしようと、考えられるのではあるまいか」
「あいにくだが、御老中の側用人に飼われた犬など、味方につける所存など、毛頭みじんもない」
菅谷十郎左衛門は、きっぱりと拒否した。
狂四郎は、平然として、
「御当家の敵は、お目付佐野勘十郎ではないのですか？」
と、対手を見据えた。
「貴殿は、当藩の窮状を、この屋敷のさまを眺めて、およそ想像をつけることができ申そう。
……曾て、当藩は、一万石格であったが、内実は、諸藩の五、六万石に相当する内証ではあった。しかるに、公儀は、当藩が、場所請負人から巨額の運上金を召上げているもの、と垂涎して、当藩を追いはらって、蝦夷地を直轄にした。たしかに、五、六万石の内証ではあったが、人口稀薄な、交通のひらけぬあの広大な蝦夷地を治め、しかも、外夷に備えるために、どれだけの費用と知識と人数が必要か、公儀は、知らずに、追いはらった。当藩は、はじめ、武蔵久良岐へ五千石に貶せられ、次いで、陸奥梁川へ、九千石と増してもらったものの、家中を半数に減じても、くらし向きは成立ちはしなかった。しかるに、公儀は、蝦夷地経営が、いたずらに失費が

かさむばかりと知るや、なんの未練もなく、返して寄越した。……蝦夷地取締りもとのい、アイヌの撫育、産物の取りさばきなど、すべて行き届いた故、旧家に、格別の儀をもって、旧の如く領有せしめる。とまことしやかな理由をたてて、返して参ったのだが、その復領嘆願のために、当藩が、一橋卿ならびに老中水野出羽守殿に贈った金銀は、三万両を下らず、その金銀を調達するために、士分の者までが、吉原の廓へ、娘を売って居る。そうして、ようやく、復領すると、公儀は、ぬけぬけと、場所請負の制度を復活させたならば、その運上の半金を、寄越せ、と命じて参った。なんという人を莫迦にした図迂図迂しさか。……これほどまでに踏みつけにされた当藩が、いずれ、公儀に対して、一矢むくいんと――為すところある日を期すのは、当然ではあるまいか。たかが一万石格の小藩といえども、一寸の虫にも五分の魂――やがては、公儀の方から頭を下げてたのみに来るように仕向けてみせる、と家中一統、かたくほぞをかためて居る、と知ってもらいたい」

熱のこもった弁舌を、黙ってきいた狂四郎は、対手が口を緘じるのを待って、

「御家老――。たとえ近藤重蔵を虜囚とされても、渠から、欲するものを奪い取ることは、不可能と存ずる」

と、云った。

「………?」

菅谷十郎左衛門は、鋭く、狂四郎を睨み据えた。

「あの老人は、死をおそれては居らぬのです。死をおそれぬ人間ほど、強いものはない。……無駄なまねは、止されたがよろしかろう、と存ずる。それよりも、公儀に対する怨みは一時、内にかくして、老中水野越州から、蝦夷地統治の歳費を出させることを考えられたがよい、と存ずる。

そのためには、いたずらに、感情だけで、敵視されずに、側用人武部仙十郎を、味方にするのが、得策と申すもの」

狂四郎は、説いた。

しかし、菅谷十郎左衛門は、沈黙を守った。

狂四郎は、今日の推参は、一応目的を達した、と考えた。即座に、対手の応諾をとるのは、いささか話がうますぎる、というものであった。

松前藩は、お目付佐野勘十郎が、近藤重蔵の生命を狙っている理由を知っているのである。近藤重蔵が、かたく守って、あの世まで持って行こうとしている秘密を、知っていればこそ、この家老菅谷十郎左衛門は、堂々と、幕府に対して、一矢むくいてくれる、とうそぶいてみせたのである。

松前藩は、近藤重蔵がにぎっている秘密を明らかにする証拠の品が、欲しいに相違ない。その証拠の品があれば、一万石格の小藩が、幕府をむこうにまわして、わたりあうことができるのだ。逆に云えば、それほど、その証拠の品は、重大な意味と価値を持っていることになる。

「では、これにて――」

狂四郎は、一揖（ゆう）すると、腰を上げた。

返辞も待たずに去ろうとする狂四郎の態度が、菅谷十郎左衛門に、微（かす）かな狼狽（ろうばい）の色を面上にうかべさせた。

三

狂四郎が、藩邸を出て、一町ばかり往還をひろうと、あとを追って、跫音が近づいた。

せきであることは、秋風が送って来るその匂いでわかった。
狂四郎は、ふところ手で、前方へ視線を送ったなりで、
「おれに、つきまとう役目は、もう済んだはずだ」
と、云った。
「こんどは、あたしの気ままでござんすのさ」
「そのせりふを、信用せぬ、と申したら、どうする？」
「さしあげます、このからだを――」
「…………」
「ほんとです、眠の旦那――」
「…………」
「こんどは、旦那が、あたしを、お好きな場所へつれて行って下さる番ですよ」
「…………」
「それとも、あたしが、おきらいなら、話は別でござんすけど――」
「男を悦ばせる肌身を持っている自信がある、というわけか」
「抱いてごらんになれば、おわかりになります」
ものの三町も辿ってから、狂四郎は、つと、横丁に入り、ごく目だたないしもたやの格子戸を開けた。
こうしたしもたやが、この界隈には、多いのであった。
増上寺をとりまく無数の末寺の僧侶どもが、武家商家の後家や、娘と、密会するために、いつの間にか、こういう家が、できていたのである。

無愛想な婆さんが奥から顔をのぞけて、対手が坊主ではなく、浪人者であるのをみとめて、露骨に眉宇をひそめて、ことわりかけると、その足もとへ、意外なほど多い金が投げられた。

狂四郎は、せきをともなって、二階へ上った。

密会は、白昼が多いらしく、部屋には、ちゃんと、牀がのべてあった。

「おや、手まわしのいいこと。旦那は、なんでもご存じなんですね」

せきは、片隅へ横坐りになった。

「脱ぐことだ」

狂四郎は、女に背中を向けて、命じた。

「あい――」

せきは、するすると、帯を解き、地味な南部縞を、さらりと肩からすべり落した。なかには、燃えたつような緋縮緬の長襦袢をまとうていて、別人になったように、襟もとの白い肌が、映えて、なまめかしい肢体になった。

しかし、狂四郎は、依然として、背を向けたなりで、

「さきに、寝ろ」

と、命じた。

「女子が、さきに横になるなんて、作法にありませんよ、旦那」

「おれには、おれのやりかたがある」

「そいじゃ、失礼させて頂いて――」

せきは、仰臥した。

すると、狂四郎は、

「俯伏せがよい」
「どうするんですか？」
「膝を折って、臀を挙げるのだな」
「いやですよ、旦那――、そんな……はずかしい」
「やるのだ！」
狂四郎は、語気鋭く、命じた。
せきは、しかたなく、枕に額をのせて、膝を折り、そっと、臀部を挙げた。
狂四郎は、やおら、立って、そのうしろへまわると、無想正宗の鐺で、長襦袢と湯文字を、容赦なく、はねあげた。
「あ――いや！」
女は、あわてて、片手で剥き出された臀部を掩いかくそうとした。
「動くな！」
狂四郎は、冷たい眼眸を、そこへ落した。
狂四郎のカンは、適中した。
左右ふたつの、むっちりと肉の盈ちた丘陵には、それぞれ、いっぴきずつ、可愛い小熊の刺青が、ほどこされていたのである。
にひきの小熊は、まろやかな斜面から、首をのばして、かぐろい茂みの蔭の谷あいの水を、飲もうとしているあんばいであった。
「やはり、そうだったか」
このせきという女は、もしかすれば、蝦夷生れではないか、というカンが働いたのであった。

容貌に異なるところがあったわけでもなく、言葉に訛があった次第でもなかった。うしろに従いて来させているあいだに、ふっと、そんな気がしただけであった。

「女！」

狂四郎は、云った。

「おれは、数年前、本州から箱館まで、足をのばした。その時、むかし――足利の末、蝦夷へ渡った武士と烈しく闘ったアイヌの酋長コシャマインの話をきいたことがある。コシャマインは、甲斐武田の一族武田信広を破って、箱館はじめ志濃里館、中郷館、脇本館、隠内館など、十以上の館を陥落せしめたが、やがて、衆寡敵せず、武田信広に殺された。コシャマインは、討死直前に、忠僕に遺言した。自分の娘は、妙齢であるから、必ず、武田信広に犯されるであろうと思われる。急いで、家へ戻って、その臀部に、熊の刺青をし、犯されようとしたならば、その熊をして、信広の咽喉へ、くらいつかせよ、と。……爾来、蝦夷の酋長の娘の臀部は、熊の刺青がほどこされるならわしになった、という」

「…………」

せきは、微動もせずに、沈黙をまもっている。

「お前がアイヌの酋長の娘ではないか、というおれのカンは、あたったな」

「…………」

「ひとつ、この臀を、思いきり、刀の鞘でなぐりつけて、熊を怒らせて、おれの咽喉笛へくらいつかせるか。どうだな？」

「…………」

「越中の鵜阪神社の祭礼では、若い女子に、その年、夜這いに来た男の数を、白状させて、その

数だけ、臀を打つというならわしがある。熊どもを怒らせるついでに、お前が肌身を許した男の数を申せば、その数だけで、かんべんしてやるのも、座興だが、どうであろう？」

「旦那――」

せきは、額を枕につけたまま、口をひらいた。

「負けました。こんどこそ、本当に負けました。……もう、かんにんして下さいな」

「信用は、できぬ」

「いえ、こんどこそ、本当に負けました」

せきは、ゆっくりと顔を擡げると、口から、三本の吹き針を噴いて、畳へ刺した。

せきは、ずっと、狂四郎の目をつぶすべく、窺っていたのである。

それと察知して、狂四郎は、せきと視線を合わせることをせず、終始背を向けていて、その挙句、牀へ俯伏せにならせたのであった。

松前藩江戸家老菅谷十郎左衛門は、表長屋の自宅へ戻って、じっと孤座していた。

眠狂四郎と対座した半刻あまりのことを、噛みしめるように、丹念に、思いかえしていたのである。

あきらかに異邦人の相貌を持ち、極端な跛であるこの江戸家老は、曾て一度も、邸内から出たことはなかった。

しかし、せきという女を使って、世間のことには、精通していた。

したがって、眠狂四郎という男の存在も、かなり以前から、知っていた。

――わたしの体内の血の半分が、露人のものであるように、たしかに、あの男の血の半分も、

和蘭人のものに相違ない。

このことが、十郎左衛門には、狂四郎が立去ったあとで、にわかに、親しいものに思われて来たのである。

――あの男も、わしのことを、今頃は、わしと同じ気持で考えて居るのかも知れぬ。

十郎左衛門が、四十歳の今日まで、妻を娶らぬのも、この碧い瞳の相貌のためであった。

周囲の人々は、決して、この相貌について、ふれぬが、当人は、おのが瞳の碧さを、一日も忘れたことはないのであった。

十郎左衛門は、今日はじめて、おのれと同じ宿命を背負った男と会ったのである。

――あの男は、わしを討ろうとはしなかったようだ。敵にまわらず、味方として協力しようとする立場をとる気持には、嘘はなかった、と思える。

面目捕虜

一

「ふむ――。松前藩が、公儀に一矢むくいようと覚悟をきめている、というのか」

武部仙十郎の皺面が、にやにやとほころびた。

「面白いの、これは――」

近頃の癖で、胸が膝がしらにくっつくほど、身を二つに折って、上目越しに、眠狂四郎を、見やって、老人は、ふたつみつ首を振ってみせた。

「松前家が、武田信広の裔であれば、徳川が天下を取る以前から、われらは、すでに、蝦夷管領であった、という誇りを持って居り、それは、当代の性根にもなっていると思われるが……」

「左様さの。わしも、このたびのことで、蝦夷の史料をひっくりかえしてみたが、足利の頃には、すでに、南部蝦夷地には、武田信広の花沢館をはじめ、十二の館が、渡海した武将らで構えられて居った。当時、蝦夷管領は、出羽の檜山を領して居った安東氏であったが、十二の館の武将らは、われこそは、蝦夷を制してくれようと、野心満々であった模様だ」

老人は、語った。

東部酋長コシャマインが、万余の手勢を率いて、攻め寄せて来たのは、長禄元年の春であった。忽ちのうちに、コシャマインは、十二の館のうち、十までを陥落させた。

武田信広は、花沢館を死守し、やがて、和人連合軍の総大将になった。

武田信広の父信繁は、足利将軍義教から、若狭国を賜わり、若狭武田氏となった武将で、信広の代になって、南部田名部に移り、その後、蝦夷へ渡って、上ノ国花沢館に拠った。花沢館には、蠣崎季繁がいたが、すでに老齢で、信広は、その養女を娶って、主座を襲ったのである。

信広が、花沢館南方の夷王山を決戦場にえらんで、コシャマインを迎え撃った時は、まだ二十七歳の青年であった。

夷王山の前方は、乙部から松前に至る日本海がひらけ、後方は大草原であった。十の館を攻略したコシャマインは、勢いに乗じて一挙に、和人連合軍を蹂躙すべく、手勢を、三手に分けて、殺到して来た。

一万三千のアイヌ軍に対して、和人連合軍はわずか四千であった。

和人連合軍は、衆寡敵せず、草原の一隅に、追いつめられた。兵数は、半分に減っていた。

しかし、信広は、決して、絶望はしなかった。コシャマインが、月のない夜は、決して攻撃して来ないことを、信広は、知っていたからである。

その宵は、陽が落ちる頃合から、海を渡ってもの凄い強風が、雨をともなって、吹きつけて来たのである。

信広は、五百の兵を選ぶと、

「一心に胸のうちで八幡大菩薩を唱えつつ、斬り込め！」

と、命じておいて、先頭に立って、斜面をすべり降りて行った。

嵐を衝く夜襲は、成功した。コシャマインは、信広に片腕を刎ねられて、遁走した。

不具にされたコシャマインは、酋長の面目を保つために、おのが麾下全員を率いて、再び花沢館を攻撃して来た。

信広は、明るいうちは、土竜のように砦の中にひそんで、敵が迫れば、矢をあびせて、しりぞけた。

夜に入るのを待って、信広は、百人一隊として、五手に分け、おのおの二本ずつ松明をかかげさせて、草原、海岸、川沿いを奔らせた。

そして、その隙に、信広は、五十余人の手勢を引具して、箱館に向って、遁走するとみせかけた。

コシャマインは、その息子とともに、狂気のごとく、追跡して来た。

信広は、七重浜で、馬をすてると、渚を奔って、海中へ躍り込み、首まで浸った。

コシャマイン父子は、それを見てとって、馬を乗り入れて来た。

信広は、水面から、上半身をすっくと立てるや、弓に矢をつがえざま、射放った。

コシャマインが、馬上にのけぞった瞬間には、もう信広は、第二矢をつがえていた。

コシャマインの息子は、叫喚をあげつつ、海中へ跳んだ。しかし、その刹那には、胸へふかぶかと射込まれていた。

蝦夷は、こうして、武田信広の支配下に置かれた。

二

その後、蠣崎氏を継いだ信広の子孫たちは、百年にわたって、アイヌと戦いつづけて、本州に於て、豊臣秀吉が、小田原北条氏を滅ぼした頃、ようやく、アイヌとの間に、和平を成立させていた。

五代慶広は、秀吉が、奥州討伐に来た機をのがさず、海を越えて、本州に至り、白河にいた秀吉に、目通りした。

そして、秀吉に従って、京都へおもむき、天皇に拝謁して、従五位下を賜わり、民部大輔に任ぜられた。

さらに、秀吉から、朱印の制書ならびに、毎年巣鷹を献上するために、津軽から大坂に至る公逓の印信をもらった。

松前に於て、諸方より来る船頭・商人等、夷人に対し、地下人と同じく、非分の儀申し懸くべからず。並びに、船役の事、前々より、有り来りの如く、これを取るべし。自然この旨、相背くやから、これ在るに於ては、屹度言上すべく、速やかに御誅罪を加えらるべきもの也。

文禄二年正月五日　朱印

やがて、政権が徳川家康の手中に帰すと、慶広は、再び大坂に至って、家康に目通りし、蝦夷の管領たることを、認めてもらい、氏を松前と改めたのであった。志摩守と称し、家康から、左のような黒印の制書を受けた。

一、諸国より松前へ出入の者共、志摩守に相断わらずして、夷人との直商売仕(つかまつ)り候儀、曲事たるべきこと

一、志摩守に断わりなくして渡海して売買仕り候者、屹度言上致すべきこと、付(つけたり)、夷(えびす)の儀は、何方へ往行候共、夷次第たるべきこと

一、夷に対し非分の申しかけは、堅く停止のこと

右条々違背の輩(やから)に於ては、厳科に処すべきもの也。仍如件(よってくだんのごとし)。

慶長九年正月廿七日　黒印

志摩守殿

こうした家門を有(も)った松前家であった。誇りは高かったのである。

寛政十一年に、蝦夷地を返上させられ、わずか五千石の武蔵久良岐の痩地を与えられた時、藩主章広以下家中が、どれほどの無念の泪(なみだ)をのんだか、想像にあまりある。

松前家が、蝦夷地を、幕府に奪われていたのは、二十二年の長い歳月であった。

その間、家中は、三分の一に減じ、藩主章広はじめ重臣から足軽にいたるまで、筆紙につくせぬ貧窮に堪え抜いたのである。

貧窮に堪え抜くためには、復領の希望をすてず、新羅三郎義光より出た甲斐武田の同族である

という誇りを持ちつづけることであった。

復領を嘆願しつづけるためには、わざと、江戸屋敷を荒廃するにまかせ、賄賂金の調達と称えて、わざと士分の者の娘を吉原の女郎に売って、噂を呼んだのであった。そしてまた、武蔵久良岐から、陸奥梁川の寒地へ移された時には、これを不服とする家中血気の面々十数名が、門前で、断食をし、これを阻止しようとする同輩らと、烈しい口論の挙句、双方抜刀して、凄惨な修羅場をくりひろげ、柱や扉に、その痕をのこしたのであった。

北辺を守り抜いて来た甲斐武田の末裔らは、その気象が、おのずから、温暖な土地を領する他藩の家中のそれとは、異なっていた。堪えることを知るとともに、ひとたび、胸中に蔵した執念を、決して、消し去ることをしないのである。

武部仙十郎は、そのことを告げてから、

「いよいよ、猶予のならぬ事態と相成ったの」

と、じっと狂四郎を見やった。

「さしあたって、われわれの為さねばならぬことは、駒込西善寺の近藤重蔵の墓をあばく――これしかない」

狂四郎は、云った。

「近藤は、死後のことにしてくれ、とことわって居ったが……」

「待って居れぬ、とご老人も、いま、考えておいでだろう」

狂四郎に云われて、仙十郎は、苦笑した。

「やむを得ぬの。……あばくといたそう」

三

同じ頃合――。

諏訪町角の「二八蕎麦」のあるじ松次郎が、紺暖簾をはねて入って来た客を迎えて、はっと胸をとどろかせていた。

――やはり、見えなすった。

松次郎は、広見堂という易者を、土竈わきから、瞶めて、狂四郎の予想の的確さに、今更乍ら感服しないわけにいかなかった。

広見堂――近藤重蔵は、流石に要心して、顔のなかばを半白の髭で掩うていたが、十徳と軽衫はすてられぬとみえた。これでは、いくら髭をはやしても、むだのようであった。宗匠頭巾で、坊主頭をかくしていても、六尺ゆたかの長身を縮めるわけには、いかぬのであった。

「やあ――」

重蔵は、松次郎へ、破顔してみせた。

松次郎は、いそいで、もりを運んで行った。

狂四郎の伝言を、重蔵の耳に入れるのは、酒を出してからにしようと、控えた。

重蔵が、もりをすすりおわった時、どやどやと数人の客が入って来た。いずれも、町内の寄合でもあったらしい商家の番頭ていであったが、松次郎には、なんとなく、

――くさいぞ！

と、疑惑がわいた。

やがて、燗のついたのを一本、重蔵の前へ運んだ松次郎は、すこし身を踞めてから、

「ご隠居さん、伝言でございます」
小声で、云った。
「……？」
重蔵は、不審の眼眸（まなざし）をかえした。
「――待っていられないので、いそいで、墓をあばかせて頂く、と」
「なにっ?!」
重蔵の面貌が、一変した。
「眠狂四郎の旦那からの、伝言で――」
「莫迦なっ！」
重蔵は、われを忘れて、大声を発して、突っ立った。
「許さん！　断じて、そんなことは、させぬぞ！」
怒号した。
とたんに、あとから入って来た客たちが、すうっと立って、重蔵を包囲した。
「なんだ、お主ら！」
重蔵は、激怒を、そのまま、包囲した連中へたたきつけるように、凄まじい形相で、睨みまわした。
「御同道の儀、お願いつかまつる」
正面の一人が、冷たくおちついた口調で、もとめた。
「お主ら、公儀隠密とは、みえぬが、何者どもだ？」
「御同道ねがえれば、お判り申す」

「まっぴらだ！　わしは、虜囚になど、ならぬぞ！」
云いざま、台をはねかえした。
町人に変装した武士たちは、素手で、躍りかかって来た。
しかし、重蔵は、とうてい老人とは思われぬしなやかな動きを示して、あっという間に、二人を土間へ匐わせた。
――どうなるんだろう、これア？
松次郎は、店の中が、滅茶滅茶になる凄まじい格闘を目撃し乍ら、重蔵が無事に遁げることのできなかった時のことを考えていた。
――こういう時にこそ、あの旦那が、すっと姿を現わして下さる筈なんだが……。
はらはらしつつ、それを期待した。
と――。
「あ――旦那！」
松次郎は、思わず、紺暖簾に近づいた黒い影に、叫びをあげた。
ちがっていた。
紺暖簾をはねたのは、狂四郎ではなく、明日心剣という浪人者であった。
松次郎は、この心剣が、重蔵を遁して、味方の隠密を二人斬り伏せた時、狂四郎の使いをつとめている。
「ご老人、助勢いたす」
心剣は、重蔵に告げるや、抜刀した。
「おお、あんたか。かさねがさね、忝ない」

重蔵は、歓喜した。
襲撃者たちは、愕然となって、心剣を睨んだ。
「お主ら、この場はあきらめて、ひきあげた方が、無事だと思うが――」
心剣は、一応ことわった。
襲撃者たちが、それに応えたのは、かくし持っていた小刀を、抜きはなつことであった。
これを視て、心剣は、
「やむを得ぬ！」
と、そのひろい額に叡知のたくわえを感じさせる秀貌に、一瞬、凄味を刷いた。
しかし、その白刃は、峰を下にした。
襲撃者たちは、いずれも、蝦夷松前藩の家中であった。
闘志は熾烈であったが、ざんねん乍ら、業前が、それにともなわなかった。
一人が、凄まじい懸声もろとも、小刀を突きかけたが、あっけなく、胴を薙ぎ搏たれて、身を二つに折ってしまうと、残り二人は、完全に逆上した。
心剣が、その二人を、昏倒せしめるのに、ただ一閃裡の迅業の継続があれば、足りた。
片隅に佇立していた重蔵は、思わず、
「強い！」
と、感動の声を発してから、歩み寄ると、
「ご厚情、なんとお礼を申してよいか――」
と、ふかく頭を下げた。
しかし、心剣は、なぜか暗く沈んだ表情で、

「礼を云われる助勢では、これはないのです、ご老人——」

と、云った。

「いや、どうしてどうして、あんたに救って頂かなければ、わしは、虜囚の恥辱にあまんじなければならなかったのです」

「広見堂殿。この助勢は、お手前を、こっちが虜囚にするためとお思い頂きたいのだ」

「え？」

重蔵は、眉宇をひそめた。

「なんと云われるのだ？」

「それがしもまた、お手前をつけ狙う敵の犬であったと知られるがよい」

「莫迦なっ！……あんたは、わしを、先夜は、遁してくれたではないか」

「あの時は、ご老人の生命を奪おうとする刺客たちが、来ると知ったからです。それがしは、ご老人を斬る意志は持たぬ者です。しかし、敵の犬である以上は、犬らしく、命令をはたさねばならぬ。虜囚になって頂きたい。お願いつかまつる」

心剣は、頭を下げた。

四

近藤重蔵は、激怒を抑えると、じっと、心剣を睨めた。

「お主は、犬になる御仁とは見えぬ。……お主を雇うたのが、お目付佐野勘十郎であるならば、なにかのっぴきならぬ恩を売られているに相違ない。……如何(いかが)だ？」

「…………」

心剣は、こたえなかった。

「そうであろうな。たやすく打明けられるような、そんな恩ではないのであろうな。どうにも身動きできぬ縛られかたをしている御仁であろう。そうでなければ、犬になどなる御仁ではない、お主は――」

重蔵は、自分で勝手に納得しておいて、

「しかし、お主の一身の都合で、わしは、虜囚となることは、ご免を蒙りたい」

「…………」

「たとえ、お主に斬られようとも、近藤重蔵には、やはり武士の面目がある」

「やむを得ぬことです」

「斬るかな？」

重蔵は、心剣を睨んだ。

「一時、ねむって頂く。そうしておいて、身柄を運ばせて頂く」

「ふむ！」

重蔵は、呻いた。

この男の剣の下を遁れることは、不可能である、と知る重蔵は、

「では、こういたそうではないか。お主の顔も立てる、わしの面目を保つ――その方法として、明朝、わしが、お目付邸へ参上する。お主は、これより、戻って、佐野勘十郎に、その旨、伝えてもらおう。……もとより、お主が、わしを信用してくれての上での話だが。……神明に誓って、違約はいたさぬ。必ず、明朝――辰刻までに、屋敷へ参る」

心剣は、重蔵の顔を、瞶めかえしていたが、

「承知いたした」
と、頷いた。
眠狂四郎が、「二八蕎麦」をおとずれたのは、その夜も更けてからであった。
すでに、暖簾もおろし、行燈も下げていた。
戸をたたく音に、松次郎は、はっとなって、いそいで開けた。
「旦那！」
「なにか、あったか？」
狂四郎は、松次郎の表情を視て、訊ねた。
「あったも、なにも――大騒動でございました」
松次郎は、一刻前に起った出来事を、報告した。
狂四郎は、腕を組み、黙然として、ききおわると、
「明日心剣に、近藤重蔵が、約束したか」
呟いて、なにか思案していたが、
「近藤は行くであろうな、佐野邸へ――」
と、云った。
「わざわざ、死にに行かれるものでございましょうか？」
「そこが、さむらいというものの料簡の窮屈さだ」
「お気の毒に――」
松次郎は、首を振った。

「そういうこちらの方も、乗りかかった船が、沈むと判っていても、乗る片意地さがある。他人のことは、申せぬ」
「どうなさいます？　これから、墓あばきにお行きなさいますか？」
「その手伝いをたのみに来たのだ。近藤重蔵には、お前からことわってもらった。怒られるのは承知の上だ。……参ろう」
狂四郎は、冷酒をひっかけると、松次郎をともなって、おもてへ出た。
「いい月だ」
秋の夜空を仰いで、
「月を握り風を担（にな）う、という言葉は、風流を謂（い）うのだが、われわれは、月を取って、鍬（くわ）を担うことだ」

紋ちらし

一

同じ駒込でも、西善寺は、吉祥寺のように江戸名所図絵に載せられる名刹（めいさつ）ではなく、人影の絶えた深夜に、ここをさがすのは、骨が折れた。
「ここか」
と、眠狂四郎が、山門の前に立つことができたのは、薬の行商を永年つとめて来た松次郎のカンのおかげであった。

境内に入った時、鍬をかつぎ、提灯を携げた松次郎が、

「一応、ご住職におことわりなさいますか？」

と、訊ねた。

「ことわるくらいならば、夜更けをえらばぬ」

住職を説得する面倒をはぶくために、この時刻をえらんだのである。

茅葺きの本堂の前を過ぎ、祖師堂らしい建物わきから、墓地をむこうに、見わけた時であった。

「松次郎、わたしから、はなれろ！」

狂四郎が、ひくく鋭く、命じた。

松次郎が、はっ、となった瞬間、狂四郎の腰から、無想正宗が鞘走り、飛来した武器を、両断した。

地面に匐った松次郎の前に、それは、ころがった。手槍であったが、狂四郎が真二つにしたその柄は、ひどく短かった。せいぜい三尺程度で、これは、あきらかに、投げられるためにつくられた武器であった。

狂四郎は、闇にひそむ曲者へ向って、まっすぐに、前進した。

十歩も進まぬうちに、三本の短槍が、つづけさまに、月明をつらぬいて、飛んで来た。

一本は頭を、一本は胸を、一本は胴を——狙いは正確であったが、それらをのこらず両断する狂四郎の剣は冴えた。

墓地の入口には、供養塔が、ずらりと並んでいたが、その蔭にひそむ曲者の頭数を、狂四郎は、はかりかねた。

気配を消す。これは、云うはやすく、よほどの修練を積んでいなければできぬ業であった。

——公儀隠密には、手槍をさらに短く截って、飛道具に用いる修練はない。……蝦夷に、このような技があるのか？

狂四郎は、供養塔へ二間あまりに迫って、足を停めると、

「どうする？」

と、声をかけた。

「こちらは、近藤重蔵の墓を掘りかえしに来たのだ。お主らも、こちらと同類ではないのか？」

その問いに対して、返答はなかった。

それればかりか、はじめて、気配をあらわして、すばやく、後退した。六七人とかぞえられた。

襲って来ないのである。

「………？」

狂四郎は、怪訝なままに、墓地に足をはこび入れた。

提灯に明りを入れた松次郎が、そばへ来た時、狂四郎の視線は、とある一箇所へ、そそがれていた。

「あ！」

松次郎が、いそいで、そこへ歩み寄って、提灯をさし出した。

墓碑は、倒され、たったいま掘りかえされた穴が、そこに、黒い口をあけていた。

「あいつらが、やったしわざでございましょうか？」

「うむ。一足おくれた」

狂四郎は、踵をまわした。

墓地を出ようとみせた——次の一瞬、その痩軀が、なにかの化身かとも思われる迅さで、闇の

一隅へ奔った。

しかし、そこで、刃音も叫びも起らなかった。

固唾をのむ松次郎の前に戻って来た狂四郎は、当て落した人間を、両腕にのせていた。女であった。まだ若いようであった。

倒された近藤重蔵の墓碑の上へ、その女を、俯伏せに横たえた狂四郎は、

「この匂いは、なんだろう？　お前は、知らぬか？」

と、訊ねた。

松次郎も、狂四郎に訊かれる前に、女がただよわせる強い匂いに、不審をおぼえていた。

「まだ、一度も、こんなふしぎな匂いを、かいだことがございませぬ」

二

月が消えた空が、しらじらと明けて来ていた。

狂四郎は、松次郎に、駕籠を呼びに行かせて、そこに、ふところ手で、佇んでいた。

ぐったりと墓碑に俯伏せている女は、裏店住いの粋風の女房といった、路考茶縮緬に、一粒鹿の子の黒裏の着物をつけていた。

洗い髪をじれった結びにして、横櫛をさしている風俗は、ちかごろ流行であるが、そのうなじの無類の美しさは、この女が、じれった結びを流行らせたかとも思えるくらいであった。

緋縮緬の襦袢に、白繻子の半襟も、頸すじの美しさを映えさせている。

水色の湯文字がめくれて、脛があらわになっていたが、それが、つめたい墓石にふれているのがいたいたしいくらいであった。

ひくい呻きとともに、洗い髪がゆれた。しかし、なおしばらくは、意識をとりもどす気配はなさそうであった。

やがて——。

辻駕籠を連れて、松次郎が、ひきかえして来た。

すっかり明けた空の下で、女をかかえおこした松次郎は、その貌を見て、

「これア、佳い女でございますね」

と、思わず声をあげた。

たしかに、はっとするほど、眉目の整った、綺麗な瓜実顔であった。

境内で待っていた駕籠舁きたちは、松次郎が、背負うて来た女を、一瞥してから、意味ありげに顔を、見合せた。

駕籠にのせてから、先棒が、狂四郎に、

「旦那は、この女を、どうしなさろうというんで？」

と、訊ねた。

「お前ら、この女を知っているようだな？」

「へい。上野界隈じゃ、誰でも知っていまさ」

「夜鷹には見えぬが——」

「夜鷹じゃありませんや。しかし、淫売は淫売でさあ」

「ただの淫売ではあるまい」

「その通りで……。からだを売る対手が、町者じゃござんせんからね」

「と申すと？」

「お大名、お旗本もずっと上のお方に、売っているんでさ。それも、見境もなく、売るんじゃありませんや。ちゃんと、きめていて、毎月お手当を頂くということにしているらしゅうございます」

「売る場所は、どこだ？」

「旦那は、案外世間の裏をご存じねえらしい」

そう云われて、狂四郎は、苦笑して、

「そうか」

と、合点した。

東叡山寛永寺には、三十六院があり、これがことごとく、大名の宿坊になっている。

大名が、寛永寺に参詣する時は、それぞれ、自家がきめた宿坊で、休憩し、衣服を着換え、時には、ここで、屋敷には呼べぬ者を招いて、密談することもある。

さらに、三十六坊の外郭として、上野から本郷駒込にかけて、無数の末寺があって、いずれも、旗本を檀家に持っている。

大名や旗本が、その宿坊に休憩する時、こっそり女を買うことも、考えてみれば、さしてふしぎではない。吉原などへ行けぬ束縛された身では、御殿女中以外の女を抱いてみたくなれば、宿坊こそ、恰好の場所となろう。

もとより、将軍家の廟所、御霊屋を、芝増上寺と分ける寛永寺である。

三十六坊ことごとくが、そのように堕落している筈はないであろう。

学頭凌雲院は、法親王の師範、将軍家の教化をうけたまわって居り、この顕職につづいて、紅葉山別当——千代田城中の東照宮に奉仕する権僧正以上の僧が居り、その下に、執当二人——

この二人が、東叡山第一の権力を有し、幕府の老中と交渉し、その次に、御使い役二人——渠らは、若年寄、寺社奉行と用談する資格を持つ。

これらの高位の僧の中には、名僧善知識とうやまわれる人もいるに相違ない。

ただ——。

三十六坊は、いずれも、寺領三千石以下で、貧しかった。

五代（綱吉、常憲院）八代（吉宗、有徳院）の別当大慈院ですら、寺領は三千石であった。したがって、薄禄の寺は、大名の宿坊になって、その付届けによって、くらし向きをたてることになる。当然、大名の無理なたのみも、きき入れなければならなかった。

女の世話ぐらいは、平気でやってのけているものと思われる。

駕籠舁きは、この女を、そういう女だ、と云った。

——宿坊巡りの淫売が、なぜ、この西善寺にいたのか？

狂四郎は、この疑問を、女の口から、吐かせるべく、駕籠をあげさせた。

三

女が、意識をとりもどしたのは、不忍池に面した小料理屋の二階であった。この店は、御家人たちが、小金を持った町家の後家などをだますのに、よく利用する。小座敷の次の間には、常に、牀がのべてあった。

狂四郎は、女を、その牀に寐かせておいて、こちらの小座敷で、朝酒を、一人で飲んでいた。

唐紙が開いて、起き出て来た女が、狂四郎の向いに、横坐りになった。

「あたしにも、一杯、くださいいな」

狂四郎は、黙って、盃を渡してやった。

女は、三杯ばかり、手酌であおってから、

「こんなに朝はやく、起きて、飲むなんて、はじめてだねえ。……これも、旦那のせいですよ。いいしとを、こんな目に遭わせてさ」

と、ながし目を、狂四郎に送った。

「でも、どうして、旦那は、あたしを、あっちへすてておいて、なにもしなかったのですか？　あたしを、抱くために、つれて来たんじゃないのですか？」

狂四郎は、それにこたえる代りに、

「なぜ、西善寺の墓地にいた？」

と、問うた。

とたんに、女は、両手で頬をはさむと、

「おお！　いや！」

と、身顫いした。

「………？」

「あたしは、寿昌院さんに惚れていたんです。寿昌院さんは、この春、つまらないしくじりで、上野のお山を追い出されて、あの西善寺におとされたんです。……あたしは、あきらめきれずに、昨夜、こっそり、たずねて行ったんです。そしたら——庫裡で、血だらけになって——おお、いやだ！」

「どうして、すぐ逃げ出さなかった？」

「だって、旦那。……まだ、おそろしい人殺しが、そこいらに、いたじゃありませんか。あたし

は、夢中で、墓場の方へとび出して、あそこへ、しゃがんでいたのです」
「………………」
「旦那――、嘘じゃありません。ほんとに、嘘じゃないんです」
「嘘かまことか、お前のからだが、おれに知らせてくれることになろう」
「え？」
「この上に立て。おれに背を向けて」
狂四郎は、食卓を指した。
「どうするんですか？」
女は、不安な面持になった。
「立て！」
ひややかな命令に、女は、しかたなく、前をつまんで、食卓にあがると、後姿をみせた。
「お前が、一日一度、厠でやる恰好をしてもらおうか」
狂四郎は、平然として、命じた。
「旦那っ！」
女は、悲鳴のような叫びをあげて、振りかえった。
「正気なんですか？」
「正気だな」
「冗談じゃないや！　いくら、あたしが、あばずれでも、男の目の前で、そんなみっともないまねができるものか！」
「できないという奴に、それをやらせるのが、おれの趣味だと思ってもらおう」

「ばかばかしい。あたしは、まっぴら御免ですよ」
ぷんぷんして、食卓から降りようとした女は、一瞬、ぎょっとなって、双眸を瞠った。
自分の股間から、冷たく光る白刃が、刃を上にして、着物をつらぬいて、切先を突き出したのである。
「降りようとすれば、お前の大切な商売道具は、台なしになるが、いいか」
すでに、女は、そう云われた時、その大切な箇処に微かな痛みをおぼえていた。
白刃は、臀部から、ななめ上に、着物を貫通しているのである。すこしでも動けば、当然、陰部は斬られる。
女の顔面から、血の気が引いた。
「負けた。……しゃがみますよ、旦那」
狂四郎は、薄ら笑って、無想正宗を、女の股間から抜き取ると、鞘へ納めた。
女は、ちょっとためらっていたが、着物と長襦袢と湯文字の裾を、両手に持つと、左右へ拡げるようにして、ぱっとひと捲りして卓上へしゃがんだ。
着痩せするからだとみえて、ほっそりとした立姿から想像できぬ豊かな肉づきの臀部が、ふたつの弧線を、宙に描いた。
狂四郎の坐った位置からは、そのふたつの弧線が合わさるあわいに、女のからだの中で最もみにくい部分が、罅割れた古餅をくっつけたように、まる見えであった。
狂四郎は、こんなしろものに、男が無我夢中になることに、苦笑した。
「もうよい。降りてよい」
狂四郎が、求めたものは、その臀部にはなかったのである。

い、せきという吹き針使いと同じく、この女の臀部にも、可愛い小熊の刺青がほどこされているのではあるまいか、と想像したのであった。
「旦那――」
女は、食卓から降りなかった。
「旦那は、あたしの紋ちらしを、ごらんになりたかったのじゃありませんか？」
「…………」
「旦那、あたしが彫っているのは、そこいらの商人が、勝手に羽織や着物にくっつけた紋じゃありませんよ。お大名お旗本の由緒あるご家紋ですからね。おしりになんぞ、彫ったら失礼にあたるじゃありませんか」
「…………」
「どうせ、おはずかしい恰好を、しちまったんだ。ついでに、あたしの紋ちらしの肌を、ごらんに入れましょうかね」

四

女は、狂四郎に向い立つと、路考結びの鼠の厚板帯を、するすると解いた。
路考茶縮緬を、するりと肩から落しておいて、緋縮緬の長襦袢の紐を解きすてると、なんのためらいも示さずに、さっと、前をひらいてみせた。
「…………」
狂四郎の双眸が、珍しく、光った。
絖に似たなめらかな光沢を持った白い肌に、さまざまの紋章が、鮮やかに浮きあがっているの

であった。
右の乳房の上には降鶴丸(くだりつるまる)、左の乳房の上には打出小槌(こづち)、乳房と乳房のあいだに花藤、腹部には竜胆(りんどう)、三蓋松(さんがいまつ)、鷹羽(たかのは)、菊水、抱茗荷(だきみょうが)など――。

女は、さらに、湯文字の紐も解いてみせた。

臍(へそ)のまわりには、さらに十数をかぞえる紋章が、彫られていた。九曜、水沢瀉(おもだか)、違柏(ちがいがしわ)、光琳松(こうりんまつ)、六剣輪宝、八矢車、単梅(ひとえうめ)など――。

襦袢を脱いで、うしろを見せると、背中にも、いくつかの紋章が、鮮やかに浮きあがっていた。

「お前は、大名旗本に一度でも抱かれたならば、必ずその家紋を彫ったのか？」

狂四郎は、女が身じまいするのを待って、盃を与えてやり乍ら、訊ねた。

「あいな。……あたしが、ごらんの通り、そこいらの商人や職人に、春を売るには、ちょいともったいない顔と肌を持っていることは、旦那も、みとめて下さるでしょう。そこで、考えましたのさ。どうせ一人の男じゃ満足できぬからだに生れついたのなら、いっそ、売るなら、お大名お旗本に、してくれよう、とね。……旦那、あたしは、因果なことに、ほんとうに、男なしでは夜がすごせぬようなからだに、生れついているんです。嘘じゃありません。十七の夏に、むりやり、奉公さきの旦那に手ごめにされて、その時は、死ぬほど口惜(くや)しかったけど、その旦那に二度目に抱かれた時、それが、判ったのです」

「………」

「五十過ぎた、いいかげん遊びつくした旦那の野郎が、あたしの赤貝が蓋を閉じようとするたびに、呻くじゃありませんかねえ。そして、おわった時、お前は途方もねえものを持っている、と云われた時のうれしさ。……その時から、あたしの生きかたが、きまったわけですのさ」

ぬけぬけと、云ってのける女を、じっと見据えていた狂四郎は、
「東叡山の三十六坊を、泊りあるいたお前にしては、肝心のことを、ひとつ、忘れて居らぬか？」
「え？　なんですか？」
「お前の肌には、ひとつ、彫り足りぬ紋がある」
「あたしのからだは、旦那、ご老中の水野出羽守様にも抱かれているんですよ」
「もうひとつ、位が上の男は、どうだ？」
「え？」
「葵の紋が、彫られて居らぬ、ということだ」
狂四郎に云われて、女は、
「あきれた！　そんな……、そんな大それたこと、考えたこともありやしない」
「考えてみたらどうだ？」
「だって……」
女は、流石に、鼻白んだ。
「いまの将軍家は、もはや、老いぼれた。……西の丸に住む、次の将軍家になる人物なら、お前の肌を見せれば大悦びするであろうし、お前のものがお前の申す通りならば、狂喜するであろう。どうだ、やってみるか？」
「やってみろ、と云われたって……」
「お膳立は、おれがしてやろう。お前は、ただ、おれの命ずる通りにやればよい」
「……？」
女は、不審げに、狂四郎を瞶めかえしている。

「この素浪人に、そんな御膳立が、できるものか、と疑っているようだな。……かんたんなことだ。まかせておけ」

「旦那――」

女の表情が、急に、別のものになった。

「あたしは、なんだか、蛙が蛇に見込まれて、動けなくなるみたいですよ」

「………」

「旦那って、なんだか、女という女をみんな不幸にしちまう御仁じゃないかしらねえ」

女――紋ちらしのお玉は、そう呟いて、小首をかしげたことだった。

旧知対決

一

その朝――。

朝餉の座についていたお目付佐野勘十郎は、突然、なにを苛立ったか、もの欲しげに啼き乍ら、膳へ寄って来た愛猫の目を、箸で突き刺した。

凄まじい悲鳴を発した猫は、前脚で顔をかきむしるようにして、畳の上をころげまわった。

血汐が、点々と散って、給仕をしている妾の数江の裳裾をもよごした。

数江は、勘十郎のあまりのむごい仕打ちに、顔面を蒼白にして、おののいた。

勘十郎は、児小姓が入って来ると、ころげまわっている猫を、顎でしゃくって、

「そいつを、すてろ」
と、命じた。
児小姓は、薄気味わるさに、すぐに、猫をつかまえるのを、ためらった。
「はやくせい！」
勘十郎は、呶鳴った。
近頃になってから、使傭人たちは、勘十郎の機嫌が、その日によってガラリと変るのに、不安をおぼえていた。
いま上機嫌であることが、信用できなかった。突如として、雲行きが一変するのであった。
勘十郎は、児小姓が猫をつれ去ると、
「狎れる——ということは、許されぬ！」
と、吐き出した。
しかし、すぐ、
「そなたのことではない」
と、云い添えた。
「はい——」
数江は、ほっとして、勘十郎の顔を見かえした。
「人は、それぞれ、おのが分ということを忘れてはならぬ。乞食に、十両与えれば、有頂天になろう。しかし、乞食は、分限者になったという次第ではない。その十両が、乞食めを、あさましゅう思いあがらせて、人別帳に名を、などと云わせる。許されぬことだ。人は、分に応じた心得で、生きねばならぬ」

これは、数江にきかせるのではなく、勘十郎の独語であった。

用人が、入って来た。

「近藤重蔵と名のる老人が、玄関に立って居りまするが――」

「なに?!」

勘十郎は、眉宇をひそめた。

「公然と、その名を名のったのか?」

「はい」

「書院へ通せ」

用人に命じておいて、勘十郎は、このことをどう受けとってよいか、迷う表情で、宙へ鋭い眼(まな)眸(ざし)を据えた。

「……わからぬ!」

吐きすててから、勘十郎は、立ち上った。

書院へ向って、廊下を進み乍ら、このお目付が、珍しく微かな不安感にかられていた。

こちらが刺客を放って、その生命を奪おうとした者が、むこうから堂々と、訪れて来たのである。

これは、いったい、どういうことなのか。咄嗟(とっさ)には、解釈しかねる奇妙な不意打ちであった。

勘十郎は、廊下を曲った時、書院の広縁に立って庭を眺めている坊主頭の、広袖の十徳に軽衫(カルサン)をはいた老人の姿を、見出した。

その巨軀(きょく)は、まっすぐに、背を立てて、老いの翳(かげ)はどこにもないのであった。

勘十郎は、ゆっくりと近づいた。

近藤重蔵は、頭をまわして、勘十郎を視た。

勘十郎は、三十余年前の上役に、自分から挨拶することをきらって、すっと書院に入ると、上座を占めた。

「お目付佐野勘十郎、来訪のおもむきを聴取いたそう」

冷たく、そう云った。

対座した老人は、おちついて、口をひらいた。

「おことわりしておくが、貴公の前に坐っているのは、亡霊でござるよ。江州に謫居（たっきょ）していた咎（とが）め人の近藤重蔵は、四年前に逝（ゆ）き申して居る。したがって、亡霊にとって、対手がお目付であろうと、たとえご老中であろうと、いささかも、遠慮はいたさぬ」

「用件を——」

勘十郎は、促した。

「用件は、死人に口なし、ということでござるよ。しかるに、貴公は、死人にいまだ口ありとみなして、口をふさごうと躍起になって居るふしがみえる。たわけた血迷いぶりと申さねばならぬ。……それほど、貴公は、この亡霊が信用できぬのか？」

「足のある亡霊が、その足で、ご老中水野越前守邸へおもむいた、などという報に接すれば、早早に墓場へひきこもってもらおう、と当方が考えるのは、当然でござろう」

二

重蔵は、その言葉を予想していたように、ひとつ深く頷いてから、

「では、かりに、死人に口あり、といたそう。……貴公が、おそれているのは、三十四年前に、

えとろふ島で目撃したあの秘事の露見することであろう。左様、あの秘事の目撃者としては、貴公とわしの二人が生存しているばかりである。いずれかが死ねば、残った者が、この秘事を知る唯一人となる。いや、貴公は、四年前から、そう思っていたに相違ない。……ところが、近藤重蔵は、生きている亡霊であったと判明した。貴公は、そこで、わしを、墓場の中へ追い込むことにしたようだが、それは、かえって、藪蛇（やぶへび）となったようじゃ」

「………」

勘十郎は、重蔵に喋（しゃべ）らせるにまかせて、じっと、睨み据えている。

「実は、わしは、三十四年前に目撃したあの秘事は、疾（と）くに忘れて居った。遠い僻地（へきち）に、誰人が住んで居ろうと、この身とは、なんのかかわりもないことと、思い出すこともなく、歳月が過ぎたのが、いつわりのないところ。……ところが、貴公は、十年前、どの筋から、どのような手蔓（てづる）で、累進したのか、京都所司代の与力となるや、にわかに、この近藤重蔵の身辺に警戒の目を光らせはじめた。わしが、四年前に、わざと物故してみせたのも、貴公が放って来る犬どもにつきまとわれる煩わしさを避けたい、という理由からでもあった。……お目付佐野勘十郎殿にうかがおう。わしをこの世から消そうと企てるのは、三十四年前のあの秘事が、今日なお価値のあるものとして存続しているからなのか。いや、たしかに、そうにちがいあるまい。貴公の行動が、わしに、そう教えてくれたぞ！　如何だ？」

「………」

勘十郎は、なお、口を一文字にひきむすんだなりであった。

「えとろふ島でわれわれが目撃したあの秘事が、今日、どのようなかたちで、価値のあるものとなっているのか、ひとつ、教えてもらおうではないか、佐野勘十郎――」

「…………」

「貴公は、つい三年前までは、京都所司代の与力であったが、その後二年余、無役でいた。ところが、今春、突如、江戸へ戻ると、お目付に任じた。のみならず、西城府様のふところ刀に就いた、という。まことに、見事な異数の出世ぶりである。これは、あの秘事を、貴公が、巧みに利用したおかげではないのか。如何だ？」

「…………」

返答がない。これは、貴公が、みとめたことと受けとってよいのだな？」

「…………」

「佐野勘十郎！　余人はだませても、この近藤重蔵をごまかすことは、叶わぬぞ！」

重蔵が、叱咤した。

それに応えたのは、勘十郎の冷笑であった。

「亡霊推参の用向き、相判った。引きとってもらおう」

「わしの尋ねることに、一言の返答もせず、追い出すのか。やむを得ぬ。……ところで申しおくれたが、わしが、こうして足をはこんで参ったのは、明日心剣という仁との約束と受けとってもらおう」

重蔵は、起って、廊下へ出た。

しかし、歩き出そうとして、何を思ったか、廊下板を、つよく片足で搏ってみて、

「むかし、お目付屋敷には、いたるところに、好ましからざる客を消す仕掛が設けてある、ときいたことがある。たとえば、客は、辞去する際に、ふっと、油断する。そこを狙って、廊下板をはずして、床下深く掘った奈落へ転落せしめる、などとな。……あいにくだが、お目付に、おこ

とわりしておく。この重蔵が、昼のうちに戻らなかったならば、したためた手紙を、ご老中水野越前守様の側用人武部仙十郎殿に届けるように、と或る者に托してある。……無益の殺害は、無用――」

そう云いすてると、こんどは大股に、玄関へ向って、歩いた。

老人とも思われぬ逞しく肩の張った後姿に、勘十郎は、殺意をおぼえつつ、手出しの出来ぬ無念さに、瘧のように軀が顫えた。

三

勘十郎をして、さらに激怒させることが、その居室に待っていた。

むなしく、近藤重蔵を送り出した無念さのやり場もないまま、勘十郎が、障子をひき開けたとたん、ぱっと、緋の色が宙に散った。

「なんだっ！」

勘十郎は、怒号した。

目の前に、俯伏した女が、あられもなく、裾を捲りあげられ、臀部もあらわに、下肢を拡げさせられていたのである。

妾の数江であった。

――こやつ！

勘十郎は、女のむこうに平然と坐っている下手人を、睨みつけて、

――こやつ、眠狂四郎だな！

と、さとった。

「なんのまねだ、これは？」
勘十郎は、呶鳴った。
「臀部に、熊の刺青が有るか無いか、しらべさせて頂いた。失礼いたした。どうやら、この女人の肌は、京の水でみがいたとみえる」
「眠狂四郎！　この佐野勘十郎を、甘く見くびりすぎては居らぬか？」
「わたしは、他人の家に無断で推参するにあたって、いまだ曾て、敵を見くびったことは一度もない。たとえ、それが、女ばかりの住処(すみか)であろうとも――」
「よしっ！」
勘十郎は、廊下へ向って、
「出あえ！　曲者だぞっ！　出あえっ！」
と、叫んだ。
「お目付――、その障子を閉められるがよい。いまは、争闘よりも、談合を必要とする。……駒込西善寺の近藤重蔵の墓をあばいた者が居る」
狂四郎のその言葉に、勘十郎は、「なに?!」と、大きく目を瞠(みひら)くや、さっと障子を閉めて、廊下を奔って来た配下たちから、内部の光景をかくした。
「殿っ、曲者は何処(いずこ)に――？」
その声に、
「控えて居れ！　庭で、待て！」
と、さがらせておいて、勘十郎は、気絶した女をへだてて坐った。
「近藤重蔵の墓をあばいた者が居ったと？」

「お目付として、不覚であった、と悔いて頂こうか。近藤重蔵は、おのれの骨の代りに、なにやら重大な書類を、棺の中に容れて、埋めたらしい。……墓をあばいて、その書類を奪った者が、お手前でないとすると、これは、どういうことになるかだ？」

「……む！」

勘十郎は、ひくく呻いた。

「書院に於ける先程の、近藤重蔵との問答は、天井裏から、きかせて頂いた。……墓の中から奪われた書類には、どうやら、近藤重蔵とお手前が、三十四年前に、えとろふ島で目撃した秘事とやらが、したためてあったらしい。とすると、御両所のみが知っている秘事が、第三者にも知られたことになる。事態は、面倒になって来たわけだ」

狂四郎は、そう云い乍ら、平然として、腕を組んでいる。

「眠！……おのれだな、墓をあばいたのは？」

勘十郎の形相が、悪鬼に近いものになった。

「血迷って頂いては困る。秘密を知った者が、わざわざ、こんな危険な場所へ踏み込んで参る筈がなかろう。ありようは、墓をあばいたのは、お目付ではないことを、たしかめに参っただけのこと。……安心されるがいい。お手前の敵は、この眠狂四郎ばかりではないのだ」

そう云いすてて、狂四郎は、やおら、無想正宗を携げて、立ち上った。

勘十郎は、こっちの配下が、庭上にひしひしと詰めているのを知りつつ、平然として障子を開けて、出て行こうとするこの浪人者に対して、猛然たる憎悪と憤怒をおぼえた。

「そやつ、眠狂四郎だぞ！　仕止めい！」

勘十郎は、絶叫した。

狂四郎は、一斉に刀を抜きつれた隠密たちへ、冷やかな視線を送って、

「おのが死を嘆く者を持たぬ御仁から、かかってもらおう」

と、云い置いて、縁側を歩き出した。

前後へ、隠密たちが、躍り上って来た。

狂四郎は、鯉口(こいぐち)を切っただけで、歩みを停めなかった。

「とおっ！」

第一撃は、正面まっ向から、あびせかけられた。

狂四郎は、体をひらき、背を庭に向けて、その一撃を宙に流しざま、ぞんぶんに胴を薙(な)いだ。

その一閃(せん)の刃音よりも、障子にばっと撒(ま)かれた血汐の音の方が高かった。

狂四郎は、衂(ちぬ)れた無想正宗を地摺(じず)りにとって、再び進みはじめた。

背後から肉薄する者にとって、その背中は、いかにも、こちらの突きをのぞむように空けられたものに、目に映った。

「…………」

無言で縁板を滑って、必殺の突きを放った。

瞬間——狂四郎の五体は沈み、電光のごとく突いた刀身は、その肩の上から、狂四郎の耳朶(みみたぶ)わきへ抜き出された。

と同時に、腰を折った狂四郎は、正面の敵の小手を、払いあげていた。

敵の顔面は、真紅の幕につつまれて、悲鳴をほとばしらせた。

狂四郎が、凄まじい動きを示したのは、次の刹那からであった。

右腕を肱（ひじ）から両断されてよろめく敵へ、体当りをくれておいて、次の敵を袈裟（けさ）がけに斬りおろした。

とみた一瞬には、障子を蹴倒（けたお）して、空部屋へ奔り込んでいた。

「待てっ！」

追って、躍り込んだ者を待っていたのは、顔面を真二つにする迅業であった。

四

諏訪町角の「二八蕎麦」は、たてこんだ午（ひる）のひとときが過ぎて、急に、しずかになっていた。

片隅に、田舎出らしいお店者（たなもの）が二人、ぼそぼそと、もりをすすっているばかりであった。

「もう、おら、江戸は、いやになった」

「まだ、半年じゃねえか」

「おめえ、いやにならんのかのう」

「しようがあるめえ。国へ戻っても、田も畠（はたけ）もあるわけじゃなし……」

「上方（かみがた）は、どうかのう」

「ううん。この江戸ほど、うるそうはないかも知れんのう」

この時、反対側の壁ぎわの床几（しょうぎ）から、むっくり起き上った者がいた。

金八であった。

「おうおう、おめえら、江戸のどこが気に入らねえんだ？」

「へえ——」

二人は、顔を見合せた。

「へえじゃねえや。どこが気に入らねえか、云ってもらおうじゃねえか」
「へえ――そのう、しきたりが、むつかしゅうて……」
「どこが、むつかしいんだ？」
「わしら、江戸へ出て来たら、お店づとめは、白足袋をはかせてもらえるものと、愉しみにしとりましたんじゃが――」
「それが、気に入らねえのか？」
「まア、たとえばのことでございますがのう」
「ベラぼうめ。おめえら、なんにも判っちゃいねえや。白足袋ってえのはな、大坂のケチな商人が、穿くんだ。白足袋は、洗いが利かあ。紺足袋は、洗いが利かねえんだ。洗ったら、紺がさめらあ。だから、見ろい、木場や魚河岸の威勢のいい頭なんざ、いつも、ピンと張った新しい紺足袋を穿いてらあ。洗ったしろものは、絶対に穿いちゃいねえ。ふだんぎが、いつも、よそゆきだあ。……ふだんぎをよそゆきにするくらしをしているのが、江戸っ子だあ、判ったか？」
「へえ――」
「その面は、まだ、判った面じゃねえな。身だしなみ――こいつだ。真新しい紺足袋をはくのも、粋な垢抜けした嬶を持つのも、その嬶を質に置いても初がつおを食うのも、みんな身だしなみだあ。この心意気がわからねえのなら、さっさと、国へ帰んな」
お店者たちは、金八にまくしたてられて、こそこそと、出て行った。
松次郎が、奥から出て来て、
「ずいぶん乱暴な啖呵をきりなさる」
と、笑った。

「へっ。松つぁん、おめえも、江戸のどまん中に、二八を出しているんだろう。もりを出したら、次に、一本つけて、鯛のあらいに山葵をきかして、出すぐれえの作法をおぼえたろう」
「それアまあ――」
「夜蕎麦切かけおち者にふたつ売――とは、乙な光景じゃねえか。蕎麦屋の出ねえ芝居はねえやな。ところが、江戸には、だんだん、田舎っぺが多くなって来やがって、そいつらが小金をためて、のさばって来やがる。くそ面白くもねえや」
「どうも、申しわけありませんね」
「松つぁんのことじゃねえや。おめえとおれは、眠狂四郎というすね者の乾分だからな。お互いに仲よく、やっていこうぜ。……ところで、どうしたんだろう、先生は？」
「ここで、待つように仰言ったので？」
「お目付佐野勘十郎の屋敷へ、乗り込んで行ったのよ。あっしが供をしようとすると、云い草がいいや。巾着切なら、根付を切るのは得意だろうが、目付を斬るのはわたしにまかせておけ、と。しゃれてら」
「大丈夫ですかね」
　松次郎は、不安な面持になった。
「おい、松つぁん、おめえがそんな面すると、ますます、いよいよ、いらいらして来らあ。……おちつけ。ひとつ、飲んで、待とうじゃねえか。一本つけろい」
　眠狂四郎という人物が、もしこの世からいなくなったら、胸の中を冷たい風が吹きぬけて、生甲斐がなくなる思いをすることでは、共通しているこの男たちであった。

択捉島

一

「佐野勘十郎の屋敷へ、乗り込んだそうだの」

珍しく、主人忠邦の供をして、登城していた武部仙十郎は、帰宅してみると、書院に眠狂四郎が待っていたので、着換えもせずに入って来て、まず、そう云った。

狂四郎は、いつになく鋭くひきしまった表情で、仙十郎を凝視して、

「ご老人――。まわり道は、もうそろそろ、止したいと思うが……」

「まわり道、とはな？」

「貴方が、わたしにまで、空とぼける時期は過ぎた筈だ。これほど、まわり道をさせられると、よほどの愚鈍でない限り、およその見当は、つく」

狂四郎は、薄ら笑った。

老人は、例によって、身を二つに折ると、双の掌を、皺頬へあてて、畳へ視線を落した。

狂四郎は、松次郎に手紙を持たせて、駒込西善寺の近藤重蔵の墓が、すでに一足さきに、何者かにあばかれていたことを、仙十郎に報告してあった。

老人自身、内心では、非常な焦躁感にとらわれているに相違ないのであった。

「この前、貴方は、まだ謎を解いて居らぬ、と云われた。解かぬまでも、およその推測を立てているものと問うと、返辞をされなかった。……今日は、はぐらかされるのは、御免を蒙りたい」

「ふむ……」
「ご老人！　近藤の墓をあばいた者を、ご存じだろう？」
「…………」
「こたえたくないのであれば、わたしの方から、云おう。貴方自身が、わたし以外に、そのことを打明けて、その者に、墓をあばかせたのだ。そうでなければ、つじつまが合わぬ。……近藤重蔵が、自分の死後、墓をあばいてくれ、と告げた人間が、貴方とわたしのほかに、いたとは考えられぬ。貴方は、わたしが、佐野勘十郎配下につけ狙われていることを知っている。そこで、わたしにだけ、墓をあばかせるのは、危険だ、と考えた。そこで、他の何者かに、打明けて、依頼した。そして、私より一足さきに、墓をあばかせた。……その者の配下は、わたしに対して、手槍を三四本、投げつけて来たが、それきり、退却した。これは、わたしということを知って、敵対の意志がなかった証拠だ。わたしは、その時は、あるいは、松前藩がやしなっている手練者たちか、と疑った。……そうではなく、また、佐野勘十郎配下でもない、とはっきりと判ったのは、佐野邸で、数人を斬り伏せた後であった。……ご老人、貴方のしわざだったのだ」
「…………」
「昨日今日のつきあいではない。こっちは、貴方の狡智は、充分心得ていたつもりであったが、踊らされるのに狎れすぎた不覚だった、ということになる。……佐野邸から遁れ出て、歩き出した時、はっと気がついた」
「…………」
「ご老人、貴方が近藤の墓あばきを打明け、依頼した対手の見当は、わたしには、つけることができる」

「…………」
「水戸殿――そうではないか」
狂四郎は、ずばりと、云いあてた。
仙十郎は、もうかくさなかった。
「左様、その通りじゃ」
当時――。
三百諸侯を見わたして、
――この人物こそ！
と、尊敬にあたいする大名は、水戸斉昭（なりあき）であることを、識者ならば、即座に指した。
斉昭は、八代斉修（なりなが）の弟で、敬三郎といい、三十歳まで部屋住みであったが、その英明は少年時代から、きこえていた。
斉修が、重病に陥ちて、もはやたすからぬ、と判った時、継嗣問題で、水戸藩内が二派に割れたことであった。すなわち、将軍家斉の庶子清水恒之丞を養子として迎えようとする派と、斉修の弟敬三郎を擁立する派と。
しかし、この対立は、さして騒動にならずに、後者が勝った。
斉昭の資質は、誰の目にも抜群だったからである。
文武の諸芸に秀れていたことは、いうまでもなく、自身で刀を鍛えあげ、陶磁器を焼き、絵を描き、仏像を彫り、友禅を染めた。また、浄瑠璃（じょうるり）、清元、端唄にいたるまで、自身で三味線をひいて、見事にこなしてみせる多芸ぶりを発揮した。
三十歳までの部屋住みを、無駄にはしなかったのである。

欠点とすれば、女色であったろうが、これだけの才能の所有者が、その精力を、女にだけはそそぐのをひかえるということは、無理であったろう。
女色もまた、人情の表裏を知るための便宜であったといえる。

二

九代を襲うた斉昭が、刀づくりから三味線稽古に及ぶ多芸の才能を、一挙に施政に向けた精力ぶりは、凄じいばかりであった。
斉昭はまず、前主時代に、威権をほしいままにした執政の榊原淡路守をはじめとし、私腹をこやした国家老、勘定奉行、奥右筆など、片はしから斥けた。
その英断は、他藩の目を瞠らせたものであった。
次いで、斉昭は、質素倹約の実行に力をそそいだ。自ら、黒木綿の上召に、桟留の袴をはいて、江戸城へも出仕し、一汁一菜を厳守してみせた。
もともと、水戸藩は、光圀以来、貧乏がつづいていた。
御三家といっても、紀伊家、尾張家にくらべて、禄高は両家の半分にも満たなかった。
格式は同じであるから、失費も同じであった。山嶽が多く、すくない耕地も痩地が大半であり、物価の高騰に対処する産業は、なにもない水戸藩が、紀伊、尾張と同じ失費に堪えられる道理がなかった。
水戸の家中で、内職をしない武士は、役人以外は一人もいない、と他藩から、あざけられていたくらいであった。いきおい、食わんがために役人になろうとして、権力ある上司にすがらざるを得ず、また、役人になれば、党同派閥のいずれかに属さざるを得ず、賄賂横行もやむを得なか

った。

斉昭から斥けられた面々も、必ずしも、汚官貪吏とそしられる人物ばかりではなかった。すべては、水戸藩の貧乏の故であった。

貧乏からのがれるためには、極端な節倹しかなかった。

同時に――。

斉昭は、藩校弘道館を創設し、検地をして重農政策をとり、貯穀を奨励し、国防のための大砲鋳造、反射炉の建造を実行し、さらに、光圀以来の思想である皇道観、国体観を、はばかることなく、表明した。

光圀は、尊皇を唱えたために、幕府閣老から、かなり猜疑の目を向けられた模様であるが、九代斉昭もまた、目下、幕府の嫌悪を蒙るような言辞を、公然と口に筆にしつつあった。

将軍家斉に向って、直接弊政改革の急務を説いたのは、三百諸侯中、一人斉昭だけだったのである。

このたび、本丸老中に任じた水野越前守忠邦が、腹蔵する幕政改革を実践するためには、水戸斉昭を味方につける必要があった。

幕閣には、水野出羽守が逝ったとはいえ、なお、賢相と称われている大久保忠真、また文政五年から老中職にある松平乗寛がいた。

これらの人々を押しのけて、忠邦が、敢えて革新に乗り出すためには、水戸斉昭という強力な援助者がなければならなかった。

忠邦の側用人武部仙十郎が、斉昭に礼を厚うして近づいていることは、眠狂四郎にも、容易に想像がついた。

狂四郎が、調べてみると、水戸弘道館に於(おい)ては、水戸藩士挙げての文武修業が為(な)されていたが、その中でも、特にえらばれた若い士らが、「鳥追い党」と称して、もっぱら実戦調練をしていることが、判った。

その調練の内に、柄を短く切った手槍の投擲(とうてき)という競技が加えられていた。

すなわち。

駒込西善寺の墓地で、狂四郎に向って、手槍を投げつけて来たのは、水戸の「鳥追い党」であったのだ。

「ご老人、きかせて頂こう。近藤重蔵の墓から、出て来たのは、何であったのか――?」

狂四郎は、もとめた。

「もう、かくしては置けぬの」

仙十郎は、にやりとした。

「水戸殿の手から、貴方に渡されているのではないのか?」

「いや、わしが、水戸邸へおもむいて、それを観て来た。……墓から出て来たのは、近藤重蔵が、三十四年前にしたためた蝦夷(えぞ)日誌であった」

「その日誌の中に、貴方を驚愕(きょうがく)せしめる意外(いがい)な秘密が、記されてあった――?」

「うむ」

「その秘密とは――?」

「…………」

老人の細い眼眸(まなざし)は、狂四郎の胸もとへ当てられていた。

「うかがおう」

狂四郎は、促した。
老人は、なお、しばらく、沈黙を守った。
やがて、老人は、ひとつ溜息をもらした。
「きかせよう」
口にしがたいことを、しなければならぬ苦痛のために、投げ出すような口調で、老中側用人は、云った。

三

近藤重蔵が、蝦夷地場所請負人である兵庫の船頭・高田屋嘉兵衛を御用船頭として、エトロフ島へ向って、出帆したのは、寛政十一年六月中旬であった。
その前年、重蔵は、根室から海上十余里を越えて、国後島へ渡って、エトロフ探険の準備をしていた。
重蔵は、その国後の風光については、名山奇岩、天然の妙は筆紙につくしがたく、茶茶登りの高山は海内第一の神山と推している。
そして、ひとたび海へ出ると、沖合およそ一里余のあいだ、鱒と鮭が充満し、岸に近いところは、船を押しあげて、櫓楫も自由に動かぬばかりの壮観で、網を投げると、忽ち二三千尾がかかり、手捕りも容易にできる、と記している。
山川は、神代混沌のままに残って居り、修験道も木樵もまだ一度も入ったことはなく、山麓に住む夷人は、雪白の鬚髪、木皮を綴った衣をまとうて、宛然、仙人であった。
この国後島よりさらに東の海上に浮ぶエトロフ島は、さらに珍奇なものを、この目に見せてく

れるに相違ない、と重蔵は期待した。

重蔵が、高田屋嘉兵衛の船に乗り込んだ時、供に連れた配下は、旗本小普請組の部屋住みの若者四名であった。その一人が、佐野勘十郎であった。

その時、重蔵は、二十九歳であった。

船は、根室を経て、国後に渡り、阿吐江也の崎に着いた。

ここで、重蔵と嘉兵衛は、毎日岬に立って、風の向背、汐の緩急によって、船がどう流されるかを、つぶさに研究した。

七月中旬、まず、嘉兵衛が、こころみに、その七十石積みの冥温丸を、乗り出した。

冥温丸は、十日後に、海路つつがなく、阿吐江也へ戻って来た。

阿吐江也からエトロフ島は、歴足部の山がすぐのぞまれる近さであったが、まっすぐに船を走らすことのできぬ難所なので、嘉兵衛は、汐路と追風にしたがって大きく迂回して、丹根萌にむかい、海上で一夜を明かして、エトロフ島に到着した。

嘉兵衛は、船を、紗那という河口へさかのぼらせ、会所を設け漁場をひらく土地を見さだめて来た。

「よし、では、わしもすぐに、エトロフへ渡ろう」

重蔵は、嘉兵衛の海上の駆引きに絶対の信頼を置いて、決意した。

しかし、嘉兵衛は、今年はすでに北海が荒れる季節に入って居るので、明春にのばされますように、とすすめた。

「お主の案内ならば、心配要るまい」

重蔵が云うと、嘉兵衛は、何故か浮かぬ面持で、

「エトロフの支配者を以て任じて居る東北端シャルシャムの酋長ハウシヒが、今年は和人を歓迎できぬ、と厳しくこばんで居ります」

と、こたえた。

「理由は、なんであろう？」

「ウルップより、魯西亜の赤人どもが、多数水豹狩りに参って居り、もし万一、争いになっては、自分らが迷惑する、と申して居りました」

やむなく、重蔵は、蝦夷で越年して、氷解けの春を待つことにした。

その待機の間に、重蔵は、国後からエトロフ、ウルップへ木皮を貼った蝦夷船で渡って行く土人たちに、日本の威光、徳化を吹き込んで、彼地の土人らの警戒心を解くことに努めた。

島情は、あきらかに、和人に対して険しかったのである。

先年、厚岸の酋長イトマイという者が、松前藩の巡察の士数人を殺害して、手下百人あまりを引具して、エトロフへ渡って、たてこもる、という騒動があった。

酋長イトマイは、すでに死亡したが、手下らは生き残って居り、和人に対して強い反感を抱いている、という。

加之、魯西亜人どもが、鉄砲を携えて、入り込んで来ている、となれば、渡って行くには、よほどの勇気を必要としたのである。

重蔵は、様似（日高）にひきかえして、越年し、高田屋嘉兵衛は、江戸表へ回航して、重蔵の手紙を、書院番頭松平信濃守忠明に渡しておいて、店のある兵庫湊に還った。

そして、正月、嘉兵衛は、米塩木綿莨などを積んだ手船辰悦丸に、四艘の図合船と鯨船を率いて、再び蝦夷へ渡って来て、様似に立寄って、重蔵と四人の配下をのせると、いよいよ、エトロ

フ島へ向ったのであった。

四

エトロフ島は、周囲百余里。しかし、住民は、わずか七百余人にすぎなかった。蝦夷名物の厚司を着ている者は一人もなく、熊と水豹の皮をまとっているのは、酋長ばかりであった。土人らは、鳥の羽毛をキナ草とまぜあわせて綴ったのを、身につけていた。

住居は、小屋ともいえぬような粗末なもので、大半が穴居同様のありさまであった。朝夕の食器も持たず、ひとつの鍋を五六軒でかわるがわる用いている貧しさであった。

土人は、漁獲の方法を全く知らなかった。鮭、鱒のたぐいでさえ、旬におくれて、川をのぼって来るのを待ってから、ヤスで突きとめるだけであった。まして、穀物をつくるすべを知る筈もなかった。せいぜい、黒百合の根や太芹を採って、貯蔵するくらいの智慧しかなかった。

しかし――。

海には、魚群が満ちていた。

鯨をはじめ、鱈、アブラゴ、カサゴなどが、岸近くまで泳ぎまわって居り、独木舟の土人がこぎ出して行っても、逃げようともしなかった。

辰悦丸は、舷頭に、日の丸を真紅に染め出した吹抜幟をひるがえし、丹根萠の浜へ、到着した。

その舳には、甲冑に身がためした近藤重蔵が、紅白の軍配を握って、仁王立っていた。

土人たちは、松前藩の討手が襲うて来たのではないか、と驚愕した模様であった。

「千代田城内の文庫蔵にある記録では、近藤重蔵が、えとろふの海岸に、十七箇処の漁場をひら

いて、土人らに漁網を与えてその使用法を教え、あまねく徳化を施したので、土人らは悦んで、名さえ何兵衛、何右衛門と、日本風にあらためた者が四百二十人に及んだ、という。また、重蔵は、郷村の制をさだめて、全島をわかって、七郷二十五箇村とし、各村に名主を置いたので、四方風(ふう)をのぞんで帰服した、とも記してある。シャルシャムの酋長ハウシヒも、すすんで、帰順して、エトロフの尖端藻寄湾(せんたんもよろ)にのぞむカムイワッカオイ山に、重蔵を案内して、魯人の立てた十字架を抜かせた、とまことに、いいことだけを、報告してあるのじゃが……」

仙十郎は、そこまで語ってから、曲り背を起して、胸を反らし、ふうっと、ひとつ深呼吸した。肝心のことを、容易に、口にしようとはしないのだ。

聴いている狂四郎の方は、忍耐を要した。

「近藤重蔵は、ひとつだけ、その報告書に、非常に重大な事柄を、わざと抜かしたのじゃて」

ようやく、老人は、重蔵の日誌中の、その秘密の部分について、ふれた。

重蔵一行が、エトロフ島に上陸して、恰度(ちょうど)一月経った頃、重蔵は、配下三名を、島内巡察に出した。

その時、高田屋嘉兵衛は、東北端のシャルシャムは、和人に反感を抱くイトマイの手下たちが、集団ぐらしをしているゆえ、危険だから、決して近づかぬように、と注意した。

三名の配下は、その忠告を無視した。そして、ついに還らなかった。

重蔵が、シャルシャムへおもむいたのは、それからさらに、三月後であった。

酋長ハウシヒを詐(いつわ)って、おびき出し、これを生捉(いけど)ったのである。

配下三名を殺害した罪を問うと、酋長ハウシヒは、自分の仕業(しわざ)ではない、とつよくかぶりを振った。

「魯人のしわざだ、とだまそうとしても、許さぬぞ！」
重蔵が、きめつけると、酋長ハウシヒは、うなだれて、打明ければ自分が殺される、とこたえた。
重蔵は、そこへ自分を案内するように、ハウシヒに命じた。
シャルシャムには、酋長よりも位の上の何者かが住んでいることが、その言葉で、判った。
「行けば、必ず殺されます」
ハウシヒは、容易に承知しなかった。
重蔵は、肯き入れなかった。
ハウシヒは、やむなく、承知した。
重蔵は、残った配下の佐野勘十郎を供にして、後ろ手に縛ったハウシヒを案内役として、シャルシャムに向った。
「シャルシャムには、意外にも、戦国の山城を想わせる構えの大きな館があった」
仙十郎は、狂四郎を瞶め乍ら、云った。
「しかも、その門扉には、葵の紋が打ってあったのじゃから、近藤重蔵と佐野勘十郎は、おどろきあきれた次第じゃ」
「その館のあるじは——？」
「わずか七歳の少年であった。徳川敏次郎、と名のったそうな」
徳川敏次郎。
これは、いま西の丸に在る家慶の幼名であった。

吹上茶屋

一

長い沈黙が、書院を占めていた。
狂四郎は、老人を瞶めたなり、腕を組んでいる。
老人の方は、身を二つに折ったなり、畳へ視線を落して、時折りもぞもぞと肩をゆすっているばかりであった。
両者は、重い沈黙の中で、三十余年前に近藤重蔵が見とどけた事実から、ひとつの想像の糸をたぐって、結論を出そうとしていた。
北海の果ての島に、将軍世子と同名同年の少年が、住んでいた。その館の構えも、くらしぶりも、堂々たる格式を備えたものであった。
近藤重蔵の日誌によれば、館内には、すくなくとも二十名に近い武士がいた。
さきに巡察に出していた配下三名が、この面々に殺されたのであった。もとより、重蔵と佐野勘十郎も、その館から生きて出られぬところであった。さいわいに、重蔵側は、シャルシャムの酋長ハウシヒを捕虜としていた。その館の維持には、ハウシヒの力があずかって大きかった模様であり、おかげで、重蔵たちは、この事実を生涯口外せぬ誓紙をさし出し、ハウヒシの身柄を釈放することによって、自分たちの生命を救うことができたのである。
もとより——。

将軍世子敏次郎が、生れてから一度も、江戸城西の丸を出て、他処でくらした事実はない。エトロフ島シャルシャムの館に住む少年が、別人であることは、疑う余地はなかった。

にも拘らず、なぜ、同名を名のり、館の門扉にも、調度にも、衣服にも、葵の紋を打ったくらしをしているのか。

当然、近藤重蔵は、ひとつの推理をたてて、江戸へ帰って来て、その機会をうかがった。

重蔵は、「辺要分界図」を作り、西蝦夷地処分法を論じて、老中戸田采女正に建白したが、その際、なにげなく、西の丸の将軍世子に、蝦夷地に就いてのいろいろな珍奇のお話をおきかせしたい、と願い出た。

許されて、西の丸に伺候し、その御前に罷り出た時のことを、重蔵は、日誌に記している。

『その相似、まさしく瓜二つにて、愕然たり。議事密ならざれば、害を成す。石のもの云う世のならいなれば、この事よくよくかまえて、自戒せざるべからず。それにつけても、択捉開島は、老中方へ上申の上にての決行なれば、幕閣内に、シャルシャム館見聞の儀、懸念あらば、隠密の沙汰あるべきに、さらになかりしは、ご老中、若年寄、いずれ方もご存じなきこと、あきらかなり。まことに不可解なる事実といわざるべからず』

この一文は、将軍世子とシャルシャム館の少年が、まぎれもなく、双生児であることを、指摘していた。

当時——。

双生児の生誕は、忌むべきこととして、武家はもとより、町家でも、世間にきこえるのをはばかり、先にうまれた子をのこして、後からうまれた子を、闇に葬るならわしであった。

まして、将軍家の世子が、双生児であることは、厳秘に付されなければならなかった。

敏次郎（家慶）の生母は、於楽の方であったが、双生児を産むや、忽ちにして、これを将軍家にも知らしめぬ素早い処置がとられたものに相違ない。

しかし、何者かが、その双生児の後子の方を闇に葬るにしのびず、これを、こっそり江戸城からかかえ出して、何処かにかくしたのではあるまいか。

そして、遠く、蝦夷地まで連れて行き、さらに、エトロフ島へ渡って、そこを生育の地にさだめた。

おそらく、その子を救ったのは、大奥の老女の一人に相違あるまいが、四十年前の出来事である。必死の決行に及んだその老女はじめ、ごく限られた少数の人々は、もはや生存しては居るまい。

よしんば生存していても、その者の口を割らせて、真相をつきとめることは、無用である。近藤重蔵の日誌が、すでに、事実を明らかにしているからである。

重大なのは、今日の事態であった。

四十年の歳月を経て、シャルシャム館の少年は、西の丸に在る内大臣大納言家慶と全く同じ容貌の壮者となった。

何処で、どのようなくらしを送っていたか、誰も知らぬ。

ところが——。

今春、家慶は、父家斉が左大臣に、自分が内大臣に任ぜられたお礼に、京へ上り、帰府した時、別人になったごとく、性情が一変していた。

家慶は、殆ど感情をおもてにあらわさぬ、平常大きな声もたてたことのない温厚な気象の持主であった。京から帰って来た家慶は、宛然それまでのおのれは仮面をかぶっていたかのごとく、

それをかなぐりすてた狂暴な振舞いを示しはじめたのである。
同一人とは、とうてい受けとれないくらいであった。
側近たちは、おどろき、おそれた。
一人、お目付佐野勘十郎だけが、家慶の行状を、巧みに隠蔽（いんぺい）し、糊塗（こと）して、世間に知れぬように努めているのであった。

二

――西城府は、京に於て、別人とすりかわった。その別人とは、エトロフ島で育った少年の後身に相違ない。
長い重い沈黙の中で、狂四郎と老人が、出した結論は、それであった。
事実とすれば、これほど前代未聞の奇怪事はなかった。
ようやく、狂四郎が、沈黙を破った。
「ご老人――どうされる？」
「うむ」
武部仙十郎は、顔を擡（あ）げて、狂四郎を視かえした。
「水戸殿は、わしに、解決を一任なされたわい」
「それで――？」
「それで、困って居る。この武部仙十郎、生涯最大の困惑をいたして居る。そうではないか？」
「たしかに」
狂四郎は、苦笑して、頷（うなず）いた。

「あの西城府が、贋者であることは、ほぼまちがいないとしても、やはり、はっきりと、その証拠をつかんでおかねばなるまい。そのことだけでも、容易ではない。……さて、贋者である証拠をつかんだとして、それからが、問題じゃな」

「…………」

「お主に、西の丸へ乗り込んでもらって、斬ってもらうのは、さほどの面倒な手筈を要すまい。しかし、そうは、参らぬ。表沙汰には、断じて、できぬ。隠密裡に、ことをはこんで、本物と、すりかわってもらわねばならぬ。……ところで、その本物が、はたして、生きて在すか、どうか。生きておいでならば、何処に在すか――まるきり、雲をつかむような当のない探索をいたさねばならぬ。この探索には、庭番衆を動員できぬつらさが、やりきれぬ。さて、本物が生きて何処に在すか、つきとめて、これをお救い申すのも、大仕事じゃ。無事にお救い申して、江戸へおつれもどして、さて、贋者とすりかわって頂くのも、これまた大仕事。……たのむ！」

老人は、畳に両手をついた。

武部仙十郎が、はじめて、眠狂四郎の前に、平伏したのである。

「この天下の一大事が、無事に片づくも、片づかぬも、お主の働きひとつじゃ。……どうぞ、たのまれてもらいたい」

狂四郎は、悃願されて、はじめて、自分の立たされている場を思い知らされた。

梅雨のうっとうしい日、旧知の松次郎がひらいている諏訪町角の「二八蕎麦」に立寄り、一人の旗本の少年と言葉を交わしたのが、きっかけで、松次郎に、

「旗本が一軒、どういう滅びかたをするか、それを見とどけて来る」

と、云いのこして、店を出た――その時から、知らず知らずに、この異常な秘密の渦の中へ、

おのが身はまき込まれていたのだ。

いつの間にか、のっぴきならぬ立場に置かれてしまっていた、と気がついた。

――この老人は、すでに、ずっと前から、西の丸にいるのが、贋者である、と疑惑を抱いていた。しかし、その疑惑を、すぐに、おれに打明けずに、おれがまわり道をするのを、辛抱づよく待っていた。おれに、両手をついてたのむ時を、じっと待っていたのだ。おれが、あとへ退けぬところまで来たのを、看てとって、両手をついた。

こっちが、お人好しであった、ということである。

この老人のやりかたを、表裏すべて知っていたつもりであり乍ら、こんども、つい、あやつる糸に踊ってしまったのである。

そして、いよいよ、これから、本舞台で、踊らされるのである。

かりに徳川幕府が倒れても、冷やかに傍観していられるほど、疎外者として生きている筈のこの自分が、親藩譜代の大名旗本の中でも最も忠節心にこりかたまった幕臣が、一身をなげうって為さねばならぬ働きを、もとめられているのであった。

これ以上の皮肉が、またとあるであろうか。

西の丸に在る贋者は、やはり、将軍家の実子なのである。どこの馬の骨とも判らぬ天一坊ではなかった。

実子と実子をすりかえる仕事であった。ばかげているといえば、これほどばかげた行為はなかった。

そもそもが、双生児の片方を殺してしまう、という陰惨なしきたりが、生んだものである。片われも育てて、大名にしておけば、このような奇怪な異変は起らなかったのである。

いわば、これは、迷妄の俗習がまねいた禍を、世間の目からはずしつつ、しりぬぐいする仕事であった。

——それを、このおれが、やらされるのか！

狂四郎は、自嘲せざるを得なかった。

「ご老人、木偶も時としては、あやつる糸通りには、踊らぬことがある、と承知しておいて頂こう」

「うむ。承知じゃ。……お主に、まかせる」

「場合によっては、筋書を変えるかも知れぬ」

「やむを得ぬ」

「こっちは、幕臣でもなければ、天下を憂う志士でもない。生命があぶなくなれば、自衛上、贋者を斬るかも知れぬ」

「公儀ひろしといえども、わしが両手をつく者が一人も居らぬ以上、お主のやりかたにまかせるよりほかはあるまい」

「では——」

狂四郎は、急にくつろいだ様子になった老人を、憎いものに眺め乍ら、

「とりあえず、西の丸へ、新しい女子を呈上して頂こう」

と、云った。

三

その日——。

西の丸のあるじは、吹上御苑の南隅にある馬場で、小半刻馬を責めてから、紅葉茶屋に入っていた。

茶屋といっても、十一室総畳数七十三畳もある宏壮な構えであった。

上之間に坐って、甘酒を飲んでいるところへ、音もなく、入って来たのは、お目付佐野勘十郎であった。

西の丸のあるじは、

「勘十郎、退屈だぞ。どうにかせぬか」

「どうすれば、よろしゅうございましょうかな？」

勘十郎は、にやにやした。

西の丸のあるじは、大声で、云った。

西の丸のあるじと勘十郎が、なにげないいで、密談を交わすのは、この時刻、この吹上の紅葉茶屋に於てであった。

江戸城内で最も人の影のすくないのは、此処であった。西の丸御殿の表も大奥も、四六時中、人の目につかぬ場所はなかった。

此処は、溜之間に黒鍬之者二人、数寄屋に坊主一人、そして勝手に数人の小者が、ひっそりと控えているばかりで、上之間からは、大声をあげても、きこえなかった。

控えている者たちは、すべて、佐野勘十郎の頤使下にあった。

「女子もあきたぞ。大奥奉公の女中らは、人形同様で面白うないと思うて、旗本の妻女らをえらんでみたが、いずれも、猫をかぶり居って、木股とかわらぬ。一人ぐらいは、嚙みついて参るかと期待して居ったが、人身御供どもが、死体になったように寝たにすぎぬ」

「やむを得ぬ仕儀かと存じられます。上様に、嚙みつく女子など居る道理がありませぬ」

「勘十郎、江戸には、莫連と申す女子が居る由、その莫連を呼ぶことはできぬか？」

「上様、ここは、千代田御城内でございますぞ」

「忍び出ることは、叶わぬか。吉原の廓へ参りたい、とまでは云わぬ。……大奥のくらしは、死んで居る。わしは、日々を活きているくらしの中に居りたい。せめて、月に一日だけでもよい。このままでは、気が狂うぞ、勘十郎」

「下情ご見聞の儀も、おいおいには、と考えて居りますが、まだその時機にはたちいたりませぬ。上様が、ここにお入り遊ばされてから、まだ一年も経ては居りませぬ」

「わしは、もう数年も、とじこめられているような気がする。……やはり、わしは、まちがって居ったらしい。参るのではなかった。ここは、牢獄だ。一日にわずか半刻の自由さえもない。食事にしても、自分の食いたいものは、何ひとつ食えぬ。勘十郎、わしの膳につけられる刺身を、食ったことがあるか。身が縮まって、まるであらいではないか。賄方を呼んできいたところ、一切ずつ、水おろしと称する砂糖水で、こすり洗いをするのだ、という。食えたしろものではない。鰻の蒲焼は、油が抜けきって、まるで若布ではないか。栄螺が出れば、これは作りもので、中身は味のない芋の煮つけであり、浅蜊汁が出れば、これも、身はとりのぞいてある。舌つづみの打てるような食物は、何ひとつないではないか。あつものも、焼ものも、みな冷えきって居る。台所から二丁もの距離をはこんで参るのだから、やむを得まいが、こんなまずいものを食わされて居れば、神経もささくれ立とうと申すものだ。……厠へ入れば、臀拭きがひかえて居る。臀を拭く自由も与えられて居らぬのか。こんなばかげたくらしがあろうか」

「いかに、ご不満であろうとも、もうおそうございます。貴方様は、将軍家おん世嗣・内大臣・大納言家慶様であらせられる」

勘十郎は、冷やかに云った。

「わしは、もとの名もない男に還りたい。……勘十郎、まことの大納言を、呼びもどすがよい」

「…………」

「勘十郎！」

贋家慶は、勘十郎の冷然たる態度に、はっとなって、

「そちは、よもや、大納言を、暗殺したのではあるまいな？　大納言は、わしの実の兄だぞ！」

「貴方様こそ、大納言家慶様以外の何人(なんびと)でもありませぬことを、お忘れなさいませぬように――」

「勘十郎！　おのれっ、わが実の兄を！」

かっと逆上した贋家慶は、とびかかりざま、勘十郎の頬桁(ほおげた)へ、一撃をくれた。

「誰が、殺せと申した！　おいっ！　誰が殺せと申したぞ！」

「おしずかに――。ここは、吹上の御庭でありますぞ。もし万が一、ぬすみぎく者があれば、ただではすみませぬぞ」

「莫迦(ばか)っ！　わしは、兄上が生存の有無をきいて居るのだ。……勘十郎、暗殺いたしたのか？　それとも、兄上は、何処かに、つつがなく在るのか？　どうじゃ？」

「将軍家お世嗣家慶様は、この世に、お二人とは在さぬ、と申し上げて居ります」

「で、では、殺したのだな？」

「いずれとも、ご随意にお受けとり下さいますよう――」

「おのれっ！」

贋家慶は、もう一度、拳(こぶし)をふりかざした。

しかし、頬を鳴らすより一瞬はやく、手くびを摑まれ、ねじあげられていた。
「ぶ、ぶれいなっ！」
贋家慶は、ふりはなそうとしたが、勘十郎の腕力は強かった。
「は、放せ！」
「おとなしゅうなさいますか？」
「痛いっ！　放せ！　痛いっ！」
贋家慶は、悲鳴をあげた。
勘十郎は、「やくたいもない」と呟いてから、その手くびをはなした。
贋家慶は、どさっと、座に就いてから、大きく肩で喘いだ。
「悪党めが――。末は、老中にでものしあがろうとの野望をたくましゅうして居るのであろうが……」
「老中！　左様、まことに魅力のある権威でござる。老中となって、一度、前田とか島津とかの大名方を、――その方、と呼びすてにしてみとう存じますな」
勘十郎、本心か否か、しゃあしゃあとこたえてみせた。
贋家慶は、遠い眼眸になると、
「わしは、蝦夷の空が、恋しゅうなった」
と、云った。弱々しい声音であった。
「男と申すものは、一度踏み出した道を、ひきかえすことは、叶いませぬ」
「勘十郎、その方は、内心では、わしの道化ぶりを、せせら嗤って居るのであろうな？」
「どうつかまつりまして――。身共は、上様を、まことの将軍家おん世嗣としか、考えては居り

ませぬ」

「嘘をつくな。わしに、今更、かくしたところで、なにになる」

「そう思い込まねば、身共のお役目は、つとまりませぬ。……上様、あと一年のご辛抱を、何卒(なにとぞ)お願いつかまつります」

「一年？　一年経ったら、どうなるというのだ？」

「ご本丸にお入り遊ばされるならば、おのずからご自由を得られることと存じます」

「勘十郎！」

贋家慶は、かっと目を剝(む)いた。

「そちは、よもや……将軍家のお生命までも、縮めようというのではあるまいな？」

「どうして、そのような大それたまねを——」

勘十郎は、あわてて、首を振った。

しかし、すでに、蘭学(らんがく)医師の渋江養庵(ようあん)を、「御匙(さじ)」に昇らせて、将軍家斉の生命を、近いうちに、奪おうと企てている勘十郎であった。

——やれやれ、このだだっ児、いささか神経が過敏にすぎる。

勘十郎は、うんざりした。

刺青(ほりもの)

一

眠狂四郎の姿が、ふらりと谷中（やなか）に現われたのは、雨もよいの、素足に寒気のしみる初酉（はっとり）の日であった。

谷中といっても、寛永寺三十六坊の護国院とか養寿院のある清水門からは、ずっと遠くはなれた、ひくい窪地（くぼち）に裏店（うらだな）がひしめいている一郭へ、狂四郎は、足を踏み入れていた。不忍池（しのばずのいけ）へ降りる広い往還に隣接している地域なので、三十六坊の要請もあって、公儀では、いくたびか、浅草あたりに代地を与えて移転させようとしているのであったが、いまだ実行不可能な裏店町であった。

住んでいるのが、いずれも、欲得ぬきで数十年働いて、いまは手足の利かなくなった頑固な職人たちだったからである。

一例を挙げれば——。鮪（まぐろ）の鮨（すし）など、死んでも口にしない連中であった。

鮪の鮨は、つい三年ばかり前に、つくられた食物であった。その年の二月と三月に、江戸の沖あいで、鮪が滅茶滅茶に取れて、小児が持ち上げられないほど大きな一本が、二百文ぐらいになった。しかし、二百文でも買い手がなくなった。やむなく、肥料として、近郊へ送り出した。その時、目はしの利いた如才のない板前が、鮪の身を削（そ）いで、鮨をこしらえてみた。すると、これが、安くて、うまいので、大当りした。

いわば、鮪が莫迦安値になったために、窮余の策として考案された食物であった。

しかし、それがいくらうまくても、谷中の職人長屋の老爺（ろうや）たちは、

「飯に鮪の刺身を、のせやがるなんざ、下の下だ」

と、云って、手を出さないのであった。

江戸汁という滅法辛い汁に、箸（はし）でひとすくいした蕎麦（そば）を、ほんの先だけ、ちょっとつけて、ひ

と息にすすりあげるのを意気として、倅や娘や弟子たちが、汁をたっぷりつけて喰べようものなら、血相変えて、

「馬方蕎麦をくらう奴なんざ、家へ置けねえ」

と、呶鳴るあんばいで、いきおい若い者たちから敬遠され、孤独なくらしをするようになっている——そうした年寄りたちが、枯葉が吹き溜るように集まった場所であった。

棒手振りも、ここへ入るのをためらう木戸を入った狂四郎は、泥溝をさらっている住人に、

「彫政という男が、ここに住んでいるときいたが……？」

と、訊ねた。

「いるにはいるが、もし仕事の話でおいでなすったのなら、ここからひきかえすのが、慈悲ですぜ、旦那」

「家は、どれだ？」

「だから、仕事の話なら、ひきかえしなせえ、と云ってるんでさ」

もう対手は、中っ腹になった顔つきであった。

「こっちは、家は、どれだときいている」

「判らねえ御仁だ。ここには、むかしは、名人と称われた男が、笊ですくうほど、いまさあ。しかし、足腰立たなくなって、手が顫えるようになっちまっちゃ、名人もへったくれもねえやな。だから、仕事の話を持ち込むのは、酷というものだ、と云っているんでさ」

「わかっている」

「わかっているのなら、ひきかえすのが慈悲じゃござんすまいか。老いぼれをそそのかすのは、こんな罪な話は、ありゃしねえ」

「早合点すぎるようだな。たしかに、わたしは、仕事の話を持ち込んで来たが、彫政にやってもらうためではない」
「じゃ、いってえ、誰にやらせなさるので――？　彫政のところには、中風の親爺（おやじ）を世話している娘しかいませんぜ」
狂四郎が、しつっこく食いさがって来る老爺を、いささか、もてあましている時、とある一軒から、鍋（なべ）をかかえた娘が出て来た。
狂四郎は、近づいて、
「そなた、彫政の娘か？」
と、訊ねた。
「はい」
下ぶくれの、おっとりした顔だちであった。
――大奥へ上らせるには、おあつらえ向きの娘だな。
狂四郎は、自分のカンが当ったことに、満足した。旧知の刺青師政五郎の面高な風貌を想い泛（うか）べて、
――あの男の娘なら、大奥女中にできる顔だろう。
と、考えて、やって来た狂四郎であった。
「彫政――。眠狂四郎だ」
そう告げておいて、狂四郎は、破れ障子を開けた。
夜具にくるまっていた老爺が、首を擡（あ）げて、
「旦那！　ど、どうして、こんなところへ……？」

もつれ舌で、おどろきの声を出し乍ら、もぞもぞと、身を起した。

曾て、江戸の三名人の一人にかぞえられた刺青師の、掛具にのせた右手が、絶え間なく小刻みに顫えているのを、狂四郎は、いたましいものに、眺めた。

二

刺青全盛の時代であった。江戸だけでも、刺青師は、百人以上いた。鳶人足や駕籠舁きで、刺青を施していない者は、一人もなかった、といってもあながち、誇張ではないくらいであった。

寛政の改革で、みだりに入墨をしてはならぬ、という法度が出され、さらに、文化年間にも、近年軽い者が総身にさまざまの絵だの文字だの彫る者が多いが、厳しく処分し、またそれを彫った者も咎めがある、というふれが出されている。

しかし、刺青の流行は、下火になるどころか、年を加えるにしたがって、熾んになったのである。

文政の初年、一人の盗賊を召捕って、打首にしようとしたところ、首から肩へかけて、大きな文字で、「東照大権現」と彫ってあった。徳川将軍家の始祖家康の神号に、刃物を加えることは叶わず、やむなく、この盗賊の処分を、死罪から永牢にかえた。

巷間にこの噂がつたわるや、刺青の流行に、いよいよ拍車を加えた。

当時、彫物の名人と称されたのは、彫宇之、彫兼、彫政の三人であった。

彫宇之は、跛で傴僂で、変り者であった。深川八幡前の、さる大きな廻船問屋に提供された酒倉に住み、白昼でも、陽光がさし込むのをきらって、一年中、蠟燭のあかりの中でくらし乍ら、飯は一粒も口にせず、目がさめてから寐るまで、酒気が抜けたことのない男であったが、

「彫宇之が彫った竜は、夜中に抜け出して、庭の泉水の水を飲む」

とか、

「何某という仕事師の背中に彫られた九郎判官に、出入りの大店の娘が、惚れて、とうとう気が狂った」

とか、ばかげた噂を、髪結床や湯屋の二階で交わさせるほどの名人であった。

また、彫兼は、国芳の水滸伝の豪傑の錦絵を、大名火消の加賀鳶たちに、彫ったので、有名であった。国芳の水滸伝の一枚絵は、百八枚ある。つまり、彫兼は、百八人の背中へ、彫ったのである。

彫政については、次のような逸話が、のこっている。

小石川伝通院前の茶漬屋・辰巳屋某は、全身に江戸名所図絵の刺青をして、山の手きっての絶品だという評判をとっていた。

某日、神田から、ごく風采のあがらぬ大工の棟梁が、辰巳屋へ茶漬を喰べに来た。

茶漬を、喰べおわってから、大工は、

「お前さんの刺青は、江戸一番という評判をとっていなさるそうだが、実は、あっしも、神田では、ちょっと知られた刺青をして居ります。……どうか、お前さんの刺青を見せてもらって、あっしのもごらんに入れたいと思うが、どんなもので――」

と、申し入れた。

辰巳屋は、承知して、着物を脱いでみせた。

それは、まことに見事な筋彫で、江戸の名所が、芥子粒ほどの人間が目鼻口までつけているほど、こまかく浮き出されていて、目を奪う綺麗さであった。

大工は、感服して、
「なるほど、評判通りで、目の栄養をとらせてもらいやした。……そいじゃ、こんどは、あっしのを、お目にかけやしょう」
と、云って、するりと、素裸になってみせた。
辰巳屋が、眺めると、からだ中どこにも、一点の針の痕（あと）さえもなかった。
「これア、どういうわけなので――？」
怪訝（けげん）そうに見上げる辰巳屋に向って、神田の大工は、にやりとすると、褌（ふんどし）をはずしてみせた。
股間（こかん）に携（さ）げられた男根は、人に自慢にするに足りる巨（おお）きなしろものであった。
その陽茎の先端に、いっぴきの蚊が、とまっているのを、辰巳屋は、見わけた。
実物大のその蚊は、生きているとしか思われなかった。
辰巳屋は、唸（うな）った。
身体（からだ）の中で、針を入れられると、最も痛い箇所であり、いまだ、ここに刺青を施した者はいなかった。
大工は、云った。
「あっしは、ここに、この蚊を彫ってもらうために、蜂（はち）に刺される十倍ぐらいの痛みを、十日間我慢しやした」
辰巳屋は、おそれ入って、この刺青くらべは、自分の負けだ、と正直にみとめた、という。
この蚊こそ、彫政の彫ったものであった。
その名人芸も、四年前までのことであった。
中風で倒れた彫政の名は、いまでは、人の口にのぼることもない。

「旦那、あっしは、こんな、だらしのねえ姿を、あっしのむかしをご存じの、貴方様のような御仁に、ごらんに入れたくねえばかりに、こうして、この裏店に、ひっ込んで、いるんでさ。……それを、どうして、わざわざ、さがして、おいでになったので――？」

「たのみがある」

「へえ――？」

「お主は、弟子を取らなかったな？」

「こんな稼業は、一代限りのものだ、と思いやしてね」

「いま、おもてで会ったが、お主の娘は、お主の仕事を、手つだったことはないか？」

「多少、絵を習わせましたので、ちょいちょい、下絵を描かせたおぼえはございますが……、それが、どうか、なすったので？」

「手伝って居れば、墨の入れかたも、見様見真似で、できるのではあるまいか」

「ご冗談を――」

彫政は、かぶりを振った。

「旦那ともあろう御仁が、むかっ腹の立つようなことを云いなさる。まあなんとか見られる刺青をやれるまでに、十年の修業を積んでいなけりゃならねえんですぜ、旦那――」

「わたしは、器量のいい娘で、刺青のできるのを欲して、ここへ来たのだ。名人芸はおろか、並の腕前をも必要としている次第ではない」

狂四郎が、そうこたえた折、格子が開けられ、戻って来た娘の声がした。

「旦那は、蛙の子は蛙だから、やれねえことはねえ、と仰言るんでしょうが、そうは、問屋が、おろさねえ。……あのおきちに、たったいっぺんだって、針を持たせて、手ほどきしたことは、

ありゃしねえんだ。仮名文字一字だって、人様の肌をよごせる道理がねえ」
「お主がそうきめているだけで、案外やれるかも知れぬ」
「莫迦なことを、仰言るものじゃねえ。おきちは、あっしの娘ですぜ。親爺に恥をかかせるようなまねをする筈がねえ。……おきちが、絶対諾とは云いませんや」
「諾と云ったらどうする？」
「あっしが、許しませんや」
「彫政――、このたのみは、途方もない一大事にかかわったことだと思ってもらおう」
「どんな一大事か存じませんが、あっしは、おことわりしやすよ。冗談じゃねえ、まったくの話――」
彫政は、さっさと帰ってくれ、といった表情になった。

三

台所へひっ込んでいた娘のおきちが、顔をのぞけたのは、その時であった。
「おとっつぁん――」
「なんだ？」
「このおさむらい様は、おとっつぁんが、いつも噂をしている眠狂四郎様だろう？」
「ああ、そうだ」
「そいじゃ……、おとっつぁんが、一番好きなお方のおたのみじゃないか」
「べらぼうめ！　いくら、眠の旦那のおたのみでも、肯き入れられることと、肯き入れられねえことがあらあ。ものには、けじめというやつがあるんだ。……たとえ、百両積まれたって、針を

持ったことのねえ小娘に、刺青なんぞを……、そんな、ふざけたまねが、させられるけえ」
「おとっつぁん！」
「うるせえ。すっ込んでろ！」
「おとっつぁん、あたしは、針を持ったことがあるんだよ」
「なんだと?!」
彫政は、びっくりして、わが娘の顔を見かえした。
「ほ、ほんとか？」
「あい、ほんとさ」
「な、なんでまた――？」
「是非って、たのまれたし……、それに、お礼が三両、と云われて――、あの時、借金取りが、毎日押しかけて来て、つらかったので、つい……」
「ば、ばかやろうっ！　針を、持ったこともねえ、てめえが、どうして、彫れるんだ！」
「門前の小僧が、お経を読む、ということがあるじゃないか」
「きいた風な口を、ききやがるねえ！　あきれけえったあまだ。……おれが、このざまでなかったら、勘当して、たたき出してやるところだ」
狂四郎は、おきちが顔に似合わず勝気であるのを、たのもしいものに思い乍ら、
「何を彫ったのだ？」
と、訊ねた。
「眠の旦那様。ちょっとのあいだ、お待ち下さいますか？」
「うむ」

「ひとっ走り、行って参じます」
おきちは、いきいきした様子で、おもてへ駆け出て行った。
「埒もねえ！　なんてえこった！」
彫政は、いまいましげに、吐き出した。
「彫政、わたしの話をきいてもらおうか」
狂四郎は、自分の計画を打明けることにした。
彫政は、狂四郎がしずかな語気で、話す内容を、きいているうちに、驚愕の目を瞠り、やがて、唖然とした面持で、口を半開きにしたまま、言葉もなかった。
狂四郎が、話しおわった時、おきちが誰かをともなって、戻って来た。
偶然であった。
おきちのあとから入って来た者を、一瞥して、狂四郎は、
「なんだ、お前か――」
と、薄ら笑いを、口もとに刷いた。
路考茶縮緬に、一粒鹿の子の黒襟、白繻子の半衿をひきたたせて、袖から緋縮緬の襦袢を色っぽくちらつかせた粋な町方女房のなりをしているが、実は、上野・両国の広小路に出没している女すりであった。
たそやお新、という。
いささか彫りがふかすぎて、やや険はあるが、造作の大まかな肌の美しい佳い女であった。
「見物して下さるのが、眠の旦那ときいて、やれうれしや、とんで来ましたのさ」
たそやお新は、上って来ると、狂四郎と彫政へ挨拶した。

お新は、彫政とも顔馴染であった。

「お新さん、おめえさんが、おきちに、彫らせなすったのか？」

彫政は、あきれ顔で、お新をじろじろ見やった。

「あいな。名人の娘だもの、立派に彫れるにちがいない、とあたしゃ見込んでね」

「なにも、おめえ、ど素人の小娘に、針を持たせねえでも、その白い肌を脱いでみせりゃ、欲得ぬきで、夢中で彫ってくれる刺青師は、いくらでも、いるじゃねえか」

「それが、そうは、いきませんでしたのさ」

お新は、ふふふ……と含み笑いをした。

「見せてもらおうか」

狂四郎が、促した。

「あいな」

お新は、立ち上った。

「ほんとは、お賽銭をいただかなけりゃ、おいそれとおがませられない刺青なんだけど、対手が眠狂四郎の旦那じゃ、二つ返事で、ひらいてみせないわけに参りません。……お気に召したら、旦那、あたしを、抱いておくんなさるかえ？」

「場合によっては——」

「うれしいことを、仰言って下さるわさ。じゃ、ひとつ——はずかし乍ら」

お新は、膝を折り加減にして両脚をひらくと、路考茶縮緬の裾をつまんで、江戸褄を左右へはねておいて、緋縮緬の長襦袢と白縮緬の湯文字を、合わせてつかんで、するすると、捲りあげ、鼠の厚板の帯の下あたりで、ひき裂くように押し拡げてみせた。

大きくひろげた両脚の奥に、女の部分が、あらわになった。
狂四郎と彫政の視線が、そこへ、当てられた。
柔襞を包むくろぐろとした密毛に向って、いっぴきの赤い蟹が、鋏を高くふりかざして匍い込もうとしているのであった。
お新は、にことすると、その肢態のままで、前へ、進んで来た。
それは、とうてい、はじめて、細針を束ねた簓を持った者の作とは思われぬ精巧な出来ばえであった。
すくなくとも、狂四郎の目には、熟練の刺青師が成したもの同様に、映った。
「おわかりですか、親方。これが、おきっちゃんが、彫ってくれた蟹なんですよ。……ほめてあげて下さいな。借金を返すために、けんめいになって、彫ったこの出来ばえに、ケチはつけさせませんよ、親方」
「…………」
彫政は、なんとも、こたえなかった。
無言が、娘の才能を、ある程度みとめた証左であった。
「眠の旦那様、あたしを使って頂けますか？」
おきちが、必死な眼眸を仰がせた。
「こちらから、見込んで、たのんだのだ。……いま、借金は、いくらある？」
「は、はい。……七両がほど——」
それに応えて、狂四郎は、懐中から、小判を十枚、とり出して、おきちの膝の前に抛った。
「ありがとう存じます。……おとっつぁん、ほれ、こんなに——」

彫政は、おきちに、小判をさし出されて、俯向いた。
「眠の旦那、いったい、おきっちゃんに、何を彫らせようというんです？」
前を合わせたお新が、訊ねた。
それにこたえず、狂四郎は、立ち上ると、
「彫政、それでは、娘を借りるぞ」
と、云った。
「へい」
彫政は、頭を下げた。
「あのう……どちらへ——？」
おきちが、ちょっと不安そうに、狂四郎を仰ぎ見た。
「大奥だ。そなたは、三日間だけ、大奥女中になる」
狂四郎のこたえは、それであった。

湯殿

一

十二月十三日——この日は、千代田城内に於ける煤払いの定日であった。
煤払いといっても、町家のように、この日一日だけ大わらわになって、屋内を掃除するのではなく、営中では、すでに月はじめから、めいめいの部屋（長局）からはじめて、この日は、御座

所をきれいにして、おわるのであった。そして、すでに用意してある新しい障子と畳に取り替える。

午前中に、これは、おわり、午後に、煤払いの式を催す。

塩引き鮭の切身、里芋、大根、牛蒡、人参、焼豆腐、田作の平盛、豆腐の味噌汁など、なるべく、民間の食膳に似た料理が出され、上臈、年寄から使番、御半下にいたるまでの総員が、酒を汲む。

大奥に於ける年に一度の無礼講であった。上下ともに、染模様の手拭いをかぶって、盃を重ね、酔うほどに、踊りを披露する者、歌をきかせる者があり、やがて、誰かれの別なく、数人で一人をつかまえて胴上げをするにぎやかさであった。

たとえ、位が上の中﨟であろうとも、寄ってたかって、宙へ抛りあげ乍ら、

「めでためでたの若松さまよ、枝も栄えて、葉もしげる」

と、はやしたてる。

数町の長廊下を歩いても、裳裾をみださぬ作法を身につけた大奥女中がたが、宙へ躍るたびに、しだいに下肢をあらわにして、膝はおろか、内股の奥までひらいてしまうさまは、あでやかでみだらなけしきであった。

当然——。

この日ばかりは、大奥内は、平常のしきたりがすべて破れた。

そこをねらって、西の丸御殿で、二人の新参お目見がなされた。

一人は、上野東叡山三十六坊をわたりあるいて大名に春をひさいでいる紋ちらしのお玉、そしてもう一人は、刺青師彫政の娘おきちであった。

勿論、その素姓は、かくされて、本丸老中水野忠邦の側用人武部仙十郎の養女として、奉公に上って来たのであった。

たとえ、旗本の娘であっても、お目見には順序があり、はじめ一月あまりは中年寄の部屋に部屋子として働き、その中年寄が願い親になって、願い出て、何月何日御吟味という許可が下りるまで、待つのであった。

ところが、たま、きちと呼ばれた二人の新参は、昨日、中年寄の部屋に上り、早速、今日――煤払いの式の終るのを待って、御年寄にお目見することになった。異例のことであった。武部仙十郎の工作であった。

中年寄は、美しい搔取を羽織った振袖姿のたま、きちの二人に、お広座敷へともなう前に、

「これに、親の名と自身の名を書きつけますよう――」

と、二つ折りの小奉書を、渡した。

それには、すでに、

上々様御機嫌能被為成御座御目出度有難候

と、したためられてあった。

たまときちは、それぞれ、親の名を武部仙十郎と書きつけた。

しきたりとしては、それから、親もとへ、身許しらべをして、それが、たいがい一月から数十日もかかるのであったが、この二人の女中に対しては、すべてがはぶかれた。

「では、お広座敷へ、連れますする」

中年寄は、立ち上った。

あとにしたがった新参二人のうち、からだに大名の家紋を彫りつけた者の方は、

——どうなるというんだろう？　こんな大それた芝居が、筋書き通りに、はこぶものかしらね。

と、胸の裡で、呟いていた。

眠狂四郎が、打った芝居であった。紋ちらしお玉は、狂四郎という男に、ふっと魅せられて、つい、承諾して、女中に化けたのであったが、いざ、大奥へ上ってみると、流石に空おそろしさを、おぼえずにはいられなかったのである。

——素姓がばれれば、首がとぶだろうし、やりそこなっても、生命はないんだ。……とんでもない芝居を引き受けちまったよ、あたしゃ……。

出仕廊下を進み乍ら、お玉は、処刑場へでも曳かれて行くような気分になった。

おきちの方は、すでに覚悟をさだめたもののごとく、無表情であった。

あちらこちらの部屋からは、なお、歌声や笑い声が、ひびいていた。

やがて、中年寄が、二人をともなったのは、奥御膳所という、中央に大きな囲炉裏の切ってあるお広座敷であった。

そこには、御膳所の役人である御仲居が、たった一人だけ、控えていた。

「お目見吟味、お願いつかまつる」

中年寄が、願い出ると、御仲居は、

「かしこまりました」と、一礼して出て行った。

やがて、「お入り」という声があって、入って来たのは、五十前後の大柄で福々しい老女であった。

ふつう、お目見吟味は、老女（お年寄）が三人か四人そろい、ほかに上﨟、中﨟が列座するのがしきたりであった。

しかし、今日は、浦尾というその老女一人しか、姿を現わさなかった。浦尾は、西の丸大奥に於ける第一の実力者であるとともに、武部仙十郎が、呼吸を合わせることのできる唯一の存在であった。

浦尾は、中年寄から、二枚の小奉書を受けとると、別に目も通さず、お玉とおきちの顔を、じっと眺めやった。

二

御仲居が、

「新規お召抱えの者どもの吟味、頂戴つかまつります」

と云って、お玉とおきちのそばへ、膝行すると、

「脱ぎませ」

と、命じた。

吟味とは、この囲炉裏端で、一糸まとわぬ素裸にして、どのような肌と肢体を所有しているか、観察することであった。

おきちはともかく、お玉は、愕っとなった。吟味が素裸にされることだとは、きかされていなかったのである。

裸になれば、忽ち、素姓は露見してしまう。

お玉は、腹の底まで蒼ざめた。

「本日は、お煤払いであるし、吟味は、この浦尾だけゆえ、脱がずともよいであろう」

老女浦尾が、微笑し乍ら、免じた。

二人を裸にしないために、この日をえらび、浦尾だけが吟味に現われたのである。
御仲居は、手数がはぶけたことを、よろこんだ。
浦尾は、二人に、家慶付き中臈を命じて、
「お湯がかりの役向きを与えるゆえ、御湯殿にてお目見をいたすがよい」
と、吩付けた。
これは、筋書き通りであった。
あとは、お玉とおきちの腕次第ということになる。
老女浦尾は、その眼眸の色に、言葉にできぬ意味をこめて、頷いてみせておいて、立ち上った。
——うまくやるがよい。
浦尾の眼眸は、そう云ったのである。二人の素姓に就いては、武部仙十郎の密書で、知らされていたのである。
その時刻、家慶——いや、家慶と瓜二つの人物は、表から奥へ入って来ていた。
取替えられた青畳の匂う御小座敷に、坐った贋家慶は、中臈に、
「煤払いのばか騒ぎを、わしにも見せぬか」
と、云った。
しかし、中臈は、それには、こたえず、
「御前（夫人）さまよりのおゆるこを——」
と、黒塗りの椀を、さし出した。
贋家慶は、その蓋を取ってみた。

善哉であった。大奥では、煤払いのこの日と、正月十一日の鏡開きに、御台所が手ずからよそおって、将軍家へ、おゆること称する善哉を馳走するならわしであり、西の丸の方でも、これにならっていた。

贋家慶は、甘いものは大きらいであった。

中藺は、贋家慶が黙って、蓋をするのを眺めて、

「おしきたりにございまする」

と、すすめた。

「くだらぬしきたりなど、わしは、進んで破って居る！」

贋家慶は、呶鳴るように云った。

中藺は、俯向いた。

贋家慶は、忽ち苛立たしい形相になった。

夫人は、京の御所から嫁いで来た喬子（楽宮）という内親王で、聡明な婦人であった。

贋家慶は、今春、西の丸に入ってから、一度も、夫人と寝所をともにしていなかった。家慶の夫人と同衾することは、贋者であることが露見する危険率が最も高かった。

贋家慶は、そのため、ずうっと、夫人とは顔を、間近に合わせることも、避けて来ていた。

――この中藺めは、わしが、妻と寐ぬことを疑って居る。

それが、贋家慶を、苛立たせた。

「その方、わしが、次から次に、しきたりを破っていることを、不都合だと思って居るのであろう」

「……………」

中﨟は、黙って、顔を伏せている。

「法度、掟と、しきたりは、ちがうぞ。……大奥では、煙草を、食後に二服ずつ喫むのが、これまでのしきたりであった。しかし、三服喫んでいかぬということはあるまい。……おい！　三服喫んでは、不都合なのか？」

「いえ――」

中﨟は、おそろしさに、肩をすくめた。

「見ろ！　ここには、いつも、煙草盆が置いてあるぞ。ところが、しきたりとして、これまでは、食後でなければ、煙管を把ることはできなかった。それならば、なぜ、食後にだけ、煙草盆を、わしの前に置かぬのだ。常時ここへ置き乍ら、食後の二服しか喫ませぬ、というばかげたしきたりを、その方らは、いかにも、法度か掟のごとく、思い込み、わしがそれを破ると、まるで、大地震でもくらったように、仰天いたす。……よいか、わしは、そういうくだらぬしきたりが、今年の春頃から、急に、腹が立って参ったのだ。片はしから、破ってくれることにしたのだ。わかったか！」

贋家慶は、呶鳴りたてておいて、不意に、中﨟につかみかかった。

「その方は、もはや四十に近かろう。しかし、わしが、その方に手をつけてはいかぬ、という法度はないぞ。どうだ！」

そう云いざま、贋家慶は、中﨟の膝のあいだへ、片手を、ねじ込むようにもぐらせようとした。

中﨟は、必死になってこばもうとしたが、贋家慶が遮二無二膝を押しひらかせる暴力に、救いを呼ぶことも叶わず、ついに、その食指に、いまだ男を知らぬ女性の柔襞を弄られようとした。

老女浦尾が、入って来たのは、その時であった。

三

「上様、今日はお煤払いでもありまするゆえ、奥にて、ご入浴あそばして、お髪でもお洗いなさいませ」
浦尾は、贋家慶のみだらな行為を眺め乍ら、眉ひとつ動かさずに、そうすすめた。
将軍家ならびにその世子は、大奥で入浴する慣習はなかった。
もとより、大奥には、湯殿は設けられてあったし、主人が奥泊りの日には、入浴の用意がされていた。
入らぬのは、ただ、表御殿の方で入浴するしきたりであったにすぎなかった。
「ふむ！」
贋家慶は、にやりとした。
老女自身が、すすんで、しきたりを破ろうとするのであった。
「話が判るの、浦尾――」
贋家慶は、弄(もてあそ)んでいた中﨟をすてて、腰を上げると、
「どうじゃ、浦尾、しきたりの破りついでに、今夜は、その方が、わしの伽(とぎ)をつとめぬか、はっはっはっ……」
と、高笑いした。
大奥の湯殿は、浴槽(よくそう)の下を焚(た)いて、湯を沸かすのではなかった。八畳あまりの板敷き（流し場）に、檜(ひのき)の浴槽が据えてあり、御三之間女中が、大きな玄蕃(げんば)（桶(おけ)）で、熱湯と水をはこんで来て、加減をととのえるのであった。

贋家慶は、ずかずかと、高麗縁(こうらいべり)の脱衣の間に入ると、そこに平伏する二人のお目見女中などへは目もくれずに、衣服を脱ぎすてた。

贋家慶が、素裸になって、板敷きへ降りて行くと、お目見女中は、そっと頭を擡げて、顔を見合せた。

お玉とおきちであった。

お玉は、おきちに合図しておいて、搔取を肩からすべり落した。空色綸子(りんず)の小袖を素肌にまとうていたが、これは、お湯衣裳(いしょう)で、裾を短く執り、緋(ひ)の手襷(たすき)をかけていた。

小函(こばこ)に、白い真岡(もうか)の糠袋(ぬかぶくろ)をのせて、板敷きに降りた時には、もう贋家慶は、浴槽に身を沈めていた。

お玉は、なるべく、目にとまらぬように、片隅に、蹲(うずくま)って贋家慶の出て来るのを待ち乍ら、

——丁と出るか、半と出るか……、ここが一番、いのちがけの勝負どころだよ、紋ちらしの姐(あね)御(ご)！

と、自分をはげました。

贋家慶は、浴槽から出ると、

「女中、力をこめてこすれ」

と、命じた。

「はい」

贋家慶の体軀(たいく)は、逞(たく)しかった。

ひとしきり、背中をこすってから、お玉は、贋家慶の前にまわって、その腕を洗いはじめた。

贋家慶は、双眼をふさいで、こころよい放心状態でいたが、やがて、目蓋をひらいた——とた

ん、その視線が、はだけられた女中の胸もとへ、当てられた。

「おい！」

贋家慶は、猿臂をのばして、お玉の襟をつかむと、ぐいと拡げてみた。

「なんだ、これは?!」

贋家慶は、あきれて、声をあげた。

ゆたかな胸の双の隆起の上には、右に降鶴丸、左に打出小槌、そして、その谷あいには、花藤の紋が、白い柔肌を彩っていたのである。

「おはずかしゅう存じまする」

お玉は、わざと、消えも入りたげな身振りで、あわてて、胸をかくそうとした。

贋家慶は、それを許さず、

「これは、刺青ではないか。刺青をした女子を、奉公させたとは、浦尾め、しゃれたまねをいたすの」

と、云い乍ら、さらに、空色綸子の前を、大きくひきはだけさせた。

腹部にかけて、竜胆、三蓋松、鷹羽、菊水、抱茗荷など、さまざまの紋章があらわになるのを、見出した贋家慶は、

「その方、家紋ばかりを彫ったのは、なんのためじゃ？」

「はい――」

「申してみい。なにか、仔細があるのであろう？」

「は、はい」

「申せ」

「市井で謂う莫連であろう。どうじゃ？」

「おゆるし下さいませ」

「しおらしげな様子を、つくるな！　その方、市井で謂う莫連であろう。どうじゃ？」

「申しわけございませぬ」

「莫連めが、何故に、大奥奉公に上ったぞ？　なんのこんたんじゃ？　申せ！」

賢家慶は、いきなり、乳房のひとつを、わし掴みにした。

お玉は、悲鳴をあげて、思わず賢家慶の手を叩いた。

「ははは……、莫連の本性をあらわしたの。さあ申せ、なんのこんたんがあって、女中に化けたぞ？」

「申し上げまする。……わたくしは、このからだに葵の御紋を、彫らせて頂きとう存じまする」

「どういうことだ？　彫りたければ、勝手に彫ればよいではないか。……奉公いたすまでもあるまい」

「上様。このからだに彫ってありますのは、わたくしにおなさけを下されたお大名がたお旗本衆の御家紋でございます。ごらん下さいませ」

お玉は、お湯衣裳を、すばやく脱ぎすてて、一糸まとわぬ裸身を、賢家慶の眼前にさらしてみせた。

「……うむ！」

およそ三十ともかぞえられる紋章をちらばせた肢体を、じろじろと眺めやっていた賢家慶は、不意に声をたてて、笑った。

「面白い女子だ。まさしく、その方は、莫連だな」

「空おそろしいことを、思いつきまして、申しわけございませぬ。からだが縮みまする。おゆる

しを――」

お玉は、またあわてて、お湯衣裳を身につけると、板敷きに、平伏した。

「よい。殊勝な心掛けじゃ。この大奥には、掃いてすてるほど女子が居るが、その方のようなあっぱれな思案をいたす者は一人も居らぬぞ。……ところで、これほど数多の大名旗本に、どうして、操をまかせることができたのじゃ？」

お玉が、寛永寺の三十六坊を告げると、贋家慶は、声をたてて笑った。

「大名旗本ども、何食わぬ面つきをして、口をぬぐってそ知らぬふりをいたして居るが、一皮剝けば、土方人足と料簡は、すこしも変っては居らぬ。……よし、莫連――なさけをくれてやろう」

「はい！　ま、まことでございますか？」

「造作もないことじゃ。幾十人かの大名旗本に春をひさいで、その紋章を彫ったからだを、この内大臣大納言が、最後に抱いて、葵の紋を、彫らせてやる。ははは……面白い。……よし、彫れ。彫るがよい」

贋家慶は、お玉の肩を摑むや、その場へ、押し倒した。

お玉は、目蓋を閉じると、

――筋書き通りにはこんでいますよ、旦那。

と、胸の裡で、云いかけた。

眠狂四郎が、この湯殿の天井裏に身をひそめて、じっと、隙間から見下ろしているような気がしたのである。

贋家慶は、仰臥させたお玉の裳裾を捲ると、残忍な視線を、その秘処へおとして、

「ははは……、どうじゃ、莫連、いっそ彫るなら、この恥毛を剃りおとして、葵の紋を彫りつけい。それがよい。ははは、それがよいぞ！」

と、云った。

葵紋異変

一

贋大納言家慶は、湯殿の流し場で、ひどい気ぜわしさで、市井の莫連女の体内へ、したたかに、精気を放射しおえると、さっと起き上って、湯槽へつかった。

お玉は、お湯衣裳をととのえると、両手をつかえて、

「有難う存じました」

と、平伏した。

家慶は、目蓋を閉じて、何やら考えていたが、

「その方のからだに、大名旗本は、随喜の泪をこぼしたか？」

と、訊ねた。

「わたくし自身には、判りませぬが、お殿様がたは、次つぎに、こっそり、申し送りをして下さいました」

「ははは……。下世話に申す、三味の音締めのよさか。莫連、市井では、その方のようなからだを、章魚と申すのであろう。知って居るぞ」

「恐れ入りましてございます」
お玉は、そっと顔を擡げて、湯槽から浮いた贋家慶の首を見やり乍ら、内心、
――せっかくの章魚をご馳走したのに、喰べかたが、チトお粗末でござんしたねえ。
と、毒吐いた。
「莫連――」
贋家慶は、板敷きへ出た。
「はい」
「わしの目の前で、その恥毛を剃りおとして、葵の紋を彫ってみせい。その方が懇意の刺青師を呼べい」
「上様。あちらに控えまする、わたくしともどもお目見いたしました者が、これらのご紋を彫ってくれたのでございます」
「ほう――」
贋家慶は、脱衣の間に控えているおきちを視やった。
「あれは、莫連とは思えぬぞ」
「莫連ではございませぬ。江戸一番と称われた刺青名人の娘でございます。……斯様なご下命もあろうかと存じまして、さそうて、お目見いたしたのでございます」
「小面憎い算段をいたし居った。……面白い。早速、今宵にも、彫ってみせい」
「忝のう存じまする」
贋家慶が、衣服をつけて、廊下へ出ると、そこに、老女浦尾が、待っていた。
「浦尾、今宵の伽は、あの湯殿の新参二人にいたせ」

贋家慶は、命じた。
「かしこまりました」
浦尾は、無表情で、こたえた。
武部仙十郎と打合せた手筈通りに、事ははこんでいた。
西の丸大奥で、この人物に対して、もしや贋者ではあるまいか、と疑惑を抱いていたのは、この浦尾ただ一人であり、すでに夏頃、武部仙十郎に、その疑惑を告げていたのである。
贋家慶は、お縁座敷の上段の寝所に入ると、炬燵に入って、鍼医に、灸をさせた。
ほんものの家慶は、灸がきらいであったが、贋者は、乱気をしずめるために、佐野勘十郎のすすめで、灸をするようになっていた。
大奥に於ける点灸は、やはり、面倒なしきたりがあった。
鍼を打ち灸を据える鍼医は、黒ずくめのいでたちで、顔も目ばかりに、黒い布で包んでいた。
御匙医師といえども、手をじかに肌にふれることは決してなく、襦袢の上から診察するのであったが、鍼医だけは、直接、肌へ針を刺さねばならず、また、墨を点じて、もぐさを押しつけなければならぬので、肌へ息がかからぬように、顔をかくすのであった。
将軍家は、灸の時は、御灸御召という着物をつける。背縫いが五色の糸で綴じてあり、その糸を抜くと、ほころびて肌が出るしかけであった。
すなわち、灸を据えるところだけを、肌が出せるような着物をつけた。
鍼医は、灸穴にあたる箇処へ、墨を点じて、もぐさを押しつけ、山の形に盛っておき、丁子油を用った行燈から、線香に火を移して、据えた。

そして、羽箒（はぼうき）で払って、おわるのであった。

贋家慶は、御灸御召に着換えると、桜炭でほっかりとあたたかい炬燵の中へ、四肢を容（い）れると、伺候して来た鍼医に向って、唐突に、

「その方も、鍼を打つ、刺青師も同じく針を刺す。どうじゃ、その方も、刺青をやってみたくはならぬか？」

と、訊ねた。

「てまえは、医師にございますれば……」

鍼医は、経絡（けいらく）に指をふれ乍ら、こもり声でこたえた。

「刺青師よりも、鍼医の方が、上だ、と申すのか？」

「刺青師は、肌をけがすだけでございまするが、鍼医は、からだをなおすつとめにございまする」

「刺青というのは、肌をけがすのではなくて、肌を美しゅう彩るものだぞ」

「身体髪膚（はっぷ）は、これを父母より享（う）けたものでございますれば、かまえて、そこなわぬように努めるのが、孝行でございまする」

「ははは……、ところが、せっかくこの世へ送り出した子を、世俗の慣習で、あの世へ葬り去ろうとする親も居るぞ」

「左様な非情な親など、万人に一人も居りはしませぬ」

鍼医は、墨を点じた灸穴へ、もぐさを押し盛り乍ら、急に、地声らしい大声で、こたえた。

それは、講釈師立川談亭のものにまぎれもなかった。鍼医に化けて、上って来たのである。

立川談亭としては、一生一世の大芝居であった。

二

「それが、居る。例えば、武家では、双生児が生れると、あとから生れた方を、葬る慣習があるではないか。……あやうく殺されかかったその子が、偶然に、一命をとりとめて、育ったといたしたら、どうだ。浮世の仕組、慣習と申すものに、ことごとく、反逆いたすのは、当然であろう。どうじゃ？」

「御意――」

談亭は、線香に火をつけると、もぐさを燃やしつけた。

――源平盛衰記に、過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ、と書いてあるが、うめえことを云ったものだ。種の蒔きかたが多すぎるから、こういう因果なことになっちまったんだが、さて、これを、どう刈るかは、大変だ。

各灸点から、煙がたち昇るのを眺め乍ら、談亭は、ひそかに、首を振った。

「どうだ、その方、ひとつ、刺青を習って、わしのからだへ、彫ってみせぬか？」

贋家慶は、途方もないことを、口にした。

「めっ、滅相もないことを！　おたわむれにも、左様なことを、お口にあそばしましては……」

「本気じゃ。……神君家康公の肖像など、如何であろうな。それとも、美女が素裸になってしがみついている図が、よかろうか」

「と、とんでもない！」

「まさか、刺青師を呼びつけて、彫らせるわけには参らぬゆえ、鍼や灸をするとみせかけて、その方に、すこしずつ、彫らせるのであれば、内密の裡に、仕上げることができるぞ。どうじゃ、

やらぬか？ 習って参れば、やれるであろう。彫れ！……あ、熱っ！」

贋家慶は、炬燵の櫓へ、しがみついて、疼痛に堪えた。

——いよいよ、贋者に相違ない、と明々白々と相成ったわい。

談亭は、合点しつつ、

「是非にとの御下命でございますれば、刺青を習わぬでもございませぬ」

「わしは、本気だぞ。……うむ！ 彫ってくれるぞ！ そうだ。神君が、出陣の座に就いている——そのまわりを、一糸もまとわぬ裸女が、踊り狂うて居る図がよいぞ。……む！ む！ うむ！……そ、その図を、彫れるように、その方、名人と称される刺青師に、習うてまいれ。よいか」

談亭は、燃え尽きたもぐさ灰を、羽箒で払いおとし乍ら、

「かしこまりました」

——眠狂四郎に、このことを告げたら、にやりとして、談亭、面白いではないか、彫ってやれ、と云うにちげえねえんだが……、やれ、空おそろしや。こうして鍼医に化けているだけでも、たいがい、きもが縮まっているんだ。……ねえ上様、芭蕉も詠んでいますぜ。河豚汁や鯛もあるのに無分別、とね。綺麗な女中衆の肌に刺青させて、これを抱くぶんには、まだよかろうが、てめえのからだをよごしちまっちゃ、それこそ、墓穴を掘ることになりゃしませんかねえ、上様。

眠狂四郎からきかされたところでは、この贋者は、何処の馬の骨とも判らぬ天一坊ではなく、やはり、現将軍家の実子であることにまちがいはないのであった。

内大臣大納言家慶とは、兄弟なのであるから、べつに、すりかわっても、不都合はないわけであった。

もしかすれば、兄の家慶の方は、この世の人ではないかも知れなかった。そうとすれば、この人物が、家慶になりすまして、やがて、十二代将軍職を襲うたとしても、文句のつけようはないところである。

しかし、始祖を冒瀆（ぼうとく）するような刺青を、わが身に施そうとするような料簡（りょうけん）の持主では、とうてい将軍家になる資格は、なさそうであった。

――贋者と断定できる上からには、このままでは、すまされまいが、武部仙十郎と眠狂四郎が、さて、どう料理するか、この庖丁（ほうちょう）さばきは、よっぽど冴（さ）えていなくちゃなるまいて。

三

その夜――。

西の丸主人の大奥寝所からは、添寐（そいね）の中臈（ちゅうろう）がしりぞけられ、代って、老女浦尾が、褥（しとね）を延べた上段の間の、几帳（きちょう）のこちら側へ控えた。

上様御風気、と布（ふ）れて、特に浦尾が、添寐の役をつとめることにしたのであった。

将軍というものは、奥泊りの時、決して、いかなる場合でも、一人でいるということはないのである。

寐る時は、将軍家が同衾（どうきん）する当番の中臈のほかに、添寐の中臈と御伽坊主が、側に控えた。添寐の中臈は、たいがい手がついた女性である。したがって、将軍家が当番の女中を抱くのを、側に控えて、たとえ見ないようにしても、全神経が、その終始を感ずるのであるから、添寐の中臈にとっては、非常に辛いことであった。近年では、そっと眠り薬を用いるならわしになり、御伽坊主も、それにならっていた。

この添寐の中﨟に代って、その座に就いた浦尾は、腹心のお伽坊主に、女中たちをことごとく遠ざけさせておいて、新参中﨟二人を呼ばせた。

浦尾は、お玉とおきちに、

「粗相があってはなりませぬ。何事も、御意のままに――」

と申しきかせておいて、几帳の奥に入るように命じた。

贋家慶は、白羽二重の寐間着姿で、御納戸縮緬の掛具に凭りかかるようにして、坐っていた。

両手をつかえて平伏するお玉とおきちを眺めて、贋家慶は、にやりとすると、

「よし、葵の紋を、彫ってみせい」

と、命じて、

「さ、ここがよい。ここへ寐るがよい」

と、褥の上を、お玉にゆずった。

「みぐるしゅう思召すと存じまする」

お玉が、一応ことわった。

「ははは、男にとっては、これは、目の果報であろう」

お玉は、華やかな辻模様の衣裳を、ゆっくりと脱ぎすてて、白の大紋綸子の下着姿になって、褥の上へ仰臥した。

「わしが、めくってくれよう」

贋家慶は、跼みかかると、その下着と、その下の白羽二重の腰巻を、するすると、捲りあげ、左右へはねてやった。

お玉の秘部は、すでに恥毛が剃りすててあった。もともと、濃い方ではなかったので、殆ど剃

りあとはなく、ふっくらとして、なめらかに盛りあがったかたちは、白木蓮（はくもくれん）の厚い花弁を合わせたようであった。

左右から落ち込む二本の襞（ひだ）のまん中に、花弁には、ひと筋、刃物を入れたような亀裂が入っているばかりで、多くの男によって穢（けが）されたみにくい痕（あと）は、みじんもとどめてはいなかった。

おきちの方は、黒塗かぶせ蓋の刺青箱を持って、褥の脇へ進んだ。

まず——。

そこを、鹿角菜（ふのり）を解いて、刷毛（はけ）で、しめらせて、美濃紙でぬぐうと、絵筆を把（と）って、上半身を、その上へ傾けた。

およそ大判大の葵の紋が、みるみる描かれるのを、贋家慶は、固唾（かたず）をのんで、見まもった。

おきちは、すでに、幾百回となく、葵の紋を描く稽古を、仕上げているとみえて、絵筆のはこびに、みじんの狂いもみせなかった。

葵の紋を描く上でむつかしいのは、十三の葉脈（蘂（しべ））であるが、おきちは、なんのためらいもなく、するするすると描いた。

「うむ！」

描きあげられた葵の紋を、覗（のぞ）いて、贋家慶は、満足げに頷（うなず）いた。

葵の紋は、徳川家の一門親藩以外には、これを用いることを許さず、たまたま、将軍家の子女で、大名に婚嫁した者に、これを特別に許すことがあっても、一代かぎりで、その子等には許さないくらい厳しい禁令が設けられていた。皇室の紋章たる菊桐（きくきり）を僭用（せんよう）しても、大して咎（とが）められないが、葵の紋を用いると、重刑に処せられる時代であった。

享保（きょうほう）中、山名左門という浪人者が、葵の紋を衣服につけたため、死刑になっている。

それほど、絶対禁止の、権威ある紋章が、大名旗本対手の高等内侍の秘部に、描かれたのである。

おきちは、休息するいともなく、細針を束ねた簓を把ると、片掌で、下腹部をしっかと押えておいて、ぷすっぷすっと、刺しはじめた。

「あ——うっ！　あっ！」

お玉は、その痛みに堪えようとして、歯をくいしばったが、その歯の隙間から、怺えきれぬ呻きをもらして、一針毎に、びくっと、あらわな下肢を痙攣させた。

はじめは、足と足をからみあわせたり、膝と膝を骨が鳴るほど強くすり合せたりしていたが、痛みの連続が、いつの間にやら、膝を立てさせたり、折らせたりして、あられもない肢態をつくらせた。

眺める贋家慶の双眼が、ぎらぎらと燃えた。

墨を入れてゆくおきちもまた、憑かれたような必死の表情になっていた。

やがて、おきちは、お玉の腰脇から上半身を跼みかからせる作業が、しにくくなり、立って、お玉の両脚の間に入り、大きく股を広げさせておいて、そこに坐って、のしかかった。

お玉の肢態は、一層あられもないものになり、贋家慶を興奮させたようであった。

四

およそ半刻も過ぎると、それまで、「ひいっ……ひいっ……」とお玉の口からもれていた悲鳴が止った。簓が刺さる毎の痙攣はつづいていたが、お玉の寐顔には、あきらかに、被虐症の淫靡な陶酔の色が刷かれていた。

おきちが、最後のひと刺しを終え、滲み出た血汐をきれいに拭いておいて、お玉の股間からはなれると、贋家慶は、微かにわななく片手を、葵の紋へふれさせた。

「よう、出来た。見事じゃ！」

おきちは、その称賛を受けて、平伏した。

お玉は、死んだようにぐったりとして、指一本も動かそうとしなかった。

大きく拡げた下肢を投げ出したまま、前をかくそうともせぬのは、疼痛を堪えるために、すべての力を使いはたしたものと思われる。

「ははは……葵の紋を、からだに彫った女子ができたぞ。まさに、前代未聞じゃ。天下に披露してくれたいのう。……うむ。刺青とは、まことに、面白いしろものだ。わしも、彫るぞ。からだ一面に彫ってくれるぞ」

そう云った時、老女浦尾が、几帳をまわって、姿を現わした。

「上様！　これは、何事でございましょうぞ！」

わざと、烈しい憤りを示した。

「わしのやったことが、気に食わぬと申すのか」

「葵の御紋は、そのむかし松平家が三河にて加茂朝臣とお称えあそばされた頃よりの御家紋ではございませぬか。その尊き御紋を、あろうことか、斯様ないやしい女の、斯様なけがれたところへ、入墨なさいますとは、なんという狂気の沙汰でございましょうか！」

「それが、わるいか？」

贋家慶は、浦尾を睨みつけた。

「わたくしは、御座輿までに、上様が、刺青をするところをごらんあそばされるもの、と存じ、

女中どもに気づかれぬよう、心くばりをいたしましたものの、よもや、葵の御紋を、女子の肌にお彫りあそばそうなどとは、露もだに思わず……、うかつでございました。上様は、もはや、うたがいもなく、乱心あそばされて居りまする」

「黙れっ！」

贋家慶の怒号で、お玉があわてて、起き上り、身づくろいをした。

「雑言は、許さぬぞ！　わしは、乱心など、みじんもしては居らぬ。わしは、この江戸城内のくだらぬしきたりを破ってくれようとして居るだけだ。……そなたならば、わしの気持を汲んでくれて居ろう、と存じて居ったが、やはり、他の婆あどもと同じであったな。……口をひらけば、公儀の権威にかかわる、とほざく。わしは、それが、気に食わん。やたらに、掟だ法度だしきたりだ、とおのれでおのれの身を、ぐるぐる巻きに縛りあげるようなこのくらしぶりを、誰も疑いもせずに居る。ばかげて居るのだ！　こんなくらしよりも、飲もうと買おうと打とうと、何をしようと、なんの咎めも受けぬ町人どものくらしの方が、百倍も千倍も、人間らしいぞ。……わしが、一人で、因習をうち破ってくれようとすると、おのれまでが、乱心したと申すのか。……家紋がなんだ！　家紋などというしろものは、源頼朝の頃には、何もありはしなかったのだぞ。源氏は白旗・白符を用い、平家は赤旗・赤符を用いただけだ。……戦があった頃は、旗幕や馬標に家紋をつける必要もあったろうが、元和偃武以来、家紋などは、ただの飾りになってしまったのだ。公儀の権威で、葵の紋を、用いるのを禁じて居るが、巷間を眺めてみるがいい。勝手に、優美な紋章をつくって、飾りたてて居るではないか。河原乞食の役者の紋が、今日では、最も庶民どもによろこばれて居ることを、存じて居るか、浦尾！……ええい！　面白うない！　不快だ！　どいつも、こいつも、下れ！　下れっ！」

談亭奇謀

一

師走（しわす）に入ると、日の過ぎるのが、駆け足になる。

四序のきまりが、はっきりした時代であった。今年のことは、この月のうちに納めるならわしであったし、新しい年を迎えるさまざまのしきたりもおろそかにできぬとあれば、武家も社家も寺院も町家も、その用事で、寸隙（すんげき）をあらそい、日の短さをうらむことになる。

煤払（すすはら）いをすませると、すぐ、節分を迎え、どんな貧しい家でも厄払いをした。その頃になると、歳（とし）の市が、深川八幡をはしりに、浅草観音境内を絶頂として、江戸のすべての盛り場で、にぎわう。

餅搗（もちつ）きの音が、四方からひびき、千代田城三十六の見付御門をはじめ、武家屋敷、寺社、大店（おおだな）などが門松で飾られた。

江戸名物の火事も、この月は殊に多くなった。

往還には、かけ取りの行き来があわただしい。

「梅が枝（え）の手水鉢（ちょうずばち）、ぽんぽんと……」

白い一重の室咲きの梅の鉢を、小脇にかかえた立川談亭が、芝赤羽橋を渡って来た。

鉢を、叩いて調子をとり乍ら、

「叩いてお金が出るならば、その時ゃ、身請（みうけ）を、たのみます、と両手合わせて、くの字の胴で、

ちらりこぼした湯文字の赤さ」
　わざと大声で、唄って行く。
　門松をかついだ鳶が、うしろから、
「おうおう、師匠、どこの横丁新道へ、それを持って行きなさるんでえ？」
　と訊ねかけて来た。こっちは知らぬが、むこうは高座で見知っているのであったろう。
「きまっていらアな。門は松竹、蛙は柳、白井権八鈴ヶ森、曾我兄弟は富士の裾野で、梅が香に迷うのは鶯、と相場がきまっているわさ。……羽風に匂う梅が香の、花にたわむれしおらしや――拙のあいては、毎年若くなっての、明けて二八か二九からぬ、ひらく初音のいじらしく、まだ解けかねる薄氷、と来た」
「嘘をつけ」
「嘘かまことか、まことか嘘か、そこがわからぬ色の道。解いてこまそと、いそいそと、百夜もかよう恋の闇、君がなさけの仮寐の牀に、枕かたしく夜もすがら」
「大方、借金取りに追いかけられて、あわてて、たったひとつの財産の鶯宿梅を持って、逃げて来た、ってえところじゃないのかね、師匠」
「ははは、図星だったのう。昨年は雪隠にしゃがんで――掛取りが帰ると尻を拭いて出る、ってえやつを、痔でやってのけて、これがほんとの肛門の虎追っ払いの術だったが、なにせ、今年は、債鬼が多すぎて、立川談亭まさに危急存亡の秋、瓶に落ちたる鼠の如し。そこで、泣き泣き、十年愛しんだこの鶯宿梅を手ばなす決意をしてな――窮猿、林に奔る、あに木をえらぶにいとまあらんや。ゆずる対手が、江戸一番の因業と称われている高利貸しでのう」
「あっしが出入りの蔵前の旦那に、気前のいい御仁がいるが――」

「ああら、忝なし、有難や——渡りに舟、ととびつきたいところだが、なにせ、その高利貸しめ、五年がかりで拙をくどいて居ったのでな。なんのくそ、梅の一本や二本、こっちは、年相応に、梅なんざくそくらえ、来年からは姥桜（うばざくら）を可愛がってやろうずと——ははは、世の中は、食って糞（くそ）して、寐て起きて、さてその後は死ぬばかり」

やがて、談亭は、増上寺山内を、川むこうに眺め乍ら、金杉橋（かなすぎ）までやって来た。

橋ぎわに、屋形船が一艘（そう）、つないであった。

屋形の中で、炬燵に入って、手枕で寐ていたのは、眠狂四郎であった。

談亭は、その寐顔を一瞥（べつ）して、ぎょっとなった。死相を呈している——そんな印象であった。血の気は全く失せて、その蒼白（そうはく）な皮膚の下を、血がかよっているとは思われないくらいであった。

談亭は、しかし、わざと、陽気な声音で、

「それ、つらつらおもんみるに、偃鼠（えんそ）、河に飲むも、満腹に過ぎず——いやはや、まったく、なんとも、あきれはてたる次第でござる」

と、云った。

狂四郎は、べつに起き上りもせず、目蓋をふさいだまま、

「鍼医（はりい）が看破した贋者である証拠は？」

と、訊ねた。

「あきれましたねえ。この立川談亭に、あろうことか、鍼医も刺青師も、同じ針を打つのであろうから、刺青を習うて、わしのからだへ、彫ってみせい、と仰せられたじゃありませんか。しかも、その図柄たるや、東照神君が出陣のいでたちをなされているまわりを、一糸もまとわぬ裸女

が、踊り狂うているさまが、よいぞ、と来た」
「…………」
狂四郎は、なおしばらく、手枕のまま、動かなかった。
談亭が、大奥お縁座敷の上段寝所で、目撃したことを、つぶさに語り了(お)えるのを待って、やおら起き上った狂四郎は、懐中から一通の封書をとり出して、談亭に渡した。
「浦尾という老女から、武部老人にとどけられた報告書だ。お主が、灸を据えたあと、贋者は、紋ちらしお玉の、恥毛を剃ったあとへ、彫政の娘に、葵の紋を彫らせた」
「甲乙へえ、丁(てえ)した糞度胸でござんすねえ。いったい、どういう料簡ですかねえ」
「おれと同様、因果な出生に、ひねくれているだけの話だが……、ここまで来れば、枝ぶりのいい樹を見つけてやって、縄をかけてやるよりほかはあるまい」
「しかし、西の丸から、主がいなくなっちまっちゃ、恰好がつかなくなるじゃありませんか。ほんものの方を、はやく、つれもどさなくちゃ――」
「生きているのか、死んでいるのか、何処にいるのか――見当もついては居らぬ」
「それじゃ、どうなるんで？」
「どうなるか……、とりあえず、ふりかかった火の粉を、はらうことにする」
「火の粉？」
「船頭、船を出してくれ」
狂四郎は、命じておいて、談亭に、
「ここへ来る途中で、誰かに会ったか？」
と、訊ねた。

「いえ、誰にも……」
談亭は、かぶりを振ってから、
「講釈好きらしい鳶には、会いましたがね」
と、告げた。
「そいつだろう」
「………」
「おれの行方を、躍起になってつきとめようとしていた佐野勘十郎の配下の一人、ということだ」
「げっ！　冗談じゃない。君子は、虎の尾をまたがず、石を抱いて淵に入らず、薄氷を踏まず、卵を累ねず、ええと、まだ何かあったっけ――」
「鞘走りより口走り、か」
「それだ！　この駄講の口めが、おのれ、何を口走ったやら、……おまけに、ここは、板子一枚下は地獄と来た」
談亭は、障子を細めに開けてみた。
「来たっ！　三艘、いや四艘――十四人、数がわるいや」
「船頭、南へ向って漕げ。鹿島明神近くの砂浜をめざせ」
狂四郎は、命じた。

二

「先生、大丈夫なんで――？」

「請けあうことはできぬ。談亭、伏せていることだ」
狂四郎が云いおわらぬうちに、つづけさまに、四本の矢が、左右の障子を貫いて来た。
四艘の小舟は、飛ぶ迅さで、屋形船の両脇をはさんだのである。
狂四郎は、刀の鐺で、わざと、左右の障子を開けはなった。
矢はさらに、四本襲って来た。
その一本は、炬燵脇に伏せた談亭の襟もとを刺した。
「南無！」
談亭は、目蓋を閉じた。
四艘は四方にわかれて、屋形船を包囲した。
十四人の敵は、一斉に、抜刀した。
「談亭、寒中水泳は、苦手だろう」
狂四郎が、薄ら笑い乍ら、云った。
「あっしが、金槌だってえこと、ご存じなかったとは、おなさけない」
「炬燵にもぐっているよりほかはあるまい」
「あっしは、敵がすてた舟の方へ、隙をうかがって、遁げまさ」
「よし、遁げろ」
「といって、いつも、先生の危急存亡に、遁げてばかりいちゃ、立川談亭の沽券にかかわる。
……先生、この講釈師も、時には、立役を相勤めまする」
「どういうのだ？」
「細工はりゅうりゅう、仕上げをごろうじろ。……ようがすか、あっしが遁げた舟から、お呼び

したら、間髪を入れず、この屋形から、跳び移って頂きてえ」
「よかろう」
狂四郎は、談亭に何か期すところのある工夫があると知って、信頼することにした。
まず——。
談亭のために、一艘を奪ってやることにして、艫へ出た。
艫へ出ざま、襲いかかった敵の一人を、一閃裡に、流れへ落して、高い飛沫をあげさせた。
無想正宗を、右手に携げたこの男の、鋭気をひそめ、殺気を去った静止相は、襲撃者が熟達の業の持主であればあるほど、無気味なものに目に映る。
すでに、船頭は水へとび込んで、艫は、闘いの場としては、決して狭いものではなかった。
その無構えの姿に向って、刺客たちは、じりじりと肉薄して来た。
狂四郎は、待つ。
背後から、電光の突きが来た——刹那、躱したともみせぬわずかな動きだけで、狂四郎は、その敵に血煙りをあげさせていた。
その紅の飛沫が、淡い陽ざしの満ちた宙に消えた時、小舟からまた一人、艫に、跳びあがって来た。
その敵へ、袈裟がけの一撃をあびせた迅業を、狂四郎は、舷から躍って来た背後の敵の胴を薙ぐ迅業へ、継続させた。
とみた瞬間には、もう、狂四郎の五体は、宙を旋回して、屋根の上のものになっていた。
そして、ゆっくりと、舳先へ向って、歩いた。
もうその時は、艫につけた舟は空になって居り、両舷、舳先に寄せた三艘からも、それぞれ一

人だけのこして、跳び移って来ていた。

狂四郎は、舳先ぎわの屋根の端に、立つと、突きの構えに揃えられた前方と左右の鋭い刀鋒へ、冷やかな眼眸を、まわして、

「お主ら、佐野勘十郎からもらう手当は、いくらだ。せいぜい、月五両が、止りだろう。……ということは、駿河町の三井越後屋が、師走に売り出す恵比須ぎれが二十枚。安いものだと思わぬか」

と、あびせた。

三井越後屋の恵比須ぎれ、というのは、一年中の截ち余りの切を何枚か、ひと綴じにしたもので、それを一分（一両の四分の一）で、年の暮に売ったのである。これが安いというので、売り出しの朝は、暗いうちから、店さきに行列をつくり、大戸が開くと、なだれ込んでわれ勝ちに、二十枚も三十枚もかかえ込んで、買ったのである。

越後屋は、数十万綴も用意したが、忽ち売りきれて、一日五六千両ものあきないになる、という。

この恵比須ぎれと、おのが生命の価値をくらべられて、刺客たちの面相が、屈辱の憤りに、燃えた。

艫寄りの屋根には、すでに、二人、匍い上って来ていた。

狂四郎は、その二人に対して、視線をまわした時、談亭が、背をまるめて、艫から小舟へ跳び移るのを、視てとった。

談亭は、屋形船のもやい綱をつかんで、小舟を六尺ばかり、突きはなしておいて、

「先生っ！　いまだっ！」

と、叫んだ。

狂四郎が、奔りつつ、屋根上の敵二人を、目にもとまらず斬りすてておいて、屋根を蹴りざま、一気に、宙を翔けた速影は、黒い鳥に似た。

その時、はやく、談亭は、棹を把っていて、屋形船を、力まかせに、突きはなした。

轟然と、屋形内が、炸裂して、屋根をとばして、火柱が噴いたのは、次の瞬間であった。

「やったあっ！　やあ、やあ、見たか知ったか覚えたか、われこそは、立川談亭とは世を忍ぶ仮の名にて、まことは諸葛亮孔明なりっ！　火焔の術とは、これなるぞ！」

談亭は、火の粉をかぶり乍ら、両手をかざして、喚き立てた。

三

小半刻のち、狂四郎と談亭は、伊皿子台町の小料理屋の二階にいた。

「談亭という軍師が、わたしについているとは、夢にも思わなかったな」

狂四郎は、盃を口にはこび乍ら、云った。

「高座で、二十年も、読み台を張り扇でたたいて居りやすとね、孫子やら六韜三略やらを、いつの間にかそらんじて、てめえが軍師気どりになるものでさ。そこで、ひとつ、空読みばかりじゃ物足りねえから、実地に、やれるかやれないか、やってこましてくれようと、へへ、鍵屋にたのんで、花火用の火薬を、ごっそりと――」

「そうか、お主がかかえ込んだ鶯宿梅の鉢の中に、詰めていたのか」

「場所は、大川のどまん中、屋形船の中に炬燵がある、と来りゃ、こんなおあつらえ向きの実験は、またとありやしねえや。……なにね、あっしが、鍼医に化けて、お城から下って来た時から、

尾けて来る奴がいやがったので、たぶんおそらく、いや絶対に、あっしを尾けているのは、眠狂四郎の居処をつきとめる目的に相違ねえと――そこは、諸葛亮孔明、カンが冴えていた。いでや、目に物見せてくれるのは、今この時とばかり、火術書片手に、一晩がかり――、つくりあげた火薬を、鶯宿梅の鉢の中に仕込んだとは、三国志を無駄には読んでいなかった証拠でござる。……ははは、いやもう、こんなにうまくゆくとは――ふるえが、いま頃、襲って来やがった」

談亭は、あわてて、椀の蓋に、酒をついで、あおった。

「談亭――。忝ない」

狂四郎は、頭を下げた。

「へえ？」

談亭は、あっけにとられた面持になった。眠狂四郎から、はじめて、礼を云われたのである。

「おどろいた。いや、あきれた。全く、こんなばかばかしい。この立川談亭、高座で頭を下げたことはあるが、人に頭を下げられるなんて、そんな寐ざめのわるいことは、今日が日まで、したおぼえないんだが……」

狂四郎は、無想正宗を携げて、立ち上ると、

「談亭――」

「へい」

「わたしが、頭を下げたのは、今後は、このような余計な手だすけは無用だ、という意味を含めている」

そう云いのこした。

狂四郎は、伊皿子台町の小料理屋を出た足で、内桜田の老中水野忠邦邸に向った。

ふところ手で、師走のあわただしい街中を行き過ぎ乍ら、

——どういうのだ？

と、おのれに問うていた。

——乗りかかった船だが、どうでも是非に、乗らねばならぬ義理は、ない筈だ。

——柳営の騒動ではないか。おれとは、なんのかかわりもないことだ。兄が姿を消して、弟が替玉となった——それだけの話だ。どちらでもいいのだ。弟を追いはらって、兄をつれ戻しても、公儀の仕組みが変るものではないのだ。

——おれが、どうして、一身をなげうって、この解決に、踊らねばならぬのだ。

自己嫌悪が、腐った澱のように、胸中によどんでいた。

それでいて、足はまっすぐに、老中邸へ向っていた。

——おれには、将軍家の世子の身柄がどうなるかという懸念よりも、談亭や金八のいのちの方が大切なのだ。

談亭のやってのけた冒険は、狂四郎にとっては、有難迷惑であったのである。

ともあれ、あとへは引けぬ立場に立たされた以上、狂四郎は、急がねばならなかった。

表長屋の武部宅の書院に坐った狂四郎は、ここで、老人から走狗にされたかずかずの仕事を、想い泛べた。

——おれが、もし、死んでいたなら、老人は、どんな気持で、弔ってくれたろう？

腕を組み乍ら、そのことを考えてみた。

——残念がる気持よりも、おれに代る走狗をさがす気持を先立たせている……そんな爺さんな

のだ。
　武部仙十郎は、狂四郎の前に就くと、
「さて、どうするかの？」
　と、訊ねた。
　西の丸に在る者は、贋者と断定できたのである。
　狂四郎は、老人の狡猾(こうかつ)な質問に対して、沈黙を守った。
　仙十郎は、咳(せき)をひとつしてから、
「わしは、お主が、お城へ忍び込むのではあるまいか、と内心おそれて居った。お主が忍び込んで、贋者と看てとったならば、屹度(きっと)斬るであろう、と思うてな。代りに、講釈師をおもむかせてくれて、事なきを得て、ほっと一安堵(あんど)というところじゃ。……わしは、もう、決して、お主を木偶(でく)として踊らせては居らぬよ。……万事、お主の思うがままに、やってくれてよい。まかせる」
　そう云われて、狂四郎は、口をひらいた。
「明日、京へ参ろう」
「ふむ！　京への——」
　本物と贋者が、すりかわったのは、京都に於てであった。
　どのようにして、すりかわったか、それを調べるには、京都へおもむかざるを得ないようであった。
「わたしの見当では、西の丸殿は、京より西の方角に在るような気がする。生きて居るならば、の話だが——」
「うむ、うむ——」

「ひとつには、京へ向うわたしに、佐野勘十郎が、あくまでも追手を放って来れば、これは、西の丸殿が生存していることだ、と受けとってよいと思う」
「成程――」
「わたしが、いかにも、西の丸殿の在処を知って、つれもどしに行くかのごとく、佐野勘十郎に、思わせる。その手がある」
「うまい手だの」
やがて、狂四郎は、立ち際に、
「ご老人――。踊らざるを得ないように仕向けておいて、もう踊らせては居らぬ、と弁解する貴方に、私が、云いのこす言葉がある」
「なんじゃな？」
「このことが解決すれば、その安堵で、貴方は、おそらく、死ぬであろう――そのことだ」

元日の客

一

大晦日――。
江戸の店舗は、大小問わず、早朝から、猫の手も借りたい忙しさで、日暮に至るや、さらに目のまわる状態になり、定紋入りの高張の大提灯や、幾つもの弓張提灯の下で、客の出入りは、ひきもきらなかった。積み上げた荷のかたわらには、出入りの鳶や下職までが、動員されて立番役

をつとめた。

そしてまた、町辻はいうに及ばず、往還いたるところに、露店がつらなって、かまびすしく、客を呼んでいた。

江戸の風習で、大晦日になって、露店から、梅や南天や福寿草の鉢を買いもとめる人がおびただしかったのである。

この熱鬧のあわただしさは、寺院が鳴らす百八つの梵鐘の音が、ひびきはじめるまでつづく。

ようやく――。

獅子舞いの遠音や厄払い神楽の声が、消えて、店から客足が遠のき、大提灯の下で、あかあかと燃える土火鉢に寄って、立番の鳶たちが、ひと息ついた頃あい。

眠狂四郎が、この日まで、逗留していた柳橋の船宿「ふくべや」から、ふらりと立出た。

切火で送り出したおかみは、ちょっと、不機嫌な様子で、その後ろ姿へ、

「旦那、わかっていますよ」

と、高い声をかけた。

狂四郎は、振りかえりもせず、

「なにが、判っているのだ？」

「この色年増に、首尾もさせずに、出て行って、鼬の道切りをするんだから、憎らしい。どうせ、一年も、戻っては来ないんでしょうよ」

当時――。

武家町家を問わず、かなり年老いた夫婦であっても、百八つの鐘の音が鳴っている大晦日の夜、閨房の営みを為したものである。

たとえ、一年間、妻に接しない者でも、この夜だけは、必ずこのしきたりを守った。

町人はいざ知らず、武士は、妻に接するのを、かなり控えていた。三十代で、せいぜい月に一度、閨房の営みをはげむことは、あまりほめられたことではなかった。五十代ともなると、新年夜明けだけになったのも、四十代になると、三月に一度の疎遠さであった。

やむを得ぬ仕儀であった。

しかし、年に一度——この夜だけは、老夫婦と雖も、男女であることの証をたてた。

狂四郎と「ふくべや」のおかみは、三年前に、たった一度であるが、他人ではなくなっていた。

おかみには、然るべき旦那は、いなかった。

当然、狂四郎は、この夜だけは、おかみを抱いてやるべきであった。それをせずに、ふらりと、何処へおもむこうとするのか、別れを告げたのである。

狂四郎は、おかみのうらみのこもった口説をきき流して、往還をひろい出した。

檐下をえらんで、足をはこんで行くのであった。

すでに、往還は、水がまかれて、きれいに箒目が立てられていたからである。

両国橋を渡りかかって、狂四郎は、すでに、はやくも尾行者があることを、察知していた。

この尾行は、予期していたことであった——、むしろ、こちらにとって、歓迎する客であった。

江東に入ると、なお、客足の絶えない小売店が多かった。この夜更けに、高下駄の音をひびかせて、せわしげに、若い女たちが往き来するのも、大晦日でなければ見られぬ風景であった。

〆飾りを商っていた辻の掛小屋だけは、もうその跡もとどめずに、掃除されて、そこだけは、急に広くなっていた。

本所横川の本法寺橋を過ぎて野がひらけると、あたりはもう、元旦を待つ静寂が占めていた。

尾行者は、依然として、数十歩の距離を置いて、つきまとっていた。
——尾けることに馴れて居らぬ男のようだが……。
これまで、かぞえきれぬほど、尾行された経験のある狂四郎は、そのことに気がついていた。

二

押上村の古刹竜勝寺の山門を、くぐった時、狂四郎の胸中に、微かな痛みがわいていた。
ここの庫裡に、旗本大番組頭・長岡釆女正重武の妻志津を、預けて、そのまま、すててあった。
その一子守一は、さぞかし母を恋うているに相違あるまいが、狂四郎は、母子を逢わせる努力も払ってはいなかった。
およそ半年ぶりに、狂四郎が、飄然と、ここへやって来たのは、志津を利用するためであった。
女の心と身を利用することに、狂四郎は、ふっと、胸の痛みをおぼえたのである。
狂四郎は、この夏、志津を、立川談亭の家の二階で、一度だけ、抱いている。それは、生きることを知らしめるためであった、と弁解できる。
しかし——。
半年のあいだ、すてておいて、この大晦日の夜更けに、やって来たのは、浮世のしきたりに倣うとみせかけて、志津を利用するためであった。
女は、ひたすらに恋うて、こちらの現われる日を待ちつづけていたに相違ないのであった。
——尾行者殿、これから、お主に、歌磨描く秘戯図を、この眠狂四郎が、見せることになる。
狂四郎は、胸の裡で、背後の敵に、そう云いおいて、境内を横切った。
庫裡の戸をひらくと、すでに四更（午前二時）をまわっている、というのに、志津は、上り框

に、坐っていた。
「おもどりなさいませ」
武家の妻女の作法が、その態度を無表情なものにしていたが、
「今夜、わたしが現われるのを、予想していたとみえる」
そう云うと、
「はい。……遠くからの跫音（あしおと）で、わかりました」
と、こたえた。
狂四郎は、上って座敷に坐ると、
「そなたとは、夫婦ではないが、互いに、他に伴侶（はんりょ）がない身であるから、大晦日のしきたりに従うことにする」
と、告げた。
「うれしゅう存じまする」
志津は、両手をつかえて、礼をのべた。
それから、この座敷の方に牀（とこ）をのべる旨を、俯向（うつむ）いて、口にした。
狂四郎は、厠（かわや）に立った。
厠に入りがけに、鋭く、神経を、小庭へ配った。
尾行者は、竹の濡縁の下で、気配をひそめている、とさとった。
常人ならば、さとることは叶（かな）わぬことであった。
気配を断っている者を、そこにひそむとさとるところに、狂四郎の神経の異常な修練の冴えがあった。

座敷に戻った狂四郎は、すでに牀をのべ了って、こちらが寐衣にきかえるのを手伝うべく待っている志津を見下ろし、
「この半年間、そなたは、一人で、何を考えていたのだ？」
と、訊ねた。
「貴方様のことだけを、想いつづけて居りました」
志津は、はっきりとこたえた。
「……………？」
狂四郎の冷たく冴えた眼眸を、志津は、ためらわずに、受けとめた。
「今年の盂蘭盆の日のことでございました」
住職空然が、本堂に於て、無縁の諸精霊に供養の誦経をあげているのをきいて、志津は、亡き良人の霊も回向してもらおうと、そっと上って行った。
すると、須弥壇にならべられた位牌の中に、真新しい白木の位牌が据えられてあり、それには、「依眠狂四郎被斬殺諸精霊位」と記されてあった。
狂四郎が斬る敵は、毎年幾人かにのぼる。したがって、空然は、その位牌を、その年の盂蘭盆には、新しいのにとりかえたのである。
空然が、供養を了えて、出て行ったあと、志津は、しばらく、須弥壇の前に坐っていた。
ところが、突然、その新しい白木の位牌が、壇から落ちたのであった。にわかに風が吹きつけたわけでもなく、鼠が走った次第でもなかった。
志津は、一瞬、不吉な予感をおぼえて、胸を激しく動悸打たせた。
位牌を元の場所へもどした時、志津は、ただひたすら、狂四郎の身の安全を祈っていた。

志津が、はっきりと、狂四郎という男を愛しているのを意識したのは、その夜、牀に就いて、ねむられぬままに、闇に眸子(ひとみ)をひらいている時であった。

三十歳になって、志津は、はじめて、恋を知ったのであった。

志津は、話し了って、両手をつかえると、あらためて、

「この大晦日には、必ずお戻りあそばすことと、わたくしは、かたく信じて居りました。……うれしゅう存じまする」

と、礼をのべた。

狂四郎が、牀に就くと、志津は、着換えるために、次の間へしりぞいた。

仰臥した狂四郎の神経は、床下へ送られていた。

——出来る奴らしい。

それにしては、どうして、尾行が下手であったのか。

そのことを、狂四郎は、志津が入って来るまで、考えていた。対手は、佐野勘十郎であった。

どのような策をとって来るか、予測できぬ曲者(くせもの)なのである。

——こちらの策に、佐野が乗って来るか、それとも、佐野の策に、こちらが乗せられるか……

勝負は、そこできまる。

三

志津は、純白の綸子の裾から、緋(ひ)の二布(こしまき)を、ちらりとこぼし乍ら、牀に入って来た。

狂四郎は、掬(すく)うように、そのからだを抱き取って、

「ことわっておく。……あるいは、これが、そなたとわたしの最後の契りになろうか、と思う」

と、云った。

「は、はい？」

「打明けておかねばなるまい。西の丸で、そなたの操を弄んだのは、まことの大納言家慶殿ではなかった」

「え?!」

「贋者であった、ということだ」

狂四郎の片手が、胸を押しひろげて、豊かな隆起にふれ、片脚が、膝を割って入った。

「ま、まことでございますか？」

「贋者だから、旗本の女房を、無理矢理犯したのだ。……贋者である証拠を、わたしは、つかんだ」

「…………」

つよく抱き寄せられた志津は、乳房にふれていた手が、ゆっくりと、胴をすべって、下にのびて来るや、目蓋を閉じた。

西の丸のあるじが、本物であろうと贋者であろうと、そんなことは、いまの志津には、どうでもよいことであった。

それよりも、この営みが、これで最後だという宣告の方が、志津には、堪えがたい悲しさであった。

最後であるならば、この一瞬のために、生命の焰を燃えつくして、元日の朝には、屍体になっていたかった。

「本物の方は、上方にいる。その場所も、およそ見当がついた。……わたしは、本物をつれ戻し

に、夜が明けたならば、江戸をはなれる。……わたしに、そうさせまいと、贋者側の連中が、追跡して参るであろう。道中いたるところに、死地がある。生還は、期し難い。……わたしが、還らなかったならば、そなたは、どうする？」

狂四郎の指頭が、柔襞をしめらせた。

「……死にまする」

志津は、こたえた。

「そなたを、死なせはせぬ」

「はい！」

「わたしは、必ず生きて還る。本物を連れもどしてみせる。……そなたを、幾箇月かのちには、こうしてまた抱いてみせる」

「うれしい！……きっと、きっと、そうして下さいませ」

志津は、下肢をひらいて、喘いだ。

三十女が、はじめて女の悦びを知り、ひたすらに待ちのぞんでいた瞬間であった。しとどに濡れた秘処は、火のように熱く、狂四郎の指を灼こうとした。

明けの鶏の声が、遠くにきこえた時、とろとろと睡っていた志津は、はっと目覚めた。

狂四郎は、ぐっすりと睡入っているようであった。

そおっと、牀からぬけ出た志津は、次の間に移って、身じまいをととのえた。

若水を汲むためであった。

輪飾りをかけた手桶を携えて、裏口から出てみると、夜は淡々と明けはなたれていた。

元旦らしい、麗らかに晴れた空であった。遠近の静謐が、旧をのぞいて、万戸あらたまった思いをさそい、志津は、今日からは自分は別の女になったのだ、と呟いてみた。

百日紅の蔭にある井戸端へ歩いた志津は、自分の生家の旧式に従って、今年の恵方に向って、若水を汲んだ。

初鶏の長鳴に応えるかのように、澄みわたった空で、明けの鴉が啼いた。

東の空には、ほんのりと、紅がさした。

志津は、自分がいまいちばん幸せであることを、感じた。

しかし――。

その幸福感は、次の刹那、無慚に破られた。

「志津殿」

不意に、背後から、そう呼びかけられ、ぎくっとなって振りかえった志津は、大きく眸子を瞠いた。

亡き良人の従弟の北園唐吉郎の姿を、そこに見出したのである。

北園唐吉郎は、七年前、同輩と武士道の吟味を賭けて決闘して、これを斬り、甲府勝手――山流しと称ばれる身となっていた旗本であった。

甲府勤番を命じられていた旗本が、再び江戸へ呼び戻されるということは、曾て例がなかった。

北園唐吉郎は、小野派一刀流を学び、旗本随一の使い手と噂の高かった男であったが、甲府勝手を申しつけられて、江戸を去るや、いつとなく忘れ去られた存在になっていた。

志津の念頭にも、この男のことは、全くなかったのである。

四

「亡霊にでも出逢うた顔つきを、されて居るな」

北園唐吉郎は、皓い歯をみせて、笑った。

志津は、曾ては、この男の風貌にも気象にも、好意を抱いたものであった。良人とは対蹠的なからっと明るい男だったのである。

「ご懸念には、及ばぬ。それがしは、貴女を討ちに、ここへやって来たのではない。……実は、昨夜、眠狂四郎を、尾行して来た」

「えっ?!」

「それがしは、よもや、貴女が、ここにかくれていようとは、夢にも想像して居らなかった。……貴女は、いつの間にやら、眠狂四郎のものに、なって居ったのだな。しかし、そうと知っても、それがしは、腹は立たなかった。……重武と貴女は、幸せな夫婦ではなかった。それがしには、よく判って居った。……貴女は、はじめて、男を慕うことを知ったようだ。いま、若水を汲んでいる貴女の顔は、長岡の屋敷で、貴女が一度もみせたことのない幸せな色をたたえていた。……それがしは、眠狂四郎を討つことを命じられた刺客として、江戸へ呼びもどされたのだが、このまま、また、甲府へひきかえしたいくらいだ。……志津殿。それがしは、貴女が、長岡へ嫁いで来て、はじめて会った時から、惚れていたのだ。甲府にいても、貴女のことは、絶えず思い出していた」

北園唐吉郎は、一気に、しゃべった。

志津は、立ちすくんだなり、釘づけされたように、動くことができなかった。

昨夜、狂四郎を尾けて来て、いまなお、ここに在るということは、狂四郎と自分の同衾(どうきん)を、どこからか、窺(うかが)っていたことを意味する。

最後になるかも知れぬその秘事を、けがされた憤りが、志津の心にわいていた。

「志津殿。……相談がある！」

北園唐吉郎は、一歩出た。

志津は、反射的に、一歩退(さが)った。

「もし、志津殿が、このまま、この場から、それがしと一緒に来てくれるなら、それがしは、刺客の任務を放擲(ほうてき)してもよい。……たったいま、そう考えた」

「………………」

「どうだろうな。それがしの腕前は、貴女は、よく知っている筈だ。……眠狂四郎を、無事に、上方へ向けて発足させるためには、貴女は、そうしてくれてもよいのではなかろうか、と思う。……それがしは、貴女から愛されはせぬ、と知りつつも、云っているのだ。それがしは、貴女が、欲しいのだ。なにもかも、なげすてても、かまわぬのだ。貴女さえ、わがものになってくれれば、それがしは、公儀を敵にまわしても、かまわぬ！」

「北園様！」

志津は、冷やかに、言葉をかえした。

「貴方様は、女心というものをご存じありませぬ」

「……む」

「たとえ、この場で、貴方様に斬られようとも、わたくしは、貴方様には、順(したが)いませぬ。このことだけ、はっきりと申し上げられまする」

志津は、きっぱりと、拒絶した。
「そうか。やっぱり、そうであったな」
北園唐吉郎は、頷くと、
「相すまぬ。余計なことを、云った。……貴女の前に、姿を現わすのではなかった」
そう云いのこして、踵をまわした。
「北園様。今日は、元旦でございます。どうぞ、今日だけは……」
志津は、ふかく頭を下げた。
「眠狂四郎という人物には、大晦日も元旦もなかろう。刺客になった者にも、そんな頓着はない。
……しかし、貴女にたのまれると、それがしは、弱い」
北園唐吉郎は、遠ざかった。
志津が、庫裡にもどった時、すでに、狂四郎は、起きて、黒の着流し姿になっていた。
屠蘇の盃を把った時、狂四郎は、
「そなたに、客があったようだな」
と、云った。
志津は、はっと、からだをこわばらせた。
「昨夜から来ていた客であったな。ともに、屠蘇を祝ってもよかったことだ」

無刀試合

一

空は、雲ひとつなく晴れていたが、風があった。その風に乗って、紙鳶が唸りをあげて、舞っている。

正月二日。

江戸をはなれること十五里——中仙道の往還上も、初春の景色が、ひろがっている。

熊ヶ谷宿を彼方にのぞんで、まっすぐに松の並木がつづく街道を、店印屋号を記した弓張提灯を高くかかげた初荷の車を、新しい印袢天をつけた丁稚が曳いて行く。鳥追いや獅子舞いが、年始の礼にまわる人々にまじって、歩いて行く。

年に一度、黒羽二重の紋付小袖に麻裃をつけ、腰には蒔絵の印籠を携げた町人たちは、この日ばかりは、さむらいのように胸を張っているのであった。

こうした風景の中で、黒の着流しに、ふところ手の眠狂四郎の姿が、いかにも、浮世のしきたりにそびらを向けたすね者であることを、かえって、目立たせている。

後方に馬蹄の音が、起った。

忍藩松平家家中の乗馬始めとみえて、四騎が一列になって、まっしぐらに疾駆して来た。

狂四郎は、並木ぎわを、ゆっくりと歩き乍ら、べつに、振りかえりもしなかった。

騎馬の列は、みるみる迫って来た。

先頭をきっているのは、熨斗目に麻裃をつけ、金銀梨子地の鞍にまたがっていた。あるいは、松平家の若君かとも受けとれた。

狂四郎の脇を駆け抜けざまに、その者の手から、朝陽をはじいて、白く煌めくものが、放たれた。

それに対して、狂四郎は、わずかに、顔をそ向けたばかりであった。

つづいて、次の騎馬からも、同じく、手裏剣が、狂四郎めがけて、投じられた。狂四郎は、すっと身を沈めた。

その背中に向って、三番騎手からの手裏剣が飛来した。

狂四郎の五体が、地面を一転した。

すっくと立った狂四郎に向って、殿の乗り手が、狙いをさだめて、最後の手裏剣を打った。

これも、苦もなく躱した狂四郎は、

「無駄なことを――」

と、呟きすてた。

四騎は、みるみる彼方へ遠ざかり、熊ヶ谷宿の中へ消え去った。

当然、仕損じた渠らが、再び襲って来るものと考えられた。

しかし、宿の前まで歩いて来たが、四騎はひきかえして来る気配はなかった。

――別の手を用意しているのか？

狂四郎は、すでに、背後を――数歩の距離を置いて跟いて来ている編笠の武士の存在を、自分を狙う者と、看て取っていた。

抜きつけの一撃を送りつけて来るものと予想しつつ、狂四郎は、熊ヶ谷宿に入った。

ている。

熊ヶ谷宿は、新宿、下町、上町、門前町と、街道をはさんで、まっすぐに、十五丁余りつづいている。
その細く長い宿町を、通り抜けて、門前町まで来た時――。
ずっと同じ距離を保って、背後を歩いて来た武士が、はじめて、
「眠狂四郎殿――」
と、呼びかけて来た。
狂四郎は、黙って、足をはこんで行く。
「噂にはきいて居り申したが、貴公は、まさしく、尋常一様の使い手にあらざること、見とどけ申した。……こうして、後方より、一太刀あびせたく、窺ったが、その一瞬が、それがしには、与えられ申さぬ。申しおくれたが、それがしは、北園唐吉郎――」
「大晦日の宵、わたしを、押上村まで尾行して来て、わたしと長岡釆女正の妻女との睦言を、ぬすみぎきされた御仁だな」
狂四郎は、振りかえりもせずに、云いあてた。
「ご存じであったか」
「尾行に馴れて居らぬ御仁だ、お手前は――」
そう云い置いて、狂四郎は、つと、かたわらの白馬を染めぬいた暖簾をくぐって、立場の居酒屋に入った。
北園唐吉郎は、ちょっと、とまどったが、つづいて、入って来た。
狂四郎は、冷酒を注文しておいて、向いに腰を下ろし乍らなお編笠をとろうとせぬ北園唐吉郎へ、はじめて、視線を送った。

「わたしに手裏剣を打ち込んで来た面々は、あれは、お手前が、江戸からともなった佐野配下か？」

「いや、衣服通り、忍藩家中に相違ござらぬ。先頭を駆けたのは、松平下総守(しもうさのかみ)殿の末弟で、源三郎といわれる。それがしが、江戸に在った頃、柳生(やぎゅう)道場で、手ほどきいたした。……貴公がどれほどの腕前か、忍藩の若ざむらいどもの乗馬始めを利用して、ためしてみようと思い立ち、源三郎殿をおたずねして、依頼したところ、わしにやらせろ、と申されて、あの仕儀と相成り申した」

「すると、お手前は、わたしが、江戸を出たことを、お目付には、まだ通報せずに、そのまま、この中仙道へ来られたのか？」

「左様――。それがしは、貴公を討ちとることを、引受けたからには、余人に先を越されてはならぬので、貴公が中仙道をえらんだと知ると、先まわりして、ここで待ち受けて居り申した」

二

狂四郎としては、これは企図するところが、狂ったことになる。

この刺客に、志津との褥内(しとねうち)の話をきかせ、それを、佐野勘十郎の耳に入れるもくろみであった。

狂四郎は、志津に向って、本物の大納言家慶が上方(かみがた)にいて、その場所もおよそ見当がついた、と云ってきかせたのである。

刺客は、この言葉をぬすみ聴いたならば、当然、急遽(きゅうきょ)佐野勘十郎に、報告するに相違ない、と狂四郎は、考えたのである。

佐野勘十郎が、狼狽(ろうばい)して、討手の群れを送り出して来れば、これは、本物の家慶がまだ生存し

ていることを、はっきりとみとめたことになるのであった。

北園唐吉郎は、こちらの言葉を、佐野勘十郎に、報せていないのだ。

「お手前は、わたしと長岡釆女正の妻女との話を、ぬすみぎきされた筈だ」

「たしかに、きき申した」

「話の内容は、お手前を驚かせた筈だが――」

「べつに、驚き申さなんだ」

北園唐吉郎は、はじめて、編笠をぬいだ。

「貴公は、ご老中水野越州側用人武部仙十郎という、狸爺さんに踊らされて居るのだ。……ご老中は、政道の改革を企てて居る。それを実践するためには、次代の将軍家になられる御方を、傀儡とする必要がある。依って、西城府様を、贋者にしてしまい、弑逆する陰謀がなされていることは、すでに、お目付には、手にとるがごとく判って居る。……上方の何処やらに、西城府様と酷似する男がいて、これを替玉にすべく、貴公が、その男を江戸へ連れて来る任務を受けた。お目付としては、まず、不死身の兵法者である貴公を討たねばならぬ、と考えて、それがしを、甲府から呼び戻した次第だ。……西城府様が、贋者だなどと、なんというたわごとを、眠狂四郎ともあろう人物が、信じてしまったのか、こちらは、それを、ききたい」

北園唐吉郎の正視を、冷やかに受けとめた狂四郎は、

「お手前は、佐野勘十郎から、そう打明けられたのか？」

「貴公は、ご老中側用人の言葉を信じ、それがしは、お目付の言葉を信じた。いずれの言葉が正しいか、結果によって判明いたそう」

――説けば、もしかすれば、味方にできる男かも知れぬ。

狂四郎は、ふと、そう思った。
その時、数騎の馬蹄(ばてい)の音が、おもてで停められた。
「ここか」
大声で云って、入って来たのは、松平源三郎にまぎれもなかった。
「北園、討たねばならぬ敵と、酒を汲(く)みかわすとは、どういうことだ？」
短気者らしい早口で、咎めてから、唐吉郎の返辞もきかず、
「決闘の場所を、定めたぞ。……助勢いたすから、早々に、討て！」
と、云った。
「お待ち頂きたい。……助勢の儀は――」
ことわりかける唐吉郎に、松平源三郎は、呶鳴った。
「北園！　よもや、臆したのではあるまいな？」
「何を申される！」
唐吉郎は、憤然となった。
「それがしが、決闘を臆したなどと、かりそめにも、口にして頂きとうはござらぬ！」
「ならば、直ちに、試合場へ、参れ。……おい、素浪人、覚悟はよいな？」
松平源三郎は、満腔(まんこう)の敵意をこめて、狂四郎を、睨みつけた。
「こちらにとっては、いささか迷惑な話だが、そちらが是非にも、と申されるなら、べつに、避けるものではない」
狂四郎は、そう応えて、腰を上げた。
北園唐吉郎も、ほぞをかためた様子で、立ち上った。

街道を、ひきかえすことになった。
唐吉郎は、狂四郎と肩をならべて歩き乍ら、前後の者にきこえぬように、
「こちらには、助勢の数が多い。これは、それがしの本意ではない。……貴公、隙をうかがって、馬を奪って、逃げることを、すすめる」
と、小声で云った。
狂四郎は、無言であった。
「それがしも、三河譜代の旗本。決闘は、助勢なしで、やりたい。……貴公が逃げれば、必ず、それがしはあとを追って参る」
「…………」
唐吉郎は、返辞をせぬ狂四郎の横顔を、ちらと視やった。
――なぜ、返辞をせぬのだ？
唐吉郎は、苛立（いらだ）った。
「助勢の数は、五人や十人ではない筈。貴公に、とうてい、勝目はない。……逃げてもらいたい」
「…………」
狂四郎は、依然として、前方へ冷たく冴えた眼眸（まなざし）を置いたままで、沈黙をまもって、足をはこんで行く。
「それがしは、貴公のために、申して居るのだ！」
思わず、唐吉郎の声が、高いものになった。
とたんに、先頭を、馬を進めていた松平源三郎が、振りかえった。

「何を申しているのだ？」

すると、狂四郎が、口をひらいた。

「北園唐吉郎殿は、ご親切にも、助勢が多くて、勝目がないゆえ、逃げろ、とすすめて下さっている」

一瞬、唐吉郎の顔面から、血の色が引き、次の刹那、憤怒で、まっ赤になった。

三

荒川の流れが、街道に近づいたこの地帯は、雑木林が、四方の展望をさえぎり、むかしは、夜盗がしばしば出没した、という。

恰度、忍城下へ岐れる三叉の辻に地蔵堂が建っていたが、そこは、半町あまり、雑木林にかこまれて、小さな湖面のようなひろがりをかたちづくっていた。

いばら原という。

松平源三郎が、えらんだ決闘場であった。

すでに、数十人の藩士が、雑木林ぎわに、等間隔で佇立していた。

松平源三郎は、検分役を引き受けたごとく、地蔵堂の縁側へ、上ると、

「北園唐吉郎、真剣の業前を、存分に見せい」

と、叫んだ。

唐吉郎と狂四郎は、十歩の距離を置いて、向い立った。

唐吉郎は、藩士から渡された革襷をあやどり、小柄を当てた鉢巻をしめ、袴のももだちをとって、草履をぬぎすてていたが、狂四郎の方は、なお不敵なふところ手のままで、うっそりと立っ

ているばかりであった。

唐吉郎が、抜刀するや、松平藩士らも、一斉に、抜きつれた。

「ご助勢、無用っ！」

唐吉郎は、狂四郎へ眼光を放ち乍ら、叫んだ。

しかし、五十余名にものぼる藩士たちは、動きこそしなかったが、白刃を腰にもどそうとはしなかった。

唐吉郎は、じりっじりっと、一寸刻みに迫りつつ、もう一度、「ご助勢、無用っ！」と叫んだ。

狂四郎は、唐吉郎の刃圏の内へ、容れられるまで、ふところ手の静止相を、変えようとしなかった。

唐吉郎は、間合を見切って、進むのを停止した。

狂四郎が、ふところから両手を抜き出さぬのは、あきらかに、こちらを憤怒させようとする故意の驕傲の態度と判りつつも、唐吉郎は、

「抜けっ、眠狂四郎！」

と、叫ばざるを得なかった。

狂四郎の口辺に、薄ら笑いが刷かれた。

「柳生流には、抜刀術を封じる無刀の法がある筈――」

と、云った。

「……む！」

唐吉郎は、ひくく呻いた。

唐吉郎が、知る限りに於ては、抜刀術――居合抜きは、抜きつけ、抜き撃ち、斬り込み、とも

に、中腰からの陰（いん）の抜き放ちを極意とする。すなわち、下から抜きつけて勝つのが、居合の本旨とされている。

もともと、剣の術は、上から斬り下ろすのと、下から斬り上げるのとでは、その強弱は、問題にならぬのであった。したがって、刀法は、すべて、上から斬り下ろす業を修練して、それに工夫を加えることになる。たとえ、突きであっても、上から斬り下ろす心得でなければならぬ、とされていた。

ただ、居合だけは、下から抜きつけるのを本旨とし、そのために、異常に手の内を強靭（きょうじん）なものにする。

ただ、居合の抜きつけを放つ場合、右手が抜刀すると同時に、左手で鞘（さや）をうしろへ引くのを肝要とする。

そこが、尋常の兵法と、ちがうところである。

したがって、敵が肉薄して来た時には、右手は柄にかけずとも、左手はすでに、鞘を摑（つか）んでいなければならぬ。

狂四郎は、居合で応じるとみせて、なお、ふところ手のままなのである。唐吉郎の目には、奇怪と映らざるを得なかった。

中腰ではなく、立合いの居合であっても――抜き撃ちに敵の右の小手を斬るにしても、敵が振りかぶった刹那を、踏み込みざま右脇を斬るにしても、さらに、敵の真っ向からの一閃（せん）の太刀を、一文字に受けて、敵が退（さが）り乍ら振りかぶるところを、左の小手を斬るにしても、その迅業は、すべて、左手で鞘を、うしろへ引きざまに、抜き撃たねば、叶わぬところである。

しかるに、狂四郎は、平然として、ふところ手のままで、唐吉郎に、柳生流無刀の法で、居合

を封じてみよ、とうそぶいてみせたのである。
たしかに、下から、きえーっと宙を鳴らして放って来る居合の抜きつけを封ずる無刀の法は、柳生連也斎厳包によって、工夫され、この時代に至っても、柳生道場の高弟たちが、会得しなければならぬ奥旨のひとつにされている。
これは、口伝し難い法であった。
立合いには、双方の間に、必ず機というものが生ずる。その機に乗ずるのは、勿論であるが、機に乗ずるだけでは、まだ足らぬ。機を、我からひらくことを可能としなければならぬ。すべて物事には、きざしがあるが、これは、機というものよりも、今すこし迅く、きわめて微妙である。
敵が、撃ち込む機をとらえた――その刹那よりも、さらに一瞬はやく、こちらが、きざしを察知すれば、如何なる凄まじい抜きつけの一撃をも、これを防ぎ、勝を得る。これが、無刀の法であった。
旗本随一の使い手と称される北園唐吉郎も、その修練を積んではいる。
しかし、狂四郎の静止相が、どう機をとらえて、居合を放って来るか、読みとりかねる以上、機よりも微妙なきざしを察知することは、不可能に思われる。
唐吉郎は、すでに、狂四郎を刃圏の内に容れ乍ら、逆に、翻弄されているような焦躁をおぼえた。
――敵の策に陥ちてはならぬ！
心のどこかで、激しく戒める声があり乍らも、唐吉郎は、ついに、自ら汐合を極まらせて、
「やあっ！」
満身の闘志を、その一瞬の気合にほとばしらせて、斬りつけた。

狂四郎の痩身(そうしん)が、中腰に沈んだ、と見えた——次の刹那、手のない袖がひるがえるや、無想正宗が、生きもののごとく、腰から、鞘毎すべり出て、その初太刀を、鍔(つば)で受けとめていた。

狂四郎は、わざと袖から手を出さず、袂(たもと)の中から、無想正宗を、腰からすりあげて、唐吉郎の猛撃の白刃を、鍔で受けとめたのである。

「うーむっ！」

唐吉郎は、狂四郎の意外な受けに、ぱっと反射的に跳び退って、振りかぶった。

だが、その時は、すでにおそく、いつの間にか、唐吉郎の脇差が、鞘のまま、狂四郎の右手のものになっていた。

唐吉郎は、振りかぶったまま、どどっとうしろへよろめいた。

脇差の鐺(こじり)で、胸を突かれ、肋骨(ろっこつ)が折れたのである。

地ひびきたてて、唐吉郎が、倒れた時、狂四郎は、風のごとく奔(はし)って、地蔵堂の縁側へ躍り上っていた。

松平源三郎は、抵抗するいとまもなく、右手を、逆にねじあげられた。

「家中のどなたか、馬を曳いて来て頂こう。拝借して、本庄あたりまで、乗り始めをいたす」

狂四郎は、云った。

「い、痛いっ！」

源三郎が、悲鳴をあげた。

「はやくして頂かねば、この腕が折れると申されて居る」

狂四郎が、茫然となっている藩士たちを、促した。

馬が曳かれて来た。金銀梨子地の鞍をつけた源三郎の愛馬であった。

縁側から、ひらりとうち跨った狂四郎は、

「北園唐吉郎の身柄は、江戸のお目付佐野勘十郎邸へ、送りとどけて頂こう。老中水野越前守にやとわれて居るこの浪人者が、おねがいすることだ。まちがいなく、送りとどけて頂くのは、松平家のためにもなることだ」

そう云いのこすや、馬腹を蹴った。

抜刀したなり、うつけのように棒立ちになっていた藩士たちが、源三郎の狂気したような叱咤に、われにかえった時は、もう、馬蹄の音は、遠いものになっていた。

通夜の客

一

中仙道を歩いて行く眠狂四郎に対して、佐野勘十郎配下の隠密たちの襲撃がなされたのは、その痩身が、高崎城下に入った時であった。

江戸から二十六里十五町――高崎城下は、八万二千石・松平右京亮のものであった。上州随一の町である。

正月三日。

元日からずっとあたたかい晴天がつづいて居り、常ならばひっそりとした城下町の往還も、晴着の人が出盛り、三河万歳やら門獅子舞いやら猿まわしやら暦売りやらのにぎやかな呼び声、太鼓、笛、三味線の音をまじえて、のどかな御世泰平の景色であった。

大戸をおろした商家の前や、辻の空地には、さまざまの露店がならんでいたし、角兵衛獅子とか大道講釈とか居合抜きとか乞食芝居とか、さまざまの芸人が客足を停めていた。

なかでも、子供たちの人気を集めているのは、粟餅の曲搗きであった。

四人の男が、揃いの染袢天をまとい、紅の襷に、向う鉢巻で、

「ええ粟餅や、あわもちイやあ……」

と、大声をはりあげて、客を呼び、蝟集を待って、

「いよーっ、曲搗きのはじまり、はじまり、はじまりっ！」

と、芸当にとりかかる。

曲搗きといっても、実は、曲取り曲投げで、べつに臼杵は持参していなかった。

台荷の屋根一杯に巨きな看板をかかげ、傾斜した台の上には、餡と黄名粉と胡麻を盛ったひとかかえもある木鉢をならべていた。

曲取りする者が、きれいに手をきよめて、両手いっぱいほどの量の粟餅を持って、見物人のむこう側に立つや、

「いやあっ！」

懸声をあげざま、その粟餅を、空中高く投げあげる。

落下して来たのを、左手で受けとめざまに、右手でちぎって、見物人の頭上越えに、台荷の三色の木鉢へ、投げ込む。

間髪を入れず、三人の男が、それぞれ、ぱっぱっと、餡、黄名粉、胡麻をまぶしつける。

これが、前芸で、つづいて、曲取りの男は、投げ上げた粟餅を、右手で受けとめるやいなや、一瞬裡に、三個ちぎって、見物人の頭上へ抛る。

すると、三個は、それぞれ、餡鉢、黄名粉鉢、胡麻鉢へ、一個宛にぴたりと入るのであった。のみならず、投げあげる、落ちて来たのをちぎって抛る、これに三色をまぶす——という芸当が、おそろしい迅さで、つづけざまに演じられ、みるみる盆に山と積まれるのであった。その目まぐるしい迅業の正確さが、子供たちを夢中にしていた。

曲取りが三個一度にちぎってみせるのは、右手でちぎるやいなや、それを掌中でにぎりつぶして、親指の巧みなひねり加減で、人差指、中指、薬指、小指のあいだから、押し出すからであった。押し出しざまに、その右手を振って、三個をとばすと、三個はまるで小鳥のように、見物人の頭上を飛びこえて、三色の木鉢へ、一個ずつ、きれいに、おさまるという次第であった。

この粟餅の曲搗きが、高崎城下へ現われたのは、今年はじめてであり、江戸ではさして珍しくもない大道芸も、ここでは、評判を呼んだのである。

百人近い見物の大半は子供たちで、阿呆のように、口をあけて、曲取りの手から、台荷の木鉢へ飛ぶ粟餅を目で追うて、首をまわしていた。

狂四郎は、その脇を、ゆっくりと、行き過ぎようとした。

べつに、その粟餅屋に、特に注意したわけではなく、ただ、

——粟餅の曲搗きは、江戸だけの見世物ときいていたが……。

そう思い乍ら、曲取りの男と見物人のあいだを、通り抜けて行こうとしたにすぎなかった。

と——一瞬。

曲取りの男は、空中高く投げあげた粟餅を、左手で受けとめざま、狂四郎めがけて、

「えいっ！」

と、たたきつけた。

これを躱す反射神経の冴えた素早い五体の動きは、眠狂四郎独特のものであった。

二

悲劇は、次の刹那に起った。
狂四郎から躱された粟餅は、蝟集した見物人の中へ、とび込んだ。
轟然と、炸裂した仕掛火薬は、あっという間もなく、数人の子供を殺し、八方へはじけた火の粉が、数十人の顔や手や晴着を焼いた。
忽ちにして、城下連雀町の辻は、阿鼻地獄となった。
狂四郎は、その時、子供たちの無慚な死傷姿へ眼眸を置いて、ほんのしばし、茫然と自失していた。
この男が、心を締めつけられて、人間らしい表情に還るのは、無心な子供の哀しい姿に接した時にかぎられていることは、これまで、いくたびも述べたところである。
視線を、粟餅屋に化けた暗殺者たちに移した狂四郎は、むしろ、ひくく抑えた声音で、
「他人に迷惑をかけぬように心くばりをするのが、刺客の作法の筈だが、どうやら、貴様ら、この眠狂四郎を是が非でも殺したいあまり、血迷うて、手段をえらばずに、このような大きな犠牲をつくった。……許せぬ！」
と、云った。
すでに、四人は、台荷にかくしていた刀を、手にして居り、狂四郎が一歩迫るのに合わせて、一斉に抜きつれた。
阿鼻叫喚の光景をかたわらにして、狂四郎の無想正宗は、一閃毎に、一人ずつを、血飛沫をあ

げさせて、斃した。
斬らねば斬られるゆえに斬る――その受の態度が、これまでの狂四郎のものであったが、この場合は、ちがっていた。
その迅業には、憤怒がこめられていた。
四人とも、いずれも、ただの一太刀で、あの世へ送られた。

「もし――」
正視に堪えぬ子供たちのあわれな姿を、脳裡からふりはらうべく、足早に、城下を通り抜けて、からす橋と記された長い橋を渡りかかった時、小走りに近づいた者から、呼びとめられた。
頭をまわすと、若い武家の妻が、必死な面持で、こちらを瞶めていた。
三十前後の年増盛りの美しさが、匂うていた。
「お願い申し上げたき儀がございます」
「なんのご用か？」
「お手前様が、あの粟餅屋どもに襲撃された際、奇禍に遭うて相果てました不運な子供らの一人の母親でございます」
「…………」
「申しおくれましたが、わたくしは、当藩旗奉行小松田竜三郎の妻いせと申します。良人は、三年前、みまかって居ります。奇禍に遭うたわが子は、一人子にて、あの子を喪ったいま、小松田家は、廃絶に相成るよりほかはございませぬ」
「…………」

「屋敷には、今年七十歳に相成ります良人の父が、生き残って居ります。……わが子のそばにつき添うて居り乍ら、子を死なせた母親たる者、どのように、その祖父に弁解いたせばよいか、途方にくれた挙句、お手前様にご同道をねがおうと、思いついた次第にございます。義父は頑固一徹者にて、また、孫を掌中の玉としてこよなく愛して居りましたゆえ、わたくしの詫びなど、とうてい、諒恕いたしてくれる筈もございませぬ。……何卒、お手前様より、義父に、事情をおきかせ下さいますよう、ご面倒乍ら、お願い申し上げます」

すこしも、とりみだした気色を示さず、そう述べて、ふかく頭を下げた。

「どこの馬の骨ともわからぬこの素浪人が、弁解いたしたところで、貴女のお義父上が、諒とされるかどうか、疑問に思うが……」

「いえ、お手前様は、襲撃者どもを、四人とも、お斬りなさいました。そのことをきけば、義父は、屹度お手前様に、敬意を抱くに相違ございませぬ」

「……………」

「義父は、すでに三十を越えていたわたくしの良人に、毎朝、木太刀で立合せ、その未熟をさんざんに罵ったくらいの古武士の風格をそなえている年寄りでございます。いまは、中風の気味にて、立居に不自由はいたして居りますが、性根の程はいささかもおとろえては居りませぬ。……お願い申します。何卒、ご同道のほどを――」

「……………」

「もし、ご同道頂けぬとなれば、わたくしは、良人の墓前にて、自害して、詫びるよりほかはございませぬ」

狂四郎の眸子の中で、この妻女の貌に、志津の俤が重なった。

「参ろう」
狂四郎は、承知した。
「忝（かたじけ）のう存じます。お礼の言葉もございませぬ」
古武士の風格をそなえた舅（しゅうと）に仕えて、きたえられて来たので、一人子を喪ってい乍らも、このように、おちついて、とりみだした気色を他人にみせぬことができるのであろうか。
生命を落した十一歳の一人息子の遺骸は、数町ひきかえした本町のとある寺院の本堂に、安置されてあった。
それを駕籠（かご）にのせて、故小松田竜三郎の妻いせは、狂四郎を、わが家へ案内した。

三

小松田家は、旗奉行だけあって、左右の藩士の家よりも一段と構えが立派で、長屋門の前には、旗組を整列させるための広場も設けてあった。
当主は逝（い）ったが、いずれ、その子が、元服すれば、跡を襲うことにきまっていて、そのまま、隠居の祖父が旗をあずかっているもの、と思われる。
ところが、跡を襲うべき少年が、不運な犠牲になってしまったのである。
遺骸をのせた駕籠が、門を入るや、使傭人（しようにん）たちは、玄関の前で、土下座して、嗚咽（おえつ）した。
狂四郎は、いせに申し入れて、すぐに遺骸を奥にはこばせず、庭に面した十畳の座敷に、安置させ、そのそばに、座を占めた。
やがて、廻り縁に、高低のある跫音（あしおと）が、近づいて来た。
杖（つえ）をついた白髪の老人は、さだめしむかしは偉丈夫であったろうと、想像できる六尺ゆたかの

上背と、鼻梁秀でた風貌の所有者であった。

病んで、衰えて、鶴に似た痩軀になって居り、一歩毎にいたましい不自由な動きを示していた。

しかし、その双眼には、強い光があった。

老武士は、縁先で立ち停ると、座敷に入る前に、その眼光を、安置された遺骸へ、送って、しばらく、動かなかった。

掌中の玉にしていた孫が奇禍に遭うた、という急報は、この老武士にとって、比べるべきものもないくらいの、名状しがたい衝撃であったに相違ない。

その悲歎を抑えた面相は、鬼気迫るものを、狂四郎に感じさせた。

老武士は、座敷に入ると、座に就いた。

「眠狂四郎と申す」

挨拶する狂四郎へ、老武士は、はじめて、遺骸に置いた視線をまわした。

「当藩旗奉行小松田竜左衛門でござる」

「大切なお孫を、斯様な無慚なすがたにさせた責任の一端は、わたしにあります。ふかくお詫びいたす」

狂四郎は、連雀町辻に於ける突然の出来事のあらましを語り、つき添うていたのが、母親でなく、たとえ一流の武芸の所有者であっても、子供を救うことは不可能であった旨を述べた。

小松田竜左衛門は、まばたきもせず、狂四郎を瞶めて、無言をつづけた。

「……どうか、嫁御をおとがめのないよう、わたしからも、お願いいたす」

狂四郎が、頭を下げると、老武士は、はじめて、口をひらいた。

「お手前、襲った者を四人とも、またたく間に、斬り仆された由、よほど、天稟がある上に、修

業を積まれたのでござろうな？」
　そう訊ねた。襲われた理由を訊ねようとはしないのであった。
「市井に無頼な行状をかさねている者ゆえ、これまで、数多くの人をあの世へ送って居り申す。いわば、正しく修業を積んで一流を樹てた兵法者とは、全く逆の、裏道を辿って来た殺人鬼にすぎぬ、とお思い頂きたい」
　しかし、狂四郎がそう云っても、老武士は、自身の思念をすこしも変えぬ様子で、
「当藩家中には、秒刻の間に、四人もの敵を斬ることのできる者は、一人たりとも見当り申さぬ」
「…………」
「ひとつ、当方より、お願いの儀がござるが、おききとどけ下さるまいか？」
「…………」
「お手前、当家へ入聟になって頂けまいか。いせの良人になって下さらぬか？」
「…………」
「竜太郎を喪っては、このままでは、当家は、廃絶いたすよりほかはござらぬ。……お手前に、いせを嫁として頂き、小松田家を継いで頂けるならば、と存ずるが、いかがでござろうか？」
「ご老人――」
　狂四郎は、おのが家をのこしたい一念で、こちらが無頼者と告げているにも拘らず、耳を仮さずに、突如としてこのようなことを口にする老武士を、同情をもって見かえし乍ら、
「お孫を喪われたのは、わたしという男が、刺客に襲われたのが原因であることを、お考え頂きたい。刺客につきまとわれるような男が、どんな過去を持っているか――それを想像なさるなら

ば、家を継いで欲しい、などと思いつかれない筈。……わたしは、一所不住の漂泊の素浪人であり、それをむしろ、いささか、心中誇っているところもある男と、お心得頂きたい。敢えて申すならば、ご当家の入聟となることは、松平右京亮という藩主に随身することを意味している。松平右京亮という藩主が、たとえ当代随一の英明の大名であろうとも、これに随身することなど、まっぴら御免を蒙りたい。こういうことです」

「…………」

老武士は、一瞬、眉間に険しい翳を刷いたが、黙って、ただ、双眼を光らせたばかりであった。

「では、これにて――」

狂四郎が、起とうとすると、

「あいや、待たれい！」

小松田竜左衛門は、あわてて、片手を挙げて、とどめた。

「お手前のご存念の程、よく判り申した。このお願いの儀は、取り下げ申す。……せめて、今宵の通夜を、お手前にも、つとめて頂けぬものか、と存ずるが、いかがでござろうか？」

そう願われては、それも拒絶して、起つことは、できかねた。

四

狂四郎は、遺骸を移した奥座敷の片隅に坐って、僧侶の誦経をきき、つぎつぎと現われてはひき取って行く家中の人々を眺める苦痛に、堪えた。

こうした形式ばかりの慣習を、最も嫌悪する男が、見知らぬ他人の屋敷で、通夜の客となっているることは、まことに苦痛の限りであったが、横たわっている仏が、十一歳の少年であることが、

狂四郎に、その苦痛を、当然おのれが受けなければならぬ罰と考えさせたのである。
四更（午前二時）をまわった頃、用人が、そっと近づいて来て、狂四郎に、「あちらの部屋でおやすみ下さいますよう――」と、すすめた。
狂四郎は、案内されるのが、裏庭をへだてた離れであるのを知って、ふっと、疑いをおぼえた。
――なんのために、離れに泊めねばならぬのか？
こちらは、奥座敷で、通夜をつとめて、朝になれば出て行くつもりであったのだ。
すべての通夜の客が見知らぬ人間ばかりであり、おのれ一人だけ啞のごとく沈黙を守っていなければならなかったので、用人にすすめられるままに、つい起ってしまったが、離れでのんびりと休む気分になれる筈もない。
――やすむとみせて、こっそり、姿を消すことにするか。
そう考えて、離れに入った。
意外だったのは、延べられた牀の裾に、仏の母親が、白い寝衣姿で、畳に坐っていたことである。
「どうしたというのか、これは？」
狂四郎が訊ねると、いせは、両手をつかえて、
「申しわけございませぬ。義父に命じられたのでございます」
と、弁解した。
「この素浪人に抱かれるように、命じられた、といわれるのか？」
「はい」
「入聟にする手段として、えらんだ、というわけか」

「申しわけございませぬ。……わたくしは、こうして、ここに坐って居りますゆえ、お手前様は、どうぞ、ごゆっくりおやすみ下さいませ。ご遠慮なさいませぬように、おやすみのほどを――」

そうすすめるいせを、狂四郎は、冷やかに見据えて、

「一人では寝ず、そなたを抱いて寝たら、どうする？」

「え――？」

「……………」

「そなたは、抵抗するか？」

「抱いてみせようか？」

「……………」

「わたしに抱かれるように、と命じたのは、舅ではあるまい。別の人間だったのではないのか。この松平藩の重役の一人ではないのか。……わたしの討手は、粟餅屋に化けた四人だけではない。この高崎城下にも、まだ幾人か、入り込んで来ている筈だ。その一人が、智慧を働かせて、一人の少年の死を利用することにした。藩の重役に面会して、公儀お目付佐野勘十郎の添状をさし出し、眠狂四郎の討ちとりかたに、援助を乞い、重役はそれを承知して、そなたをひそかに呼んで、抱かれよ、と命じた。そうすれば、小松田家を廃絶せぬようにとりはからう、と条件をつけた。そうではないのか？」

「……………」

いせは、石のように身をかたくして、うなだれたなりであった。

「わたしが、そなたを抱けば、たぶん、夜明けがた、こちらのねむったのをうかがって、槍か矢か、鉄砲玉をくらわせる手筈になっている。そうであろう」

狂四郎は、薄ら笑った。

「そなたの舅が、わたしに入聟になって欲しい、とたのんだのは、自身一個の思案だったに相違ない。わたしに、ことわられると、すぐに、諒承して、せめて通夜をして行ってもらいたい、とたのんだ。この年寄りの素朴な気持を、わたしは、買った。……しかし、そなたが、操をすてて、家をのこそうとする気持は、買えぬ。そなたを利用した者が、わたしの討手ならば、これは、そなたの子を殺した者の一味だ。そなたが、まんまと乗せられたのであるならば、そなたの子の霊魂は、うかばれまい」

いせは、その言葉をあびると、哭(な)き伏した。

狂四郎は、その姿に、志津と同じ運命に置かれた女の哀しさを視て、暗然とし乍ら、しずかに、腰を上げていた。

寒い日

一

中仙道は、横川の関所まで、江戸からの三十里の間、山はない。

横川の関所を過ぎて、碓氷(うすい)峠にさしかかる。

軽井沢まで、九十九折(つづら)の坂道は、すべて、密林の中である。竹の御番所、羽根石、中山の立場(たてば)を過ぎると、箱根路よりも、勾配(こうばい)が急になり、雲助も、客を駕籠からおろして、歩かせる箇処がいくつか、待ち受けている。

晴れていたが、寒気の厳しい日であった。まして、碓氷峠にさしかかれば、密林に陽光をさえぎられた坂道がはりつめる寒気は、堪えがたい。

素袷に素足の眠狂四郎をして、思わず、ひくく呻かせ、とがった肩をすくませた。

子持山稲荷に、

『のぞき茶屋』

という看板をかかげた掛茶屋があったが、大戸をおろしていた。春になるまでは、閉じているものと思われる。

こうした冬を避けて無人になった掛茶屋には、室が設けられていて、地酒が仕込んであることを、狂四郎は、知っていた。

大戸をはずして、落間に入った狂四郎は、釘づけされた中仕切りの紅殻格子も開けて、奥を見まわし、すぐに、室に降りる箇処を見つけた。

竈の前に、薪を置く凹みが掘られ、かき出した灰や炭が容れてあった。そこであった。

灰をかきのけると、はたして、底は板になっていた。揚げ蓋であった。

狂四郎は、室から、濁醪の瓶をひとつ、携げて、あがって来ると、囲炉裏を切った板の間で、飲みはじめた。

炉に火が欲しいところであったが、あいにく、粗朶が見当らなかった。

無心状態で、瓶の量をすこしずつ、減らす時間が、しばらく、つづいた。

こうした全く音の絶えた山中で、孤独ですごすひとときが、この男にとって、最もふさわしいのであった。

邪魔が入らなければ、瓶が空になるまで、この寂寞の山気の中に、無想の身を置く習練もでき

ていた。
ふっと、われにかえったのは、おもてに人の忍び寄る気配によってであった。
狂四郎は、その気配に殺気がこめられているのを感じた。
お目付佐野勘十郎が、急遽、刺客の群れを江戸から放って来たことは、高崎城下で、知らされた。すなわち、佐野勘十郎は、西城府家慶が、西国の何処かに生存していることを、こちらに教えてくれたのである。
——高崎から、ほぼ十里、恰度、次の討手がそろそろ現われてもいい頃合だ。
狂四郎は、そう思い乍ら、湯呑みへ、幾杯目かの濁醪を満たした。
と——その時、すっと、落間へ踏み込んで来た者が、
「有難え！」
と、声を出した。
狂四郎は、振りかえろうともしなかった。
「旦那——」
紅殻格子ぎわで、対手は呼びかけて来た。
「おねげえがございます」
「………」
「あっしに、その酒を、一杯、めぐんでやって頂けやせんか。……おねげえ申します」
狂四郎は、振りかえって、そこに立つ者を、視やった。
無職の旅鴉の垢にまみれた三十がらみの姿が、いかにも、ウラ侘しかった。
のみならず、背後には、十歳ばかりの少年が、妙に大人びた顔つきで、目を光らせていた。

やくざを父親に持って、宿場から宿場に流れわたっていれば、おのずから、家のある子供とは気持も顔つきも異なるものと思われた。

「酒は、この茶屋の室から勝手に盗んだものだ。わたしに遠慮することはない」

狂四郎は、そうこたえて、瓶を押しやった。

「有難う存じやす。……あっしは、安中生れで、草次郎と申しやす、ごらんの通りの無職者でございます、へい。実は、酒をめぐんで頂きやすのは、寒さしのぎじゃないのでござんして、これから、長脇差を抜くのに、ちィとばかり、度胸をつけたいと思いやして、へい」

「…………？」

「松井田の賭場で、イカサマを看破った時、つい、負が込んでいたもので、かっとなって、中盆をたたっ斬ったために、追われて居りやす。追分まで、つッ走りゃ、あっしをかばってくれる親分が居りやすが、どうやら、この碓氷峠を登りきることは、おぼつかなくなりやした。……頂戴いたしやす」

安中の草次郎と名のる博徒は、濁醪を一息に飲んでから、

「有難う存じやした。……おねげえついでに、もうひとつ、旦那に、おねげえ申したいことがございます。……この餓鬼でございますが、追分まで連れて行っちゃ、下さいますまいか？」

「…………」

「行先は、餓鬼が知って居りやす。……おねげえ申しやす。おい、草吉、おめえも、おねげえしろ」

少年は、父親に促されて、奥土間へ入って来ると、

「おさむらい様、おねがい申します」

と、頭を下げた。

二

狂四郎は、草次郎へ、冷たい眼眸を当てて、

「死ぬ覚悟をきめて居るのか？」

と、訊ねた。

「追って来やがるのは、二十人以上もいやがるに相違ねえので、どうせ、たすかりっこはありやせん。……旦那、おねげえ申しやす！」

草次郎は、土間へ坐ると、両手をついた。

伜の草吉も、父親にならった。

「わたしは、西へ向って歩いている。この子が、あとをついて参れば、追分へ行き着くだろう」

「有難う存じます！　お礼の言葉もございません。……草吉、いいな、このおさむらい様のあとをついて行くんだぞ」

「うん――」

少年は、けなげに頷いた。

草次郎は、戸口に寄ると、おもてをうかがっていたが、

「それじゃ、旦那、おねげえ申します」

と、重ねてたのんでおいて、さっと、出て行った。

とたんに、

「いたぞっ！」

叫びがあがった。

草次郎の駆け去る跫音につづいて、追手の群れが、茶屋の前を、掠め過ぎて行った。

狂四郎は、刃と刃の嚙み合う戟音が、鋭く、宙にひびくのを耳にした。

草吉が、走って、戸口からとび出して行った。

やがて、俯向いて、戻って来た少年を、狂四郎は、眺めて、

「どうした？」

と、訊ねた。

「わかんねえ。……見えなくなっちまったです」

草吉は、こたえた。

しかし、そのおそろしさは、すぐ忘れる習性をそなえているように、狂四郎を視かえして、

「おさむらい様、囲炉裏で火を燃やしましょうか、おいら、薪を取って来る」

そう云って、裏口から、出て行った。

——やくざを父親に持てば、あのように、父親の危急に遭うても、平気でいられるのか。

狂四郎は、なかばあきれ、なかば感心した。

一束の粗朶をかかえて、炉端に上って来た草吉は、にこっとして、

「おさむらい様、小柄を貸して下され」

と、たのんだ。

「どうするのだ？」

「雉子を獲って来ます。冬の雉子は、うまいがな」

「小柄を打てるのか？」

「うん――」

狂四郎が、脇差から小柄を抜いて渡してやると、草吉は、走り出て行った。

四半刻(はんとき)も経たないうちに、草吉は、雉子を携げて、戻って来ると、早速、土間にしゃがんで、毛をむしりはじめた。

狂四郎は、その手馴れた作業を、黙って見まもっているうちに、ふっと、眉宇(びう)をひそめた。

しかし、その時は、なにも云わなかった。

草吉は、はだかにした雉子を、自在鉤(かぎ)にぶら下げると、

「おさむらい様、雉子を食うたことがありなさるか?」

と、訊ねた。

「まだ、ない」

「美味(うま)いから、あがってみなされ」

「お前は、父親のことを、すこしも、心配して居らぬようだな?」

「お父(とっ)つぁんは、不死身じゃ。なんども、こういうことがありました」

「追分の行先というのは?」

「おっ母さんが、居るのじゃ」

「…………」

草吉は、ちらと狂四郎を、ぬすみ視るようにしてから、

「わしは、おっ母さんがきらいじゃ。お女郎屋をやっているし、酒飲みじゃから……」

「…………」

「お父つぁんも、やくざじゃけど、お父つぁんの方がええ」

「………」
「おさむらい様は、やくざをきらいじゃろうな？」
「家があれば、芥が出るように、多い人間の中には屑も出る。このわたしも、屑の一人だ」
そう云いすてて、狂四郎は、ごろりと横になると、手枕して、目蓋を閉じた。
草吉は、しばらく、その寐顔を、じっと、瞶めていた。
少年のものとは思われぬ思慮深げな眼光であった。
狂四郎が、草吉から呼び起されたのは、それから半刻も過ぎてからであった。
「おさむらい様、雉子が焼けたよ」
狂四郎が、やおら起き上ると、草吉は、台所からさがし出した俎板へ、焼きあがった雉子をのせて居り、小柄で、器用に皮を剥いだ。
「はい」
さし出された肉の一片を、受けとった狂四郎は、すぐには口にせず、草吉がむしゃむしゃ喰べはじめるのを待って、ようやく、口にはこんだ。
少年の言葉に、嘘はなかった。肉はやわらかく、臭みもなかった。

三

陽が西に傾いた頃あい——。
狂四郎と少年は、碓氷峠を登りきって、一望不毛の高原に出ていた。
軽井沢。
後世、上流階層の避暑地となったこの高原も、当時は、街道沿いに、宿女郎を置いた店がひと

かたまりあるほかは、人跡をとどめぬ密林にはさまれて、茫々たる草地が、目路の果までひろがっているばかりであった。

はりつめた寒気は、骨を疼かせるほどのきびしさで、彼方に夕陽に照らされて浮きあがった浅間山の美しさを賞でる余裕もない。

まっすぐにのびた街道は、すでに土も雪も凍付いて居り、こごえて感覚をうしなった蹠にもなお、その固さがひびいた。

狂四郎は、しかし、べつに、足をいそがせるでもなく、その凍付いた街道を歩いて行き乍ら、

――妙なものだ。

自分に呟いていた。

このきびしい寒気をしのぐ効用を考えていたのである。

濁醪のおかげではなかった。

うしろをついて来る少年が、役立っているのであった。

「草吉、と申したな？」

掛茶屋を出て、峠を登って来るあいだ、ずっと沈黙を守っていた狂四郎は、はじめて、うしろへ声をかけた。

「はい」

「お前は、今年、幾歳になる？」

「自分でも、よくわかんねえ。十二か、十三に――」

その返答に対して、狂四郎は、冷たい皮肉な言葉を、かぶせた。

「実は、もう三十を越えているのではないのか？」

一瞬——草吉の足が、ぴたっと停った。

狂四郎は、振りかえりもせず、歩みも停めなかった。

草吉が、その後姿へ送る眼光は、あきらかに、武芸を積んだ者の鋭さであった。

しかし、次の瞬間、草吉は、畏怖と困惑の色をまぜた表情になって、再びあとをついて歩き出した。

「おわかりでござったか」

「お前が、獲って来た雉子の毛をむしりはじめるのを眺めて、その手さばきのあざやかさで、わかった。……忍者だな？」

「戸倉山中にすまいつかまつる真田六連銭組の残党でござる」

真田六連銭組、という忍者の一隊が組織されたのは、真田安房守昌幸が、甲信の諸郡を鎮定した頃であった。

次のような逸話が、のこっている。

天正十三年八月二日、大久保忠世、平岩親吉、鳥居元忠、柴田康忠ら徳川勢が、真田昌幸・幸村父子のたて籠った上田城に、攻め寄せた。

その時、昌幸は、弥津長右衛門と、碁を囲んでいたが、敵勢の鯨波が城内へひびいて来るまで、平然として、起たず、いよいよ、その先鋒が、大手ぎわまで押し寄せて来たという報に接して、はじめて、碁石をすてて、湯漬を、三杯さらさらと、かき込んだ。

それから、六連銭組を呼び、

「かねての手筈通りにせよ」

と、命じた。

直ちに、武者溜には、百頭の猛々しい悍馬が、揃えられた。それらの悍馬は、槍が数十本も結びつけられ、宛然針鼠のようなすがたになっていた。

徳川勢が、大手の橋際で、鬨の声をあげるや、城門がさっとひらかれた。

槍で武装された百頭の悍馬は、奔流のごとく、驀地に、徳川勢の陣へ、突進した。

そのうしろから、躍り出た六連銭組は、いずれも、火矢を携えていた。

同時に、城壁上からは、無数の青竹を弓なりにたわめて、油袋を空に投げ放った。

油袋が、徳川勢へ落下して、ぱっと散り撒かれた瞬間、六連銭組が火矢をとばした。

忽ち——。

二万余の徳川勢は、火焔の渦の中で、逃げまどい、さらに、狂いたけった槍馬の奔馳をくらって、阿鼻地獄の贄になり、およそ七千余の将兵が、斃れてしまった。

六連銭組は、昌幸・幸村父子が、関ヶ原の役後、高野山の峰つづき久戸山麓禿の宿に流されてから、散り散りになったが、大坂の役に幸村が起つや、再び、集まって、冬の陣、夏の陣に、大いに東軍を悩ました。

幸村が、討死したのちは、これにしたがって全員が討死したものと、世間からはみなされていた。

しかし、幸村の遺言によって、その残党は、信州に還り、戸倉山中に身をひそめて、その忍びの術を、代々継いで来たのである。

「そうか、お前は、六連銭組の裔だったか」

狂四郎は、はじめて、頭をまわして、忍者を視た。

どう視なおしても、十一、二歳の少年でしかなかった。

「幾歳になる？」
「二十八歳になり申す。……真田黒丸と申す。十歳頃から、斯様に、成長が停ったままでござる」
「佐野勘十郎にやとわれて、刺客になったのだな？」
「五百両の報酬にひかれて、やとわれ申した。おはずかしい次第でござる。戸倉に住む一族三十七人のくらしは、あまりに貧しいものでござる。五百両あれば、どれほど、うるおうかわかりませぬので、つい、左衛門佐様のご遺言によって禁じられていた六連銭組戒律を破った次第でござる」
幸村がのこしたのは、
『いかなることがあっても、徳川家に随身しては相成らぬ』
それであったろう。
「お前の父親に化けた男も、六連銭組残党の一人か？」
「いえ、あれは、公儀隠密衆でござった。沓掛宿にて、それがしの首尾を待ち受けて居り申す」
「首尾は、成らなかったな」
狂四郎は、薄ら笑った。
「やむなき仕儀でござる。五百両は、あきらめ申した」
その言葉をきいて、狂四郎は、歩き出した。
歩き出し乍ら、狂四郎は、口辺に、微笑を刷いた。
少年そのままの容子を保っているこの小人の忍者に対して、憎めないものを感じたのである。
「お主は、なぜわたしに襲いかからなかったのだ？　襲う隙は、いくらでも看て取れた筈だ」

「いや、お手前様には、隙というものは、いかなる時も、みじんも、なかったのでござる。横になって、目蓋をふさいで居られても、お手前様の神経は、こちらがほんのわずかでも殺意を起せば、すぐさま、覚めて、応ずるように修練されて居ると、お見受け申した。一撃で仆さねば、とうてい敵わぬお手前様に、その隙がないとなれば、あきらめて、雉子でも焼いてさしあげるよりほかにすべはなかった次第でござる。それに……」

そこまで、云いかけて、黒丸は、ちょっと、口ごもった。

「どうした？」

「……つまり、お手前様は、なんと申そうか、無想空寂の魅力、とでも申したらよろしいのでござろうか——ともかく、それがしに、手も足も出せなくするふしぎな虚無没我の味をそなえておいでござる」

「……………」

「それがしは、いま、お手前様に、随いて歩いているだけで、なんとなく、幸せな気分になって居るのでござる」

「……………」

「このまま、ずっと、随行いたしたい、とさえ考えていたところでござる」

「……………」

「いけませぬか？　五百両をあきらめついでに、お手前様の家来にして頂きとう存じます」

「……………」

狂四郎は、黙って、歩きつづける。

「いかがでありましょうか？　ずっと、随行させて下さいますまいか？」

「忍者ならば、あまえぬことだ」
冷たい返辞が、かえされた。
「顔やからだが子供と同様だからといって、あまえることまで真似ることはあるまい。……こちらは、一度ぐらいは、お主がどれだけの術を発揮するか、見てやろう、と待っていたのだ」

沓掛女郎

一

軽井沢を過ぎ、はなれ山わきを通って沓掛に入った時、もう浅間山は闇に溶けていた。
東海道と同様、峠をひかえた宿場は、講中の旅籠以外は、すべて、女郎を数人ずつ置いた家が並んでいた。
ただ、土地柄で、紅殻格子から、明るい灯を流してはいても、かまびすしい嬌声は、往還へ飛んでは来ず、ひっそりとしていた。どこからか、三味線の音がひびいていたが、かえって、うら侘しい。
「眠殿、あがられるなら、その店がよろしゅうござる」
うしろを、跟いて来ていた贋子供の真田六連銭組忍者が、脇へならんで、とある店を指さした。
狂四郎は、黙って、その店の暖簾をくぐった。
案内された二階の部屋は、首ひとつ跼まねばつかえる低い天井で、壁も天井も汚染だらけの四畳半であった。

すでに、坊主枕と函枕をならべた牀が行火であたためてあった。

「酒をたのむ。ひやでよい」

掛具をはねて、敷布団の上に坐った狂四郎は、遣手婆へ、小銭を投げた。

遣手婆は、それを押しいただいてから、

「旦那様は、あの黒丸さんとは、お知りあいなので——？」

と、訊ねた。

「うむ」

「それじゃ、浅間太夫をくどいてみましょうわえな」

「くどくとは？」

「いえな。浅間太夫は、お茶壺道中の奉行様用で、ふつうのお客とは、枕を交わさぬのでございます」

「お茶壺奉行は、年に一度、抱くために、女郎を独占して居るのか」

「あいな。それアもう、お手当がごうぎでございますからな、ほほほ……。でも、旦那様が、黒丸さんのお知りあいなら、特別に、浅間太夫をくどいて、諾と云わせましょうわえな」

遣手婆が去って、四半刻も過ぎた頃あい、浅間太夫という女郎が、酒をはこんで来た。

横になっていた狂四郎は、べつに、その器量をたしかめようともせず、長襦袢姿が目の前に坐って、

「おそうなりまして」

と、銚子を把っても、なお物倦げな眼眸をその膝のあたりへ投げて、盃へ手をのばしたばかりであった。

数杯、口にはこんでから、はじめて、狂四郎は、顔を擡げた。

宿場女郎という概念からおよそ遠い面高な、鼻梁にも口もとにも気品のある美貌が、そこにあった。頸すじの細く白いなめらかな線にも、薄い胸にも、くびれた胴にも、崩れた匂いはなかった。腰や膝は、稚い細さであった。

狂四郎は、やおら起き上ると、

「そなたも、戸倉山中の、真田六連銭組の裔か？」

と、訊ねた。

「はい。おはずかしゅう存じます」

浅間太夫は、目を伏せて、こたえた。はじらう風情が、いっそ、ういういしかった。

戸倉に住む一族三十七人のくらしは、あまりに貧しいものである、と真田黒丸は、狂四郎に告げていた。

一族の糊口を凌がせるために、この女は、犠牲になったというのか？

「そなた、お茶壺道中奉行の囲われ者になっているそうだな？」

「…………」

浅間太夫は、こたえず、いよいよ深くさし俯向いた。

当時、お茶壺の通行は、ある意味では、勅使の参向や諸侯の参覲交代よりも、重大視され、その通行筋では、街道の住民はもとより、宿駅の事務をとる問屋や、その宿泊にあてられた本陣、そして道行く旅人は、非常な迷惑を蒙った。

将軍家御用物の逓送が、ものものしかったことは、封建の時世では、当然のことであり、備後の畳表や越前の奉書紙といったたぐいの品物の逓送までも、きわめて警戒厳重であった。

まして、将軍家が喫するお茶をはこぶのであったから、その逓送は、滑稽なくらい細心の神経が配られ、異常なまでのものものしさであった。

御用茶は、宇治であった。

二

宇治は、天下の茶どころであった。

後鳥羽帝建久二年、僧栄西が、支那から留学を了えて帰朝した時、南宋の江南の茶種を、小函にひとつ、土産にした。

栄西は、これを、筑前の背振山に、試植した。その結果が大層良かったので、栄西は、「喫茶養生記」という一書を著わして、茶の効用を公にした。栄西が、京都建仁寺にいた頃、栂尾の僧高弁が、訪問して、その茶種の分与を乞うた。高弁は、これを、深瀬に栽培した。それをまた、のちに至って、山城の菟道に分栽した。これが、宇治茶の起源である。

数百年を経て、足利義満は、宇治に自家の茶園を設けた。

文明十五年、義政が銀閣寺を建て、茶道を大いに興したあたりから、宇治茶は、珍重すべきものとなった。

豊臣氏の時代に入って、茶道は愈々さかんになり、それにしたがって、宇治茶は、庶民の口に入り難いほどの貴重な品となった。

徳川氏の天下になるや、宇治は幕府茶所に指定され、御物茶師が置かれ、その精製品の半分を、京都御所へ献じ、将軍家が喫する分は、江戸から由緒ある茶壺を送って、これにつめて、はこば

せるならわしとなった。

宇治の茶摘みは、八十八夜三日前後であった。御物茶師の代官頭取格・上林家が、京都所司代屋敷におもむき、指図を仰ぎ、その三日のうちの吉日をえらんで、摘みはじめるのであった。

その日から、宇治の里には、制札が立てられ、新茶の搬出が禁じられる。

宇治で製られる茶には、さまざまの名がつけられていた。

初昔、若森昔、初日昔、後昔、祖母茶昔、鷹爪、早摘昔、鱗形、いの昔、白昔、雁金、大文字昔、大祝昔、初鷹昔、譲葉昔、一の城、千鳥昔など——。

昔とは、茶のことである。

宇治には、茶師が十三軒あった。前述の御物茶師の上林家をはじめ、同じ上林姓の家五軒、ほかに、長井、尾崎、酒多、星野、長等、辻、堀など。

これらの茶師は、年始、御目見、あるいは新規家督相続の場合、出府して、白書院で、若年寄の取次ぎを受け、毎年精製して将軍家へ奉るお茶には、毒がないという誓約書をさし出すのを例とした。

八十八夜前後に摘まれた新茶を、江戸から茶壺を持参して、受領に行くならわしは、寛永九年、三代家光によって、はじめられた。福海壺、寅申壺、志賀壺、埋木壺、日暮壺、虹壺、竜衣壺、藤瘤壺、柚狭壺、太郎五郎壺、という十壺が、江戸城には、用意してあった。

これら十壺は、それぞれ多く語るべき歴史を持っていた。足利義政が、支那から輸入した壺、豊臣秀吉が千利休から献じられた壺、島津義弘が朝鮮から流れ着いた陶工朴平意に焼きあげさせた壺など……。

お茶壺奉行は、この十壺から三つをえらんで、宇治へおもむいた。

行列は、さほどの人数ではなかったが、十万石の大名格を示した。

宇治に到着すると、頭取上林家に於て、まず、お茶の検査がなされた。検査したのは、江戸から随行した三人の御数寄屋坊主であった。

検査が済むと、斎戒沐浴した十三人のお茶師が、将軍家の御召壺（一番摘み、二番摘み、三番摘みの茶壺）と、京都御所へ献ずる夏切御壺、御買上御壺、御煎茶壺へ、厳重な立会いの上で、お茶詰めし、封印した。このお茶詰めには、三日間を要した。

禁裏への献上茶は、京都所司代から、手続きがとられた。

将軍家御用茶壺は、江戸城側にさらに二条城定番の番士十余人が加わって、随行した。

幕府から支払われる茶料は、大判三百三十五両と銀四貫三百九十一匁九分という多額であった。

帰府の行列は、江戸からおもむいて来た時とちがって、大層な人数にふくれあがっていた。お茶詰人足は約二百人、馬が三十数頭であった。

帰路は、はじめは、東海道であったが、のちに、中仙道にかえられた。それは、次の理由からであった。

お茶壺は、宇治を発足して、まっすぐに江戸へ持ちかえられたものではなく、そのはじめは、山城国愛宕山頂に、お茶壺をおさめて、ひと夏を経て、初冬を迎えてから、江戸へかえったのである。それが、のちに、愛宕山ではなく、甲州都留郡谷村で、夏中かこっておくようになったからである。

しかし、元文三年に至って、お茶壺は、まっすぐに、江戸へ持ちかえられ、城中の富士見櫓で、夏を過させるようになったので、東海道、中仙道を交互に往復するようになった。その道中が、あまりに、人々に迷惑を蒙らせるために、ひとつの街道を隔年にするよう配慮されたものである。

家光が、宇治へ受領に行かせた頃は、御数寄屋坊主三、四人が茶壺を持ち、徒士頭一人と道路警戒の走衆数人という手軽さであった。それが、しだいに、幕府の威信を示すための道中になって、人数が毎年増したのである。

お茶壺道中の前触があると、前日には、街道の清掃はもとより町も宿場も大掃除をし、沿道の田畑の耕作は禁じられた。塵芥を焼くことなどもってのほか、炊煙さえもたちのぼらせることを禁止された。

当日は、早朝より、街道上を、うすぎたない装の者はじめ、馬や駕籠や車の通行を止め、人足には入浴を命じ、沿道の家からは、軒さきにかけた草鞋のたぐいをおろさせた。

その城下・宿場へ、お茶壺が到着すると、往来の旅人は、すべて、裏路へ迂回させた。

江戸のわらべ唄に、

　ズイズイ、ズッコロバシ胡麻味噌ズイ
　茶壺に追われてトッピンシャン
　抜けたらドンドコショ

というのがある。

これは、お茶壺道中が、鬼より怕いものであることを諷刺したものであった。

勅使や大名の行列よりも、庶民を威圧した道中の長をつとめるお茶壺奉行が、当然、虎の威をかりたことは、想像に難くない。

泊り泊りの本陣に於て、おのが専用の女をつくって、伽させるぐらい、当然のことと考えているに相違なかった。

本陣側でも、はれものにさわるような扱いをしなければならぬので、ご機嫌とりに、見目麗し

い娘をえらんで提供することなど、求められる前に、配慮したであろう。

三

「お茶壺奉行の囲われ者が、どこの馬の骨とも知れぬ素浪人に、からだを抱かせてくれるとは、忝ない、と礼を云わねばならぬところであろう」

銚子を二本空けた狂四郎は、美しい女郎に、皮肉まじりの言葉を投げておいて、牀に仰臥した。

浅間太夫は、膳部を片づけ、行火の火加減を見てから、そっと、狂四郎のわきに入って来た。

その入りかたに、武家の妻の作法をみせた。

やおら、その細い軽い肢体を抱き寄せた狂四郎は、目蓋を閉じた顔へ、冷たい視線を当てて、

「うますぎる話には、裏がある」

と、呟くように云った。

一瞬——浅間太夫のからだが、こわばった。

狂四郎の片手は、湯文字の蔭をさぐって、やわらかな嫩草の萌えたふくよかな白土を、ゆっくりと、指頭で、掘りかかった。

別の片手は、背からまわされて、胸の隆起へ掌をかぶせていた。

肢体は、その弄玩にまかせつつも、胸で呼吸づく血汐が、拒否の意志で、凍っているのが、狂四郎には、判った。

花の芽を採るに似た五指の蠢きが、しばらくつづき、しめりをおびて来た土壌に、その一指が深くささった時であった。

その指頭から、しびれが起った。

しびれは、みるみる四肢のさきから、渚に身を横たえたように、打ちかえす波となって、軀幹をひたして来た。

麻痺の快味に酔いつつ、狂四郎は、しずかに、女の唇へ口を重ねた。

しかし、脳裡の一隅では、

——おれの生涯が熄る時が、このように甘美なものである筈がない。

その呟きがあった。

狂四郎の意識が完全に絶えるのを待って、女は、そっと、身を引いて、起き上った。

そこへ、真田黒丸が、小さな姿を、現わした。

「おりょう様、あさましい役目をお願い申して、申しわけございませぬ」

黒丸は、詫びて平伏した。

「黒丸殿。この御仁は、もう再び、蘇生しませぬか？」

おりょうと呼ばれた女は、不安な面持で、訊ねた。

「おそらく、十中九分通り、意識はよみがえりませぬ」

それをきいて、おりょうは、ほっと溜息をもらした。

「この御仁は、決して悪い人ではないように存じられます」

「それがしも、そう考えます」

「それだのに……」

「おりょう様、背に腹はかえられぬ、まことにやむなき仕儀でござる。……それがしは、この御仁を討ちとるべく、近づいてから、襲う隙が見出せぬこともさること乍ら、ふしぎな虚無没我の味をそなえた人柄に、忽ちに魅せられたのでござる。まことに、この御仁は、生涯に一人会える

か会えないくらいの魅力ある人物でござる。それがしは、正直に白状いたせば、この御仁の家来になって、どこまでも供をしたい、とさえ願う気持を起しました」

「黒丸殿、それなら、どうして——」

「お待ち下され。……おりょう様、貴女様もそれがしも、戸倉で生れて育っているあいだ、ただの一粒さえ、米を喰べたことがござったか。いかに、貧困に堪える、と申しても、限度というものがござる。真田六連銭組の後裔（こうえい）という誇りだけでは、生きて行けぬギリギリのドタン場に追いつめられたわれら一族の現状を打破するために、それがしは、敢えて戒律を破ることにいたしたのでござる。……五百両あれば、すくなくとも、一族は、このさき五年は、飢餓の不安におびえることからは、まぬがれます。……そうじゃ、五百両のうち、百両は、貴女様を、このいかがわしい世界から抜けて頂くために、費（つか）います。……五百両を入手するためには、この御仁に、生命をすててもらうよりほかはなかったのでござる」

「……生命まで、奪わずとも——」

「それがしをやとったのは、公儀隠密でござる。死体を、目の前にはこばねば、五百両を渡してはくれませぬ。……眠狂四郎殿、怺（こら）えて下され」

黒丸は、合掌した。

「黒丸殿。この御仁は、計られることを、あらかじめ、知って居られたのではありますまいか？」

おりょうは、黒丸を瞶めて、云った。

「知って居ったのであれば、酒に毒がまぜてあるのではないか、と疑って、飲まなかったと存じますが……？」

「でも——」
おりょうは、息絶えた狂四郎の寐顔へ、眼眸を落して、
「この御仁は、わたくしに、うますぎる話には裏がある、と申されました」
「え——？」
黒丸は、はっとなって、枕元へいざり寄ると、口の上へ掌をかざしてみた。それから、胸へ耳を当ててみた。呼吸は、完全に停止していた。
狂四郎は、まちがいなく、毒酒を飲んでいた。
黒丸は、おりょうに視線を移して、
「眠殿は、貴女様があまりに美しすぎるので、ふっと、そんな気がしたのでございましょう。……まだ、ほかに、何か、云われましたか？」
「いえ、それだけでした」
おりょうは、そっと、手をのばして、狂四郎の顔から、ひとすじのほつれ髪(げ)を、かきあげてやった。
階段に、跫音がした。
「黒丸殿。車の用意ができましたぞえ」
遣手婆が、声をかけた。
この遣手婆も、一族の一人であった。
黒丸は、凍付いた夜の街道を、ごろごろと車を曳(ひ)いて、進んで行った。
車には、狂四郎の痩軀が横たえられ、菰(こも)がかぶせてあった。

「眠殿――」

黒丸は、息絶えた者に、話しかけていた。

「怺えて下され。お手前様を、だました結果になり申した。……お手前様は、それがしが、随行を願った時、顔やからだが子供と同様だからといって、あまえることまで真似るな、と申された。その時、それがしは、ほぞをきめたのでござる。しかし、術を以て襲えば、とうてい、お手前様に、敵わぬことは、火を見るよりあきらかでござった。……やむを得ず、卑劣の手段を用いて、お手前様を、ねむらせ申した。怺えて下され」

そこまで話しかけてから、黒丸は、はっと思いあたったように、足を停めて、頭をまわした。

「眠殿。お手前様は、それがしの企みを、看破された。看破し乍ら、わざと、わが手に乗られたのではなかったか。……そうじゃ、そうに相違ない。眠狂四郎ともある御仁が、それがし如き者の企みを、看破されぬ筈はない。……お手前様は、おりょう様の美しさを見た時、わざと、真田黒丸の企てに乗ってやろう、と心をきめられた。……そうだったのじゃ！」

黒丸は、凍付いた地面へ、べたりと坐った。

「眠狂四郎殿、忝のうござる。……おん礼を申す。このご厚志は、生涯心に刻んで、一日も忘れませぬ」

泪が、その頬をつたうにまかせて、黒丸は、両手をついて、頭をたれた。

やがて――。

再び、車を曳き出した時、黒丸は、ひくく念仏をとなえていた。

沓掛から一里三丁――追分宿は、ゆるやかな坂の彼方に、その灯をまたたかせていた。

安中の草次郎と名のって、やくざに化けた公儀隠密が、その追分で、黒丸の首尾を待っている

筈であった。

慟哭

一

浅間山麓の追分宿は、ここから小諸、上田を経て善光寺に至る善光寺道と、木曾を経て京都に至る中仙道に岐れるところであった。

街道をはさんで、細く長く宿女郎を置いた店がならんでいた。その数は、沓掛の倍もあろう。

真田黒丸が、眠狂四郎の死体をのせた車を、ごろごろと曳いて、宿に入って来た時は、もう大半の店が、檐下の行燈を消していた。路上に人影もなく、物音も絶えていた。

脇本陣油屋の前に来て、黒丸は、車を停めた。

すでに、黒い影が、門脇で待ち受けていて、

「こちらへ——」

と、車をそのまま門内へ曳き入れるように促した。

黒丸は、塀に沿うて、裏手へまわった。

水の流れる音のする裏庭の一隅で、黒丸は、自分をやとった公儀隠密を、待った。

安中の草次郎と偽称して無職者に化けていた隠密は、すぐに、提灯を携げて、出て来た。

黒丸は、この男を、杉安という姓でだけ知っていた。

侍姿に還った杉安は、車のそばへ来て、菰をあげると、狂四郎の死顔を、のぞいた。

「うむ――」

頷いた杉安は、

「どのようなてだてで、討ちとったのか？」

と、訊ねた。

黒丸は、事実ありのままを、告げた。

杉安は、もう一度、狂四郎の死顔をのぞいてから、

「御苦労だった。……これは、礼金だ」

用意していた包み金を、黒丸に手渡した。

「ひきとって、くれてよい」

「杉安殿、お願いがござる」

黒丸は、云った。

「なにか？」

「この仏を、それがしの手で、葬ってやりとうござる」

「………」

「生れてはじめて、人を殺め申した。葬らせて下され」

「どこへ、葬る？」

「これから三町ばかり、山寄りにあがったところに、清泉寺という古刹がござる。そこの墓地に――」

「よかろう」

杉安は、許した。

「では――」
黒丸は、再び、往還へ、車を曳き出した。
それは、かなりの勾配（こうばい）の坂道であったが、黒丸は、黙々として、進んだ。鍛えた小軀（しょうく）には、力があった。山門が近くなると、道は甃（いしだたみ）になり、のせられた死体が、大きくゆれ動いた。
山門をくぐると、境内になるべき場所に、墓碑がならんでいた。墓地が狭いので、しだいに、はみ出したに相違ない。
「眠狂四郎殿。お手前の宗旨も存ぜぬ、ここは、禅刹ゆえ、まあ、我慢して下され。命日には、必ず、回向（えこう）つかまつる」
黒丸は、すでに、そのつもりであったとみえて、死体のそばへ、鍬（くわ）をのせていた。
「住持には、明朝、ことわることにしよう」
そう独語して、黒丸は、葬る箇所を物色していたが、ここと定めて、鍬をふるいはじめた。
さくっ、さくっ、と土を掘り起すさまは、いかにも力の配分を知った正確さで、疲れを知らぬ動きを示した。
穴の中に、掘り手の姿がかくれてしまうまでに深いものになったのは、半刻もかからなかった。
黒丸は、途中から、鍬を逆手（さかて）に持って、穴の中から、地上へ、土を抛りあげていた。
その手を止めて、
「さて、これぐらいでよかろ」
と、呟いた折であった。
穴縁（あなべり）に人が歩み寄る気配に、黒丸は、首を擡（もた）げた。

その黒影が、杉安であることは、月あかりに、すぐみとめることができた。
「なんぞ、御用でござるか?」
黒丸は、訊ねた。
「それがしが、眠狂四郎と共謀したとでも、疑われたかな?」
黒丸の声音は、あかるかった。
「それもある」
杉安は、こたえた。
「仏をもう一度よく、たしかめられるがよろしかろ」
「たしかに、眠狂四郎は、死んで居る」
「公儀隠密ならば、念には念を入れて、埋葬するところまで、たしかめられるのは、当然でござろう」
黒丸が、そう云った時、杉安のほかに、数個の黒影が、穴縁に、立った。

二

その者たちの手に、槍が携えられているのを視てとって、黒丸は、はじめて、はっとなった。
「お手前がた、それがしを、どうしようといわれるのか?」
「気の毒だが、眠狂四郎と一緒に、この墓穴で、ねむってもらうのだ」
「それがしは、真田六連銭組の忍び者ゆえ、役目が終ったならば、戸倉へ帰るまででござる。べつに、お手前がたにとって、わざわいにもさまたげにも、なり申さぬが……」
「お主に渡した五百両が、必要だ」

「なにを申される！」

「お目付といえども、無限に使用金があるわけではない。費用はできるだけきりつめねばならぬ」

「莫迦なっ！」

黒丸が、叫んだ瞬間、四方から一斉に、槍が、突きつけられた。

「むごい！　むごすぎる！……この五百両は、われら一族三十七人の露命を、つなぐための金じゃ！」

黒丸は、五本の穂先に迫られて、すこしずつ、穴底へ身を沈め乍ら、悲痛な声音をしぼった。

しかし、次の瞬間、ぴたりと口を緘じた。

対手は隠密であり、こちらは忍者であった。あざむかれたことを、憤るのが、笑止であり、滑稽であった。

あざむかれた方が、おろかであった、というだけの話であった。

杉安の方では、五百両を与えて、ぬかよろこびさせておいて、そのあとで殺す肚を、すでに、眠狂四郎暗殺を依頼した時に、きめていたに相違ない。

そういう場合もあることを、こちらは、予測すべきであったのだ。

こちらが、狂四郎を埋葬したい、と申し出ると、杉安は、すぐに、墓穴の中へ、袋の鼠にするこの光景を、思いうかべて、北叟笑んだに相違ない。思う壺にまんまとはまったのだ。

——死なぬぞ！

黒丸は、胸の裡で絶叫した。

その絶叫に応えるかのごとく、五本の穂先が、矢の早さで、黒丸めがけて、突き出された。

五人のうち、二人までが、充分の手ごたえをおぼえた。

しかし、一撃だけでは容赦せず、穴底にうずくまって動かぬ小さな影めがけて、五槍は、第二撃をくれた。

刹那(せつな)——。

その小軀が、猿(ましら)に似た素早さで、一槍をつたって、馳(は)せあがって来た。

とみた瞬間には、その討手は、忍び刀で、咽喉(のど)を、頸根(くびね)まで貫かれて、のけぞった。

「こやつが！」

墓碑から墓碑へ、三段に跳んで、遁(のが)れようとする黒丸めがけて、隠密たちは、包囲の輪を、大きくひろげ、そして、その輪を急速にせばめて行った。

手負うていなければ、そのまま遁走(とんそう)するのは、黒丸にとって、なんの造作もないことであったろう。

黒丸は、胸部と大腿部(だいたいぶ)に、深傷(ふかで)を受けていた。呼吸を整えるために、跳躍のあとには、一瞬の静止を必要とした。

敵は、ただの討手ではなかった。その一瞬の静止をとらえて、逃路をふさぐすべを心得ていた。

黒丸は、墓碑の蔭にひそみ乍ら、懐中の五百両の金子の重みを感じていた。

——この金を棄てれば、一命だけはとりとめることができるのだが……。

黒丸の脳裡に、その声があった。

しかし、黒丸は、五百両をすてるわけにはいかなかった。

その重みに堪え乍ら、黒丸は、翼でも持ったような敏捷(びんしょう)さで、再び、小軀を、墓碑から墓碑へ、移した。

討手たちの手から、その速影めがけて、つづけさまに、槍が、投じられた。

黒丸は、それらをことごとく躱して、本堂の廻廊の欄干にとびついた。

すでに、息が切れて居り、喘ぎをしずめようと、黒丸は、俯伏した。

眩暈が襲って来ていた。懐中の五百両の重さよりも、四肢の方が重くなっていたし、口腔内には血汐が、あふれていた。

――死なぬぞ！

黒丸は、再び、胸中で、絶叫した。

廻廊へ馳せ上って来た隠密たちは、微動もせぬ小さな忍者を、じっと睨みつけて、しばらく待った。

「斬れ！」

階下から、杉安の声が、とんだ。

一人が、すすっと迫って、刀をふりかぶった――刹那、黒丸は、跳躍した。

その敵が、よろけて、欄干に凭りかかった時、黒丸の速影は、本堂正面を掠めて、地上へ跳んでいた。

それに向って、杉安が、抜刀して、疾駆した。

地面を一廻転して、黒丸が立った時、すでに、その小軀は、杉安の青眼につけた刃圏内に容れられていた。

もはや、遁走は、叶わなかった。

黒丸は、左手で握りしめた小刀を、傷ついた胸をかばうように、胸前に横たえて、

「わしは、死なぬ！」

と、呻くがごとくもらした。
杉安は、一颯の刃風の下に、黒丸をあの世へ送るべく、じりっと半歩迫った。
黒丸の眸子の中で、杉安の姿が、しだいに巨きなものに、ふくれあがって来た。
「くそ！」
黒丸は、鉛のごとく重くなって来たおのれの五体に対して、焦躁しつつ、眦が裂けるように、双眼を瞠いた。
双眼を瞠くことだけが、この烈しい眩暈からまぬがれる唯一のすべであった。
しかし、それも、ほんの数秒の儚ない努力でしかなかった。
巨大にふくれあがった杉安の姿が、急速にぼやけて来た。
杉安が、上段にふりかぶる動作が、きわめて緩慢なものに、黒丸の網膜に映り、そして、うすれた。
黒丸は、暗黒の底へ、落ちた。

三

——陽が、顔に、あたっている。
黒丸が、意識をよみがえらせた時、まず感じたのは、そのことだった。
——わしは、生きている！
歓喜は、噴きあげる激しさではなく、せせらぎがひたひたとひたひたして来るように、からだにしみわたって来た。
胸と太腿の疼痛も、これは、生きている証左であった。

黒丸は、目蓋をひらいた。

眠狂四郎の蒼く褪めた貌が、そこに、在った。

黒丸は、それを予期してでもいたように、おどろかずに、見上げた。

狂四郎が生きかえって、こうして自分を眺めていることの奇怪さに、衝撃を与えられるには、黒丸は、この瞬間の状態をきわめて自然なものに感じたのである。

視線と視線を合わせて、しばらく、沈黙がつづいた。

黒丸は、自分の方から口をひらくのが、礼儀だと思った。そうしなければ、狂四郎はいつまでも、無言でいる気がした。

「お手前様が、わしを、救うて下されたのですか？」

「わたしとお主の代りに、あの墓穴に、渠らがねむった。六個の死体を投げ込むだけの深さに掘ってあった。ていねいな仕事であったな」

その言葉をきいて、黒丸の双眼から、泪があふれ出た。

「殺した筈のお手前様から、わしは、救われたのじゃな」

黒丸は、嗚咽を抑えようとはしなかった。

「わたしの腰の印籠には、毒をくらわされる場合にそなえて、予防の解毒剤がある。それに、あの浅間太夫は、酒に混ぜる毒の量を加減した模様だ」

狂四郎は、山門近くの甃の上で、大きく揺り動かされた時、意識をとりもどしていた。

しかし、起き上るにはまだ力がなく、そのまま、車上に、横たわって、黒丸が墓穴を掘る音をきいたのである。

「許して下され。……わしは、どうしても、五百両、欲しかったのでござる」

「べつにあやまることはなかろう。食うか食われるかは、生きものが生き残るための法則だ。……こちらは、雉子を獲って来て食わせてくれた親切に、返礼したまでのことだ」

狂四郎は、云った。

黒丸の双眼からは、またあらたな泪が、あふれた。

四

沓掛宿のその女郎宿の裏に、小さな離れがあり、真田六連銭組から、身を犠牲にして、売られて来たおりょうという女は、そこに住んでいた。

一睡もせぬままに夜を明かしたおりょうは、はこばれて来た朝餉（あさげ）も摂（と）らずに、囲炉裏の粗朶火へ、眼眸を落していた。

眠狂四郎という浪人者を、この手で毒殺した悔恨が、まだ、胸を疼（うず）かせていた。

同じ一族の女で、狂四郎におりょうをあてがう役をつとめた遣手婆が、顔をのぞけて、

「おや、なにも、喰べないのですか。昨夜のことを気に病んでおいでなら、お止（よ）しなさい。……貴女は、黒丸さんの手助けを、しただけなのだから——」

「…………」

「黒丸さんの働きのおかげで、戸倉へかえれるのですよ。うれしくないのですか」

「小母さん。……あのご浪人は、いい人ではなかったのでしょうか？」

「そんなこと……、過ぎてしまったことは、はやく、忘れてしまうように、努めなくちゃいけませんね。……それよりも、黒丸さんは、もうそろそろ、戻って来ても、いい時刻なのにね」

「小母さん、わたしを、しばらく、一人にしておいて下さい」

おりょうは、たのんだ。
遣手婆は、おりょうの様子を、ちょっと不安げに眺めたが、黙って、食膳を下げて、出て行った。
おりょうは、なお、それから小半刻も、同じ座を動かずに、炉火を瞶めていた。
庭さきに、人の気配を感じて、おりょうは、顔を擡げた。
「どなた？」
「そなたに、毒殺された男だ」
「えっ⁈」
おりょうは、愕っとなって、一瞬、全身をこわばらせた。
狂四郎が、障子を開けて入って来ると、おりょうは、しかし、恐怖を抑えて、両手をつかえた。
「酒があれば、欲しいところだ。こんどは、毒の入らぬ酒を、もらおう」
「は、はい」
台所に入って、その用意をはじめた時、おりょうの胸に、ふしぎな悦びが湧きあがって来た。
——生きていて下されたのだ！
自分を斬るために、戻って来たのかも知れなかった。
おりょうは、斬られてもよい、と思った。
膳部をはこんで来ると、おりょうは、あらためて、
「お許し下さいませ」
と、ふかく平伏した。
「詫びは、黒丸から、幾度も、受けた」

狂四郎は、手酌で飲みはじめた。

おりょうは、その孤独な翳の濃い異相を、そっと、うかがった。

とりつく島もないほど冷たい態度を、終始保っているこの異相の持主は、戻って来乍ら、一言もこちらの詐謀を咎めようとはせぬのだ。

生きかえって来て、平然として、酒を飲んでいる。

その姿を眺めるおりょうの胸に、微妙な女心がうごいた。

甘い、やるせない疼きであった。

それに堪えきれず、おりょうは、台所にさがって、そっと、襦袢の袖で、泪をぬぐった。

燗のついた銚子を、はこんで来ると、狂四郎は、重い包みを、畳に置いた。

「黒丸が、得た五百両だ。これを持って、戸倉へ、帰るがよい」

おりょうは、はっとなって、

「あの——黒丸殿は、どうなったのでございましょう？」

「追分の清泉寺という古寺で、逝った。この金子は、あの男が、生命とひきかえにしたことになる」

「…………」

おりょうは、言葉がなかった。必死に、泪を怺えた。

「あの男は、忍者としては、善良すぎた。善良であることは、忍者の資格に欠けている。……寿命であったようだ」

狂四郎は、立ち上った。

「お待ち下さいませ」

おりょうは、必死になって、とどめた。
「このまま、おかえしはできませぬ」
「どういうのだ？」
「お礼を――」
「礼？……礼をもらうために、金子を届けに参ったのではない。黒丸の遺言をはたしたまでだ」
「いいえ、いいえ！」
おりょうは、かぶりを振った。
「このままおかえし申しては、わたしの気持が済みませぬ」
「………」
「どうぞ、今日一日だけ、ここに、お泊り下さいませ」
「からだで、返礼するというのか？」
「は、はい！」
狂四郎は、おりょうの必死の表情を、冷たく視かえしていたが、
「据膳を食わせるのなら、その女郎姿では、返礼になるまい。戸倉へ帰って、泥水のよごれをおとしてから、後日、わたしの前へ現われてもらおう。……但し、こちらが、その時まで生きていればの話だ」
そう云いのこした。
おりょうは、立ち去って行く狂四郎の跫音をきき、それが消えた時、俯伏して、慟哭した。

お六櫛(ぐし)

一

木曾路は、贄(にえ)川の関所を越えて、いよいよ山嶽(さんがく)が迫り、行手の崖路(がいろ)桟道の艱難(かんなん)を想わせる。

ここを境として、松本領から尾州領に入るために、贄川の関所は、上り下りの女改めのほかに、檜(ひのき)細工の搬出に、役人の目が光る。

幽鬼に似た眠狂四郎の黒い痩身(そうしん)が、そこを通り抜けようとした時、役人が咎(とが)めていたのは、木曾駒を曳(ひ)いた女馬子(まご)であった。

まだ二十歳あまりの、黒髪をざんばらに肩に散らし、膝(ひざ)がしらがのぞくほど短い布子を腰帯でむすんでいた。娘らしさを示しているのは、脚絆(きゃはん)を赤い布地でつくっていることだけであった。眉が濃く、窪(くぼ)んだ眼窩(がんか)から放つ光は烈しく、ひきむすんだ口もとにも、反抗の気色を示して、よほど気丈夫な娘のようである。

「たわけ！　たとえ、白木細工、お六櫛ひとつといえども、これをかくして、他領に持ち出すことは禁じられて居る。知らなかったとは、云わせぬぞ。幼い弟妹を、獣皮はこびで、やしなって居るけなげさを、みとめてやって居るのに、つけ込んで、御番所の目をごまかすとは、言語道断だ！」

役人は、顔面に朱を散らして、呶鳴(どな)った。

本山(もとやま)からこの関所に入るまでの二里あまり、けものの皮を沽(う)る店が、沿道にたくさんならんで

いる。熊、鹿、猪、貂鼠のたぐいである。

この女馬子は、この皮類を、木曾山中からはこんでいるのであったろう。

その皮の下に、檜細工をかくして、はこんだのが、露見したに相違ない。尾州藩は、檜材の搬出に関して、重税をもってのぞんでいたので、しぜん、小さな細工を持ち出すことにも、関所役人は、口やかましくなっていたのである。

狂四郎は、咎めに屈せぬ態度をみせている女馬子のわきを、ゆっくりと通りすぎた。

関所を過ぎると、獣皮を軒端にぶらさげた店にかわって、椀とか櫃とか盆とかの塗物や、観世音菩薩とか厨子とか俎板とか玩具とかの白木細工をならべた店が、ずらりとならぶ。

旅人が、これをもとめて、持ちかえるぶんには、一向にさしつかえないのであった。

ふところ手、着流しの狂四郎に、店さきから声をかける者は、一人もいなかった。

その異相が、さらに頬が殺げ、蒼白なものになっていたのである。沓掛宿で、嚥まされた毒は、まだ体内に残って居り、下の諏訪を過ぎ、洗馬をまわって、ここまでやって来る二日間、わずかな量の酒しか胃に落していなかった。痩軀はさらに、肉をすてていた。

「おさむらい様！」

背後から、息をはずませた女馬子の声が、かかったのは、奈良井宿を行き過ぎて、鳥居峠にさしかかった時であった。

「…………」

関所を出て、半刻あまり後のことである。

狂四郎は、黙って、女馬子が、肩をならべるにまかせた。

「おさむらい様、先程は、ごめん下せえ。……わし、せっぱつまって、つい、その袂をお借りし

ましたです」
「これか――」
狂四郎は、袂から、お六櫛をとり出して、女馬子に、渡した。歯が一本欠けていた。それで、売りものにならず、女馬子は、持ちかえろうとしていたのであろう。
役人に、からだを調べられるのをおそれて、とっさに、かたわらを通り過ぎようとした狂四郎の袂へ、投げ込んだのである。
お六櫛というのは、奈良井から藪原、宮の越にかけての店のみで沽られている名産である。材料は、棟梁というのをつかう。
櫛のはじまりは、伊弉諾尊である。その御子の素盞嗚尊が、奇稲田姫に、湯津の爪櫛を、その御髻に挿してやったことから、女子があたまを櫛でかざるならわしが起った。
櫛づくりは、田圃のすくない木曾山中では、遠いむかしから、なされていた。お六櫛と称して、これを木曾の名造としたのは、ごく近年のことであった。
尾州藩は、このお六櫛も、産地の店で旅人に売る値段より、藩外へおろして売る値段を倍にしていたのである。
したがって、こっそり持ち出してあきなっていることが露見すれば、入牢の憂目に遭うのであった。
「おさむらい様、ほんとに、たすかりましたです。……さ、どうか、馬に乗って下せえ。代は要らねえ」
女馬子は、すすめた。
「好意だけを受けよう」

狂四郎は、乗ろうとしなかった。

二

「おさむらい様、失礼じゃが、どこか、お加減がわるいのではありませんかな？」
女馬子は、眉宇（びう）をひそめて、のぞき込むようにした。
「人間の面（つら）ではなくなっているか？」
「四五年前、御嶽（おんたけ）におこもりした修験道が、倶利迦羅（くりから）で、一月も絶食の修行をしたあと、地獄谷の王の滝に打たれたのが、かえって病を呼んで、まるでもう、そりゃ、幽霊のようになって、下山して来られてな、黒沢の里の宮（御嶽権現祠）で、寐（ね）とられましたが……、ちょうど、あのお顔に、そっくりになられています」
「……………」
「おさむらい様、むりをなされずに、馬に乗られませ。わしが、行先まで、送ってあげます」
「行先は、京だ」
「あ！　京まで、お送りするのは、おぼつかないが……、そうじゃ、妻籠（つまご）まで、送って進ぜます」
「妻籠に、よく診る医師でも居るというのか？」
「いいえな、あそこには、妻籠古城がありますわな。城址（しろあと）に、古い祠（ほこら）があって、誰かれとなくお供えする白米が、一年中、絶えたことがありませぬ。……その白米を頂いて、四粒か五粒喰べると、からだの悪い血がなくなって、少々のやまいなら癒（い）えるのじゃ。……だまされたと思うて、頂いてみなされ」

女馬子は、熱心にすすめた。

狂四郎は、妻籠城の攻防戦については、古い書物で読んだ記憶があった。

妻籠城は、天正十年に、木曾義昌が築き、山村良勝をして、守備せしめていた。

同十二年、豊臣秀吉は、義昌に命じて、伊奈路を禦(ふせ)いだ。義昌は、妻籠城に、援兵を送って、良勝に、死守を下知した。

伊奈の郡主菅沼小大膳は、諏訪保科(ほしな)と兵を協(あわ)せて、木曾を奪わんと企てた。

突如として、蘭(あららぎ)の砦(とりで)を抜いて、妻籠城に殺到して来た菅沼・諏訪連合勢を迎えて、山村良勝は、鳥銃を乱撃して、防いだ。

伊奈軍は、登り着くことが叶(かな)わぬまま、遠巻きにして持久戦の陣を布いた。

妻籠城は、水道を断たれた。城中に、井戸はなく、五日も経たぬうちに、水が尽きた。

良勝は、しかし、敵にこれをさとらせぬために、包囲の兵からよく見える場所で、馬に白米をふりかけて、からだを洗うふりをしてみせた。遠方からは、ざあっと、馬の背から落下する白米が、ちょうど水のように見受けられた。

菅沼小大膳は、馬を洗う水があるくらいならば、城中の井戸は、こんこんと湧(わ)いているものに相違ない、と思って、囲みを解くと、伊奈口へひきあげようとした。

良勝は、ここぞとばかり、伏兵を設けて、ひきあげの伊奈軍を襲い、その半数を討ち取った。

この故事によって、妻籠古城址には、山村良勝を祀(まつ)る祠の前に、白米を供えるならわしができ、そして、いつの頃からか、この白米が、薬餌(やくじ)のかわりとして、病人がもらうようになったのである。

狂四郎は、女馬子の親切なすすめを、受けてみることにした。

鳥居峠を下ると、黄昏の寒風は、肌を刺し、骨を疼かせた。

木曾川の上を吹き渡る風は、夏も冬も烈しかった。そのために、どの家も、板葺きの屋根には、圧石をならべていた。

年明けたこの頃合には、その圧石は、雪でかくれていた。街道の土も、根雪の下にあり、桜・桃・紅梅が一時に花が開く三月末にならなければ、土を踏むことは叶わぬのであった。

流石に、鳥居峠を越えた狂四郎は、疲労の度が濃くなり、つやという女馬子の曳き馬の背を借りた。

福島に入って日が暮れ、つやは、旅籠へ狂四郎をおろしておいて、

「明朝、迎えに参じます」

と、云いのこした。

つやの家は、関所わきの細道を、半里ばかり登った山中に在る、ということであった。

女中に、夕食をことわり、すぐに牀を延べさせて、横になると、地の底へひき込まれるような虚脱感が襲って来た。熱も出たようであった。

どれほど、睡ったろう。睡ったというよりも、意識を喪失していた、といった方が正しいかも知れなかった。

この男のふしぎさは、五体が疲れ果て、且病んでい乍らも、自分の生命を狙う殺意の所有者が、近くに迫ると、即座に、目覚めることであった。目覚めた瞬間、すでに、その神経は鋭く冴えていた。

檜戸をへだてる隣室に、気配をひそめてひそむ者がいることを、狂四郎は、察知した。

ただの客ならば、こちらは、そのまま、朝まで睡りつづけたであろう。

対手(あいて)が、こちらをうかがって、気配をひそめつつ、檜戸へ寄って来たために、目を覚したのである。

——さしたる手練者(てだれ)でなくとも、いまなら、おれを討ち取ることができるだろう。

狂四郎は、他人事(ひとごと)のように、胸の裡(うち)で、呟(つぶや)いた。

しかし、こんなところで、犬死するのは、まっぴらであった。

こうした場合、狂四郎には、対手をしりぞける心得があった。

機先を制して、こちらから声をかけることであった。

「その御仁——」

狂四郎は、しずかな口調で、呼んだ。

「寐首をかくことのできる対手か、どうか——そのことを、考えて、殺意を燃やすがいい。それとも、ただ、寐息をうかがっているだけなら、こちらは、ねむりをさまたげられて、迷惑な話だ。いずれにしても、勝負をするなら、明日のことにして頂こう」

檜戸のむこうの者は、なんとも応えず、気配を消した。

三

「おさむらい様、ようねむれましたかな?」

朝陽のさしそめたおもてで、待っていたつやは、狂四郎が出て行くと、にこにこして、訊(たず)ねた。

「うむ——」

狂四郎は、うなずいてみせた。

こちらの顔面は、相変らず死人のように蒼白であったが、つやこそよく睡ったのであろう、薄

化粧したように頬が桜色になり、唇が赤かった。

顔だちはととのって居り、衣裳さえかえれば、両国の水茶屋へそのまま出してもいいくらいであった。

狂四郎は、今朝は、むこうからすすめられぬうちに、馬上の人となった。

「お前は、両親を喪って、その細腕で、弟や妹をやしなっている、ということだな？」

「はい。妹、妹、弟、妹、弟と五人居ります。いちばん下の弟は、まだ三つです。……父も母も、子供をせっせとつくることばかりはげんで、一文も残さずに、疫病で逝きよりました。迷惑したのは、長女のわしばかりじゃ。父と母の葬式すませた夜、まるで干瓢畠のように、ごろごろと寐ている五つ頭を眺めて、なんでまた、ようもこんなにたくさん産んで残してくれたものじゃろう、と腹が立ちましたわな」

つやは、よく舌のまわる娘であった。

狂四郎は、馬上に在って、しゃべるがままにまかせ乍ら、昨日から生じている疑念を、いささかもてあます気分であった。

——この娘は、敵のまわし者ではあるまいか？

疑念は、それであった。

この疑念は、贄川の関所で、お六櫛を袂に投げ込まれた時に、すでに、直感として湧いていた。

女馬子は、必ずあとから追いついて来て、なれなれしく話しかけて来るであろう、と予想したが、まさしく、その通りであった。そして、遠く十余里もはなれた妻籠まで、案内して、薬餌代りの供え米を喰べさせようという親切を示すのも、これは、こんたんあってのことと、解釈できるのであった。

少年としか見えなかった者が、敵の走狗となった忍者であった、ということを、つい先日見せられて来たばかりである。
自分に近づいて来る者を、あたまから疑ってかかったとしても、やむを得ぬ仕儀であった。
しかし――。
つやの饒舌を、馬上できいているうちに、
――つくり話というものを、こうも自然に、すらすらと口にできるものであろうか？
と、首をかしげたくなっていた狂四郎である。
――まあ、よかろう。敵のまわし者であろうと、なかろうと、この娘が、おれに好感を与えた、という事実は、否定できぬ。

四

寐覚牀の茶屋で、小休止したのち、須原、野尻、三富野と過ぎて、妻籠に着いたのは、陽のかげった頃あいであった。
妻籠古城址は、宿から東へ、すこし入ったところに在った。
つやは、勾配の急な坂道を、馬を曳いて登ると、狂四郎を仰いで、
「さあ、着きましたわえ」
と、にっこりした。皓い歯が美しかった。
狂四郎は、地上へ降り立つと、苔むした石垣の上に、雪をのせてさしのばされた古松の枝ぶりを眺めた。
つわものどもが夢の跡のものさびた趣は、こうした忘れられた古城のたたずまい独特のもので

ある。

天守閣をそびえさせた城址ではなかった。砦をすこしひろげた程度の、石垣のみが、その歴史をとどめている狭い山峡の眺めであった。

つやが狂四郎をみちびいたそこには、五尺あまりの高さの小さな古びた祠が、建っていた。

供物石の上に据えられた三方（さんぼう）には、つやの告げた通り、白米が盛られてあった。

「おさむらい様。ほんの四、五粒でええのです。つまんで、お喰べなされ。きっと効きます。どうぞ――」

つやは、すすめた。

狂四郎は、黙って、数粒を掌にのせた。宵の薄くらがりが、すでにそこにひろがっていて、その白米の粒が、毒を含むものか否か、見分けることはむつかしかった。

――どうする？

狂四郎は、おのれに問うた。

その応えは、掌を、口に近づけることであった。

瞬間――。

つやが、悲鳴をあげて、よろめいた。

「……？」

狂四郎に向って、つやは、救いをもとめるように両手をさしのべたが、それなり、膝を折ると、地面に俯伏（うつぶ）した。

頸根（くびね）に、手裏剣が突き刺さっているのが、みとめられた。

「眠狂四郎殿――。その供え米を、喰べられるな。毒米でござる」

斜面をひと跳びに上って来た男が、そう告げて、大股に近づいて来た。

浪士の身装をしていた。無精髭の顔の中で、双眸が底光っている。

「やはり、この娘は、敵のまわし者であったのか」

狂四郎が、呟くと、浪士ていの男は、

「それがし、伊那路を早駆けて、いま、到着いたした。武部仙十郎殿の使令によって、貴公のあとを追うて参った水野家中徳森左源太と申す」

と、名のった。

狂四郎は、ゆっくりと蹲むと、つやを抱き起した。

白く昏れのこった顔を、じっと見まもった狂四郎は、半ばひらいたその口へ、そっと、まだ掌にのせていた白米を、こぼし入れてやった。

それから、屍体を地面へ横たえておいて、やおら立つと、

「わたしを追って来られた用向きを、うかがおうか」

と、促した。

「まことの西城府様のかくれておいであそばす処が、判明いたしたのでござる」

「………」

狂四郎は、どこだ、とも訊ねずに、歩き出した。

「眠狂四郎殿、その場所と申すのは……」

云いかける徳森左源太を、狂四郎は、押えた。

「昨夜の旅籠の隣室にひそんだのは、お主であったな」

「なにを申される！」

「しらばくれるのも、対手によりけりではないかな、徳森左源太氏——」

狂四郎は、濃くなって来た宵闇をすかし視て、云った。

「昨夜、わたしは、勝負は、明日のことにして欲しい、と云った。その場所が、どうやらここであったな」

いつの間にか、足をはこんで、広い空地に身を移していた。

「この娘は、こちらの疑念を裏切って、ただの親切な馬子であった。その無辜の娘を、殺して、おのれを味方だと、わたしに思い込ませようとした卑劣な手段は、許せぬことだ。お主自身、内心では、慙じて居るのではないか」

「…………」

対手は、返辞の代りに、抜刀して身構えた。

「立ち合う前に、きいておこう。お主は、その懐中に、いくら金子を所持して居る？」

「路銀が尽きたか、眠狂四郎！」

「この娘の家には、五人の幼い弟妹が、残っている。お主の所持する金子が、せめてものつぐないになる」

「勝つとは限らぬぞ！ そういう貴公は、いくら所持するのだ？」

「おい！」

狂四郎は、珍しく語気を鋭く烈しいものにした。

「おれは、これまで、どんなに多勢をむこうにまわして闘う場合でも、絶対に勝利をおのがものにしてみせる、という意識を抱かなかった男だ。ところが、いまは、はじめから勝つ、ときめて居る。貴様が、おれに、そうきめさせたのだ。斬りかたも、きめて居る。脳天から、真二つに唐

竹割りにしてくれる！」
云いはなつや、ゆっくりと、無想正宗を、腰から、すべり出させた。

中津川心中

一

中津川。
江戸から八十五里、京へ五十里。
馬籠から十曲峠を越え、落合を過ぎると、美濃に入ったこのあたりは、難所はなくなる。
中津川は、一万二千石遠山美濃守の所領である。苗木城というその城は、足利時代からの由緒を誇り、苗木枯れず遠山に常盤の色あり、と評されている。
家名を興したのは、慶長五年の関ヶ原の合戦であった。
遠山氏は、加藤景廉の子影朝の後胤で、祖先は美濃の遠山に住み、七家に分れ、世に美濃の七遠山と称された。久兵衛友政の代に至って、徳川家に仕えた。天正の末年頃であった。
関ヶ原の役が起るや、友政は、家康がまだ関ヶ原に向わぬさきに、美濃の土民を狩り集めて、大いに上方勢を苦しめた。それより以前、友政は、斎藤道三に追われて、苗木城を失っていたのである。
友政は、その功によって、失っていた本領をとりもどした。爾来、一万二千石の領土は、連綿として受け継がれ、当代美濃守友寿に至っている。所領はきわめて少禄であったが、祖先の地を

数百年の長きにわたって領しているのは、目出度い家運というべきであった。そういう大名は、三百諸侯中きわめてすくなかったのである。

雪模様の寒気きびしい朝、眠狂四郎は、街道をふさぐ中津川藩番所へ向って、ふところ手の姿をはこんでいた。

番所の前に、突き棒を立てた足軽の姿をみとめた地点で、狂四郎は、呼びとめられた。

「卒爾乍ら、眠狂四郎殿とお見受けいたしまする」

声をかけて来たのは、武家娘であった。

面高な、品のいい顔だちで、こうした木曾山中で、由緒ある家門を、累代守って来た家の匂いを、その容姿にしみ込ませているようであった。

「…………」

狂四郎は、黙って、娘を冷たく正視した。

「わたくしは、中津川藩兵法師範役岩城又右衛門のむすめ小玉と申します」

「…………」

「昨夕、江戸表より、至急の使いが、東海道まわりにて、帰着いたし、当藩家中挙げて、御番所をかため、眠狂四郎と申す浪人者を討ちとるようとのお下知がございました。ところが、わたくしの父が、いやしくも兵法師範役たるこの身が在る限り、多勢をもって討ち取ることは、兵法者の誇りが許さず、卑怯(ひきょう)のふるまいが世間にきこえることもはばかりあり、堂々と一騎打ちつかまつりたい、と主張いたし、この儀、ご家老も諒承(りょうしょう)下され、目下、父は、中津川橋ぎわにて、貴方(あなた)様を、お待ちいたして居ります。されど、むすめのわたくしの看るところ、父はすでに還暦を迎え、身体伎倆(ぎりょう)ともに衰えて居り、とうてい、貴方様の敵ではない、と存じます。わたくしは、

昨年秋まで、江戸表のお屋敷にご奉公いたし、貴方様のお噂は、一再ならず耳にいたして居る者でございます。つきましては、お願いの儀は、あの御番所を避けて、間道をお通り下さいますれば、江戸表よりのお下知にさからったことにもならず、父も不名誉の敗北からまぬがれることができると存ずる次第でございます。間道は、わたくしがご案内いたしますれば、何卒おききとどけ下さいますよう、お願い申し上げます」

眠狂四郎は中津川を通過しなかったということにすれば、お目付佐野勘十郎より依頼された遠山家としては、申しひらきが立つ、というわけであった。

「その思案は、そなたの胸ひとつでなされたものであろうか？」

狂四郎は、訊ねた。

「はい。女子だてらのまことにさし出がましい思案でございますが、親を思う子として、これも孝行の手段かと存じます」

けなげな心根、とほめてやるべきであったろうが、狂四郎は、この小玉という娘のおちつきはらった、みじんのみだれもみせぬ、整えた語気と表情に、微かな不快感をさそわれた。

――ただの勝気ではないようだが……。

そう思いつつ、

「こちらが、拒絶する場合も、そなたは、考えたと思うが――」

と、云った。

「拒絶なされた時は、やむを得ませぬ。父の天運を祈るばかりでございます」

「こちらは、噂できかれたであろうごとく、市井無頼の男だ。そなたの操をひきかえにして、父親をたすける手もある」

「そのような申し出をなされた女性(ひと)に、これまで幾人(いくたり)かお会いなされたと存じますが、わたくしは、操をすてる存念など、毛頭持ちませぬ。操をすてるぐらいならば、死をえらびます」

あくまでも小面憎(こづら)いばかりおちつきはらった態度であった。

「…………」

「眠狂四郎様、何卒おききとどけ下さいませ」

小玉は、頭を下げた。

二

狂四郎は、沈黙を置いてから、口をひらいた。

「間道へ、案内してもらう前に、ひとつだけ、訊ねておこう。そなたには、言い交わした男があるかどうか、ということだ」

この質問に対して、小玉は、はじめて、表情をうごかした。微妙な、複雑な色を顔に刷(は)いて、すぐ消し去った瞬間の心の裡(うち)を、狂四郎は、読みとりかねた。

「ございませぬ」

はっきりと否定する娘へ、冴えた眼眸(まなざし)を当てて、

——なにか、かくして居る。

そのことだけは、看て取れた。

「あの——、お願いの儀、ご承知頂けたのでございますね？」

「人を殺傷することには、倦(あ)きて居る。そなたのみが、真実(まこと)とすれば、街道を避けることに、否やはない」

「忝のう存じます」
　その間道は、前の宿の落合まで、一里をひきかえし、宿の入口に架けられた落合橋から、木曾川へ降り、その急流の汀に沿うて、あるいは岩から岩へ跳び、あるいは、屛風を立てたような岩岸と密林の斜面をつなぐ栈道を渡ることになる。
　この岨づたいに行くかげ路は、大久手まで五里余つづく、という。
　地下の者たちも、滅多に通らぬものとみえて、狭くなったところに木を伐り渡してならべた箇処など、これをくくった藤かずらは腐って、狂四郎と小玉が渡った直後、それが切れて、架け木は音たてて、急流へころがり落ちたりした。
　どの栈道も、久しく人を渡らせたことのない無気味なゆれかたをした。
　瀬のわきをひらいた狭路は、山賤がつたったであろう綱にすがらなければならなかった。岩を嚙んで、はねとぶ飛沫は、みるまに、狂四郎と小玉の裾を、濡らした。
　やがて――。
　両岸がせばまり、急流の瀬音がいちだんと高くなり、はね踊る荒浪の上に突き出た畳のような岩が、絶え間なく濡れている箇処に至った。
　先に進んでいた小玉が、その畳岩の上に立った時であった。
「そなた――」
　狂四郎が、呼んだ。
　小玉が向きなおった――刹那、狂四郎の腰から、無想正宗が閃き出た。
　小玉の帯が両断された。
　娘が、帯を切られて、衣裳の前がはだければ、みだれをかくそうとするのは、本能である筈で

あった。まして、勝気な小玉が、その屈辱に堪えられぬ憤りを示すであろうことは、狂四郎も予想していたところであった。

ところが、小玉は、衣裳の前がはだけ、さらに、下着を締めたしごきも両断されて、襦袢も腰巻も、その肌をはなれたにも拘らず、じっと動かなかった。

白いなめらかな、絖に似た胸の隆起が、腹部が、そして下肢があらわにされ乍ら、小玉は、眉宇ひとつ動かそうとせず、じっと、狂四郎を、瞶めかえした。

宛然、この襲撃を蒙ることを、あらかじめ期待でもしていたように、おちつきはらった態度は、奇怪とさえいえた。

「どういうのだ？」

兇刃をふるった狂四郎の方が、眉宇をひそめて、訊ねた。

この娘は只者ではない、と看て、狂四郎は、突如として、この狼藉を働いてみたのである。

みじんもうろたえず、たじろがぬ——それが、反応であった。

「わたくしは、貴方様をさげすみます」

小玉は、云った。

「さげすまれるのは、承知の上でやったことだ、と思ってもらおう。……生娘ならば、羞恥と憤怒のために、色を失う筈だが、平然としているのは、どういうわけか、教えてもらおう」

「それを、わたくしの口から云わせたくて、このような無体なまねをなされたか？」

「この間道を行くことを承知するにあたって、そなたに、言い交わした男はあるか、と問うた。そなたは、居らぬ、とこたえた。その嘘をあばくために、露悪な方法をえらんだまでのことだ」

「…………」

小玉は、わずかに、唇をわななかせたばかりで、無言だった。

「この眠狂四郎を討ち取れ、という指令が、江戸からとどいたことは、事実だろう。また、そなたの父親が、一騎打ちをのぞんで、待っていることも、たしかかも知れぬ。しかし、そなたが、この間道へ、わたしを誘うたのは、父親の一命を救いたい一念であった、というのは、どうやら、くさい。そなたは、ほかに、何かこんたんを抱いているに相違あるまい」

「…………」

「この眠狂四郎という男に就いて、そなたは、風聞に接して居ると云った。それならば、前後に救いをもとめる人影の見あたらぬこの間道を、二人きりで往くことを、おそれぬ道理がない。この眠狂四郎が、女の操を破ることなど、なんとも思わぬ餓狼(がろう)である、という噂を耳にし乍らも、敢えて、行を倶(とも)にしたのは、必ず何かこんたんがあっての上でのことだろう」

「…………」

「そなたは、操をすてるより、死をえらぶ、と云った。はたして、そうか。その覚悟があるなら、岩から流れへ身を投ずるがよい。……できるか？　できまい。いや、はじめから、その覚悟など、して居らぬのではないのか」

三

恰度(ちょうど)、その時であった。

「おーい！　小玉殿っ！」

叫びたてて、かけ路を急いで来る者があった。

若い藩士であった。

桟道を渡って、岩から岩へ跳んだ若い藩士は、小玉のあられもない姿を、間近に眺めて、
「小玉殿っ！」
と、眦を裂いた。
「なんということを！」と、呻くや、狂四郎を睨みつけて、「貴様っ、眠狂四郎という無頼浪人は、おのれか！」
抜刀しざま、青眼につけて、じりじりとつめ寄った。
狂四郎は、薄ら笑って、小玉に、
「おあつらえ向きに、そなたの言い交わした男が、あとを追って来たな」
と、云った。
すると、小玉は、冷やかに、
「言い交わした間柄ではありませぬ。わたくしは、江戸のお殿様より、この藤堂右馬之進殿に、下げ渡された女子です」
と、こたえた。
「小玉殿――、こやつなどに、きかせる話ではないっ！」
藤堂右馬之進は、叫んだ。
「いいえ、右馬之進殿、貴方にも、きいて欲しゅう存じます。……わたくしは、お殿様のお手がつき乍ら、わずか一年で、国許へ送りかえされて、貴方に下げ渡された女子です。わたくしは、お殿様の寵愛をうしなった理由を、貴方に、申し上げませんでした。わたくしよりも、容姿の劣る、頭も悪い女子らが、二年も三年も、寵愛を受けているにも拘らず、わたくしのみが、家臣に下げ渡されたのです。……右馬之進殿、貴方は、その理由をきこうとは、なさいませぬ。自分の

妻にする女子ではありませぬか。なぜ、おききにならないのですか？　ききたくはないのですか？」

いつの間にか、小玉は、その本性をむき出したように、狂おしい陰惨な形相になっていた。

藤堂右馬之進は、狂四郎に向って青眼に構え乍ら、肩を喘(あえ)がせているばかりであった。

「右馬之進殿。申し上げましょう。わたくしは、石女(うまずめ)なのです。生れてまだ一度も、女子としてあるべき月の物を、みて居りませぬ。……粋人であらせられるお殿様の優しい愛撫(あいぶ)を蒙り乍ら、わたくしのからだは、燃えもせず、濡れもせず、石のように終始冷たかったのです。お殿様は、一年我慢あそばして、ついに、わたくしのからだをお見限りになりました。……右馬之進殿、貴方は、まだ女の肌を知らぬ御仁(おひと)です。わたくしを、妻になされても、石女であることにお気づきはなさいますまい。夫婦の営みは、このようなもの、とお思いになり、それなりにすごせるかと存じられます。お殿様も、そういう貴方ゆえ、わたくしをお下げ渡しになったのです。……でも、わたくしは、イヤです！　一生、からだが燃えず、濡れることなく、終るのは、イヤです。この身を、石女でなくするために——女子のよろこびを知るために、わたくしは、異常のてだてを、えらびました。……この眠狂四郎殿に、犯されたならば、あるいは、突然に、この冷たい肌が熱くなりはせぬか、と必死の決意をしたのです。……そうです。右馬之進殿は、この場へ、要らざる出現をなされたことになります。貴方が、馳(は)せつけて来なければ、わたくしは、いま頃、この眠狂四郎殿に犯されて、肌が燃えていたかも知れぬ！」

狂気じみた烈しい口調で、一人しゃべりたてていた小玉が、いっそ、憎悪をこめて、未来の良人(おっと)を睨みつけた時、

「ええいっ！」

逆上した総身の血汐を、闘志にかりたてて、藤堂右馬之進は、狂四郎めがけて、斬りつけた。

瞬間――白刃は、右馬之進の双手からはなれて、宙へ高く飛び、きりきりと舞い乍ら、奔流へ落下して行った。

「斬れっ、くそ！」

右馬之進は、畳岩の上へ、どさっと胡座をかいた。

狂四郎は、小玉を視た。

「ものは、ためしということがある。良人とさだめられたこの御仁と、そなたは、ここで契ってみたらどうだ。刺戟が欲しければ、わたしが検分役をつとめてもよい。場合によっては、二、三手指南をしてもよい。……あいにくだが、わたしの方は、水性の女子を抱きつけて居るので、手間ひまかけて、石女を燃えさせたり、濡れさせたりする面倒を好まぬ」

四

一刻あまりのち、狂四郎は、再び落合から、木曾街道に上って、中津川へ向って歩いていた。

雪片が、舞いはじめていた。

こちらの姿が、番所に近づくと、あわただしく年配の武士が、出て来た。

「眠狂四郎氏とお見受け申す。それがしは、当藩兵法師範役岩城又右衛門。主命によって、貴殿に真剣の試合を、挑み申すぞ！」

云いざま、羽織をすてた。

すでに、革襷をあやどっていた。草履をうしろへ脱ぎすてて、

「いざ、尋常に――」

と、鯉口をきって、身構えた。

狂四郎は、ふところ手のまま、冷然と、岩城又右衛門を眺めて、

「お手前様は、兵法ひとすじに、没頭されて、おのが娘の不幸に就いては、気がつこうともされなかったようだ」

と、あびせた。

「娘の不幸だと？」

「お手前様の娘御が、いまだ月の物をみない石女であった、ということだ」

「けがらわしい雑言は、置けい！　勝負！」

「おのが娘が、生れて一度も月の物をみない、ということが、けがらわしいのか。女にとって、これほど重大なことがあろうか」

「ええい！　申すなっ！」

岩城又右衛門は、抜刀して、大上段にふりかぶるや、鍛えあげた懸声もろとも、撃ち込んで来た。

狂四郎は、右肩紙一重に流しておいて、

「娘と命日を同じにすることもあるまい」

と、独語するように、云った。

「な、なにっ?!」

構えなおした又右衛門は、かっと双眼をひき剝いた。

「大久手あたりで、待って居れば、娘御と、その良人になる筈であった藤堂右馬之進の遺骸が、流れて来るだろう。ことわっておくが、殺したのは、わたしではない。心中だと受け取られるが

よい」

そう云いのこして、狂四郎は、歩き出した。

「ま、まことか、それは？」

又右衛門が、狂四郎の背中へ向って、喚いた。

「嘘をついたところで、何になる」

狂四郎の眼裡（がんり）には、なおその一瞬の光景が、なまなましく、鮮やかに残っていた。

小玉は、狂四郎から、異常の営みをすすめられると、

「右馬之進殿。ここで、夫婦の契りをいたしましょうぞ」

平然として、そう云うと、右馬之進のそばへ寄ったものであった。

と――。

突如、右馬之進は、言葉にならぬ叫びを噴かせると、小玉をひっかかえて、畳岩から、激流めがけて、身を躍らせたのである。

小玉の悲鳴が、宙に、長く、尾をひいて、残った。小玉がはじめて、そして最後に示した女の哀（かな）しさが、それであった。

おのれが歩いて行くところに、さまざまの悲劇が起る。その暗い思い出を、脳裡に刻んでおいて、次の場所へ痩身をはこんで行くのが、眠狂四郎の宿命のようであった。

秘密相談

一

よく晴れた朝であった。
昨日一日、美濃と近江の境をまたいだ中仙道には、雪が降りしきって、交通はとだえていた。
夜が明けてみると、空は一片のかげりもない碧落になっていた。嘘のようであった。陽ざしはあたたかく、白一色の世界を眩しく照らしていた。
関ヶ原から一里の距離にある今須宿はずれの旅籠の二階の出窓に凭っている男は、しかし、その明るい陽光をあび乍ら、陰惨なまでに暗い眼眸を、むかいの古い寺院のたたずまいに置いていた。
眠狂四郎の生命を狙う刺客の一人——明日心剣であった。
佐野勘十郎の指令によって、東海道を早駕籠で駆け通し、熱田から名古屋を過ぎて、昨日この今須に到着したのであった。
予定では、一昨日到着している筈であったが、明日心剣は、大垣城下で、一夜をすごして、昨日の夕刻、この旅籠に入った。
大垣城下での一日が、心剣の表情を、このように暗いものにした。
昨日の夜明け前、目も開けられぬほど舞い狂う雪の中を、心剣は、ひそかに大垣城郭内に入り、城代家老邸を訪ねたのであった。

城代家老戸田三郎右衛門は、藩主戸田氏庸の母方の伯父にあたり、名城代の評判高い人物であった。

天明の飢饉以来、百姓一揆や権力争い騒動の起らぬ藩は、稀であった。大垣藩は、その稀な藩のひとつであった。

戸田三郎右衛門の治政の力が、あずかって大きかった為である。

大垣藩は、始祖氏鉄が抜群の治政を示し、その子氏信が、父が為した業蹟を成文化して、これを、戸田家中の遵守すべき基本法典として遺したのが、後代まで役に立っているのであった。

『定帳』という。

「記し置く定帳の趣、月番中、断絶なく披見いたし、毛頭相違あるべからず。この書面の外、仕置きの儀これある節は、家老組頭、月番相談の上言上を遂げ、相究め、申し付くべし。則ちその旨書き載すべし。尤も、諸役人中、定めの通り、違背仕らざるように申し渡すべきものなり」

その冒頭にかかげられた規定が、この『定帳』の特徴を示している。

いわば、藩主あるいは家老が独裁せず、『定帳』を家中一統が心得ていて、合議の上で、政治を為す藩規であった。

歴代の藩主と家臣たちは、始祖氏鉄の遺志を継承し、『定帳』を大切に守って来た。

そして、当代に至って、名城代戸田三郎右衛門を得て、大垣藩は、施政安泰であった。なお、大垣藩は、自領のほか、天領（幕府領地）を七万石も預かっていた。

明日心剣が、この名城代の屋敷を訪れたのは、十五年ぶりであった。

夜が明けるには、まだ半刻あまりある頃合、心剣は、その屋敷の裏門の前に立って、十五年前

の記憶をよみがえらせたことだった。

――あの夜は、中秋の名月が、空にあったな。

二度と再び、おとずれぬことを、かたく誓って、この裏門から抜け出した心剣であった。

その誓いを破らねばならぬ苦痛が、しばらく、心剣を、雪の中に佇立(ちょりつ)させた。

この大垣藩の当主戸田氏庸は、今年十五歳になる。まぎれもなく、この明日心剣の実子なのであった。

この秘密を知る者は、城代戸田三郎右衛門と、常につき添っている御側役志賀多兵衛と、そして一人の老女のみであった。

いや、心剣は、昨秋までは、そう思っていた。

ところが、この三人以外に、秘密を知る者がいたのである。お目付佐野勘十郎であった。

佐野勘十郎から、そのことを云われた時、心剣は、目眩(めくら)むほどの衝撃を受けた。

――何者が、秘密を、お目付に教えたのか？

その日以来、この疑問は、心剣の脳裡から、片刻もはなれたことはなかった。

心剣が、中仙道を上って来る眠狂四郎を討ちとるべく、東海道から先廻りして来て、今須宿に到着する途次、十五年前の誓いを破って、城代戸田三郎右衛門を訪れる決意をしたのは、そのためであった。

二

心剣は、塀(へい)をのりこえて、屋敷内に忍び入り、まっすぐに、主人の寝所を、訪れたのであった。

廊下にうずくまると、押し殺した声音で、障子ごしに、

「ご城代――」
と、呼びかけ、起き上った気配に、
「明日心剣、御意を得たく存じます」
と、申し入れた。
「入るがよい」
許されて、障子を開けて入った心剣は、
「是非とも、おたずね申し上げたき儀があり、誓いを破って、来訪つかまつりました」
と、闇の中で、頭を下げた。
三郎右衛門は、消えていた有明行燈に火を入れた。
闇を四隅へ押しやる明りの中で、十万石の城代家老と孤独な兵法者は、十五年ぶりで、互いの面貌を、凝視し合った。
早い流れの歳月が、おのおのの面貌に、おのが生きている世界の色を、さらに濃く加えていることを、三郎右衛門も心剣も、みとめ合った。
「用向きをうかがおう」
三郎右衛門は、冷たい態度で、促した。
「それがしは、目下、公儀お目付佐野勘十郎に、やとわれて居り申す」
「ふむ」
「佐野勘十郎は、先頃まで、京都所司代の下にて、ごく軽い役職に就いて居った人物にて、これが、異数の抜擢を受けて、お目付となり、西城府様の信頼を一身に負い、いまや、上司の若年寄さえも、佐野勘十郎の機嫌とりをして居るほどの、隠然たる権力を握って居り申す」

「佐野勘十郎というお目付の噂は、わしの耳にも、きこえて居る」
「このお目付が、……気づいて居り申す」
心剣は、重い苦しいものを押し出すように、告げた。
「気づいて居る?!」
三郎右衛門の表情が、変った。
「あのことを、気づいて居ると?」
「お目付は、それがしに、ひとつの必死の指令を下し、それをはたさぬ時は、それがしの息子の生命も喪われることになろう、と宣告いたしたのでござる」
「………」
三郎右衛門の眉宇が、一瞬、烈しく痙攣した。
当主氏庸は、先主氏教の嫡子として、公儀にとどけてある。それが、もし、いつわりと判れば、当然、氏庸は、大垣藩主の座からしりぞかねばならぬ。しりぞくだけではなく、自決して相果てねばならぬ。大垣藩そのものも、改易の運命に陥るおそれがある。
それゆえにこそ、今日まで、この秘密は、厳守されて来たのであった。
「何者の口からもれて、お目付の耳に入りましたか――ご城代に、お心当りが、ありましょうか?」
「いや、皆目――」
三郎右衛門は、かぶりを振った。
沈黙が来た。
この秘密が洩れるであろうという危懼を、三郎右衛門が、これまで一度も、抱かなかった次第

ではない。
しかし、およそ考え及ぶ限りに於て、秘密は、厳守された筈である。
危懼は、その当初にあり、その時、秘密を知る者三人を、三郎右衛門は、心剣に斬らせている。
その三人は、いずれも、裏切るような者たちではなかったが、万が一という安心のために、三郎右衛門は、敢えて、心剣に、斬らせたのであった。
重苦しい沈黙の中で、三郎右衛門の脳裡は、その当初からの経緯を、ひとつひとつよみがえらせていた。
十七年前のことであった。
前主氏教は、その年正月、外桜田馬場で、親しい大名ら数名と、乗馬始めをした際、馬が突如として狂い出し、ふりおとされて、したたか、背中に打撃を蒙った。
それなり、氏教は、一年余を、牀の中ですごした。
ようやく、起き上れるようになったが、すでに、氏教は、男子の資格を喪失している自分を知った。
その時、氏教は、まだ夫婦の仲に、子を成していなかった。氏教自身、松平右近将監（しょうげん）の次男で、養子として、戸田家に入った大名であった。
当時、慣例として、大名旗本は、二代つづいて養子を迎えることは、公儀の許可を得ることが甚（はなは）だむつかしかった。
封建の時世であった。相続という事柄が、最も重大視されていた。父が隠居して、その実子があとを継ぐのを、「家督相続」といい、これは、実子が不具者病弱者でない限りは、なんの問題もないことであった。父の死亡による場合を、「跡目相続」という。これは、さまざまの御家騒

動をまねいた。相続者は、嫡出長子として届けられている者であったが、その嫡子が病弱であった場合、妾腹の子の方が優秀であった場合、また妾腹の子がすでに元服をすまして居り、正室の子がまだ幼なかった場合など、種々の事情によって、騒動が起り、ついには、その藩が改易になる例もあった。

戸田氏教は、まだ三十歳を越えたばかりの若さであった。養子を迎える年齢ではなかった。養子を迎えても、公儀の許可が下りる筈がなかった。まして、二代養子では、その相続は殆ど絶望であった。

氏教は、是非とも、実子をもうけなければならない大名であった。しかし、その身体は、男子の資格を喪失してしまったのである。のみならず、氏教は、自分の寿命があと数年もないことを、さとっていた。

幾月かを、悶々として、一人悩みつづけた氏教は、やがて、ひとつの非常の決意をして、城代家老戸田三郎右衛門を、国許から呼んだのであった。

女性を抱くことの不可能な身となったことを打明けた氏教は、

「しかし、わしは、子をつくらねばならぬ」

と、三郎右衛門に、云った。

「どうすると仰せられますので？」

「ひそかに、男をえらんで、奥を懐妊させる。この手段しかない、とわしは、思いきめた」

良人自らの意志で、妻を密通させて、子をつくろうと決意した不幸な大名は、そう決意するまでの苦悩を経て、むしろ、静かな様子を示した。

三郎右衛門は、即座には賛成しかねた。主君に三思を促し、自分も数日の猶予を乞うた。

その挙句、三郎右衛門は、氏教の決意に、うなずかざるを得なかった。

三郎右衛門が、

「しかし、えらぶ対手に、人を得ませぬと——」

と云うと、氏教は、

「すでに、きめてある」とこたえた。

氏教は、まだ実家松平右近将監家の部屋住みであった頃、兵法ひとすじに身をうち込み、柳生道場で、その席次を上げていた。たまたま、貧しい御家人の次男で、常に氏教より一枚上を、席次を上って行く男がいた。

篠原雄次郎といい、寡黙で、朋輩との交遊も避け、孤独を愛しているかに思われる青年であった。氏教は、篠原雄次郎によって、剣は、天稟がそなわらなければ、努力だけではついに一流を樹て難い、と知らされた。篠原雄次郎の剣は、まさしく、天才の凄味があった。

氏教は、篠原雄次郎に、心服し、義兄として敬事することを乞うた。篠原雄次郎は、その願いをしりぞけたが、氏教は、自分の方で勝手にそうすることにして、そのまじわりは、氏教が、戸田家に養子に入るまで、三年余つづいたのであった。

氏教は、篠原雄次郎を、妻の密通の対手にえらんだのである。

三

篠原雄次郎は、その頃、江戸を出て、諸国を流浪していた。戸田三郎右衛門が、篠原雄次郎の行方をつきとめるには、一月余かかった。

篠原雄次郎は、備前長船の刀工の家に、居候して、刀を打ち上げることに熱中していた。

三郎右衛門は、その刀工の家で、三昼夜、篠原雄次郎をくどいて、ついに、承諾させることに

成功した。

篠原雄次郎を、江戸へともなってから、その事は、細心の注意をはらって、厳秘裡にはこばれた。

氏教の妻は、病気療養の名目で、上屋敷から、下屋敷に移り、さらに、良人の恢復を合わせての治癒祈願のために、戸田家菩提所である日暮里の宝林寺に、十日間おこもりをした。

この十日間の夜毎、氏教の妻は、篠原雄次郎の腕の中で、すごしたのであった。

翌年春、戸田家には、目出度く、嫡子が誕生した。

氏教が、逝去したのは、それから二年の後であった。

いま――。

三郎右衛門が、目蓋を閉じて、往時の経緯をこまかく辿って想起してみても、この秘密が絶対に露見する筈がないのであった。

夫人が、日暮里の宝林寺におこもりした十日間、終始かたわらにつき添うたのは、つかさという老女ただ一人であった。侍女は、一人もともなわなかった。

おこもり堂は、本堂、方丈から遠くはなれていたし、住職はじめ納所も小僧も、一切近づかなかった。祈願は、昼間、夫人が、本堂に身をはこんで、なされたのである。

篠原雄次郎は、亥刻（午後十時）に、忍んで来て、寅刻（午前四時）には、立去った。兵法者である篠原雄次郎は、他人に見とがめられるような失敗はしなかった。

その密通は、しんの闇の中で営まれ、ついに篠原雄次郎は、夫人の容子を視ることなくおわった。

無言裡に、流浪の兵法者は、十万石の大名の奥方の褥にすべり入って、寝召の前をひらかせ、

丹念な愛撫を与えてから、その体内に精子を送り込んでおいて、闇の中を去ったのである。

老女つかさだけが、襖をへだてて、そのひそやかな物音をきいていた。

篠原雄次郎は、その奇怪な任務を了えてから、すぐに、江戸を退去していた。まっすぐに、大垣へ来て、戸田三郎右衛門の依頼によって、三人の家中を、斬った。

その三人とは、三郎右衛門のひそかな指令にしたがって、篠原雄次郎の行方を探索した藩士らであった。

三人が亡きのち、篠原雄次郎という存在を知る者は、家中には一人もいなかった。

しかもなお、三郎右衛門は、篠原雄次郎に、以後変名を用いてくれるようにたのんだのであった。

篠原雄次郎は、明日心剣という仮名を使って、この十五年間をすごして来た。

大垣藩当主戸田氏庸が、篠原雄次郎の実子であることなど、露見する道理がないのであった。

にも拘らず、お目付佐野勘十郎は、その秘密を知っていた。

およそ半刻にも近い沈黙のはてに、大垣藩城代家老の口から、洩らされたのは、深い歎息だけであった。

それを見まもって、心剣は、

「ご城代に、お心当りがないのであれば、やむを得ますまい。それがしが、お目付を斬って、その口をふさぐよりほかに、すべはないと存じます」

と、云った。

「お目付が知った、ということは、お目付に、それを告げた者がいる、ということに相成る」

「その者も、斬り申す」

「それが何者か、判明いたせば――ということだ。……しかし、それより前に、貴公は、お目付の必死の指令とやらを、果すのであろう？」

「左様、眠狂四郎という男を、斬らねばなりません」

「強いのかな、その男は？」

「その魔剣は、すでに、かぞえきれぬほど、手練者を、あの世に送って居り申す」

「貴公には、勝つ自信が、あるのかな？」

三郎右衛門は、じっと、心剣を、凝視した。

「一度は、立合って、それがしの方が、差料を、鍔もとから両断されて、敗れて居り申すが、その後、渠が使う円月殺法を破る工夫が成って居り申す」

「それならよいが、……貴公に生きていてもらわねば、お目付を斬れる者は、当藩には、一人も居らぬ」

そう云う三郎右衛門の語気は、重く沈んでいた。

この十五年間、幼い当主の姿を眺めている折とか、夜半の目覚めなどに、ふっと、

――もし万が一、秘密が露見するようなことがあったならば……？

と、恐怖をおぼえたことが、一度や二度ではなかった三郎右衛門であった。

そのおそろしい時が、いま、襲って来たのである。

「明日より早速、ひそかに調査をいたすが、貴公の方は、一日も早く、お目付を討ち果して下さるよう、お願いいたす」

三郎右衛門は、深く頭を下げた。

今朝、今須宿はずれの旅籠の二階の出窓に凭った心剣は、むかいの古い寺院の真白く化粧した景色を眺めやり乍ら、

――数百年を経て居るに相違あるまいが、あの古びた山門が、毎年、これだけの雪をのせつつも、よく堪えているものだ。

そのことを想っていた。

街道の雪を踏んで、旅商人ていの男が、東の坂から、急ぎ足で、宿へ上って来た。

この旅籠の前に来て、笠をあげて、仰ぐと、心剣にだけ判る合図をしておいて、さっさと、行き過ぎた。

眠狂四郎が、関ヶ原にさしかかったことを、告げたのである。

心剣は、合点してみせた。

――まず、あの強敵に、勝たねばならぬのだ！

おのれに云いきかせ乍らも、心剣の脳裡には、眠狂四郎の姿が、むしろ、なつかしいものに、想い泛んでいた。

まことの敵は、眠狂四郎であるよりも、佐野勘十郎である、という意識の湧く皮肉なおのが立場を、心剣は、自嘲する。

――これが、宿運というものであろう。

心剣は、床の間から差料を把ると、ゆっくりと、部屋を出て、階段を降りて行った。

関ヶ原決闘

一

その日――。

眠狂四郎が、今須宿から二里余へだてた関ヶ原てまえの垂井宿に泊った時、連れがあった。

沓掛宿で、お茶壺奉行専用の女郎をつとめていた真田六連銭組残党のおりょうであった。

おりょうは、真田黒丸が、その生命とひきかえに手に入れた五百両を、一族の住む戸倉へ持ち帰ってから、すぐに、狂四郎のあとを追いかけて来たのであった。

追い着いたのは、垂井宿の南宮の大鳥居の前であった。

わが名を呼ばれてふりかえった狂四郎は、浅間太夫という女郎姿しか見ていない目には、とっさに、その素顔が、見知らぬ者としか映らなかった。

雪片の舞う中で、その容子は、華やかに装うた姿よりも、はるかに美しかった。

「ご迷惑と存じますが、京都までのお供をさせて下さいませ」

「わたしに、据膳を食わせるために、追って来たのであれば、この垂井宿の旅籠で、一夜を添い臥せば、足りるが……」

狂四郎は、冷やかに、云った。

沓掛宿で別れぎわに、狂四郎は、おりょうに、云いのこしている。

「据膳を食わせるのなら、その女郎姿では、返礼になるまい。戸倉へ帰って、泥水のよごれをお

としてから、後日、わたしの前へ現われてもらおう」

おりょうは、その言葉を、正直に受けてとって、あとを追って来たもの、と思われたのである。

「いいえ、お供をしたいのは、そればかりではございませぬ」

おりょうは、かぶりを振った。

狂四郎は、みなまできかずに、手頃の旅籠に、足を向けた。

部屋に入って、酒をはこばせてから、狂四郎は、

「そなたは、女郎になって、幾人の客に身をまかせた?」

残忍な問いを投げた。

「わたしは、お茶壺奉行殿の伽をするために、買われた女子でございました。それゆえ、他の女郎衆のように、夜毎客を取ることは、いたしませなんだ。それでも、一月に二度か三度、ご公儀のお役人が、お泊りになる時、伽に出されましたゆえ、このからだは、もう、百人以上の男子の手によって、けがされて居ります」

「…………」

「よごれはてたこのからだを、お抱きになるのは、おいやでございますか?」

怯ず怯ずと瞶められて、狂四郎は、

「それほど、多くの男に抱かれ乍ら、泥水にそまって居らぬその清らかさが、こちらには、ふしぎに思えるのだ。……どういうのだ?」

と、訊ねた。

どう眺めても、その肌には、崩れた翳はなかったのである。このような女には、はじめて接することであった。

おりょうは、俯向いて、すぐには、こたえなかった。

「女の肌は、その心根次第で、泥水につけられても、花の色を褪せさせぬようにすることが、できるという例か」

狂四郎は、呟きすてた。

おりょうは、顔を擡げて、盃を口にはこぶ狂四郎を、視た。

「わたしは、戸倉へ戻って、貴方様のことを、一族に告げました。その時、故老の一人が、貴方様のご道中を、うらなってくれて、京都まで行き着けぬ大凶が出て居るゆえ、すぐに、あとを追うがよい、と命じられたのでございます」

「わたしの行手に、吉と出る八卦はない。うらなえば、常に、大凶と出る」

「でも、大凶と出た御仁をすててはおけませぬゆえ、わたしは、とるものもとりあえず、おあとを慕うて参りました」

「そなたが、わたしの連れになれば、大凶は大吉と変る、とでもいうのか！」

「いえ、そんな……、ただ、わたしごとき者でも、いささかなりと、お役に立つことがあろうか、と存じまして——」

——このむすめが、おれに助力するというのか。

狂四郎は、苦笑した。

二

一刻の後、狂四郎とおりょうは、ひとつ牀の中にいた。

しずかに抱き寄せて、口を唇に落した瞬間、狂四郎は、その白いしなやかな細いからだが、微

かに顫(ふる)えているのをさとった。

沓掛宿で、抱いた時、その肢体は、こちらの弄玩(ろうがん)にまかせつつも、胸で呼吸(いき)づく血汐を、拒否の意志で、凍らせていたものであった。

いまは、自ら進んで、血汐を燃やしている筈であった。この顫えは、官能の悦びが起したものなのか。

――いや、ちがう！

狂四郎は、羞恥(しゅうち)が起したもの、と直感した。

百人以上の男の手にゆだねたからだが、自ら進んでまかせる時、羞恥の顫えを起すものであろうか。

狂四郎は、片手を、湯文字の蔭(かげ)へ、さぐり入れた。

沓掛宿に於ても、やわらかな嫩草(わかくさ)の萌(も)えたふくよかな白土を、指頭で掘りかかり、花の芽を採るに似た五指のうごめきを、しばらくつづけたものだった。そして、しめりをおびて来た土壌に、その一指が深くささった瞬間、指頭からしびれが起り、狂四郎は、意識を絶やしたのであった。

いま――。

嫩草の下の土壌へ、指をふれさせた狂四郎は、はっとなった。

沓掛宿で弄(もてあそ)んだそれとは、あきらかに異なった秘処が、そこに、在った。

――これは、けがれては居らぬ！

「そなた――」

狂四郎は、ひしと目蓋を閉ざしているおりょうの貌(かお)を、凝視して、云った。

「まだ、生娘だな」

「は、はい――」

おりょうは、うなずいた。

真田六連銭組は、忍者隊であった。その忍びの術は、戸倉山中にこもってからも、累代相伝えられているに相違なかった。

おりょうもまた、女子としての忍びの術を学んだに相違ない。

女子の武器は、その秘処である。操を与える――と錯覚を起させる忍びの術があることを、狂四郎も耳にしたことがあった。

おりょうは、女郎となって、お茶壺奉行をはじめ、百人以上の男に、肌身を許した、と云ったが、実は、許してはいなかったのである。

客どもが弄び、容れたのは、にせものであったのだ。

この狂四郎自身、沓掛宿で、弄び乍ら、それが、にせものであることには、全く気がつかなかったのである。

「そなたの肌が、ういういしく清らかな理由が、ようやく納得できた」

狂四郎が、云うと、おりょうは、顔を胸へうずめて来た。

はじめて、まことの処女を、男に与えようとする羞恥が、さらに烈しく、腕も胸も脚も、瘧(わらわやみ)のように顫わせていた。

朝、食膳でさしむかった時、狂四郎は、

「そなたの大切なものを、貰っただけで、こちらは、柄にもなく、いい思い出をつくったと、心があたたまっている。そなたは、ここから、戸倉へ帰るがよい」

と、すすめた。
おりょうは、俯向いて返辞をしなかった。
「わたしについて来た女は、これまで、すべて、不幸な最期を遂げている。例外はない。この眠狂四郎は、そういう男だ、と思ってもらおう。……せっかく、あたたまった心で、旅をつづけて行こうとするわたしに、この思い出を血でけがさせたくなければ、ここから、ひきかえしてもらおう」
「…………」
「たのんで居るのだ。ききわけてもらわねばならぬ」
「…………」
「たのむ！」
狂四郎は、頭を下げた。
「はい」
おりょうは、ようやく、うなずいた。
「では――」
狂四郎は、無想正宗を携げて、立ち上った。
おりょうは、何か云おうとしたが、言葉が口から出なかった。
街道上には、朝陽が満ちていた。昨夜の吹雪は、どこへ去ったのか、碧落には一片の雲影もとどめていなかった。
狂四郎は、しかし、歩き出し乍ら、この純白の街道上に、鮮血が散り撒かれる光景を、ふっと、想像した。

この男の直感力は、自然のいとなみが美しく化粧した景色とは、かかわりなく、鋭く働くように修練されていた。

——関ヶ原あたりで、相当の手練者が、待ち伏せているようだ。

旅籠の前から、じっと見送るおりょうの眼眸を、背中に感じ乍ら、狂四郎は、振りかえろうともしなかった。

三

垂井から関ヶ原までは、わずか一里余の距離であった。

関ヶ原宿の中に、八幡宮の祠があり、その側から、若狭・越前へかよう北国脇街道が、岐れる。

岐れる辻の路傍に、一基の自然石が据えられ、後西院の一首が、刻まれてあった。

　おきて行く名残ぞむすぶ草枕
　　野がみの里のかすむ契に

狂四郎は、その歌へ一瞥をくれて、行き過ぎ乍ら、垂井へのこして来たおりょうのことを、想った。

おりょうを抱いたことに、微かな悔いがあった。今日をしか生きていない男にとって、昨夜のことを悔むのは、感傷に似て、自嘲がともなうことであった。

関ヶ原宿をそのまま通り過ぎて、不破関の古蹟の手前を流れる藤川の橋袂に来た時、狂四郎は、はじめて、足を停めた。

橋を渡ると、街道は、松のしげる崖にはさまれて、視界をふさぐ。

深い木立の蔭に、伏兵がある、と狂四郎は、予感が働いたのである。

しかし、すぐに、狂四郎は、橋を渡りはじめた。藤川の雪解け水は、流れが早く、音が高かった。伏兵は、この音を利用して気配を消す。

橋を渡りきったところで、狂四郎は、再び足を停めた。

その瞬間であった。

行手の宙を、左方の木立の中からななめに、白く煌くものが掠め過ぎ、右方の木立の中へ吸い込まれた。と思うや、呻きと銃声が、同時に起った。

狂四郎は、右方の崖から、すべり落ちる者を、視た。

猟師姿であったが、鉄砲を摑んだその手を視て、狂四郎は、隠密とさとった。

その屍体をまたぎ越えた狂四郎は、左方の木立から姿を現わした助勢者を、仰いだ。

おりょうであった。

いつの間にか先まわりして、狂四郎を待ち伏せる敵が、そこにひそむのを、さがし当てて、手裏剣を放ったのである。

おりょうは、狂四郎に一礼すると、さっと身をひるがえして、木立の中へ消えた。垂井で、別れの挨拶をした狂四郎は、もはや、自分を連れと考えてくれてはいない、と思いきめた様子であった。

もとより、おりょうには、呼びもどされる期待があったろうが、狂四郎は、そうしなかった。

不破関の古蹟は、坂をのぼりきったところに、高い石垣のみをとどめていた。

その石垣わきに、狂四郎の強敵が、佇立していた。

「お主か――」

狂四郎は、微笑した。

明日心剣も、微笑をかえした。
「やあ——、愈々貴公と雌雄を決する秋を迎え申したな」
「この眠狂四郎を討ちすてる業の工夫が、成った、という次第か」
「成り申した。成り申したが……、しかし、勝負というものは、その一瞬裡に、おのれ自身も測らざる秘剣を生ずるものゆえ、必ずしも、それがしの工夫成った業が、勝利を得るとは決っては居り申さぬ」
「…………」
「貴公という敵に会うことができたのは、兵法者として無上の果報であった、とだけ耳に入れておき申す」
そう云いおいてから、心剣は、腰の差料を、鞘ごと抜いて、右手に持ちかえた。
「あ——、それから、坂下にて、貴公を卑怯の手段で、撃ちとろうと企てた者がいたようでござるが、これは、それがしの全くかかわり知らなかったことでござる。念のため、おことわりしておく」
この場所の周囲には、伏勢はいない、と心剣は、ことわっておいて、左手で柄を握り、右手で鞘を逆握りにして、すらりと、白刃を、陽光に煌かせた。
その鞘が、ただの鞘ではなく、鋼鉄造りで、白刃と同じ威力をそなえた武器となっていることを、狂四郎は、すでに、知っていた。
押上村の古刹竜勝寺境内で、はじめて、対峙した時、心剣は、やはり鞘ごと腰から抜いたが、そのまま、白刃を鞘の内にして、胸前に横たえ、右半身になって、居合の修業によって独特の抜きつけを放つ構えを示したものであった。

ところが、今日は、白刃と鞘をはなしてみせた。のみならず、白刃の方を、左手に持ったのである。

狂四郎は、まだ、無想正宗を抜かずに、じっと、心剣が、どのような構えをとるか、待ち受けた。

「では——参る！」

心剣は、左手で持った白刃を、こぶしを額にあてて、頭上へ直立させ、鞘の方を青眼にかまえた。

抜刀術をすてた、これは、なんの奇異もない正法であった。

狂四郎は、これに対して、いつものごとく、無想正宗を、鞘からすべらせると、切先を地摺(じず)りに下げて、円月殺法の緒(ちょ)につけた。

それなり、絵に入ったように、微動もせぬ固着状態を保つ幾分間かを置いて、無想正宗が、きわめて、自然に、宙に円を描きはじめた。と同時に、青眼に構えられた鉄鞘もまた、ゆるやかに、左右に揺れはじめた。

揺れる鉄鞘は、無想正宗が、ゆっくりと挙げられるにつれて、その振幅を大きくした。

剣というものは、それを宙に停止させると、時刻が移るにつれて、居着くおそれがある。

居着かぬようにするためには、絶えず、切先を動かしていなければならぬ。

それが、近代の剣法であった。

狂四郎の円月殺法は、敵の如何(いか)なる意外の訊業にも応じられるように、切先で大きく宙に円を描く。切先を小きざみに動かして居着かぬようにする理(ことわり)を、さらに、拡大したものといえる。

これに対して、心剣は、その鉄鞘を、左右に揺れさせ、無想正宗が円を描くのに合わせて、そ

の振幅を次第に大きくすることによって、狂四郎の一撃必殺の殺法を封じようとしたのである。

ついに――。

狂四郎は、完全に円を描きおわった。

その時、心剣もまた、鉄鞘の振幅を徐々に小さなものにして、狂四郎が円を描きおわるや、おのれも、鉄鞘をピタリと青眼にもどしていた。

心剣の口辺に、薄ら笑(え)みが刻まれた。狂四郎は、無表情であった。

「いかに！」

心剣の口から、その一語が放たれた。

それに対して、狂四郎は、再び、無想正宗をして、宙をまるく截(き)らせはじめた。のみならず、目に見えぬ程度に、じりじりと前へ出て来た。

心剣の眉間(みけん)が、険しい色を刷いた。

両者の対峙の距離は、完全に間合を見切っていた。にも拘らず、狂四郎は、その距離をじりじりと詰めて来たのである。円を描くのと、前進を同時に、為したのである。

業の上からは、無謀きわまる捨身であった。

当然、心剣は、左手で頭上に直立させた白刃を、撃ち下ろすべきであったが、その瞬間に於て、円を描く無想正宗に如何なる秘技がひそんでいるか、測りがたい疑懼(ぎく)が起った。

そのために、思わず、すっと退(さが)った。

刹那――狂四郎は、無想正宗を、宙に停めた。

それは、必ずしも、誘いではなかった。

しかし、その一瞬、汐合はきわまっていた。

心剣は、鉄鞘を突き出すとともに、白刃を振りおろした。

鏘然と刃金が鳴った——とみるや、心剣の剣は、空高くはねとんだ。

心剣は、それなり、鉄鞘を突き出した残心の構えのまま、動かなかったが、狂四郎の方は、よろよろとよろめいて、傍の石垣に、痩身を凭りかけた。

身を凭りかけて、狂四郎は、冴えきった眼眸を、心剣に当てた。

心剣は、大きく双眼を瞠いて、別の方角を、睨み据えていた。

ものの十も数えるほどのおそろしい静寂の時間が過ぎた。

まず——。

突き出された鉄鞘が、ゆっくりと下ろされた。次いで、心剣の唇が、わななき、

「敗れた」

微かな独語が、もらされた。

摚、と地面に仆れる音をきいた時、狂四郎は、目蓋を閉じていた。

鉄鞘で突かれた胸の痛みが全身をつらぬき、それに堪えるためであった。

狂四郎は、肋骨が折れているのを、感じた。

「眠様！……大丈夫でございますか？」

おりょうの声を、遠いものにきいた。

——生きている！

激痛の胸の裡で、狂四郎は、呟いた。

「眠様っ！」

おりょうに、からだをささえられ乍ら、狂四郎は、云った。

「その者の、懐中を、みて、もらおう。……遺書が、あるような、気がする」

二つの遺書

一

屍に似た仰臥を、すでに二昼夜つづけている眠狂四郎は、意識を喪ったまま、過去の世界に在った。

遠く過ぎ去った世界は、ちょうど、春が闌けていた。

野には、一面に菜の花が咲いていた。その野の中をひとすじ、まっすぐに通じている道を、一人の女性が、しずかに歩いて行く。

行手には、ひくい丘陵がなだらかな斜面をひろげていた。春の花は、ここにも、美しい彩りを、明るい陽ざしに浮かせて、蝶を招んで、舞わせている。

しかし、その斜面をのぼりはじめた女性の貌も足どりも、おだやかな宙にいっぱいに匂う花の香に堪えられぬほど、病み疲れていた。

襲って来る眩暈を怺えるために、いくども、足を停めて、喘ぎを整えていた。

遠くで鳴く牛の声も、空でさえずるひばりの音も、その耳に入らぬようであった。

にも拘らず、熱で潤んだ眸子は、ひとつの決意を、つよい光にしていた。

良人に看取られつつ、この世を去るのを、唯一のねがいにしていたこの女性は、このねがいをすてることが、眠狂四郎の妻たるにふさわしい最期、と思いきめたのだ。

その決意が、頂上まで、倒れずに登る力を、彼女に与えている。

狂四郎は、そのあわれな、いたましい姿を、じっと見まもっていた。

……いつの間にか。

狂四郎は、妻を背負うて、一歩一歩、丘陵を登っていた。

おのれ自身も、全身いたるところに重傷(ふかで)を負うているにも拘らず、妻を背負うて登ることに、なんの苦しさもなかった。

やがて、頂上へ行き着いた。

春の空に、樹冠をひろげる櫨(はじ)の巨木の根かたへ、そっと、妻のからだをおろして、はじめて、狂四郎は、ふかい呼吸をひとつした。

それから、妻の白蠟(はくろう)の細おもてへ、視線を落した。

息は、すでに、絶えていた。

死顔を、見成(みまも)るうちに、狂四郎は、意識を甦(よみがえ)らせ、過去の世界から、現実の世界に、還った。

目蓋をひらくと、おりょうの顔が、そこに在った。

「お目ざめなさいました！」

おりょうは、悦びを笑顔にし、声をはずませた。

「やはり……、そなたの助力が、わたしには、必要だったらしい。肋骨が折れていたようだが、その手当も、そなたが、してくれたのか？」

「いえ、一族の者が、案じて、三人ばかり、あとから、来て呉(く)れて、その一人が、手当をいたしました。肋骨が一本、肺に刺さって居りました」

狂四郎は、視線をあたりへまわしてみた。

旅籠（はたご）ではなく、ただの旧（ふる）い家のようであった。
「わたしども一族と親しい者のすまいでございます。心置きなく、おやすみなさいませ」
「わたしが、斬った者のほかに、まだ、敵はいたと思うが……？」
狂四郎は、訊（たず）ねた。
「一人が、貴方様の手当をし、あとの二人が、ふせぎました。敵は、六人でございましたが、ことごとく、討ち果しました」
「二人の方は――？」
「相果てました」
「わたしの手当をしてくれた御仁は？」
「一日を置いて、また敵三人が、この家を襲って参り……、その三人と相討ちになって、もうこの世には在りませぬ」
「…………」
狂四郎は、忍者と公儀隠密との悽絶（せいぜつ）な闘いを、想像した。
真田六連銭組残党は、五百両を得るために、あまりにも大きな犠牲をはらったことになる。
――おれの生命（いのち）を救うために、見知らぬ男が三人までも、死闘して、果てたのか。
過去に、未（いま）だ曾（かつ）て、このような助勢を得たことは、一度もなかった狂四郎である。
こちらとしては、真田黒丸が、一身をなげうって得た五百両を、このおりょうに届けてやったに過ぎぬのだ。たったそれだけの好意に対して、このような大きな犠牲をはらってまで、尽してくれた素朴な心情は、真田幸村によってつちかわれた仁義の精神を、戸倉山中で、いささかもそこなわずに、父子相伝えて来ているからであろう。

狂四郎は、この感動を、言葉にすることができぬままに、仰臥していた。

長い沈黙が、あった。

二

「眠様――」

おりょうが、再び昏睡（こんすい）状態に陥ちたのであろうか、と心遣い乍（なが）ら、そっと呼んだ。

「――む」

「おうかがいいたしたいことがございます」

「なんであろうか？」

「貴方様は、夢の中で、幾度も、くりかえして、さやか、という名を、お呼びになりました」

「…………」

「それから、こうも申されました。そなたの母親は、そなたを、生みたかったのだ、と」

「…………」

「どういう意味なのか、わたしは、判りませぬまま、心にのこりました。おさしつかえなければ、おきかせ頂けますまいか？」

「…………」

「貴方様が、心の奥底に秘めておいでになったことが、夢の中で、お口に出たのだと存じますが……、わたしは、なぜか、おうかがいせぬままに、お別れしては、この後、どうしておうかがいしなかったのであろう、と悔いつづけるような気がいたします。……おさしつかえなければ、おきかせ頂きとう存じます」

「…………」

狂四郎は、なお、しばらく、沈黙を守った。

やがて、ぽつりと、もらした。

「わたしには、不幸な妻がいた。その妻が、一通の遺書を、のこした」

「はい――」

「さやかどの――遺書は、そう呼びかけて、書きはじめられていた」

おりょうは、息をひそめるようにして、耳をかたむけた。

狂四郎は、美保代がのこした遺書を、いくたびも、読みかえして居り、生命をきざんだその一字一句を、あまさず、脳裡にとどめていた。

さやかどの。母は、いま、耳の奥に、かすかにかすかに、きれいな鈴の音がひびいているような、そのような、あまりにしずかな春の夜更けに、そなたに、これを書きのこして居ります。ほんとうに、なんというふかいしずけさでしょう。このように、ものみなの音が絶えはてた夜更けに、こうして、筆をとっているのが、この母には、いちばんふさわしいのですけれど、筆をとりあげると、どうしたわけか、泪があふれてきて、一文字も書けないままに、幾刻かが、すぎてしまいました。けれど、牀に就いたからとて、ねむれるはずもありませぬ。これを書きのこすことが、心のなぐさめになると思いたったのも、じつは、病み臥して以来、そなたのことを、そっと、胸に想いつづけるようになったからなのです。と申して、そなたのことを想いつづけることが、悲しみをふかくするためだけの儚ない女心であるならば、筆をとりあげると、もう泪があふれてくるのは、いたしかたがありませぬ。

さやかどの。

母は、疲れました。ひとみの光もうすらぎ、頬の色も、くちびるの色も、褪せました。身は、日々に細くなりゆくばかりなのです。母のおもかげは、どこへ消えてしまったのでしょうか。鏡にむかって、わがすがたを美しいと見とれた日は、遠く去ってしまいました。病み疲れたこの素顔にのこっているのは、死を待つ、暗い、さむざむとした寂しい相だけなのです。もともと、いきいきとした、はつらつとかがやく、若さにあふれた美しさをもたなかった母なのですけれど、こんなに死のかげのふかい寂しい相になってしまっては、わがおもてを、手洗いの水に映すことさえはばかられます。さやかどのも、こんな寂しい相をもった女を母にもつのは、さぞいやでありましょう。

そうなのです。せめて、そなたに、この手紙を書くことで、病める苦しさを忘れ、たとえ悲しみはふかくなりまさろうとも、その悲しみの泪で浄められて、あるいは、もし今宵、このしずけさの奥から、不吉な迎えの使者が、そっと、おとずれて参っても——あすの朝の、母の寝顔は、美しくはないけれど、ほのかに安らいだ色をたたえていることができれば……それだけで、この母は、しあわせに思いたく存じます。

さやかどの。

母の心は、そなたのお父上をお慕いすることに、そそぎつくしました。しあわせでした。この世の、どのような女人よりも、しあわせでした。母は、ひとりのお方をお慕いし、そして、そのよろこびの火を、片時も、うすれさせたり、消したりせずに、今日まで、燃えつづけさせることができました。女と生れて、これほどのよろこびが、またとあるでしょうか。

母が、お父上のおそばにいられたのは、ほんの短い、かぞえることのできる日数でした。幾十

年も、ひとつ家の下で、ともにくらしたご夫婦にくらべれば、その意味では、母は、決して幸せであったとは申せませぬ。でも、そのほんの短い日数のあいだ、母は、そのよろこびに、身と心を、悔いなきまでにひたして参りました。それから、お父上がお留守の時は、そのおすがたの一部分を――つめたく冴えたまなざしだとか、しずかにひきしまった横顔だとか、力づよく透るお声だとか、あるいは、ほんのちょっとした隙のないおからだの鋭い動かされ様だとか……いつでも、思い泛べようとすれば、すぐに思い泛べられるように、脳裡にたくわえておき、そうして参りました。

さやかどの。

母は、そなたに、疲れたと申しましたね。はっきりと、申します。母は、お父上をあまりにお慕いしたために、じぶんのからだが病むのを忘れて居りました。病んだために、いよいよ、わがいのちのいとなみは、はげしく、つよいものとなり、さらに、からだは衰えつづけ、とうとう、このように疲れはててしまいました。母は、世のやさしい女たちが、幾十年もかかって費やす心の炎を、この四年間で、燃えつくしてしまったのでしょうか。いえ、心の炎は、まだ、このように、あかあかと燃えて居ります。ただ、からだが……このからだが、心の炎のはげしさに――絶え間ないはげしさに、生きる力を使いつくしてしまいました。

女は、いちど、人を恋うよろこびを知ったならば、同時に、それが、どんなにかなしいものかも、さとらなければなりませぬ。母は、お父上をお慕いしているとさとった時――その瞬間から、はげしい胸の痛みをおぼえ、その夜は一睡もせずに、牀の上に坐って、わが胸をひしと抱きつづけたことでした。そうして、その痛みは、今日まで、つづいて居ります。こうして、筆をとりつつも、胸の中は、きりきりと、しぼられるように痛みつづけて居ります。健やかなからだを、天

から与えられなかった母のからだは、その痛みに堪え得ませんでした。その血の量だけ、母は、他のひとよりも、人を恋うことに、はげしく、急であったのであろうか、と思いかえされます。

さやかどの。

そなただけは、この母のよろこびとかなしみが、わかってくれますね。……けれど、そなたは、母に、なにも、こたえてはくれませぬ。……そなたは、いったい、誰なのでしょう。この母の子であることには、まちがいはありませぬ。だのに、そなたのすがたを、母は、見ることが叶いませぬ。いえ、見ることが叶わぬどころか、想像さえも、つきませぬ。そうなのです。そなたは、まだ、この世に生れて来ていない子なのですもの……。

いつぞや、母は、お父上に、もし女の子が生れたら、なんという名まえをおつけなさいますか、とおたずねしたところ、さやか、というのはどうだ、と仰言いました。

さやか……さやか……。

この名まえを、母は、それ以来、幾百たび、心のうちで、つぶやきつづけて参りましたことか。

さやかどの。

そなたは、夢の子なのです。狂四郎さまとこの美保代のあいだに、もし生れたとしたならば——それが、そなたなのです。だから……永久に、生れて来る筈もない子なのです。

さやかどの。

母は、かなしい。……そなたを生みたかった。そなたを抱きたかった。抱きしめて、頬ずりがしたかった。……それが、ゆるされなかった母が、こうして、そなたに手紙を書くことだけは、せめて、ゆるされるのではあるまいか、と思うて、筆をとりました。

……いつの間にか、夜が、ほの白く、明けて参りました。母も、筆をはこぶのに疲れました。

……さようなら、さやかどの。

三

狂四郎が、口を緘じてから、さらにまた、長い沈黙があった。

目蓋をひらいた時、狂四郎は、頬を泪でぬらしたおりょうの、虚脱したようなうつろな表情を、視た。

狂四郎の視線も感じないかのように、おりょうは、宙へ眼眸を置いて、深い感動に溺れて、われをわすれているようであった。

ようやく、狂四郎の視線に気がついて、おりょうは、われにかえると、

「お粥を召上りますか？」

と、問うた。

狂四郎は、うなずいた。

おりょうが、台所に立って行ったあと、狂四郎は、起き上ってみた。

激痛が、胸から四肢へつらぬいた。

——あと十日も動けぬか。

明日心剣が斃れ、自分の方が生き残った。これは、まさしく、僥倖であった。こちらに、勝った、という意識は生れなかったのである。

あの場合、こちらが、捨身の前進をしなかったならば、あきらかに、勝利は心剣の方にあった。

いま——。

狂四郎の心に湧(わ)いているのは、明日心剣という人物を、この世から消したことの、ひとつの罪に似た悔いであった。

――あの男は、死んではならぬ身ではなかったのか？　生きていなければならぬ人間ではなかったのか？

おりょうが、膳部をはこんで来て、起きている狂四郎に、びっくりした。

「おやすみになっていなければいけませぬ」

必死な面持で、おりょうは、狂四郎を横たえさせようとした。

手当のさまを、目撃していたに相違ない。起き上れる身ではないのだ。

「いや――、わたしは、どうやら、並のからだにつくられては居らぬ自信がある」

狂四郎は、そのままの姿勢で、一椀の粥を摂(と)った。

それから、仰臥して、しばらく、激痛がおさまるのを待ってから、

「遺書といえば、……あの男の懐中には、何もなかったであろうか？」

と、訊ねた。

「ございました。貴方(あなた)様宛の書状が――」

おりょうは、それを、持って来た。

狂四郎は、披(ひら)いてみた。

かなり長文の遺書であった。

黙読するうちに、狂四郎は、

――やはり、そうであった。死んではならぬ男であった。

と、合点した。

くわしくしたためられてあったのである。

旗本御家人篠原雄次郎が、明日心剣という仮名を用いるにいたった仔細が、かくすところなく、

さとられる筈もないその秘密が、お目付佐野勘十郎の手に、どうして握られたか——つきとめ得ぬままに、決闘にのぞむにあたり、もし自分が敗れた際、敵である貴台に、秘密を打明ける遺書をしたためおくのも、生涯一度の強敵をかえって莫逆の友以上に親しいものにおぼえる身勝手であろうが、この気持を、貴台ならば、汲んで頂けるような気がするものである。

遺書は、そうむすんであった。

狂四郎は、それを巻きおさめて、目蓋を閉じた。

「いかがなさいました？　お気分がわるうおなりにでも……？」

おりょうが、その顔色に、不安をおぼえて、問うた。

「……もしも、生れたとすれば、と仮定して、その子に名まえまでつけて、その子宛の遺書をのこして死んで行った女もあれば、親として名のることを禁じられる約束で、子をつくって、その子の姿を一度も見ぬままに、その子の生命を必死に守ろうとして相果てた男も、いる。いずれも、因果と云えよう」

狂四郎は、呟いた。

「………………」

おりょうは、狂四郎の手にある遺書が、異常な内容を持っていることを察し乍ら、息をのんだ。

狂四郎は、目蓋をひらいて、

「わたしの手当をしてくれた御仁は、歩行が可能になるまでには、幾日ぐらいを要するか、そなたに告げなかったか？」

「半月の安静は必要であろう、と申して居りましたが……」
「半月か。……半月は、待てぬ」
「でも――」
「十日でも長すぎるが……、やむを得まい」
「それほどお急ぎの任務を、お持ちなのでございますか？」
「江戸城西の丸に在る将軍家世子は、贋者だ。本物は、西国の何処かに、いる。その本物をさがし出して、江戸へつれもどさねばならぬ。それが、わたしの任務になっている」
「…………」
おりょうは、おどろきで目をみはった。
ふっと、狂四郎の口辺に、自嘲の色が刷かれた。
「贋者とはいえ、それが本物と双生児であれば、将軍職を襲うても、べつだん、さしつかえはない筈だが……、贋者は所詮贋者でしかないところに、浮世のしくみの冷酷さがある。これも、因果というものか」

武辺戦陣作法

一

「貴殿がたは、戦陣作法と申すものをご存じであろうか？」
そう云って、居並んだ七名の武士を、見渡したのは、年歯四十前後、その正座に巨巌の重さを

感じさせる人物であった。

総髪が額を異常にひろくみせ、左眼を大きくひらき右眼を細めた不揃いの眼眸が、無気味な迫力を備えていた。さらに、この人物を、当世ばなれしたものにしているのは、色褪せた浅黄の麻の筒袖に、古着屋も買いしぶるような古色蒼然たる革製の袖なし羽織をつけていることであった。

居並ぶ七名の公儀隠密が、この人物に就いて知っていることは、求聞堂筑波白虎、という奇異な名前だけであった。

頭領のお目付佐野勘十郎から、

『眠狂四郎討取りの指揮を仰ぐべし』

と指令があって、いま、この人物を上座に据えたところであった。

うしろの床の間に、たてかけた大身の槍が、この人物の持参したものである。

その名前から想像して、筑波山の美那濃川あたりで、滝にあたって、真言の密法でも修したのであろうか、と思われる。

「貴殿がたは、いずれも、眠狂四郎なる無頼の浪人者を討たんとするにあたって、これを、暗殺と思いなして居ることと存ずる。これは、大いなるまちがいと申すべきである。暗殺にあらず、合戦と心得るべきと存ずる。この心がけによってこそ、不敗を誇る敵を討ち取ることが出来る、と申すもの。……これまで、お目付の命令によって、眠狂四郎を襲うた面々が、ことごとく敗れ去って居るのは、この心がけが不足していたのではござるまいか。是非にも討たんとして、えらんだ手段は、さまざまでござったろうが、いずれも、討手の方に、これを、卑劣の手段とする恥の意識がひそんでいたのではござるまいか。……孫子の虚実にも述べてあり申す。夫れ兵の形は、水に象る。水の形は高きを避けて下きにおもむき、兵の形は実を避けて虚を撃つ。水は地に因り

て流れを制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に、兵に常勢なく水に常形なし。能く敵の変化に因りて勝を取る者、之を神と謂う。故に五行に常勝なく、四時に常位なく、日に短長あり、月に死生あり」

そこまで一気に述べておいて、筑波白虎は、やおら立ち上ると、床の間の槍を把った。

「いかなる虚実策を用いるとも、合戦に於ては、運用の妙として、ほめられるべきもの。これを暗殺の卑劣の手段と考えるが故に、闘わざる前に、恥の意識が生ずる。……われらは、今宵の襲撃を、合戦である、と性根を据え、これより、出陣式をつかまつらん。……まず、貴殿がたの指揮をとるこの求聞堂なる男が、いかなる力を具備して居るか、それを披露いたそう」

筑波白虎は、一人に向って、頭髪を一毛だけ抜きとって、宙へ吹きあげてもらいたい、と所望した。

一同は、固唾をのんだ。

長い一本の黒毛は、天井めがけて吹きあげられ、あるかないかの影となって、落ちて来た。

瞬間、

「えいっ！」

筑波白虎は、長槍をくり出した。

七人の目に、黒毛が、ぱっと二つにわかれて散るのが映った。

筑波白虎は、落ちて来た黒毛を、はらいあげて両断したのではなかった。突いたのである。細い一本の髪毛を、落下する宙にとらえて槍の穂先で突いて両断するとは、それを目撃し乍らも、なお、目を疑わざるを得ぬ魔神の迅業といえた。筑波白虎は、それをやってのけたのである。

指揮者たる資格のほどを、示した筑波白虎は、七名に対して、出陣式の用意を命じた。

出陣式というものは、すでに、古く、天平三年、大宰府で行われた、と「続日本紀」にも記されている。

その形態は、鎌倉時代にととのい、武将が出陣にあたり、鮑、勝栗、昆布で三献の儀を、御陣奉行によって行われている。

出陣式法は、武家が政権をとって以降のことであり、縁起をかつぎ、気勢をあげる作法がしだいにつみかさねられ、江戸期に入って、完全なかたちに成ったのである。

この家は、今須宿と柏原宿の中間にある寐物語ノ里にある代官陣屋であったので、出陣式の道具は、ととのっていた。

「おのおの、自身を具足姿と思うて、三献の儀式に臨みたまえ」

鹿毛の敷皮に掩われた床几に腰かけた筑波白虎は、一同に申し渡した。

陪膳になった一人が、肴組の折敷をささげて進み、つづいて、長柄役になった二人が、銚子を持って進んだ。

陪膳も長柄役も、そして、これを見まもる隠密たちも、厳粛な儀式であるにも拘らず、ばかばかしいという気持を抑えきれぬことは、事実であった。

一人、筑波白虎だけが、荘重な作法に一念こめている様子であった。

二

筑波白虎とあらたにその配下となった隠密七名は、黄昏どき、寐物語ノ里を出て、車返坂を越えた。

陽が落ちた頃あい、三つの山の踵にむすばれた谷あいに、ひっそりとわだかまった家を、一同

は、峠の上から、見下ろした。

小松の林とわずかばかりの畑にかこまれた郷士館(やかた)のその家は、築地(ついじ)も濠(ほり)も構えず、きわめて無防備なたたずまいを、昏(く)れなずませていた。

眠狂四郎が、明日心剣との決闘で重傷(ふかで)を負い、その家で、療養をつづけてすでに十日あまり経つことは、見張りの者が、毎日報告して来ている。

その十日の間に、九人の討手が、襲撃して、ことごとく斬られていた。

狂四郎に味方する者どもは、あきらかに忍者であった。

九人の討手と闘って三、四人が斃れた模様であるが、なお、その家に、幾人残っているか、これは不明であった。

「攻撃は、乱剣の備(そなえ)を以(もっ)て、なされる」

筑波白虎は、云った。

鉄砲を携えた者二人が、並んでまっ先に進み、これに先手の一人がつづき、左軍・右軍の二人が横列となり、そのあとから二軍として一人、大将の位置を筑波白虎が守って、後詰に一人——これが、乱剣の備えであった。

しかし、およそ陣形というものは、鶴翼(かくよく)、魚鱗(ぎょりん)、偃月(えんげつ)、雁行(がんこう)、臥竜(がりょう)、車懸(くるまがかり)、虎乱、雲竜、鳥飛いずれにせよ、一万以上の軍勢をもってつくられる備えであった。

わずか八人で、ものものしく乱剣の備えをつくることに、隠密たちは、抵抗感があり、いささか狂気沙汰という気がしないでもなかった。

隠密の襲撃は、文字通り隠密の行動であるべきにも拘らず、筑波白虎は、正々堂々の進撃作戦をとったのである。

眠狂四郎は手負うているが、すでに十日が経ているからには、充分に剣をふるい得る身に恢復しているに相違なかったし、さらに、その身辺を守るのが忍者とすれば、隠密の上にも隠密の行動を以て、当るべきではあるまいか。それを、襲撃を誇示するがごとく、真正面から押し寄せて行くとは、これこそ、孫子の機略を知らざるも甚だしい、というべきではあるまいか。

隠密たちには、筑波白虎の心算に、大いなる錯誤があるように思われてならなかった。

「進め！」

筑波白虎は、下知した。

闇は、急速に、その谷間に、落ちた。

「旦那様！」

夕餉の座に就いていた狂四郎に向って、給仕していたおりょうが、突如、顔色を変えて、ひくく鋭く呼んだ。

その声で、狂四郎の神経が冴えた。

「来たようだな」

「見て参ります」

おりょうは、立って、庭へ忍び出て行ったが、すぐに、戻って来た。

「押し寄せて参りましたが……、忍んで来ては居りませぬ」

「堂々と寄せて来た、というのか？」

「はい」

「…………」

狂四郎は、立って、行燈のあかりを消すと、障子を左右に開いた。
木立に宵闇がひろがっていたが、その彼方から迫って来る攻撃者たちの気配は、手にとるように、つたわって来た。
「旦那様！　どうして、あのように、はばかりなく押し寄せて参るのでございましょうか？」
「手負うたわたしを、みくびっているのかも知れぬ」
「それにしても……？」
おりょうには、合点のいかぬことだった。
「おりょう」
「はい――？」
「ひとつ、命じておくことがある」
「はい」
「敵は、存念が如何様にもあれ、堂々とやって来たことを、こちらはみとめなければなるまい。そなたが、物蔭からの助勢は、無用だぞ」
「旦那様！」
「堂々とやって来た者に対しては、堂々と受けて立つことにする。それが、この無頼者が知っている唯一の作法だ」
「でも、そのおからだでは、まだ、多勢を対手に闘うお力はございませぬ」
「あるかないか、ためしてみなければ、わからぬ」
「無駄にお生命をすてられますな！」
「遁れられぬものなら、姑息な悪あがきをせずに、受けて立つ、ということだ。……よいか、助

勢は無用だぞ！」
狂四郎は、きびしく申しつけた。

三

その庭には、臘梅の樹が多く植えられ、葉に先立ってすでに開いた黄色の花は、闇に溶けていたが、高い香気が、ただようていた。
乱剣の備えをもって、侵入して来た第一番手の鉄砲持ちの二人は、臘梅の花の下で、片膝ついた。
母屋の障子が、朧ろに白く浮き、中の二枚が開かれて、真暗な座敷が、口を空けている。
銃口は、その黒い口に向って、狙いつけられた。
座敷の闇が、人を包んでいるのか、それとも無人か――肉眼では見分けられなかった。
「撃てっ！」
後方から、筑波白虎の号令が下された。
轟然と、二梃の銃が、火を噴いた。次の瞬間、先手となった一人が、飛鳥の迅さで、驀地に庭を疾駆して、座敷へ躍り込んだ。
きえーっ、と闇を截る白刃の、うすい光が掠めるのが、味方の目に映った。とみた刹那、もうその先手は、よろめき、障子に烈しくぶっつかって、畳へ崩れ落ちていた。
左軍右軍を承った二名は、すでに、縁側へ達していた。
座敷に立つ狂四郎の影は、はっきりと闇を黒く染めて、輪郭をあきらかにしていた。
左軍右軍の二名は、殆んど同時に、縁側へ跳び上った。

狂四郎の黒影めがけて、左軍は突きを、右軍は大上段からの一撃を、大きく一歩踏み込んで、これも、同時に、送りつけた。

突いた左軍は、小手を両断され、大上段から振りおろした右軍は、延びきった胴を、ずんぶんに薙ぎはらわれた。

両名の呻きが同時に発しられたのは、狂四郎が、小手斬りから胴薙ぎへと、迅業を継続させた証左であり、庭はしに立った筑波白虎は、二つの呻きの重なるのをきいて、

「うむ！　噂にたがわず！」

と、もらした。

二軍を受け持った者は、三番手として、その時、縁側へ馳せ寄っていたが、左軍右軍の同輩が、たった一太刀で斬られたことの衝撃で、地面へ足を釘づけにした。

狂四郎は、なおまだ、屋内の闇を味方として、立っているばかりであった。

二軍となった者は縁側先に、大将の位置にある筑波白虎はずっと後方の朧梅下に、後詰の一人はその背後に、そして、最初に攻撃をしかけた鉄砲隊の二名は、左右に間隔をひらいて、すでに第二弾をこめて、いずれも動かず、この屋敷内にかえった静寂の深さは、異様なまでにもの凄かった。

「撃てっ！」

筑波白虎の号令が、再び、宙にほとばしった。

二発の弾丸が、狂四郎の黒影めがけて放たれた——一瞬。

縁側先の二軍の者が、間髪を入れぬ敏捷さで、身を躍らせていた。

狂四郎の影は消え、座敷へ踏み込んだ二軍の者が、斬りつけ終った残心の構えのまま、ピタリ

と動かなかった。

それなり、石とでも化したごとく、固着状態を保つ後姿が、味方の目を疑わせた。

奇怪としか受けとれぬ不動の姿は、およそゆっくりと十もかぞえるほどもつづいたろうか。

畳から湧き上るごとく、狂四郎の影が起きるや、その不動の姿は、惨めに崩れた。腹部を貫かれた無想正宗を、抜きとられたからである。

「鉄砲隊、引け！」

筑波白虎は、悠然と、庭の中央へ、進み出て来た。

「眠狂四郎、出い！　求聞堂筑波白虎、見参！　いさぎよく一騎討ち、つかまつろう」

「二梃の鉄砲に守られての一騎討ちか」

狂四郎の皮肉な言葉が、座敷の闇から、投げかえされた。

「さあらず！　われらは、軍陣の作法を厳守して、正々堂々の陣を寄せて参った。されば、二軍の敗北に遭うて、大将自ら、一騎討ちして雌雄を決せんとするものである。何条もって、卑劣の計を用い申そうや」

高く声をあげて、云いはなった筑波白虎は、

「鉄砲隊、撃ちかけまかりならぬぞ！」

と、下知した。

鉄砲隊二名が、木下闇に身をかくすのを待って、狂四郎は、ゆっくりと縁側へ姿を現わし、庭へ降り立った。

病み上り、というよりも、病み臥しているさなかの狂四郎は、一時に、四人の敵を斬った疲労で、四肢が石のように重いのをおぼえていた。胸部の傷は、激痛を起していたし、熱も出ていた。

辛うじて敵に、その病み疲れぶりを看て取らせぬ態度を保っているばかりといえた。
心気は冴えていても、五体はもはや、闘う力を喪っていたのである。
敵の方は、こちらが庭に降り立つと、後詰の者が、にわかに、松明(たいまつ)に火を点ずる余裕を示した。
炎の中に浮き上った大将の、当世ばなれした風体を眺めた狂四郎は、
——殺伐の武弁の気風を、そのままに、今の世に継いだ男が、いたのか。
と、奇異の感に打たれた。
「いざっ！」
筑波白虎が、ぴたっ、と長槍を構えるや、その鋭気をあびて、狂四郎の重い五体が、ぴりっとひきしまった。
ただの使い手ではないことは、一瞬にして、知り得た。
剣の業前も、もとより、天稟(てんぴん)によって、その奥旨に達するものであるが、槍術はさらに、その感がふかい。これは、槍の極意書をひもとけば、明らかである。真之位といい、三ヶ身の位といい、就色随色、乱勝、看搦(みからみ)、あるいは佐分利流の乳合構えというも、肝心のことは、筆紙につくしがたく、「口伝万々」と記されている。
口伝によって、極意をさとることは、天稟あり、という条件がついている。
しかも、剣の構えよりも、槍の構えの方が、その業前の優劣が一目瞭然であった。
いま、狂四郎に対して、穂先をつけた敵は、これまで出会ったことのない手練者(てだれ)であることを、その構えに於て示した。
——おれの最期か。
狂四郎は、おのれ自身に、呟(つぶや)いた。

病み疲れた身では、防ぎのすべはあっても、攻撃に転ずることは、不可能に思われる。
文字通り、運を天にまかせるよりほかはない闘いであった。
筑波白虎は、狂四郎の地摺り下段を、凝と見据えていたが、しずかに、氷上をすべるがごとく、軽やかに、野袴を鳴らしもせずに、進んで来た。
その足が停められた——刹那、穂先は、電光となって、狂四郎の面ていを襲って来た。
同時に、無想正宗は、はねあげられて、胸前に直立した。
突いた穂先と受ける白刃が、宙に停止した。みじんの狂いもなく、槍の業前と剣の業前が、合致した。槍の穂先を、無想正宗が、刃で受けとめたのである。
「む！」
筑波白虎の口から、ひくく、感嘆の声がもらされた。
髪毛一本さえも両断するおのが突きを、髪毛よりも薄い剣の刃で受けとめてみせた狂四郎の手練ぶりは、世に双つと無い冴えであった。
筑波白虎は、はじめて、槍の不利なるものをおぼえた。
筑波白虎が、次に放つ秘技は、引いて突く二動作を経なければならぬ。引いた瞬間に、剣は、一動作の迅業を発揮するに相違ない。
その迅業が如何なるものか、刃で穂先を受けとめる手練の持主が使うのであるからには、筑波白虎には、意測しがたかった。
筑波白虎は、狂四郎の姿から、病み疲れた気色を看て取っていなかったのである。噂にきいた通り、虚無の翳の濃いその痩身から、鬼気迫るものを感じ取っていたばかりであった。
もし、その極度の疲労が、円月殺法の迅業を封じてしまっているものと、知っていたならば、

筑波白虎は、容赦なく、おのれが蔵する幾多の秘技を、つづけさまに放って、狂四郎を仕止めたに相違なかった。

筑波白虎は、次におのれが為し得る唯一の手段は、後方へ跳び退ることだけしかない、と思いきめた。

思いきめるや、跳び退る刹那に、狂四郎が攻勢に出て来ることも予測した。

筑波白虎は、微かな恐怖すらおぼえた。

「おーっ！」

野獣の叫びにも似た懸声を、満身からの気合をこめて、ほとばしらせて、その恐怖をふりはらいざま、長槍に殺気をみなぎらせて、ぐっとひと押しした。

次の瞬間、筑波白虎は、大きく跳んで、一間の後へ退った。

と——。

狂四郎の上半身が、ゆらりと、不覚のゆらめきをみせた。

これを眺めた筑波白虎が、はじめて、——そうか、と合点した。

不敗を誇る魔剣の使い手も、病に勝てぬ身となっていることを、はっきりとみとめたのである。

簪

一

「眠狂四郎！」

筑波白虎は、高く呼んで、すっと、一歩すり出た。

「終りに臨んで、云いのこす言葉があれば、聴取いたす」

もはや勝負成った、という自信のほどを、その声音に示した。

「…………」

狂四郎は、無想正宗を地摺りにもどして、無言であった。

後詰の者がかかげる松明の焰を背負うた筑波白虎の巨軀が、眩暈に襲われている狂四郎の視野の中で、徐々にふくれあがって来る。

「云いのこす言葉は、なきや？」

いちだんと高くはりあげられる声音を、狂四郎は、わずらわしいものにきいた。

死に対する恐怖は、この男には、ないのであった。常に、死神と肩をすりあわせて生きて来た身にとって、こうした絶体絶命の危機に置かれたことは、いっそ、この瞬間を待ちのぞんでいたような気持さえ生んでいる。

「されば――」

筑波白虎が、さらに一歩肉薄して、電光の一撃を放つべく、長槍を手もとに引きつけた――刹那。

縁側に奔り出た白い影が、床板を蹴って、宙に躍った。

とみるや、狂四郎の頭上を、翔け越えて、筑波白虎の前面へ、ぴたっと、降り立った。

白い影――文字通り一糸もまとわぬ素肌を、松明の明りに映えさせて、若い女体を惜しみなく、筑波白虎の視界にさらしてみせたのであった。

その両手には、得物はなく、ただこぶしをかためているにすぎなかった。

解いて肩に散らしたありあまるゆたかな黒髪も、婉然として冴えて美しい眉目の間も、理智に輝く瞳も、ふっくりと軟らかに肉の盈ちた胸の隆起も、滑らかに腹部から下肢に流れるしなやかな曲線も、すべてが夢幻の中のもののように、妖しい陰翳を織って、松明の焔のゆらめきとともに、美しく呼吸づいた。

「……むっ！」

一瞬——、筑波白虎ともあろう非情の兵法者が、悩殺に堪えようとする深い息を吐いた。

おりょうは、すうっと、片手をさしのばすや、長槍の蛄首を、つかんだ。

心気の乱れに狼狽しつつ、筑波白虎は、おりょうの手から、長槍を引き払おうとした。

しかし、意外な強い力が、おりょうの手にこめられていた。

「うむっ！」

筑波白虎は、渾身の力をふりしぼり、次の一瞬、気合もろとも、その白い肌を突こうとした。

しかし、いったん乱れた心気は、長槍に鋭気を移すことは不可能であった。

おりょうの裸身にみなぎる気魄の方が、まさった。

長槍は宙に固着して、びくとも動かなかった。

「鉄砲隊！」

思わず、筑波白虎は、絶叫した。

しかし、木立の闇にひそんだ鉄砲隊二名は、なんの反応も示さず、沈黙を守った。

戦陣作法を以て、堂々たる正面攻撃をすると宣言し、それを為している筑波白虎が、たった一人の裸女の出現に、みにくいまでに狼狽したさまを、隠密たちは、ひそかにあざけっているに相違なかった。

筑波白虎は、忿怒と屈辱感で、われを忘れるや、長槍をすてざまに、抜きつけの一太刀を、裸身めがけて、あびせた。

しかし、両断したのは、長槍の柄にすぎなかった。

筑波白虎は、倍加した忿怒と屈辱感を、凄まじい怒号にして、大上段にふりかぶった。

瞬間――。

おりょうの手から、柄を失った槍の穂先が、手裏剣となって、放たれた。

穂先は、筑波白虎の胸を貫いた。

巨軀は、大上段にふりかぶった構えのまま、のけぞり、地ひびきたてた。

重い静寂が、そのあとに来た。

攻撃方は、なお三名――鉄砲隊二名と松明をかかげる後詰の者が、残っていた。

おりょうに鉄砲を撃ちかけておいて、狂四郎を襲えば、容易に討ち取れる筈であった。

隠密たちは、なぜかそれをしなかった。

おりょうも狂四郎も、なおしばらく、庭にいたが、いつの間にか、隠密たちの姿は、消え去った。

二

狂四郎は、座敷にもどると、牀に身を横たえた。

物蔭に身をひそめていたこの家の者たちが、遺棄された死骸を、とりかたづけるしのびやかな物音が、きこえていた。

おりょうが、身装をととのえて入って来ると、

「さしでがましい振舞いをいたしました。おゆるしの程を――」
と、詫びた。
狂四郎は、天井へあてた眼眸を動かさなかった。
闘う前に、助勢をきびしく禁じておいたが、敵の意表を衝くおりょうの助勢がなければ、いま頃は、むくろとなって、この牀に寐かされていたことである。
しかし、その礼を云う代りに、しばらく沈黙を置いてから、狂四郎は、云った。
「そなたには、明朝、この家を立去ってもらいたい」
受けとり様によっては、これほど冷酷な言葉はなかった。
「……………？」
おりょうは、一瞬、とまどいの表情をみせた。
「垂井宿の旅籠で、わたしは、そなたに、自分について来た女は、例外なく不幸な最期を遂げている、と云って、戸倉へ帰るように、たのんだ。そなたは、いったん、承諾し乍らも、戸倉へ帰らずに、わたしのあとを追って来た。そのおかげで、わたしは、二度までも、そなたに、生命を救われた。……しかし、まだ、そなただけが、例外であったことにはならぬ。二度までも生命を救ってくれた女ゆえ、なおさらに、そなたを、これまでわたしにつきあった女たちのように、不幸な最期を遂げさせたくはない。……このあたりで、そなたは、わたしから、はなれ去ってもらいたいのだ」
「わたくしは、貴方様のために死ぬことなど、すこしもいとうては居りませぬ」
「これ以上、わたしの脳裡に、業悪の記憶を加えて欲しくはない」
「わたくしは、なぜか、三度まで、貴方様に力をお添えするさだめのような気がいたします」

「三度目は、そなたが、死ぬかも知れぬ」
「身代りにならせて頂くのは、うれしゅう存じます」
「こちらは、迷惑なのだ、それが――」
「でも、貴方様は、まことの将軍家ご世子を、さがし出さねばならぬ重い任務を、お持ちでございます」
「たしかに、それは、わたしの任務になっている。しかし、わたしは、公儀に忠勤をはげむ幕臣ではない。任務を遂行せずに、中途で、斃れても、責任感をあの世まで背負うては行かぬ。……将軍家世子をさがし出して、江戸へつれもどすことより、そなたに生きていてもらうことの方を、いまのわたしは、大切だと考える」
「わかりました。明朝、おいとまいたします」
依然として、狂四郎は、眼眸を天井に当てていたが、おりょうの双眸から、泪があふれるのを視てとっていた。
「旦那様――」
「なんだ？」
「おねがいがございます。……明けがたまで、おそばでやすませて下さいませ」
「そなたが、そうのぞむなら……」
おりょうは、緋の長襦袢姿を、そっと、狂四郎のかたわらに、すべり込ませて来た。
狂四郎は、疲労しつくした五体に、男の精気はよみがえらぬ、と思っていたが、そのしなやかな肢体を、抱いた瞬間、みるみるそれが体内に満ちるのをおぼえた。
「おからだに、さわりまする。……わたくしは、ただ、おそばにやすませて頂くだけで――」

おりょうは、ささやいたが、その言葉とは逆に、白い肌はもう熱く燃えて、狂四郎の指頭を灼くごとく、そこを濡らしていた。

熱い蜜に濡らされた花びらのように、嫩らかな蕊をふるわせて、すこしずつ綻び乍ら、手折れるのを待つ一瞬の昂まりを、おりょうは、絳い唇から、堪え入るような息にして吐いた。

営みは、静止の裡につづいた。

若い肢体は、嬌を含まず、態を作らず、ひそやかに掩いかぶさって来た男の病んだ身を、いたわって動かなかった。

狂四郎は、うねって来る波を凌ぎつつ、おのれを含んで、ひそと堪えている細腰を、哀しいものに感じていた。

……夜が明けた。

狂四郎が、目覚めた時、おりょうの姿は、もうかたわらになかった。

寂寥が、狂四郎の胸を嚙んだ。

三

三日の後、狂四郎の姿は、醒井宿の往還上にあった。

醒井は、美しい宿駅であった。

往還に沿うて、美しい水が流れていた。この水は、寒暑にかかわりなく、量が同じであった。

流れの中に、日本武尊が腰掛けたといわれる石が浮いている。

その石を眺めて憩うのを誘って、茶屋は、店さきから、水縁に、一畳の床几を移して、緋毛氈の上に莨盆やら茶道具やらをならべていた。

うららかな春の陽だまりの中で、旅人たちは、美しい水の流れに、旅情を催して、みなひっそりと動かずにいる。

狂四郎は、しかし、ゆっくりと、そのわきを行き過ぎ乍ら、旅人のうちに、こちらの生命を狙う者がいることを、直感した。

それと一瞥して判る姿の者はいなかったし、気配を示した者が、あった次第ではない。

これまで、この男の特殊な鋭い神経の働きについては、いくども述べたところである。

一種の霊感といえる。

もともと、そのように鋭く働くような神経を、持って生れて来たのではなかった。無数の死地をくぐり抜けて来た者のみが、いつの間にか備えた直感力であった。

作者が、この男を、世間へ登場させてほどなくの頃、一人の軍人に会う機会があった。ノモンハンで、中国大陸で、ビルマで、転戦をかさねたこの古強者は、作者に述懐したものである。

「銃弾砲弾を、幾年もくらっているうちに、例えば、塹壕にひそんでいる時、一瞬ふっと、来るな、という予感が起るのです。すると、必ず、飛んで来ます。そこで、来るな、と感じた刹那、ぱっと場所を移すのです。そのおかげで、幾度生命がたすかったか知れません。人間の神経というやつは、危険に対する予知力といったものを発揮するようにつくられているようです。だから、貴方の書かれる眠狂四郎の鋭い神経の働きは、決して小説家の空想ではない、と私は人に語っているのですよ」

作者にとって、これは有難い話であった。

爾来、狂四郎は、敵の襲撃に対しては、その寸前に於て、鋭く予感しつつ、生きのびて来てい

る。

いまの場合が、そうであり、狂四郎は、醒井宿を出て行き乍ら、敵が襲撃して来るであろう場所までも、

――番場の山坂あたりか。

と、予想していた。

狂四郎の脳裡には、「太平記」に記された元弘三年五月九日北条の連族越後守仲時をはじめとする六波羅四百三十余人が、番場山中で自害して果てた悲劇が、泛んでいたのである。

京都足利勢に敗北して、落人となった北条の連族とその随士四百三十余人は、番場に於て、足利勢の追撃を蒙って、やむなく自刃したのではなかった。

北条勢が、敗走して、関東へ落ちて行くという報に、伊吹山を本拠にしていた山賊野伏が、二三千人も徒党を組んで、待ち伏せていたのである。

越後守仲時は、糟谷三郎宗秋を先鋒に、佐々木時信を後詰として、落ちのびて来たが、番場の峠にさしかかった時は、総勢八百にも足りなくなっていた。

糟谷三郎は、襲いかかる賊党を、嶺へ追いあげたものの、越えて行く山間に、数千ともかぞえられる敵影をみとめて、絶望した。

ひとまず米山の麓にある一向宗の辻堂で、後詰の佐々木時信の引具する隊が来るのを、待ったが、ついに、その三百騎は追いついては来なかった。

行手に待ち伏せるのは、山賊野伏だけではなく、美濃国には謀叛の張本である土岐一族が待ちかまえて居り、遠江国では吉良一族が、城郭を構えて、弓矢をつがえている。

人馬ともに疲れ果てた落人の身で、関東まで遁れ着くことは、絶望であった。

近くの城を奪い取るには、あまりにも人数が足りぬ。
越後守仲時は、後詰の佐々木時信が、裏切って、京都へ降ったと判断するや、
「いまは、やむなし」
と覚悟をさだめ、従容として腹をかき切って俯伏した。
糟谷三郎が、柄口まで腹に突き立てた仲時の小刀を抜きとって、おのが腹に刺した。
つづいて、四百三十余人が、のこらず、割腹して相果てた。
「血はその身をひたして、あたかも黄河の流れのごとくなり、死骸は庭に充満して、屠所の肉に異ならず」と「太平記」が述べた悲劇の場所こそ、刺客の出現にはふさわしいようであった。

四

六波羅四百三十余人が自害した辻堂は、いまは、八葉山蓮華寺となって、駅中に、広く敷地をとっている。
狂四郎は、その山門を左方に眺めて、ゆっくりと通り過ぎた。
行手に、険しい坂があった。磨針峠であった。
ものの一町も、その急坂をのぼったころか。
三度笠をかぶった飛脚が、急ぎ足で下って来るのが見えた。
——この男かも知れぬ。
抜きつけに斬りつけて来るのを、要心しつつ、狂四郎は、わざと歩度をゆるめた。
飛脚は、すれちがった。
——来るぞ？

背すじに、その殺気をあびた。

しかし――。

襲って来たのは、背後からではなかった。

行手の坂上から、もう一人下って来ていた旅商人ていの男が、突如、懐中から、短銃を抜き出して、引金を引いたのである。

ぐらっとよろめいた狂四郎は、路傍の崖岩（がけいわ）へ、凭（よ）りかかった。

「仕止めたぞ！」

短銃を撃った者が叫び、飛脚が、「うむ！　よくぞ！」と、応じた。

狂四郎は、二人の敵が寄るにまかせて、微動もせずに、顔を仰のかせて、岩肌へ背中をつけていた。

弾丸は、まさしく、命中していた。

敵二人は、なお油断せずに、狂四郎を凝視しつつ、距離を縮めて来た。

「お主ら――」

不意に、狂四郎が、瞑目（めいもく）したまま、声をかけた。

敵二人は、はじかれたように、跳び退った。

視線を刺客たちへ送った狂四郎の顔には、冷やかな薄ら笑いが刷かれていた。

「どうやら、運は、こちらにあったようだな。お主らには気の毒だが、この勝負、この眠狂四郎のもののようだ」

弾丸が当ったにも拘らず、倒れないばかりか、攻撃者側をあざけってみせた。

「うぬっ！」

面を朱にした旅商人の方が、猛然と、突いて来た。
無想正宗が鞘走るのは、目にもとまらず、骨と肉が断たれる音だけが、起った。
「どうする？」
狂四郎は、飛脚に問うた。
「ここで、無駄に生命をすてるか、それとも、あきらめて、次の計略をたてるかだ」
「………」
飛脚は、首を肩にめり込ませて、道中差を胸前に横たえた構えで、じりじりとあと退った。
「お主、どうやら臆病風に吹かれたようだ。それがよい。……人間は、生きるためには、ときどき、臆病になる必要がある」
狂四郎は、無想正宗を腰に納めると、ふところ手になって、歩き出した。
「待たれい！」
飛脚は、呼びとめた。
狂四郎は、首だけをまわした。
「たしかに、弾丸は、御辺の胸部を、貫いたはずだが……？」
その不審に対して、狂四郎は、微笑した。
「あいにくだが、わたしには、この無頼の身を守ってくれる惚れた女が、つき添うていてくれる。お主もすでに知っていよう。不破関の古蹟で、明日心剣と闘った時も、柏原の山里に、筑波白虎がお主らの仲間を率いて攻め入って来た時も、わたしのかたわらには、わたしの生命を救ってくれる女がいた」
「し、しかし……、ここには、居らぬ！　どこにも、見当らぬ」

「お主らの目に映らなかっただけのことだ」
「映らなかった——？……どこにいるのだ？」
飛脚は、苛立(いらだ)たしげに、叫んだ。
「ここに居る」
狂四郎は、襟(えり)もとから、片手をさし出してみせた。
それに握られているのは、簪(かんざし)であった。
そっと音もなく抜け出た牀に、おりょうが、落していったのか、わが身の代りにのこしていったのか、この簪があったのである。
なんとなく、これを胸の襦袢裏に刺して、道中していた狂四郎であった。
簪には、短銃の弾丸が、突き立っていた。
おりょうは、三度び、狂四郎の生命を救ったのであった。

お茶壺(ちゃつぼ)道中

一

越知川。
えち川とよむ。
この宿駅を通って、琵琶湖へ流れ入る川の名から取ったのであるが、川の方は、同じ読みでも、愛知川である。

東海道と出会う草津までは、七里半の距離である。

愛知川の水のきれいさが、ここを煎茶の名所にしている。また、高宮からこの宿にかけて、布を織り出す家が数多あるのも、そのおかげのようであった。

旅人は、その機織りの音を、左右に耳にし乍ら、通りすぎて行く。ところが、この日は、どの家も、筬を通す手を止めて、ひっそりと、ひそまっていた。

春の朝陽を受けた街道に、人影もなく、塵ひとつなくきれいに掃きよめられた路上は、打ち水がようやくかわいて、神社仏閣の参道に似てすがすがしかった。

と——。

木立の中から、十歳あまりの巡礼姿の少女が出て来て、路上に草鞋跡をつけ乍ら、わらべ唄をうたって、小石を蹴りはじめた。

恰度、路の中央に、一間置きに、まっすぐ、黒石と赤石が、交互に置かれて、目路の果まで、つづいていた。

これが、何を意味するか、当時の街道沿いの住民や、旅馴れた人たちで、知らぬ者はなかったが、あいにく、稚い少女には、恰度石蹴りして遊ぶには、恰好の配置であった。

ねんねん、ころろ、ころ
天満の市は、
大根そろえて、舟に積む
舟に積んだら、どこまで行きゃる
木津や難波の橋の下
橋の下には、鷗がいるよ

鷗とりたや、網ほしや
網がゆらゆら、由良之助

この唄声をきいた者が、愛知川へ架けられた仮橋袂の番小屋から、顔をのぞけた。

道中姿の軽い身分のさむらいであった。

忽ち血相を変えて、

「こらっ！ 何をいたして居る！」

と、呶鳴りつけた。

少女は怯えて、そのまま、その場に立ちすくんだ。

「退けい！ 退かぬか！」

そうあびせられても、少女の両足は、すくんだなり、動かなかった。

武士は、掃目をよごさぬように路傍の草を踏んで、大股に近づくや、

「こやつ、石を蹴り居って！」

激怒にまかせて、襟もとを鷲摑みにすると、したたかに、小さな頬へ、拳をくれた。

ひいっ、と悲鳴をあげた少女は、本能の力をふりしぼって、武士の手をふりほどくと、奔り出した。

「おのれがっ！」

逆上した武士は、追い乍ら、柄袋をはずして、抜刀した。

峰をかえしたのは、対手が少女であるため手加減するのではなく、街道をけがすのをおそれたからであった。

陽光に煌めかせて、ふりかぶった——刹那、その刀が、手をはなれて、宙へ飛んだ。

すぐ脇の草径の方角から、小石が飛来して、その手の甲を打ったのである。
「く、くそっ！」
眉も目もつりあげて、武士は、首をまわした。
黒の着流しの、白昼の明るさの中にいるのはおよそふさわしくない蒼白な異相の浪人者が、その草径にいた。
「邪魔するかっ！　貴様も、同罪だぞ！」
武士は、喚いておいて、あわてて、左手で、刀をひろい取った。
眠狂四郎は、ゆっくりと街道へ出て来ると、美しくならべられた赤石と黒石を、わざと蹴とばし乍ら、近づいて来た。
磨針峠から、琵琶湖畔へ降りて、数日を、漁師の小屋に泊めてもらって、愛知川沿いに、再び中仙道へ戻って来た狂四郎であった。
したがって、この日、街道が、このように掃ききよめられ、旅人の通行を禁じているのを、はじめて知ったのである。
「貴様っ！　本日、この街道を、お茶壺行列がある、と知って狼藉を働くか！」
武士は、狂ったように、怒号した。
お茶壺行列が、いかに権威を持っていたか、すでに、『沓掛女郎』の項で、述べた通りである。
お茶壺道中の前触れがあると、すでに前日に、街道はこのように清掃され、通行は禁じられ、沿道の田畑の耕作までも止められていた。機織りの音が止んでいるのは、そのためであった。
「妙な話だな」
狂四郎は、薄ら笑って、

「越知川から西への街道が清掃されているところをみると、江戸から宇治へ受領におもむくのであろうが、新茶の受領は、八十八夜以後である筈だ。それを、なぜ、はやばやと、季節はずれのいま頃、おもむくのか——これは、妙な話だ」

と、云った。

「黙れっ！　素浪人風情の知ったことか。下れ、下れっ！」

二

狂四郎は、しかし、平然として、踵をまわすと、東へ向って——お茶壺行列が泊っているであろう越知川宿へ入って行こうとした。

「貴様っ！」

われを忘れた武士は、背後から、斬りつけて来た。

刃風を肩に流しておいて、游いで来るのへ、当身をくらわせた狂四郎は、すたすたと進んだ。

この折、お茶壺道中の先触れ二名が、橋を渡って来て、この光景を目撃した。

「狼藉者っ！」

肩をならべて、まっしぐらに、疾駆して来た。

狂四郎は、立ちどまった。

十歩あまりの距離を置いて、先触れたちは、同時に抜刀すると、切先をそろえた。

その構えを、冷やかに見据えた狂四郎は、

「妙な話だ」

先程の言葉を、くりかえした。

「お主らは、相当な手練者だな。お茶壺道中の先触れに、お主らのような手練者をえらぶとは、解せぬ」

これは、挑発であった。

先触れたちは、ちらと顔を見合せた。次の瞬間、一人だけ、するすると進んで来た。

峰をかえさず、青眼の白刃に、殺気をみなぎらせた。

「いよいよ、妙な話だな」

狂四郎は、薄ら笑い乍ら、云った。

「お主らは、お茶壺を通す街道を、血でけがしてもかまわぬと、判断したらしい。面妖しいではないか。左様な不埒な振舞いは、許されぬ筈だが、下っ端のお主らが勝手にそうきめても、一向にさしつかえないというのは、どういうことであろうか」

その皮肉な言葉に対して、猛然たる攻撃が、応えた。

斜め横に地を滑って、これを躱した狂四郎は、まだ、双手を空けたなりであった。

討手は、その初太刀に、充分の自信を持っていたとみえて、苦もなくはずされたのを、一瞬、信じがたい気色を示した。

「…………」

狂四郎は、黙って、次の攻撃を待つ。

討手は、必殺の上段構えをとった。

狂四郎は、自然な静止相をみせたなりである。

「ええいっ！」

宙を截る鋭い刃鳴りとともに、討手は五体をぶちつける凄まじい勢いで、襲って来た。

同時に、狂四郎の身が、地面に吸い込まれるように沈んだ。
身を沈めざまに、股間に放った手刀が、存分の手ごたえを持って、討手をのけぞらした。
地ひびきたてて、倒れた時、もう一人の先触れのえらんだ行動は、甚だ卑怯なものであった。
ぱっと身をひるがえして、越知川宿へ向って、遁走したのである。
——どういうのだ？
狂四郎は、不審のままに、気絶した先触れに、活を入れた。
「おい、お主らが守って道中して居るのは、茶壺ではなかろう？」
こたえぬと知りつつ、一応、問うてみた。
江戸城内には、福海壺、寅申壺、志賀壺、埋木壺、日暮壺、虹壺、竜衣壺、藤瘤壺、柚狭壺、太郎五郎壺の十個の名器が用意してあった。
お茶壺奉行は、宇治の新茶受領におもむくにあたって、このうちの三個を携行した。
三個は、それぞれ、外気があたらぬように工夫された駕籠に安置されて、はこばれるのであった。
庶民が称ぶ通り、まさしく、大名以上の権威を所有する「お壺様」であった。
狂四郎は、密封駕籠にのせられたのが、「お壺様」ではなく、他の別のものではあるまいか、と推測したのである。
もとより——先触れは、かたく口をひきむすんで、こたえようとはしなかった。
その時、宿を出て、いそいで橋を渡って来る武家数人の姿が見受けられた。
先頭に立っているのは、至極温和な顔つきの、白髪あたまの老人であった。
狂四郎の前に近づいて来て、
「身共は、お茶壺奉行つき用人大久保久兵衛であるが、いずれが粗相であったか——その吟味は

さておき、街道が血汐でけがされなかったことは、まずまずさいわいでござった。奉行には、騒擾がしずまれば、沙汰をせぬ、と申されて居るゆえ、何事もなかったことにいたそう。引きとられてよい」

と、おだやかな物腰で、云った。

「さて――ますますもって、妙な話だ」

狂四郎は、四度び、同じ言葉をくりかえした。

「お茶壷道中に対して狼藉を働いた者は、武家町人を問わず、これを召捕って、打首にするのが、定法ときいて居る。このたびの奉行は、よほど、寛容の御仁とみえる。それとも、事を荒立てたくない内密の仔細でもおありか？」

「いや、別にかくすべき仔細はない。このたびの道中で、奉行をつとめられる島田将監殿は、江戸城内に於て、その人徳はきこえて居られる。みだりな疑惑を抱かずに、立去った方が、貴公の身のためと存ずる」

「みだりな疑惑を抱かずに――と云われる。はたして、こちらが、みだりな疑惑を抱いているのであろうか。……ともあれ、これだけは、申し上げられるようだ。そちら方が、いんぎんな態度に出られると、こちらは、ひきさがるよりほかはない、ということだ」

狂四郎は、一揖してから、踵をまわした。

「行列よりさきに、こちらは、赤黒の石を踏ませて頂く。忝ない、と礼を申し上げておこう」

三

――同じ道を、西へ向って歩いて行くのだ。こちらが待っていれば、むこうが正体を現わして

くれることになろう。

狂四郎は、そう考えて、地獄越えの嶮しい坂路をのぼって行った。

巡礼の少女を救ったのは、偶然行きあわせたにすぎなかったからであるが、お茶壺道中に対する疑惑の念を重ねるにつれて、自分が京都へ入ろうとする目的と、なにやら、関聯があるような気がして来たのである。

これは、この男独特の直感であった。

喧嘩を売ったかたちになったが、買おうとせぬ対手の態度が、くさいのであった。

——面白いことになるかも知れぬ。

飄乎として、勾配急な坂路へ、孤影を落して、登って行く痩身は、すれちがう見知らぬ旅人をして、思わず路傍へ寄らせる無気味な翳を刷いて、それはもう、江戸を発った頃の不死身にかえったものといえた。

やがて——。

地獄越えは、嶺に来た。

安土山より石馬・川並に降りるこの坂路が、その名称を冠せられたのは、永禄年間、足利義昭が、織田信長をたのんで、兄義輝を弑逆した三好左京太夫義継を討った際、箕作城、和田城などとともに落城した観音寺山城から、敗走した三好勢が、この道をえらんで、あるいは、谷へ転落し、あるいは岩石に打たれて、夥しい死屍をさらしたためであった。

嶺に立つと、眺めは絶景であった。

安土山の麓から、湖水がひろがり、眼下には八幡の町なみ、長命寺山、水茎岡、多景島が起伏し、その彼方に、唐崎の松や坂本や比叡山や比良の高根が、春の陽ざしにかすむ。

湖上を行き交う船がくだく光の波も美しく、渚をあさる千鳥の啼き声もきこえるかのようであった。

数軒の掛茶屋がならんでいて、幾人かの旅人が、険路の疲れを、甘酒で癒し乍ら、淡海一州の絶景を、目で追うていた。

狂四郎が、床几に腰を下ろすと、すぐに、甘酒がはこばれて来た。

その茶碗を手にするのと、

「旦那――」

声がかかるのが、同時であった。

となりの床几へ、視線を向けると、呉服物らしい大きな荷をかたわらに置いた、四十年配の小肥りの商人が、にこにこしていた。

「ご要心なさいまし。その甘酒は、もしかすれば、にがいかも知れませぬ」

「…………？」

「いえ、ご要心なさるのに、越したことはない、と申し上げて居りますので……」

「…………」

狂四郎は、茶碗をそのまま、盆へもどすと、頭をまわしてみた。

瞬間――茶店の親爺が、視線をそむけた。

商人が、つと立って、親爺へ向って行った。

親爺が懐中から匕首を抜きはなつや、狂四郎は、すばやく、甘酒茶碗を把って、投げた。

それを、親爺が、匕首で受ける隙をつかんで、商人は、躍りかかった。

組み伏せて、頸を締めあげるや、裏手へずるずるとひきずり出して行くさまを、他の旅人たち

は、茫然として見送った。

　商人が、もどって来た時、床几には、狂四郎一人が、残っていた。

「江戸からか？」

　狂四郎は、訊ねた。

「へい」

「武部老人にやとわれた者だな？」

「そうでございます」

「伊賀か甲賀あたりから出て来たように見えるが……」

「おわかりでございますか。伊賀でございます」

「忍びの者とは、むかしから、つきあいがある。敵ばかりではなく、味方になってくれた者も多いので、およその見当はつく。しかし、それにしては、商人の身ごなし、口調が、自身のものになりすぎているようだ」

「伊賀を出たのは、十七の春でございましたが、それ以来、ずっと、商人で通して居るのでございます。申しおくれました。猫兵衛（ねこべえ）と申します」

　ぺこりと頭を下げる伊賀者を眺めた狂四郎は、

「お前には、仲間が居るのか？」

「よくおわかりでございますな」

「猫がいるなら、犬や猿も居るのだろう」

「お見事でございます。猿太と犬助と申す二人が、てまえの連れになって、働いて居ります」

「その二人は、いま、何処（どこ）に居る？」

「猿太は、お茶壺行列の中間をつとめて居ります。此奴、てまえと同じように、もう二十年、折助で通して居るのでございます。犬助の方は、東海道で、巾着切になったり、馬子になったり、旅籠の番頭をやってみたり、なりわいを変えて居りますが、それもまた、てまえらにとっては、便利なことになります。……ところで、旦那は、お茶壺道中に、もう、ひと泡噴かせられましたそうで——」

「喧嘩を売ったにすぎぬ。むこうは、すぐに、買っては参らなかった。武部老人は、お前たちに、あのお茶壺行列を尾け狙わせて居るのか？」

「左様でございます。てまえは、貴方様に、お報せするように命じられて、おさがしして居りました。醒井までの足どりは、わかったのでございますが、それから、何処に——？」

「琵琶湖のほとりで、漁師の小屋に泊めてもらっていた。……茶壺駕籠の中には、茶壺のほかに、何がかくしてあるか、中間になって加わっている猿太という忍びは、もうつきとめて居るのであろう？」

「へい。人間でございますよ」

「人間？」

「相違ございませぬ。猿太が、その目で、ちゃんと見とどけて居ります」

「どんな人物だ？」

「男でございます。中年の、立派な顔だちの、なにやら偉ぶったところのみえる御仁だそうで——」

「…………」

狂四郎の脳裡に、一人の人物の姿が描かれた。

「てまえらは、武部様から、行列に黙ってつきまとって行き、いずれ貴方様にお会いしたならば、指示を仰ぐように、と命じられて居るのでございます。犬助の方は、草津で、お待ちして居る筈でございます。……どのような御命令でも、やれと仰言ることなら、やらせて頂きます」

狂四郎は、それにはすぐにこたえず、しばらく、湖水へ視線を送っていたが、

「お前たちは、金のために働いて居るのか？」

と、訊ねた。

「金のため、と仰言られると、ちょっと当惑いたします。てまえらは、つまり、これが、天職、と申してはチト大袈裟でございますが、物心ついた時から忍びを教えられて、育って来た者でございますから、その術で生きてゆくよりほかに、すべを知りませぬ。大工が家を建てる、指物師が箪笥をつくる。まあ、それと同じで――」

「絶えず、生命の危険をともなっている職ではないか」

「それアしかたがございますまい。忍びでございますからね」

おのが生きる道に、みじんの疑念も抱いていない様子であった。

「そういうものか」

狂四郎は、苦笑した。

「失礼乍ら、旦那だって、てまえらと同じような生きかたをしておいでのように、お見受けいたしますが……？」

「あいにくだが、おれは、いま自身の為していることを、絶えず疑い乍ら、生きている。こうして、湖水を眺めているおのれが、真のおのれである自信はない」

「むつかしゅう、お考えなので――？」

猫兵衛という伊賀者は、陰惨なまでに暗い翳を刷いている狂四郎の、彫の深い横顔を、とまどいつつ、ぬすみ視たことだった。

三匹の忍者

一

東海道と中仙道の分岐する草津宿をむこうにのぞむ街道に、どっと通行人があふれていた。

半刻前に、お茶壺行列が通りすぎて、ようやく通行禁止が解かれたのである。

その夥しい通行人の中に、ふところ手の眠狂四郎と商人そのものの伊賀者猫兵衛が、交じっていた。

二人は、わざと、守山で、お茶壺行列を先にやりすごしたのであった。

「旦那――」

猫兵衛が、背後から呼んだ。その口は、殆ど動いていなかった。

「お茶壺の代りに、駕籠に乗っている人間が、何者か、見当がついておいでございますか？」

「思いつく人物は一人、居るが、はたして、その人物かどうか、わからぬ」

「その人物だったら、どうなさるおつもりなので――？」

「さあ、どうするかな？」

「行列に加わって、中間をつとめている猿太は、台所道具をかついで居ります。そのお道具の立派さと、炊事のもののしさを見て、これは、お茶壺奉行が摂る食事じゃない、と猿太はさとっ

た由にございます。……警戒は厳重をきわめて居ります。今夜の泊りは、大津でございましょうが、本陣に踏み込むことは、容易ではございますまい」

狂四郎は、猫兵衛の話をきき乍ら、

――やはり、駕籠に乗っているのは、あの人物に相違ないようだ。

と、思った。

大名行列がいかに莫大な費用を必要としたか、というのは、寝具、炊事道具、そして、その食料すべて、持参したからであった。本陣は、ただ、泊めるだけであった。大名の中には、風呂桶まで持参するしきたりを持つ家もあったのである。

お茶壺奉行も、大名に準じた道中をしているが、炊事だけは、本陣にさせている筈であった。沿道に炊煙をあげさせぬくらい、臭気を避ける道中であるから、自身が本陣に到着してから、煮物焼物の匂いをただよわせる道理がないのであった。本陣の方で、前日のうちに、あらかじめ、料理をととのえて、待っている。

大名行列に準ずる以上は、形式として、炊事の道具も持参しているが、それを使用することは、まず、ないのであった。

にも拘らず、このお茶壺行列は、炊事をし、そのしかたがものものしい、という。

お茶壺駕籠に身をかくしている人物が、摂るからである。そして、その人物が、大名以上の身分地位にあるからである。

「どうなさいます？　京に入る前に、本陣へ踏み込んで、その正体をつきとめることになさいますか？　それとも、京に入るのを、お待ちなさいますか？」

猫兵衛が、訊ねた。

狂四郎は、こたえなかった。

その時、行手に、

「馬をやらんけえ、馬を――」

殊更な大声で、客を誘う馬子が見受けられた。

「犬助のやつ、今日は、馬子になって居る」

猫兵衛が、呟(つぶや)いた。

瘦(や)せた老馬を曳(ひ)いた馬子が、前に来ると、猫兵衛が、あたりにさとられぬように、合図した。

狂四郎は、ゆっくりとすれちがいがけに、

「このおいぼれ馬を荒馬にとりかえろ。今宵酉刻(とり)すぎに、本陣へあばれ込ませるのだ」

と、ひくい声音で、指令した。

それに対して、犬助は、大声で、

「ご浪人衆、馬をやって下せえ」

と、云った。

「奥庭まで、突入させるがよい」

「よう、旦那、乗りかけちゃ下さるめえかよう」

「場合によっては、屋内へあばれ込ませてもよい」

「へん――、ふところがオケラなら、はじめっから、そう云やがれ、瘦(やせ)浪人め。……おうっ、そっちの旅のおかた、馬をやらんけえ、馬をよう――」

犬助は、はなれて行った。

「旦那、今夜、踏み込みなさるのでございますか？」
猫兵衛が、さりげない様子で、脇にならんだ。
「正体をたしかめておけば、京に於けるこっちの行動に、目処がつく」
「判りました。今夜のてまえの役割を、お教え下さいまし」
「猫兵衛！　はなれていろ！」
狂四郎は、ひくく鋭く命じておいて、歩度をおとした。
中間に大身の槍をかつがせた、どこかの藩士らしい武士が、近づいて来るのを一瞥して、狂四郎の直感が、働いたのである。

二

その武士は、侘助を一枝、右手に携げていた。
べつに、武士が花を手にして、道中しているのは、面妖しいことではない。侘助は、花も小さく、葉も小形で、上品な雅致ぶかい花であり、利休の下僕で侘助という男が、主人のために苦心してつくりあげ、利休がそれに感動して、その椿にその名をつけた、という伝説が、いかにもふさわしい花なのであった。
通行の者たちは、風流の人と眺めて、行き交っている。
狂四郎の看かたは、ちがっていた。
江戸のぐうたらな旗本ならいざ知らず、いやしくも中間に槍を持たせる身分の藩士が、右手に花は持たぬ。右手は、いつでも、刀を抜けるように空けていなければならぬ。食事を摂る時以外は、絶対に、右手に物を持たぬのである。

携えている侘助は、武器と受けとってよかった。
武士は、街道を歩く時、中央をえらぶのがならわしであった。浪人であるこちらは、礼儀として左側を——武士にとっては右側を、すれちがうことになる。
すれちがいざまに、武器を放つには、ぎっちょでない限り、右手である。
不意の襲撃を無数に蒙(こうむ)って来た狂四郎には、むこうから近づいて来た武士が、右手に侘助を携えているのを一瞥しただけで、
——敵だな。
と、直感することができた。
——そうか。
狂四郎は、合点した。
——あの侘助には、火薬が仕込んである。すれちがいざまに、おれの顔めがけて、投げつける。おれの目がくらんだ刹那(せつな)を、中間に化けた方が、槍を突きかけて来る、という寸法だな。
そう看てとりつつも、狂四郎は、ふところ手のまま、歩いて行く。
猫兵衛は、狂四郎より、五歩ばかり前に出ていた。
と——。
猫兵衛が、武士との距離をせばめて、立ちどまると、腰をかがめて、
「おさむらい様——」
と、呼びかけた。
「綺麗(きれい)な侘助でございますね。この淡い紅はなんともいえぬ趣がございます」
そう云い乍ら、顔を花に近づけた。

もうその時、狂四郎は、猫兵衛の左脇に来ていた。
武士は、一瞬、苛立ちの表情になった。
次の瞬間――、
猫兵衛が、その侘助を、武士の手から奪いとって、跳び退いた。
「なにをいたす！」
怒号する武士に応えて、猫兵衛は、笑い乍ら、
「こういたします」
侘助を、二間ばかりはなれた路傍の石地蔵へ、抛りつけた。
凄まじい炸裂音とともに、濛と白煙が噴いて、四方へひろがった。
「神戸っ！」
「おうっ！」
手妻を看破され、それを封じられた二人の刺客は、槍の穂先と刀身をひらめかして、狂四郎に肉薄して来た。
「お主ら、仕損じた狼狽のまま、この眠狂四郎にかかって来るのか」
狂四郎は、両手を空けたなりで、冷たくあざけった。
通行人たちは、その場から逃げ、遠くからは走って来て、みるみる東にも西にも、人垣ができた。
「出直すがいい。お互いに、大道芸を披露して野次馬をよろこばせるために、剣を学んだわけではない」
狂四郎は、そう忠告し乍ら、ゆっくりとあと退った。

もとより、武器を引く刺客たちではなかった。
松の並木は堤になって居り、急勾配の斜面の下は、綺麗な流れの小川になっていた。
狂四郎が、並木の一本に背をつけた一瞬、長槍が矢の迅さで、襲って来た。
穂先が、幹にぐさと突き刺さった時には、狂四郎は、すでに、並木の外に出ていた。
自ら不利の地歩をえらんだのである。
藩士に化けた刺客は、大上段にふりかぶると、じりじりと距離を詰めて来た。
狂四郎は、敵の迫るのに合わせて、すこしずつ、斜面を後退した。
見物人の目には、狂四郎の頭が沈むにつれて、ふりかぶった武士が、いかにも追い詰めたように、映った。
「えいっ！」
満身からの鋭気を、その一撃にこめて、閃光を、狂四郎の頭上へあびせた。
狂四郎は、斜面の中程に立って、身をひねりざま、抜きつけの迅業で、勢いあまって躍って来た敵の胴を薙いだ。
血煙りを宙にのこして、敵が流れへ落ちた時、中間ていの次の敵は、松の幹から抜き取った長槍を、遮二無二に突きかけて来た。
狂四郎は、流れの際まで、降りた。
刺客は、ぴたっと、穂先を宙に動かぬものにした。
狂四郎は、無想正宗を地摺りに構えて、穂先の前に、胸をさらした。
刺客は、じりっじりっと、斜面を降りた。
その折、猫兵衛が、その名のごとく音もなく、刺客の背後に迫るや、ひょいと、長槍の石突き

を摑んだ。
「むっ！」
刺客の顔面に朱が散った。
「猫兵衛、はなしてやれ」
狂四郎が、云った。
「旦那！」
「かまわぬ、はなせ。おれは、攻撃して来ぬ限り、こちらからは、斬らぬ主義を通して居る。突かせろ」
猫兵衛は、そう云われて、石突きをはなした。
刺客の運命は、前の仲間と同じであった。
高い水飛沫をあげて姿を消すのを見とどけておいて、狂四郎は、白刃を腰に納めると、並木へあがって来た。
「旦那！　てまえは、要らざるお手だすけをしたようでございます」
猫兵衛が、恐縮して、云った。
「お前が、侘助を奪ってくれなければ、わたしの目はつぶれていたかも知れぬ」
狂四郎は、何事もなかったかのように、街道へ出た。

三

静かな宵であった。
お茶壺行列を迎えた大津本陣は、ひっそりとして、物音ひとつひびかせなかった。いかなる大

大名を泊めた場合よりも、心を配って、息をひそめるようにして、その出発を待たねばならぬのは、本陣側としては、迷惑な客というべきであったろう。

大津本陣渡辺九郎左衛門邸は、いわゆる基本型の構造を持っていた。

建坪だけでも、五百坪以上あり、堂々たる表門、式台のある大玄関、部屋は百畳敷きの大広間を中心にして、およそ十数室。

座敷構えの最も奥まった位置に、上段の間である書院が設けられてあり、控え入側という次の間を置き、畳敷き広縁の前は、広い奥庭になっていた。

お茶壺駕籠三梃は、そのまま、書院にかつぎ込まれ、お茶壺奉行と用人と二人の侍女のほかは、近づくことさえ、禁じられていた。

控え入側には、六人の宿直の士が、詰めていたが、ただの護衛番士でないことは、その厳しい目くばりと挙措で明白であった。

暮六つ（午後六時）の梵鐘が鳴り出した時、長廊下を、侍女二人が、食膳をささげて、進んで行った。

書院の前には、用人大久保久兵衛が立っていて、

「大事ないの？」

と、念を押した。

「はい。ございませぬ」

侍女たちが、書院に入るのを待って、大久保久兵衛は、奥庭へ降りて、離れへ行った。

「奉行――」

呼びかけると、内から、「入られい」という声が応じた。

お茶壺奉行島田将監は、まだ三十年配の人物であった。

大久保久兵衛が、入って行くと、島田将監は、さきに頭を下げて、

「お役目ご苦労に存じます」

と、挨拶した。

奉行と用人との態度が、逆になっていた。

この行列のまことの指揮者は、大久保久兵衛の方であった。

「貴公、配下に幾度(いくたび)も、眠狂四郎を襲撃させて、失敗して居るが、京に入るまでに、討ち果さねば、貴公自身が、責(せめ)を負うて、切腹をしなければならぬぞ！」

大久保久兵衛は、語気は静かであったが、容赦のない言葉をあびせた。

島田将監は、すこしも動揺せぬ態度を示した。

「覚悟の上にて、お目付のご依頼をお引き受けつかまつったからには、必ず――」

大久保久兵衛は、その誓言はもうききあいた、という冷淡な表情で、

「わしは、江戸を発足する時、お目付に、これだけの護衛では、手薄で、心もとない、と申し上げたが、やはり、そうであった。眠狂四郎に気づかれたならば、ただではすむまい、とおそれていたが、はたして、巨大な岩となって行手をふさいだ観がある。これを除くことは、殆ど不可能かとさえ思われる。……貴公自身、実は、内心そう思っているのではないか？」

大久保久兵衛は、薄ら笑ったが、その細い目は冷たく底光っていた。

「大久保殿、お言葉が過ぎはしませんか。柳生新蔭党を、あまりに過小に評価されて居りますぞ」

島田将監は、そう云いかえすや、やおら起って、床の間の刀架けから、おのが差料を把(と)った。

大久保久兵衛は、この男が一体なんの目的で、そうするのか、判らぬまま、いささか無気味な思いをする面持になった。
「えいっ！」
突如、島田将監は、抜く手も見せず、白刃を畳に突き通した。
充分の手ごたえがあった。
さっと、抜きとるやいなや、将監は、奔って、障子をひき開けた。
「くたばったか！」
将監は、庭へ跳んだ。
「生きて居るなら、出て参れ！」
呼びかけたが、床下に気配はなかった。
「やはり、くたばったな」
将監が、呟いた――とたん、室内に、異変が起った。
畳がはねあげられ、黒い影がとびあがりざま、ぴたっと、大久保久兵衛の背中に、貼りつくように、蹲ったのである。
「大久保殿っ！」
流石の柳生新蔭党の頭首が、愕然となった。
大久保久兵衛は、手ひとつ動かす余裕もなかった。
しかし、お目付佐野勘十郎から、大事を委任された人物であるだけに、表面はすこしも動じなかった。
「してやられたの。わしが、虜囚となるとは――」

将監は――将監も、その場に釘(くぎ)づけになったままで、じっとすかし視て、それが、行列に加えた中間の一人であるのをみとめ、

「此奴(こやつ)が、敵方であったのか！」

と、呻(うめ)いた。

猫兵衛・犬助とともに、武部仙十郎にやとわれた伊賀者猿太は、かなりの重傷(ふかで)を負い乍らも、呼吸のみだれもみせず、

「お年寄りには、お気の毒だが、こっちが安全な場所へ遁(のが)れるまで、一緒に行って頂きますぜ」

と、起つように促した。

「無駄なあがきは止(よ)せ！」

将監は、きめつけた。

「無駄なあがきかどうか、やってみなけりゃ、わかりませんぜ、旦那――」

「貴様、伊賀か甲賀だな」

重傷を負い乍ら、呼吸をみださぬ曲者(くせもの)を、将監は、そう看破した。

猿太は、大久保久兵衛を立ちあがらせると、

「庭の旦那、遠くへはなれて頂きましょう。床下でうかがっていた限りでは、こっちのお年寄りの方が、本当のお奉行らしい、お前様のさし出た振舞いで、不幸な目に遭わせちゃ、申しわけござんすまい。お年寄りてえのは、さき行き短いだけに、一年半年一月一日が惜しいものだ」

からかうにも似た言葉を、ぬけぬけと吐いてみせた。

対手(あいて)は、忍びの者である。将監は、やむなく、行手をあけた。

猿太は、ぴったりと大久保久兵衛に吸いついて、庭へ降りた。

「足もとが暗うござんすぜ。気をつけなせえ」
猿太は、余裕のあるところをみせた。
しかし、猿太が、主導権を握っていたのは、十歩あまりを進むまでであった。
石塔の蔭から、手裏剣が放たれ、猿太の右肩を貫いたからである。
衝撃で、大久保久兵衛を突きとばして、猿太は、地面を一転二転した。
将監は、その隙をのがさず、馳(は)せ寄った。
「無駄なあがきであったな、忍者！」
あざけられた猿太は、のろのろと起きあがって、肩から、手裏剣を抜いた。
「負け申した。どうとでもされい」

贋(にせ)者(もの)寛容

一

「狼藉(ろうぜき)っ！」
「入れるなっ！」
「ああっ！」
「狂って居るぞっ！」
「鉄砲を——」
怒号と悲鳴が、表の門の内で起ったのは、その折であった。

騒擾は、そこだけですまなかった。

「何事か？」

大久保久兵衛が叫び、島田将監が、配下に猿太をまかせておいて、奔り出そうとした時には、門内へ躍り込んだ一頭の悍馬は、驀地に、奥庭へ突入していた。

悍馬の腹には、黒い装束の男が、影になってぴったりと吸いついていたのだが、暗い中での疾駆に、殆どの人が、みとめてはいなかった。

「はて？　あれは――？」

と、わが目を疑った者も、それが人間であることを見きわめる余裕はなかった。

島田将監は、悍馬が、書院めがけて疾駆して来るや、真正面から、その脚を両断すべく、身構えた。

とたんに、悍馬は、方角を転じて、非常時用の退口門に向った。

「お――曲者っ！」

将監は、悍馬の腹に吸いついた黒影を、見分けて、叫ぶや、

「大久保殿っ！　上様を、はやくっ！」

と、忠告した。

大久保久兵衛は、大急ぎで、広縁へ跳びあがると、書院に入って、障子を閉めた。

そこにいたのは、贋の西城府――家慶にまぎれもなかった。のみならず、一人だけではなく、美しい女性が、つき添うていた。

「上様、御身辺をおさわがせつかまつり、恐縮至極に存じまする。万が一の御要心に、かくし部屋の方へお移り頂きとう存じます」

大久保久兵衛は、「ご免――」とことわって、二間床にあがると、山水の掛物を巻きあげて、壁をひとつ突きした。

壁は、うしろへさがり、黒い穴をあけた。

贋家慶は、こめかみを微かに痙攣させて、何か云おうとしたが、その代りに、さっと立ち上って、

「玉――、参れ！」

と、命じておいて、床壁があけた黒い穴に入った。

階段になって居り、降りたところに、十畳あまりの座敷が設けられていた。

すでに灯は点けられていて、飾りつけも調度も、すべて、上の書院に劣らぬ立派なつくりであった。襖のむこうは、寝所になっているに相違ない。

本陣には、必ず、こうした地下のかくし部屋がつくられているのであった。

贋家慶は、上段の座に就くと、苛立たしげに、

「道中、いずれ、こういう騒ぎが起ることは、わしには、わかって居ったぞ。何処のどやつか知らぬが、わしの頸根を、じわじわと締めて来居るわ。……くそ！」

いきなり、脇息を摑んで、畳にたたきつけておいて、

「玉っ！　寄れ！」

と、叫んだ。

つき添うた女性は、その白い肌いちめんに、身を売った大名旗本の家紋を入墨した紋ちらしお玉であった。

眠狂四郎の思案で、お玉は、名人彫政の娘おきちとともに、千代田城西の丸御殿に奉公に上り、

贋家慶の面前で、恥毛を剃りおとした秘部に、おきちの手で葵の紋を彫ってもらい、そのまま、大納言家慶付きとして、とどまり、このたび、あるじが内密に京に上るにあたって、特に、指名を受けて、供をしているのであった。

「玉！　そちほど、小面憎い女子めは、またと居らぬぞ！」

贋家慶は、お玉がそばに来ると、その手を摑んだ。

「なにを、そのように、お慍りでございますか？」

「しらばくれるな、莫連めが！　そちは、大名旗本どもに次つぎと春をひさいで、その家紋を肌に彫ったと申して居ったぞ。にも拘らず、葵の紋を彫らせてつかわしたこのわしには、今日まで、肌身を許さぬ。わしが、腕ずくでわがものにしようといたせば、舌を嚙んで果てるとおどかし居る。……存念の程、今宵は、きくぞ。なにか、かくして居ろう。申せ」

「上様、その理由は、もういくども申し上げた通りでございます。上様のおそばにおつかえするようになりましてから、わたくしの心が変ったのでございます。おなさけを下されたお大名がたお旗本衆の御家紋を、つぎつぎと肌に彫って、得意になっていた自分が、はずかしくなったのでございます。せめて、最後に彫らせて頂いた貴い御紋だけは、けがすまいと心にきめて、それゆえに、上様のおなさけを頂くことを、必死にお遠慮申し上げて居るのでございます」

「黙れ！　わしは、そちごとき莫連にだまされるようなうつけではないぞ。わしに抱かれるのを拒絶するに就いては、なにか他にかくして居る存念があるに相違ないのだ。……このかくし部屋は、そちを抱くには、ふさわしい場所だぞ。今宵は、是が非でも、そちをわがものにしてみせるぞ！」

「上様。心の燃えぬ女のからだは、死人と同じでございます」

「かまわぬ！　舌を噛むと申すなら、噛んでみせい！」
贋家慶は、いきなり、お玉をねじ伏せようとした。
「おゆるしを――」
お玉は、しおらしげな身ぶりで、拒もうとした。

二

贋家慶は、遮二無二のしかかって、片膝を、はだけたお玉の脛の間へこじ入れると、裳裾をひき裂くように肌から剝ぎ、さらに、下裳をむしった。
「こやつが！　ここへ、葵の紋を彫らせ乍ら、改心したなどと殊勝面して、わしをじらせにじらせ居って……、もう、許さぬぞ！」
興奮で喘ぎつつ、贋家慶は、ふくよかに盛りあがった秘部を、鷲摑みにし、次いで、一指を、二本の柔襞の蔭の亀裂へ、もぐらせようとした。
とたん――、
「次代の将軍家が、雲助人足の真似をされる」
冷やかな声が、六曲屛風をへだてて、ひびいた。
「な、なにっ！」
愕然となって、贋家慶は、はね起きざま、屛風を蹴った。
端座して、腕ぐみしている黒の着流しの浪人者の異相を、睨みつけた贋家慶は、睨みつけ乍らも、なぜとも知れぬ悪寒が、背すじを匍い降りるのをおぼえた。
「何奴だ、おのれ？」

と存じます」

「何用だ？」

「お目付佐野勘十郎の口から、多くの血でけがれたこの仮名が、あるいは、お耳に入っているか

「眠狂四郎?!」

「眠狂四郎とおぼえておいて頂く」

「お手前様が、贋の西の丸殿であることを、知っている者がここにいる――それを、申し上げておきたく、参上いたしたのです。お手前様は、ただの贋者ではなく、正しくは、西の丸殿とは双生児。四十年前、於楽の方という将軍家側室が、双生児を産んだ。双生児の生誕は、町家に於てさえも、忌むべきこととされ、後から生れた弟の方は、闇に葬られる慣習がある。まして、将軍家世子ともなれば、双生児生誕は、かたく秘される。父親である将軍家にも知らしめぬ措置がとられ、後子は、あわや、闇に葬られようとしたが、大奥の老女の一人が、葬るにしのびず、こっそりと、城門から、かかえ出して、何処かにかくした。やがて、その後子は、遠く蝦夷まで連れて行かれ、エトロフ島に建てられた館で、育てられた。すなわち、お手前様徳川敏次郎殿です。……お手前様が、いかなる経緯によって、実の兄とすりかわって西の丸殿になりすまされたか、こちらの知るところではないが、西の丸殿になりすまされてみて、お手前様が、所詮贋者でしかない苦痛をあじわっておいでではないか、と拝察つかまつる」

「………………」

贋家慶は、何か云いかえしかけたが、ただ、眉宇をひきつらせたばかりであった。

「どう威張りかえってみたところで、おのれは、佐野勘十郎にあやつられている木偶にすぎぬ。お手前様は、すでに、そう感じておいでではなかろうか、と推測つかまつる。……もとより、お

手前様もまた、十一代の血を継がれた御仁であるからには、必ずしも、贋者とは申せぬことです。われわれごとき素浪人から眺めれば、弟が兄にとって代っただけのこと、べつにさしつかえはないことのように思われます。……しかし、お手前様が、やがて、十二代の将軍職を襲われたあかつき、お手前様を操っていた傀儡師が、つかむ権勢は、想像するだに、肌が粟立つというものです。お手前様は、そのおそろしさを、想像されたことがおありであろうか。……シャルシャム館ですごしていた頃の方が、西の丸で贋者としてくらすよりも、はるかに、幸せであった、と考えられたことはないであろうか。……如何でしょう？」

狂四郎は、凝と、贋家慶を見据えた。

贋家慶は、その冷たく冴えた眼眸を、受けとめるだけで、全力をあげなければならなかった。

その眼眸の中へ、惹き込まれ、上半身がのめりそうになるのを、懸命に怺えつつ、

「その方ごとき、素浪人に、指図は、受けぬ！」

と、叫んだ。

「指図などはして居りません。ご自身で、木偶であるよりは、人間である方がよい、とお考えになっては如何であろうか、とご忠告申し上げて居るにすぎません。……わたしに指図されて、その通りにすれば、それは、依然として、木偶であるに過ぎぬ。お手前様ご自身が、決意されて、ご自身の力で、人間に還るならば、と申し上げて居ります」

「うるさいワ！　さかしらめいた口をたたくな！　わしは、内大臣大納言家慶だ！」

喚きたてるのを冷然とききながして、狂四郎は、

「そのまことの内大臣大納言家慶殿は、何処に居られるか、お手前様は、ご存じでありましょうか？」

「知らぬ！　わしが、家慶だ！」

三

階段を降りて来る跫音(あしおと)が、ひびいたのは、その折であった。

「上様——」

大久保久兵衛の声が、檜戸(ひのきど)ごしに、きこえた。

「騒擾は、おさまりましたゆえ、そろそろ、書院の方へ、おもどりあそばしまするよう——」

贋家慶は、狂四郎を睨みつけて、眉宇を痙攣させていたし、お玉は、恐怖の表情になっていた。

しかし、狂四郎だけは、腕を組んだまま、端座をつづけて、贋家慶の出様を、じっと待つ不敵な態度をみせていた。

「上様——」

大久保久兵衛が、返辞を促した。

「……む！」

贋家慶は、激しく迷う様子になった。

曲者がここに居る、と叫びたい衝動に駆られつつ、必死にそれを押えているために、満足な返辞ができかねている気色であった。

「上様——、如何あそばしました？」

大久保久兵衛は、内部のけはいに、怪しいものを感じたようであった。

「う——、い、いや、なんでもない」

こたえる贋家慶の声音が、ふるえて、それが、大久保久兵衛の神経を刺戟(しげき)した。

「入りまする」
「ま、待て――」
とどめておいて、贋家慶は、とっさに、お玉にとびかかった。
「上様っ！」
大久保久兵衛の呼び声が、険しいものになった。
贋家慶の返辞はなかった。
「入りまするぞ！」
さっと、檜戸をひきあけた――とたん、大久保久兵衛は、ぐっと、生唾をのみ込んだ。
まず、あられもなく、畳の上にひろがった裳裾と下裳の裏と、そして、太股（ふともも）のあたりからむき出された白い豊かな下肢が、目に映った。
贋家慶は、その上へのしかかるような姿勢になって、片手を、あらわになった女の股間（こかん）へ、さし入れていた。
「御無礼つかまつりました」
大久保久兵衛は、あわてて、後退して、檜戸の外へ出た。
階段をのぼって行く跫音をきいて、狂四郎は、衝立（ついたて）の蔭から、姿を現わした。
贋家慶は、お玉の上から、身を起すと、いかにもいまいましい形相で、狂四郎を睨みつけ、
「わしが、妥協した、と思うな」
と、云った。
「御配慮のほど、忝（かたじけ）なく存じます」
狂四郎は、つとめて鄭重（ていちょう）に、礼をのべた。

「わしは、あの爺いが、虫が好かぬ。それゆえ、その方がここにひそむことを、かくしてやったのだ。それだけのことだぞ。わしが、その方に屈服したのではないぞ」

贋家慶は、苛立たしげに、云った。

狂四郎は、軽く一揖したばかりであった。

翌朝——陽がさしそめた頃あい。

狂四郎は、山科の次にある立場・奴茶屋の落間の床几に、腰を下ろしていた。

店内の壁には、無数の箭鏃が飾られてあるのが、この茶屋の特長である。先祖が、片岡丑兵衛という射術の名人だった、という。

狂四郎が、入ってすぐに、猫兵衛が姿をみせて、かたわらに腰を下ろした。

「ゆっくりなさっておいでで、大事ないのでございますか？」

「京に入るまでは、襲っては来ない、とみた」

「てまえどもの、次の仕事を、お教え下さいまし」

「お前たちは、わたしの指令によって、お茶壺行列の正体をつきとめれば、任務はおわるのではなかったのか？」

「それが……」

猫兵衛は、笑った。

「実は、てまえも犬助も猿太も、忍びにあるまじき料簡を起したのでございます」

「どういうのだ！」

「まことに失礼でございますが、貴方様は、てまえどものようなやからを惚れさせる御仁でござ

います。……貴方様の家来になって、この——何やら面白そうな騒動に、ひと働きしてみたくなったのでございます。三人とも、これは、珍しく、意見が一致したことでございます。ふだんは、名前通り、猫犬猿の仲のわるさは、相当なものでございますがね」

「…………」

狂四郎は、ちょっと、沈黙を置いた。

「如何でございましょう。……いえ、なに、報酬欲しさに働きたいと申しているのではございませぬ。貴方様に、一臂をお仮しするのが、うれしいのでございます。忍びの者でも、時には、欲抜きで、生甲斐を見出すことはございます」

「わたしは、手下は持たぬ。……しかし、こんどの場合は、どうやら、お前らの力を借りた方が、解決が早そうだ」

「是非、ひとつ——」

「たのむか」

「ご命令をお待ちして居ります」

猫兵衛が、先に出て行くと、しばらくして、客を乗せた老いぼれ馬を曳いたむさくるしい風体の馬子が、狂四郎の前を行き過ぎて行った。犬助であった。そ知らぬふりで、間のびた道中歌を、胴間声で唄い乍ら、遠くなって行った。

馬上の客は、いかにもくたびれはてたような老婆であったが、狂四郎は、

——手負うた猿太だな。

と、看破って、ひそかに、微笑した。

猫兵衛は、三人の仲はよくない、と云っていたが、いざとなると、おのが身をなげうっても仲

間を助けるところに、そこいらの隣人同士とはちがった強い絆があることの証拠であろう。

狂四郎は、犬助が、二三町も行ったのを見はからって、茶店を出た。

その時、かなりの急ぎ足で、三味線かかえた門付女が、狂四郎のあとからやって来た。

狂四郎のかたわらに出ると、歩度を合わせた。

狂四郎は、べつに、その鳥追い姿へ、一瞥もくれなかったが、すぐに、それが何者か、知っていた。

「旦那――」

女の方から、話しかけて来た。

「旦那って、ほんとに、冷たい御仁なんですねえ」

お玉であった。

贋家慶のそばから逃げ出して来たのである。莫連だけあって、変り身はすばやかった。

「まだ、市井へ逃げもどれ、とは命じて居らぬぞ」

「だってさ、もう、あたしゃ、昨夜、旦那のお顔を見たら、我慢できなくなっちまったんです。

……かんにんして下さいな。あん畜生におつかえ申し上げているのは、つくづくいやになっちまって……」

「あの人物は、べつに、嫌悪すべき気象の持主ではないようだ」

「それは、殿方の目でごらんになっているからでしょうけど、あたしだって、これで好き嫌いははっきりしている女なんです。あん畜生は、あたしの最もきらいな、ほんとに虫の好かない男なんです。旦那が、そうしろ、とお命じになるから、あたしゃ、やってはみたけど……、ねえ、旦那、あたしが肌身を許さないのは、よくよくのことだとお思い下さいましな」

「おねがいです。せめて、京まで、お供をさせて下さいまし」
「………」
「あたしは、旦那に惚れたから、やれと仰言ることを、死ぬ覚悟でやったんです。ちっとは、おなさけをかけて下さってもいいと思うのだけど――」
「………」
「ねえ、よござんすね、お供をしても――」
「おれについて来れば、いずれ、生命を落すはめになるぞ」
「旦那のためなら、たとえ、火の中、水の中――あたしゃ、よろこんで……、ああ、あたしのような女でも、こんなせりふを、心から吐けるんだねえ。うれしい！」

針

一

眠狂四郎は、京都町奉行所の書院で、奉行寺沢内膳正と対座していた。
瘦せこけて、顔色のわるい、鷲鼻の、坐っていても、絶えず、からだのどこかの部分を動かしているこの町奉行とは、二年前に、知己になっていた。光格上皇が在す仙洞御所内に起った事件を、たのまれて、解決したことがある。
それは、内緒窮迫した御所が、美しい姫君を、大坂の豪商辰巳屋久左衛門へ、三千両で、売っ

た、といいまわしい秘密であった。狂四郎が、調べてみると、姫君は替玉であり、辰巳屋久左衛門は、替玉を承知で、三千両で買った、というのが真相であった。

町奉行寺沢内膳正は、真相が判ると、この事件が世間に洩れぬように配慮して、仙洞御所が三千両の臨時収入を得たことは、所司代にも報告せずに、不問に付したのであった。

この寛大な取りはからいで、狂四郎は、内膳正を、信頼できる人物と、看て取った。

京都の支配者は、所司代であった。禁中の守護、皇室、公卿、門跡などに関する幕府の事務をおこない、さらに、五畿内、丹波、播磨、近江八箇国の幕府直轄地の統治、西国三十三箇国諸侯の監督など、広い権限を与えられている要職であった。

所司代は、大坂城代、若年寄、奏者番を経て、この職に就く。げんに、老中筆頭水野越前守忠邦が、大坂城代・京都所司代・西の丸老中という出世の順序を踏んでいる。

しかし、所司代職は、実際には、名目をたてるだけで、実務は京都町奉行にまかせていた。所司代自身、老中の座を狙うために、一年の大半は、江戸城内にいたのである。

したがって、京都にあっては、町奉行が、事実上の権力者であった。

町奉行は、禁裏御所の警固を第一目的として相勤める、ということになっているが、実際は、御所方賄い、物入りの増減の調査、公卿方の動静の監視など、目付の役目もつとめた。さらに、五畿内の寺社朱印を指揮し、諸宮門跡といえども、その下知に従わせた。所司代に代って、西国諸侯に対する探題の任務をはたすこともあり、また、山城、大和、近江、丹波四箇国は、その支配下にあったので、公卿領であろうと、大名領であろうと、容赦なく、取締りの権力をふるった。摂家、宮方、清華、その他堂上公卿の行跡は、すべて、町奉行の監視の中に置かれるのであっ

た。

その勢威は、他の遠国奉行の比ではなく、大臣といえども、遠慮したものであった。

寺沢内膳正は、三年前、京都所司代が交替するにあたって、後任の本荘伯耆守宗発から特に懇望されて、大坂町奉行から転じて来た人物であった。

「まず、お主の話から、きこうか」

内膳正は、すでに、武部仙十郎から密書を受けとって、西城府家慶が贋者であることを知っていたが、それを口にせず、狂四郎に口をひらかせることにした。

坐るとすぐに、せかせかした口調で、促したのである。

「お奉行には、西の丸殿が贋者であることを、すでにご承知と存ずる」

狂四郎は、云った。

「うむ。武部老から、知らされた。あきれたのう」

「西の丸殿が、贋者に代ったのは、昨年春、京へ上られた時と、およその推測がついて居ります」

昨年春、大納言家慶は、将軍家の代理として、家斉が左大臣に、自分が内大臣になったお礼に、上洛して、参内した。その時を境にして、人柄が一変してしまったのである。贋者がすりかわったからである。

「武部老の書状には、何者が、この企みをやってのけたか、ふれて居らぬが……、何者だな？」

内膳正は、狂四郎を見まもった。

「公儀目付に、佐野勘十郎と申す利け者が居ります。四年前までは、京都所司代の与力であった由。この男が采配をふるったのは、まぎれもないことです」

「ふむ――」

大きくうなずいてから、内膳正は、しきりに、貧乏ゆすりをした。

三年前に、京都所司代は、永井肥前守尚佐から本荘伯耆守宗発に交替している。

永井尚佐は、京都所司代から、若年寄に転じて、今日に至っている。佐野勘十郎は、永井尚佐が、若年寄になるにあたって、所司代屋敷の与力から公儀目付に、異数の抜擢を受けたのである。

「わたしが、耳にしたところでは、若年寄、奏者番を経て、京都所司代になるのが順序だとか。……ところが、永井肥前守は、その逆の道順を辿って居る。これが、くさい」

「成程、そういえば、そうだの。……永井殿は、昨春のご上洛に、たしかに、お供の筆頭として、ついて来られた。目付になった佐野勘十郎も、供に加わっていたに相違あるまい。若年寄と目付が共謀すれば、本物と贋者をすりかえるのは、造作はあるまい。瓜二つだそうだし、贋者の方は、その日のために、習練を積んでいたであろうし、な。……この内膳正が、夢にも気づかなんだことだ。迂闊、迂闊――」

狂四郎は、自分が調査した限りの事実を、述べてから、

「この贋西城府が、明日、お茶壺行列の駕籠にかくれて、上洛いたす」

と、告げた。

「ほう……、どういうのであろうな、それは？」

内膳正は、拳で膝を叩き乍ら、首をかしげた。

「なぜひそかに上洛して来たのか――これは、お奉行に、推理して頂きたく存ずる」

「ふむ――」

内膳正は、膝を叩くのを止めたかわりに、別の手で、しきりに、無精髭を撫でまわしていたが、

「そうか。あれかも知れぬ」
と、云った。
「将軍家ご自身が、参内されて、お礼言上をなされた際、天子様には、そのおよろこびを、歌によまれて、お手ずから、色紙にしたためられ、左大臣家斉殿と書き入れられるならわしがある。……昨春、西城府が、参内された時、天子様には、左大臣宛と内大臣宛の二枚の色紙を贈られた筈。ところが、これが、本物から贋者へ渡されなかったのであろうな」

二

すなわち――。
贋者の家慶としては、天皇から賜わった色紙を所持していれば、自分が本物である、ということの証左になるわけであった。
老中筆頭水野越前守忠邦の目が、あきらかに疑惑の色を刷いているのに、気がついた若年寄永井尚佐は、佐野勘十郎と密議して、贋家慶をひそかに上洛、参内させて、あらためて、天皇から色紙をたまわるように工作した。
内膳正の推理は、それであった。
狂四郎は、合点した。
「お主は、大津本陣で、贋者が、悪玉の役をつとめるにはふさわしくない小心な、お人好しである、と看た、と云ったが、わしの意見はいささか、ちがう。悪玉の役を演ずる小心者ぐらい、しまつにおえぬものはない。ましてや、その気象が、日蔭者として育ったために、歪んでいるとすれば、これは、いよいよ、手に負えぬ。……上洛を好機として、本物とすりかわってもらえれば、

これに越したことはないが、本物の行方が見当もつかぬのでは、話にならぬの。……まことの西の丸殿が、生存されていることは、疑いを入れぬ、とお主は確信して居るのだな？」
「すでに死亡されているならば、佐野勘十郎が、あれほど執拗に、この眠狂四郎が西へ上って来るのを阻止しようとはしなかった筈です」
「成程――。さて、そのお行方だが――どう見当をつけるかの？」
「………」
狂四郎は、わざと、こちらからさきに、探索手段を口にすることを避けた。
内膳正は、やたらに貧乏ゆすりをつづけていたが、ついに、投げ出すように、
「わからん！」
と、云った。
西城府家慶が、上洛して、五日間をすごしたのは、二条城であった。
その五日間は、京都町奉行職である寺沢内膳正も、二条城に詰めていた。本物が贋物とすりかわる隙は、絶対になかった筈である。
もとより、参内した時に、すりかわったとは考えられない。
不意に、内膳正は、立って、縁側に出ると、手を三つ、叩いた。
これに応えて、庭さきへ、するすると、ひとつの人影が、近づいて来た。
町奉行所抱えの隠密であった。
「昨春、西城府様ご上洛のみぎり、参内遊ばされた途次、お定めの道順を変更して迂回され、どこかに、小休息遊ばされたことはなかったか？」
内膳正は、訊ねた。

二条城から御所は、目と鼻の先の近さである。

しかし、道筋は、えらぼうと思えば、どのようにでも変更できる京の街なのであった。

「三度目のご参内のご帰途でございました。お行列は、烏丸(からすま)通りを反対に、今出川(いまでがわ)へお出になり、千本(せんぼん)から折れて、浄福寺にて、四半刻(三十分)あまり、ご休息遊ばされました」

隠密は、こたえた。

「よし、判った」

内膳正は、書院へひきかえして来ると、

「本物と贋物が、すりかわった場所が、判ったぞ。浄福寺だ」

「知恩院末寺ですな?」

「そうだ。西城府様は、浄福寺にて、四半刻あまりご休息なされて居る。その折、贋者とすりかわったに相違ない」

狂四郎は、頷(うなず)くと、

「では、これにて――」

と、腰を上げかけた。

「待て」

内膳正は、とどめて、

「お主一人で、本物をさがし出すことは、無理であろう。部下を与えよう」

と、申し出た。

「ご好意だけをお受けいたす」

狂四郎は、辞退した。

ます」

「わたしには、三人ばかり、伊賀者が、家来を志願して居ります。渠らを使えば、充分だと存じます」

「どういうわけだな？」

三

眠狂四郎の京都の宿は、羅城門跡と称ばれているところにある古い小さな旅籠であった。

八条から九条にかけて——東寺（秘密伝法院）の五重塔を中心にした一帯には、狭い小路に、うす穢ない旅籠や怪しげな家がひしめいていた。他国者を排斥する気風のつよい都でも、ここだけは、素姓の知れぬ者が、多勢入り込む余地があった。

「千本屋」というその旅籠は、まわりの旅籠にくらべれば、まだ、ましな方であったが、三条、四条などのそれとは比べもならぬ貧しいたたずまいであった。

あるじは、武部仙十郎が江戸から送り込んだ密偵であったので、狂四郎は、ここをえらんだのである。

一間だけしかない二階の部屋に、紋ちらしのお玉が、寝そべって、卑猥なみだら絵の枕草紙を披き乍ら、狂四郎の帰りを待っていた。

「……ふふふふ——、あら、いやだねえ、この旦那、右手がどこかへ行っちまってるよ。……面妖しいじゃないのさ、この恰好は——」

絵を逆にして、と見こう見しているうちに、お玉は、急に、隙間風に、背すじを撫でられたように、首をすくめた。

「弥生が過ぎようというのにさ、京都の夜は、底冷えがするねえ」

呟き乍ら、起き上ったとたん、背後に、人の気配を察知して、はっと、首をまわした。
坊主あたまの、筒袖に軽衫（カルサン）をはいた男が、うっそりと立っていた。
無腰で、両手にも武器らしいものを何も所持していなかった。
「な、なんだい、お前さんは？」
お玉は、恐怖に駆られつつも、空威勢を示した。
「佳（い）い女だのう。……惜しい」
「惜しい？　なに云ってやがるんだ。あたしを殺そうったって、そうは問屋がおろさねえや。あたしの肌には、葵の御紋をはじめ、三十三の大名紋が彫ってあるんだ。これが、死んで、腐っちまってたまるかい」
「あいにくだが、その皮を剝いで、なめして、百年後までのこしておく技術を、わしは持って居る」
「な、なんだって?!」
お玉は、肌が粟立った。
男は、膝をそろえて坐ると、
「惜しい！　まことに惜しい！」
と、くりかえした。
「惜しければ、殺さなければ、いいじゃないか」
お玉は、顫（ふる）え声で、云った。
「そうは、参らぬ。お前は、お茶壷行列から逃げ出した女子だそうだな。逃げ出した時に、殺される覚悟をきめて居らねばならなんだ」

「ちぇっ！　あたしゃね、眠狂四郎という浪人者に惚れて以来、かたく操を守っているんだよ。あの大納言が、あまりしつっこく、あたしを、隙があれば、手ごめにしようとするから、逃げ出したのじゃないか。男に惚れた女は、なんにも怕くなんかありやしないんだ。……お前なんぞに、おどかされて、紋ちらしのお玉が、怯えるとでも思ったら、大まちがいさ」

「西城府殿も、お気の毒なお方よのう。旗本衆の妻女を、次から次に手ごめにできたくせに、淫売女に、はねつけられて、逆上なさるとは——」

男は、薄ら笑った。

その無気味な冷酷な色を刷いた表情を、眺めて、お玉は、はじめて、心底からの恐怖をおぼえた。

「あたしゃ、死ぬのはいやだ！……殺されるのは、まっぴら御免だ！」

お玉は、叫んだ。

「よし。死にたくなければ、わしの目を視るがいい。じっと、視るがいい」

男は、命じた。

お玉は、やむなく、男の視線に、眼眸を合わせた。

男の瞳は、褐色であった。白目は、濁っていた。

凝と瞶めかえしているうちに、お玉は、魂をひき込まれてゆき、意識がうすれて来た。

「よし、そのまま、ゆっくりと、仰臥するがよい」

男に命じられると、お玉は、人形のように倒れた。

いくばくかの後、お玉は、一糸まとわぬ素裸に、剝かれていた。絖に似たなめらかな光沢を持ったその白い肌は、お玉が身を与えた大名旗本の家紋を彫ることを思いたっただけあって、比類

のない美しさであった。

「ふむ！」

男は、ひくく唸った。

胸から腹部にかけて、降鶴丸、打出小槌、花藤、竜胆、三蓋松、鷹羽、菊水、抱茗荷、九曜、水沢瀉、違柏、光琳松、六剣輪宝、八矢車、単梅……。

そして、一度剃りすてた恥毛が、うっすらと生えかかったそこには、葵の紋が、くっきりと浮きあがっていた。

「惜しい！」

男は、三度呟いた。

「生かして、白痴にでもして、大坂のげて趣味の豪商に見せれば、一万両でも惜しまずに投げ出して、買うであろうに――」

そう云い乍ら、片掌で、腹を撫でかけた――その時、跫音が階段にひびいた。

狂四郎は、階段をなかばのぼって来て、二階の部屋でなにか異変が起った、と直感した。

――お玉が、刺客に襲われたな！

しかし、べつにあわてず、階段をのぼりきると、しずかに、襖をひらいた。

まず――。

狂四郎の目に入ったのは、睡ったままで俯向いて立っているお玉の全裸身であった。

曲者は、その背中に、貼りついたようにひそんでいた。

「何者だ、お主？」

「鹿火屋鬼庵と申す」
「お主も、佐野勘十郎のやとわれ犬か？」
「貴公が、武部仙十郎のやとわれ犬のようにな――」
「女をどうする存念だ」
「眠狂四郎氏、貴公の帰って来るのが、チト早すぎたようだ。わしに、つれて行かせれば、この白い美しい刺青肌は、生けるがままに、永遠にのこしてくれたものをの」
「生けるがままに？」
「気の毒であったが、秘密を知りすぎた女子の宿運であった」
「……………」
狂四郎が、一歩進むと、鹿火屋鬼庵は、
「今宵は、貴公と勝負する武器を所持せぬ。……勝負は、後日」
そう云いのこして、お玉から、すっと離れた。
とみた瞬間には、もう窓へ跳んで、消えていた。
狂四郎は、倒れかかって来たお玉を受けとめて、そっと、仰臥させた。
たしかに、息は絶えていた。
しかし、どこにも傷はなかった。頸を締めた痕もなかった。窒息させられた苦悶の形相もなかった。
「……………？」
どうやって、殺したのか、見当がつかぬままに、その睡ったような死顔を凝視していた狂四郎は、ふと、右の耳の孔から、ほんの微かな血汐が、滲み出ているのを、みとめた。

視線を、それに近づけた狂四郎は、一瞬、この男らしくもない戦慄（せんりつ）を、おぼえた。
その耳孔には、三寸あまりの太い針が突き刺してあった。
——刀で斬るよりも、これは、むごい殺しかたではないか。
狂四郎は、鹿火屋鬼庵という男の冷酷無慚（むざん）な性格を、思いやった。
——おれの敵にふさわしい。あの男の斬りかたを、工夫しておこう。

片足遁走（とんそう）策

一

京の街なかを、いずれ高名な善知識の大僧正が乗るとおぼしい立派な駕籠が、しずかに通って行く。
べつに、珍しい風景ではない。
寺僧が一人、それに、堅気の律義らしいお店者（たなもの）が一人、つき添うている。六尺の肩の軽さで、駕籠は、空（から）と知れる。
どう眺めても、寺僧、商人ともに、その職柄そのものの顔つき、身ごなしであり、これが、伊賀の忍びの者と、看破する者は、まずあるまい。
寺僧は犬助、お店者は猫兵衛であった。
花曇りの、ほっかりと宙に満ちたあたたかさの中で、犬助は、剃りあげたばかりの青頭を、つるりと撫でて、

「どうも、脳天がうすら寒いと、おちつかぬ」
と、呟いた。
背後を往く猫兵衛が、
「坊主は、往来で、あたまなどいじらぬものぞ」
と、注意した。
全く唇をうごかさずに喋（しゃべ）るので、通行の人々には、殊勝げに沈黙を守っているとしか見えぬのであった。
「すまぬ。……馬子にも衣裳（いしょう）というが、わしはやはり、すりきれ布子で、馬を曳いている方が、似合っている。……法体（ほったい）などは、性に合わぬ」
「いやいや、よう似合って居る。むしろ、ほんものよりも、精進のあとのみえる面相なので、いささかあきれているくらいだ」
「おだてても、何も出ぬぞ。……ところで、猫兵衛、お主は、あの眠狂四郎という人物に、チト惚れすぎて居りはせぬか？」
「お主も、そうでないとは云わせぬ」
「いや、わしの方は、露見すれば、江戸城はじめ日本中が、蜂（はち）の巣をつついたような騒動になるこの事件が、面白いので、首を突っ込んでみたくなった、というのが正直なところだ。……どうもあの眠狂四郎という御仁は、うす気味わるくてならぬ」
「敵にまわせば、これほどおそろしい人物はないが、味方としては、なんとまあ、たのもしい御仁ではないか」
「それは、わかって居る。わかって居るのだが……、会っているあいだ中、わしは、畏怖（いふ）心が払

いきれぬ。猫兵衛、お主には、そんな気持は、皆目起らぬかえ？」

「わしは、あの御仁に、地獄越えの嶺(みね)の茶屋で、はじめて顔を合わせた時、――この浪人衆は、屹度(きっと)不幸な素姓に生れて、不運な育ちかたをされたが、心の奥底では、あたたかいものを持っておいでだな、と察した。それから、京までの道中を、供をしているうちに、わしのカンは中(あた)っていた、と知った」

「どんな人間でも――世間では悪党とみなされている奴でも、やさしい一面は持っているものよ」

「わしらは、人を疑う習性が、身にしみついてしまって居るが、時には、あたまから、人を信じきってしまうのも、必要ではあるまいか」

猫兵衛の口調は、沁々(しみじみ)としたものになっていた。

この伊賀の忍び者は、すでに四十を越えていた。十七歳で、故郷(くに)を出てから、その高度に練りぬいた忍びの術を売って二十余年間を生きぬいてきた者が吐く言葉だけに、世間の常人のそれとは、ちがったひびきがあった。

犬助は、まだ三十になったばかりなので、おのずから、意見がちがうのはやむを得なかった。

やがて――。

駕籠は、一条西の浄土宗・知恩院末寺の浄福寺の山門をくぐった。

本堂右手の方丈の玄関さきに、駕籠を据えると、商人の猫兵衛が、鄭重(ていちょう)な物腰で、案内を乞うた。

出て来た納所(なっしょ)に、

「大坂天満(てんま)の両替屋但馬(たじま)屋三右衛門の番頭伊助と申しまする。御住持(じゅう)様に、お目もじ致しとう存

じます。いえ、ここで、結構でございますさかい、ちょっと、お出まし下さいますわけには、参りまへんやろうか？」

「ご用の向きを、お取次ぎいたしまする」

「へえ、それが、直接にお目もじして、申し上げとうおますさかい、何卒――。こちら様へおうかがいする前に、御本山の方へおうかがいして、お願いの儀を申し上げて、それから、こちら様へまわらせて頂いたのでござりまする」

納所は、うなずいて、奥へ入った。

しばらく待たせてから、住職が、玄関に姿を現わした。

胡麻塩の顋髯をたくわえていた。色艶はいいにも拘らず、ひどく皺の多い相貌の持主であった。

「なんの御用かな？」

「へえ。卒爾におうかがいして、御無礼の儀、重々お詫び申し上げまする。……実は、てまえども但馬屋は、今年一月をもちまして、代がわりをいたしたのでございます。先代三右衛門は、大層信心ぶかい男でござりまして、御本山には、たびたび寄進させて頂いて居りましたのでございます。お金のほかにも、須弥壇の翠簾やら胡麻壇の上の天蓋やら、いろいろと寄進させて頂いたわけでございます。三年前にも、熊野の山中からさがし出した糸桜を、御境内に寄進させて頂いて居るのでございまする。……その先代が、今年はじめ、ほんの十日あまりのわずらいで、亡くなりましたのでございまするが、遺言に、御本山に、三千両寄進するように、と申しのこしたのでございまする。……四十九日の法要も、滞りなく相済みましたさかい、当代三右衛門が、本日、御本山へ寄進にうかがったわけでございまする。……御本山で、仰せられるには、あまりの多額の寄進ゆえ、京洛うちの浄土宗末寺に、すそ分けがしたい、ということでございまする。つきま

しては、てまえどもあるじは、精進あけの厄落しの宴を、祇園で催したい意嚮を持って居りますので、御本山はじめ末院の御住持様がたを、お招きしてはどうであろうか——と、こう申すものでございますから、お駕籠を用意して、お迎えに参じたわけでございます。何卒、枉げて、お越しのほどを、お願い申し上げまするでございまする」

まことしやかに、そう告げて、頭を下げた。

大坂の豪商が、本山へ三千両を寄進し、本山がそれを末寺にすそ分けするにあたって、豪商自身が、祇園の料亭に招待しよう、という。

末寺の住職にとって、こんな願ってもない誘いはない、といってよい。

「それは、ご奇特なお心がけだな。……遠慮なく、よばれることにいたしましょう」

住職は、にこやかに、承諾した。

二

半刻（一時間）も過ぎた頃あい——。

二人の伊賀者につき添われた駕籠は、祇園御旅所のある四条京極の辻から、とある横丁に入って、「河原家」という青楼の前で、停められた。

猫兵衛が、よく拭き込んだ格子戸を開けると、二階から、三味のつまびきの音が、ひびいて来た。

——もう、さきに来て居られる。

合点しつつ、猫兵衛は、駕籠から降り立った住職に、

「さ、どうぞお上り下さりませ」

と、腰を踞めた。

「但馬屋は、粋好みの御仁とみえる」

住職は、微笑して云った。

大きな料亭を避けて、わざと、こうした目立たない茶屋をえらんだことを、指して云ったのである。

「へへへ……、御住持様がたは、この方を、お気に召すのではあるまいか、と存じまして——」

僧侶たちが、ひそかに、後家や人妻と密会したり、芸妓を抱くのは、ふつうは、陰間茶屋に於てであった。

この茶屋などは、公卿がたや所司代屋敷の武家たちが利用する店ではないかと、なんとなく、そんなにおいがするのであった。

十五、六の小女が、

「おいでやす。どうぞ、お二階へ——」

と、招じた。

住職は、ゆっくりと、階段をのぼって行った。

階下から見上げる猫兵衛と犬助の眼眸が、別人のごとく、鋭いものになった。

と——。

住職が、階段の途中から、なにかの予感でもおぼえたように、頭をまわして、階下を見下ろした。

とたん、猫兵衛はお店者の表情に、犬助は寺僧の表情に、還った。

住職は、踊り場に立つと、咳ばらいをしてから、

「ご免下されよ」
と、ことわって、襖を開けた。
床柱に凭って、膝に三味線を置いていたのは、眠狂四郎であった。
「お——、これは、ご無礼。この二階には、も一部屋ござったかな」
住職は、とぼけた口調で、云った。
「あいにく、一部屋しかありませんな」
狂四郎は、こたえた。
「これは、妙なことと……。但馬屋三右衛門殿が、お待ちなされている、とうかがったのじゃが——」
「但馬屋三右衛門の代りに、この素浪人が待ち設けていた、とお受けとり頂こう」
「とは、また、これは、どういうわけでござろうかな？」
「貴僧を、だました、ということに相成る」
「…………」
「べつに、意趣があってやったことではない。貴僧の口から、一言うかがいたいことがある——それだけのこととお思い頂こう」
「なんのことでござろうか？」
浄福寺住職は、不安な表情で、首をかしげた。
「昨年春、江戸城西の丸殿が、上洛されたみぎり、三度目の参内の帰途、遠まわりをして、浄福寺で、四半刻あまり、休息された事実がある。……こちらは、調べがついて居る。かくされても、無駄だと思われるがいい」

「………」
「おみとめだな？」
「たしかに――」
住職は、うなずいてみせた。
「その際、奇怪なことが起った」
狂四郎は、対手を冷たく凝視して、云った。
「西の丸殿が休息に立寄られる前に、浄福寺の方丈の一室には、西の丸殿と瓜二つの人物がいた。……そうでは、なかったのか？　うかがいたい」
「左様なことは、絶対に――」
「なかった、と否定されるのを、承知の上で、うかがって居る。……ごらんの通り、市井無頼の素浪人が、数多の人を斬った刀をそばに置いて、うかがって居る。……正直にこたえて頂かないと、こちらの筋書きを変えねばならぬ」
「…………」
「西の丸殿と、その瓜二つの人物が、浄福寺の方丈で、すりかわった事実は、貴僧がいかに否定されても、消すことはできぬ。そのすりかわりは、住職たる貴僧が、一役買わねばできぬことも、容易に推測されるところである。……如何だ？」
「途方もない云いがかりをつけられるものじゃ。……愚僧にとっては、まるでおぼえのない話でござる」
「貴僧は、見受けたところ、相当な古狸のようだ。眉毛一本動かさずに、しらを切ってみせる。見上げたとぼけぶりと、ほめてよい。しかし、こちらは、事実を知っての上で、貴僧に念を押し

ている」

「なんと申されようと、拙僧は、全くかかわり知らぬことでござる」

「かかわり知らぬ、というのは、見て見ぬふりをしていた、という意味と、受けとってよいのか？」

「滅相もない、大納言様に瓜二つの人物が、ひそんでいたなど――、そんなばかげた、それこそ事実無根の……」

云いおわらせず、狂四郎は、つと左手をのばして、無想正宗を把った。

三

「御浪人！　そ、そ、僧職にある者に向って、むたいな振舞いに、及ばれるのか！」

浄福寺住職は、大仰な驚愕（きょうがく）と恐怖ぶりを示して、じりじりとあとずさった。

そのさまに、冷たい眼眸を当てていた狂四郎が、急に、自嘲（じちょう）の嗤（わら）いを、口辺に刷いた。

「そうか。……これは、こっちの不覚であったな」

「不覚とは――？」

「もう、猿芝居は止せ、鹿火屋鬼庵――」

狂四郎は、いまいましく吐きすてた。

とたんに、住職の態度が一変し、面相もまた、別のものになった。

「やっと、お判りになったようだな、眠狂四郎氏」

この奇妙な敵は、声音までも全くちがったものにする修業を積んでいるようであった。

「うまく、化けたものだ。感心した」

狂四郎は、なかばあきれ、なかば不快の念にかられつつ、云った。

羅城門跡の旅籠「千本屋」で、紋ちらしお玉を、最も残忍な手段で殺した鹿火屋鬼庵は、にやりとすると、小うるさげに、顚髯をむしり取ると、

「これまで、それがしの化けぶりを、途中で、看破した者は、一人もなかったが、流石は眠狂四郎氏、眼力の程、恐れ入り申した」

「こちらが、浄福寺住職を拉致すると予測して、住職に化けて待ち受けていた鋭いカンの働きに、兜をぬごう」

「なんの――」

鹿火屋鬼庵は、かぶりを振って、

「これは、ただの座興に近い――いわば、遊びに類することでござる」

と、こたえた。

「というと？」

「すなわち、貴公が、たとえ、まことの浄福寺住職を拉致したところで、本物と贋者をすりかえたのを、ただ傍観していたにすぎぬことを、白状させるだけにとどまったのでござるよ」

「…………」

「貴公が、浄福寺住職を拉致して、きき出したいのは、本物の行方でござろう？」

「…………」

「浄福寺住職ごときが、本物の行方など、知る道理があるべくもない。……眠氏、本物と贋者がすりかわった場所を、つきとめたところまでは、貴公らしい頭脳の働きだが、もう一歩さきを読むことにかけては、いささか足りなかったな」

先手を打たれ乍らも、ふしぎに、狂四郎は、腹が立たなかった。

お玉を殺した残忍な手段は許せぬが、この男自身を憎むことはできなかった狂四郎である。

「それで……お主の方のことだが、ぬけぬけと、化けて、ここまでやって来て、どう躱して、逃げてみせるのだ？」

狂四郎は、訊ねた。

すでに、猫兵衛と犬助は、この問答をききつけて、二階の踊り場へ、馳せ上って来て、身構えていた。

前に狂四郎を置き、忍者二人に退路を断たれて、なお、鹿火屋鬼庵は、平然として、みじんもあわてぬのである。

「逃走策なくて、なんで、眠狂四郎ともあろう稀代の使い手の前へ、のこのこと参上つかまつろうや」

鹿火屋鬼庵が、うそぶいた――刹那。

狂四郎は、こころみに、抜きつけの一閃を、送りつけてみた。

鬼庵は、間髪を入れぬ敏捷さで、畳を蹴ると、拡げた双手を天井板へ、両足を壁に、蝙蝠のごとく、ぴたりと吸いつけてみせた。

これは、しかし、狂四郎の目には、両断してくれ、とねがっている姿としか映らなかった。

尤も、それだからといって、いきなり、斬りつけるほど、狂四郎は、無謀でもなかった。

凝と仰いで、しばらく、動かずにいた。

「眠氏、どうして、襲って来ぬ？」

鬼庵は、あざけるように、促した。

「いたずらに、そこに貼りついているのでは、あるまい」

「左様さな。……襲って来れば、防ぎの心得はある」

それに、応えて、狂四郎が、切先を挙げて、すっと一歩出た。

瞬間――。

鬼庵の口から、光るものが噴いた。

こちらの目を狙って、飛んで来る吹針を、狂四郎が払う隙に、鬼庵の五体が、奇怪にも、その姿勢のままで、すすっと、天井へ移動した。

当然――。

狂四郎も、一方へ身を移した。

鬼庵は、絶え間なく、口から針を噴かせた。

それは、一直線に、光の列を為して、狂四郎の目を襲って来た。

狂四郎は、払いつづけ乍ら、身をもまた、移しつづけた。

鬼庵の口腔内には、いったいどれほどの数の針が含まれているのか、かぞえきれぬくらいであった。

鬼庵は、ついに、床の間の天井へ、移動した。

一瞬――、狂四郎は、矢つぎ早に飛来する針に対して、顔をそむけざま、無想正宗を、きえーっ、と鳴らした。

濡れ手拭いをはたくような肉と骨を断つ音とともに、血飛沫が、狂四郎の頭上に、散ったと同時に。

鬼庵の姿は、天井板を破って、屋根裏の闇に消えていた。

「おっ！」

「片足を――」

踏み込んで来た猫兵衛と犬助が、畳にころがった血まみれのものを、眺めて、叫んだ。

狂四郎は、頬から頸にかけて、一列に突き刺さった十数本の針を、抜き取り乍ら、斬り落した足へ、一瞥をくれた。白足袋が血まみれになっている。

「あの吹針をかわしつつ、片足を斬り落されるとはのう」

「まことに、見事な！」

猫兵衛と犬助は、感動の声を惜しまなかった。

すると――。

狂四郎は、苦笑を、頬にうかべて、

「その足を、よく視るがいい」と、云った。

猫兵衛が、蘇芳染めになった白足袋を、把りあげてみた。

「…………？」

「あっ！　これは――」

巧緻な作りであったが、義足にまぎれもなかった。

「なんと、あいつ、うまく、たぶらかし居ったぞい！」

犬助が、呻いた。

「義足をはめておいて、これを両断させ、仕込んだ犬か猫の血汐を撒いておいて、その隙に、遁走する。考えたものだ。猫兵衛も犬助も、大いに参考にするがよかろう」

狂四郎冷酷

一

「わしは、生身(なまみ)の人間だぞ！　そのことを、その方らは、忘れて居るのではないのか！」
噴くような烈しい語気で、贋(にせ)家慶――徳川敏次郎は、叫んだ。
二条城の奥御殿の上段の間に、仁王立ちになって、下座にひかえた大久保久兵衛を睨(にら)みつけているのであった。
こめかみに青筋が浮いていたし、指さきが痙攣(けいれん)していた。
「決して、上様のご人格を、われら一同忘れている次第ではありませぬ。……のう、鬼庵――」
大久保久兵衛は、背後をかえり見た。
敷居をへだてて、次の間の襖(ふすま)ぎわに、正座しているのは、坊主頭の鹿火屋鬼庵であった。
「口さきでは、ごまかされぬ。その方らが、今日までの、わしに対する態度は、決して真意のあるものではなかった。それぐらいのことが看てとれぬわしではない」
「いったい、どうせよ、と仰せられます？」
「わしは、佐野勘十郎に踊らされている木偶(でく)ではないのか。最近つとに、そう思うようになった。その方らも、勘十郎に、まるめ込まれて居るのではないのか。……所詮(しょせん)、わしは、贋者だぞ。贋者は、ついに、最後まで、贋者でしかあるまい。いずれは、露見しよう。いや、露見する前に、わしは、勘十郎の手で、闇に葬られるおそれがある」

「なんと仰せられます！　どうして、そのような逆目が出る道理がありますものぞ」

「いや、これは、わしの疑心暗鬼ではないぞ。……勘十郎は、おそらく、兄上との談合を済ませて居るに相違ない。そうでなければ、兄上を生かして、何処かにかくしておくわけがあるまい。わしを、十二代に就ける存念ならば、兄上を、疾に亡きものにしている筈ではないのか。それでなければ、どうして兄上を生かしているのだ。生かしているということは、いずれ、わしを闇に葬って、兄上を元の座に還す、という約束をしているからであろう」

「わかりませぬな。それならば、お目付は、貴方様を、替玉にするような面倒なことを企てずに、はじめから西城府様に取り入る労をはらえばよかったことではありませぬかな」

「そうではない。はじめから兄上に、取り入るてだてはなかった。このわしを利用して、兄上に取り入ったのだ。……兄上は、四十になっても、まだ、父上から将軍職をゆずられぬまま、西の丸にとじこめられているうちに、気鬱が次第に昂じていた、という。そこで、勘十郎は、父上が他界されるまでの幾年かを、人知れぬ里で、のびやかなくらしを送らせてさし上げたい、と兄上に言上したと思われる。わしのこの想像は、必ず、中って居るぞ。まちがいはない。……父上を他界させる悪役は、勘十郎がつとめる。その暗黙の約束が、兄上と勘十郎との間に、なされた」

「それは、あまりに、邪推が深すぎると申すもの――」

　大久保久兵衛は、にがにがしげに云った。

「邪推だと！　たわけ！　邪推とみなすところに、その方らが、勘十郎にまるめ込まれた証左を看ることができるぞ！　よいか、いささかでも、その方らが、わしの身を思ってくれて居るならば、勘十郎がわしを替玉にしようとした時、これを拒んで、せめて、わしを、二、三十万石の大名として、陽の目を見させようと努力したに相違ないのだ。替玉にされるがままに、黙って、こ

れにしたがったその方らには、わしに対する真意はなかったのじゃ！」
徳川敏次郎が、そう喚きたてた時であった。
鹿火屋鬼庵が、何を考えたか、やおら腰を上げた。
つと、一歩、上段の間に入った——次の瞬間、長押に架けられた長槍を掴みとりざま、氷上を滑るがごとき迅さで、主人を襲った。
「えいっ！」
電光の勢いで、くり出された穂先を、徳川敏次郎は、夢中で、脇差を抜いて、払った。
「鬼庵、なにをいたす！」
大久保久兵衛は、血相を変えていた。
鬼庵は、しかし、平然として、敏次郎を凝視したままであった。
敏次郎は、ふうっと熱い息を吐いて、鬼庵を睨みかえしている。
「上様、ひさしぶりで、この鬼庵の業をごらんになりますか？」
鬼庵は、そう云って、にやりとした。
「よ、よし！」
敏次郎は、鬼庵から長槍を渡されると、庭の白砂上へ、降り立った。
鬼庵は、無手で、その前面に、立った。
敏次郎は、構えるやいなや、鬼庵の胸部めがけて、遮二無二に突きかかった。
鬼庵は、ひょい、ひょい、と身軽く、右へ、左へ、そして後へ、跳び躱していたが、一瞬、翼でも持っているかのように、五体を宙へ、飛びあがらせた。
とみるや——。

敏次郎が、水平に突き出した長槍の穂先へ、とまってみせた。

「いかがでござる、上様？」

鬼庵は、問うた。

「うむ――」

敏次郎の頬に、笑みが刷かれた。

鬼庵の五体を、穂先にのせ乍ら、その重量を、すこしも感じないのであった。

蝦夷の奥地エトロフ島シャルシャムの館でくらした青年時代、敏次郎は、この鬼庵の幻妙な術によって、その孤独をなぐさめられたことだった。

鹿火屋鬼庵は、年に二度か三度、ふらりと姿を現わして、一月あまり館に逗留して、さまざまの術を披露しておいては、また何処かへ姿を消す男であった。

敏次郎には、兵法の天稟はなく、また修業の意志もなかったが、奇想をそのまま術にしてみせる鬼庵に対しては、刀をあるいは槍を把って立ち向って、その魔法に似た変幻ぶりに、興奮したものであった。

二

敏次郎が長槍を手もとに引くや、鬼庵は、空中二間余を翔けて、臥竜の松の根を抱いた巨きな岩へ、降り立った。

と同時に――。

鬼庵の右手から、一条の縄が、生きもののように、宙をのびて、岩のうしろの楓の林へ吸い込まれた。

ぴいん、と縄をひきしぼった鬼庵は、笑い乍ら、

「先日は、寺僧に化け、今日は当城の番士に化ける。伊賀衆も、多忙だの」

と、云った。

縄にひっかかったのは、犬助であった。

縄の先端につけられた鰻取りに似た四つ手鈎に、左手の甲を、噛まれた犬助は、たぐられるままに、楓林の中から、曳き出されて来た。

犬助が、右手で、縄を掴まなかったのは、流石は忍びの者であった。縄は、黒く濡れて居り、これは、もし掴めば、手の皮がべろべろに剝けてしまう猛毒とさとったのである。

岩に、五歩あまりの距離まで、曳き出されて来て、犬助は、その激痛に堪えつつ、刀の柄へ手をかけた。

とたん、

「うろたえるな、伊賀衆――。この縄は、両断すれば、その切口から赤い液が噴いて、お主の顔は、ふた目と見られぬまでに、爛れてしまうぞ！」

鬼庵が、うそぶいた。

犬助は、舌打ちした。

敵わぬ対手と、思い知らなければならなかった。

その頃――。

眠狂四郎は、六角堂にほど近い、蛸薬師通りから、ちょっと横丁に入ったしもた家の、猫の額ほどの小さな庭に面した茶の間で、三味線を膝にのせて、のんびりと、小唄をくちずさんでいた。

この家は、大坂の豪商さぬき屋に落籍された祇園の芸妓の妾宅であった。
京には、こういう、つつましく目立たぬ妾宅が無数にある。旦那は、せいぜい三月に一度しか現われぬのだが、女は、文字通り日蔭の身を、こうした横丁でひっそりとくらしていて、一年のうちかぞえるほどしか外出しないのであった。祇園祭のような大きな行事に、見物に出るか、寺詣でをするぐらいで、花見どきにも、うかれ出るようなことをせぬ。
この家の女は、曾ては祇園で一、二を争った名妓であったが、その美しい容姿を世間から、かくしてしまって、もう七、八年になる。
べつに、さぬき屋に、惚れているわけでもなかった。さぬき屋は、肥満した醜い男で、その剛腹は、あきないにかけては、充分に発揮されるが、およそ女にもてる男ではなかった。それに、もう六十を越えていて、男としては不能に近い、と自分で正直に告白している。
狂四郎とは、なんとなく親しくなり、京大坂に数軒ある妾宅を、
「敵の多い貴方様ゆえ、これらを、定宿になさるとよろしゅうございます」
とすすめ、あまつさえ、
「お気が向けば、どの女でも、ちょっとつまんでごらんになっては、如何でございましょう」
と、笑ってみせたものだった。
そういう大商人であった。
狂四郎は、さぬき屋のような男に接するたびに、男の大きさが、武家から商人に移ってしまった感慨をおぼえるのであった。
きぬというその妾は、珍しく外出して、十四、五の小女が、台所で小猫のために、鰹節をかいている音が、カタカタとひびいていた。

京にも、ようやく、うららかな春がおとずれて、しっとりとした空気が、甘い。

　主を待つ
女ごころの哀しさは
手活けの床の牡丹花
　花の占めたる
　位置のたしかさ

この折——。

格子戸が開き、人の訪れる声がした。

「へーい」

台所から、小女が、暗い廊下を通って、出て行った。

茶の間に入って来たのは、猫兵衛であった。小わきに、死んだようにぐったりとなった御殿女中をかかえていた。

もう五十の坂を疾に過ぎた老女であった。

これは、二条城の留守居年寄であった。狂四郎が、猫兵衛に、拉致して来るように命じたのであった。

二条城には、将軍家上洛のみぎり、これを世話する女中たちが、江戸城大奥から、遣されている。

その女中たちの総支配として、万事とりしきっている年寄を、拉致して来るように、猫兵衛に命じたのである。狂四郎は、

三

二条城の奥向きから、最も権力を持った年寄を拉致して来るのは、容易なわざではなかったが、猫兵衛は、みごとに成功してみせたのである。

「犬助と二人でやったのではないのか？」

狂四郎が、訊ねると、猫兵衛は、笑い乍ら、

「犬助め、贋様の方に興味があるようでございまして、そちらの方へ忍んで行きましたが、……あの鹿火屋鬼庵と申す幻術使いめが、お側にひかえて居りますゆえ、もしかすれば、犬助の奴、見つけられて、ひどい目に遭(お)うて居るかも知れませぬな」

猫兵衛は、こたえた。

「………」

狂四郎は、それにはこたえず、凝(じっ)と老女の貌(かお)を瞶(みつ)めた。

「眠様、この女子が、西城府様のお行方を、知っているのではないか、とお考えになりましたので――？」

「かも知れぬ。……武部老人が調査したところでは、この杉重という女は、譜代旗本のうちでも家柄の出で、家に不幸があって、十五、六の頃、江戸城大奥へ、お目見(めみえ)に上ったそうだ。中臈(ちゅうろう)から年寄に進む約束であったろう。……ところが、十八歳の時――恰度(ちょうど)、四十年前だが――急に、旗本某家へ嫁ぐという名目で、暇をとっている。生涯奉公の誓紙をさし出した者が、途中で、意志を変えた例はない。……奇妙なことは、この女は、嫁ぐかわりに、この二条城に、再び、お目見として上り、そのまま、地位を登って、今日に及んでいる。……武部老人の推測では、この女

が、双生児のかたわれを、江戸城からつれ出して、かくまう手だすけをしたのではあるまいか、ということだ。そうだとすれば、佐野勘十郎が、替玉とすりかえる企てに、この女も、一役買ったのではないか、と容易に想像できる」

「成程――」

猫兵衛は、うなずいた。

「しかし、こういうたぐいの女の口を割らせるのは、尋常の手段では、叶うまい」

「思案は、あるのでございますか？」

「………」

狂四郎は、凝視をつづけていたが、不意に、

「猫兵衛、いやな役割を買ってもらおう」

と、云った。

「それア、旦那のおたのみでございますれば……」

「その裳裾を、はぐってもらおう」

「へえ――？」

「まとって居るものは、みな剝いでくれぬか」

「へ、へい」

猫兵衛は、命じられるままに、その衣裳の裾を、つまみあげた。

重ねた下着も、丈長襦袢も、腰巻も、下肢から、するすると、捲りあげられた。

肥り肉の、ぽってりと太い脛、膝、太腿が、忽ちあらわになった。

「拡げさせてもらおう」

「へい」

猫兵衛は、膝へ双手（もろて）をかけたが、失神したからだには、意外に力があり、逆にかたく合わせようとはしても、容易に脚をひらこうとはしなかった。

無理に、力をこめて、猫兵衛が、ぐいと拡げさせると、狂四郎の鋭い眼光は、女が秘めて人目にふれさせぬ箇処（かしょ）へ、そそがれた。

やや、あって――。

「よかろう」

狂四郎は、云った。

猫兵衛は、いそいで、衣類で掩（おお）うてやった。

「猫兵衛――」

「へい」

「この女は、いまだ男に一度も、接して居らぬ」

「へえ……」

「そこで……、お前の役割だが――犯すのだ」

「え――？」

「お前が、のしかかって、わがものにした時、女の目をさまさせる。……おのれが、いま、どういう情況に置かれているか、目ざめたとたんに、思い知らせる。それだな。……女の口を割らせるには――まして、五十八歳の男を知らぬ婆さんに泥を吐かせるには、この非常の手段しかないようだ」

四

「旦那――」
猫兵衛は、当惑しきった面持になった。
「この役目は、てまえには、まことに、どうも……」
「女を抱いたおぼえがない、とは云わせぬぞ」
狂四郎は、冷然と云った。
「それア、てまえも、これまで、女をだまさなければ、果せぬ仕事も引き受けて参りましたが、……手ごめにしたおぼえは、いまだに一度も――」
「いま、やるのだな」
狂四郎の無表情には、氷の冷たさがあった。
「やらなければ、いけませぬかな」
猫兵衛は、いかに狂四郎の命令でも、ためらわずには、いられなかった。
「ほかに手段はない」
狂四郎は、断定した。
やむなく――。
猫兵衛は、老女を、かかえあげると、
「では、ちょっと、失礼つかまつりまして……」
とことわって、二階へ、のぼって行った。
狂四郎は、再び三味線をとりあげると、つまびき乍ら、口ずさみ出した。

　首尾の花見はいつしか、過ぎて、
　「東には祇園、清水、落ち来る滝の
　音羽の嵐に、地主の桜は、散りぢり」
　　泣いてくらすも恋し鳥
　と――。
　狂四郎の手が、停められた。
　――血汐が匂うが……？
　いぶかった時、格子戸が開けられた。
「お客さんどすか？」
　小女が、台所から、茶の間へ顔をのぞけた。
「お前は、ひっ込んでいてよい」
　狂四郎は、云った。
　唐紙が開かれた。
　よろめく足どりで、姿を現わしたのは、犬助であった。
　左手を、懐中にかくしていた。顔面は土色と化していた。
　崩れるように坐り込むのを、眺めた狂四郎は、
「どうした？　血汐がにおうぞ」
　と、云った。
「へ、へい。やられました」
「鹿火屋鬼庵にか？」

「そ、その通りなんで……。あ、あいつは、まったく、途方もねえ幻術使いでございまさ」
犬助は、喘ぎ乍ら、二条城奥庭に於けるいきさつを、報告した。
「……そうか、贋西の丸の突き出した槍の穂先に、とまってみせたか」
「どうにも考えられねえことを、やってのけやがって……、あきれたもので――」
「それで、お前は、毒縄にひっかかって、どうした？」
「しかたがねえから、左手を、二条城にすてて来たのでございます」
犬助は、懐中にかくした左手を、とり出してみせた。まさしく、左手は、手くびから切断されて、巻きつけた白布は、なお血汐を滲ませていた。
犬助は、自らの手で、左手を斬り落して、遁れて来たのであった。

女心策

一

二条城の留守居年寄・杉重は、長い時間の失神から、意識をよみがえらせた時、おのれが置かれているのが、どういう状態であるか、とっさにさとりかねた。
まず――。
下腹部に、なにやら、巨きな、固い異物が、きっちりと塡っている感覚が、脳裡に来た。
次いで、おのが下肢が、むき出しになって、大きく拡げられていることを知った。どうして、下肢の肌膚が、ひえびえと、夜気に、じかにあてられているのか――杉重には、判らなかった。

男を知らぬ五十八歳の老女であった。物心ついて以来、着換える時と入浴の時以外は、そのからだを、あらわにした経験はないのであった。

羞恥（しゅうち）よりも、当惑をおぼえつつ、杉重は、拡げられた脚をせばめようとした。

とたん——。

杉重は、悲鳴をあげた。

何者かが、自分の上にいるのだ。

杉重は、悲鳴によって、はっきりと意識をとりもどして、目蓋をひらいた。

男の顔が、三尺の上に、在った。見知らぬ顔であった。

杉重は、二条城の奥で、厠（かわや）に入ったところを、後頭を打たれて、気絶したのであった。襲撃者を見るいとまさえもなかったのである。

「…………」

「…………」

一瞬、四つの眸子（ひとみ）が、宙で合った。

杉重を、名状しがたい羞恥が襲ったのは、次の瞬間であった。

自分の置かれた状態が、判ったのである。

見知らぬ曲者（くせもの）に犯されていることの屈辱よりも、男女の営みを自分がさせられている羞恥の方が、先に来た。

処女であるとはいえ、すでに六十に手のとどこうとするおのれに、こんなにも烈しい羞恥心がのこっていたことも、同時に、杉重は知らされた。

杉重は、目蓋を閉じた。動きもしなかった。

上にいる男も、動かなかった。

それなり、いくばくかが過ぎた。

と――。

なぜか、杉重は、泪があふれ出ようとして来て、微かな狼狽をおぼえた。

泪をくいとめるために、杉重は、口をひらいた。

「何者じゃ、そなたは――？」

「申しわけなき儀――お許し下されませ」

名のる代りに、鄭重な言葉で詫びた。

「何者じゃ、と問うて居ります」

「伊賀の忍び、とお思い下されませ」

「…………」

――忍びの者なら、秘密を守ってくれる。

杉重の胸中で、狡猾な呟きがなされた。

杉重は、それきり、口をきかなかった。

男は、ようやく、蠢きはじめた。

微かな痛みが、下腹部から、四肢へひろがるのを感じ乍ら、杉重は、一指さえも動かさぬように、怺えた。

男の動きが激しくなり、

「ご無礼――」

その一言とともに、体内に射込まれるものがあった。

瞬間――、杉重は、全身が熱くなり、思わず、男の肩にとりすがった。

……男は、すばやく、上からはなれた。

はなれると同時に、衣類で、そこをかくしてくれ、

「お許しのほどを――」

と、詫びた。

杉重は、起き上って、身じまいをととのえた。けだるさに、からだを動かすのが億劫であった。

正座してから、しばらく、ぼんやりと、宙へ眼眸を置いていた。

男は、下座にうずくまって、沈黙を守っている。

杉重は、男が何か云ってくれるのを待ったが、その沈黙の深さに、しだいに苛立った。

「わたくしを、拉致して、このように、はずかしめて……、なんの存念であろうか！」

「…………」

「二十歳の美しいむすめならば、欲情にかられての振舞い、と申せようが、このような色香の失せた年寄りを、なぜ、犯したのであろう？」

「…………」

「こたえませぬか？」

杉重は、はじめて、男へ、視線をくれた。

商人そのものの風体をした四十年配の忍者であった。律儀さが、全身に滲んでいるようである。

俯向いたきり、こたえようとせぬ。

「存念なくして、犯す道理がありますまいぞ！」

杉重は、気位の高い大奥年寄の顔にもどっていた。

二

猫兵衛は、ようやく、頭を擡げた。

「貴女様は、このてまえに、操をお与えなさいました」

「なにを云やる！　意識を失わせて、奪ったのではないか」

「手段は如何様にもあれ、貴女様は、てまえのものに相成りました。これは、貴女様も、おみとめなさらなければなりませぬ」

「…………」

「失礼でございますが、てまえは、貴女様をお抱きする時、いとしい新妻と契る心得を持ったのでございます。お年とはかかわりなく、貴女様のお肌は、清純無垢なものでございました。まことに忝なく存じた次第でございます」

「…………」

「まことに身勝手な申し分かも知れませぬが、男と申すものは、女体を抱く場合、ふたつの気持がございます。いとしい、と思うて抱く場合と、わがものにしてくれよう、と思うて抱く場合と――。これは、天地の差がございます。……てまえは、誠心をこめて、貴女様を、いとしいと思いつつ、お抱きいたしました。うそいつわりではございませぬ。……おたずねのごとく、これは、存念あっての無法の振舞いでございました。てまえは、それゆえにこそ、貴女様を、新妻としていとおしむ気持を起し、守ったのでございます」

「…………」

「忍びの申すことなど、信じられぬ、と仰せかも知れませぬが、てまえは、どうしても、このこ

とだけは申し上げておかねばなりませぬ」
猫兵衛は、そう云って、両手をつかえた。
「……それで、わたくしに、どうせよ、と申すのであろう？」
「てまえのあるじが、おたずねすることに、おこたえ下さいまし」
猫兵衛は、すっと、消えた。
杉重は、一人になると、にわかに、秘処にのこっている異物を塡められた触感を、つよく意識せざるを得なかった。
——自分は、この年齢になって、はじめて、女のつとめをさせられたのだ。
自分に云いきかせてみた。すると、およそ四十年もの長い歳月を、無駄にすごしてしまったような思いが、湧いた。
かたわの半生を送ってしまった悔いが、今日から、自分をさいなむような気がした。
「失礼いたす」
声があって、唐紙が開かれた。
入って来た者を一瞥して、杉重は、
——これが、眠狂四郎という浪人者であろう。
と、直感した。
杉重は、このたび、秘密裡に上洛して来た贋家慶の守護役大久保久兵衛と鹿火屋鬼庵との会話の中に、一人の強敵の名が、しばしば出て来るのを、耳にしていたのである。
対手は、杉重の直感通りに、その名を名のってから、
「貴女と契った猫兵衛と申す伊賀者は、この後、貴女がのぞまれるならば、内緒の良人として、

時折り二条城へ参上して、貴女とまじわる、と申して居る」
と、云った。
「わたくしの口から、何事かを訊き出すために、女子の弱味につけ込んで、たぶらかそうというのであろう」
「貴女が、すでに、一刻前の貴女ではないことは、あきらかですな」
「用向きを申すがよい」
「貴女は、四十年前、江戸城大奥から、暇をとって、宿下りをされた。旗本某家へ嫁ぐという名目であったが、嫁がずに、この二条城に、お目見として上った。仔細があって、江戸城から二条城に、身を移した、と判断される」
「…………」
「四十年前、と申せば、恰度、将軍家世子が誕生された年だ。ところが、この生誕に問題があった。すなわち、於楽の方は、双生児を産んだ。将軍家世子が、忌むべき双生児であったことは、世間にひたがくしにされなければならなかった。……想像するに、於楽の方付きの年寄が、双生児のかたわれを闇へ葬るように命じられ乍ら、ふびんに思って、これを何処かにかくして、育てることにした。なにさま、大奥という女護ヶ島から、こっそりかかえて抜け出るのは、容易なわざではなかった。その年寄一人の力では、どうにもならぬ。その時、一人の若いお目見が、必死の手助けをした。……その若いお目見というのが、貴女ではなかったのか？」
「…………」
狂四郎の鋭く冴えた眼眸が、杉重のおもてを刺した。
杉重は、こたえぬ。

「この想像は、はずれて居らぬ確信が、こちらにはある。……四十年前の出来事だ。双生児のかたわれを、生きのびさせた人々は、殆ど生存しては居るまい。若いお目見女中だけが、こうして、二条城の奥向きに、留守居年寄となって、生きのびているということになる。……さて――、因果の小車の火宅の門を出でざれば、めぐりめぐれど、と謡曲の砧にあるが、めぐりあわせの奇妙で、貴女は、四十年ぶりに、自分が生命を救った双生児のかたわれと、この二条城で、再会した。感慨なきを得ぬものがあったに相違ない。その際、目付佐野勘十郎としては、貴女という女性は、おのが口車にのせるには、おあつらえ向きの存在であったことだ」

「…………」

「上洛して来た実兄西城府を、この隠れ弟とすりかえるという企てを、佐野勘十郎は、貴女に打明けて、これに荷担することを承諾させた。そして、企ては、見事に成功した」

狂四郎の言葉には、よどみがなかった。

三

杉重は、けんめいに、無表情を装おうとしたが、自分で自身の顔色が、血の気を引いていることが、判った。

対手の推理は、欠けるところなく的中していたのである。

大久保久兵衛が、おそれていたのも、むべなるかな、と納得できた。

杉重は、猫に追いつめられた窮鼠の自分を感じた。

「沈黙されていることは、事実に相違ない、とみとめたものと、受けとらせて頂こう。……ご老女、貴女は、ここに至って、素直におなりにならねばなるまい。これは、替玉の西城府にとって

も、不利になることではない」
「…………」
「貴女は、替玉となって、江戸城へ行った贋殿が、再び、二条城へやって来たのを眺めて、何か感じられるところがあったに相違ない」
「…………」
「贋殿が、あきらかに、替玉となっていることに、堪えがたくなっている様子を、貴女は、看て取られたのではないか？　いや、はっきりと、看て取られた筈だ」
「わ、わたくしは……」
杉重は、喘ぐように、熱い息を吐いた。
狂四郎は、薄ら笑った。
「正常な神経を所有し、生の血をかよわせている者ならば、贋者として一年もすごせば、そのことに、嫌悪するのは、当然なのだ。佐野勘十郎という狡智の男にあやつられている木偶であることに堪えられなくならねば、どうかしているのだ。……贋の内大臣大納言家慶であるよりは、日蔭者でもおのれ自身であった方がよい、と考えるようになるのは、まともな人間である証左だ。……貴女にも、贋殿の苦悩は、汲みとることがおできの筈だ」
「…………」
「そこで、こちらは、贋者は元の日蔭者の世界にもどって頂き、本物には本物の座に還って頂こうと、その手つづきをつとめて居る。世間に気づかれぬうちという厄介な条件つきゆえ、貴女にも、このような災難を蒙らせることになるのですな」
「わたくしに、どうせよ、と云われるのじゃ？」

「なに、かんたんなことだ。貴女が知って居られることを、こちらに、ちょっと、口をすべらせて頂けばよい。それだけのことです」
「わたくしが、知っていることというと……?」
「本物が、目下、何処に、くらしているか——その場所を、お教え頂きたい」
「存じませぬ！　それは、佐野勘十郎殿だけが、知って居りましょう」
「さあ、それは、どうであろうか?」
狂四郎は、皮肉な表情になった。
「こういう企てを実行するには、主謀者に助力する者が、幾人か居らなければならぬ。まかりまちがえば、おのが一命がふっとぶ冒険ゆえ、助力する者も、万事納得した上で、肯くものだ。主謀者としては、納得させるためには、全部とは云わぬまでも、八分がたは打明けるに相違ない。……貴女も、佐野勘十郎が、本物を暗殺してしまう、とでも云ったのであれば、荷担はされなかったろう。その身を、安全な場所に移して、悠々自適のくらしを送らせる、と約束したからこそ、貴女は、すりかえに力を添えたのではなかったか?」
「………………」
「佐野勘十郎は、まちがいなく、貴女に、その悠々自適の場所を打明けた筈だ。……それが、何処か、お教え頂こう」
理に叶った攻めを受けて、杉重は、顔を伏せざるを得なかった。
しかし、目下は、贋家慶の敵であるこの浪人者に、その場所を、やすやすと打明ける気には、なれなかった。
佐野勘十郎は、たしかに、本物の身柄を移す場所を、杉重に告げていた。

はたして、そこに、本物が、くらしているかどうか、杉重には判らなかったが、佐野勘十郎の語るところでは、閑居するには、この上もない良い場所であった。

およそ、四半刻（三十分）も、沈黙の時間が、流れた。

狂四郎が、組んでいた腕を解いた。

「こたえて頂けぬ以上、二条城へおかえしすることはできぬが……、一夜を明かしてしまえば、貴女は、もはや、帰還することは不可能と相成る」

そう云われて、杉重は、びくっと肩を顫わせた。

狂四郎の云う通りであった。明日を迎えてしまえば、大久保久兵衛らは、この年寄が、拉致されたものと判断するに相違ない。そうなれば、たとえ明日帰城しても、もはや味方としては取り扱ってくれまい。いや、生きのびて、無事に帰城できたことを、なぜか、と疑うに相違あるまい。

今日のうちに、是が非でも帰城しなければならなかった。

帰してもらうためには、白状しなければならぬ。

杉重は、焦躁した。

その様子を視て、狂四郎が、つと立ち上った。

「どうせ、打明けるなら、この人相の悪い男よりも、貴女を妻とした男の方が、よろしかろう」

そう云いのこすと、狂四郎は、部屋を出た。

ゆっくりと階段を降りる狂四郎を、猫兵衛が、下で、緊張した面持で、迎えた。

「白状いたしましたので……？」

茶の間に、狂四郎が坐るのを待って、猫兵衛が、訊ねた。

かたわらに横たわった犬助も、興味を持って、狂四郎を見上げている。

「お前の役目のようだな、きき出すのは——」

狂四郎は、云った。

「と申しますと？」

「おれは、どうころんでも、あくまで敵の立場にいる。これに向って、素直に、泥は吐けまい。……お前なら——お前は、亭主の立場を得たのだから——あちらさんも、打明けやすかろう」

「それア、しかし……、やっぱり、旦那が、きき出して下さるのが……」

「猫兵衛、たとえ手ごめにもせよ、からだを奪った男に対しては、女は、弱いものだ。……まだ、時間は充分ある。お前が、もう一度、抱いてやるのが、必要なようだ、口を割らせるのは——」

「へ、へい」

猫兵衛は、なさけない目つきになった。

「お前は、なかなか、うまい殺し文句で、まるめ込んだようだ。ついでに、わたしも、口を添えておいた。これからは、そっちがのぞみとあれば、内緒の亭主は、時折り、二条城に忍び込んで、契る料簡でいる、とな」

「と、とんでもない！　冗談ではありませんよ、旦那——」

「嘘も方便だろう。……やってもらおう。二度目は、むこうも、反応を示して来るだろう。闇にして抱けば、結構いけるのではあるまいか」

狂四郎は、笑った。

「やれやれ——、とんだ役目をお引き受けしたもので……」

「内心では、まんざらでもないのではないか」

「滅相もない！」
猫兵衛は、かぶりを振った。
狂四郎は、猫兵衛が、しぶしぶ二階へ上って行くと、手をたたいて、小女を呼び、酒を持って来るように命じた。
「旦那――」
犬助が、のろのろと身を起した。
「お前もやるか。酔えば、すこしは、痛みがうすらぐだろう」
「いや、酒は、遠慮しまさ。それよりも、うかがいてえことがあります」
「なんだ？」
「旦那は、いってえ、心底からつめてえ御仁(おひと)か、それとも、心の臓には、あたたかい血をたくわえておいでなのか――、どうも、わからねえ。猫兵衛の方は、すっかり旦那を信じきって居りますが……」
狂四郎は、冷酒を、あおってから、双眸(そうぼう)をほそめ、ちょっと沈黙を置いて、こたえた。
「稲妻や昨日は東、今日は西、という其角(きかく)の句があるが、対手次第で、つめたくもなったり、あたたかくもなったりしているうちに、おれは、どうやら、おのれ自身が判らなくなって来たようだ」

鳥羽絵

一

およそ、半刻（一時間）が過ぎた。

茶の間の長火鉢の猫板に、狂四郎が冷で飲んだ徳利を、空にして置いた時、二階から降りて来る跫音が、きこえた。

入って来た猫兵衛は、照れくささをごまかそうとして、すぐには口をきかず、猫板の徳利を把った。

狂四郎も黙って、台所に立つと、別の徳利を持って来て、猫兵衛に与えた。

茶碗になみなみとついで、ひと口に飲みほした猫兵衛は、

「二条城大番頭小屋の、小座敷の床の間にかけてある鳥羽絵が、教えてくれよう——、それだけ、白状いたしました」

と、告げた。

「鳥羽絵——？　遠まわしに、泥を吐いたものだな。大奥の老女らしい」

狂四郎は、苦笑した。

「猫兵衛、手ぬるいぜ。二度目に抱かれりゃ、婆さんは、もうすっかり、おめえの下で、女になりやがったんだろう。もっとはっきりと口をすべらせられなかったものか。おめえの遠慮がすぎたのじゃねえのか」

壁ぎわに寐ている犬助が、ずけずけと、云った。
「わしは、わしのやりかたでやるよりほかはなかった」
猫兵衛は、投げ出すように、こたえた。
「よかろう。こちらが、足をはこんで、その鳥羽絵を拝見することになる。……ねむらせているのだな？」
狂四郎は、立ち上った。
「へい」
「ご苦労だが、かついで、二条城へ、はこんでやってくれ。城内へ忍び込んだなら、わたしが、わざと、番士に見咎められて、騒動を起す。その隙に、お前は、婆さんを居間へ寐かせて来るとよい」
そう命じた。
犬助が、むくっと起きた。
「旦那！」
「番士や与力や同心が、山といても、旦那は、屁もありますまいが、鹿火屋鬼庵がいますぜ、鬼庵が――」
「仰るか返るか咽喉吭の針だな。これまで、そうして来たし、これからもそうするのが、わたしの流儀だ。猫兵衛にしても、お前にしても、おのがやりかたで、今日まで生きて来たのだ。人間というやつは、どうやら、一本の道筋しか辿れぬように生れついているらしい」
この言葉をきくと、犬助は、はじめて、この人物に心から信伏したように、ふかくうなずいて、
「旦那――これを」

と、懐中からとり出した蠟びきの薄紙をさし出した。
二条城の見取図であった。
狂四郎は、ひろげてみて、江戸城の本丸とも二の丸とも、全く構造がちがうのを知った。
大番頭小屋をとりかこむようにして、与力小屋、同心小屋、そして、東西南北に表長屋、中長屋がならんでいた。
大番頭小屋そのものが、城代の大番組頭が住む建物であるだけに、規模は宏壮であった。
鳥羽絵が掛けてある小座敷といっても、二十畳敷きで、大書院と中庭をへだてた奥にあった。
これに近づくには、玄関からは、使者の間、取合を過ぎて、次の間とのあいだの廊下へ踏み込まねばならぬ。まず、不可能であった。
庭からまわるとすれば、二重の塀を越えて、東からは与力小屋、南からは同心小屋を突破しなければならぬ。
庭園は、あまりに広すぎて、今夜のように星あかりだけの闇では、迷うおそれもある。
「犬助、この大番頭小屋の前の庭が、どのようなつくりになっているか、見たか？」
「あいにく、あっしは、表御殿の庭に忍んだので、そっちの方は、見とどけてはいねえんで……」
「…………」
狂四郎は、どの方角から、小座敷へ踏み込むべきか、まよった。
「旦那――、あっしが、もし、忍び込むとしたら、その北内長屋とへだてる塀を越えて、湯殿でさ。湯殿から勘定場、勘定場から料理の間、それから、まっすぐに小座敷へ――という順序にしますぜ」

「では、そうしよう」
「但し、旦那は、忍びの者じゃねえ。勘定場のとなりの役人詰所の宿直(とのい)に、きっと見つけられますぜ」
「見咎められるのも、筋書きに入れてあるのだから、恰度頃合いではないか」
「小座敷の前の廊下、次の間、取合などに、仕掛けがしてあるにちがいねえんだから、見つかっちゃ、まずいんでさ。あっしらなら、天井を匍(は)って、小座敷に行けるんだが……、旦那は、それができねえとなると――」
犬助は、舌打ちして、
「左手を二条城にのこして来るんじゃなかったぜ。これア、あっしの役目だ」
と、無念の呟(つぶや)きをもらした。
猫兵衛が、二階から、死んだようにぐったりとなった杉重を、かつぎおろして来た。
「行こう」
玄関へ出ようとする狂四郎に、犬助が、
「旦那！　廊下板や畳が、どんでんになっている仕掛けと、鬼庵の幻術に、くれぐれも、ご要心を――」
と、忠告した。

二

狂四郎は、杉重をかついだ猫兵衛と、表御殿の庭園で、別れた。
猫兵衛が、奥御殿へ向って、遠ざかるのを待って、白砂の平庭を、横切って行き、わざと、巡(じゅん)

邏の番士二人と、真正面からぶつかった。

一人を倒し、一人に、「曲者っ！」と叫ばせておいて、まっしぐらに、表御殿内へ、奔り入った。

表御殿内が騒然となった時、狂四郎は、大番頭小屋と北内長屋をへだてる中塀を越えていた。

二条城内には、在番、番頭、定番らの下に、それぞれ与力が二十騎、同心が三十人従って居り、さらに番士が百人以上いたのである。

これらに、一挙に殺到されたならば、いかに眠狂四郎といえども、めざす小座敷に踏み込むことは、困難であった。

与力・同心が、急報によって表御殿へ向って馳せ出て行き、わずかの人数しか残らぬ大番頭小屋へ、潜入する策をとることによって、その小座敷に踏み込む可能性があった。

狂四郎は、湯殿に、踏み込んだ。

犬助は、そこから勘定場、料理の間の順序を指示した。しかし、湯殿から小座敷へは、これは、すこし遠まわりであった。

脱衣部屋から、囲炉裏を切ってある二十四畳敷きの次の間へ踏み込んだ方が、近かった。

狂四郎は、敢えて、その近路をえらんだ。

脱衣部屋との仕切り襖を、二寸あまり、そろりと開けて、狂四郎は、突然、おのれのうかつに気づいた。

自分が、表御殿ではなく、大番頭小屋に忍び入ったことは、城代はじめ贋家慶の付添い方に、さとられてはならぬのだ。

眠狂四郎が、大番頭小屋に忍び入った目的は、小座敷に掛けた鳥羽絵を観ることであった、と

敵がたに考え及ばせるのは、絶対に避けねばならぬ。

茶所をへだてて役人詰所があり、そこに数人が残っている気配がある。これらを、仆(たお)すことは容易としても、それは忍び入った証拠をのこすことになる。

また――、

いくつかのどんでんの仕掛けを、無事に躱(かわ)したとしても、それもまた、忍び入った証拠になろう。

狂四郎は、その場に、立往生した。

およそ二十もかぞえる時間を、狂四郎は、むなしく、そこに影となって、佇立(ちょりつ)していた。

と――その時。

彼方(かなた)に、怒号と悲鳴が起った。

表御殿からであった。

――猫兵衛が、囮(おとり)になった！

老女杉重を、長局(ながつぼね)のその居間へ寐かせておいて、猫兵衛は、奥御殿から表御殿に奔り込んで、わざと発見されたのである。

とたんに、役人詰所の番士たちが、ざわめきたった。

「曲者は、ここへ参らんぞ。ここで腕を拱(こま)ねいていて、他の者に手柄を立てさせることはあるまい」

「しかし、組頭に、小座敷を守備せよ、と命じられて居るのに……」

「囲炉裏をまわしておけばよいではないか。われわれが居らずとも、かりに踏み込んで来たとすれば、鼠は鼠取りにひっかかる」

「それも、そうだの」
二人の番士が、急いで、次の間に入って来ると、囲炉裏の縁に、手をかけた。
三寸角の黒光りする桜材の縁が、するすると廻された。
襖の隙間から、それをぬすみ視た狂四郎は、
——そうか。これがどんでんの仕掛けか。
と、合点した。
番士らが、馳せ出て行くのを待って、次の間に踏み込んだ狂四郎は、炉縁を、元に廻し戻した。
そして、次の間から、廊下を越えて、小座敷へ、悠々と踏み込んだ。
二間床の壁に、狂四郎が、見出した鳥羽絵は、寺院の堂宇が燃えて、火に追われた犬やら猿やら兎やら蛙やら鹿やら鳩やらの鳥獣人物どもが、あわてふためいて遁げ出した戯画であった。
——どこの寺院なのか？
近づいてみたが、何寺とも記されていなかった。
ただ、片隅に、薄墨で、「庚午年大火」とのみ、記されてあった。
これだけでは、何寺が焼けたのか、狂四郎の知識では、判じ難かった。
覚猷鳥羽僧正は、横にひろがる絵巻物の形式の創始者である。
したがって、この絵もまた、何処かの寺の縁起物語絵巻の一部分に相違ない。
——本物の西城府は、何処かの寺院にいる、ということだ。
老女杉重の告げたことがまちがいなければ、このことだけは明白であった。
狂四郎は、次の間へひきかえすと、炉縁を廻しておいて、湯殿へ移り、そこから抜け出して、中塀を越えた。

風の早さで、表御殿の庭園へ奔った狂四郎は、二百人にも近い多勢に包囲されつつ、け、も、の、のようにあばれている猫兵衛の姿を、高張提灯のあかりの中に、みとめた。

「猫兵衛、遁げろ！」

狂四郎は、叫んだ。

番士・与力・同心らは、忽ち、狂四郎めがけて、殺到して来た。

狂四郎は、鋭く視線をまわして、鹿火屋鬼庵の姿を、もとめた。

鬼庵の姿は、なかった。

狂四郎は、遁走する代りに、つ、な、みとなって寄せて来る敵陣へ、突入した。

いかに、敵が多人数であっても、一命をなげ出して襲って来る刺客陣ではなく、ただの幕臣たちであった。

先頭に立って攻撃しかけて来る数人を、はねのければ、あとにつづく者たちがきわめてもろく、道をあけることを、狂四郎は知っていた。

衆を恃んでいるにすぎない番士役人というものは、棒きれや竹竿をふりかざしている逆上した一揆の農民たちよりも弱いのであった。

あっという間に、突破した狂四郎は、表御殿内へ、とび込んだ。

追いかけた一同が、うろうろしている隙に、狂四郎は、御座の間へ、踏み込んでいた。

侵入をふせぐいとまもなく、三人の番士が、峰撃ちをくらって、その場へ横たわった。

その光景を、上段から、寝間着姿の贋家慶――敏次郎が、眦を裂かんばかりに瞠目して、目撃した。

大久保久兵衛が、これをかばって、抜刀していたが、これは、まるで兵法の心得のない構えで

あった。
どうやら、鹿火屋鬼庵は、この二条城から抜け出て、春の夜の洛中に、なぐさめをもとめているらしい。
狂四郎は、二三歩迫ると、
「お手前様が、木偶であることを止めて、人間に還るほぞをきめられたか、どうか、それをうかがいたく参上いたしましたが、……こっそりと、人目を忍んで、お目にかかるべきところ、こちらも、生身の者ゆえ、つい、神経の配り加減がゆるんで、この騒擾をひき起してしまい、申しわけなきことに存じます。春の夜の甘い空気のせいにして頂きましょう」
と、云った。
「去れっ！　わしは、木偶ではない。佐野勘十郎の木偶でもなければ、おのれ如き素浪人に操られる木偶でもないぞ！」
「墓穴は、すでに、その足元に掘られて居ります。料簡次第だ」
狂四郎は、さらに、一歩迫った。
「寄るなっ！」
大久保久兵衛が、必死になって、ふりかぶった。
「老人！　わたしに、歯向う代りに、騒ぎたてている面々を、とりしずめられたらどうだ？」
「なに！」
「一同が、ここへ押し寄せて来れば、わたしも、自衛上、お手前のあるじを捕えて、脅さねばならぬ。贋者とはいえ、西城府の実弟に対して、手荒なまねはしたくはない」
「黙れっ！　退らぬか！」

「窮鼠は、猫を嚙む。場合によっては、お手前のあるじを斬ることになる」
「な、なにを申す！」
大久保久兵衛としても、鹿火屋鬼庵という強い味方がいない今は、いたずらに、恐怖するばかりで、なんの思案もなかった。
「はやくして頂こう、……こちらも、夜が明けぬ前に、退散したい。あらためて出なおすことにして、今夜はおとなしくひきさがろうと、こちらが殊勝な考えを持っているうちに、お手前も、年寄りらしく、小ずるくたちまわってもらいたいものだ」

三

東の空がしらんだ時刻、狂四郎は、蛸薬師のさぬき屋妾宅へ、戻って来た。
猫兵衛は、まだ帰って来ていなかった。
きぬというその女は、帯も解かずに、待っていた。
いかにも京女らしい、おっとりとした顔だちの、餅肌の美しい女であった。
「お熱いのを、一杯どうどす？」
すすめられて、盃を把った狂四郎は、
「中間ていの男が、そこに寐ていたはずだが……？」
と、訊ねた。
「出て行かはりましたんどすえ。二階でおやすみになるようにおすすめしたのどすけど、なんや不機嫌そうなご様子で、ここは寐心地がよくなさそうだ、と云やはってなあ」
「犬助という名を持っている男だ。女の匂いのする夜具は、苦手なのだろう。どこかの寺院の縁

の下をさがしに行ったのかも知れぬ」
「片手を無うしていやはるのに……」
「五体の鍛えかたが、ちがうのだ」
「旦那はんも、不死身のお方やと、うかがっとりますえ」
きぬは、艶冶な笑顔をつくった。
「夜明けの据膳か」
狂四郎は、薄ら笑った。
「どうぞ、召し上ってみておくれやす」
不能者に近くなったさぬき屋に、操をたてて、きぬは、この一年ばかり、空閨をかこって来ていた。
さぬき屋から、
「眠様が、その気におなりになったら、お前は、よろこんで、さしあげるがええ」
と、云いふくめられていたきぬであった。
狂四郎は、黙って、立ち上ると、二階へ上って行った。
きぬは、そのつもりになった。
いそいそと、身仕度して、階段をのぼって行くと、意外にも、ひそひそと話し声がきこえて来て、きぬは、踊り場へ立ちすくんだ。
「旦那は、尾行されたのに、お気づきではなかったので……？」
いつの間に、帰って来たのか、猫兵衛であった。
「横丁の入口に、三人見張って居ります。伊賀衆と看て取りました」

「それで、お前は、屋根づたいに戻って来たわけか」
「そうなので……、どうなさいます？　いま、すぐ、おひきあげなさいますか？」
「据膳を、食わねばならぬのだが──」
狂四郎は、こたえた。
立ちすくんだきぬは、からだが熱くなった。
「そんなのんきなことを仰言っている場合じゃございませぬ」
「このおっとりと静かな京の市なかで、斬り合うような野暮なまねは、向うもせぬだろう。……ところで、猫兵衛、お前の方は、どうして、おくれた？」
狂四郎は、訊ねた。
「へい──」
猫兵衛は、顔を伏せた。
狂四郎は、笑って、
「猫兵衛、あの杉重という老女を、三度抱いたな？」
「へい。かくれ場所としては恰度いい、と思いつきましたし、それに、犬助にあざけられたことも頭の中にのこって居りましたので、西の丸様のご在処をはっきりとき出してやろうと存じましてね」
「杉重は、しゃべらなかったろう。その代り、女になって、狂ったように身もだえたのではないか」
「まるでごらんになったように、おあてなさいます」
「お前を、この後、幾度も、忍んで来させるためには、秘密をそうやすやすとしゃべるものではない。こうなると、女は、しぶとく、強い」

「大番頭小屋の小座敷には、鳥羽絵がかかって居りましたか？」
「かかっていた。かくれ場所は、寺だとだけ、判った」
それから、しばらく、私語が交わされていたが、やがて、声は絶えた。
踊り場に立ちつくすきぬのからだが、ひえきった。
「入って来てもよいぞ」
狂四郎が、呼んだ。
「夜明けの据膳の味を、ためしてみよう」

鼠賊

一

翌日――、
眠狂四郎は、京都町奉行所へおもむき、奉行寺沢内膳正に面会すると、大納言家慶のかくれ場所が、何処かの寺院らしい、と告げた。
「その鳥羽絵に、庚午年大火と記されてあったというのだな？」
内膳正は、まるで肩のあたりに蚤でもいるかのように、上半身をしきりに、うごかし乍ら、小首をかしげていたが、
「ちょっと待っていてもらおう」
立ち上ると、

「書庫で調べて来る」
ととわって、せかせかと、出て行った。
狂四郎は、腕組みして、待ち乍ら、
——二条城の城代は、若年寄永井尚佐が京都所司代時代に、同じ穴の狢になっていた。ということは——京都所司代であった者と二条城城代と所司代屋敷与力であった佐野勘十郎の三人の協議によって、西城府の監禁場所が決定されたことは、かれらの縄張り地域内という推測が成り立つ。すなわち、この京都から、あまり遠くない場所だ。
と、推理の筋道を辿った。
内膳正は、なかなか戻って来なかった。
狂四郎は、黙然として、宙に眼眸を置いているうちに、不破の古蹟で決闘して、斃した明日心剣の俤を、よみがえらせた。
明日心剣——旗本御家人篠原雄次郎は、死んではならぬ男であった。にも拘らず、死んで行ったのである。
——あの時、あの男は、何故、おれに遺書など書かずに、直接打明けて、味方になって欲しい、とたのんで来なかったのか？
大垣藩当主戸田氏庸（十五歳）が、心剣の実子であるという秘密を、お目付佐野勘十郎の手に握られたことが、心剣を刺客にしたのであった。
しかし、心剣は、この眠狂四郎がどういう人間であるか、ということを、充分知った筈であった。それゆえにこそ、遺書をのこしたのである。
それほど信頼すべき人間と知っていたならば、敢えて勝負を挑まず、その力を借りる気持に、

どうしてならなかったのか。

刺客たることに終始して、死んではならぬ身が、不破の古蹟の路傍の土になってしまったのである。

――それにしても、なんという窮屈な律義な生涯を送ったものか。

旗本御家人篠原雄次郎が、大垣藩主戸田氏庸の実父になったのは、渠自身が、それをのぞんだのでもなければ、やむにやまれぬ事情によるものでもなかった。

柳生道場の朋輩であったという、ただそれだけの知己である戸田氏教から、たのまれて、不能者の氏教に代って、その妻を抱いたにすぎないのであった。下種の云いかたをすれば、篠原雄次郎は、種馬にされただけのことであった。

氏教の妻が懐妊し、男児をもうけた、ということは、すでに、雄次郎自身とはかかわりのない出来事であったのだ。男児は、氏教の嫡子として、この世に生を享けたのだ。

篠原雄次郎は、種馬にされたために、おのれの姓名もすてなければならなかった。

さらに、十五年の歳月を経乍ら、その秘密を守るために、佐野勘十郎の狗となって、ついに、この眠狂四郎の無想正宗の下に、一命を落さなければならなかった。

こんなばかげた生涯が、またとあるであろうか。

おのれの人生と比べて、あまりにも極端な対蹠を示す明日心剣の生涯を、想いやって、狂四郎は、しだいに、胸中が、鉛のような重いものでふさがれるのをおぼえずにはいられなかった。

――おれが、渠に代って、佐野勘十郎を斬って、戸田家の秘密を保ってやったところで、心剣自身の生命は還っては来ぬ。

狂四郎が、呟いた時、ようやく、せかせかした跫音が、廊下にひびいた。

入って来た京都町奉行の片手には、古びた書物が、携えられていた。

「判ったぞ！　これじゃ、これ――」

ひらいたところを、ぱんと平手打ちして、狂四郎の前へ投げてみせた。

それは、「聖徳太子伝補闕(ほけつ)記」の一節であった。

『……庚午年四月三十日夜半有災斑鳩(いかるが)寺』

そう記されてあった。

つづけて、

『斑鳩寺罹災(りさい)之後、衆人不得定寺地』

と、記されてあるところをみると、これは、世人をおそれおののかせた非常な大災であったのである。

斑鳩寺が焼失したので、幾年後かに、分散して、蜂岡(はちおか)寺、高井寺、三井寺をつくった、と「補闕記」はしるしている。

狂四郎は、一読して、眉宇(びう)をひそめた。

「わたしは、寺社に関する知識が、きわめて乏しい男なので……、斑鳩の里に、斑鳩寺という寺が、現存して居りますか？」

「それだな。斑鳩寺とは、すなわち、法隆寺を示している」

「……？」

「学説によれば、斑鳩寺と法隆学問寺とは、全く別個で、推古帝十五年に、まず斑鳩寺が建立され、つづいて法隆学問寺が造られた、というのだな。天智帝の御世に、斑鳩寺と法隆学問寺が、同時に焼失した。その後、再建されたが、これは、斑鳩寺としてではなく、法隆寺として、新し

い寺院となったそうな。……つまり、斑鳩寺は、焼けて失くなったが、法隆寺として姿をかえたのじゃから、斑鳩寺すなわち法隆寺と称しても一向にさしつかえはない、という次第であろうな」

「成程――」

狂四郎は、うなずいた。

「わしは、書庫で、まず手はじめに、日本紀をひらいてみた。日本紀の記事や年代は、きわめて怪しくて、信じられんところがある。天智帝九年庚午の歳四月三十日夜半、法隆寺が一屋あまさず大火災で烏有に帰した、という記事がのっている。わしは、――ははあ、これじゃな、法隆寺のことか、と思ったが、なにしろ、日本紀の記事というやつは信じ難いところがあるので、別の古書をひらいてみた。法隆寺は、聖徳太子創建のままだ、と書いてある。つまり、庚午の火災は、太子在世中のことで、現在の伽藍は、太子ご自身の手で再建されたもの、と解釈してある。……この補闕記を把ってみて、天智帝九年の庚午の火災はまちがいであることが、明白となった。……鳥羽絵は、斑鳩寺すなわち法隆寺の炎上を描いたものに相違ない」

「西の丸殿は、法隆寺にかくれておいでになる、ということですな」

「左様――」

二

内膳正は、うなずいてから、

「法隆寺とは、意表を衝かれたのう」

狂四郎としても、このかくれ場所は、意外であった。

どこかの山中の、名も知られていない古寺に、とじこめられている、と想像していたことである。

日に数百人、時には千人以上もの参詣人(さんけい)がある法隆寺に、家慶をかくした、というのは、どういうこんたんであろう？

「このかくれ場所をえらんだのは、若年寄永井尚佐と二条城城代の大番組頭と、そして、佐野勘十郎の三人密議した結果と考えられます」

「うむ」

「法隆寺に監禁することを、どうしてこの三人が思いついたか――ちょっと、合点しかねます。もしかすれば、二条城の留守居年寄に、われわれは、まんまと、一杯くわされたのかも知れぬ」

狂四郎は、云った。

「お主にそう云われると、そんな気もするの」

内膳正は、貧乏ゆすりをつづけ乍ら、双手(もろて)をこぶしにして、膝を叩いた。

なにやら思案をめぐらす時の、これは癖かも知れない。

その時――。

突如、真上の天井裏で、もの凄(すご)い物音が発した。

物音は、それだけで絶えたが、狂四郎の神経には、音を消したままで、目まぐるしい争闘が、くりひろげられているさまが、はっきりとつたわって来た。

曲者が、天井裏に忍び込み、それに向って、奉行所抱えの隠密が襲った、と判断された。

狂四郎は、町奉行所へやって来る途次、ずっと尾行されていたのである。気づいて、わざとそ

知らぬふりで、尾行させて来たのであった。

狂四郎は、天井裏の争闘が――一人が仆れて、終った、とさとるや、すばやく、無想正宗を携げて、廊下へ出た。

廊下の天井裏を生き残った者が、移動して行く。

それを追って、狂四郎は、跫音を消し乍ら、進んだ。

長い廊下が、鈎の手に曲って、さらに長くつづいて、やがて、行きどまりになった。

そこから、別棟へ、渡り廊下がつないでいた。

黒い影が、天井裏から抜け出て、渡り廊下へ跳んだ。

これは、まぎれもなく侵入した曲者の方であった。

跳び降りた瞬間、真向いに、眠狂四郎が、うっそりと佇立して待っているのを見出して、愕っとなる様子を示した。

狂四郎は、ひややかに、あびせた。

「お主、二条城やといの忍者にしては、どこやら、泥くさい臭気が立って居るぞ」

「…………」

対手は、黙って、じりじりと後退した。

「どうした？　おれを仆さねば、この場を遁れられぬぞ」

「…………」

「庭へ跳べば、おれの小柄も飛ぶ。うしろの廊下には、もう奉行所の隠密方が、進んで来て居る。おれにかかって来るか、それとも、隠密陣を突破するかだ」

「…………」

「それとも、もう一度、天井裏へもぐることにするか」
からかわれて、対手は、忍び手裏剣を数本投じて来た。
狂四郎は、無手で、これを躱した。一本は襟を刺し、一本は袂を貫いた。
「逃げ腰で、撃って来ても、中らぬ」
狂四郎は、あざけった。
と――。
忍者は、腰の小刀を、鞘毎抜きとると、その場へ坐って、それを前に置いた。
「降参つかまつる」
奉行所の隠密たちは、すでに、その背後へ、馳せ寄って来ていたので、遁れ難いと観念した神妙さを示した。
「忍びにしては、降参のしかたが、いささかかんたんすぎるようだ」
「お手前の強さは、すでに承知つかまつる」
「闘ってみての上で、納得したらどうだ？」
「いや、すでに、お手前の強さは、猿太と犬助から、きいて居り申す」
「お主は、あの三人の仲間の伊賀者か？」
「同郷でござるが、いまは仲間ではござらぬ。鼠左衛門と申す」

三

狂四郎は、鼠左衛門という伊賀の忍者をつれて、町奉行所を出ると、
「猿太と犬助が、寐ている処へ、案内してもらおうか」

と、命じた。

鼠左衛門は、困惑の面持で、

「そ、それは……」

と、しりごみした。

「いやだというのか？」

「べ、べつに、いやだとは申さぬが……、ちょっと、そのう——」

「降参したのだぞ、お主は」

「わかって居り申す。わかって居り申すが……、なろうことなら、これで、お見逭しを、お願いいたしとうござる」

「それは、いささか虫がよすぎる。……降参した以上は、こっちの指示に従ってもらおう」

「眠殿——」

鼠左衛門は、ぺこりと頭を下げた。

「お許し下され。それがしは、猫兵衛も猿太も犬助も、ご老中側用人の武仙殿に、やとわれたから、ただ、お手前に従っているのではなく、すでに、心服して居ることを、承知つかまつる。……それがしは、つまり、その——そこを利用して、猿太と犬助に、私も仲間に加えてくれ、とたのんだのでござる」

「それで、猿太と犬助は、お主に心を許して、わたしに従って働いている仕事の内容を、打明けた、というのだな？」

「左様でござる」

「お主は、しかし、仲間に加わらず、おのれ一人の料簡で、この秘事に、首を突っ込んで、なに

か、うまい汁を吸おうと、考えた。——そうなのだな？」
「申しわけござらぬ。お許し下され。この通りでござる」
鼠左衛門は、もう一度頭を下げた。
狂四郎は、言葉をつづけた。
「うまい汁を吸うために、わたしのあとを尾けまわして、町奉行所の書院の天井裏に、忍び込んだ。……そして、奉行とわたしの交わした話を、ぬすみぎいた」
「たしかに、ぬすみぎき申した。……しかし、それがしの頭脳では、どうも、お話の内容が、よく読みとりかね申した。斑鳩寺と法隆寺が、同じだとか……」
「空とぼけないでもよい。お主は、ちゃんと読みとった筈だ」
「…………」
「空とぼけて居らぬ、というのなら、あらためて、きかせてもよい。まことの西の丸殿——将軍家世子家慶殿は、目下、斑鳩の法隆寺に、監禁されて居られる。わたしは、そのことをつきとめた。……ひそかに上洛して来て、二条城に逗留中の内大臣大納言家慶は、贋者であり、この贋者と、法隆寺に監禁されている本物とを、どうやって、世間の耳目にふれぬように、すりかえて、本物を、江戸城へおかえしするか——わたしと猫兵衛、犬助、猿太の仕事は、これだ。べつに、一文にもならぬ仕事だな」
「よ、よく、わかり申した」
「お主が、降参したのであれば、犬助、猿太の前で、わたしを立ちあわせて、自分もあらためて、仲間になると誓えばよかろう。そうすれば、犬助も猿太も、お主を許してくれるのではないか」
「忝のうござる。……犬助らがやすんでいる家へ、ご案内つかまつる」

鼠左衛門は、安堵（あんど）したように、狂四郎の前に立った。

洛中洛外、京の都は、いたるところ名所旧蹟である。

如意ヶ嶽を右方に仰いで、北白川から、一乗寺に入れば、そこにもさまざまの昔譚（がたり）をつたえる旧蹟が、ちらばっている。

村の入口は、降松（さがりまつ）といい、宮本武蔵が吉岡一門七十余名をむこうにまわして、血みどろの修羅場をくりひろげた。いまは、その松も枯れて、田野（でんや）がひろがっているばかりであるが、降松の名は、すでに「太平記」にも出ている。平敦盛（あつもり）に一子があった。敦盛が、西海に滅んだのち、敦盛夫人は、その嬰児（みどりご）を、源氏に奪われまいとして、この降松の小さな家にかくした、という。

辰巳（たつみ）の山上には、頼仙祠が建ち、石川丈山が嘉遁（かとん）の地として、ここに庵（いおり）をむすんだ。舞楽寺（ぶがくじ）村山腹には、天王社があって、紅葉の名所。天王社の下には、金福寺（こんぷくじ）があり、その裏手に、芭蕉（ばしょう）がしばしば寄宿して、その建物に、芭蕉庵（あん）の名をのこした。詞人吟客は、京都へ来れば、必ず、ここを訪れる。

一乗寺村の東の禅刹（ぜんさつ）、円光寺の本尊千手観世音は、運慶作として有名であり、その後方の山上は、東昭宮である。足利学校という書生受業の旧館を、ここに、とどめている。

伊賀の忍者鼠左衛門は、狂四郎を、一乗寺村入口の降松まで、案内して来て、

「宮本武蔵は、ここで、吉岡道場の者を、まこと、七十余人も対手として、闘ったのでござろうかな？」

と、訊ねた。

「本人が、そう書きのこしたのであれば、そうと信じるよりほかはあるまい」

「一人で、七十余人も対手にして、よく生きのびられたものでござる。……眠殿には、そのような経験は、ござったろうか？」
「犬助らは、この一乗寺にいるというのか？」
と訊ねた。
「ほれ――あの乾の、小さな森がござる。比良木の杜、と称して居り申すが、中に祠がござる」
鼠左衛門と狂四郎は、田の中の小径を辿って、その森に近づいた。
森の入口に来て、狂四郎は、
「ご苦労であった」
と、云い、
「ここが、お主の冥土への入口か」
と、あびせた。
瞬間――。
鼠左衛門は、一間余を跳んで、向きなおった。
狂四郎は、冷笑し乍ら、なお、ふところ手のままであった。
「対手がわるかったようだ、鼠左衛門。わたしの動静をかぎまわっているのは、お主一人ではなく、お主の仲間がいるものと考えたことだ、猫兵衛らとはちがったお主自身の仲間が、だ」
「…………」
だました、と思っていたおのれが、だまされていた、と知らされた鼠左衛門は、狂気じみた形相と化していた。

「佐野勘十郎にやとわれているのか、それとも、お主らだけが徒党を組んで、野盗めいた働きをしているのか、それは、知らぬが、明白なことは、わたしにとって、迷惑な存在だということだ。……お主一人を斬ることは、造作はなかったが、ついでに、一味も片づけることにして、案内させた。やむを得ぬ仕儀だな。……野盗は野盗らしく、せいぜい、田舎分限者の土蔵ぐらいを、破っていればよかったのだ。……あきらめてもらおう」

その宣告が、おわらぬうちに、鼠左衛門は、奇妙なけたたましい叫びを噴かせた。

祠の中から、五、六人、とび出して来た。

狂四郎は、おちつきはらって、ゆっくりと、進みはじめた。

斑鳩（いかるが）の里

一

眠狂四郎としては、これまで、忍者の集団を対手として、闘った経験は、豊富である。したがって、渠（かれ）らの攻撃方法に就いては、ほぼ知りつくしている、といってよかった。

その痩身（そうしん）を、野に移すかわりに、五体の翻転の不自由な松の木立の中へ、すすっと運び入れたは、そのためであった。

忍者の攻撃方法の知識に乏しい者ならば、いずれへも自由に奔（はし）ることのできる広い場所をえらんだに相違ない。

忍者たちは、狂四郎の予測通り、狂四郎を中心の点にすると、おのれらを線として、目まぐる

しく円を描きはじめた。

雑木の間隔はきわめて狭いのであったが、渠ら七人は、宛然（さながら）平地を駆ける迅（はや）さを示した。

狂四郎は、わざと動かなかった。

一瞬——。

一人が、背後から、宙に躍って、襲いかかって来た。

頭上から、突きおろす一撃と、下から抜きつけの一閃（せん）を放つのと、いずれに遅速があった、とも見えなかったが、次の刹那（せつな）、忍者は、石のごとく地面へ落ちた。

狂四郎の方は、風の迅さで、円を描く敵の、その線上へ、身を移していた。

身を移したとみるや、無言の気合を発して、立木を両断しはじめた。

直径二寸乃至（ないし）三寸の生幹を、一颯（さつ）の刃音の裡（うち）に次々と両断する冴（さ）えた業は、狂四郎独特のものであった。

のみならず、それは、まばたくほどの間（ま）さえも置かなかった。

一木を両断する閃光を、そのまま、次の立木を両断させるのに、継続させた。

烈しく枝葉を鳴らして、右へ、左へ雑木が倒れてゆくにつれて、忍者たちは、円を描くことをはばまれ、その速力も落ちた。

いわば、倒れかかる立木によって、一筋の糸でつないでいたように保っていた渠らの気脈が、ばらばらにされたのであった。

各個それぞれが、狂四郎を襲わざるを得ない立場に置かれたのである。

こうなると、利は、狂四郎の方にある。

一人、二人、そして三人と、狂四郎は、斬り仆（たお）してゆく。

ついに、二人を残した。

一人は、鼠左衛門であった。

狂四郎は、はじめて静止して、

「鼠左衛門、どうだ、こんどこそ、降参するか」

と、あびせて、冷やかな微笑を、口辺に刷いた。

「くそ！」

鼠左衛門は、あまりの狂四郎の強さに対する恐怖とあざけられた屈辱で、眦を裂き口をひらき、こめかみを痙攣させていたが、一瞬、叫喚とともに、自暴自棄に似た跳躍を示した。

狂四郎の頭上を翔け過ぎた時、その首は、胴とはなれて、雑木の高枝へひっかかった。

ついに、狂四郎は、敵を一人にした。

この忍者だけは、最初から冷静を持して、むしろ、絶えず、遠くに身を置いていた。あるいは、七人中最も忍びの術に長けていて、狂四郎が容易に斃せる対手ではない、と看て取っていたものと思われる。

しかし、一人にとり残され乍らも、遁走の気色は、みじんも示さなかった。

狂四郎は、ゆっくりと、迫った。

忍者は、二尺あまりの忍び刀を、胸前に横たえて、待つ。

その折であった。

不意に、狂四郎の後方から、

「蛇市、刀をすてろ！」

と、声がかかった。

猫兵衛であった。

「お前らの敵う御仁ではない。刀をすてろ！」

蛇市と呼ばれた忍者は、すっと一歩退くと、忍び刀を、かたわらの雑木の幹に突き刺しておいて、顔を伏せた。

猫兵衛は、狂四郎の脇を抜け出て、蛇市に近づくと、いきなり、烈しい平手打ちを、その顔へくらわせた。

猫兵衛が、ここへやって来たのは、町奉行所へ行き、狂四郎が一足ちがいで、降参した鼠左衛門という伊賀者をつれて立去った、ときいたからであった。

猫兵衛は、むかしの仲間である鼠左衛門が、野盗になりさがって、この一乗寺村に巣食っていることを、知っていたのである。

「旦那、許してやって下さいまし。この蛇市は、てまえの甥でございます」

猫兵衛は、そう詫びて、蛇市に土下座を命じた。

「鼠左衛門にそそのかされて、斯様なていたらくをさらして居りますが、まだ、たたきなおせば、性根がもとにもどるかと存じます」

「お前がそう云うのなら、恰度いい機会だろう」

「いえね、旦那に、いっそ片づけて頂ければ、べつに惜しい奴ではないのでございましたが、ふと、思いついたことがございましてね」

「…………」

「旦那――。よくごらん下さいまし。こいつのからだつき、顔つき……、旦那の替玉にできるのじゃございますまいか。それに、餓鬼の頃から、人真似の巧みな奴でございました」

「わたしに、替玉は要らぬ」
「それが、要るのでございます」
猫兵衛は、おのれがまわした智慧(ちえ)を披露する笑顔をつくった。

二

猫兵衛は、狂四郎が町奉行所へおもむいたあと、ふっと気がかりになることがあって、不敵にも、昨夜あれほどの騒動を起した二条城へ、忍び込んだのであった。
猫兵衛の直感力は、鋭かった。
留守居年寄杉重は、奥向きの一室で、大久保久兵衛の前に据えられていたのである。
「昨日、お許(こと)は、夕餉(ゆうげ)の膳にも就かずに、ずっと臥牀(がしょう)されていたそうなが……、今朝がた、妙なことを、女中の一人が、申して居ったのを、耳にいたした。それで、念のために、おたずねつかまつる」
「なんでありましょう?」
「お許が、夕刻、厠(かわや)に入られて、そのまま、出て来られなかった、と申して居るのでござる。不審に思うていたところ、あの騒動が起り、その女中が、お許の居間に馳(は)せつけたところ、いつの間にやら、牀(とこ)にやすまれていた。……つまり、お許は、三刻(六時間)ばかりの間、行方知れずになられて居った、という次第でござるな」
「その女中は、なにを申しますことやら。——わたくしは、たしかに、厠には、かなり長く入って居りました。一昨日以来、腹痛がつづいて居りましたゆえ、厠には、いくたびもかよいました。……厠からもどって、すぐに、居間にひきこもって、やすみました。行方知れずになったなどと、

なんというたわけたことを申しますものやら……」

しかし、大久保久兵衛は、その弁解をきいても、容易に納得しなかった。

どうして奥医師を呼んで、診せなかったのか、とか、なぜ女中に看護させなかったのか、とか、かなりしつっこく、問い詰めた。

杉重の態度が、みじんの動揺もみせなかったので、大久保久兵衛は、ようやく許したが、疑惑の念をすててはいない様子であった。

猫兵衛は、このさまを、天井裏からのぞき視しているうちに、ふと、ひとつの思案をめぐらしたのであった。

杉重が居間にひきとるのを、見はからって、猫兵衛は、天井裏から、その目の前に降り立った。

杉重は、まるで救いの主が現われたように、猫兵衛にすがりついて、

「わたくしを、ここから、つれて逃げてたもれ！」

と、かきくどいた。

「分別のないことを申されるものではありませぬ。むこうが疑うてかかっているのであれば、その裏をかくのが、大人の智慧と申すものではありませぬか」

猫兵衛は、杉重を抱いてやり、片手を胸にさし入れて、乳房を愛撫してやり乍ら、ささやいたものであった。

「大人の智慧とは——？」

杉重は、胸からひろがる官能の疼きに、身を崩しつつ、問いかえした。

「正直に、打ち明けられるのでございますよ、眠狂四郎に拉致されたとな」

「そ、そんな……」

「いえ、正直に打ち明けられるのは、そこまででございます。眠狂四郎に、西城府様のかくれ場所を教えよ、と脅かされて、しかたなく、その場で思いついた処を、告げた、と仰言るのでございます」

「ど、どこだと告げた、と申せばよい？」

「左様――。四国のはずれあたり――宿毛などは、如何でございましょう」

「宿毛――」

「宿という字に、毛と書きます。高知からずっと南にある漁村でございます。西城府様は、そこにおいでになる、と眠狂四郎に告げた、とお教えなさいまし。……いえ、大丈夫でございますとも！　勇気をお出しになって、おやり下さいまし。このまま、疑惑の目で見られたまま、怯えているよりは、思いきって、逆手をとってみるのが、かしこいやりかたでございます」

猫兵衛に入れ智慧された杉重は、もうその時は、ひとたびおぼえた男の味に溺れることに夢中で、

「わたくしに、勇気を出させたくば……」

と、くどいたのであった。

猫兵衛としては、いささかうんざりであったが、やむなく、その裳裾をはぐったのであった。

「……という次第でございましてね」

猫兵衛は、狂四郎に、云った。

「いま頃は、あの年寄は、大久保久兵衛に、そのように白状しているはずでございます。貴方様の替玉が入用なのは、このことでございます」

「この甥を、わたしになりすまさせて、四国へむかわせる、という算段か」

狂四郎は、苦笑した。
「左様でございます。これア、われ乍ら、妙案だと存じます。……蛇市、目をあげて、旦那をよく視るがいい。替玉になれるな？」
猫兵衛に云われて、蛇市は、狂四郎を仰いだ。
「どうじゃ、なれるな？」
「うむ――」
蛇市は、頷いてみせた。
「これは、絶対に仕損じてはならぬ役目だぞ。すくなくとも、四国に渡るまでは、尾行者どもに、眠狂四郎と信じ込ませるのだ。……尾行して来るのは、一人だけではあるまい。お前は、眠狂四郎になりすましたからには、一人ぐらいは、鮮やかに斬ってすててみせろ。他の者に、その腕前をみせて、相違ない、と信じさせる。……やれるな、蛇市？」
「やれる」
「誓え！」
「誓う！」
「もし、露見して、そのまま、何処かへ遁走するようなことがあれば、この猫兵衛が、地の果てまで追いつめて、お前の首を刎ねるぞ」
「叔父御、安心してくれ。わしは、この旦那に、なにやら、魅せられた」
蛇市は、そう云うと、あらためて、狂四郎に向って、
「やらせて頂きます」
と、頭を下げた。

三

二日後——。
夜明け前に、京を発った一梃の早駕籠が、奈良街道を下った。
斑鳩の里に入ると、狂四郎は、駕籠を止めて、外へ出た。
法隆寺に、本物の家慶が、監禁されているとすれば、その周辺は、警戒が厳重な筈であった。
勿論、公然と番所が設けられたり、警備の士がそれと判る姿で歩きまわっている次第ではあるまい。
内密に、監視役が配備されているに相違なかった。
狂四郎は、まず、その監視役に、ぶっつかることをのぞんで、往還をひろいはじめた。
法隆寺を、数町さきにのぞんだ地点に、立場があった。
狂四郎は、数軒ならんだ茶店の、はずれの一軒に入った。
他の茶店は、あるじが土くさい年寄りばかりであったが、その一軒には、白い顔がぱっと浮き立つような器量のいい娘が、赤いちりめんの前だれをつけて、客を呼んでいたからである。
——鄙には稀な器量というだけでなく、この垢ぬけた姿は、武家の作法を身につけている。
狂四郎は、鋭く看てとったのである。
「ようこそ、おいでやす。なににしまほ？」
愛想よく、小首を傾けてみせた。
狂四郎は、甘酒を所望した。
うららかな春日であった。

野には、菜種の花が、黄の毛氈を敷きのべたように咲きほこっていた。
つい目前の小川沿いの土手には、雪柳が、咲き満ちて振りなこぼしそ小米花、という句そのままに、純白の米粒のような花をつけて、蝶を呼んでいた。
「はい、どうぞ、召し上っておくれやす」
はこばれた甘酒茶碗を、狂四郎は、手に把ったが、そのまま、眼眸を、雪柳へ置いていた。
お茶汲み娘の視線を、背中に感じ乍ら、狂四郎は、それなり、絵にでも入ったごとく、動かなかった。
「お客さん――」
しびれをきらしたように、お茶汲み娘が、声をかけて来た。
「どうしやはりましたえ？」
狂四郎は、われにかえったように、
「甘酒に、虫が入った」
と、こたえた。
「ほんまどすか？」
お茶汲み娘が、のぞき込もうとするよりはやく、狂四郎は、おもてへ、甘酒を撒いた。
手水鉢ぎわの石の上で、猫が一匹、陽だまりのあたたかさを愉しんで、まるくなっていた。甘酒は、それにも、かかった。
猫は、ひょいと起きて、甘酒で濡れた毛を、なめはじめた。
とたん、
「あ！」

お茶汲み娘が、ぱっと走り出て、すくい取るように、猫を抱きあげると、奥へ駆け込んでしまった。

――ふむ。やはり、毒をまぜていたか。

狂四郎は、さとった。

小銭を置いて、茶店を出た狂四郎は、あとは、まっすぐに、法隆寺を目指すばかりであった。

その行手をはばむ者が、現われるであろうことは、承知の上であった。

まんじゅう笠をかぶった雲水の列が、うしろから、やって来た。

頭をまわした狂四郎は、その歩きかたを一瞥（べつ）して、

――こいつらか。

と、合点した。

雲水の歩きかたではなかった。

狂四郎は、わざと歩度をのろくした。

雲水の列は、さっさと通りすぎた。

殿（しんがり）の者が、狂四郎の前に出た時、

「おい――」

狂四郎の口から、声がかけられた。

「お主ら、西の丸殿を警備している面々だろう」

その言葉に、十一人の雲水の足が、ぴたりと停められた。

「わたしは、西の丸殿が、法隆寺に在る、とかぎつけてやって来た野良犬だが、お主らは、こういう野良犬を狩る役目ではないのか？……こっちは、面謁（めんえつ）をねがってやって来た。お主らが、こ

れをはばむのなら、ここで、善男善女を仰天させる修羅場となる。それとも、人目のつかぬ場所をえらぶか？」
殿の雲水が、向きなおった。
「貴公の名は？」
「眠狂四郎。この仮名は、西の丸殿も、ご存じの筈だ」
「貴公の名は、われわれも承知して居る」
「佐野勘十郎から、ここへも、通報があったのか。もし万一、眠狂四郎がかぎつけて近づいて参ったら、討ちとれ、と——」
「いや、ちがう。われわれは、佐野勘十郎というお目付の配下ではない」
「………」
「上様じきじきのお声がかりにて、おん身を守護する一党と知るがいい」
しかし、対手がたは、それに就いては、それ以上こたえず、
「どういうのだ？」
「上様が、この法隆寺に在すことを、知った者は、生かして還せぬ」
と、宣告した。
狂四郎は、冷たく笑って、
「こっちは、西の丸殿を、元の座につれもどすべく、やって来た」
と、云った。
すでに、他の十人の雲水は、かくし持った刀を、衣の下から、抜き出していた。
「白昼、世間もはばからず、この往来で、やるのか。内密の警備陣としては、少々うかつにすぎ

るのではないか」

狂四郎が、云うと、殿の者は——この人物が、頭領のようであったが——片手を挙げて、雲水たちを抑えた。

刀は再び、衣の下にかくされた。

「えらぶ場所は、そちらにまかせる」

狂四郎は、云った。

すると——、

「跟いて来るがよい」

頭領が、促した。

そのまま、まっすぐに、法隆寺に向って、進んで行くのだ。

——どういうのだ？

狂四郎は、判断に苦しんだ。

修羅場をくりひろげるならば、法隆寺からすこしでもはなれた場所を、えらぶべきではないのか。

この様子では、こちらを、法隆寺につれ込もうとしている。

法隆寺山内に、決闘場所がある、というのであろうか。

狂四郎は、不審のままに、うしろにしたがって、ふところ手で、歩いて行った。

雲水の列は、しずしずと、南大門をくぐった。

五重塔

一

法隆寺山内は、途方もなくひろい。
かなりの参詣人を入れているのであろうが、その影は、ほとんど見あたらない。
地面が雪のように白く、見事な枝ぶりの老松のたたずまいが、その白色に映えて美しい。
南大門をくぐって、歩み入るにつれて、心気おのずから澄みわたる。
十一人の雲水の殿を行く頭領が、二王門の前で、狂四郎を、停めた。
「ここにて、暫時、待て」
「…………」
狂四郎は、ふところ手で、雲水の列が、二王門をくぐって行くのを、見送った。
二王門の屋根のむこうに、五重塔が、そびえていた。その右手に、金堂の屋根が、のぞまれる。
狂四郎は、かなり長い時間、そこに立たされていた。
――あの面々は、柳生道場からえらばれた公儀御庭番ではなかろうか。
狂四郎は、雲水姿になった警備の士たちのことを考えていた。
柳生道場からえらばれた公儀御庭番とは、これまで、幾度か、決闘した経験を持つ狂四郎であった。
数年前、京都阿弥陀ヶ峰に於て、二十名にも及ぶ公儀御庭番と、死闘した挙句、虜囚の身にな

ったこともある。

円月殺法を含む一刀流絶妙の秘術のことごとくを、渾身にふるって、ついに、敗れたものであった。御庭番側は、火薬がはじけて鮮烈な閃光を散らす特殊龕燈で、狂四郎の目を晦まし、さらに、細長い筒から長針を噴かせて、顔面にあびせかけておいて、頭上から、投網を降らせると、狂四郎を生捉ったのであった。

剣を把ればいずれも一流の使い手が、卑劣と思われる意外の術策を用いるのが柳生流御庭番であった。

あの雲水たちが、そうであるとすれば、こちらは、生きて法隆寺から出ることは、まずおぼつかぬ。

——賽の目が、どう出るか、こっちは、待つよりほかはない。壺を振るのは、むこうさんだ。

そう呟いた時、二王門から、頭領が一人で現われた。

「案内いたす。こちらへ——」

狂四郎は、二王門をくぐった。

見渡すと、五重塔の前面の置石に、人影がひとつだけあった。

宗匠頭巾をかぶり、袖なし羽織に、軽衫をはいていた。

頭領は、近づくと、地面に膝をついて、

「眠狂四郎をともないましてございまする」

と、告げた。

「うむ——」

その人物は、かるく頷いただけで、べつに振りかえろうともしなかった。

狂四郎は、すこし位置を移した。
「控えい！」
頭領が、叱咤（しった）した。
狂四郎は、膝まずき乍ら、その人物の横顔を視た。
江戸城西の丸の主（あるじ）家慶にまぎれもなかった。
曾（かつ）て――。
西の丸に、幽霊が出現して、家慶の世子政之助（当時六歳）を深夜おびえさせる事件が起き、狂四郎は、その下手人をつきとめて、家慶から感謝されたことがあった。
その後も、いくたびか、面謁する機会があって、顔は馴染（なじみ）であった。
「狂四郎――」
家慶は、五重塔へ、眼眸（まなざし）を置いたまま、呼んだ。
「この自分を迎えに来た、と申したそうだの？」
「ご老中水野越前守殿の御依頼にて――」
狂四郎は、こたえた。
「越前の側用人――武部仙十郎、と申したか――あの年寄りは、この自分が、拉致されて、何処かに監禁されている、と考えたのではないか？」
「自身の意志で、ここへ参った、と仰せられますか？」
「そう申せば、嘘になろう。だが、べつに、永井尚佐らに、おどかされた次第でもないぞ。……狂四郎、そちは、建物というものに、興味を抱かぬか？」
「法隆寺が、一名斑鳩寺と呼ばれていることさえも知らなかったうつけでありますれば……」

「狂四郎、この五重塔を、眺めるがよい。四方正面——本面は阿弥陀の三尊、東面は文殊大士、浄名居士、西面は荼毘入棺、北面は涅槃——いずれも、鳥仏師が、土をもって造ったという。自分は、元服した年、伊勢詣での途次この五重塔を眺めて以来、これに魅せられて居る」

「…………」

狂四郎は、家慶の意外な言葉をきいて、とまどいをおぼえた。

「もとより、唐招提寺の五層塔も、薬師寺の六層塔も、自分は好きだ。しかし、この法隆寺の五重塔ぐらい、自分を魅了する塔はない。……魅せられついでに、自分は、この五重塔について、今日までさまざまの書物を読んで参った。……自分には、学者の才能はないが、この五重塔に関する限り、いかなる学者よりも、知識が豊富である自信を持って居る」

二

家慶は、語りつづけた。

「……法隆寺が、聖徳太子によって造立されたことは、そちも存じて居ろう。だが、太子造立の伽藍も塔も、天智天皇九年庚午の歳四月三十日の夜半に、焼失してしまった、という記録がのこって居る。世人は、しかし、最初の法隆寺が、焼失して、現在のものは再建されたものであることを知らず、聖徳太子造立のままに、残っているもの、と信じて居る。……いまの学者たちも、再建されたものとは知らぬ者が、多い。庚午の火災を知って居る者も、その一部が焼けただけで、主要伽藍、塔はそのまま残った、と信じて居る。……自分は、書物をあさった挙句、聖徳太子が造立された金堂も講堂も五重塔も経蔵も、むしろ規模の小さなものではなかったろうか、と想像した。……自分は、こういう調べに、おのれ自身、意外なくらい熱中できる性情であることを、

知ったのだ」

「…………」

狂四郎は、黙然として、きいているばかりであった。

「自分は、書物だけで調べることにあきたらず、十年ばかり前、ひそかに庭番を遣わして、実地に調べさせてみた。中門、金堂、五重塔付近からは、焼け土を見つけることはできなかった。講堂、鐘楼、経蔵付近には、焼け土の層があった。……では、庚午の火災では、金堂、五重塔は、焼けなかったのか。太子伝補闕記には、衆人寺地を定むることを得ず、とあるではないか。すべてが烏有に帰したからこそ、あらたに、いずれの地に再建すべきか——衆人は、その地を容易に定めがたかったのだ。……遣わした庭番は、さらに、この五重塔の心柱の下に、空洞があることを、発見して、礎石の中に、舎利などを納めた器物とともに、一面の海獣葡萄鏡が収蔵されているのを、ひそかに、取り出して、江戸へ持ち帰って来た。……自分が、ここへやって来たのは、その鏡を、元にもどす目的もあったのだ」

家慶は、ものにとり憑かれたように、しゃべりつづけた。

狂四郎には、全く興味のないことであったが、四十歳まで一切の権力の埒外に置かれていたこの将軍家世子にとって、おのれが情熱を傾ける唯一の事柄なのであった。

対手に興味があろうとなかろうと、そんなことには頓着せずに、しゃべりつづけるのも、いかに真剣に心をうち込んでいるかという証左のようであった。

法隆寺に於ける最古の建物は、金堂と五重塔と中門の三棟と、これをとりまいている廻廊であるが、各棟の礎石を見ると、これがそれぞれちがっている。金堂の礎石は、大形の自然石を、表面を削って、之に柱を据えている。五重塔の礎石は、その側柱礎が直径二寸五分、高さ二寸の円

柱座に地覆座を付加した形式のもので、その心礎の位置に、九尺九寸の空洞をつくってある。中門の礎石は、すべてが自然石で、表面を削ってはいない。

法隆寺の研究は、まず、この礎石からはじめられなければならぬ。それによって、わが国最古の建物が、いかにして築かれたか、あきらかになるだろう。

……およそ半刻（一時間）近くも、一人でしゃべりつづけてから、ようやく、家慶は、われにかえって、

「狂四郎。江戸城西の丸に於ては、自分には、このように心を傾注するものは、なにひとつありはせぬぞ」

と、云った。

「将軍家世子たる身を忘れる愉しさ、と仰せられますか」

いささかの皮肉を含めて、狂四郎は、云いかえした。

家慶は、しかし、言葉通りに受けとって、

「うむ。愉しい。実に愉しい。金堂、五重塔と、東院、夢殿との礎石の相違を、みとめた時の悦びなど、なにものにもかえがたいものがあったな。……狂四郎、江戸へ戻って、越前の側用人につたえてくれぬか。いましばらく、知らぬふりをしていてくれ、と自分が申していた、とな」

「では、もし、近い日に、将軍家がご他界になり、貴方様になりすました御仁が、その職を襲われ、若年寄永井尚佐、目付佐野勘十郎らが、その側をかためてしまい、貴方様には、永久に江戸城にお還りになれぬこととなったならば、如何なさいますか？」

「…………」

家慶は、はじめて、顔をこわばらせて、狂四郎を視かえした。

狂四郎の双眸（そうぼう）の色は、冷たかった。

家慶は、狂四郎にそう云われて、そういう事態も起る可能性に、気づいたのであった。

しばらく沈黙を置いてから、家慶は、云った。

「あれは、自分の実弟だ。自分と瓜二つであった。性質もわるくないとみた」

「しかし、上様は、斯（こ）の御仁を上様の面前へともなった者らの腹蔵するこんたんを、お看取りではなかったことです」

「…………」

「ご自身では、気軽にお考えになったことでございましょうが、贋の御仁が、西の丸に入られてから、多くの犠牲者が出て居ります」

狂四郎は、その具体例をあげてみせた。

家慶の面貌は、しだいに苦しいものに変った。

三

贋家慶が、将軍の座に坐ったならば、どれほど多くの犠牲者が出るか、測りがたい、と狂四郎に云われて、家慶は、叫ぶように、

「あれを、ここに呼ぼう。そうすれば、世間にも気づかれず、自分は、江戸へ帰れるぞ」

と、云った。

その単純な思案ぶりに、狂四郎は、内心苦笑し乍ら、

「お呼びになれば、やって来るとお考えあそばす？」

「つれて来ればよい。つれて来させる」

「二条城が、修羅場となりましょう。二条城内には、与力、同心、番士合わせて三百人以上も居ります。これらが、内密に上洛した御仁を、貴方様とかたく信じて、警固にあたって居ります。貴方様をお守りしている御庭番衆は二十名にも満たぬ数と存じます。いかに柳生流の手練者であっても、三百人がかためる二条城へ押し入って、斯の御仁を拉致して、当寺までおつれすることは、難事でございます」

「では、どうすればよい？」

「上様ご自身が、こっそりと、京都へおもどりになる――」

「うむ」

「二条城にて、貴方様と斯の御仁が、すりかわられる策以外には、てまえには思案はありませぬ」

家慶は、不安な面持で、訊ねた。

「その時、あれは、どうなる？」

「…………」

狂四郎は、こたえなかった。

家慶は、その沈黙の意味を、読みとった。

「それは、いかぬぞ！　それでは、あれが惨めすぎる。……あれは、くだらぬ迷妄の慣習によって、日蔭者にされたのだ。自分の実弟にまぎれもないのだ。……たとえ、西の丸に於て、放埒の行状があったにせよ、いまさら、闇に葬るのは、なんとしても、あわれではないか」

「…………」

「ほかに思案があろう。……悪心を抱いている側近の者らを、斬るのはよい。その者どもを斬れ

ば、なんとかなろう。そうではないのか、狂四郎?」

「………………」

狂四郎は、わざとこたえなかった。

家慶は、苛立った。

「狂四郎! あれを殺すことは、まかりならぬぞ!」

その声の高さに、物蔭に控えていた十一人の雲水が、さっと、姿を現わして、馳せ寄って来ると、忽ち狂四郎を包囲した。

同じ日――。

二条城へ、ふらりと戻って来た鹿火屋鬼庵は、大久保久兵衛から、三日前の夜半、眠狂四郎の夜襲に遭うたことを、告げられた。

「なにが目的で――?」

鬼庵は、訊ねかえし、狂四郎の口上によれば、贋家慶が木偶であることを止めて人間に還るほぞをきめたかどうか、それをたしかめたくて参上した、ということであった、ときくと、眉宇をひそめた。

「あの男が、ただそれだけの目的で、押し入って来たとは、思われぬ。目的は、ほかにあった、と判断してよい」

「西城府のかくれ場所を、つきとめる目的で――というのか」

「左様――。そうでなければ、面妖しい」

すると、久兵衛は、にやにやして、

「狂四郎は、すでに、西城府のかくれ場所をつきとめた上で、この二条城へ押し入って来たのじゃよ」
「……?」
「つまり、西城府のかくれ場所を白状した者を、返しにやって来た」
「白状した者?!」
「杉重というあの留守居年寄を、狂四郎は、手下の忍び者に、拉致させ、泥を吐かせておいて、返しに来た。ついでに、お上の面前で、侵入して来た目的をうそぶいて行き居った、という次第だ」
「老人、あんたがおちついているところをみると、あの年寄が、狂四郎をいつわった、というのだな?」
「流石は、留守居年寄だけのことはあった。狂四郎を、みごとに一杯食わせた」
久兵衛は、杉重が三刻（六時間）ばかり行方知れずになった事実がある、ときいて、これを糾問したこと、その時は杉重はしらばくれたが、後刻思いかえして、たしかに眠狂四郎に拉致された旨を告白し、しかし、西城府は土佐の宿毛に在ると狂四郎をだましたゆえ安心して欲しいと云ったことを、鬼庵に、つたえた。
鬼庵は、黙ってきいていたが、
「眠狂四郎ともあろう男が、御殿女中ごときに、そうやすやすとだまされるものであろうか?」
と、首をひねった。
「だまされた証拠がある」
久兵衛は、云った。

「証拠？」
「狂四郎は、昨日、西国街道を、西へ向って行った。五人ばかり、尾行させたが、どこかの湊から、海を渡れば、これは、彼奴がまんまと一杯食わされた証拠ではないか」
「…………」
鬼庵は、なお疑惑が溶けぬ表情を保った。
眠狂四郎という人物について、鬼庵は、その人となり、過去の行状を、手をつくしてしらべていた。
御殿女中などに、まんまと一杯食わされるような甘い人物ではないのだ。そう思っている大久保久兵衛の方が、甘いのではないのか？
「杉重という年寄は、西城府のかくれ場所をはっきりと、お目付から教えられているのであろう？」
「教えられて居る」
「…………」
鬼庵は、凄い目つきで、宙を見据えた。
「鬼庵——、杉重が狂四郎に籠絡されて、逆に、わしをだましたのではないか、と疑うのか？」
「あり得ることだな」
鬼庵に冷やかに返辞をされて、久兵衛も、ようやく、不安の面持になった。
「杉重をもう一度、糾問するか」
「籠絡されているものなら、こんどは、必死になって、わが身を守るだろう。狂四郎にありていに白状したなどとは、口が裂けても、云うまい」

「鬼庵――。狂四郎は、相違なく、西国街道を西へ行ったのだぞ」

「つじつまが合いすぎるのだ。それが、かえって、あやしいのだ。……杉重という年寄に、西城府は土佐の宿毛にいる、といつわった、と云わせておいて、いかにもだまされたふりをして、西へ向って歩いてみせる。あの男らしいやりかたではないか。わしが、しらべた眠狂四郎とは、そういう男なのだ。……海を渡ってみせておいて、西国の何処からか、まっすぐに、奈良へ向う。その手を考えているのかも知れぬ」

「ともかく、杉重を、もう一度、糾問いたそう」

久兵衛が、立ち上った時、庭をまわって、商人ていの男が、いそいで、縁さきへ来た。

西国街道を西下した眠狂四郎を尾行して行った隠密の一人であった。

もたらしたのは、今朝がた、兵庫から二里の東須磨という宿場はずれで、味方が一人、狂四郎に斬られた、という報告であった。

久兵衛は、どうだやはり眠狂四郎は宿毛に西城府が在ると信じているのだ、と鬼庵を見やった。

鬼庵は、しかし、黙然として、表情を崩さなかった。

鬼

一

内大臣大納言家慶と眠狂四郎のあいだには、碁盤が据えられ、烏鷺（うろ）の争いがつづけられていた。

狂四郎は、家慶に井目（せいもく）を置いていたが、すでに、形勢は全く不利になっていた。

家慶は、盤面に目を落して考えている狂四郎を、見まもって、

「狂四郎、自分は越前から、そちのことを、きいたことがある。そちは、生甲斐（いきがい）というものを持たぬそうだの？」

と、云った。

「生甲斐でございますか。生甲斐は……この石かな」

狂四郎は、黒石を置いた。

「ほう――」

家慶は、その黒石が、十数目の味方を、一挙に救う力を持っているのを、みとめた。

「これは、うかつであったな」

急に、熱心に、思慮をこらしはじめた。

こんどは、狂四郎が、余裕を持つ番であった。

「上様、今日は、控えの間に、柳生衆の気配がありませぬが――」

「その方が、そばにいてくれれば、それで、警固は充分であろう」

そのこたえに、狂四郎は、はっとなった。

「上様！　よもや、柳生衆を、二条城へさし向けられたのではございますまいな？」

「いかぬか？」

家慶は、狂四郎へ、顔を擡（あ）げた。

昨夜、家慶は、柳生隠密党に、二条城へおもむき、実弟敏次郎を、拉致して、法隆寺へつれて来るように命じたのである。

――まずい！　下策だ。

狂四郎は、内心そう吐いてから、視線を庭へ移した。

陽は傾いて、松が地上に匐わせた影は長かった。

——馬をとばしても、もう間に合うまい。すでに、庭番たちは、二条城に迫って居るだろう。

「狂四郎、自分の思案は、あやまっていたか？」

「おそらく——」

「なぜだ？　どうして、あやまっていたのか、教えてくれ」

「柳生衆が、警固の番士や与力同心に発見されずに、御実弟を連れ出すことは、まず至難。これが、ひとつ。御実弟の側近には、鹿火屋鬼庵と申す智能も腕も秀れた者が居り、この男が、拉致を企てたのは、法隆寺警備の柳生衆と看破するに相違ないこと。これが、ふたつ。当然、鹿火屋鬼庵は、柳生衆に指嗾した者が居ると疑い、それがこの眠狂四郎に相違ない、と推測するであろうこと。これが、三つ。……眠狂四郎が、上様は法隆寺に在す、と知って、そこに至っているならば、もはや、猶予はならぬ、と鬼庵がおそるべき決断のほぞをかためること。これが、四つ」

「おそるべき決断とは？」

「上様を弑逆する——これであります」

「鹿火屋鬼庵と申す者、そちも、手にあまるか？」

「ただ者ではありませぬ。尋常の果し合いのできぬ、玄妙の術使いでありますれば、てまえが、これまで闘った敵と比較することができませぬ」

「庭番どもが、戻って参れば……」

「おそらく、その半数、いや三分の二が、二条城から戻って参らぬのではありますまいか」

「ばかなっ！　かれらは、一騎当千の強者ぞろいだぞ！」

「鹿火屋鬼庵は、その強者たちの過半を討って取るだけの玄妙の術使いであるということになります」

「………」

家慶は、盤面へ、視線を落した。

「負けじゃな」

「御意――」

「どうすればよい？」

「勝負は、これ一番だけではありませぬ」

「うむ！」

「三番勝負とすれば、あと二番を勝てばよいわけでございます」

二

公儀御庭番・柳生隠密党十一人は、その夜、戌刻（午後九時）を期して、二条城に潜入した。

二条城の表御殿は、江戸城本丸や西の丸の表御殿と、ほぼ構造は、同じであった。

諸大名が詰める帝鑑の間、山吹の間、竹の間などと、将軍家私室のあいだには、能舞台が設けてあり、広い白砂の平庭がひろがっていた。

柳生の面々は、庭苑から楽屋に忍び入り、まっすぐに舞台に進み、そこから橋掛りを渡って、左折して、一気に、奥へ突入しようとした。

影が掠めるに似た迅さで、長廊下を駆け抜けようとした刹那――。

先頭の者の踏んだ廊下板が、はじけて、濛っと白煙が噴き、毒とさとってひるんだところを、

天井から数十本の手裏剣が、投じられた。
この奇襲で、三人が斃れた。
五人が屈せず、御膳建と御三の間のあいだの雲紙天井の下へ、突入し、三人が能舞台前の平庭へ跳んだ。
御三の間の次は、囲炉裏の間であった。そこから、納戸構え、上段の間とつづく。
囲炉裏の間へ馳せ入った五人を待ちうけていたのは、十梃の鉄砲の筒口をそろえた伏勢であった。
轟然たる銃声の中で、さらに三人が斃れた。
「ひきあげい！」
平庭から、頭領の声が、闇をつらぬいた。
その平庭へ、番士、与力、同心三百余人が、なだれをうって、殺到した。
柳生隠密党は、またさらに、そこで、三つの屍骸を置きすてなければならなかった。
騒擾がおさまった時、大久保久兵衛は、囲炉裏の間に斃れている曲者の一人の顔を、睨みおろして、
「何者だ、こやつら？」
と、憤怒の声をふるわせた。
「柳生御庭番——まさに、相違ない」
鹿火屋鬼庵が、背後でこたえた。騒擾のさなかは、何処にいたか、姿を現わさなかったが、毒煙と手裏剣と鉄砲を以て、その半数を討ち取ったのは、鬼庵の策であった。

「柳生御庭番?! そんなたわけた!」
「これらが、法隆寺守護の面々だと申したら、なぜ襲撃して来たか、お判りであろう」
「……?」
久兵衛は、しかし、とっさに、判断のつきかねる当惑の表情になった。
「お判りにならぬか?」
「法隆寺にいる警固の隠密どもが、どうして、ここへ夜襲をしかけて来たのか?」
「お判りにならぬようだな」
鬼庵は、皮肉な冷笑をうかべると、
「教えて進ぜよう。奥向きから、留守居年寄を、つれて来て頂きたい」
鬼庵が、老女杉重をひき据えたのは、能舞台の中央であった。
「先日、大久保殿がうかがった由でござるが、あらためて、それがしから、おうかがいつかまつる」
杉重は、必死に、その視線を受けとめているうちに、すうっと意識が遠のきかけて、思わず目蓋を閉じようとした。
その凄味のある視線を、杉重の双眼へ、射込むように、鋭く当てた。
「目をつむられるな! それがしの目から、目をはなされてはならぬ!」
鬼庵の声音は、千本の針を放つほどの威力があった。
杉重は、めくるめくような眩暈に襲われ乍ら、目蓋をふさぐことが叶わなかった。
そのうちに、鬼庵の顔が、遠のき、暗紫色の烟のなかに、おぼろにかすんだ。
それにつれて、ふしぎな恍惚とした陶酔感が、杉重の身をひたして来た。

「杉重殿――。眠狂四郎に拉致されたそなたは、どのような扱いを受けられたな？」
「あ、あの……あの時は――」
「ふむ、あの時は、どのような扱いを受けられた？」
「失神したなり……」
「ふむ、失神したなり？」
「どこへはこばれたのか、知らぬうちに……」
「ふむふむ、知らぬうちに？」
「………」
「われに、かえった時、どうされて居った？」
「……はずかしめを――」
「はずかしめを？　眠狂四郎に、でござるか？」
「い、いえ――、伊賀の忍びの者に……」
「わかり申した。そなたは、気がついてみたならば、伊賀の忍者に、操を犯されているさなかであった。左様でござるな？」
「は、はい」
「それから、忍者は、そなたに、せいぜい甘い言葉を投げて、懐柔につとめたのでござるな？」
「………」
杉重は、おのが秘処が、どきっどきっと息づくのを感じた。
――猫兵衛、おねがいじゃ、たすけてたもれ！
胸のうちで、叫んだつもりであったが、鬼庵は、ちゃんとそれをききとり、

「成程、忍者は、猫兵衛と申したのでござるか。さて、その猫兵衛のたずねることを、そなたは、拒絶されることは、できなかった。そなたは、犯されたとは申せ、はじめて、男に身を与えて、おのれが女であることを知らされたのでござるからな」

杉重は、うなずいた。

「そなたは、猫兵衛に、どのように返辞をなされたのか？　さ——おきかせ頂きたい」

杉重は、喘いだ。白状させられる苦しさのためではなかった。猫兵衛が愛撫してくれる口と指の感触が、肌によみがえって来たからである。

「どうされた？　猫兵衛に、なんと返辞をされたのでござる」

「……大番頭小屋の、小座敷の床の間にかけてある、鳥羽絵を、眺めれば、西の丸のお上の、お行方が、わかる、と——」

「よくわかり申した。正直にこたえられた。忝ない。……で、その後、猫兵衛が、この二条城に、忍び入って来て、大久保殿に対して、眠狂四郎に拉致された旨は白状し、そのかわり、上様のお行方は、土佐の宿毛だといつわるように、指示したのでござったな？」

「あ——ああ、猫兵衛！　わたしを、救うて……」

杉重は、宙へ双手をさしのべた。

つと——。

鬼庵は、杉重へ寄ると、そっと抱きかかえてやり、

「よし、よし、救うて進ぜる。救うて進ぜるゆえ、さ——花嫁御寮のように、そっと、おとなしゅう、仰臥して、待ちなされ」

と、云いきかせた。

橋掛りの入口に立つ大久保久兵衛は、鬼庵が、いったい何をしでかそうとするのか、見当つかぬままに、固唾をのんで、見まもった。

三

鬼庵は、人形のようにおとなしく杉重が仰臥すると、ゆるゆると裳裾を、はぐった。
みるみるうちに、十数本の百目蠟燭のあかりの中で、老女の下肢が、あらわに剝かれた。
杉重の寝顔には、ただ官能の疼きに身をひたした恍惚たる表情があるばかりである。
鬼庵の双手が、膝をつかみ、しずかに、左右へ押しひろげた。
「……ふむ！　濡れて居るわ！」
鬼庵は、いまいましく呟きすてて、懐中から、すっと、およそ五寸もある長い針を、抜き出した。
針が、きらりと白い光を放った時、
「鬼庵っ！　待てっ！」
呶声が、平庭をへだてた広縁から、かけられた。
贋家慶——敏次郎であった。
狂気のごとく、庭へ跳んで、奔り寄ると、
「ならぬ！　ならぬ！　そ、それは、ならぬ！」
絶叫して、とび上って来ようとした。
久兵衛が、馳せつけて、敏次郎を抱きとめた。
「上様！　杉重は、裏切者でございまするぞ！」

「は、はなせっ！……鬼庵っ！　ならぬぞ！　そ、その年寄は、わしが生れた時、救うてくれた女子じゃ。わしが、この世に在ることができるのは、杉重のおかげじゃ。……殺すことは、まかりならぬ！」

敏次郎は、久兵衛を突きとばすと、鬼庵にとびついて、その長針を、奪い取ろうとした。

とたん、

「うっ！」

と、呻いて、敏次郎は、どどっとよろけた。

鬼庵の肱で、したたかに、股間を突かれたのである。

「上様――、裏切者は、斯様の仕置きを蒙るものでござる」

五寸の長針は、恥毛の蔭の柔襞の奥へ、容赦なく刺し込まれた。

「ああっ！」

杉重は、弓なりに反った。

そして、それきり、事切れた。

「淫靡な夢をむさぼっているさなかに、くたばったのでござるゆえ、女子としては、幸せな最期と申せる」

鬼庵は、冷然と吐きすてておいて、立ち上ると、橋掛りをすたすたと遠ざかって行った。

「鬼め！　彼奴、鬼の生れかわりじゃ！」

敏次郎は、憎悪をこめて、その後ろ姿を睨みつけた。

敏次郎は、休息の間の上段に褥の中で仰臥して、天井を仰いでいた。

──鬼め！

鹿火屋鬼庵に対する憎悪だけで、脳裡が一杯になっていた。

──彼奴のために、わしは、贋者にされたのだ。彼奴が、わしをひきあわせ、兄上の座を奪う密謀をやったのだ。彼奴さえいなければ、わしは、このような木偶には、ならなかったのだ。……そうだ！　眠狂四郎と申す浪人者が云った通り、わしは、木偶なのだ。狂四郎は、わしに、云った。おのれ自身で、決意して、おのれの力で、人間に還れ、と……。よし！　わしは、人間に還ってやる！

敏次郎は、襖のむこうの下段の間に控えている宿直の士の気配を、うかがった。音のせぬように、起き上ると、衣服を着かえ、大小を腰に佩びた。

障子戸を、一寸きざみに開けて、畳廊下へ抜け出た。

左へ鈎の手に曲れば、小座敷になり、そこから、庭へ脱出することができる。

敏次郎は、小座敷まで、跫音をしのばせて歩き、襖へ手をかけた時、なにか、前途に明るい灯を見つけたような気分になった。

しかし──。

襖を開いた瞬間、敏次郎は、絶望した。

小座敷には、鬼庵が端座していたのである。

敏次郎の心理の動きを、手にとるように見通して、ちゃんと、その逃亡しようとする順路の途中で、待ちうけていた。

「どちらへ、お出かけあそばす、上様？」

皮肉な言葉を投げて来た。

「………」
敏次郎は、無言で、肩を大きく上下させた。
次の瞬間──。
敏次郎は、抜きざまに、猛然と斬りつけた。
右の手くびに激痛が走った時には、もう刀は、飛んで、床の掛物へ突きささっていた。
鬼庵は、依然として、端座したままである。
「どちらへ、行こうとされて居りましたな、上様？」
鬼庵は、かさねて訊ねた。
「法隆寺だ！」
敏次郎は、叫んだ。
「法隆寺へな──」
「わ、わしは、兄上に、江戸へ──西の丸へ、還って頂くのだ。……わしは、わし自身にもどるのだ。人間に還るぞ！」
「みすみす、天下人になるよろこびを、放棄する、と仰せられる」
「将軍家になっても、贋者では、すこしもうれしゅうないわ！」
「ご自身を、贋者だとお考えあそばすから、お悩みになる。自分は本物だ、と考えなおされては、いかがでありましょうな」
「黙れっ！　贋者は、終生、贋者だ。贋者が本物になれるか！」
「貴方様は、将軍家に──十二代をお継ぎになる資格をお持ちのお方であります。断じて、贋者ではござらぬ」

「兄上がいる、兄上が！」
「その兄上が、この世からお姿を消されたならば——？」
「鬼庵っ！」
敏次郎は、脇差を抜くと、鬼庵めがけて、たたきつけた。
鬼庵は、ちょっと、首をひねっただけで、白刃を後方へ、掠めさせた。
「まことに、お気の弱いお方でありますな、貴方様は——」
「おのれらに、さげすまれて……、くそ！　そこをどけ！　わしは、法隆寺へ行くのだ。法隆寺に行って、兄上に、なにもかも申し上げて、わしは、犯した罪をつぐなうぞ」
「どうしても、行くと仰せられますか！」
「行く！」
鬼庵は、ゆっくりと立ち上った。
敏次郎は、あっと叫ぶいとまもなく、当て落されて、その場へ、崩折れた。
そこへ、大久保久兵衛が、あわただしく、入って来た。
「どうしたのじゃ？」
「主人自身が、裏切者になろうとすれば、家来たる者、どうすればよかろう、と目下思案中だ」
鬼庵は、ばかばかしげに、吐き出した。

雌　雄

一

今日も――。

法隆寺五重塔の前の置石には、宗匠頭巾をかぶり、袖なし羽織に、軽衫をはいた大納言家慶の姿が、在った。

この広い境内を巡る廻廊の片隅に、眠狂四郎と猫兵衛が、控えていた。

「ああして、毎日、五重塔を眺めておいでになって、すこしも、退屈なさらないところが、われわれ下民との相違でございますかね」

猫兵衛は、ひくい声音で、云った。

「将軍家たるべく生れた者が、必ずしも、政治の能力を備えているとは、限らぬようだ。学者の能力を与えられて、生れて来たとすれば、ああやって、五重塔を終日倦かずに眺めている方が、幸せだろう」

狂四郎が、こたえた。

「しかし、いずれは、御当代がお逝きなされば、公方様におなりになるのでございましょう。……とすれば、五重塔を眺めておいでになるおひまがあれば、ご自身がご本丸にお入りになられた際には、あれをあらためて、これを変えて、といまからお考えになって頂きたいものでございます。五重塔などに夢中になっておいでのご様子では、われわれ下民にとって、ご政道が、心細う

なりまするな」

「…………」

「なにせ、御当代は、せっせと、五十余人ものお子様を、おつくりになることばかり、はげまれて、ご政道の方は、とんと、目を向けられぬ模様でございましたから、肥える者は肥える一方、痩せる者は痩せる一方に相成って居りまする。ほんのひとにぎりの人間が、ぜいたくをしつくしている世の中は、どこやら、ご政道にまちがいがあるような気がいたしまするな」

上は、城の奥向きから、下は、裏店まで、長い歳月にわたって、つぶさにその表裏をのぞいて来た者の言葉であった。

批評や懐疑を絶対に許されぬ立場に置かれた者が、おのずと、その目を疑わされて、権勢や金力に対する不信の念を、心に生んでいるのであった。

——この言葉を、あの人物に、きかせたいものだ。

狂四郎は、思った。

猫兵衛は、狂四郎の口辺に、微かな皮肉な色が刷かれるのを視てとると、別の意味に受けとって、急に、首をすくめて、

「てまえごとき者が、とんだ大それた口をきいてしまいまして、おききのがしをお願い申します。……二条城の留守居年寄は、まことに、お気の毒なことをいたしました」

と、話題を変えた。

家慶の指令によって、柳生隠密党が、二条城へ、侵入した夜、猫兵衛もまた、忍び入っていたのである。

猫兵衛は、隠密党の大半が、無慚な横死を遂げるのを見とどけたのち、さらに、留守居年寄杉

重が、鹿火屋鬼庵の手で、むごたらしい殺されかたをするのを、目撃して来た。

しかし、猫兵衛は、狂四郎には、杉重が鬼庵によって殺された、と報告しただけで、どのような殺されかたをしたか、ということは、語らずに、胸に納めていたのである。

「眠様——」

「…………」

「鬼庵めは、この法隆寺を屹度襲って来るでございましょうな？」

「来るだろうな」

「どうなさいます？」

狂四郎は、問われて、視線を、猫兵衛の顔に向けた。

猫兵衛は、真剣な表情になっていた。

「お前は、あの杉重という老女の仇を討ってやりたい、と考えているのか？」

「そ、それほどの気持ではありませぬが、……あやつは、しかし、許せぬ男でございます！」

猫兵衛は、すこし狼狽し乍らも、その表情に、はっきりと覚悟のほどを示していた。

「お前では、鬼庵は、討ちとれまい」

「旦那——、なろうことなら、てまえに、やらせて頂きとう存じます」

「お前たち三人の任務は、お茶壺行列の正体をつきとめることで、終了したのだ。武部老人にやとわれて、それだけの仕事の報酬しかもらって居らぬ筈だ。……ところが、お前たちは、勝手に、わたしに惚れたと云って、援助を申し出てくれた。おかげで、こちらは、大いにたすかったことだが、すでに、猿太が逝き、犬助も片手を喪った。……お前自身は、わたしに惚れてくれたのかも知れぬが、猿太と犬助は、必ずしも、そうではなかったかも知れぬ。年配のお前が、やる、と

ほぞをきめたので、若い猿太と犬助は、やらざるを得なかったのかも知れぬ。……やといもせぬ男のために一命を投げ出して働くということは、伊賀衆の掟を破ることだろう。……お前を、鬼庵と闘わせることは、できぬ」
「旦那！」
「鬼庵との勝負は、わたしが、つける！」
狂四郎は、きっぱりと、云った。

二

鹿火屋鬼庵から、眠狂四郎に宛てて、果し状が送られて来たのは、それから小半刻（一時間足らず）後であった。
柳生隠密党が、監視所にしている立場茶屋に、鬼庵が、入って来て、そこのお茶汲み娘に、
「これを、眠狂四郎に渡してもらおう」
と、手渡したのであった。
果し状は、娘によって、隠密党の頭領・篠崎嘉八郎に、もたらされた。
篠崎嘉八郎は、十人の部下を率いて、二条城に侵入し、辛うじて一命をとりとめると、深傷の部下の一人と、還ることができたが、全身に無数の傷を蒙って、牀に臥していた。部下の方は、夜明けた頃、息をひき取っていた。
しかし、起き上った篠崎は、自ら狂四郎のいる一室へ、死人のような身をはこんだ。
「貴公に、これを――」
わななく手で、さし出された狂四郎は、篠崎の草色をした顔面を一瞥して、

——もういくばくの生命でもないようだ。

と、看てとった。

書状には、きわめて簡単に、

　雌雄を決すべく、申し入れ候

　日時　今宵暮れ六つ（午後六時）

　場所　見返りの丘

それだけ記されてあった。

「それは、果し状と存ずるが——」

篠崎嘉八郎は、狂四郎を凝視して、問うた。

「左様——」

狂四郎は、頷いた。

「鹿火屋鬼庵と申す男、只者ではないゆえ、貴公といえども、容易に仆すことはできまいが……、この身では、助太刀はおぼつかぬ」

「雌雄を決すべく、と書いてある。助太刀はご無用——」

「しかし、対手は、手段をえらばぬ奴と存ずる。……数日うちには、江戸から——柳生道場から、三十名ばかり、到着いたすが……、それまで、果し合いを延ばすように、申し入れては、如何であろう」

「わたしは、衆を恃んで、敵を仆すことを好まぬ。これまでがそうであったし、これからも、そ

うでありたい」
「貴公、上様のおん身を、考えて頂けまいか。もし、貴公が、敗れるようなことが、あれば、上様のおん身を、守護し奉る者が、居らぬ。……上様のおん身に、もし、万が一のことがあれば――」
篠崎は、喘ぎつつ、必死に、狂四郎の冷たい双眸(そうぼう)へ、視線をすがりつかせた。
「上様のおん身は、この猫兵衛と申す伊賀者が、守護いたす」
狂四郎は、こたえた。
篠崎は、かぶりを振った。
「この者、一人だけでは……、到底、お、おぼつかぬ」
「こちらを、信頼して頂こう」
狂四郎は、こともなげに約束してみせて、腰を上げた。
篠崎は、何か云おうとしたが、とどめることは不可能とさとると、わが身の不甲斐なさに、頭を垂れた。
猫兵衛は、南大門まで、送って出て来て、不安な面持で、
「旦那、必ず勝って下さいませぬと、てまえは、大納言様をお守りする自信は、ございませぬ」
と、云った。
「自信は、なくともよい」
それが、狂四郎の返辞であった。
「ど、どうしてでございます？」
「おれが、鬼庵に勝つからだ」

「へえ……？」

「信頼して居らぬようだな」

「いえ、して居りますとも！　して居るには居りますが、篠崎さんの仰言いましたように、もし、万が一——という場合がないとは、限りませぬゆえ……」

「猫兵衛——」

「はい——」

「お互いに、おのれ自身が、この世から消えたあとのことまで、思慮をはらうのは、止(よ)そうではないか」

「へえ……」

「おれもお前も、べつに、将軍家から恩顧を蒙った人間ではない。いわば、野良犬だ。……こうやって、西の丸殿を、守護しようとしていることすら、考えてみれば、妙な話なのだ。もののはずみ——そんなところだ。たったひとつしかない生命を落さねばならぬ忠義心を持合せているわけでもなければ、義理がある次第でもない。乗りかかった船だから、乗るまでのことで、別の目から見れば、ばかげた行為だ。ましてや、おのれ自身の死後のことまで——他人様の安否を案じる必要が、どこにある？」

「そう仰言られれば、たしかに、その通りでございます。てまえは、なろうことなら、貴方様の助太刀をいたしとうございます」

「猫兵衛、お前の今宵の任務は、西の丸殿の身辺警護だ。そば近くに坐って居れば、それでよい」

狂四郎のふところ手姿は、そのまま、まっすぐに、淡々(あわあわ)とした夕陽が落ちる斑鳩の野へ、出て

行った。

三

家慶の仮住居は、東院の裏手にある方丈であった。

これは、ごく近年になって建てられたもので、どこの寺院にでも見受けられるたたずまいが、つりあいがとれぬために、いずれとりこわされる予定になっていた。

猫兵衛が、狂四郎が出て行ったあと、ずっと控えているのは、三十畳敷きはあろうと思われる広い板の間であった。

家慶の居間は、そこから二室ばかりへだてた奥に在った。

――いやな予感がする。

猫兵衛は、自分に呟いていた。

先程、篠崎嘉八郎が、家慶に、

「もし万が一、眠狂四郎が敗北いたすようなことがありますれば、鹿火屋鬼庵は、必ず、その足で、まっすぐに、当寺へ押しかけて参ると存じますれば――」

自分が身代りとなって、その居間にいて、おん身自身を、どこか探し難い場所へ、避けておいであそばすように、と乞うたのであったが、

「その懸念に及ばぬ」

と、しりぞけられたのであった。

眠狂四郎が斃れれば、もはや、法隆寺山内で、敵をふせぎきれるものでもないし、自分が法隆寺を抜け出て、他の寺院にひそんだとしても、鹿火屋鬼庵という男が、おそるべき術策の持主な

らば、必ず探しあてるに相違ない、というのが、家慶の意見であった。
篠崎としては、家慶からそう云われれば、その通りなので、ひきさがらざるを得なかった。
おのれが、敵と充分に互角の闘いができてこそ、身代りとして役立つのであった。
篠崎に、できたのは、猫兵衛に、「たのむ！」と頭を下げることだけであった。
それだけに、猫兵衛の双肩には、責任が、ずしりと重くかかっていた。
いやな予感は、この板の間に坐った時から起って、払っても払っても、まとわりついているのであった。

……暮六つを告げる梵鐘（ぼんしょう）が、鳴りはじめた。
見返りの丘で、眠狂四郎と鹿火屋鬼庵の果し合いは、開始されたに相違ない。
――南無！
猫兵衛は、思わず、目蓋を閉じて、合掌した。
その時――。
猫兵衛は、総身の神経が、敵の襲来を察知する野生のけもののように、ぴりっと緊（ひ）きしまるのをおぼえた。
――敵だ！
猫兵衛は、はねあがると、音もなく、廊下へとび出した。
――庭に、敵が、いるぞ！
家慶の居間の前に奔って、襲来に備える身構えをとった。
およそ百ばかりかぞえる緊迫の時刻が、移った。
不意に――。

「上様、お生命を頂戴つかまつる」
その声が、居間からひびいて、猫兵衛をして、愕然(がくぜん)と色を失わせた。
無我夢中で、障子をひき開けると、こちらの配った心気をどう避けて、侵入したか、鹿火屋鬼庵の姿は、もうそこに立っていた。
家慶は、古書を積んだ几(つくえ)の前に、坐っていた。
流石に恐怖で顔面こそこわばっていたが、自分に対して白刃が襲って来る、ということなど、夢想だにしなかった身分地位に在る者の、この事態をどうしても信じがたい態度を示していた。
鹿火屋鬼庵が、ゆっくりと差料を、腰からすべり出させるのを視て、猫兵衛は、逆上した。
狂四郎に、果し合いの時刻と場所を指定しておいて、突如として、同じ刻限に、この法隆寺へ、やって来たのである。
「卑怯者(ひきょうもの)っ！」
絶叫しざま、猫兵衛は、懐中から、忍び刀を抜きはなった。
とたんに、廊下の闇の中から、
「猫兵衛、この勝負は、おれがつける、と云った筈だぞ」
狂四郎の声が、かかった。
「旦那っ！」
猫兵衛は、狂喜した。
狂四郎は、猫兵衛のわきを抜けて、鬼庵と向い立った。
「鹿火屋鬼庵、お主に、おびき出されるほど、この眠狂四郎は、間抜けではない」
「ふん――」

鬼庵は、裏をかいたつもりが、逆に裏をかかれた不快さを、凄い目つきに露わにしていたが、口辺ではせせらわらってみせた。

「場所をここに移しただけのことだ。……上様が惚れた五重塔の前で、雌雄を決するか」

「よかろう」

狂四郎は、応じた。

すると、家慶が、われにかえったように、喚いた。

「ならぬぞ！　五重塔を、その方らごとき無頼の徒の血で、けがしてはならぬ！」

四

しかし、やはり、決闘は、五重塔の前で、行われた。

空には、月が昇っていたし、廻廊には、たくさんの法燈がともされていたので、対峙した狂四郎と鬼庵の姿を、鮮やかに浮びあがらせた。

五重塔が、巨大な生きもののように、どっしりとわだかまって、この勝負を、見戍っているかのごとくであった。

庭は、建物と人との黒い影を濃く截りぬいて、雪を降らせたように、白かった。

狂四郎は、敵の意表を衝いて来る攻撃に備えて、対峙するや、無想正宗を地摺りにとった。

鬼庵の方が、抜こうとはしなかった。

と――。

狂四郎の視力が、狂った。

そうとしか思われぬ奇怪な変化ぶりを、鬼庵が見せたのである。

徐々に、鬼庵の軀身が、伸びて来たのであった。

錯覚ではなかった。

一寸、二寸、三寸――その伸びかたは、ずっと遠く、金堂の前で固唾をのむ猫兵衛の目にも、はっきりとみとめられた。

およそ四寸余も、六尺を越える高さに伸びて、それは、ようやく、停った。

そして、それなり、鬼庵は動かず、狂四郎も動かなかった。

見成る猫兵衛には、一刻も、それ以上の長い時間に感じられた。

一瞬――。

鬼庵の長身が、四尺の短かさに縮んだ。と見えた次の刹那、目に見えぬ翼でもあるもののように、宙に翔けあがった。

ただの高さに、飛んだのではなかった。

五重塔の三層の屋根あたりまで翔けあがって、狂四郎の頭上はるかを、飛び越えた。

目に見えた勝負は、それだけであった。

鬼庵は、狂四郎の後方――三間あまりの地上へ、降り立った。

その五体は、元の身丈に還っていた。

狂四郎が為したのは、ゆっくりと向きなおっただけで、同じ地点を、動こうとはしなかった。

猫兵衛は、溜めていた息を、一気に吐いて、ほっと肩を落した。

鬼庵の上半身が、ゆらりと揺れた。

その胸に刺し立った白刃が、法燈のあかりを反射して、光った。

鬼庵が、宙高く翔けあがった瞬間、狂四郎は、無想正宗を、双手から放って、手裏剣と化した

のである。
狂四郎の足もとには、一尺数寸の短い刀が、真二つに折れて、落ちていた。狂四郎の放った無想正宗が、鬼庵が空中から放ったこの刀を両断しておいて、鬼庵の胸を刺したのであった。
鬼庵の五体が、地ひびきたてて倒れるや、猫兵衛は、いっさんに駆け寄って来た。
狂四郎が、鬼庵の屍に歩み寄って、無想正宗を胸から抜きとるのを、眺め乍ら、猫兵衛は、
「おどろきました！」
それだけ、云った。
「この男の五体が、伸び縮みしたことか？」
「は、はい――」
「造作もないしかけだ。発条を足につけていたのだ。その伸縮で、こちらをおどかしてみせたところに、この男の敗北があった。所詮は、自身の術におのれがやぶれたことになる」
屍からはなれて、歩き出した時、狂四郎の口から、ひくい呟きがもらされた。
「どうやら、ほどなく、幕の降りる時が来たらしい」

切腹の座

一

佐野勘十郎が、江戸から急遽、京都へやって来たのは、それから十数日後であった。
大久保久兵衛からの密書を受けとったためであった。

贋家慶——敏次郎が、二条城に入ってから、突如、心がわりをして、御所へ参内することを承知せぬばかりか、法降寺へおもむいて、実兄家慶に謝罪し、その処断にわが身をゆだねる、と云いはって、どうしても肯かぬゆえ、お目付自ら、上洛されて説きかせて頂きたい。

そういう文面であった。

「いったい、どういう料簡か！　九分九厘まで、征夷大将軍の座が、おのれのものになる、ときまったところで、変心するとは！」

勘十郎は、密書を、火鉢の中へ投じ乍ら、なんとも名状しがたい憤怒にかられたことだった。

蘭学医師・渋江養庵によって、将軍家斉の生命を縮める手筈を、ととのえて、贋家慶の帰城を待っていた勘十郎であった。

「首に縄をかけても、江戸へひきずりもどしてくれる！」

勘十郎は、敏次郎の顔を思い泛べて、思わず声に出して、罵ったものであった。

駕籠ではもどかしく、東海道をまっしぐらに、馬で駆け通して来た。

さいわいに——。

大久保久兵衛は、眠狂四郎が鹿火屋鬼庵と相討ちになって果てた旨を付記していたので、勘十郎は、道中の途次、狂四郎から襲撃を受ける心配をせずともすんだ。

勘十郎ほどの頭脳の切れる人物が、二条城に入った時、城内の空気が変っていることに、いささかも気がつかなかったのは、うかつというほかはなかった。しかし、それは、贋家慶に対する憤怒が脳裡を占めていたためであった、と釈明できなくはなかった。

しかし、大久保久兵衛が姿を現わさぬのを、取次ぎの者の、

「他出されて居ります」

という言葉通りに信じたことは、弁解の余地のない、全く勘十郎らしからぬうかつであった。

勘十郎は、まっすぐに、奥へ通った。

贋家慶は、夕食にはまだ半刻（一時間）もある頃合だというのに、寝衣姿で、褥に臥して、若い女中二人に、からだをもませていた。

勘十郎が、挨拶したにも拘らず、顔をそ向けて、擡げようともしなかった。

勘十郎は、険しい語気で、女中たちを下らせると、

「上様、この佐野勘十郎が、今日まで、どのようなご乱行をなさろうとも、ただ黙って、城中及び城外の耳目にふれぬよう、腐心して参ったこと、よもお忘れではございますまい」

「……………」

「貴方様が、西の丸にお入りになってからの、この一年あまりのご乱行は、まことに、あきれはてた狂気沙汰でございましたな。旗本の妻女を、次つぎと大奥へ召しては犯し、これを諫めた近習を、三人も手討ちにし、また、理由もなく、お庭の手入れをしていた植木職人までも手討ちになされた。そのために、どれほどの多くの者が、上様をお怨みして、横死いたしましたことか。そのなかには、伜の嫁を犯された大番頭の老人などは、本丸老中水野越州殿の面前にて、割腹して相果てようと計って居ります。そのような不祥事を、世間の取沙汰にならぬように、どれほど、それがしが、苦労して、隠蔽し、糊塗して参ったか——いちいち申し上げるまでもなく、上様には、よくおわかりであった筈。にも拘らず、当方の千思万慮を無視されて、やれ西の丸のくらしがいやになったとか、やれ蝦夷の空が恋しゅうなったとか、勝手な我儘を申されて、ついには、得体の知れぬ女子を、大奥へ上げて、その股間へ、葵の御紋を彫らせる冒瀆をも敢えてなさいましたな。それがしは、それでも、なお、黙って、眺めて居りました。……貴方様が、本丸にお入りに

なるまでは、どのようなご乱行をなさろうとも、これを隠蔽糊塗するのが、それがしの役目と存じて、じっと堪えて参った次第。しかし、貴方様が、参内して聖上から色紙をたまわることを拒否され、あまつさえ、奈良へおもむいて、お兄上の前に、これまでのご乱行を白状する、という気まぐれを起された、とき及んでは、それがしも、もはや、我慢いたしかねまするぞ。それでは、若年寄永井尚佐殿はじめ、われら一党が、なんのために、今日まで、苦心の上にも苦心を重ねて、事を推し進めて参ったのか――すべては、水の泡と消えはててしまう、ということになれば、貴方様ご自身に覚悟をして頂かねばならぬのは、当然の仕儀と申すもの。とくと、お考え頂きとう存じます」

勘十郎は、一気に述べたてた。

贋家慶は、枕に額をのせたなり、微動もせぬ。

「上様！」

「…………」

「上様！　おききになって居りまするな？　ご存念の次第によっては、この勘十郎は、致し様もあるとほぞをかためて、江戸から馬をとばして参ったのでござる！」

二

額を枕にのせて、動かなかったその人が、ようやく、身を起した。

しかし、なお沈黙を守って、佐野勘十郎の険しい形相を、視かえした。

勘十郎は、つづけた。

「明日早朝、参内されて、聖上より色紙をたまわること。そして、明後日、江戸へご帰還なさる

こと。よろしゅうございますな？」
有無を云わせぬ鋭い語気で、きめつけるように、云った。
「佐野勘十郎、その方ほどの者が血迷うたようだな」
その言葉をきいて、勘十郎は、はっとなった。
面貌は、まさに瓜二つだが、その声音は、あきらかに、別のものであった。
愕然と、息をのむ勘十郎に対して、大納言家慶は、微笑を投げた。
「おのが口から、罪状を白状した以上、覚悟せよ、佐野勘十郎」
「……う！」
勘十郎は、呻いた。
——どうしたことなのだ？　いつの間に、すりかわったのか？
勘十郎は、狼狽しつつ、はじめて、大久保久兵衛が自分を出迎えなかったのは、このためであったのだと気づいた。
家慶は、べつに、憎悪も憤怒も示さぬ穏やかな表情で、
「わしが、法降寺五重塔に魅せられていることを知った永井尚佐とその方が、それを巧みに利用して、三年の期限つきで、あれをわしの身代りにして、西の丸に入れたのであったが、思えば、永井とその方の申し出を、そのままに、うかうかと受けとったわしが、うつけであった。わしは、三年経てば、また、西の丸へ還るつもりであった。それが、できぬ事態を招くなどとは、夢にも考えなかった。それほど、わしは、法降寺五重塔に魅せられていたことに相成る。……永井とその方は、相謀って、あれをして十二代を継がせたあかつきには、兄たるわしを、亡きものにするこんたんであったのだな。そうとさとらなかったわしの方が、たしかに、うつけであった。……

しかし、永井とその方が、左様な悪心を起してくれたおかげで、わしは、この一年間、毎日倦(あ)くことなく、五重塔を眺めることができたのじゃ。礼を申さねばならぬ」

「…………」

勘十郎は、もはや遁(のが)れられぬ身となった、と知ると、おちつきはらって、家慶の言葉をきいた。

背後の襖(ふすま)が、ひらかれた。

勘十郎は、頭をまわして、そこに、贋家慶――敏次郎を見出した。

こうして見比べると、双生児とはいえ、あきらかに、面貌に区別がついた。

――やはり、贋者は、贋者でしかない。

勘十郎は、内心みとめざるを得なかった。

「勘十郎――、鹿火屋鬼庵は眠狂四郎に討たれ、大久保久兵衛は切腹いたしたぞ。その方の奸計(かんけい)のために、わしの生命を救ってくれた杉重も、エトロフのシャルシャムでわしを育ててくれた者どもも、悉(ことごと)く相果てたぞ！……その方が、そそのかさなければ、わしらは、いまなお、シャルシャムの館(やかた)で、平穏にくらして居ったのだ。わしという人間は、所詮(しょせん)は、生れ出た時に、葬られるべき、それだけのねうちしかない者であったのだ。その方らが、わしの人となりを看て取れなかった筈はない。兄上とは、雲泥(うんでい)の差のある未熟者と知りつつも、敢えて、将軍家を襲わしめようとしたところに、その方らの誤算があったのじゃ。自業自得と申すよりほかはないぞ。観念せい！」

それに対して、勘十郎は、返辞をする代りに、不意に、声をたてて、笑った。

「なにが、おかしいのだ！」

敏次郎が、呶鳴(どな)った。

勘十郎は、なおしばらく笑いつづけていたが、急に、冷たい顔面にもどると、
「仰せの通り、佐野勘十郎、一代の不覚でございました。同じ相貌と同じ性情を持ってお生れなされたお二人でも、江戸城内にお育ちなされたのと、蝦夷の果てでお育ちなされたのとでは、全くの別人になられることに、思いいたらなかったのは、まさに、佐野勘十郎、一代の不覚！　相貌が同じのご兄弟なれば、贋者は本物になり代ることができる、とかんたんに思案したのは、今にして考えれば、なんとも、滑稽きわまる浅はかさでございました。……つつしんで、お詫びつかまつります」
勘十郎は、敏次郎に向って、平伏した。
「勘十郎、兄上のご慈悲のおとりはからいを以て、当城内に、切腹の座を設けてつかわしたぞ」
「有難き幸せに存じます」
勘十郎は、身を立ててから、
「最後のお願いがひとつございますが、おききとどけたまわりますよう——」
と、申し出た。
「きこう」
「介錯の儀、是非とも、貴方様にお願い申し上げたく存じます」
「よし、介錯は引き受けてつかわす」
敏次郎は、承知した。

三

その時、眠狂四郎は、大番頭小屋の鳥羽絵の掛けてある小座敷に、寐そべっていた。

からだの中を、冷たい風が吹き抜けて行くようなうつろな気分であった。
——そうだった。通り雨が、おれを、このたびの異変にまき込んだのであったな。
鳥羽絵に、眼眸をあて乍ら、胸の裡で、呟いた。
昨年の夏——。
旅で馴染になった薬売りの松次郎が、諏訪町の角に蕎麦屋をひらいた、ときいていたので、ふと、立ち寄ってみることにした。そして、そこで、一人の旗本大身の子息と知れる熨斗目をつけた十歳あまりの少年に、出会った。
それが、きっかけであった。
旗本大番組頭長岡釆女正の一子守一は、母が父から毎日のように責めたてられる地獄図絵を、見るに堪えられず、母方の祖父に救いをもとめに行こうとしていたのである。
「……家を滅ぼしとうはない！」
少年が、ふと口をすべらせたその一言を、狂四郎は、きき咎めて、ふっと、その屋敷の内部を覗いてみる気を起したのであった。
おのが身をはこんだところに、必ず凶変が起ることを、つい忘れていたといえる。
——おれが、乗り込まなければ、長岡釆女正は、横死せずに済んだかも知れぬ。そして……釆女正の妻は、おれから犯されはしなかったのだ。
狂四郎は、目蓋を閉じた。
押上村の古刹竜勝寺に、預けておいた釆女正の妻・志津の俤が、泛んでいた。
もはや、わが子のいる長岡家に帰るのぞみのないあの女の、此後の身のふりかたは、どうなるというのか？

狂四郎は、江戸を発つにあたり、大晦日の夜、志津を抱いていた。
その折、幾箇月かののちには、必ず帰って来て、そなたを抱く、と約束をしておいた。しかし、それは、夫婦になるという約束ではなかった。
いずれは、すてる女であった。
すてられたあと、あの女に、生きて行く力があるかどうか？
——志津もまた、死ぬだろう。
狂四郎は、かっと、双眸をひらいた。
「おれに抱かれた女だ。死ぬよりほかはないのだ！」
独語をもらした時、猫兵衛が、するりと入って来た。
「そろそろ、舞台に大詰が来て居ります」
「…………」
「流石は、これだけの大芝居を演ってのけた千両役者だけありまする。どたん場を迎えて、すこしもわるびれず、それアもう、堂々とした態度でございますよ」
「…………」
「大納言様から切腹を命じられますと、悠然と受けたばかりか、贋様に向って、介錯をして頂きたい、とたのんだじゃございませんか。大向うから、声のひとつも、かけてやりたい見世場になりました」
その報告をきいたとたん、狂四郎は、何を感じたか、はね起きると、急ぎ足に、小座敷を出た。
猫兵衛は、あっけにとられて、小首をかしげた。

狂四郎が、ふっとおぼえた不吉な予感は、的中した。
佐野勘十郎が与えられた切腹の座は、留守居年寄杉重が、鹿火屋鬼庵によって、むごたらしい殺され様をした能舞台であった。
逆さ屛風を立てた前に、勘十郎が、白装束姿で端座し、介錯を引き受けた敏次郎は、橋掛りに佇立していた。
平庭をへだてたこちらの広縁には、家慶が坐っていた。
警固の士たちは、平庭を空けて、はるか遠くの隅々に控えて、しわぶきひとつせずにいた。
「つかまつる!」
勘十郎は、三方の上の短刀を、手に把った。
敏次郎は、なんの疑いも抱かず、その背後に立つべく、橋掛りから舞台へ進み入った。
その瞬間であった。
勘十郎の白い姿が、躍り立ったとみるや、敏次郎へとびかかった。
「ああっ!」
悲鳴をほとばしらせつつ、差料を抜こうとしたが、そのいとまを与えられずに、敏次郎は、脾腹をしたたかにえぐられた。
次の刹那には、敏次郎の手から、その差料は、勘十郎の手に移っていた。
勘十郎は、飛鳥の勢いで、平庭へ跳ぶや、まっしぐらに、家慶めがけて疾駆した。
狂四郎が、その場へ姿を現わさなかったならば、家慶は、あるいは、勘十郎の一撃の下に、屍体となっていたかも知れない。
狂四郎が、風の迅さで、勘十郎の行手をふさいだ。

勘十郎は、大上段にふりかぶった。

勘十郎は、総身すべての機能を、憤怒の焔として、燃え狂わせていた。

鹿火屋鬼庵と相討ちになった筈の狂四郎が、出現したのである。この素浪人一人の働きによって、九分九厘まで成っていた策謀が、音たてて崩れ落ちたことを、咄嗟に、勘十郎は、さとったのであった。

おのが手飼いの手練者を総動員して、この素浪人を襲わせ乍らも、ついに、討つことが叶わなかったのである。

たとえ、おのれが地獄へ落ちて、あらゆる責苦に遭おうとも——それを条件としてでも、この素浪人だけは、あの世への道連れにしたかった。

狂四郎の方は、その凄まじい憤怒の焔をあび乍ら、冷然として、まだ、無想正宗の柄にも、手をかけず、

「お目付に、最後に、ひとつだけ、うかがっておきたいことがある」

と、云った。

勘十郎は、無言で、じりじりと間合を測って、迫る。

「お手前がやとわれた明日心剣こと篠原雄次郎が、十七年にわたって守って来た秘密を、お手前は、知っていた。お手前が、どうして、その秘密を知ったのか、きかせて頂こう」

「今更、そんなことをきいて、なんとする？」

「明日心剣は、わたしに、遺書をのこした。……さとられる筈もない秘密を、お目付佐野勘十郎の手に、どうして握られたか、つきとめ得ぬままに、決闘にのぞむにあたり、もし自分が敗れた際、敵である貴台に秘密を打明ける遺書をしたためておくのも、生涯一度の強敵をかえって莫逆

の友以上に親しいものにおぼえるがゆえである。そう遺書には、記されていた。……明日心剣に代って、きく義務が、わたしにはあるということだ」
「ふん――。簡単な返答をしてくれるまでだ。篠原雄次郎が、十七年前、戸田氏教の夫人を、日暮里宝林寺で抱いた時、夫人のかたわらには、つかさという老女がつき添うていた。そのつかさが、この佐野勘十郎の実姉であった、というだけの話だ」
「そうか」
「ついでに、きかせておこう。わしは、その秘密を、姉から、そっと打明けられた時、ゆくりなくも、三十余年前、近藤重蔵の部下となって、蝦夷地巡察をした時のことを、思い出した。エトロフ島北端のシャルシャムに、門扉に葵の紋を打った館があり、そのあるじが、七歳の少年で、徳川敏次郎――すなわち、西の丸の将軍家世子と同じ幼名を持っていたことを、わしは、思い出した。……わしは、ひとつの決意を持って、はるばる、蝦夷を再訪した。そうして、大納言と瓜二つの人物に会うを得た。あとは、きかせるまでもあるまい」
「判った。……お手前が、そこまで打明けたからには、エトロフ島から連れ出して、事成らずと知るや、斬り仆したあのあわれな御仁の霊に、詫びる意味でも、いさぎよく、切腹されては、如何であろう」
しかし、その忠告に対して、勘十郎が為したのは、無想正宗の生贄の一人となるための、猛然たる攻撃であった。

墓地の人

一

眠狂四郎が、江戸へ還って来た時、季節はもう梅雨に入っていた。

大納言家慶が、無事に江戸城西の丸のあるじにおさまってから、十日あまりおくれて、品川の大木戸を、ふところ手で入って来た狂四郎は、べつに、本丸老中水野忠邦邸へおもむいて、武部仙十郎に報告しようという気持もなく、また押上村の古刹竜勝寺で待っている志津に、逢いに行く気色もなく、その足を向けたのは、諏訪町角の蕎麦屋であった。

降りみ降らずみの、肌がべとつくような、いやな午後であった。

「お——、おかえりなされた！」

土竈(どがま)の前にしゃがんでいたあるじの松次郎は、紺暖簾(こんのれん)のむこうに、その着流し姿が立つや、すばやく、それと知って、よろこびの声をあげた。

「おかいんなさいまし」

顔中に笑みをあふらせて、寄って来た松次郎に対して、狂四郎は、いつもの通り、無表情であった。

「うっとうしい天気になりましたが、ご無事で——、万事相済みましたようで……」

「二つあった瓜が、ひとつ消えただけのことだな」

——こういう言葉を、ききたくて、自分は、お戻りを待っていたのだ。

松次郎は、胸の裡で呟くと、奥へ、酒を命じた。若い板前と小女を、やとっていた。

狂四郎の前には、一年前にはじめて来た時と同じく、鯛のあらいに山葵を利かしたのが、はこばれて来た。

松次郎は、狂四郎が、二口ばかり飲むのを待ってから、

「一昨日で、ございましたか、あのお子が――長岡様のお坊ちゃまが、駕籠でお立寄りでございました。元服なされた、凛々しいお旗本におなりになりましてね」

と、告げた。

「……………」

「長岡家を継ぐことができたゆえ、母上に会いたい、と申されましてね」

「……………」

「てまえの口から、お母様のご在処を、お教えするのは、さしでがましい、と存じまして、貴方様がお戻りになるまで、お待ち下さいますように、と申し上げておいたのでございますが――」

「……………」

狂四郎は、黙って、盃を口へはこんでいる。

「どうなさいます？」

松次郎は、返辞を待った。

狂四郎は、ちょっと間を置いてから、

「あの女は、おれの顔を見るまでは、竜勝寺を動くまい」

と、云った。

松次郎は、おどろいて、

「旦那！　まだ、竜勝寺へは、お立寄りになっていらっしゃらないので――？」
「うむ。品川から、まっすぐに、ここへ来た」
「じゃ、今宵うちに、押上へお行きなさいますか？」
「迷って居る。必ず還る、と約束はしたが――」
「それアおかえんなさらなくちゃ、いけませぬ。一日千秋で、待っておいででございましょうからね」
「会えば、また、絆らしいものができるだろう。おれは、もう、女との間の絆を切るのに、懲りている。いや、絆ができた女が、死んで行くのに、懲りている、と云いかえてもよい」
「けど、お逢いになって、貴方様のお口から、お屋敷へおもどりになるのを、おすすめなさいますのが、順当でございましょう」
「そう手際よくいかぬことは、お前も、想像つくのではないか」
狂四郎は、はじめて、表情を動かして、口辺に薄ら笑いを刷いた。
「こうしてもらおう。おれは、江戸へ還って来たが、女を連れている。お前が出かけて行って、そう告げて、長岡の屋敷へ、送りとどけてもらおう」
「いやな役目でございますね」
「おれとつきあっている限り、女に対する酷薄な仕打ちの片棒を、かつぐことになる」
松次郎は、しかたなく、引受けた。
尤も、志津を、屋敷へかえしてやるのは、決して、しぶらなければならぬことではなかった。
母と子が再会できるのであった。
松次郎は、店を出て行った。

二

狂四郎は、松次郎の居間になっている二階の一間にあがって、横になると、すぐに、睡った。
――降って来たようだな。
音もないその気配で、目覚めたのは、一刻（二時間）近くも経ってからであったろうか。四畳半は、もう夕闇がこめていた。
階段に跫音（あしおと）がして、松次郎が、姿をみせた。
行燈（あんどん）にあかりを入れてから、
「お屋敷へお送りいたしました」
と、それだけ報告した。
哭（な）げいたとも、容易に承諾しなかったとも、説明しようとしなかった。しないことが、この役目が如何（いか）にいやなものだったかを、示していた。
「これで、万事、片がついたようだな」
狂四郎は、呟いた。
呟いたとたん、ふっと、不吉な予感が、脳裡を掠（かす）めた。
不吉な予感の場合のみ、必ず的中することを知っている狂四郎は、一瞬、険しい眼眸（まなざし）を宙に置いた。
「どうかなさいましたか？」
「いや――」
狂四郎は、立ち上った。

「ごゆっくりなさいまし」

「用向きを、ひとつ、思い出した」

親族会議などということで、志津を長岡家から追放させぬように、母と子が同じ屋根の下ですごせるように取りはからってもらうべく、武部仙十郎にたのんでおこう、と思いついたのであった。

同じ時刻——。

本所北割下水の長岡家へ戻って来た志津は、なおまだ、わが子に再会を、許されていなかった。

仏間へ坐らされて、ずうっと、孤独で置きすてられていたのである。

半刻以上が過ぎていた。志津にとって、邸内は、わが家であり乍ら、まだわが家として自由に動くことは許されなかった。

黙って、坐りつづけて、待っているよりほかにすべはなかった。

ようやく、廊下に、跫音がきこえた。

志津は、入って来たのが、実父の大河内勘解由（かげゆ）であるのをみとめて、

「お父様！」

なつかしさを、声音にこめた。

しかし、実父の表情は、異様にかたいものであった。

「志津」

大河内勘解由は、険しい語気で娘の名を呼び、

「おめおめと、当家へ、戻って参って——うつけが！」

と、叱咤（しった）した。

「お父様！」

「二度と長岡の門をくぐらねば、何処で、どのようなくらしをいたして居ろうと、知らぬふりをしてやっていたものを――このうつけが、父のわしに、処置をつけさせるとは、親不孝も、きわまる！」

娘時代、この父親から、ただの一度も、荒い声をあびせられたおぼえのない志津であった。

なかばあっけにとられ、なかば腹が立った。

「お父様！　わたくしが、わるかったのではありませぬ。あの場合は、やむを得ぬ仕儀でございました。にも拘らず、わたくしは、良人から、もう充分の責を受けましたし、また、良人が非業の横死を遂げたのは……」

「莫迦者！　わしは、そのことを申して居るのではないっ！　お前が、眠狂四郎と申す浪人者に連れ出されて、どのようなくらしをして居ったか――そのことだ！」

「…………」

「お前は、眠狂四郎の情婦になり下って居ったではないか！」

志津は、はっ、と思い出した。

大晦日の夜――。

狂四郎に抱かれて、三十歳という年齢で、はじめて女の悦びを知り、思いきり肌を燃え狂わせた時、外には、狂四郎を尾行して来た良人の従弟北園唐吉郎が、ひそんでいたのだ。

北園唐吉郎から、すべて報告がなされたに相違なかった。

「采女正が横死するまでの仔細は、お前にいささかの罪もなかったことは、親族一同が、みとめて、ひとしく、同情をそそいでいたところだ。しかし、眠狂四郎に連れられて、この屋敷を出て

行ってからのお前の行為は、断じて許しがたい。……申さば、眠狂四郎と申す者、お前の良人の敵ではないか。その敵に、肌身を許し、情婦になり下るとは、なんたる不貞！　本来ならば、わし自身、お前のかくれ家へおもむいて、手討ちにいたしてくれねば、世間に対して、顔向けできぬ恥であるが、斯様の事態に相成った原因を顧みて、お前をふびんと思うて、知らぬふりをしてやって居ったのだ。……戻って参らねば、このまま、知らぬふりができたものを——」

「お父様！」

「戻って参った上からは、実父たる者、すててはおけぬのだぞ！」

大河内勘解由の声音は、悲痛であった。

その時——。

あわただしく、廊下を駆けて来る跫音がし、それをとどめる者たちの物音が起った。

「母上を、死なせてはならぬ！」

守一の叫ひ声であった。

「わ、わしは、当主じゃぞ！　わしの意見もきかずに……、母上を、死なせるなど——ゆ、ゆるさぬっ！……母上っ！　母上っ！　守一が、会うて——は、はなせっ！」

あばれ、もがく少年が、多勢の手で、奥へ、つれ去られる様子が、その絶叫の遠ざかるので、判った。

大河内勘解由は、しずかに、懐剣を、志津の前に置いた。

「お前の母親の所持していたこれで、長岡釆女正となった守一の母らしゅう、見事に、自決いたせ」

「………」

志津は、畳へ両手をつかえた。

泪があふれた。

眠狂四郎の使いだといって、竜勝寺へやって来た松次郎という男の言葉が、脳裡によみがえっていた。

「眠様は、若い美しい京女をつれておもどりでございました」

——ちがう！　そんな筈はない。あのお方は、お一人で、わたくしの許へ、お戻りになるのだ！　そうお約束なされたのだ！

いくたびも、そう心の裡で、くりかえしたことだったろう。

この仏間に、坐ってからも、否定しつづけていたのだ。

志津は、たとえ、それが事実であるにもせよ、もう一度、狂四郎に会いたかった。

——会いたい！

父に向って、両手をつかえ乍ら、志津は、胸中で、叫んだ。

しかし、もうそれは、絶望であった。

志津にのこされているのは、前に置かれた懐剣を把って、鞘をはらう行為だけであった。

三

次の日も、雨は、降りつづいていた。

その中で、本所北割下水の禅刹悦念寺の墓地に於て、しめやかな埋葬が為された。

旗本大番組頭六千石の大身の奥方の葬式であり乍ら、会葬者は、二十名に満たなかった。

埋葬が終って、一同が斎の膳に就くべく、本堂の方へ去っても、なお一人だけ、新墓の前に立

ち残った者がいた。
その実父大河内勘解由であった。
たった一夜のうちに、この老人は、十歳も年を寄せた容子になっていた。
土饅頭へ、うつろな視線をそそいで、微動もしなかった。
親族一同が評議の結果、志津を自決させたのではなかった。評議の座が設けられた時、勘解由は、まっさきに志津を自決させる旨を云い出して、無言の諒解を得たのであった。
もし、自分がその旨を云い出さなければ、あるいは志津を死なせずに済んだかも知れなかったのである。しかし、武家の面目として、勘解由は、志津を自害させざるを得なかった。
幼い当主は、祖父のむごい処断を悪んで、葬儀にも喪主となろうとはしなかった。守一は、おそらく、この祖父を、生涯恨みに思うに相違ない。
――志津！
勘解由は、双眼を閉じて、亡き娘の俤を思い泛べた。
「――許せ！」
はじめて、誰にもはばからず、老人は、声を出して、詫びた。
「死なせとうはなかった！　許せ！」
その時であった。
「ご老人――」
不意に、背後から声がかかって、勘解由は、とびあがるほどの衝撃を受けた。
人の近づいて来る気配に、全く気がつかなかったのである。
振りかえると、異相をそなえた、黒の着流しの浪人姿が、二八蕎麦と太書きした番傘の下にあ

った。

——こやつが！

勘解由は、一瞬にして、娘をあの世へ追いやった元凶とさとった。

「わたしにも、詣でさせて頂きたいが——」

その申し出に対して、勘解由は、自身でも意外なくらいの憤怒を爆発させて、

「許さぬぞ！」

と、絶叫した。

狂四郎は、虚無に沈んだ面持で、

「お手前様の娘御であることは別として、この女性は、最後の時に、会いたいとねがったのが、わたしかと思われるのです。……手おくれ乍ら、せめて、墓前で、そのことを詫びさせて頂けまいか」

と、云った。

それに対する返答は、老人が渾身の気合を噴かせる抜きつけの一撃であった。

狂四郎は、一歩退いただけであった。

番傘が、切られて、口をあけた。

「貴様っ！」

勘解由は、何か罵りたかったが、言葉が出ず、いたずらに肩を喘がせた。

それでも、若き日にきたえた一刀流の構えに、必死の鋭気をこめて、じりじりと迫った。

「とおっ！」

懸声もろとも、突きかけたが、瞬間、足を他家の墓石にぶちつけて、よろめいた。

その折――。

「小父上っ！　その眠狂四郎には、それがしが、対手をいたす！」

叫びつつ、疾駆して来た者があった。

北園唐吉郎であった。

旗本随一の使い手と称された北園唐吉郎は、京へ行こうとする狂四郎を追って、忍藩城下はずれのばら原の中で、立合い、狂四郎に敗北する屈辱を蒙っていた。

いわば、これは、遺恨試合となるのであった。

「眠狂四郎っ！　志津の墓前で、尋常の勝負をいたすぞっ！」

云いざま、ぴたりと青眼につけた。

「わたしは、墓参に来たにすぎぬ」

「云うなっ！　本日は、卑劣の邪法などには、かからぬぞ！　勝負っ！」

「お主――」

狂四郎は、皮肉な冷笑をうかべた。

「志津のあとを追って、あの世へ行っても、そこには、良人がいるのだぜ。あの世でもまた、指をくわえて、眺めているだけのことになる」

「……う、うっ！」

唐吉郎は、唸り声をほとばしらせると、凄まじく、斬り込んだ。

狂四郎は、殆ど動いたともみえなかった。破れた番傘も、さしたままであった。

にも拘らず、唐吉郎は、存分に袈裟がけに斬られて、たたらを踏み、刀を杖にするいとまもなく、濡れた墓地の土へ、顔からのめり込んでいた。

「ご老人――」

狂四郎は、他家の墓石に倚りかかって、喘いでいる勘解由に、声をかけた。

「娘御を死なせることはなかった。ほかに、すべはいくらもあった筈です。貴方ご自身が、その年齢ならば、武家である前に、人間であることができたのだ、と思う」

四

半刻後、狂四郎は、水野邸で、武部仙十郎の前にいた。

「上様が、是非会いたい、と仰せられて居る」

武部仙十郎は、べつに自分はそのことをつたえるだけだ、という顔つきで、云った。

「将軍家になられるような偉いお方とは、もう二度とお目にかかるのは、ご免を蒙りたい」

「どうしてじゃな？」

「法隆寺五重塔が、再建されたものか否か、というような学説を、この無学な男が、うかがっても致しかたがない」

「ははは……、上様が、お主に会いたいと仰せられているのは、礼を仰せられたいためらしいぞ」

「それなら、いよいよ、拝謁の儀は、ごかんべんを願うしかない。……ご老人から、申し上げておいて頂こう。こん後、もし貴方様に双生児がおできになっても、二人とも、江戸城にてお育てになるように、と眠狂四郎が申していたと――」

解説

尾崎秀樹

柴田錬三郎が昭和五十三年六月三十日に亡くなってから、一年あまりたつ。前年の秋に倒れ、一時は回復に向って、週刊誌の連載なども再開されただけに、それが急変して逝(ゆ)かれたことは惜しまれてならなかった。

一周忌にあたる今年の六月には、彼をしのぶ「人間・柴田錬三郎写真展」（立木義浩撮影）なども催されたが、それにしても亡くなったあとの空白の大きさを、あらためて感じないわけにはゆかない。シバレンの愛称でしたしまれた彼は、するどい眼とへの字に結んだ唇、といった気むずかしげな外貌や、歯に衣(きぬ)きせない毒舌の内側に、あたたかな人間味をやどし、面倒みもいい人だった。

彼がヤング向けのある週刊誌で、「人生相談・無頼控――柴錬のダンディズム指南・円月説法」と題した人生相談欄の回答者となったおり、若い読者にむかってよびかけた言葉は、

「おれは、君たちとは、同世代だと考えている。年の差をうんぬんする馬鹿野郎がいるが、冗談じゃないよ。……おれが回答者の側にまわるのは、君たちの年ごろに同じ失敗をしているからだ」

というものだった。その回答でも質問者を突っぱなすような言い方の中に、自信をもってダンディーに生きろとはげます男っぽいあたたかさがあり、目上の者から叱られることの少なくなっ

た現代の若者たちを、かえってシビレさせる面が多かったという。
その中で、十七歳の読者から、「無頼に生きるって、どういうことですか」と聞かれ、つぎのように語った答は印象的だ。
「自分の規律を守る、つまり知性のコントロールだな。世間が何といおうと、自分が正しいと信ずる規律に基づいて行動する。そういうプライドを持った行動が無頼なんだ」
これはおそらく彼自身の信条であろうし、同時に彼の創造した作品中のヒーローも、そういった信条に生きる人物が多いように思われる。戦後にうまれた虚構のヒーローたちの中で、最大のものといえる眠狂四郎もまたその一人ではなかろうか。
柴田錬三郎の存在が戦後の時代小説の上にしめる位置は大きいが、彼が手がけた豊富な作品の中で、もっとも人気をよんだのはやはり眠狂四郎のシリーズであろう。昭和三十年代のはじめ、あいつぐ週刊誌の創刊やテレビ時代の開幕など、いわゆる大衆社会状況の深化をしめす時代的な背景の中で、そのシンボルのひとつとして颯爽と登場して以来、二十年近く書き継がれたその量からいっても厖大だが、それだけ長期間、人気を維持するだけの内容をもっていたこともたしかである。
黒羽二重の着流しに、異人の血をまじえた彫りのふかい顔だち、虚無の影をふかくやどした風貌と、愛刀無想正宗による円月殺法の冴え――この眠狂四郎の像はすでに作者の手をはなれ、一個の客観的な存在と化し、戦前の中里介山の大作『大菩薩峠』の机竜之助にも対比されるまでになっている。その特異なキャラクターの創造が、狂四郎シリーズの人気の理由となったことはいうまでもない。
もちろん狂四郎は作者の近代意識を反映して、戦前のヒーローたちとはことなる性格をしめし

ている。むしろこれまでの作品に描かれた剣豪や兵法者たちの特質を、すべて否定したところに造型されたといってよい。作者の言葉を引用すると――

「私は、眠狂四郎を剣豪として描こうとしたわけではなかった。狂四郎に、現代の罪悪感を背負わせて、そのジレンマに苦しみながら生きて行かねばならぬ業を見たかったのである。いわば、剣豪が進む道とは、逆の方角へ歩かせてみるために、円月殺法をあみ出したのである」（『武蔵・弁慶・狂四郎』）

斬られた相手の苦痛ではなく、斬った人間の罪悪感を問題にし、犯された女は恍惚にひたっているのに、犯したドン・ファンの方が、一人の女性の将来を滅茶滅茶にした罪の意識に悩むといったとりあげかたは、極意をさとった兵法者の姿とはまったく逆で、従って狂四郎は剣豪ではないという。

この説明はころびバテレンの子という設定、凶器としての剣、女性を容赦なく犯す非情さなどが意味するものを、明確に解き明かしてくれる。時代の虚無を背負い、生きるために剣をふるって敵を倒し、あえて非情にふるまわざるを得なかった狂四郎は、そのためますます孤独と虚無の影をふかめてゆくが、そこに近代的な自虐精神を投影させたところに、人間像の新しさがみられるのだ。

柴田錬三郎の死後、多くの人々が追悼文を発表したが、その中に飛鳥井雅道のつぎのような文章がある。

「柴田錬三郎は、エロチシズムと、より基本的には主人公の出生の孤独をたてにとることによって、江戸の社会から現在までにいたる、サラリーマンであるわれわれの孤独と夢想を、はっきり形象化してくれた作家だった。……人間の孤独、しかも円月殺法という能力をもった人間の孤独

は、これまでどの文学に描かれたことがあったろうか」

作者一流のダンディズムと無頼の思想――それは彼の近代意識の所産だが、その意識が伝奇小説の手法の中に生かされているところに、現代の人々にとっての眠狂四郎の魅力があるのではないだろうか。

『眠狂四郎虚無日誌』は「週刊新潮」の昭和四十三年七月十三日号から四十四年七月五日号にかけて連載された。『無頼控』『独歩行』『殺法帖』『孤剣五十三次』につづく〝狂四郎シリーズ〟第五作である。作者はその一作ごとにさまざまな工夫をこらし、水野越前守忠邦の側用人武部仙十郎につながる影の男・狂四郎の活躍ぶりを描いているが、その政治的背景や舞台となる各地の風物の描写などにもそれぞれ変化をもたせて、新しい構図をうち出すことに努力しているのがわかる。この『虚無日誌』では、次代の将軍に予定されている徳川家慶が、急に乱行をかさねはじめたことから、それが贋者だと知れ、この秘密をめぐって狂四郎が本物奪還に一役買い、必死の活躍の後についに成功するといった物語をまとめている。

狂四郎のファンである「二八蕎麦」の松次郎の店で、旗本大番組頭長岡采女正重武の子である少年が、必死な表情で家が滅びるともらしたのを耳にした狂四郎は、不吉な予感にさそわれて長岡家へしのびこみ、重武が将軍家の世子家慶の寵をうけた妻の志津を責めさいなむのを目撃する。みかねた彼が重武の槍を両断すると、はねとんだ槍先で重武は死亡し、やむを得ず志津を連れてその場を去った狂四郎は、なじみの講釈師立川談亭に彼女を預けた。

事件後、武部老人を訪れた狂四郎は、西の丸殿（家慶）の人柄が突然変り、ほかにも旗本の家族に被害者が多いことを知らされる。それらの家をさぐってほしいというのが、老人の依頼であった。だがこの失態をカバーするため奔走している目付佐野勘十郎は多くの刺客をあやつり、狂

四郎は彼らから執拗にねらわれることになる。
家慶の乱行はそれ以後もいくつかの余波をうみ、重傷を負ったにもかかわらず、狂四郎の活躍がつづけられ、一連の事件の根が、かつて配下の佐野勘十郎とともに、蝦夷地を巡察した近藤重蔵の見聞とつながるらしいと見当がつく。武部仙十郎や狂四郎の追及がすすむにつれて、佐野勘十郎一派の妨害もあの手この手が用いられ、さまざまに錯綜する中に次第に真相が浮び上ってくる。

重蔵が自分の墓に埋めた手記によると、エトロフ島の東北端シャルシャムに徳川の血をひく少年の住む館があったというが、それは双生児として生れた家慶の弟であり、この弟が贋の家慶となって前年春に京都ですり替ったことが推定された。狂四郎はさらに家紋の刺青を肌に彫らしたお玉、刺青師の娘のおきちを大奥に入れ、その反応によって西の丸の人物を贋者に違いないと断定、京へ上って、本物のゆくえをつきとめ、連れもどすという大きな任務を背負って出発することになる。

中仙道を通って京に着くまでにも、狂四郎をおそう刺客はあとを絶たないが、それは同時に本物の家慶がまだ生きていることを暗示した。彼が多くの危機をくぐり抜けて京に着く頃、贋家慶もお茶壺道中の駕籠で上洛しており、今度は京を舞台に狂四郎と、彼に心服する伊賀忍者猫兵衛たちの活躍がくりひろげられる。

そして二条城の老女から、城内の大番頭小屋の小座敷にある鳥羽絵が、家慶のひそむ場所だというヒントを得たのを手がかりに、最後には法隆寺に監禁されている家慶を連れもどし、贋者を擁立して権力を握ろうとした佐野勘十郎のたくらみは打ち砕かれる。

このような長編としてのストーリーを追いながらも、読切連作としての形式を保っているわけ

だが、しかしまとめて読むと、全体の構成が実にしっかりしていることがわかるのだ。そこにはこれだけの筋書では紹介しつくせない波瀾（はらん）をきわめた物語が展開されており、作者のイマジネーションのゆたかさがうかがわれる。

狂四郎をめぐる登場人物は多彩で、立川談亭や巾着切（きんちゃくきり）の金八など、おなじみの脇役たちをはじめ、彼を慕う志津、真田（さなだ）六連銭組残党のおりょうなどの女性が登場する一方、刺客の中にも、明日（あした）心剣のような個性的な人物がいる。そのすべてにふれる余裕はないが、柴田錬三郎の文学の魅力のひとつには、こういった脇役たちの性格や設定のおもしろさがあることはいうまでもない。

（昭和五十四年八月）

この作品は昭和四十四年十一月新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には当用漢字以外の漢字も使用し、音訓表以外の音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

眠狂四郎虚無日誌

新潮文庫　草 150＝22

昭和五十四年九月二十五日　発行
昭和五十八年三月二十日　八刷

著者　柴田錬三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社

ISBN4-10-115022-2 C0193